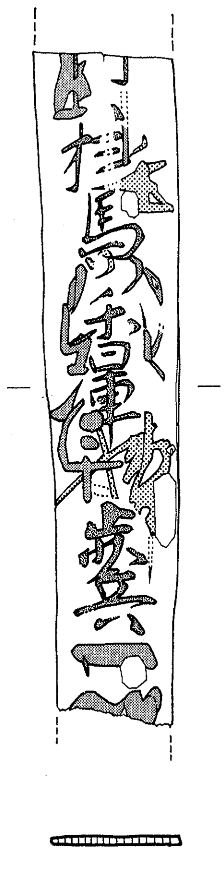
太宰府市の文化財第69集

大宰府条坊跡22

－御笠野・隈野線道路拡幅に伴う調査－



平成16年
太宰府市教育委員会

太宰府市の文化財第69集

大宰府条坊跡22

－第168次調査－

平成16年
太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡第168次調査区から大宰府政庁を望む（南から）

大宰府条坊跡第168次調査区全景（東から）

序

本書は地区道路整備事業における御垣野・隈野線道路拡幅工事に先立ち、平成７年度に発掘調査を行いました大宰府条坊跡第168次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書です。

大宰府条坊跡は、大宰府政庁跡の南に広がる広大な古代都市遺跡として知られていますが、今回大宰府条坊左郭内を東西に細長く調査したことで、左郭の条坊区割や、区割内部の宅地に伴う区割りなど検出し、大宰府条坊解明において画期的な調査となりました。また出土遺物も多く、国内でも最古級の将棋関連墨書木札や７世紀代の施釉陶器など類例の少ない遺物も出土しており、古代大宰府を知る上で重要な手がかりが得られました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、文化財愛護の精神が高揚することを心より願います。

最後になりましたが、文化財に対してご理解いただきました、関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

平成16年3月
太宰府市教育委員会
教育長　關　敏治

例言

1. 本書は、太宰府市朱雀3丁目305-2・305-3で行った大宰府条坊跡第168次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査は、地区道路整備事業による御垣野・隈野線道路拡幅に先立って平成7年度に実施したもので、市道部分のほか、南側に隣接する西日本鉄道株式会社所有地の一部（305-2・3番地に接する305-1番地の一部）も併せて実施した。
3. 調査は、井上信正、中島恒次郎、高橋学が担当し、上村英士（現、筑後市教育委員会）が補助をした。
4. 発掘調査においては、八木充（山口大学名誉教授）、西谷正（九州大学名誉教授）、大庭康時、佐藤一郎（以上、福岡市教育委員会）の各氏、九州歴史資料館、その他の各位にご指導・ご教示をいただいた。
5. 暗灰色粘土層・茶色土層除去時の遺構面の全体図作成、および茶褐色粘土層・茶灰色土層除去時の遺構全体図作成時には1/50図化の航空測量を実施し、これを写測エンジニアリング株式会社が行った。この他の遺構の実測は、担当者の他、上村、谷由紀子、城戸康利が行った。なお今回掲載した全体図については、調査した遺構面との関係を踏まえて、整理の段階で編集したものを提示している（「IV.調査整理の方法」参照）。
6. 調査時の測量は、井上、上村が行った。また航空測量に伴う測量は、写測エンジニアリング株式会社が行った。なおトラバース測量について、当教育委員会が実施した測量成果と写測エンジニアリング株式会社が実施した測量成果とにズレが生じることが判明した。この補正については、「IV.調査整理の方法」を参照いただきたい。
7. 遺構実測図および遺構配置図は、全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって、図中に記載される方位は、特に注記のない限り座標北（G.N.）を指している。
8. 遺構の写真撮影は各担当者及び上村が行い、空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表　檀睦夫）、写測エンジニアリング株式会社が行った。遺物写真撮影はフォトハウスおか（代表　岡紀久夫）、井上が行った。
9. 遺物の実測は、上記担当者の他、阿部容子、酒井三保子、松本理栄子、森部順子、相川寿美子、松隈里恵子、森若知子、長直信、森田レイ子が行った。
10. 遺構全体図・遺構配置図および遺構図の一部についてはAutoCAD・Illustratorを使用して図版とした。これを相川、森若、井上が行った。
11. デジタルデータによる図版以外の浄書は、酒井三保子、阿部容子、森部順子、松本理栄子、松隈里恵子が行った。
12. 作表は各担当者の他、森若が行った。
13. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお報告の中では、遺跡名、調査次数を略するものもある。

条　168　SD　001

遺跡名　調査次数　遺構種別　遺構番号

14. 本書に使用した分類は、基本的に以下のものによっている。

土器	『大宰府条坊跡II』太宰府市の文化財第7集　太宰府市教育委員会　1983年
陶磁器	『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』 太宰府市の文化財第49集　太宰府市教育委員会　2000年3月
製塩土器	森田勉「焼塩壷考」『大宰府古文化論叢』　九州歴史資料館　1993年
文字瓦	石松好雄・高橋章「大宰府出土瓦について（二）」 『九州歴史資料館研究論集4』1983年

分類は各担当者で行った。なお陶磁器分類に際して森田、柳智子、山本信夫（現、山本考古研究所）の助言を得た。

15. 出土した土器類について、SX251出土の新羅土器については江浦洋（財団法人大阪府文化財センター）、重見泰（奈良大学大学院生）の各氏にご教示を、茶灰色粘土層出土の施釉陶器については、山本氏の他、長谷部楽爾（東京出光美術館）、今井敦（東京国立博物館）、富永直樹（久留米市教育委員会）の各氏にご教示をいただいた。

16. 出土した墨書木札の釈読は井上信正が行い、八木充（山口大学名誉教授）、平川南（国立歴史民俗博物館教授）、東野治之（現、奈良大学教授）、佐藤信（現、東京大学教授）、倉住靖彦（元九州歴史資料館）、重松敏彦（太宰府市史編纂室）、その他各位のご教示をいただいた。

17. 出土した金属製品等の応急処置は下川可容子が担当した。

18. 自然科学分析の目的については中島が執筆した。自然科学分析については、f・gを下川が行い、執筆した。またa-3を（財）元興寺文化財研究所が行い、執筆した。その他の分析・報告は、いずれもパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。SK475出土墨書木札保存処理報告は下川が執筆した。

なお、本書の体裁に整えるため、編集者が内容を損なわないよう一部編集した。

19. 各遺構・遺物報告は各調査担当者が執筆した。担当内容については、Ⅳ.調査整理の方法を参照していただきたい。全体編集は井上信正が行った。

20. 出土遺物および図面、写真、デジタルデータ等の記録類は、太宰府市教育委員会が保管している。

目次

Ⅰ．調査地の位置と歴史

福岡平野の南東部に位置する太宰府市は、福岡平野を形成した河川の一つ御笠川の上流に位置する。ここは北から東にかけては三郡山系、西から南にかけては背振山系と、両山系に囲まれた狭い盆地状の平野で、この南東は筑紫平野と接している。こうした地理的条件のため、ここは古来より福岡平野と筑紫平野を結ぶ交通路上に位置しており、また北の宇美平野や筑豊へも向かう交通路も古くからあったとみられる。

こうした太宰府市域では、後期旧石器時代から近現代までの遺跡が確認されているが、この中で特に目立つのが、律令官衙「大宰府」が置かれた古代から、中世までの遺跡である。

太宰府市には、7世紀中頃の白村江での敗戦により国際的緊張が高まり、水城・大野城そして基肄城などの軍事防衛施設が築かれた。その後7世紀末～8世紀初頭になると古代の西海道九国二島を統括し外交機能も有した地方最大の官衙「大宰府」が、水城・大野城・基肄城といった防衛ラインに囲まれた内側に設置され、大宰府官衙の周辺には、都城のように都市計画に従った計画地割を持ついわゆる「大宰府条坊」という古代都市が作られたことが発掘調査で確認されつつある。この古代都市の造営は、市内各所でみつかる整地痕跡や8世紀初頭に埋没した条坊関連遺構の存在から、7世紀末にまで遡ることも指摘されている。

大宰府および大宰府条坊は奈良～平安時代にかけて隆盛したが、当初の形を留め続けたわけではなく、次第に変容していった。発掘調査でもこの変容が知られ、いくつかの画期が示されている。大宰府政庁跡の調査では、8世紀初頭以前の7世紀後半代の遺構群（政庁I期）、天慶4（941）年の藤原純友の乱による大宰府焼亡に関するとされる焼土層の下面の礎石建物の存続時期（政庁II期）、現在地表に露出している乱後に再建された礎石建物の存続時期（政庁III期）という画期が提示されている。この画期は、大宰府条坊内でも検出遺構や整地層の存在、遺構の空白時期の検討から同様に窺うことができ、大宰府全体における重要な画期と捉えることができよう。発掘調査では大宰府政庁は12世紀前半には廃絶していることが確認されており、その後整備されることはなかったようである。大宰府条坊内においても、11世紀末～12世紀前半には条坊西側～中央部にかける一帯で遺構廃絶が顕著にみられ、条坊北東部一帯はその後も引き続き街区が残る。この状況は中世まで続いている。

大宰府・大宰府条坊が機能していた間、この他にもいくつかの画期や街区の変遷が発掘調査成果より指摘されているところであるが、古代～中世において600年間以上の長期間、しかも同位置で政治的・宗教的・都市的環境が機能していたところは他にはほとんど例がない。この時に形成された政治的機能や都市環境の主体は、中世前期でほぼ終焉を迎えたといえるが、土地空間・歴史的環境は、この後に続く中近世だけでなく、現代でも影響し続けているといえよう。

さて、今回報告する第168次調査区は、筑紫野市との市境に位置し、西鉄二日市駅の北西、旧西鉄操車場の北の一画にあたる。この北脇を西北西～東南東に走る市道が通っているが、今回の調査は市道南側を拡幅する道路工事の事前に行ったもので、長さ約200m、幅約8mの細長い調査区を設定した。大宰府条坊内においては、ここはほぼ中央付近に位置しており、政庁南面の郭心中央大路（以下、推定朱雀大路）推定ライン上にも接している。

地形からみると、ここは御笠川と、条坊内を南東～北西方向に流れる鷺田川に挟まれた台地の中央南側に位置している。この東側には古代寺院般若寺が所在する丘陵があり（以下、般若寺丘陵）、奈良時代には本調査区から般若寺を望むことができたと推測される。北側には般若寺丘陵から派生した帯状の低丘陵が東西に横たわっており（以下、北側丘陵）、調査区は丘陵南裾に位置している。この丘陵の存

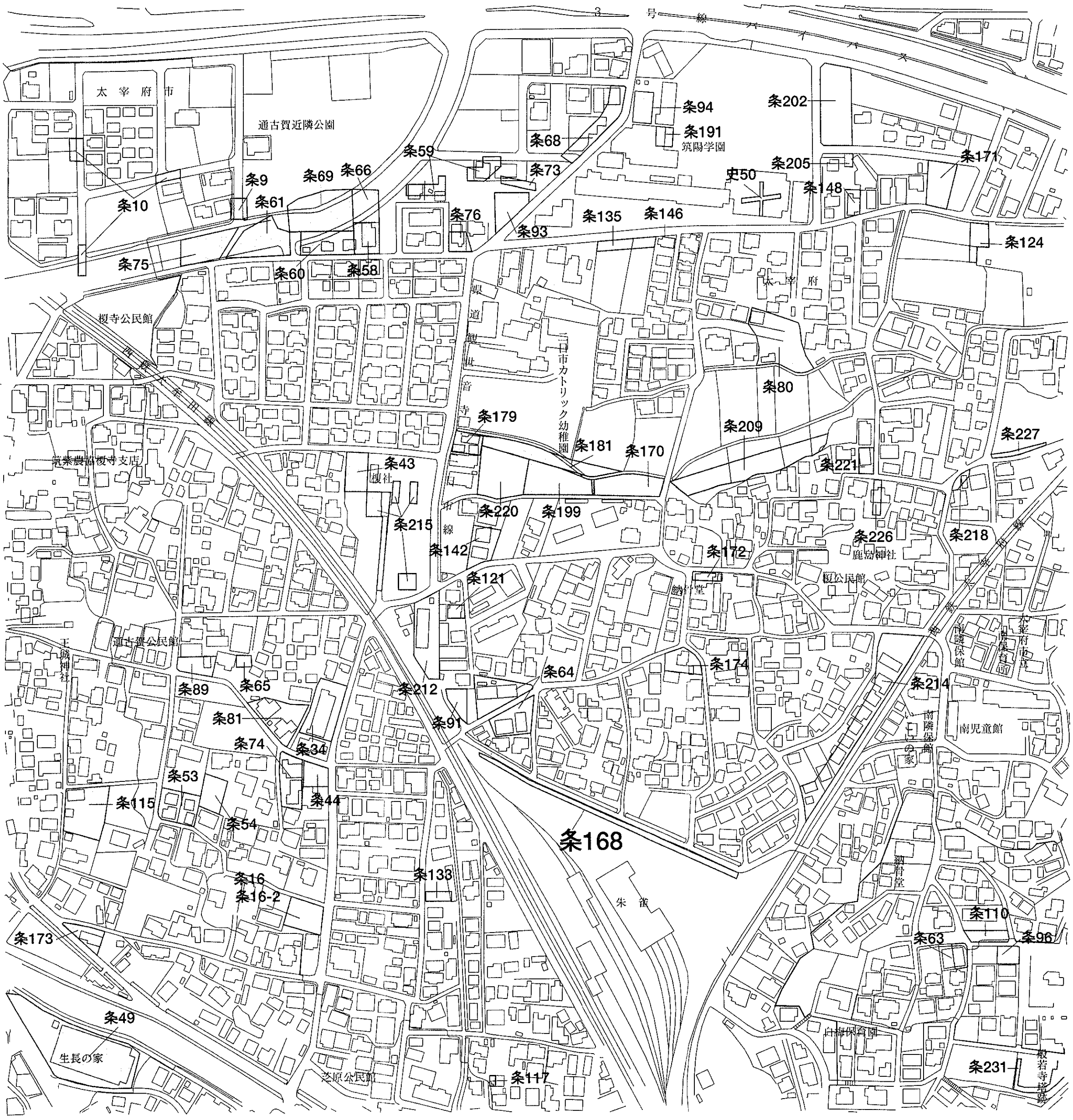


図1　報告調査地と周辺遺跡（1/5,000）

調査遺跡名	調査次数	掲載文献
大宰府条坊跡	9	『大宰府条坊跡II』　太宰府市の文化財第7集
大宰府条坊跡	10	『大宰府条坊跡II』　太宰府市の文化財第7集
大宰府条坊跡	16	『大宰府条坊跡II』　太宰府市の文化財第7集
大宰府条坊跡	16-2	未報告
大宰府条坊跡	34	未報告
大宰府条坊跡	42	未報告
大宰府条坊跡	43	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	44	『大宰府条坊跡VII』　太宰府市の文化財第28集
大宰府条坊跡	49	未報告
大宰府条坊跡	53	未報告
大宰府条坊跡	54	未報告
大宰府条坊跡	58	未報告
大宰府条坊跡	59	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	60	未報告
大宰府条坊跡	61	未報告
大宰府条坊跡	63	未報告
大宰府条坊跡	64	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	65	『大宰府条坊跡VII』　太宰府市の文化財第28集
大宰府条坊跡	66	未報告
大宰府条坊跡	68	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	69	未報告
大宰府条坊跡	73	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	74	未報告
大宰府条坊跡	75	未報告
大宰府条坊跡	76	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	80	未報告
大宰府条坊跡	81	『大宰府条坊跡VII』　太宰府市の文化財第28集
大宰府条坊跡	89	『大宰府条坊跡VII』　太宰府市の文化財第28集
大宰府条坊跡	91	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	92	未報告
大宰府条坊跡	93	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	94	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	96	未報告
大宰府条坊跡	110	未報告
大宰府条坊跡	115	未報告
大宰府条坊跡	117	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	121	『大宰府条坊跡X　―推定大宰府朱雀大路周辺の調査―』　太宰府市の文化財第37集
大宰府条坊跡	124	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	133	『大宰府条坊跡 VIII　―第133次調査―』　太宰府市の文化財第29集
大宰府条坊跡	135	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	146	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	148	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	168	『大宰府条坊跡22』　太宰府市の文化財第69集
大宰府条坊跡	170	未報告
大宰府条坊跡	171	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	172	未報告
大宰府条坊跡	173	未報告
大宰府条坊跡	174	未報告
大宰府条坊跡	179	未報告
大宰府条坊跡	181	未報告
大宰府条坊跡	191	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	199	『大宰府条坊跡20―第199次調査―』　太宰府市の文化財第60集
大宰府条坊跡	202	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	205	『大宰府条坊跡24』　太宰府市の文化財第71集
大宰府条坊跡	209	未報告
大宰府条坊跡	211	未報告
大宰府条坊跡	212	『大宰府条坊跡XVIII』　太宰府市の文化財第57集
大宰府条坊跡	214	未報告
大宰府条坊跡	215	未報告
大宰府条坊跡	218	未報告
大宰府条坊跡	220	未報告
大宰府条坊跡	221	未報告
大宰府条坊跡	226	未報告
大宰府条坊跡	227	未報告
大宰府条坊跡	231	未報告

在により丘陵北側の大宰府政庁や観世音寺を望むことはできない。ただ、北側丘陵西端部は菅原道真が居住した「南館」とされる現在の榎社（榎寺）の東側で途切れており、調査区西端からは当時も大宰府政庁や南館を望むことはできただろう。西・南側は開けており、条坊域南半を広く望むことが可能である。

調査では、調査区の最西端で推定朱雀大路が最大幅になった当時の東側溝（政庁II期推定朱雀大路東側溝）を検出した。推定朱雀大路東側溝は予想された位置で検出されており、その後もこのライン上での検出例は増加している。さらに、調査区は東西に細長い設定だったため、条坊区画に伴うと推定される南北溝群（坊路）も検出した。ただ、条坊の左右両郭が政庁中軸線を基準として線対称に規格されたと想定した場合、南北溝群が予想される位置で検出されなかった。このため、調査当初には坊路の認定で混乱したが、右郭の条坊痕跡が政庁II・III期を通してほぼ変わらない位置で検出されることを根拠に坊路認定を行った。この時には十分な確信をもてなかったが、後の第181次調査（未報告）・第199次調査（『大宰府条坊跡20』で報告）において、この延長上で溝群（坊路）を検出したことで、左郭一坊路がほぼ確定することができた。その後左郭における調査例が相次ぎ、坊路関連遺構が増えたこともあり、右郭の条坊痕跡や推定朱雀大路との設計との関係が検討されるようになりつつある。このように条坊左郭の設計、ひいては街区全体の設計を検討する上で、本調査は画期的な調査となったといえる。

また整地層が複数検出され、良好な状態で遺構・遺物が時代毎に包蔵されていた。調査では大きく4つの遺構面にわけることができたが、整地層はさらに細かく分層できる可能性もある。こうした状況により出土遺物以外からも遺構の存続時期をより具体的に迫ることができ、また街区改変についても具体的な資料を得ることができた。なお下位の整地層中には政庁I期に遡る遺構・遺物がまとまって含まれているものがある。調査区全体をみても畿内系土師器を多く出土している他、7世紀中頃に生産されたとみられる新羅土器の蓋や中国産とみられる7世紀末前後の施釉陶器など、7世紀代に各地との交流でもたらされたとみられる遺物もあり、街区成立期の状況を知る手がかりとして注目される。

このほか、出土遺物は質量とも豊富であった。土器・陶磁器が最も多く、国内外からの搬入品も多い。また平安時代前期の漆器をはじめとする木製品のほか、11世紀末～12世紀前期頃の「桂馬香車歩兵」と墨書された木札など貴重な遺物も多く、大いに栄えていた往時をしのばせる。

【参考文献】

『太宰府市史考古資料編』太宰府市史編集委員会編　太宰府市　1993年

『大宰府条坊跡20-第199次調査-』太宰府市の文化財第60集　太宰府市教育委員会　平成14年3月

ほか

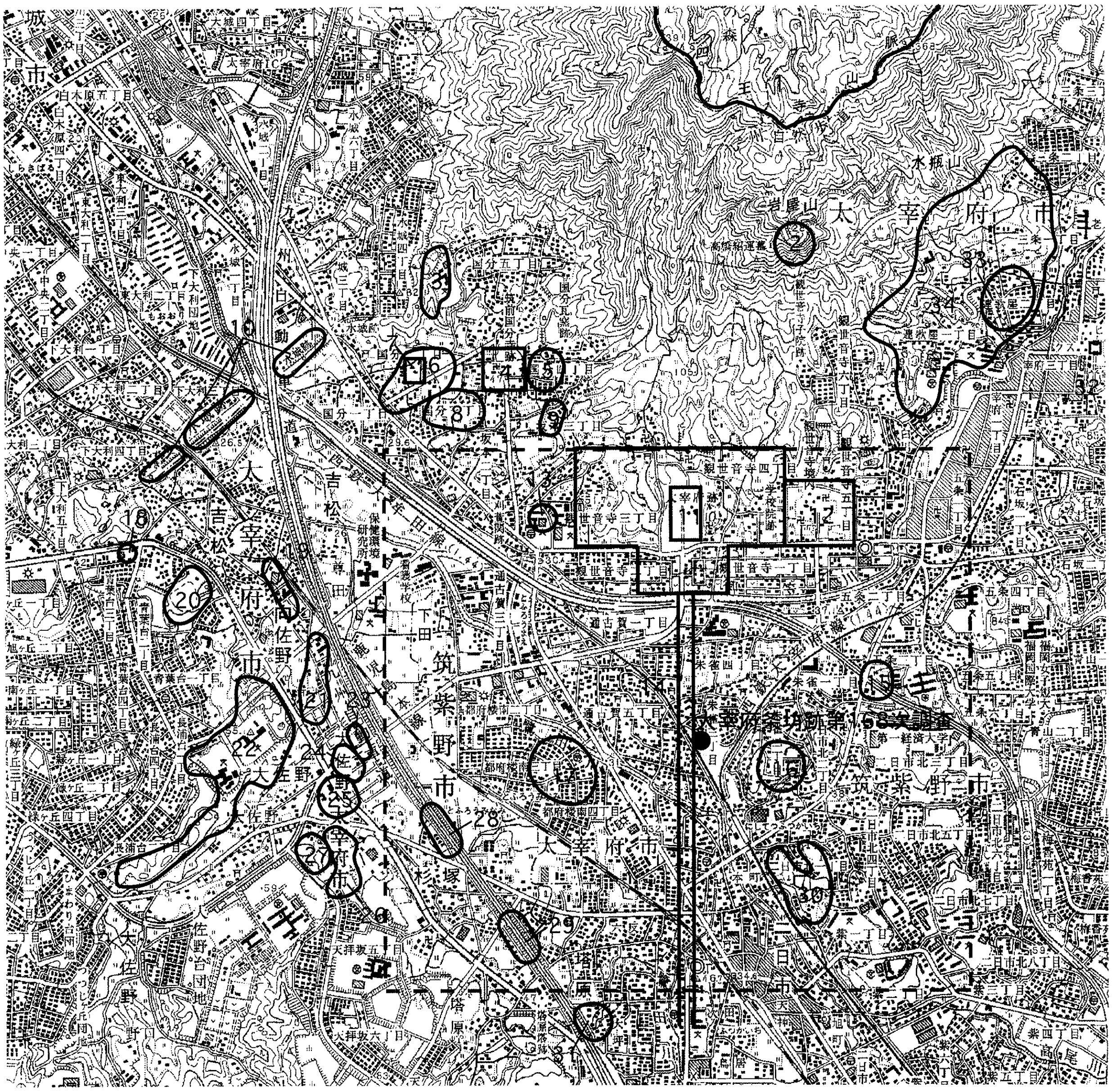


図２　太宰府市とその周辺の遺跡（1/30,000）

1.大野城跡
2.岩屋城跡
3.陣ノ尾遺跡
4.筑前国分寺跡
5.辻遺跡
6.国分松本遺跡
7.筑前国分尼寺跡
8.国分千足町遺跡
9.御笠団印出土地
10.水城跡
11.大宰府政庁跡
12.観世音寺
13.遠賀団印出土地
14.大宰府条坊跡(破線内)
15.君畑遺跡
16.般若寺跡
17.市ノ上遺跡
18.神ノ前窯跡
19.原口遺跡
20.篠振遺跡
21.前田遺跡
22.宮ノ本遺跡
23.雛川遺跡
24.フケ遺跡
25.尾崎遺跡
26.脇道遺跡
27.殿城戸遺跡
28.剣塚遺跡
29.唐人塚遺跡
30.峯遺跡
31.桶田山遺跡
32.太宰府天満宮(安楽寺跡)
33.浦城跡
34.原遺跡

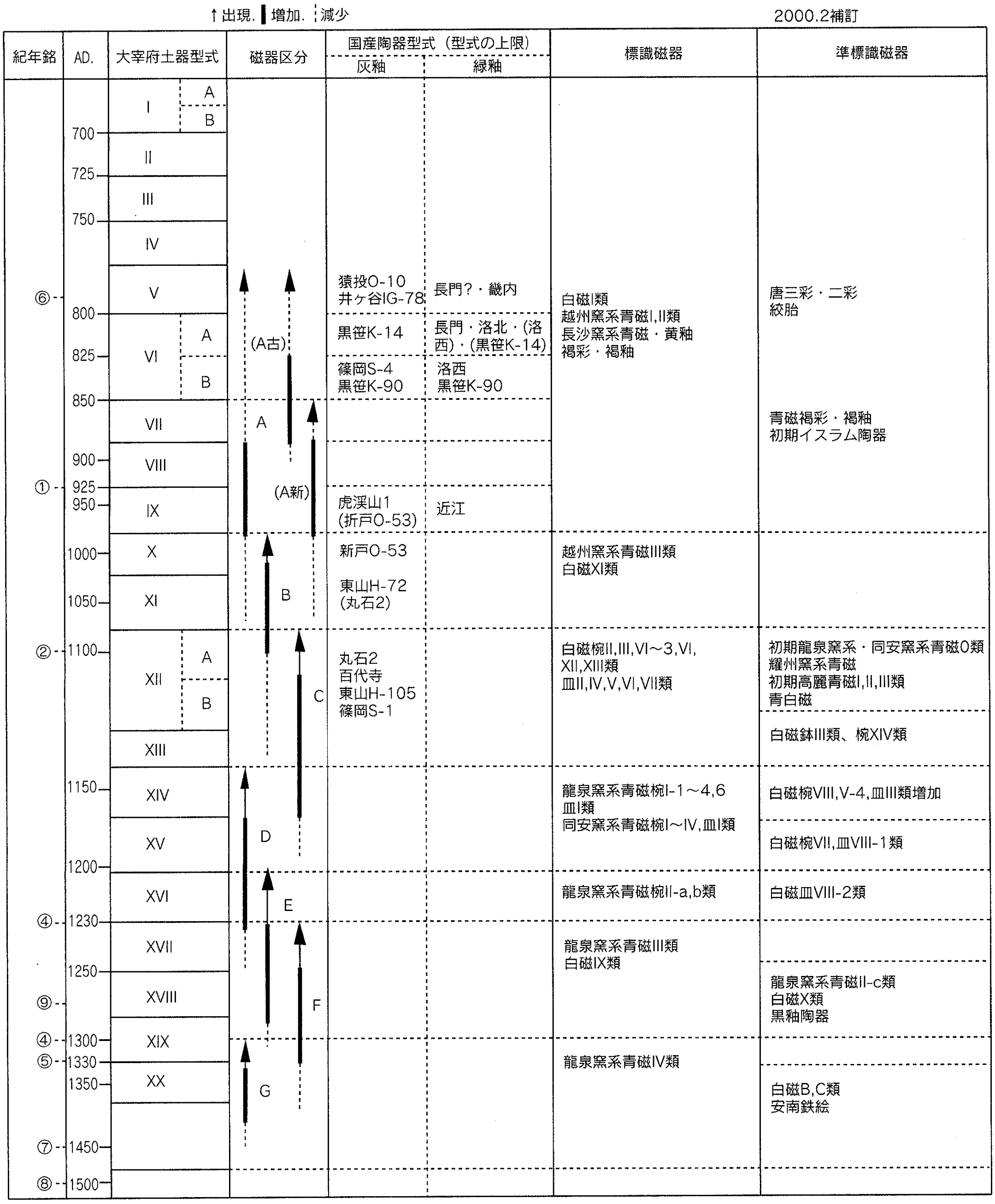


図３　大宰府土器型式と国産陶器・貿易陶磁器編年

紀年銘資料
①A.D.927　延長5年,大宰府74次SD205A溝
②A.D.1091 寛治5年,平安京左京4条1坊SE8井戸
③A.D.1224 貞応3年,大宰府33次SD605溝
④A.D.1304 嘉元2年,大宰府109.111次SD3200溝
⑤A.D.1330 元徳2年,大宰府45次SX1200池
⑥A.D.784　延暦3年,長岡京102次SD10201溝
⑦A.D.1459・1465 長禄3・寛正5年,福岡市井相田CII・SG16池
⑧A.D.1501 文亀元年,大宰府70次SD1805溝
⑨A.D.1265 文永2年,博多62次713土壙

文献
①九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
②田辺昭三・吉川義彦「平安京跡発掘調査報告左京四条一坊」1975 平安京調査会
③九州歴史資料館「大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報」1975
④九州歴史資料館「大宰府史跡昭和63年度発掘調査概報」1989
⑤九州歴史資料館「大宰府史跡昭和52年度発掘調査概報」1978
⑥長岡京市埋蔵文化財センター「長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1集」1988
⑦福岡市教育委員会「井相田C遺跡II」「福岡市埋蔵文化財調査報告書179」1988
⑧九州歴史資料館「大宰府史跡昭和56年度発掘調査概報」1982
⑨福岡市教育委員会「博多48」「福岡市埋蔵文化財調査報告書397」1995

II.調査組織

調査を実施した平成7年度、および整理報告を主体的に行った平成14･15年度の調査組織は、以下のとおりである。

(平成7／1995年度)

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二（～7年5月31日）
		和田敏信（7年6月1日～）
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷　豊
	主　　事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		中島恒次郎（調査・整理担当）
		重松麻里子（～7年6月30日）
	技　　師	井上信正（調査・整理担当）
		高橋　学（調査・整理担当）
	技師（嘱託）	下川可容子

(平成14／2002年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	神原　稔
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正
		高橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子

		柳　智子
		渡邊　仁

(平成15／2003年度)

総括	教育長	關　敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信（～6月30日）
		久保山元信（7月1日～）
	保護係長	久保山元信（10月1日～）
	文化財調査係長	神原　稔（～9月30日）
	調査係長	永尾彰朗（10月1日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
	技術主査	山村信榮
		中島恒次郎
	主任技師	井上信正
		高橋　学
		宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳　智子
		渡邊　仁

Ⅲ.調査に至る経緯

調査地は、太宰府市朱雀3丁目305-2　305-3に所在する。

平成4年11月2日、文化課（当時）と太宰府市建設課との協議において、地区道路整備事業に伴い今回の対象地で道路建設（拡幅）するとの話が出た。南側に隣接する西日本鉄道株式会社所有地（305番地。旧西鉄操車場）においては、平成4年2～3月に試掘調査を実施しており、高密度の遺構・遺物が埋蔵され、整地とみられる包含層が複数面確認されていた。この結果から対象地にも遺跡が包蔵されている可能性は高く、道路敷設前に発掘調査が必要であることを伝えた。その後、建設課と西日本鉄道株式会社（以下、西鉄）との間の各交渉が行われた後、最終的に平成7年度に発掘調査を実施することが決まった。なお本調査区南側の土地は将来開発が行われることが想定され、今回の調査区と将来行われるであろう調査区とを接合できるよう、隣接する西鉄所有地の一部を含む形で調査を行うことを西鉄に申し入れ、了承された。

調査は年度当初から行う予定にしていたが、調査範囲、重機搬入経路、排土置場・駐車場等の範囲等、西日本鉄道株式会社との最終調整が難航し、平成7年6月16日にようやく重機を搬入することができた。調査期間は平成7年6月16日から平成8年1月11日で、開発対象面積は約3,000㎡、調査面積は1,603㎡を測る。調査は井上信正が担当することになり調査区西端から遺構検出・掘削を行ったが、予想を遥か

に越える遺構密度だったため、課内で調整を図り、中島恒次郎が加わることになった。中島は調査区中央から東側の調査を行っていった。その後、中島が別の調査担当となったため、入れ替わって高橋学がその後の調査を引き継いだ。第1遺構面は10月14日に空中写真を行い、10月21日に1回目のラジコンヘリによる航空測量を実施した。10月23日より灰色土層・茶灰色土層といった整地層を除去し、第2遺構面検出・掘削作業を行った。11月27日には茶黄色粘土層除去前の空中写真撮影を行い、翌28日にかけて茶黄色粘土層上面の遺構全体図を作成した。翌29日から茶黄色粘土層・茶褐色粘土層を掘り下げ、包含層は茶灰色粘土層のみ残った状態にし、12月12日に2回目のラジコンヘリによる航空測量を実施した。この時点で、条坊関連区画検出が明らかになっており、条坊左郭内部の一端を見ることができる貴重な調査として、報道発表を行い、12月17日（日）に現地説明会を実施し、150人程の参加者があった。この後、当初予定していた調査期間が12月末日までとなっていたため、18日から茶灰色粘土層が堆積している範囲の調査を開始し、それ以外は重機による埋め戻しを開始した。高橋は別の現場へ移動した。茶灰色粘土層除去においては、時間があまり残されていないことから、層の一部を人力で掘削して遺物収集を行った以外は重機で除去し、茶灰色粘土層除去後の遺構面の調査に残りの期日を充てることにした。12月27日に最終面である第4遺構面の調査が終了し、同日、実測・全体写真撮影を行った。この日までにようやく他の部分の埋め戻しは終了し、翌28日に残りの部分も完全に埋め戻した。12月29日から翌1月9日まで道具撤収作業を行い、1月11日に重機搬出を終え、調査は終了した。

平成8年7月には将棋関連墨書木札出土に関する報道発表を行い、約1ヶ月間、太宰府市文化ふれあい館玄関ホールにて、ミニ展示を行った。その後もこの墨書木札については注目を集め、問い合わせも相次いだ。

本調査は調査時点から注目されてきたため、整理は随時進めていったが、本格的には平成14年度からはじまった。出土遺物や内容が充実していることから作業には時間がかかり、平成15年度中もほぼ作業が続いた。

Ⅳ.調査整理の方法

本調査区は調査前から遺構密度が高いことや遺構面が複数あることが事前試掘調査で把握しており、実際表土除去を行い、一部調査に取りかかった状況でも、担当者一名では予定期間内に調査終了が見込めないことが判断されたため、複数の担当者が関わることになった。ただ調査区が細長く設定されていることもあり、それぞれ担当範囲を決め、また遺構番号もあらかじめ割り振ることにした。これに基づき、本書でも調査の担当者がそれぞれの遺構・遺物について報告を行っている。担当範囲については以下の通りである。地区番号については遺構配置図を参照していただきたい。

＜調査範囲＞

第1遺構面

井上信正　・・・55地区以西

（暗灰色粘土層上層・暗灰色粘土層およびこれらの層除去後の遺構面）

中島恒次郎・・・7～17地区、34～55地区付近

（暗灰色粘土層および同層除去後の遺構面、黒茶色土層）

高橋学　・・・20～34地区付近

（茶色土層および同層除去後の遺構面）

第2遺構面

井上信正　・・・45地区以西（灰色土層および同層除去後の遺構面）

高橋学　　・・・46地区以東（茶灰色土層および同層除去後の遺構面）

第3・4遺構面

井上信正　・・・第2遺構面より下の整地層・遺構面

＜遺構番号＞

井上信正　・・・S-1～399、S-1001以降

中島恒次郎・・・S-400～799、SF180、SF185

高橋学　　・・・S-800～1000、SF215、SA240

測量は、トラバース測量にて原点を設け、国土座標第II座標系により、位置を明示した。

作図は遺物取り上げ用の遺構略測図（本書中の遺構配置図）を1/100で作成し、遺構個別図・土層図等を1/20で作図した他、灰色土層除去後で茶黄色粘土層除去前の44～57地区の遺構全体図も1/20で作図した。また茶灰色粘土層除去後の第4遺構面の遺構全体図は、あらかじめトラバース測量した点を使用して、1/50の平板測量で作成し、暗灰色粘土層・茶色土層除去後の遺構全体図、および茶褐色粘土層・茶灰色土層除去時の遺構全体図は、写測エンジニアリング株式会社が航空測量を行った。

遺構全体図は、整理の段階でCADを使用して原図からトレースを行い、各遺構面に対応するよう編集した。なお当市教委の測量成果と写測エンジニアリング株式会社の測量成果にズレが生じていることが調査の時点で判明していた。後者を基準にすると当教委測量分は南へ15～20cm程度、西へ25～30cm程度ズレているようである。測量結果については、写測エンジニアリング株式会社が実施した成果の方が高精度を有していると考えられることから、遺構全体図を編集する際、第2遺構面の45～57地区付近（茶褐色粘土層・茶灰色土層除去時の遺構全体図）については、写測エンジニアリング株式会社の測量成果に合わせて当市教委が作図した図面をはめ込み、編集した。補正の際の誤差は2～3cm以内には収まったとみられる。こうした作業により今回提示した第1・2・3遺構面全体図、および巻末に付した各遺構の測量成果が、正式な測量結果を反映しているとご理解いただきたい。なお、第4遺構面全体図および全ての遺構配置図については当市教育委員会の測量結果をそのまま使用しているので、ご注意願いたい。

調査・整理方法については、基本的に『佐野地区遺跡群I』（太宰府市の文化財第14集　1989）、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』（太宰府市教育委員会　2004年4月）の内容に準じている。

なお一部の遺構については土師器供膳具の出土量が多いため、作図を行わず巻末の土師器計測表に掲載するに留めた。また貿易陶磁器については『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』により分類し、出土遺物一覧表に分類と出土点数（破片数）を掲載し、分類がないもの、特殊なものについては可能な限り本文図版に掲載した。出土遺物一覧表は、付属のCD-ROMに収納している。

付属のCD-ROMには、各表を収納しているほか、遺構・遺物の写真を掲載している。

Ⅴ．調査の概要

1．層位

ここは調査前まで西日本鉄道株式会社所有地であり、以前は西鉄電車操車場として利用されていた土地である。本調査区には操車場に関連するとみられる盛土が約1mの厚さで堆積しており、これを除去すると遺構面が検出された。

ここは整地が何度も繰り返されており、この中に遺構が比較的良好な状態で保存されていた。このため、遺構面と整地との関係に注意しつつ調査を進めることにし、遺構面として5～6面の調査を行った結果、大きく4時期（4面）に捉えることができた。整地は実際には8面以上あった可能性もあり、周辺の調査が期待されるところである。なお各遺構面においては、基盤となる整地層が途切れ、下位の整地層や地山が露出しているところもある。ここでは下位の遺構面に属するものも一緒に検出している。各遺構面の調査を進めることで埋土から遺構の帰属面を推定できることがわかってきたため、重要な遺構及び下位の遺構面に属することが明らかと判断される遺構については遺構番号台帳に帰属する遺構面を表記した（巻末掲載）。それ以外は遺構面の特定を控え、それぞれ検出した遺構面に帰属させて取り扱っているため、今後遺構の特定が必要な場合は、各遺構配置図に記した整地層の範囲、遺構番号台帳の記載、出土遺物の状況を加味してご判断いただきたい。

さて、各遺構面と整地層の関係について述べる。

第1遺構面

第1遺構面が最も上位の遺構面である。遺構検出時には「暗灰色粘土層」（46～47地区以西）「茶色

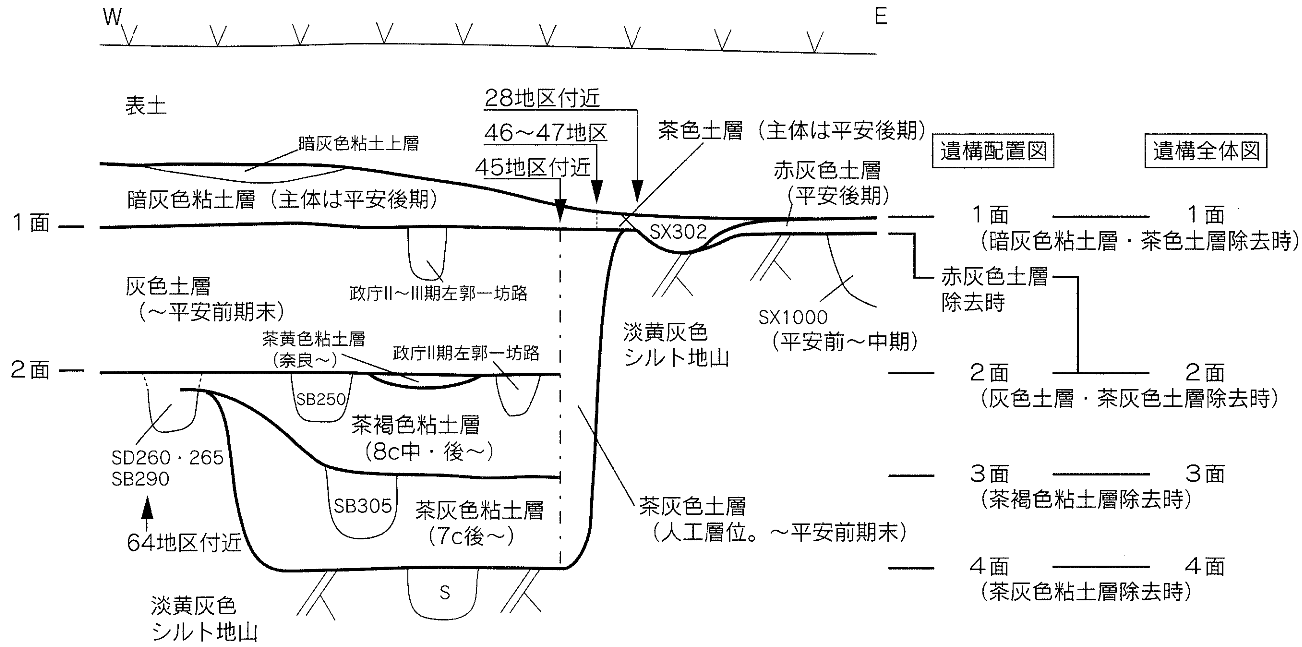


Fig.1　大宰府条坊跡第168次調査　土層模式図

※遺構図は、遺構面の基盤層である整地層を除去する前に作成しているが、整地層がとぎれ、さらに下位の整地層が露出している部分がある。ここで検出された遺構には、下位の遺構面に帰属するものもあろう。埋土の状況などから、帰属する遺構面が明らかになったものは報告している(遺構番号台帳等参照）。
※28地区以東、56～58地区付近、64地区以西は、整地層はほとんどみられない。
※１面目を覆う暗灰色粘土層と茶色土層は、46～47地区付近で分けているが、基本的に同一層位である。
※茶灰色土層掘り下げ時において、45地区以東は地山面まで一度に掘り下げてしまった。
このため、45地区に近い地区は、いわゆる第2～3遺構面の遺構は消失しているものがある可能性がある。
※58～64地区では、茶褐色粘土層がごく薄くまばらに残存していた。このため灰色土除去時に一緒に除去されてしまい、結果として、地山面で遺構検出を行っている。

土層」（同以東）という遺構面を覆う層位を任意に設定して、遺構面をわずかに掘り下げた上で精査し検出した。遺構の基本的な埋土は暗茶色～黒茶色を呈した粘質土系のもので、基盤となる整地層は基本的に「灰色土層（茶灰色土層）」である。この遺構面では基盤の整地層が消失して下位の遺構が検出された場合も遺構掘り下げを行っており、古い時期の遺構も含まれているが、基本的には灰色土層・茶灰色土層を基盤面とする遺構群が中心である。灰色土層・茶灰色土層の上に展開している遺構群の中では、平安時代前期後葉（大宰府編年VIII期、SD430・SE490）、平安時代前期末～中期（同IX>X期、SE425）に埋没した遺構等が最も古いとみられ、平安時代中期（同X～XI期）以降遺構・遺物は増加し、平安時代後期初頭（同XII期）を中心とする時期がほとんどの遺構の下限と考えている。こうした中、鎌倉期に埋没したとみられる遺構SX302が調査区東側にあり、調査区全体からも鎌倉期の遺物がごくわずかに出土しているが、この頃の目だった活動痕跡はみられない。

「暗灰色粘土層」「茶色土層」の他、同時期の堆積層に「赤灰色土層」「黒茶色土層」がある。「赤灰色土層」はSX302の東側20～23地区に小範囲ながら広がる堆積層である。この層の除去後に左郭二坊路に関連する可能性があるSX1000を検出している。「黒茶色土層」はBG38～39付近に堆積しており、第1遺構面の基盤層の一つと見られる。この層除去後の下層からも平安時代後期の遺物を含む遺構を検出していることから、平安時代後期の部分的な整地層と考えられる。「黒茶色土層」の堆積後には、東西道路SF180が走行しているのを確認することができた。

なお、調査区西側のBU63～64付近において、重機による遺構検出中に、土師器供膳具が密集している部分を検出した。掘方のプランなどは確認できず、第1遺構面検出レベルより上位であったため「暗灰色粘土上層」として遺物を取り上げた。遺構、遺物包含層、あるいはこの時期の地表面の可能性など想定できようが、詳細は不明である。上位に未知の遺構面が存在することも想定すべきであろう。

灰色土層・茶灰色土層

これらは第1遺構面の大半の遺構の基盤層となるもので、第2遺構面を覆う層である。広範囲に広がっており、調査区の中心部では50～60cmの厚さがあるところもある。この両層は、調査区を細長く設定したため担当者が東西二手に分かれて調査を行ったため、東西別層になる可能性を想定してとりあえず別の層位名をつけたもので、結果としては基本的に同一層と判断している。層の埋土はやや砂質味の強い印象を受けるもので、下位の整地層との分別は比較的容易である。ただ下位の層が薄い場合は分層できずに同時に掘り下げてしまった場所もある。なお「茶灰色土層」掘り下げに際しては、44～45地区以東に複数展開していた整地層と遺構面を認識できず、地山面まで掘り下げてしまった。このため「茶灰色土層」出土遺物には第2遺構面以下の遺物の大半を含んでいる。

層の堆積の時期であるが、いずれも奈良時代後半の遺物を多く含むが、第1遺構面で述べたように大宰府編年VIII～IX・X期の遺構に切られていることから、平安時代前期末までの堆積が有力視される。ただ堆積前後の平安時代前期末の遺構はどの遺構面でもあまり多くないこと、第1遺構面調査時には掘り残しがないように何度も遺構再検出作業をおこなっているにもかかわらず「灰色土層」検出範囲全体にて大宰府編年IX～X期の遺物が含まれており、時期が下る可能性もあるなど、堆積時期の確定は未だ

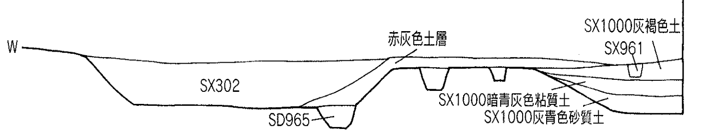
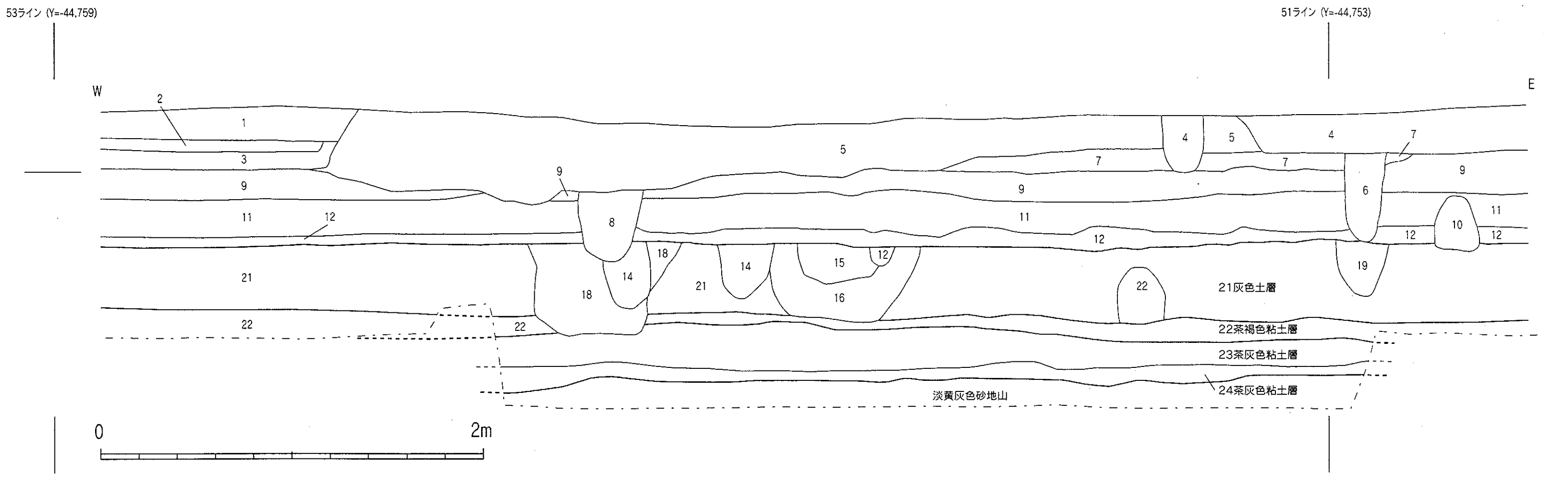


Fig .2　大宰府条坊跡第168 次調査区東端部（20～23ライン付近）土層模式図

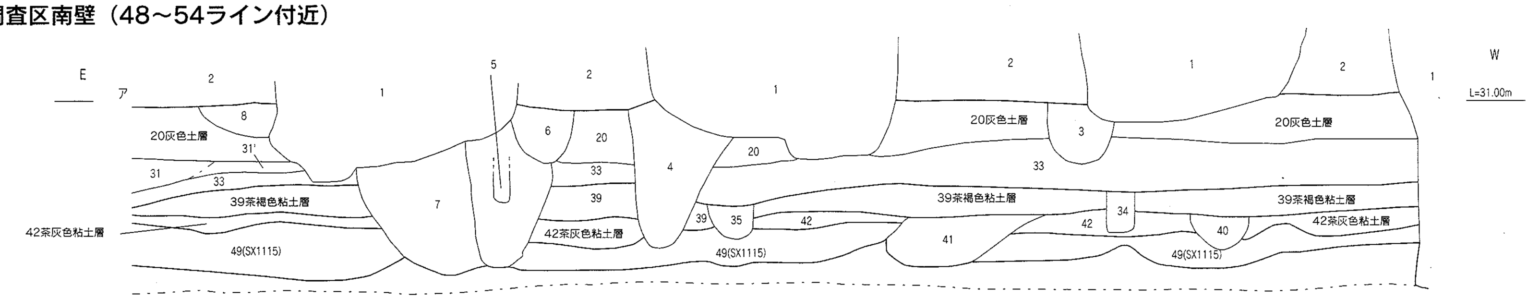
調査区北壁（51～53ライン付近）

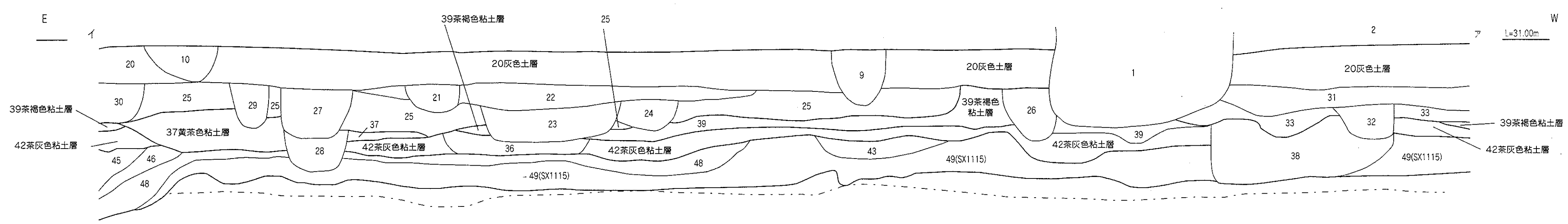


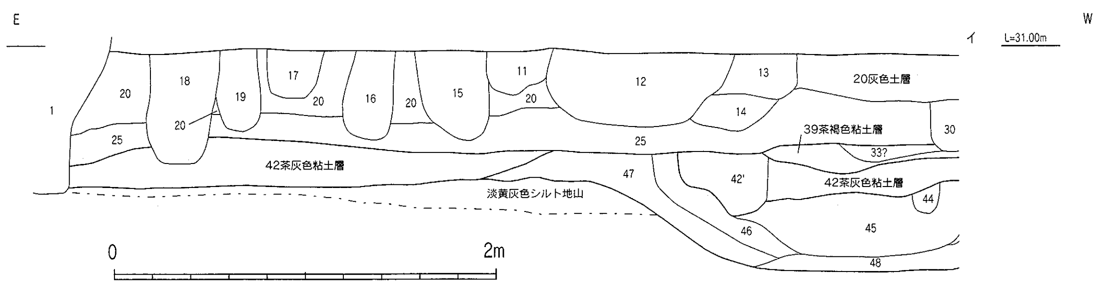
調査区北壁土層　※ < >内は遺物取り上げ土色名
なお1～12層は、「表土」として遺物取り上げる。

1.暗茶色土（カクラン。礫あり）
2.コンクリート
3.栗石（コンクリートの基礎部）
4.濃茶色土（カクラン）
5.暗茶色土砂（カクラン。礫多い）
6.暗灰褐色土
7.暗灰褐色土
8.灰褐色土（明黄褐色砂質土塊含）
9.明黄褐色砂質土
10.暗褐茶色土（いずれの層からの掘り込みか不明。カクランの可能性あり）
11.灰褐色土（耕作土）
12.黄褐色土（11層の酸化層。下部ほど酸化が強い。耕作土）
13. 茶褐色土
14. 茶褐色土
15. 暗茶色土
16. 暗茶褐色土
17. 暗茶色土
18. 暗茶褐色土
19. 暗灰褐色土
20. 暗灰褐色土（21層上面から掘り込まれたとみられる）
21. 淡茶褐色砂質土（砂質が強い）・・・<灰色土層>
22. 暗灰褐色粘土（粘質で硬質。砂も若干含む）・・・<茶褐色粘土層>
23. 淡茶灰色粘土（わずかに砂含む）・・・<茶灰色粘土層>
24. 暗茶灰色粘土・・・<茶灰色粘土層>

調査区南壁（48～54ライン付近）







調査区南壁土層　※ < >内は遺物取り上げ土色名

1.カクラン（西鉄車庫使用時のもの。廃棄土坑）
2.西鉄による整地層（礫砂）及び水田等耕土（4面以上あり）
（耕土最下層および最下層は酸化している）
3.黒褐色土（黄色土塊含）
4.茶褐色土
5.黒褐色土
6.黒褐色土
7.層上位は茶褐色土、下位は暗灰色土（黄褐色土塊等混じる）
8.暗茶土（炭・平安期の土器多量含む）
9.8と同じ埋土（遺構は異なる）
10.8と同じ埋土（遺構は異なる）
11.暗茶褐色土
12.暗茶色土
13.暗茶色土
14.濃暗茶色土
15.茶褐色土
16.茶褐色土
17.暗茶色土
18.茶褐色土
19.茶褐色土
※　以上3～19まで、20（灰色土層）に切り込む遺構

20.灰色砂質土・・・<灰色土層>
21.暗茶色粘質土
22.灰茶色砂質土・・・たまり状遺構か？
23.暗灰茶色砂質土
24.暗茶色粘質土
25.濃茶褐色粘質土
26.茶褐色粘土+濃茶褐色粘質土・・・小穴
27.明茶褐色土
28.茶色粘質土
29.明茶褐色土
30.明茶褐色土
31.濃灰色砂質土・・・20層（灰色土層）と関連か？
32.やや明るい明茶褐色土
33.やや濃い明茶褐色土
34.黒褐色土（やや黄色土塊含）
35.黒褐色土（わずかに黄色土塊含）
36.37と同層・・・小穴（SB305gか?）
37.淡茶灰色シルト土塊・・・<黄茶色粘土層>
38.37と同層・・・小穴（SB305e）
39.茶褐色粘土・・・<茶褐色粘土層>
40.やや暗い茶褐色粘土
41.茶灰色粘土（淡黄色土・黒褐色土含む）
42.茶灰色粘土（ブロック状の土塊多い）・・・<茶灰色粘土層>
42'.茶灰色粘土+細かな黒褐色粘土塊+細かい淡白黄色粘土塊
43.暗茶灰色粘土+黒褐色粘土・・・たまり状の遺構か？
44.茶灰色粘土+淡茶褐色粘土
45.やや暗い淡茶褐色粘土+黒褐色粘土塊・・・<SK1116>
46.やや暗い淡茶褐色粘土+黒褐色粘土塊+淡白黄色粘土塊
・・・<SK1116>
47.淡白黄色粘土塊+黒褐色粘土塊+淡茶褐色粘土塊
（図上左上から右下に流れ込んだように見える）
・・・<SK1116>
48.淡茶褐色粘土・・・<SK1116>
49.黒褐色粘土・・・<SX1115>

Fig.3　大宰府条坊跡第168次調査区南北壁（48～54ライン付近）土層図（1/40）

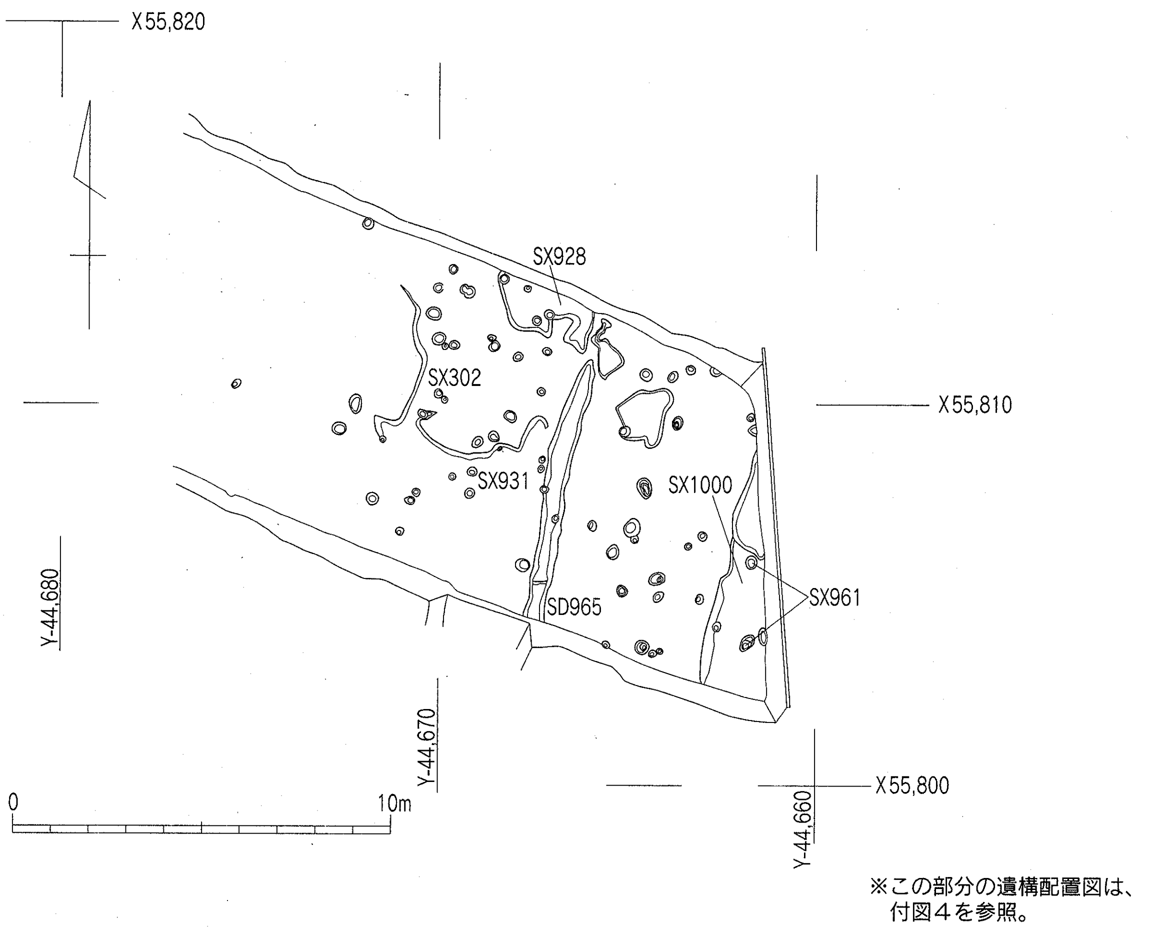


Fig.4　SX302・赤灰色土層除去後検出の遺構実測図（1/200）

十分とは言えないだろう。層が広範囲であったこと、層がかなり厚かったことを鑑みると、複数の堆積層を一層と捉え、大宰府編年Ⅸ～Ⅹ期頃の堆積層を見逃したことも想定されよう。条坊改変に関わる問題であり、今後の課題とし、周辺調査で精査を期待したい。

また「灰色土層」を除去した第2遺構面で大宰府編年Ⅺ～Ⅻ期の遺物を含む遺構（SD275・SE330）を検出しているが、これらの遺構については第1遺構面の掘り残しといえよう。

なお後述するように下位には古い遺構や整地層が重層的に堆積しており、本層中にも7世紀後半以降の遺物が多く含まれていた。下位の遺構・整地層を理解するために、出土遺物の項にはこうした遺物も掲載している。

第2遺構面

「灰色土層」「茶灰色土層」を除去して検出した遺構面である。遺構の埋土は基本的には灰色味を呈したものが多く、黒色系のものでも土質がシルト系のため第1遺構面の遺構埋土とは違う印象を受ける。また埋土中に黄褐色土が細かな土塊で含まれるものも多い。ここには奈良時代中～後期の遺構群が広く展開し、ごく一部に平安時代前期を中心とする遺構群が展開している。平安時代前期の遺構としては井戸などがあるが、それ以外については、遺構・遺物とも少ない印象を受ける。また一部に平安時代中期以降に下る遺構もあるが、埋土の状況や第1遺構面との関連で検討し各項で報告している。基盤となる整地層は茶褐色粘土層で、茶黄色粘土層は部分的に堆積したたまり状の整地層と考えられる。

茶黄色粘土層

BKBL49～50地区に部分的に存在する整地層である。淡茶色土・淡黄色土が大きな土塊となって含まれる。厚いところで10cm程である。ここからは7世紀後半～8世紀の遺物が出土しているが、下位の茶褐色粘土層が奈良時代以降であることから、奈良時代以降の整地といえる。

茶褐色粘土層

茶褐色というより暗紫褐色に近い暗い色をしたシルト～粘土の層である。48～56地区にかけて薄く堆積し、58～63地区にかけてもごく薄くあるいはまばらに堆積している。ある程度広範囲に広がる整地層とみられる。厚いところでは20cmを超えるところもあるが、ほとんどが10cm前後である。出土遺物は7世紀後期から8世紀代の遺物が含まれる。この中から平安時代前期まで下る土師器椀片が1点出土しているが、この層上の第2遺構面に奈良時代の遺構が広く展開することを考えると、この遺物は上層遺構の掘り残しに伴う混入の可能性が高いだろう。ただ調査範囲が狭く出土遺物も多くはないため現時点の時期確定は慎重とならざるを得ない。現時点では奈良時代中～後期頃の整地層とみなしているが、平安時代前期まで下る可能性も検討される必要がある。

第3遺構面

茶褐色粘土層除去後に検出した遺構面である。基盤となる整地層は茶灰色粘土層で、遺構の埋土は基本的に茶灰色粘土や地山のシルトなどを含んでいる。この遺構面からの出土遺物は7世紀後期～末のものがほとんどで、一部に8世紀の遺物を含む。遺構・遺物ともそれほど多くないため確定的なことは述べにくいものの、遺構面を覆う茶褐色粘土層と基盤層の茶灰色粘土層より、7世紀後期～8世紀前期の遺構群とみられる。

茶灰色粘土層

45～56地区の範囲で検出した整地層で、さらに広い範囲で検出される可能性がある。厚いところでは40cm前後も堆積している。調査時点では調査終了期日が迫っていたため、一部を人力で掘削し遺物収集を行った以外は、重機により整地層除去した。ここからは7世紀後期～末とされる遺物を出土している。上層の遺構・整地層に7世紀後期～末の遺物が多く含まれているのは、この層中に含まれていた遺物を掻き揚げて混入したものと理解され、本来はかなりまとまった量の遺物が含まれていたことが推定される。この整地直前には目立った遺構が存在せず、この後急速に遺構が展開することから、周辺土地利用における画期的な造作とみられ、条坊域の造営期に関わる遺構として注目される。また第4遺構面で検出したSK1112は、遺構埋没後に本層に覆われているが、ここから7世紀後半とみられる須恵器坏cを出土しており、本層の堆積上限を窺うことができる。なお、本層から施釉陶器が出土した。この類例は乏しく、詳細は今後の研究に委ねるが、中国陶器とみられ、唐代前期の古越州窯系青磁の可能性も残されている。国内でも屈指の輸入陶磁器出土地として知られる大宰府における初現期の船載陶器例として注目される。

第4遺構面

茶灰色粘土層除去後に検出した遺構面である。検出した遺物には一部混入が認められるものの、いずれも7世紀後半以前のものである。主要な遺構にはドングリピットとみられる土坑やたまり状遺構があり、縄文・弥生時代の遺構とみられる。古い時期の遺構が削平されている可能性は考えておく必要があるものの、調査区全体を見ても7世紀中期以前の遺物はほとんどないことを考えると、付近の土地利用は7世紀後半から始まったと推定される。

2.遺構

遺構の報告に際して、注意すべき点を以下のとおり記した。

柵列・掘立柱建物報告では柱間を小尺表示をしている。これは1小尺≒0.298mとして除した数値を掲載している。

井戸は大型のプランをもつことから、検出面付近には井戸が完全に埋没した後に堆積した上面の堆積層が沈み込んでいる可能性がある。このため厳密には井戸出土遺物としては除外する方が望ましいと考えられる遺物が含まれていることも考えておく必要がある。こうしたことを踏まえて、調査時に井戸確認後に掘り下げた埋土の遺物から土層名を付加することに務めたものもある（特にS-400～500番台)。

また井戸底に曲物を設置することが多い。曲物を便宜的に目玉と呼称しており、遺物の取り上げ土層名にも使用している。

（1）第1遺構面検出遺構

第1遺構面検出柵列

SA027

調査区の最西端、推定朱雀大路の東側溝と考えられるSD001より約2.6m東側で検出した小穴列である。検出長は3.44mで、柱間は0.91m（3小尺)、0.63m（2.1小尺)、0.56m（1.9小尺)、0.66m（2尺)、0.68m（2.3小尺）で、やや東に振れつつ南北に走行する。埋土・出土遺物より平安時代中～後期の遺構とみられる。なお調査地点は調査区内でも狭小であり、単に並んだ小穴を遺構とみなした可能性も否定できない。ただ、調査区北壁の土層観察によると、本遺構の西側は西に向かって傾斜しており、それを平安時代後期の堆積層が覆っていることから、本遺構西側は当時西側に向かって傾斜し、視覚的に理解できる境界のようなものが存在していた可能性が考えられる。この西隣ではSD001が検出されている。本遺構とSD001の掘削には時期差があり直接関わりはないが、SD001の位置を意識した地山掘削行為と本遺構とに何らかの関連があったことも想定されよう。

SA120

調査区中央西側の55地区付近で検出した南北に走行する小穴列で、政庁III期左郭一坊路と推定するSF190の道路芯より約24m西に位置している。検出長は8.8mで、柱間は北から2.33m（7.8小尺)、2.25m（7.5小尺)、2.33m（7.8小尺)、1.70m（5.7小尺）で、ほぼ南北に走行する。本遺構はSB080東端より約3.75m東に位置しており、柱穴の位置もSB080とほぼ揃えているほか、柱穴の規模もほぼ同様であることが注目される。出土遺物・埋土状況からも両遺構はほぼ同時期のものとみられる。また本遺構の東側と西側の遺構密度をみると、西側と比べて東側の方が小穴等の密度が高いことが注目される。こうしたことから土地の境界を明示する施設だったと想定している。なお今回は柵列としたが、東側に展開する小穴群の対応関係より本遺構を掘立柱建物の一部を想定することも可能ではある。ただ調査範囲が狭いこと、小穴が多いことからいずれかを決することは困難であり、調査時の所見に従って報告した。今後の周辺調査成果に期待したい。埋土・出土遺物よりSB080とほぼ同時期の遺構とみられる。

SA150

調査区東側のBA22～25付近で検出した東西に走行する小穴列である。検出長約8.1mで、柱間は西から1.55m（5.2小尺)、1.30m（4.4小尺)、0.83m（2.8小尺)、1.03m（3.5小尺)、1.9m（6.4小

尺)、1.47m（4.9小尺）で、東に対してやや北に振れる。本遺構の北2mにはSB145がほぼ筋を揃えて配置される。ここからは平安時代の遺物が出土しているが、切り合い関係で先行するSX302が13世紀の遺物を含むことから、13世紀に下る可能性がある。

SA240

調査区東部の西寄りに位置する。全長は8.6m。東西方向に4間確認でき、柱間はおおよそ2.05mである。埋土は茶黒色土。出土遺物より遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。

SA520（Fig.10）

調査区中央にて検出した遺構である。調査時には認識していなかったが、調査終了時にその配列状況、柱穴と考えられる各穴の形状などを考慮し、当初は掘立柱建物を想定していた。ただ建物と閉塞する状況で柱穴が確認できなかったこともあり、ここでは「柵」として報告することにした。検出できた柱穴は、東西2間、南北1間で両者とも調査区外へ展開する可能性を残す。各柱穴の長軸長は1.2m、短軸長は1.0mを測るなど柱穴としては大きく形状としては略楕円形を呈している。各穴には黄色土塊や炭化物が混入した茶色土が確認でき、根石と考えられる穴（S-513）も確認できた。なお遺物の項に関連する遺構から出土した遺物を掲載しているが、他遺構の遺物も混在しており、参考程度にとどめておきたい。

第1遺構面検出掘立柱建物

SB010（Fig.5）

調査区西端で検出した掘立柱建物と想定される遺構である。東西3間以上、南北1間以上に復元され、東西6.0m以上、南北2.0m以上を測る。さらに調査区の北および東に延びている。埋土・出土遺物より平安時代中～後期の遺構とみられる。

SB020（Fig.5）

調査区西端で検出した東西棟である。東西5間以上で、南北はSE025掘削で消失したと考えられるため2間に復元される。東西8.1m以上、南北3.9mを測る。さらに調査区の西側に延びている。付近で整地層は検出されておらず、検出時の基盤は地山である。出土遺物は平安時代前期を下るものがなく、層位的には灰色土層より下位の遺構とみられる。

SB060（Fig.6）

調査区西側で検出した南北棟である。南北2間、東西1間で、南北4.2m、東西1.7mを測る。埋土・出土遺物よりXII期以前の遺構とみられる。

SB080（Fig.7）

調査区西側で検出した東西棟である。東西6間、南北2間の身舎で、北側に1間分の廂が付く。身舎は東西13.7m、南北4.3mで、廂は2.1mの幅で取り付く。掘方出土遺物よりX～XI期頃に建築されたとみられ、柱痕出土遺物よりXII期頃に廃絶したことが窺える。柱穴の位置について、SB080Eは柱筋からずれており建物と直接関わりのない穴かもしれないが、ここに適当な柱穴は検出されていないため、埋土や穴の規模や深さからこれを選択した。この北側のS-164が柱穴となる可能性もあるが、柱筋からやはり若干ズレており、出土遺物も古い。なお前述のように、東端柱列より約3.75m東にはSA120が位置しており、両者は柱穴の位置を揃えている。柱穴の規模もほぼ同様であり、両遺構は同時期に併置していた可能性がある。

SB095（Fig.6）

調査区西側で検出した総柱建物である。東西3間、南北3間以上に復元される。東西5.25m、南北検出長5.05mを測る。ここから出土した遺物は奈良時代～平安時代前期のものが大半であるが、建物の

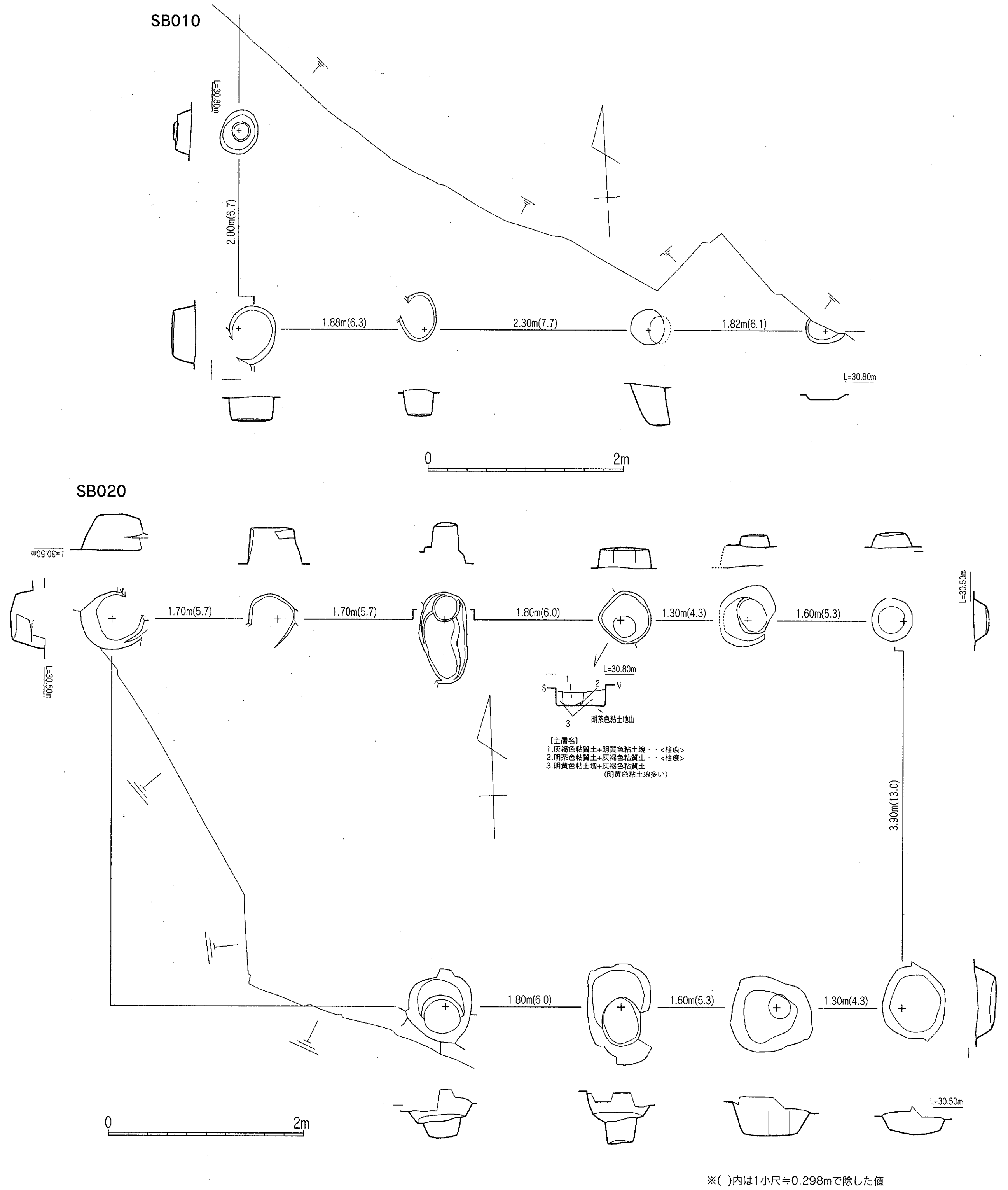


Fig.5　SB010・020実測図（1/60）

基盤層である灰色土層が平安時代前期末～中期に下る可能性があることから、平安時代中～後期の遺構とみられる。

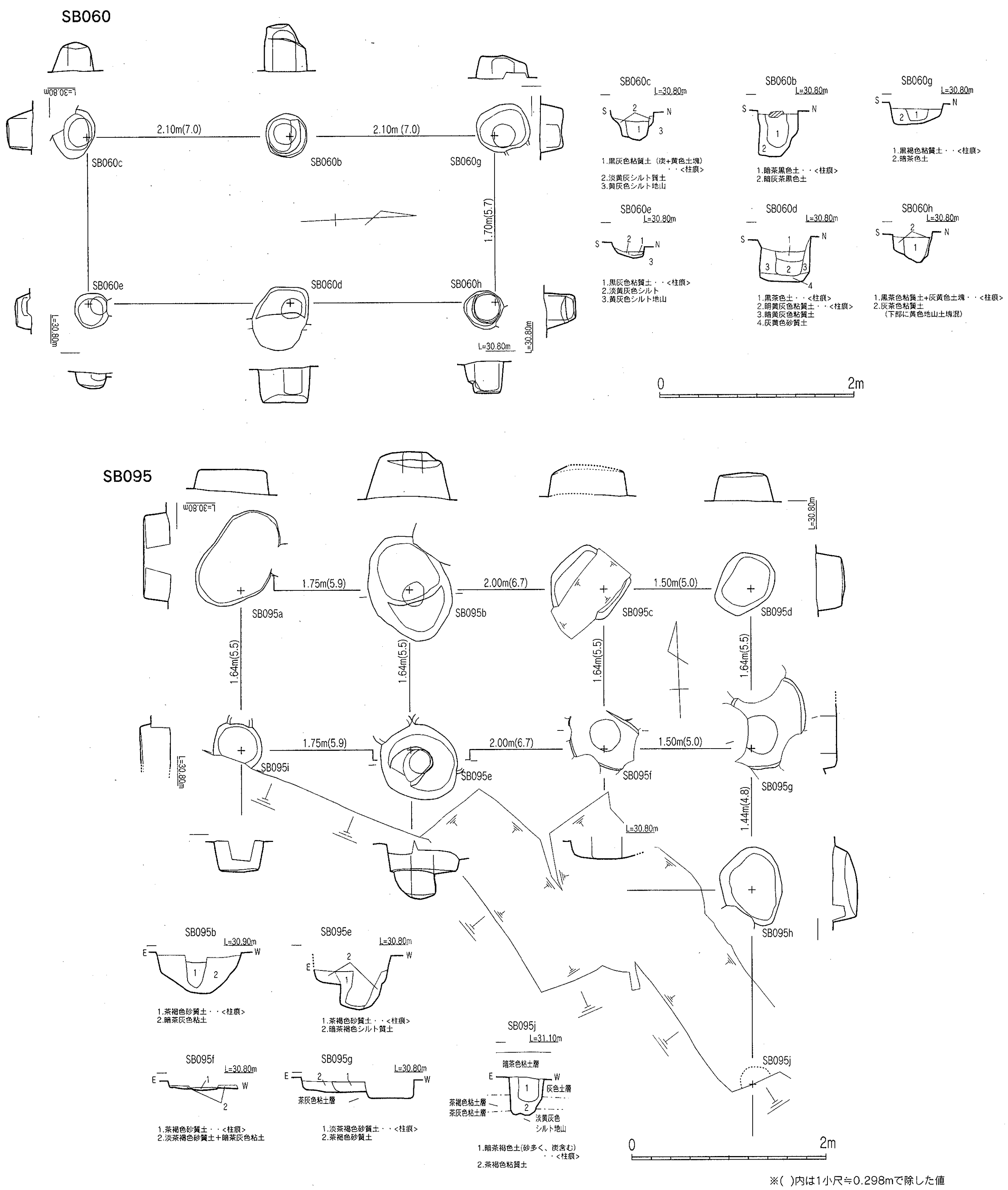


Fig.6　SB060・095実測図（1/60）

SB100（Fig.8）

調査区西側で検出した大型の総柱建物である。建物規模が大きい割には柱穴が小さいようであるが、

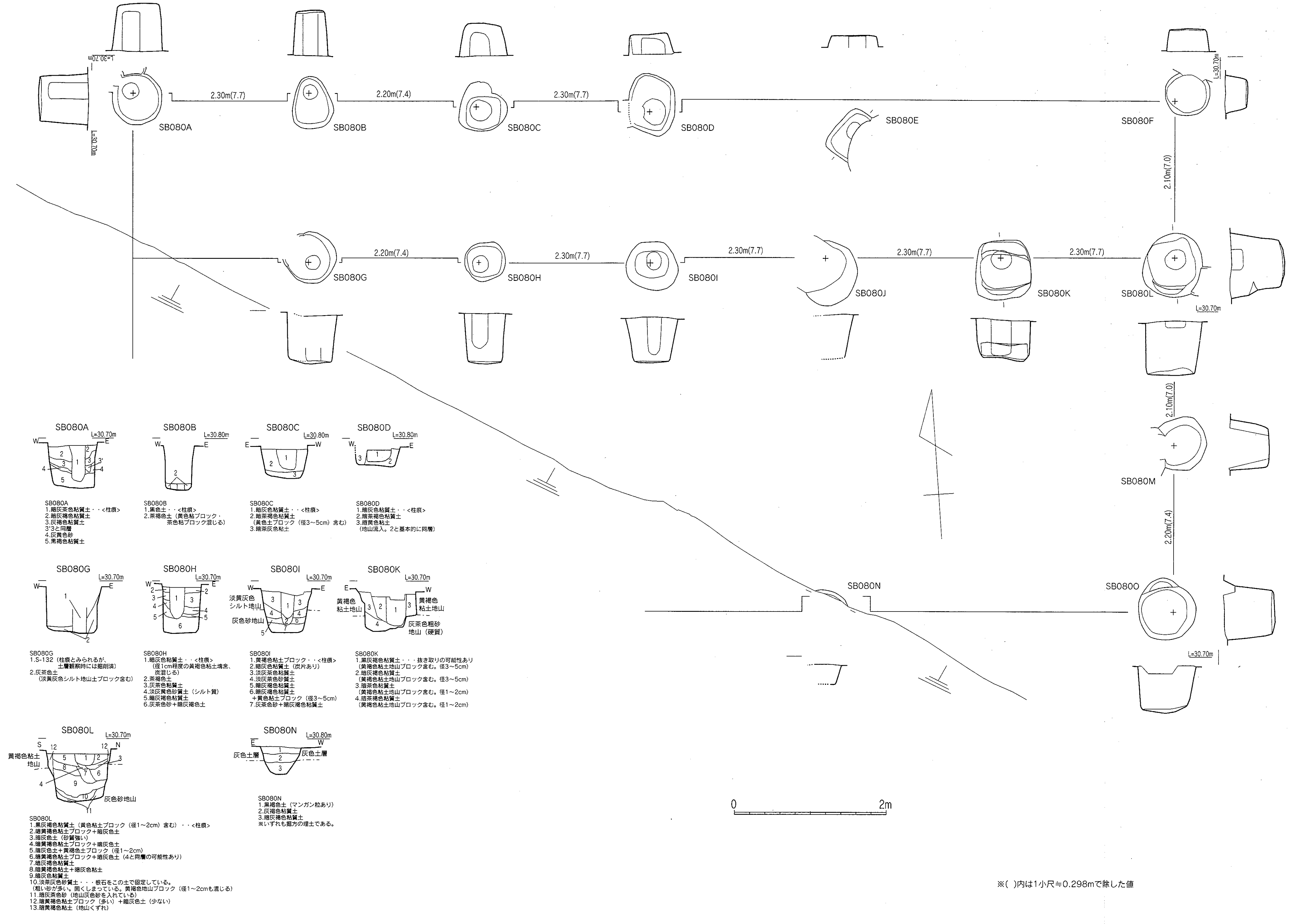


Fig.7　SB080実測図（1/60）

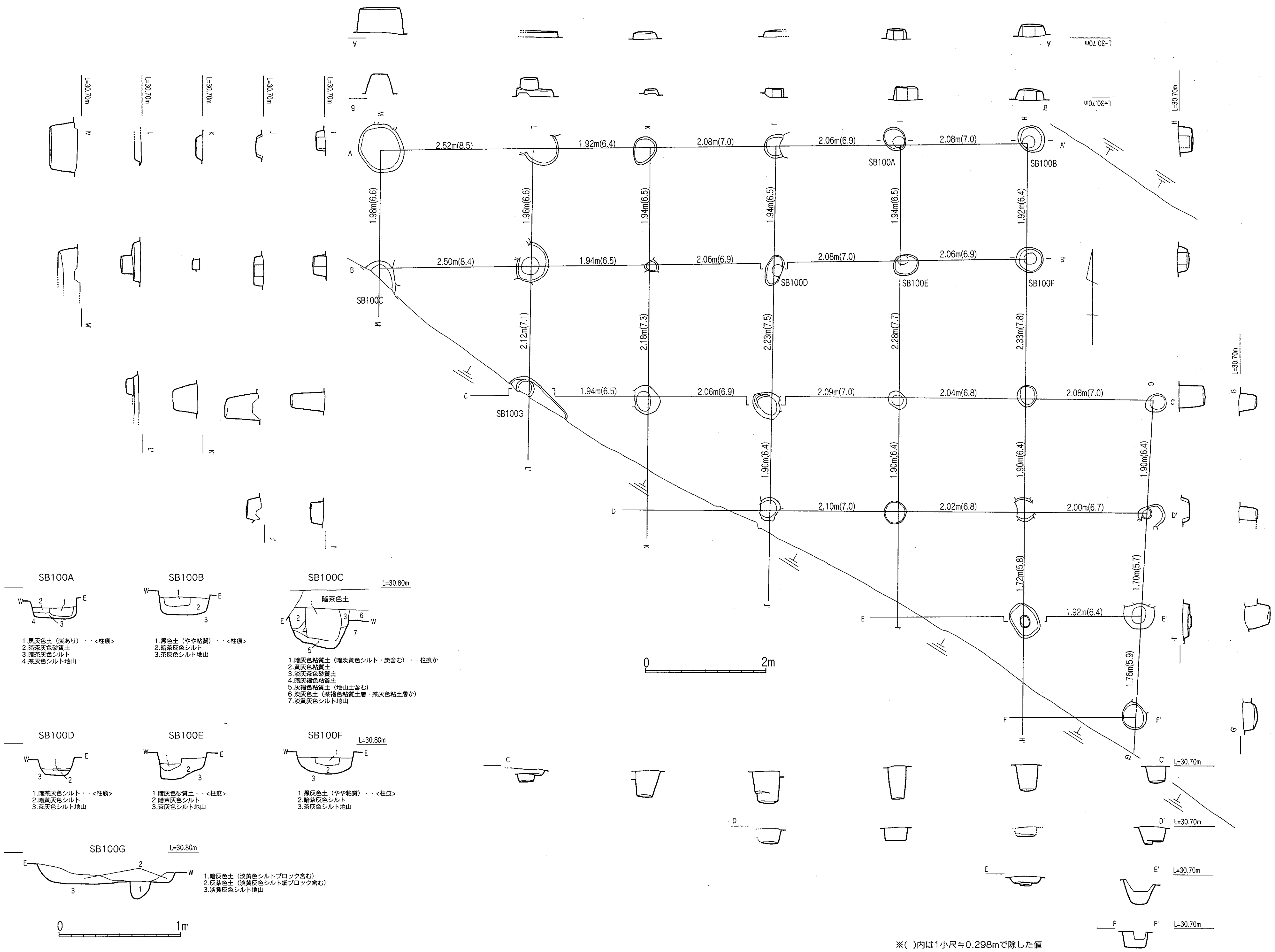


Fig.8　SB100実測図（1/80、土層図は1/40）

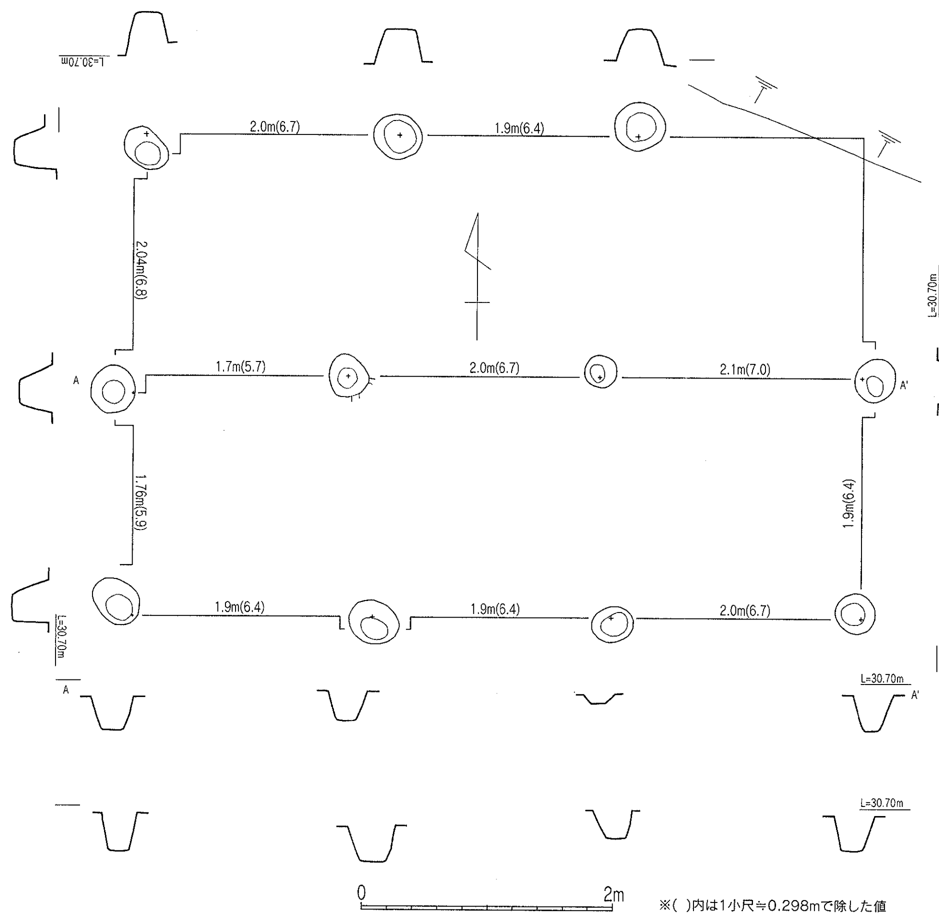


Fig.9　SB145実測図（1/60）

柱列がほぼ並んでいること、削平を受けており本来の掘方は深かったと想定されることから建物と判断した。東西5間、南北5間以上の身舎で、東側柱列の南側に取り付くように1間の廂または縁が付設する。身舎は東西10.66m、南北9.63m以上を測り、廂または縁は1.92～2.08mを測る。埋土・出土遺物より平安時代中～後期の建物で、大宰府編年XI～XII期を中心とした時期に廃絶を迎えたとみられる。同時期頃の同様の大型総柱建物が大宰府条坊跡第222次調査等でも検出されており、今後も同様の建物例は増えるとみられる。

SB145（Fig.9）

調査区東側で検出した東西棟である。東西3間、南北2間で、東西5.8m、南北3.8mを測る。ここから出土した遺物は平安時代中～後期のもので、この頃の遺構とみられる。ただ、この南2mの位置に走向をほぼ同じにする柵列SA150があり、互いに関連があるとすると、この建物の時期が13世紀まで下る可能性もある。

SB420（Fig.10）

調査区中央やや西寄りで検出した掘立柱建物で、東側桁柱を撹乱土坑によって欠失している点ならびに調査区北側へ展開するものと考えられ、建物規模を特定することは困難であった。梁行全長は4.32m、柱間は2.16m（7小尺）を測る。桁行柱間は1.8m（6小尺）であった。なおこの建物は調査中に確認できていたが、柱痕・掘り方といった遺物の取り上げはできていない。

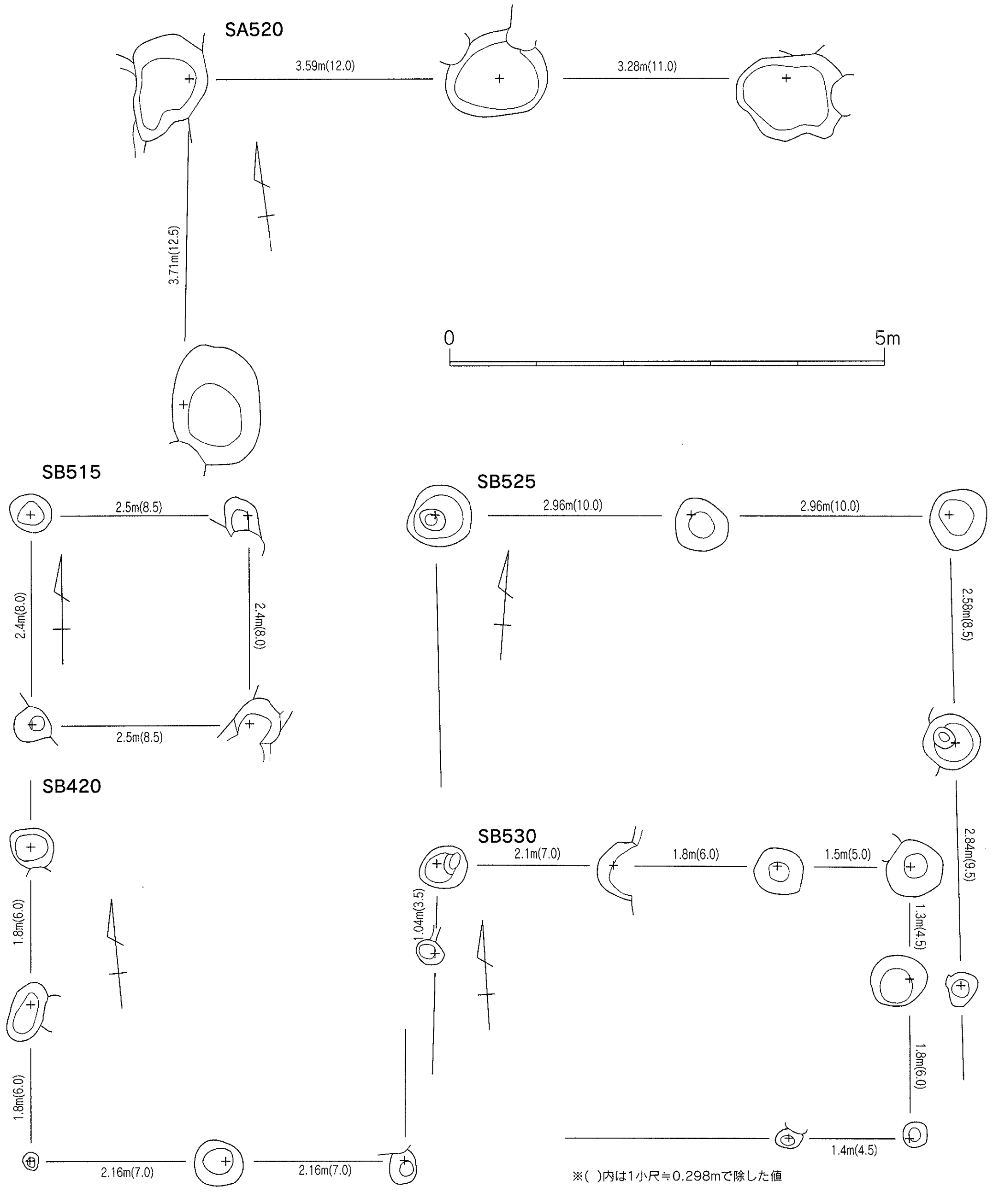


Fig.10　SA520・SB420・515・525・530実測図（1/80）

SB515（Fig.10）

先述したSB420の南に隣接して確認したもので、1間×1間の建物規模である。SE425を覆うように検出され、さらに井戸枠の各一辺の方向と建物梁桁方向が平行することから、井戸の覆屋としての建物であると考えられる。東西にやや長い略正方形を呈しており、梁行柱間は2.4m（8小尺）、桁行柱間は2.5m（8.5小尺）をそれぞれ測る。建物占有面積は柱筋での算出で、6㎡を測る。

SB525（Fig.10）

調査区中央で検出した建物である。調査区南へ展開していると考えられることから建物規模に関しては不明。梁行全長は5.92m、柱間は2.96m（10小尺）、桁行柱間は2.58m（8.5小尺）・2.84m（9.5

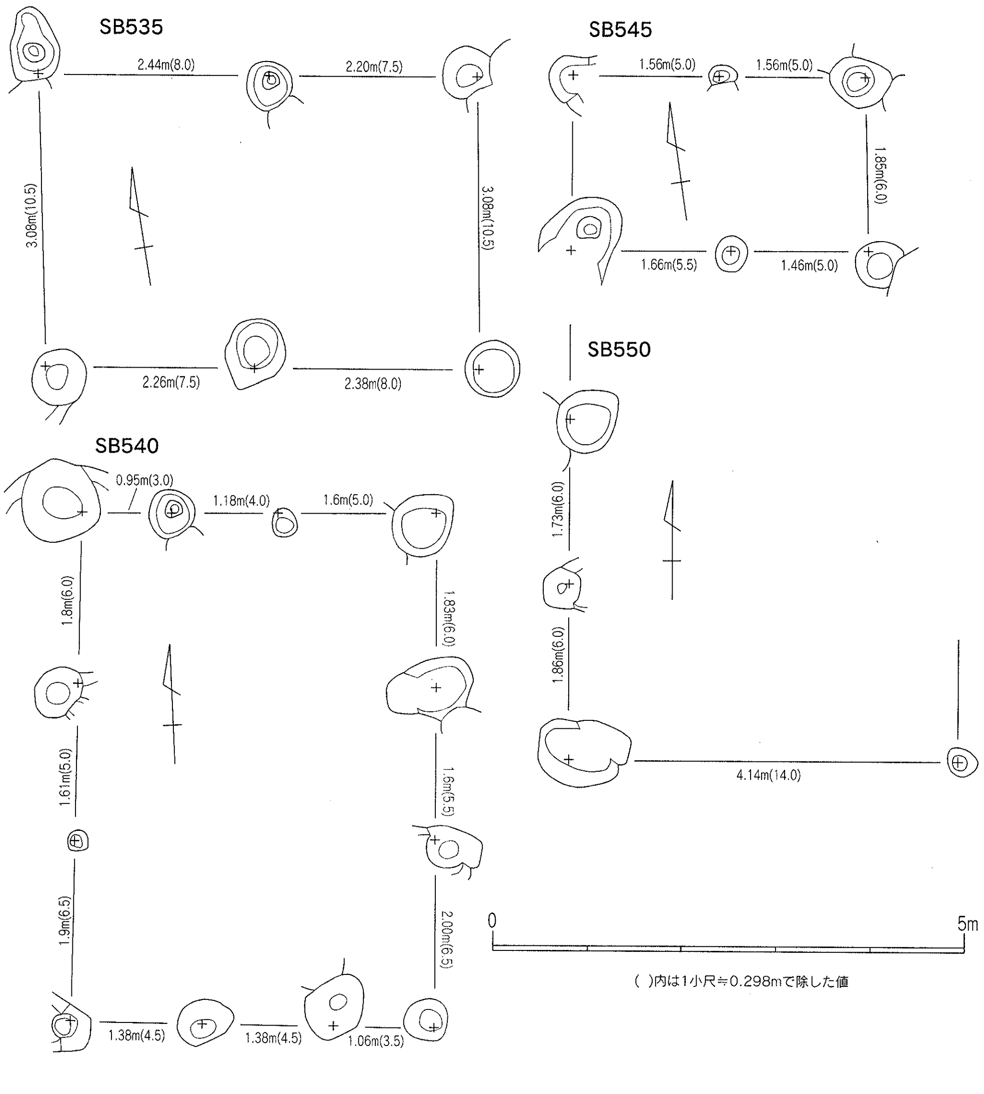


Fig.11　SB535・540・545・550実測図（1/80）

小尺）をそれぞれ測る。

SB530（Fig.10）

調査区中央で検出した建物である。先述したSB525と重なるように検出された建物で、直接的な柱穴の切りあいが無いことから、前後関係は不明である。梁行全長は3.1m、東梁の柱間は1.3m（4.5小尺）・1.8m（6小尺）、西梁の柱間は1.04m（3.5小尺）、桁行全長は5.4m、北桁の柱間は1.5m（5小尺）・1.8m（6小尺）・2.1m（7小尺）、南桁の柱間は1.4m（4.5小尺）をそれぞれ測り、梁桁ともに各柱間が一定しない傾向を有している。なお当遺構は整理の段階で認定した建物であり、遺物の項に遺物を掲載しているが、他遺構の遺物も混在しており、参考程度にとどめておきたい。

SB535（Fig.11）

調査区中央で検出した1間×2間の東西棟建物で、梁行全長（柱間）は3.1m（10.5小尺）、桁行全長は4.64m、北桁の柱間は2.44m（8小尺）・2.2m（7.5小尺）、南桁の柱間は2.26m（7.5小尺）・2.38m（8小尺）をそれぞれ測る。後述するSB540と柱穴を共有しているが、遺構検出時には堆積土の違い、共通性について検討できていなかったこともあり、前後関係について結論を出すことができなかった。建物占有面積は柱筋での算出で、14.38㎡を測る。なお当遺構は整理の段階で認定した建物であり、遺物の項に遺物を掲載しているが、他遺構の遺物も混在しており、参考程度にとどめておきたい。

SB540（Fig.11）

調査区中央で検出した建物である。SB535と重なって検出できた2間×3間の南北棟建物で、梁行全長3.82m、南梁方向の柱間は1.38m（4.5小尺）・1.38m（4.5小尺）・1.06m（3.5小尺）、北梁方向

の柱間は0.95m（3小尺）・1.18m（4小尺）・1.6m（5.5小尺）を測る。桁行全長は5.31m、西桁方向の柱間は1.8m（6小尺）・1.61m（5小尺）・1.9m（6.5小尺）、東桁方向の柱間は1.83m（6小尺）・1.6m（5.5小尺）・2.0m（6.5小尺）をそれぞれ測る。建物占有面積は柱筋での算出で、20.28㎡を測る。なお当遺構は整理の段階で認定した建物であり、遺物の項に遺物を掲載しているが、他遺構の遺物も混在しており、参考程度にとどめておきたい。

SB545（Fig.11）

調査区中央で検出した建物である。これまで記述してきたSB535・540に重なるように検出できた建物で、1間×2間の東西棟建物である。梁行全長（柱間）は1.82m（6小尺）、桁行全長は3.12m、北桁方向の柱間は1.56m（5小尺）の等間で、南桁方向の柱間は1.66m（5.5小尺）・1.46m（5小尺）と等間ではなかった。

SB550（Fig.11）

調査区中央で検出した建物である。調査区北側へ展開すると考えられる建物で、SB540に切られており、SE470を切っている。南梁方向の中央の柱が未記録であったことから、遺構略測図上での記録のみから判断せざるを得なかった。梁行全長は4.14m（14小尺）、西桁行方向の柱間は、1.73m（6小尺）・1.86m（6小尺）、東桁行方向の柱間はSX639によって柱情報が欠失していることから計測できなかった。

SB810（Fig.12）

調査区東部の西寄りに位置する。隣接するSK800により一部柱穴が確認できないが、2間×2間と考えられる。建物規模は、梁行全長2.0m、柱間1.0m、桁行全長2.64m、柱間1.32mである。出土遺物より遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。

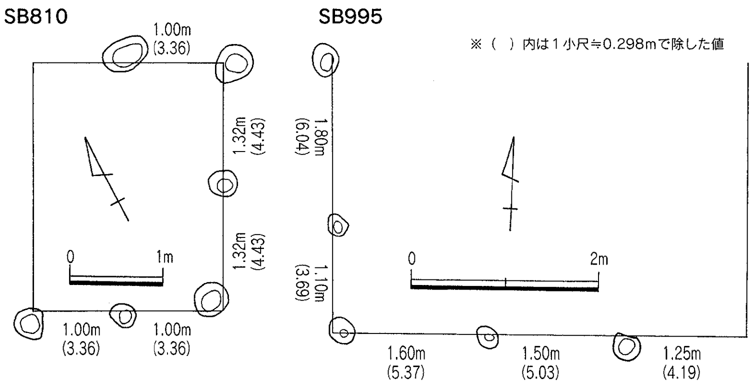


Fig.12　SB810・995 実測図（1/80）

SB995（Fig.12）

調査区東部の東寄りに位置する。調査区北側に延びるため全体的な規模は不明、確認できる範囲では2間×3間である。確認された南北方向の長さは2.9m、柱間は北より1.8m、1.1mである。東西方向の長さは4.35m、柱間は東より1.25m、1.5m、1.6mである。SD890と切合い関係にあり、これより後出するものである。

第1遺構面検出溝

SD001（Fig.13）

調査区最西端に位置する南北溝である。ここは推定朱雀大路東側溝のうち最も東で検出される溝の推定ライン付近に位置し、検出した溝は政庁II期推定朱雀大路東側溝とみられる。遺構検出時に二条の南北溝を確認しS-22・S-23とした。ただ、両者の差異が同一遺構内の埋土差による可能性があり、注意しつつ調査を進めたが、埋土は深さ5～10cm程度しか残存しておらず、調査区壁の土層観察でも確実に溝が二条存在するかどうか確定できなかった。一条の溝か否かの判断は周辺の調査を待つこととし、今回は両者を同一遺構として取り扱うことにした。検出長は4.1m、検出幅は1.14mを測る。埋土は、上から灰褐色土（S-22埋土）、黒灰色粘質土（S-23埋土）の順である。ここからは奈良～平安時代前期の遺物がわずかに出土している。なお周辺は整地層がないため、遺構は地山に直接掘り込まれていた

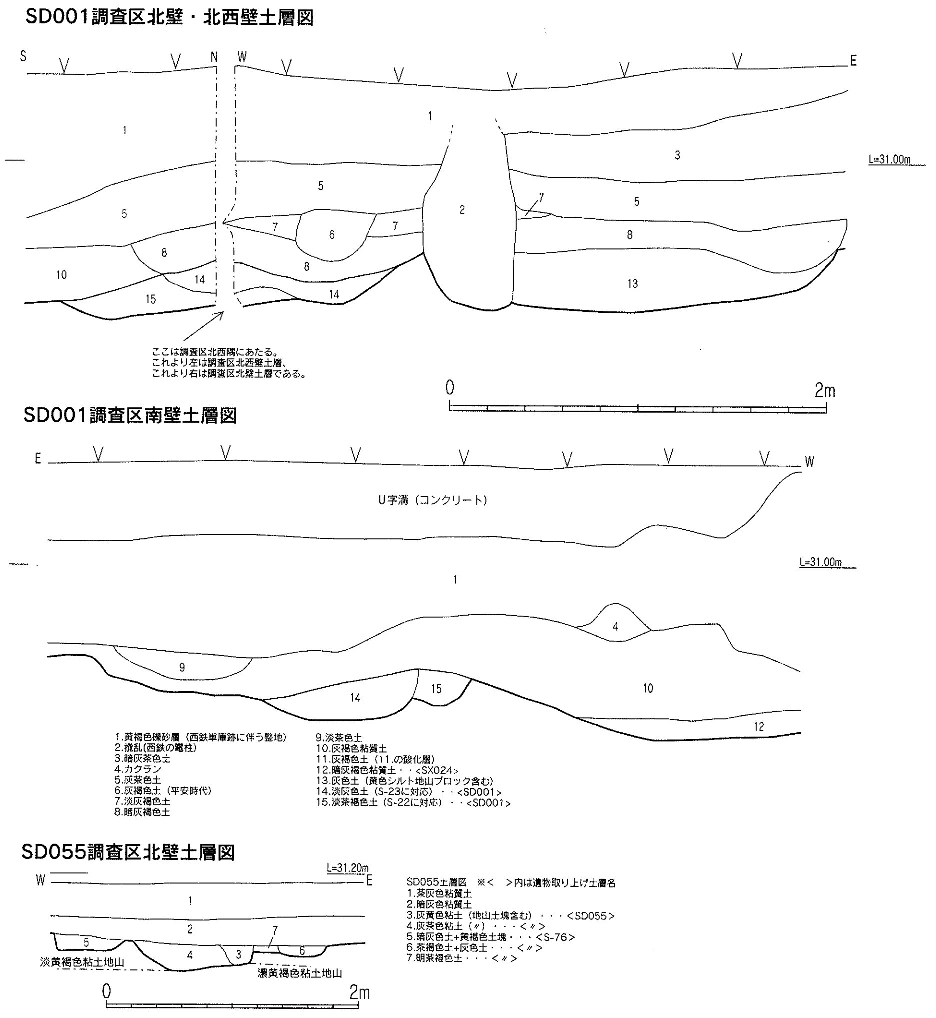


Fig.13　SD001土層図（1/40）･SD055土層図（1/60）

状態で検出したが、本来なら第2遺構面以下に帰属する遺構とみられる。

SD055（Fig.13）

調査区西側で検出した南北溝である。調査区を超えてさらに南北に伸びている。検出長9.5m、幅0.5～0.9m、深さ約0.2mを測る。溝底は北と南で約10cmの差があり、南に下がっている。埋土は細かい炭粒を含む灰茶色粘土である。ここから奈良時代以前の遺物が出土している。なおこの溝は周囲の遺構との切り合いでは最も古いが、整地層がないところで検出されており、帰属する遺構面が明確ではない。ただ埋土が第3遺構面にみられる埋土に類似することなどから、SF210の項で述べるように第3遺構面に属する可能性は十分考えられる。このことを踏まえると、本遺構はSF210に伴う道路側溝とみられる。なお関連する4条の溝のうち最も西に位置する。

SD070

調査区西側で検出した南北溝である。検出長3.2m、最大幅0.7m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色土である。平安時代前期～中期の遺物が出土している。

SD237

調査区東端で検出した南北溝である。検出長3.06m、幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土は灰茶色土で、ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SD400

調査区中央にて検出した南北溝で、ほぼ直線的に検出している。検出長9.0m、幅1.3m、深さ0.47mを測る。遺構には茶灰色細粒砂が堆積していた。このSD400ならびに後述するSD405を中心として東西に平行してSD410ならびにSD430が検出できている。なお出土遺物は平安時代前期末（大宰府編年VIII期）のものが多いため当時の埋没と考えられる。丸底坏も出土しているが南側はSE435によって切られており、ここからの混入の可能性を想定している。

SD405

調査区中央にて検出した南北溝である。SD400の西側に平行して検出した南北溝で、北へ向かって東へわずかに曲がっているが、ほぼ直線的な溝として考えられる。検出長6.5m、幅1.0m、深さ0.21mを測る。遺構には上位に茶灰色砂が、下位には黄茶色土が堆積していた。出土遺物から埋没時期は平安時代中期（大宰府編年IX期）内に位置付けることができる。

SD410

調査区中央にて検出した南北溝である。SD400周辺で検出された溝群の中で、最も西側に検出した溝で、堆積土の違いから二層に分層できた。検出長は6.0m、幅0.5m、深さ0.16mを測る。当該遺構の南においてSX403によって切られている。遺構内堆積土は黒茶色土←淡茶灰色土が堆積している。ここから出土した遺物はいずれも細片資料であることから時間軸上での位置付けに苦慮するものの、奈良時代前期（大宰府編年III期）に埋没時期を位置付けられるものと考えられる。

SD430

調査区中央にて検出した南北溝である。SD400周辺で検出された溝群の中で、最も東側に検出した溝で、検出長6.0m、幅1.1m、深さ0.21m～0.44mを測る。溝底形状として長い土坑状の形状を有しており、調査区内においてはこれまで記述してきた各溝は調査区内で途切れる傾向を有している。調査限界として遺構残存状況か当時の形状をとどめているものかどうかは、これまでの調査実績を考慮すると、前者の可能性が高いものと考えられる。溝内からは馬歯と考えられる獣骨が出土している。ここから出土した遺物は古いものでは奈良前期のものがあり、遺構性格が溝であることを考慮すると、溝周辺からの混入として考えることができる。最も新規の遺物としては、平安時代前期末（大宰府編年VIII期）に位置付けることができる資料群であり、この時期が遺構埋没時期として考える。

SD445（SD522）

調査区中央やや東寄りにて検出した土坑状のもので、後述するSD522と連続するものと推定される。SD522と合わせた遺構規模は、検出長4.4m、幅0.74m～0.84m、深さ0.24m～0.34mをそれぞれ測る。溝内には黒茶色土が堆積している。ここから出土した遺物から埋没時期は、平安時代前期前半（大宰府編年VIA期）に求めることができる。

SD455（Fig.14）

調査区中央で検出した東西溝で、検出長17.0m、幅1.0m内外、深さ0.24mを測り、溝西部において二箇所北方へ張り出し部分が確認できている。この箇所を宅地への入り口と考え、門その他入り口施設の確認を意図して精査を行ったが、明確に門などを想定するに足る遺構は確認できなかった。遺構上位にはSX647がのっており、溝埋没後の堆積層と考えられる。また遺構下位にはSE490が確認でき、井戸廃絶後に当該遺構が形成されたものと考えられる。遺構堆積土の状況は、図3に記載したように上位に包含層の取り残しと考えられる暗茶色砂混じり土が堆積しており、下位には暗黒色粘土←黄色土塊を混入する茶黒色土が観察できる。最下層である茶黒色土には、基盤層と考えられる黄色土塊が観察できることから、人為的な埋め戻しの可能性を示唆している。ここから出土した遺物には奈良期の遺物もあるが、その他は全て平安時代後期（大宰府編年XII期）に属させることが可能なもので、当該期

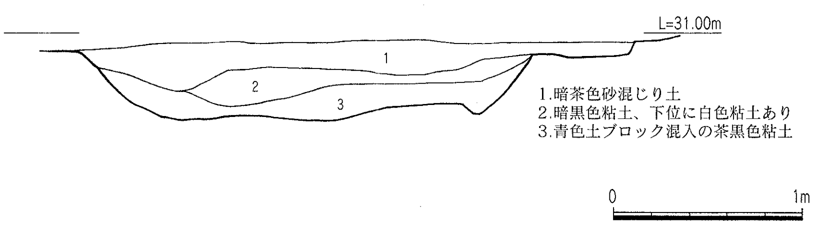


Fig.14　SD455 土層図（1/40）

に埋没したものと考えられる。

SD480

調査区中央やや東寄りで検出した溝である。道路遺構SF185の西側溝とみられる。ここから出土した遺物より平安時代後期（大宰府編年XII期）に埋没したと考えられる。

SD483

調査区中央で検出した溝である。第1遺構面にみられる黒茶色土を埋土とする。ここから出土した遺物は奈良時代後半までのものを含む。

SD485

調査区中央で検出した東西溝で、先述したSD455と平行する東西溝である。遺構規模は、検出長7.0m、幅1.25m～1.5m、深さ0.23mを測る。遺構内には茶褐色土が堆積している。ここから出土した遺物は平安時代前期のものであるが、SX623など先行する遺構から平安時代後期の遺物を出土していることから、埋没時期は平安時代後期と考えられる。

SD495

調査区中央やや東寄りで確認した南北溝で、検出長8.5m、幅1.5m、深さ0.2mを測る。当該遺構は全ての遺構に切られており、最も最下層で検出されていることから、遺構全形については判然としない。出土遺物傾向から当該遺構の埋没時期は平安時代前期前半頃に求めることが可能であると考えられる。

SD500

調査区中央やや東寄りで確認した南北溝で、多くの遺構に切られていることから遺構規模の全形については不明。検出長8m、幅1.0m、深さ0.04mを測る。出土遺物は奈良後期に位置付けることができるが、遺構前後関係から見ると、先述したSD495が古いため、これらの遺物はSD500周辺からの混入遺物である可能性があり、遺構自体はSD495以降に形成されたものと考えておく。

SD505

調査区中央やや東寄りで確認した南北溝で、遺構内には茶黒色土が堆積していた。検出長7.2m、幅0.6m、深さ0.24mを測る。出土遺物から平安時代中期（大宰府編年IX期頃）の埋没時期が考えられる。

SD510

調査区中央やや東寄りで検出した溝で、SD815と同一遺構である。出土遺物から、平安時代後期の埋没が考えられる。

SD648

調査区中央やや東寄りで検出した溝で、黒茶色土層に切られている。出土遺物から、平安時代前期前半頃（大宰府編年VIII期）の埋没が考えられる。

SD654

調査区中央やや東寄りで検出した溝である。出土遺物は奈良時代後半のものが多い。

SD815

調査区東部、西寄りに位置する東西溝。検出長は13m、幅1.5m、深さ0.26m。溝の床面を3～4mの長さで土坑に掘削している。この土坑から出土した遺物は取り上げ時に南側より①～④の番号を付している。溝の埋土は暗茶灰色土、土坑部の埋土は黒青色粘質土である。出土遺物から遺構の埋没時期は大宰府編年XII期と考えられる。

SD820

調査区東部、西から中央にかけての東西溝。検出長11m、幅1m、深さ0.34m。南東端でSE910に

切られている。埋土は堆積の古い順から黒青色粘質土、暗茶灰色土である。出土遺物から遺構の埋没時期は、大宰府編年XII期と考えられる。

SD860

調査区東部、中央部に位置する南北溝である。検出長6m、幅1m、深さ0.34m。SE850と切合い関係があり、SE850より古い段階に埋没している。埋土は古い堆積から茶黒色粘質土、暗茶灰色土の順である。遺構の切合い関係では大宰府編年XII期に掘削されたSE850に切られている。遺構の埋没時期は、白磁椀IV～V類（陶磁器区分C期)、土師器の丸底坏などの出土から11世紀末～12世紀前半（大宰府編年XII期）と推定でき、遺構の切合い関係からも矛盾しない。

SD880

調査区東部、東寄りに位置する。溝の方向は北に対して東に振れる南北溝である。検出長6.5m、幅1.15m、深さ0.26m。埋土は灰茶色土。後述する道路SF215の西側側溝と推定される。出土遺物より遺構の埋没時期は平安時代と考えられる。

SD890

調査区東部、東寄りに位置する。溝の方向は北に対して東に振れる南北溝である。検出長9.5m、幅0.8m、深さ0.15m。埋土は灰茶色土であるが、その上層に茶褐色土が見られる、茶褐色土は1面の包含層からの沈み込みと考えられる。後述する道路SF215の東側側溝と推定される。出土遺物より遺構の埋没時期は平安時代後期と考えられる。

SD900

調査区東部、東寄りに位置する東西溝である。検出長6.7m、幅8.5m、深さ0.14m。埋土は古い堆積順で灰茶色土、茶褐色土となる。出土遺物より遺構の埋没時期は、平安時代であると考えられる。

SD905・915・920

調査区東部の中央寄りに位置する東西溝。検出長3.8m、最大幅1.0m、深さ0.06m。溝の床面から一段下がって、検出長3m、幅0.9m、深さ0.1mの窪みがある。埋土は古い堆積順に、炭混じりの暗茶灰色土（S-905)、黒青色粘質土（S-915)、暗茶灰色土（S-920）である。今回の調査では同一地点での別遺構として調査したが、溝が西へ延びていると仮定すると、将来西側部分を調査した際に同一の遺構として認定される可能性もある。出土遺物より、遺構の埋没時期は暗茶灰色土、黒青色粘質土が9世紀前半（大宰府編年VIB期)、暗茶灰色土は9世紀後半（大宰府編年VII期）と考えられる。

第1遺構面検出井戸

SE025 (Fig.15)

調査区西側で検出した。切り合い関係よりSE035より後出する。平面プランは隅丸方形を呈し、南北2.2m、東西2.42m、深さ1.92mを測る。井戸枠は遺構面から約1.2m掘り下げたところで検出した。井戸枠の平面プランは方形で、板を立てて方形に組み、内部を横木で固定している。規模は0.7×0.76m、深さは0.5m程度残存する。使用する板材は残存長約55cm、幅10cm前後、厚さ0.3～0.5cm程度である。横桟木は2段分検出したが、痕跡から3段あったとみられる。井戸枠内の最下位には、曲物を使用した水澄ましを据える。曲物は直径36cm、深さ30cmを測る。埋土は遺構上面から井戸枠検出まで（上から灰黄色土、暗灰色土)、井戸枠内（上から灰褐色砂、灰色砂土)、水澄まし内（灰色粘土)、井戸枠裏込め（茶黄色土）に分かれる。裏込め出土遺物より、井戸構築は9世紀前～中期（大宰府編年VIB期)、井戸枠埋土出土遺物より9世紀末～10世紀初頭（大宰府編年VIII期）に最終埋没したと推定される。これで判断するとSE035と併存する時期もあったことも考えられる。

SE035 (Fig.15)

調査区西側で検出した。切り合い関係よりSE025より先行する。平面プランは円形～隅丸方形を呈し、南北2.44m、東西2.53m、深さ2.34mを測る。井戸枠は遺構面から約1.2m掘り下げたところで検出した。井戸枠の平面プランは方形で、板を立てて方形に組み、内部を横木で固定している。規模は0.83×0.86m、深さは0.8m程度残存する。使用する板材は残存長約70cm、幅10cm前後、厚さ0.3～0.5cm程度である。横桟木は2段分検出した。上段は痕跡のみで不明だが、下段は自然木の皮を剥いだものをそのまま利用している。井戸枠内の最下位には、曲物を使用した水澄ましを据える。曲物は直径38cm、深さ28cmを測る。埋土は遺構上面から井戸枠検出まで（暗茶色土）、井戸枠上層（暗灰色土）、井戸枠下層及び水澄まし内（上から暗灰色粘土、灰色粘土）、井戸枠裏込め（茶黄色土）に分かれる。なお9世紀前～中期（大宰府編年VIB期）を中心とする時期の遺構とみられ、井戸枠埋土は9世紀中～後期（大宰府編年VII期）に最終埋没したと推定される。これで判断するとSE025と併存する時期もあったことも考えられる。

SE040（Fig.15）

調査区西側で検出した。切り合い関係よりSE045・SE050より先行する。プランはS-108除去後に確定した。平面プラン円形を呈し、南北1.68m、東西1.57m、深さ2.0mを測る。井戸枠は遺構面から約1.0m掘り下げたところで検出した。井戸枠の平面プランは方形で、板を立てて方形に組み、内部を横木で固定している。規模は0.74×0.78m、深さは最大0.73m程度残存する。使用する板材は残存長約70cm前後、幅6cm前後、厚さ0.3～0.5cm程度である。横桟木は1段分確認した。井戸枠内の最下位には、曲物を使用した水澄ましを据える。曲物は直径50cm、深さ30cmを測る。埋土は遺構上面から井戸枠検出まで（暗茶色土）、井戸枠上層（暗灰色土）、井戸枠下層及び水澄まし内（暗灰色土下層）、井戸枠裏込め（茶褐色土）に分かれる。なお出土遺物より平安時代中期末～後期初頭（大宰府編年XI～XII期）の遺構とみられる。

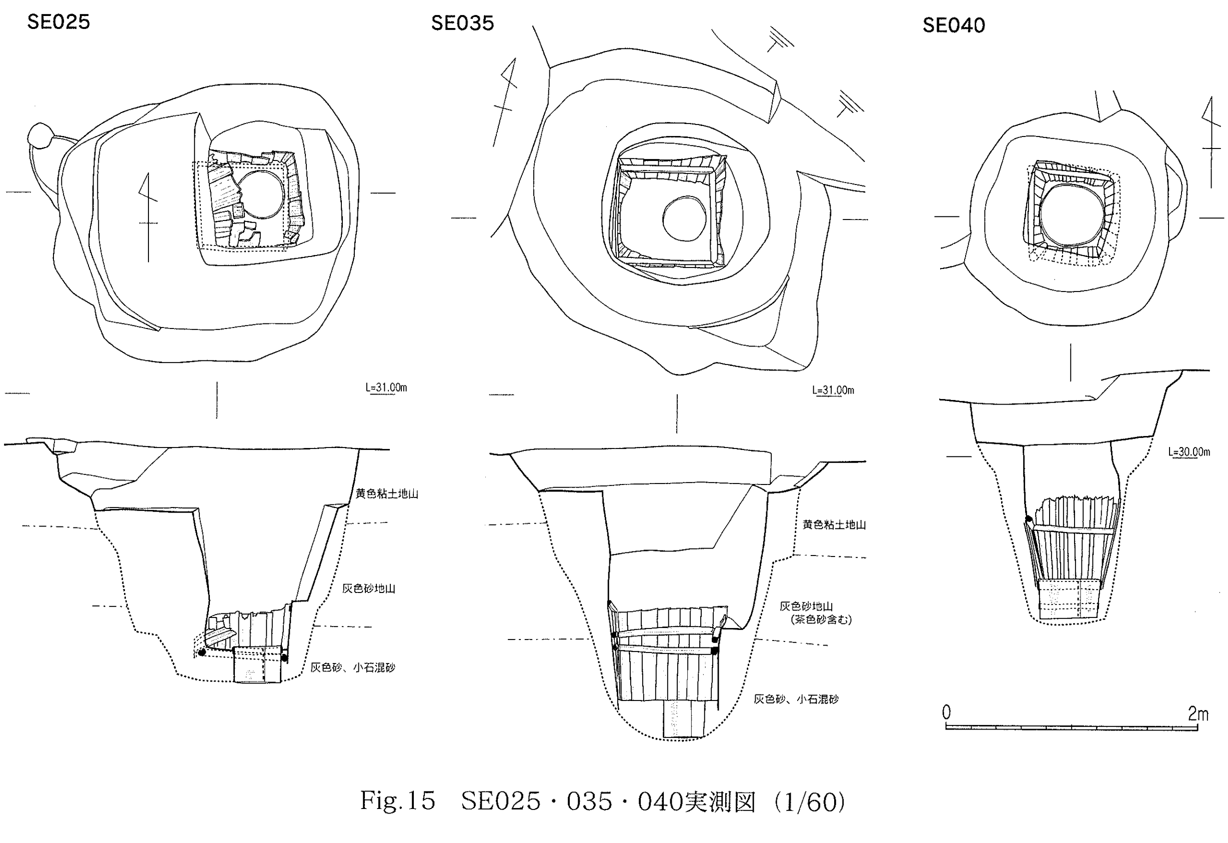


Fig.15　SE025・035・040実測図（1/60）

SE045（Fig.16）

調査区西側で検出した。切り合い関係よりSE050より先行し、SE040より後出する。プランはS-108除去後に確定した。平面プランは円形～隅丸方形を呈し、南北2.69m、東西2.50m、深さ2.05mを測る。井戸枠は遺構面から約1.1m掘り下げたところで検出した。井戸枠の平面プランは方形で、厚さ4～5cm程度の板を横に寝かせて方形に組み、板の小口をそれぞれ斜めに切って直交する板とそれぞれ合わせることで外側からの土圧に耐える構造となっている。規模は1.0×0.82m、深さは0.78m程度残存する。井戸枠が組まれている部分の裏込めには上層の裏込め土とちがい、粘土を用いてしっかりと安定させている。埋土は遺構上面から井戸枠掘方検出まで（茶褐色土（暗茶色土））、井戸枠掘方上層（暗灰色土）、井戸枠掘方中層（暗灰色粘土）、井戸枠内（灰色粘土）、井戸枠裏込め（上から黄灰色粘土、明黄灰色粘土、灰色砂）に分かれる。なお出土遺物について、最上層にて平安時代中期以降の遺物をわずかに出土しているが、その他については平安時代前期（大宰府編年VII期頃まで）のものであり、本遺構は当該時期のものとみられる。

SE050（Fig.16）

調査区西側で検出した。切り合い関係よりSE040・SE045より後出する。プランはS-108等除去後に確定した。遺構の半分は調査区北壁より外側にあり、南はSE045に切られているため、平面プランは明確ではないが、隅丸方形を呈すとみられ、東西2.7m、南北2.46m以上、深さ2.06mを測る。ここから井戸枠が2つ検出された。新旧関係にあるとみられる。新しい井戸枠は遺構面から約1.1m掘り下げたところで検出した。井戸枠の平面プランは方形で、板を立てて方形に組み、内部を横木で固定している。東西幅は1.0m、深さは0.84m程度残存する。使用する板材は残存長60～75cm、幅5～14cm、厚さ0.4～1.0cm程度である。横桟木は1段分確認した。井戸枠内の最下位には水澄ましはなく、下に古い井戸枠の横桟木の一部が覗いている。古い井戸枠は横木のみ検出した。横桟木は長さ1～1.16m程度で、8～9cm程度の断面方形を呈している。横桟木の遺存状態から井戸枠は方形だったことがわかる。埋土は遺構上面から井戸枠検出まで（暗茶色土）、井戸枠掘方（灰茶色土）、井戸枠内（灰色粘土）、井戸枠裏込め（灰黄色粘土）、井戸枠に接する裏込め（暗灰青粘土）、井戸枠裏込め最下層（灰色砂）に分かれる。灰色砂は古い井戸の裏込め、または最下位堆積層とみられる。なお出土遺物より奈良時代後期～9世紀初頭（大宰府編年VIA期以前）の遺構とみられる。

SE105（Fig.16）

調査区西側で検出した。平面プランは円形を呈し、直径1.5～1.53m、深さ1.68mを測る。井戸枠の掘方は検出したが、井戸枠は検出していない。ただ、中位付近で長さ60cm、幅4～10cm、厚さ0.5cm前後の板材が出土していることから、元来井戸枠はあり、井戸廃絶時に引き抜いて投棄したとみられる。遺構面から約1.5m下の井戸底では、曲物を使用した水澄ましを検出した。曲物はかなり腐蝕が進んでいたが、直径39cm、残存高15cm前後である。埋土は遺構上面から井戸枠掘方検出まで（茶褐色土）、井戸枠掘方上層（暗茶色土）、井戸枠掘方下層（暗灰色粘土）、水澄まし内（目玉）、井戸枠掘方最下層（濃黄褐色粘土）、井戸枠裏込め（濃茶灰色土）に分かれる。なお出土遺物から平安時代中期末～後期初頭（大宰府編年XI～XII期）の遺構とみられる。

SE330（Fig.16）

調査区中央北側において、第2遺構面で検出した。調査区壁の土層観察から第1遺構面に帰属する井戸である。平面プランは楕円形を呈し、3.0×2.09m程度、深さ1.15mを測る。井戸枠は破壊され、枠を支えた横桟木のみ検出した。横桟木は長さ1.05～1.1m程度のものを使用しており、その残存状況から井戸枠は方形だったことが推測される。また縦板に使用したとみられる板材もみられる。埋土は遺構

上面から井戸枠横木検出まで（上から茶黒色土、暗灰色土）、井戸枠横木内（青灰色粘土）、井戸枠横木外側（淡茶色砂）に分かれる。ここからは平安時代中期末～後期初頭（大宰府編年XI～XII期）頃の遺物が出土している。

SE425

調査区中央やや西よりで検出した井戸で、遺構内に明確な井戸枠の残存は確認できなかった。しかし堆積土の状況から、方形の木枠によって囲繞された井戸であると考えられる。規模は、3.2mの円形の掘方で、内部に長軸長1.4m、短軸長1.2mの枠が構築されていたものと考えられる。埋土は遺物は遺構上面から井戸枠検出までを上から425、425黒色土、425灰色土の順で取り上げ、以下は井戸枠内（上から425黄色土、425茶黒色土、425黒色粘土）、井戸枠裏込め（上から425茶褐色土、425灰黒色粘土）に分かれる。出土遺物をみると、井戸枠内堆積土出土遺物ならびに井戸構築土出土遺物の時期は平安時代中期（大宰府編年IX期＞X期）に位置付けが可能で、平安時代中期に形成され同一様相下において廃絶したものと考えられる。

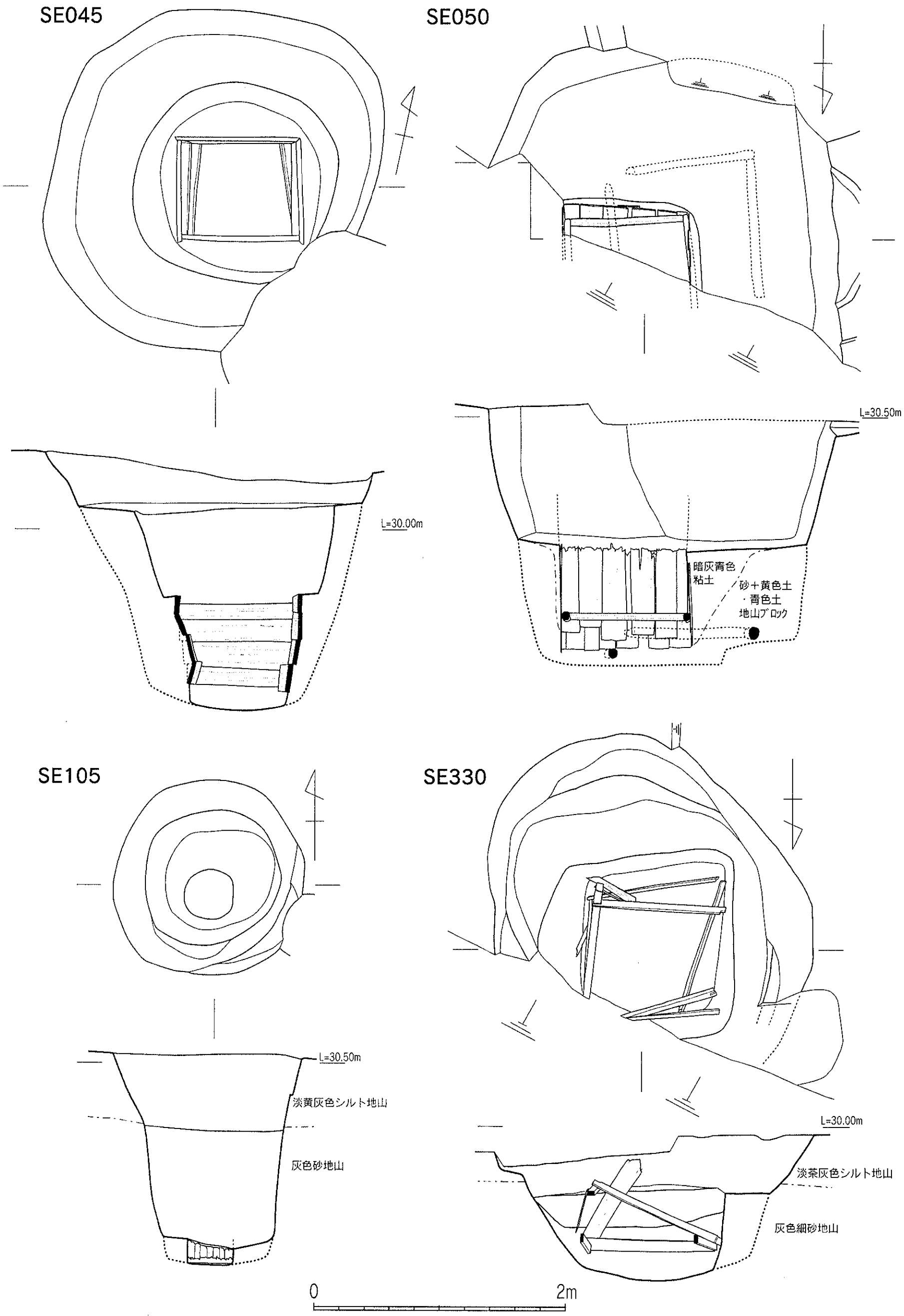


Fig.16　SE045・050・105・330実測図（1/60）

SE435（Fig.17）

調査区中央やや西よりで検出した井戸で、遺構規模は長軸長1.96m、短軸長1.62mを測り、内部に板材を井戸枠材とし、最下部に曲げ物によって水澄まし部分を構築している。枠は正方形を呈していたものと推定されるが、枠材については、井戸西側からの崩落により崩壊しかかっており、他の辺に関し

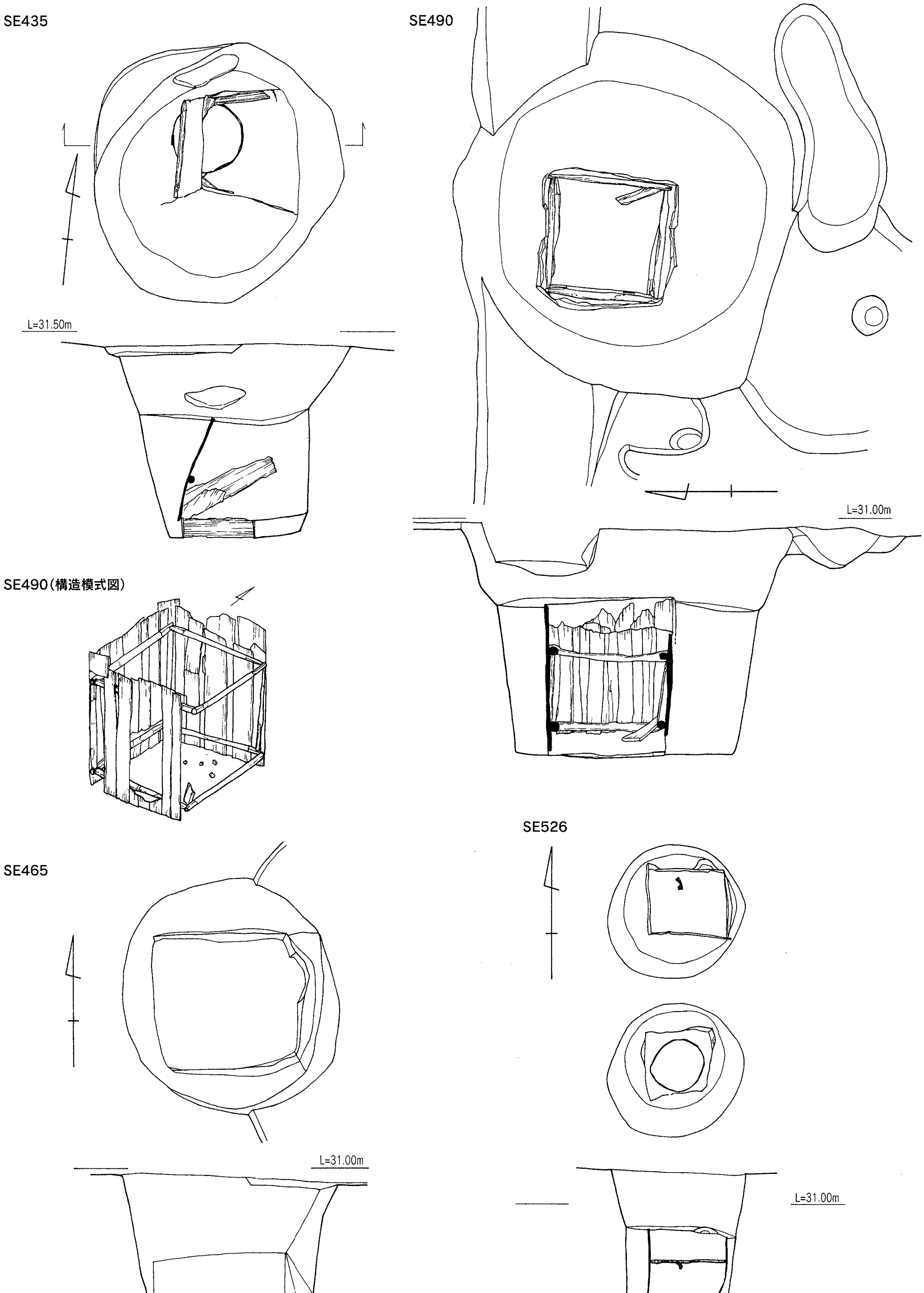


Fig.17　SE435・465・490・526 実測図（1/40）

ては残存していなかった。仮に井戸西側で確認した横桟木の長さが枠の一辺の規模とすると、0.8m四方の枠であったと推定できる。残存する深さは1.44mを測る。遺物は遺構上面から井戸枠検出までを上から435、435灰茶色土の順で取り上げ、以下は井戸枠内（上から435茶灰色粘土、435暗黒灰色粘土）、井戸枠裏込め（上から435灰黄色土、435暗灰色粘土）で取り上げる。出土遺物をみると、井戸枠内と井戸構築土に様相差は認められず、平安時代後期（大宰府編年XII期）に構築され、同一様相下において廃絶したものと考えられる。

SE465（Fig.17）

調査区中央で検出した。SE470を切る遺構で、調査区のほぼ中央部分で検出した。明確な井戸枠材は確認できなかったが、堆積土の差から方形の井戸枠を有するものと推定できる。井戸枠内堆積土は灰黒色粘土、井戸構築土である裏込め土は灰色砂質土であった。遺構規模は、長軸長1.78m、短軸長1.64mを測る略円形の掘り方を有し、内部に一辺1.1mの方形井戸枠を有していた。残存する深さは1.22mを測る。遺構最下部に枠板材のはめ込み痕跡を確認している。出土遺物をみると、井戸枠内堆積土出土遺物ならびに井戸構築土出土遺物の帰属様相に顕著な差は認められず、平安時代後期（大宰府編年XII期）に構築され、同一様相下において廃絶したものと考えられる。

SE470（Fig.18）

調査区中央で検出した。明確な井戸枠は観察できなかったが、井戸枠と想定できる堆積土が方形に観察できたことから井戸を想定して調査を実施した。しかし調査を進めるにつれて、最下層に樹木堆積層が確認でき、結果として当初は廃棄物処理のための土坑であったのではないかと考えられる。長軸長3.02m、短軸長2.8m、残存する深さ1.47mをそれぞれ測る。土坑基底部には木質の堆積薄層が観察でき、木質のみ残存していたが、当初は有機質などの生活残渣が堆積していた可能性も否定できない。同様な状況は後述するSK475でもみられ、生活残渣廃棄のために開放されていたことから、周辺の樹木が自然堆積したものと考えられる。その後黄色土塊が混入する茶色土や黒色土が堆積していることから、人為的な埋め戻し行為、井戸構築行為が為された可能性がある。遺物は遺構上面から井戸枠検出までをSE470で取り上げ、以下は井戸枠内（470茶色土（黄色土塊を含む））、井戸枠裏込め（470黒色土）、廃棄土坑堆積土（上から470フショク土、470黒茶色土、470フショク土2、470灰色砂土）で取り上げる。なお各層出土遺物からは時間的な様相差は認められず、平安時代後期（大宰府編年XII期）において構築および廃絶時期を求めることができるものと考えられる。

SE490（Fig.17）

調査区中央で検出した。枠材の残存具合が良好であったもので、長軸長2.7m、短軸長2.44mを測る略円形のもので、内部に一辺1.0mで方形を呈する井戸枠が構築されていた。縦方向に板木を枠材として立て、枠内の支えとして二段に横桟木を構築している。検出した井戸枠材の外側に上位からくると考えられる板材が同様に縦方向に組み込まれており、検出した深さ以上のものであったことをうかがわせる。なお井戸枠材は、材同定の結果、針葉樹（スギ）と広葉樹（サカキ・ユズリハ）の各植物が使用されていたことが明らかとなっている。井戸最下部は、自然礫が観察され、水澄まし部として利用される曲げ物は確認できなかった。基盤層は、上位が暗茶灰色砂層で井戸の下位へゆくにつれて粒度が粗くなっている。現況では井戸最下部から湧水があった。なお裏込め除去を行った結果、掘り方東側において階段状の構造が観察され、井戸構築時の足場として活用された可能性を残している。遺物は遺構上面から井戸枠検出までをSE490で取り上げ、以下は井戸枠内（上から490灰色粘土、490白色粗粒砂）、井戸枠裏込め（上から490黒灰色土、490暗青灰色土）で取り上げる。出土遺物であるが、井戸枠内出土遺物と井戸構築土出土遺物に時間的な様相差は認められず、平安時代前期末頃（大宰府編年VIII期）が

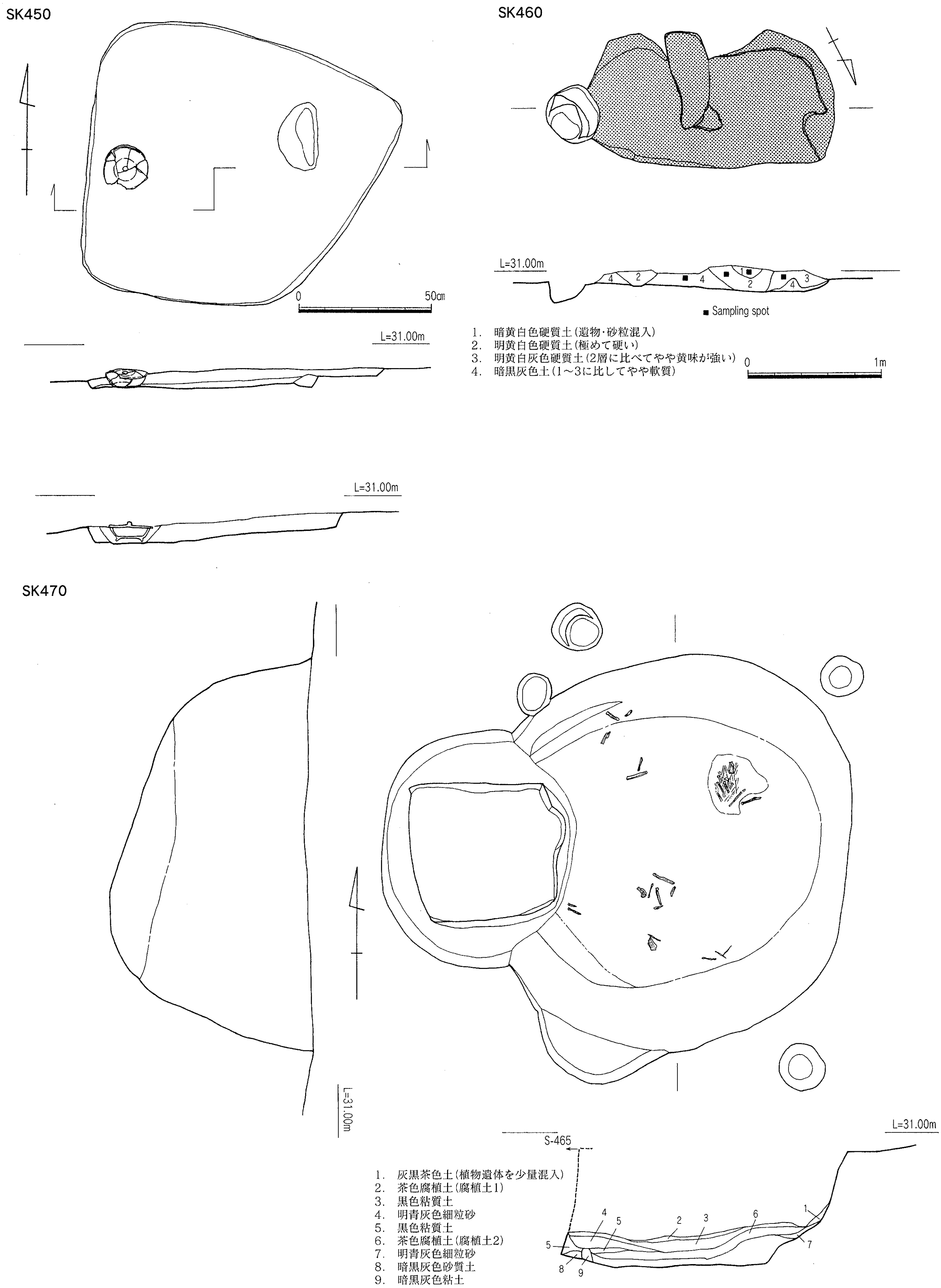


Fig.18 SE470・SK460 実測図 (1/40)、SK450 実測図 (1/20)

井戸構築ならびに廃絶時期と考えられる。なお本遺構はSD455をはじめ、周辺の遺構全てに切られている。

SE526 (Fig.17)

調査区中央にて検出したもので、遺構規模直径約1.0mを測り、狭小な井戸であった。内部には長軸長0.6m、短軸長0.5mの長方形を呈する井戸枠が構築され、最下部には直径約0.4mを測る曲げ物が水澄まし材として埋置されていた。なお検出面から約0.7mの箇所で流れ込んだ状況で木製櫛(Fig.72-414)が出土している。残存する深さは1.1mであった。遺物は遺構上面から井戸枠検出までをSE526で取り上げ、以下は井戸枠内(526黒茶色粘土)、井戸枠裏込め(526灰色砂)で取り上げる。出土遺物をみると、井戸枠内からの出土遺物から平安時代中期末(大宰府編年XI期)に埋没したものと考えられる。井戸構築土出土遺物からは時間的な位置付けは困難であった。

SE850 (Fig.19)

平面円形を呈す。掘形は長軸長1.90m、短軸長1.64m、検出面から深さ2.15mである。井戸枠は方形に板材を組み、集水施設として結筒が使用されている。方形枠組は長軸長1m、短軸長0.9m、深さは立板の残存長で0.54mである。枠組みは立板と横桟によってなされており、横桟はホゾ組みである。結桶の直径は上部で直径58cm、下部で62cm、深さは64cmである。残りは非常に悪かったが結桶の外面に三条のタガを確認できた。井戸枠に対して結筒はやや東によった位置に据えられている。また井戸枠の枠木底面より結桶部分は10cmばかり突出している。結桶の底面には礫が若干敷かれていた。出土遺物より、掘削・埋没時期は11世紀末～12世紀前半(大宰府編年XII期)とみられる。

SE870 (Fig.19)

平面長方形を呈す。掘形も方形段掘りである。掘形の長軸長2.38m、短軸長2.08m、深さ1.84m。井戸枠は方形板組みで立板・横桟・隅柱が確認できる。出土状態で西より土砂が流入して井戸枠が崩壊したことが確認できる。集水施設として曲物を設置している。曲物は残存長で直径38cm、深さ22cm。出土遺物より、掘削・埋没時期は11世紀中頃(大宰府編年XI期)と推定される。

SE910 (Fig.19)

平面円形を呈す。掘形は長軸長1.6m、短軸長1.44m、深さ2.06m。井戸枠は方形に板材を組む。立板は東側に残存せず、南側に2枚、東側は1枚板、北側は3枚が残る。横桟は丸木を半裁して面取りし、立板に密着させている。底面中央部に集水施設である曲物を据えたと考えられる直径38cm、深さ10cmの窪みがあるが、曲物本体は検出できなかった。遺物として横櫛、糸巻きなど多種の木製品が出土している。出土遺物より、掘削・埋没時期は11世紀末～12世紀前半(大宰府編年XII期)と考えられる。

SE930 (Fig.19)

平面円形を呈す。掘形は長軸長1.28m、短軸長1.18m、深さ1.68m。井戸枠は方形に板材を組む。立板は残存するものの非常に残りが悪く腐っていた。底面中央部に集水施設である曲物を据えたと考えられる直径48cm、深さ18cmの窪みがあるが、曲物本体は検出できなかった。出土遺物より、井戸枠内埋土から白磁片が出土していることから埋没年代は12世紀代と考えられ、掘削時期については隣接する井戸群の掘削・埋没時期を考えると時期差があまりないため、この井戸も12世紀に掘削されたと考えられる。

第1遺構面検出道路

SF180

調査区中央で検出した東西道路とみられる遺構で、SD455・SD485およびそれに挟まれた空間が該

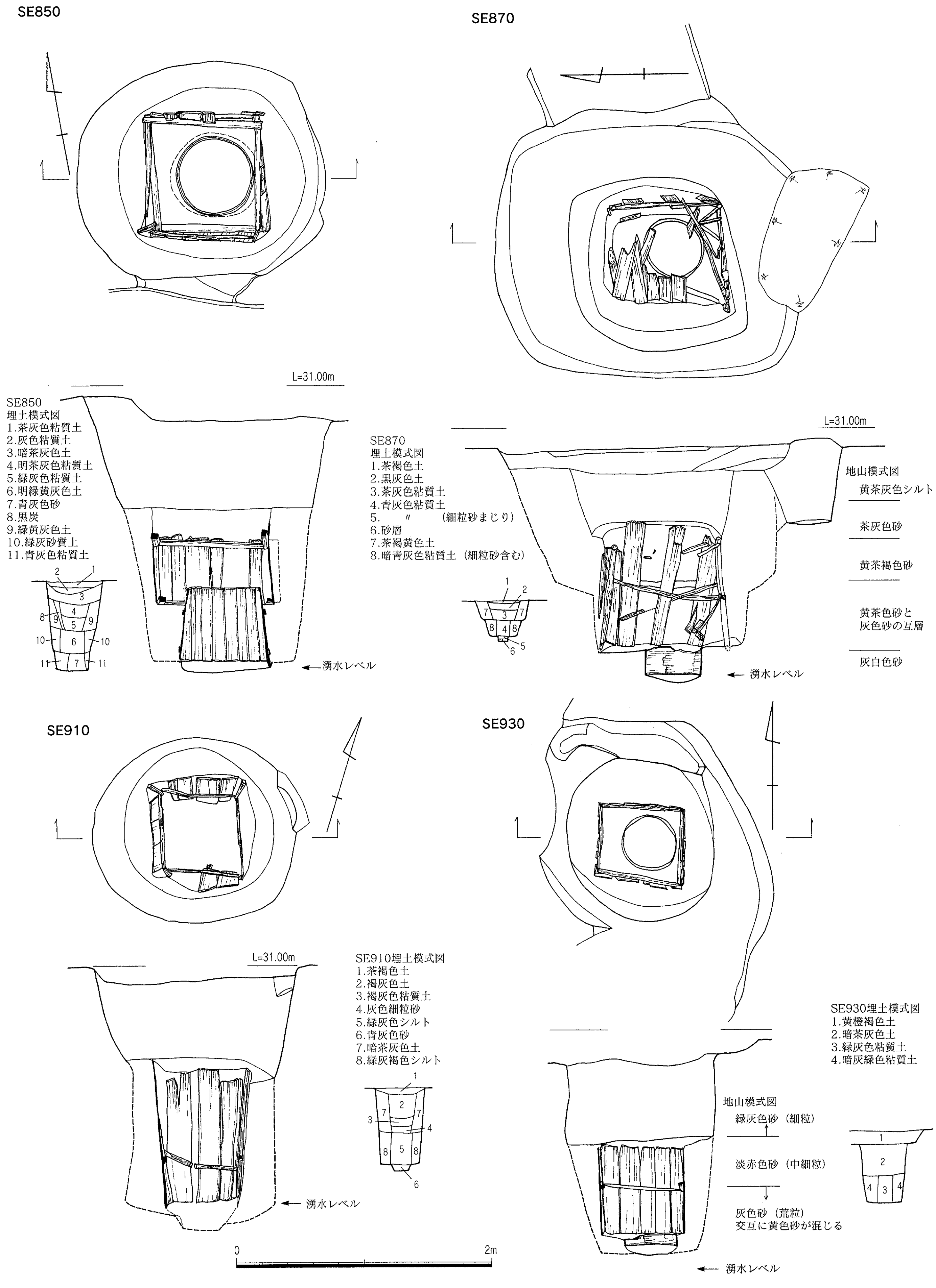


Fig.19 SE850・870・910・930 実測図(1/40)

当する。これまでに検出されている条坊関連道路の事例では2条の溝にて挟まれた空間が道路として認定されているものが多いが、これを勘案するとこの空間も道路となる可能性が考えられる。東西に走行し、条路または条間路などに該当するとみられるが、SF185より東には伸びていないようである。遺構の切りあいから平安時代前期に埋没した井戸（SE490）に後出すること、埋没時期が両者とも平安時代後期（大宰府編年XII期）であることから、政庁III期に施工されたと考えられる。なおこれより南側にSD510（815）が確認されているが、対になる平行溝が確認できていないことから、当該溝は宅地内の排水溝ないしは、自然流路としての性格が付与できるものと考えられる。

SF185

調査区中央やや東寄りで検出した南北道路とみられる遺構で、SD480・SD505およびそれに挟まれた空間が該当と考えている。南北に走行する。遺構の切りあい状況が著しく、明確に対になる関係、道路空間としての許容範囲などの条件整備に躊躇する内容となっており、道路と認定するには消極的にならざるを得ないが、2条平行して検出されていることから何らかの空間確保意図が読み取れ、宅地境界道路としての性格が考えられる。

SF190

調査区の中央に位置する。関連する遺構は第1遺構面検出のSD405・400・430、第2遺構面検出のSD275という4条の溝で、いずれも南北に走向している。SD275は遺構面が異なるが、埋土中に大宰府編年XI～XII期頃の遺物を含むことから第1遺構面に帰属すると考えている。当該遺構周辺は他の区域と比べて小穴等の遺構が極端に少ない様相にあり、これらの溝群は道路側溝に該当するとみられる。路面部分は削平を受けて消失している。

道路に伴う遺物は4条の溝の埋土から出土したものである。SD430は平安時代前期末（大宰府編年VIII期）までの遺物を含み、SD405は平安時代中期までの遺物を含む。SD400は平安時代中期の遺物を主体とするが、平安時代後期の遺物も含んでいる。これは南側の井戸SE435の遺物が混入していることも想定され、明らかにし難い。SD275は平安時代中～後期の遺物を含む。道路の基盤層は灰色土層であることから、敷設上限は平安時代前期頃に求められる。この4条の溝がどのように関連していつ道路側溝として機能したのかは明らかではないが、平安時代前期末～中期まで機能した道路側溝にSD430とSD405が（SD400が含まれる可能性もある）、その後側溝がSD400・SD275に移り、平安時代中期末～後期初め（大宰府編年XI～XII期）頃までに廃絶した可能性がある。しかし調査の観察に問題が残り、詳細については明らかにし難い。

後述の「VI. まとめ」で述べるように、左郭における条坊関連遺構例も増加しており、本遺構が政庁II期から政庁III期にかけての左郭一坊路である蓋然性は高いと判断している。

SF215

調査区東部の東寄りに位置し、北東方向から南西方向へ伸びる溝が２条検出された。SD880とSD890という２つの溝に挟まれた空間を道路として考えた。その理由としては、SD880とSD890に挟まれた空間内に於いて、同時期に併存する遺構が少ないこと、両溝の埋土が共に灰茶色土と共通であること等からお互いに関連している可能性が高いためである。ただし、路面部は削られており検出していない。両溝の埋没年代から11世紀末～12世紀前半（大宰府編年XII期）以前には道路として機能していたと考えられる。ただ、道路認定が十分とはいえないため、後考をまちたい。

SF300

調査区の最西端に位置する、政庁II期の推定朱雀大路である。関連する遺構は、政庁II期の推定朱雀大路東側溝推定ライン上に位置する溝SD001のみである。SD001の項でも述べたように、側溝埋没土

中の遺物は奈良時代後半～平安時代前期を下限としているが、埋土の残りが悪いこともあり、時期の確定には十分とは言い難い。路面部分は後世の削平により完全に消失している。削平後に堆積したSX024には平安時代前期の遺物を下限とする遺物が含まれているが、調査範囲が狭小であるため削平時期を決定することは出来ない。なおこれまでの調査例から知られる敷設時期をも踏まえて考えると、本来なら第2遺構面の遺構群とともに扱われるべきであろう。

第1遺構面検出土坑

SK005

調査区西端に位置する。東西に長軸をもち、東端は調査区外に伸びている。検出長1.64m、検出幅1.18m、深さ0.15mを測る。埋土は粘質の強い暗灰色粘土で、滞水しつつ堆積したことも想定される。埋土中から平安時代後期前葉（大宰府編年XIII期頃）を下限とする遺物を出土している。

SK015（Fig.20）

調査区西端に位置する。大型ではあるが浅い土坑で、東西に長軸を持つ。検出長5.9m、検出幅2.75m、深さ約0.3mを測る。埋土は上から黒灰色土、黄茶色土の順に堆積している。下面から小穴群が検出されているが、別遺構とみられる。ここから平安時代後期の遺物を出土している。なお、SK005とSK015は東西に並んで走行しており、この延長上に土坑が連続している可能性も考える必要があろう。

SK163（Fig.20）

調査区西側に位置する。平面プランは東西に長軸をもつ四角形で、長軸2.1m、短軸1.5m、深さ0.33mを測る。埋土は、上位に暗茶色土が、下位は東側に淡茶褐色土、西側に暗茶褐色土が堆積する。遺物が大量に出土しており、また廃棄土坑とみられる。ただ出土遺物に時期差があり、平安時代前期（大宰府編年VI～VII期）のものと、平安時代中～後期のものの二者がある。下層に平安時代中～後期の遺物を含んでおり、また基盤層が灰色土層であり9世紀代に遡る遺構とするには難しいところもあることから、遺構自体は平安時代中～後期のものとみられる。

SK415

調査区中央やや西よりで検出した浅い土坑で、地形凹みに堆積した包含層の可能性もある。下位から小穴を多数検出している（SX464）。

SK440（Fig.21）

調査区中央やや西よりで検出した土坑で、調査区外へ約半分ほどを広げるものと推定される。遺構規模は、計測可能軸長で2.0m、残存する深さは0.72mを測る。遺物は散在的に出土しており、土層観察から南西方向からの自然堆積と考えられる。

SK450（Fig.18）

調査区のほぼ中央にて検出した浅い凹み状の遺構で、須恵器の坏蓋が埋置された状況で検出された。出土状況から坏蓋埋納遺構と考えられ、隣接してSB535が建築されていることを考慮すると地鎮具の可能性がある。ただし、坏蓋内には何も残っていなかった。遺構規模はこの須恵器坏蓋周辺において遺構検出を試みたが、平面形状として認識できなかった。しかし土層上ではこの坏蓋を囲うような土層が確認できてお

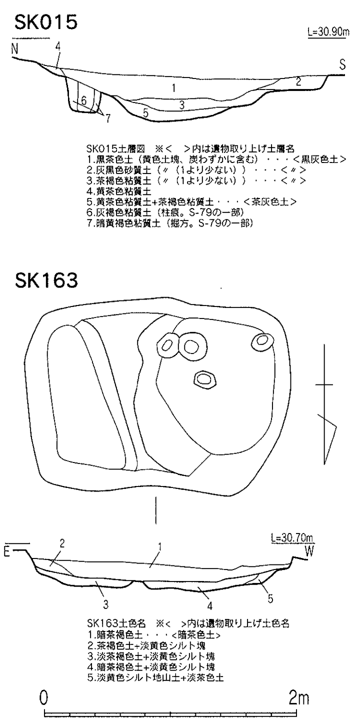


Fig.20　SK015・163実測図（1/60）

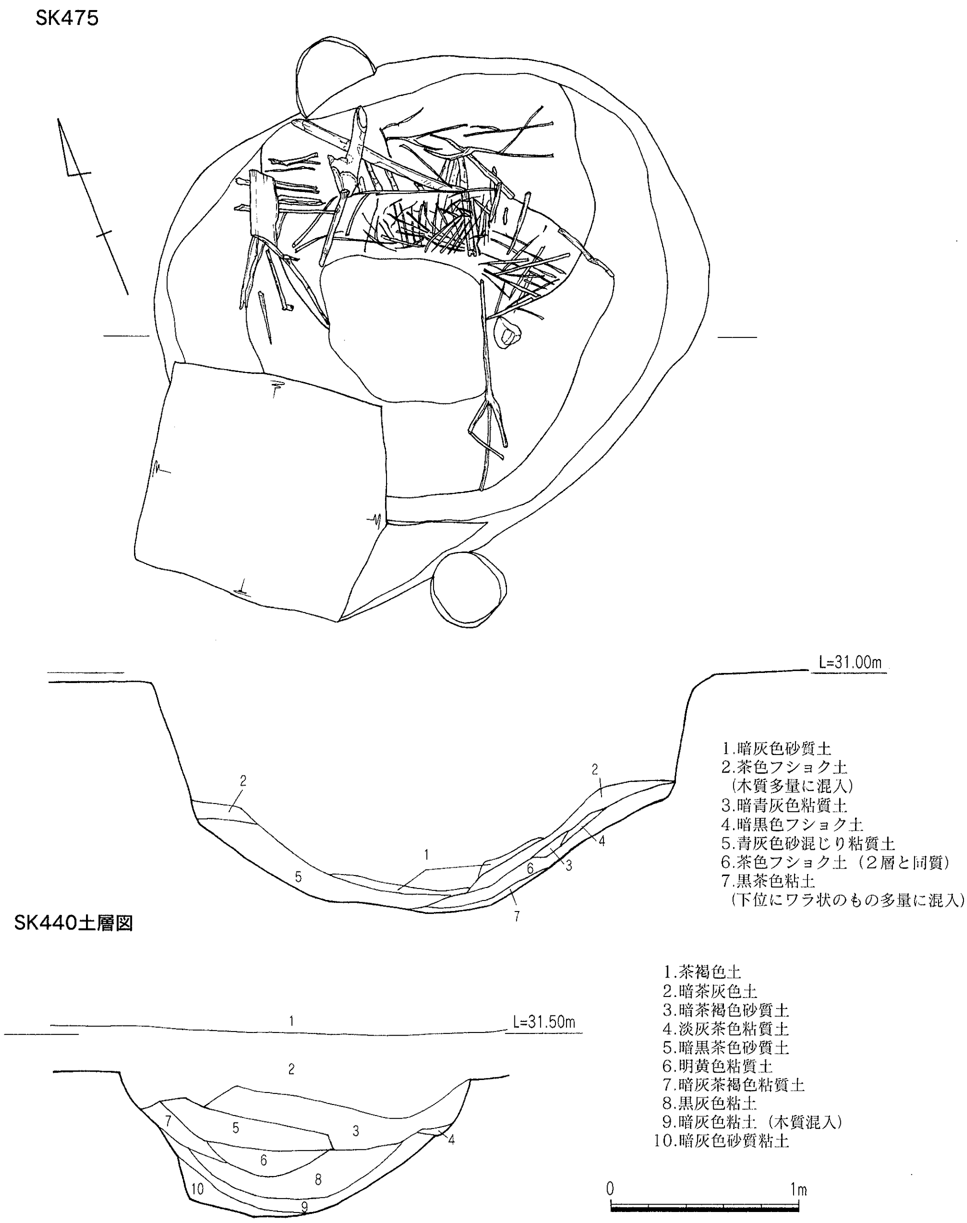


Fig.21　SK440土層図・SK475 実測図（1/40）

り、小穴への埋置の可能性も否定できない。

SK460（Fig.18）

調査区のほぼ中央部にて検出した黄白色粘土が堆積した土坑で、性格不明ながら周辺基盤層とは異質な堆積土であったことから、記録を行った。土層観察情報からは積極的な人為性を看取できる根拠は提示し難い。土質に硬軟があり、下位は軟質であるが表層部分は乾燥のためか硬質であった。性格を決し難いことから、自然科学分析に委ねた。意図としては建物壁材、土器原料土などが想定されたため材質同定を行った。残存遺構規模は、長軸長1.84m、短軸長1.02m、層厚0.2mを測る。

SK475（Fig.21）

調査区中央やや東よりで検出した土坑で、撹乱土坑によって一部欠失しているが、その他は残存状況が良好であった。遺構規模は、長軸長2.93m、短軸長2.44m、残存する深さは1.22mを測る。当初井戸を想定して調査を進めたが、明確な井戸枠ないしは井戸枠堆積層が確認できなかった。したがって当該遺構は、先述したSE470とは異なり生活残渣廃棄土坑として考えた方が良いものと考えられる。なお土坑基底部には多くの木質とともに、将棋駒を墨書した木札が出土している。基底部にて出土した樹木には、人為性が看取できるものはなく、先のSE470同様に残渣廃棄土坑として開放されていた際に、自然堆積したものと推定される。なお調査時の遺物取り上げは、上位より475、475茶灰色砂質土、475黒色粘土、475灰色砂質土、475腐植土、475暗灰色砂質土の順である。

SK522

調査区中央やや東寄りのBJ44地区で検出した土坑状の遺構で、前述したSD445と連続するものと推定される。ここから出土した遺物から埋没時期は、平安時代前期に求めることができる。

SK676

調査区東側中央寄りのBE34地区で検出した土坑状の遺構である。ここから平安時代中期の遺物が出

土している。

SK677

調査区東側中央寄りのBG34地区で検出した土坑状の遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SK679

調査区東側中央寄りのBE34地区で検出した土坑状の遺構である。ここから平安時代中期の遺物が出土している。

SK800

調査区東部の西寄りに位置する。北側は調査区外に展開するため全容は明らかではない。東西長3.3m、南北長2.3m、深さ0.22m。段状に落ち込む。埋土は暗茶灰色土が全面に広がる。東側の一段下がる落ち込みは、古い堆積順に黄灰色粘質土、灰色粘質土、黒青色粘質土となる。出土遺物より平安時代後期には埋没していることが考えられる。

SK873

調査区東部の東寄りに位置する。長軸長1.6m、短軸長0.6m、深さ7cm。中央床面に一段掘り下がって直径0.4m、深さ23cmの小穴がある。出土遺物から平安時代に埋没したと考えられる。

第1遺構面検出その他の遺構

第1遺構面検出小穴

SX029

調査区西端、BX68地区で検出した小穴群である。出土遺物から奈良～平安時代の遺構とみられ、この中の小穴から畿内系の黒色土器A類椀cが出土している。

SX048

調査区西端、BTBU65～68地区で検出した小穴群である。出土遺物から奈良～平安時代の遺構とみられ、この中の一つから篠窯産の須恵質土器鉢が出土している。

SX039

調査区西端、BW67地区で検出した。SB010の柱穴の一つである。ここから平安時代中期の遺物が出土している。この中に赤紫色をした遺物が出土しているが、分析の結果、チタン金属を主成分とするものと判明した。詳細は、後述の自然科学分析を参照していただきたい。

SX054

調査区西端、BV66～67地区で検出した小穴群である。出土遺物から奈良～平安時代の遺構とみられ、ここから平井銘の文字瓦が出土している。

SX057

調査区西端、BV66地区で検出したSB020の柱穴の一つを含む小穴群である。出土遺物は奈良時代後半が下限で、ここから墨書した須恵器坏×鉢が出土している。

SX064

調査区西側、BU63地区で検出したSE035に切り込む小穴である。出土遺物から平安時代中期末～後期初頭（大宰府編年XI期）埋没した遺構とみられ、ここから石鍋が出土している。

SX097

調査区西側、BS64地区で検出したSD055上の小穴である。出土遺物から平安時代中～後期埋没の遺構とみられ、ここから畿内に系譜をもつとみられる土師器坏a×小皿aが出土している。

SX101

調査区西側、BT64地区で検出したSD055に切り込む小穴群である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX138

調査区西側、BPBR59～60地区で検出した小穴群である。出土遺物は奈良時代～平安時代後期のもので、この中の一つから、平安時代中期において近畿から瀬戸内・山陰にみられる器形をした土師器椀が出土している。

SX139

調査区の西側、BQ60～61地区で検出した小穴である。黒色土埋土で土器片を多く含む。出土遺物は平安時代後期を下限とする。ここから棒状のものを押し当てた痕跡がある焼土塊が出土している。

SX153

調査区の西側、BR60地区で検出した小穴群である。出土遺物は奈良時代～平安時代後期のもので、この中の一つから鉄製刀子が出土している。

SX161

調査区の西側、BR59地区で検出したSB080の柱穴に切り込む小穴群である。ここから土師器小皿aが出土している。

SX173

調査区の西側、BOBP55地区で検出した小穴群である。出土遺物は平安時代のもので、この中の一つから灰釉陶器椀が出土している。

SX179

調査区の西側、BO55地区で検出した小穴群である。出土遺物は平安時代中～後期のもので、ここから京都系の小皿が出土している。

SX182

調査区西側、BN55地区で検出した小穴である。この埋土中には平安時代後期頃の土師器の細片が多量に含まれていた。

SX183

調査区西側、BN55地区で検出した小穴である。この埋土中には平安時代後期初頭（大宰府編年XII～XIII期）の土師器の細片が多量に含まれていた。

SX187

調査区西側、BOBN56地区で検出した小穴群である。出土遺物は7世紀末頃のもので、ここの中の一つから畿内系暗文土器が出土している。

SX197

調査区西側、BN56地区で検出した小穴である。

SX208

調査区西側、BP57地区で検出した小穴である。出土遺物は奈良時代以降のものである。

SX216

調査区西側、BP57地区で検出した小穴である。出土遺物は奈良時代のもので、ここから畿内系暗文土器が出土している。

SX219

調査区西側、BO57地区で検出した小穴である。出土遺物は飛鳥時代のものである。周辺は包含層もほとんどない状況にあるため、第2遺構面ないし第3遺構面に帰属する遺構とみられる。

SX238

調査区東側、BC23地区で検出した小穴である。出土遺物は平安時代のもので、ここから京都系の緑釉陶器椀が出土している。

SX477

調査区西側、BN54地区で検出した小穴である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX481

調査区中央、BK47地区で検出した小穴である。ここから平安時代中期の遺物が出土している。

SX506

調査区中央、BK45地区で検出した小穴群である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX518

調査区中央、BJ46地区で検出した小穴である。ここから平安時代の遺物が出土している。

SX519

調査区中央、BJ45地区で検出した小穴群である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX597

調査区東側、BI39地区で検出した小穴群である。ここから奈良時代末の遺物が出土している。

SX707

調査区東端で検出した小穴群である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX721

調査区西側で検出した小穴群である。

SX802

調査区東部の西寄りに位置し、遺構面に完形の土師器甕が底部を底に正立した状態で検出された。この土器に伴う堀方は認められなかったため直接、土器を地面に据え置いたものが埋没したものと考えられる。出土遺物より奈良時代後期に埋没したと考えられる。

SX805（Fig.22）

調査区東部の西寄りに位置する小穴である。SK800と切合い関係がある。小穴は南北長0.72m、東西長0.72m、深さ0.33mで、中央に直径0.15m、深さ0.04mの窪みがある。多量の土師器小皿a、丸底坏a、蓋c、器台が検出された。土器の出土について、規則性の有無の検証のために、人為的にまとまりとして認識できる段階ごとに、実測をしながら遺物を取り上げていった。その人為的な面をそれぞれ1～6面として図示している。

この観察から判明したことは、出土した土器の裏表に規則性はないこと、土器は水平に近い状態で出土していることで、土器を直立または、重ねるなどの行為は見受けられなかった。よって、埋納ではなく廃棄されたものと考える。

出土遺物より遺構の埋没年代は11世紀末～12世紀前半（大宰府編年XII期）と考えられる。

SX819

調査区東部の西寄りに位置する小穴群である。碁石が出土している。

SX864

調査区東部のSD880の底面から検出された小穴群である。

SX867

調査区東部の中央に位置する小穴群である。

SX881

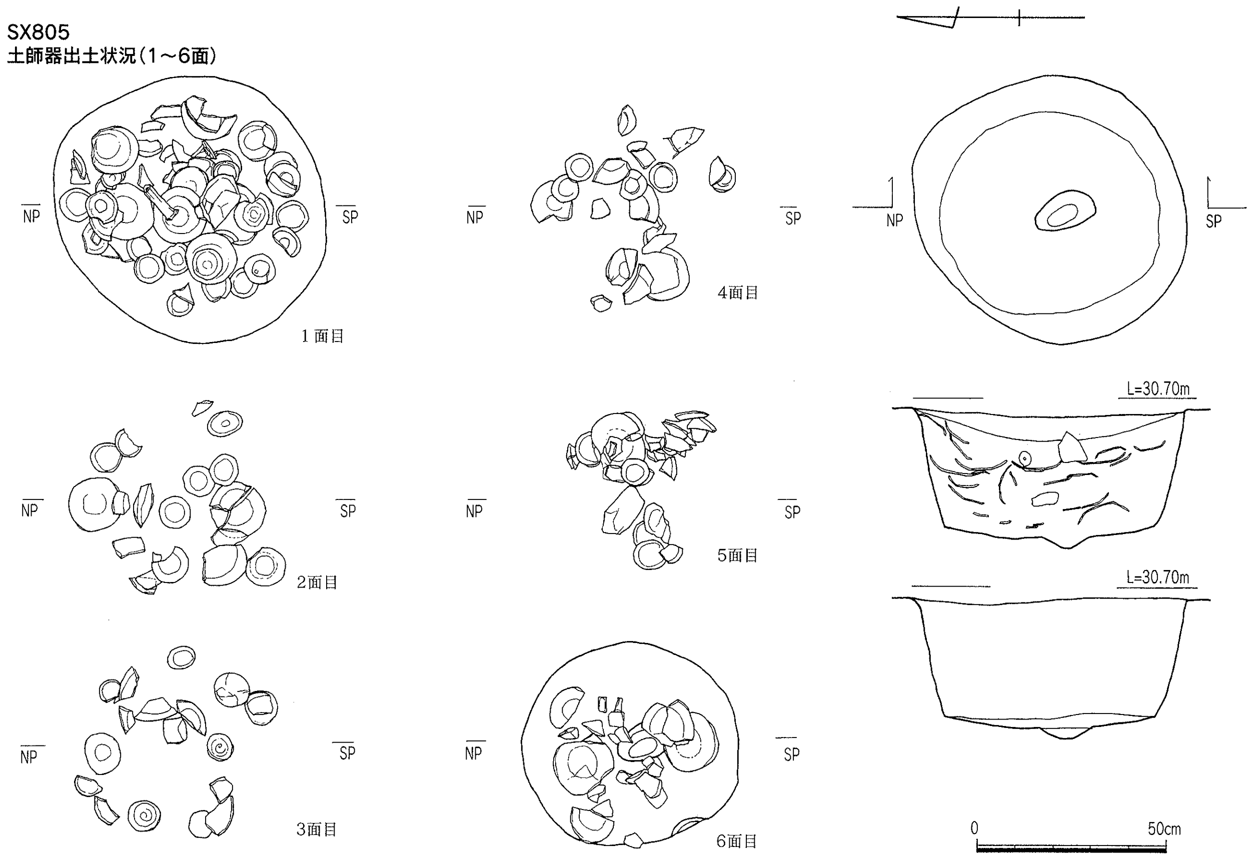


Fig.22　SX805 実測図（1/20）

調査区東部の東寄りに位置する小穴群である。たまり状遺構（S-879）の底面から検出された。

SX883

調査区東部の東寄りに位置する小穴群である。たまり状遺構（S-882）の底面から検出された。

SX897

調査区東部の中央に位置する小穴である。

第1遺構面その他の遺構

SX302

調査区東部の東寄りの22～23ラインに位置する窪みである。埋土は明茶褐色土。南北長8.3m、幅4.5m、深さ0.15m。床面には窪み状の落ち込みが点在する。埋土に切り込む南北方向の幅0.4～0.6mの小溝群や、埋土を除去した後に窪みの東端に南北溝SD965が検出されたことを踏まえると、この窪みは南北道路として利用されていた可能性が考えられる。窪みは調査区外へ伸びているため、今後、隣接地を調査する際は道路遺構の存在の可能性に留意して調査をしていく必要がある。出土遺物より遺構の埋没年代は14世紀中頃～後半（大宰府編年XX期）と考えられる。

SX406

調査区中央西側、BK49地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代中期末（大宰府編年XI期）の遺物が出土している。

SX428

調査区中央西側、BP53地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土してい

る。

SX484

調査区中央、BK44地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX487

調査区中央、BL45地区で検出した凹み遺構である。SD483に先行する。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX488

調査区中央、BJ45地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX489

調査区中央、BI45地区で検出した。包含層の取り残しとみられる。ここから奈良時代の遺物が出土している。

SX502

調査区中央、BJ47地区で検出した。SE435の埋土の一部が残っていた可能性がある。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX509

調査区中央、BK46地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代の遺物が出土している。

SX511

調査区中央、BL46地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期前葉（大宰府編年XII期）頃の遺物が出土している。

SX523

調査区中央、BJ44地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期後半（大宰府編年VII×VIII期）頃の遺物が出土している。

SX541

調査区中央、BJ41地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期の遺物が出土している。

SX552

調査区中央、BI43地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX572

調査区中央、BK44地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX601

調査区中央、BI39地区で検出した凹み遺構で、SE470の上層である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX602

調査区中央、BI40地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX612

調査区中央、BG39地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期初め頃の遺物が出土している。

SX617

調査区中央東側、BH36地区で検出した凹み遺構である。SK475の埋土に切り込む。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX633

調査区中央、BI38地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代前半の遺物が出土している。

SX636

調査区中央、BG38地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX639

調査区中央、BI39地区で検出した凹み遺構である。ここから奈良時代後半の遺物が出土している。

SX642

SD455溝の遺構輪郭が明瞭でないことから、機械的な検出作業時に検出した土器群で、SX636および下位に堆積しているSX636黒色土を除去した時点で確認した。土器群が集積した状況で確認でき、埋置状況というよりは片付けによって集積された印象を受ける。

SX643

調査区中央、BG38地区で黒茶色土層除去後に検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX647

調査区中央、BG38地区で検出した凹み遺構である。SD455を切っている。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX649

調査区中央、BG37地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期後半（大宰府編年VII×VIII期）頃の遺物が出土している。

SX663

調査区中央東側、BG34～35地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期後葉（大宰府編年VIII期）頃の遺物が出土している。

SX664

調査区中央東側、BG36地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期の遺物が出土している。

SX653

調査区中央、BG39地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代前期（大宰府編年VIB期頃）の遺物が出土している。

SX672

調査区中央東側、BE35地区で検出した凹み遺構である。ここから古代の遺物が出土している。

SX697

調査区中央東側、BE33地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX701

調査区中央東側、BE33地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代の遺物が出土している。

SX709

調査区東端、AV14地区で検出した凹み遺構である。ここから平安時代後期の遺物が出土している。

SX894

調査区東部の中央に位置するたまり状遺構である。出土遺物から奈良時代に埋没したことがわかる。

（2） 第2遺構面検出遺構

第2遺構面検出柵列

SA320

調査区中央の、南北道路SF200と掘立柱建物SB290の間で検出した、南北に走向する柵列である。3間分検出し、検出長は約6.6mを測る。基盤層は茶灰色粘土層である。走向は北に対してやや大きく西に振れており、SF200やSB290と比べても振れが異なる。偶然に小穴が並んでいるものを柵列と認識してしまった可能性もあり、今後の延長上の調査に期待したい。

SA975

調査区東部の西寄りに位置する。南北方向で2間検出した。柱穴間で検出長3.6m、柱間は1.8mを測る。出土遺物より奈良時代の廃絶と考えられる。

SA985

調査区東部の西寄りに位置する。東西3間確認した。検出長4.5m、柱間は西より1.5m、1.3m、1.3m。出土遺物から埋没年代は奈良時代と考えられる。

SA990

調査区東部の西寄りに位置する。東西2間、南北1間を確認している。調査区外に展開しているため、南側の調査が進めば、掘立柱建物の可能性もある。東西長4.3m、南北長2.1m以上、柱間は2m。出土遺物より遺構の廃絶時期は奈良時代と考えられる。

第2遺構面掘立柱建物

SB250 (Fig.23)

調査区中央西側で検出した東西棟である。東西5間、南北2間以上の建物で、東から1間の位置に間仕切りの床束を有すると考える。東西10.81m、南北5.0m以上を測る。出土遺物は7世紀末頃のものが大半を占めるが、わずかに8世紀代の遺物が含まれること、基盤層の茶褐色粘土層が8世紀中～後半頃の整地層であることから、8世紀後半の遺構とみられる。

SB290 (Fig.24)

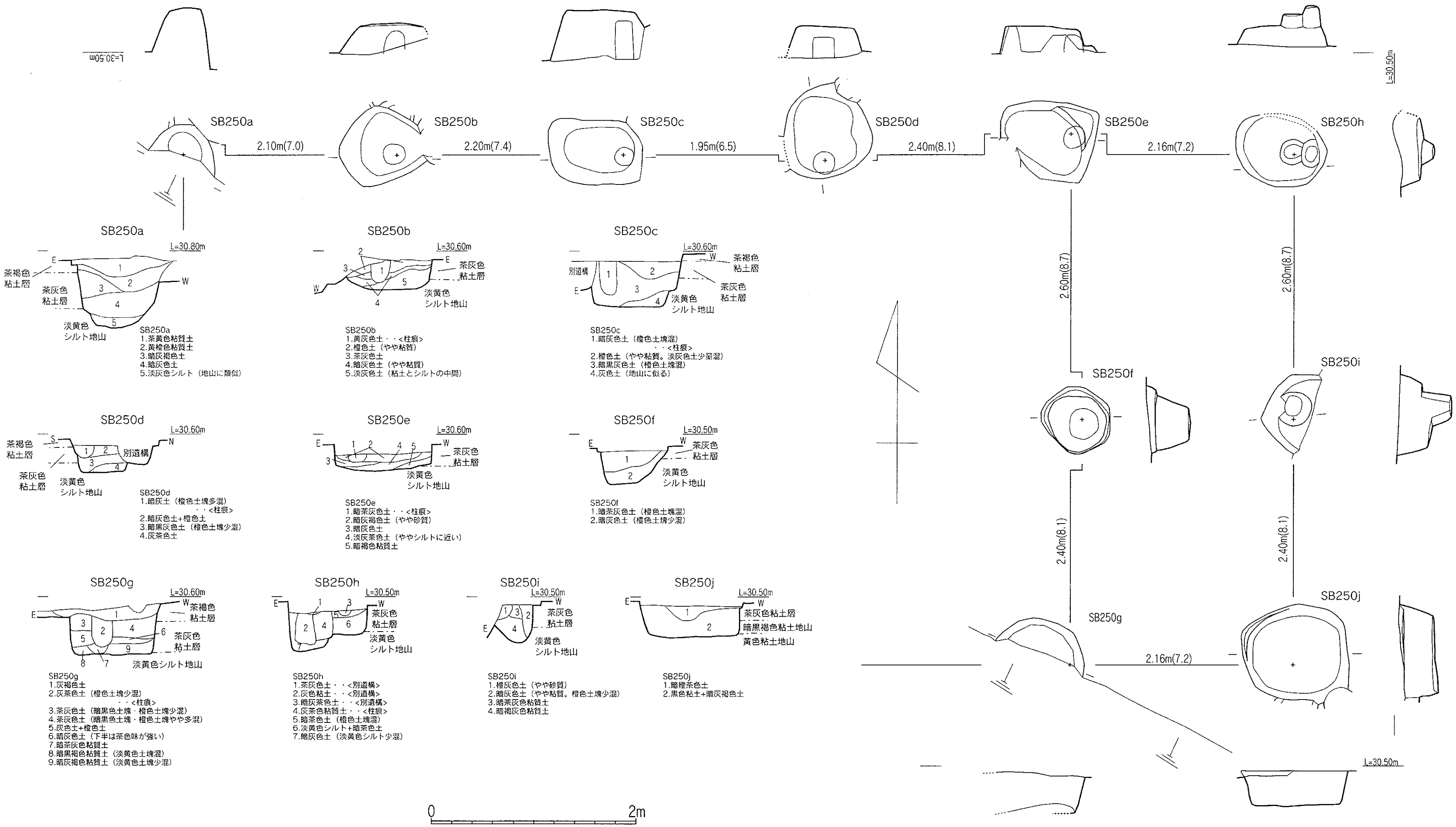
調査区のほぼ中央で、南北道路SF200の東側に隣接して検出した総柱建物である。2×2間の建物で、東西3.4m、南北3.62mを測る。なお、本遺構の北及び南側には柱筋を揃えた位置に同規模の小穴が検出されており、建物範囲がさらに広がる可能性や別の建物が並んで建っていた可能性もある。調査区が狭小であることに加え、本遺構の東および南側は第2遺構面検出時に地山面まで掘り下げてしまったこともあって確定できないが、柱穴とみられる小穴の掘方の深さは、本遺構より浅めであり、現在のところ別遺構と考えている。南北方向の遺構の展開については、今後の調査を待ちたい。出土遺物から8世紀後半の建物とみられる。

SB940 (Fig.25)

調査区東部の西寄りに位置する2間×2間の掘立柱建物である。南北長4m、東西長3.85mである。それぞれの柱間は1.6～2mと一定ではない。建物中央部に柱穴や窪みは検出できなかったため総柱建物とは考えがたい。柱穴の土層は掘方が灰紫色粘質土で、柱痕が黒灰色粘色土のものが多い。出土遺物より遺構の埋没年代は奈良時代と考えられる。

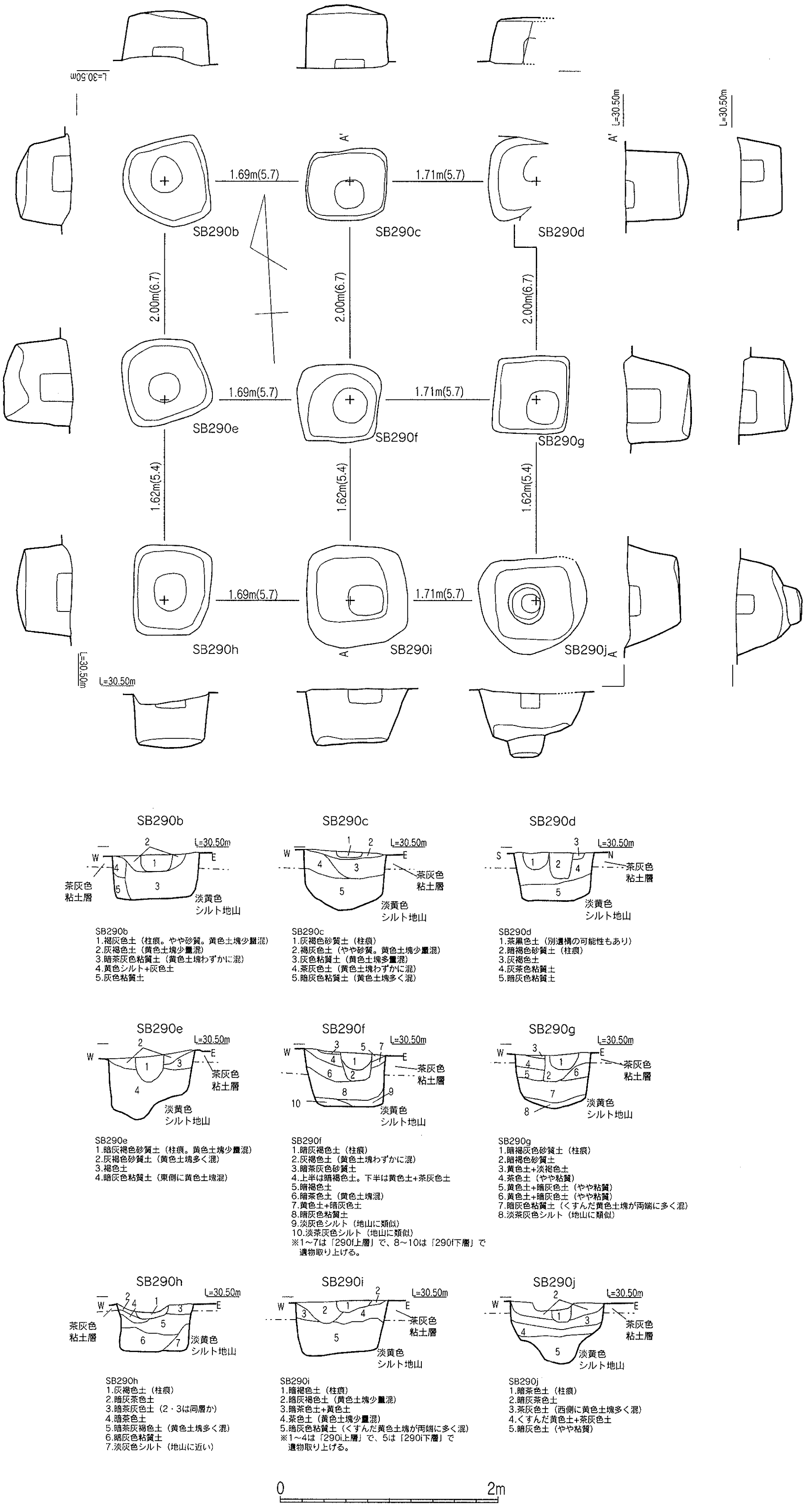
SB950 (Fig.25)

調査区東部の西寄りに位置する2間×3間の南北棟である。先述のSB940とほぼ位置が重なるため建て替えの可能性がある。ただし切合い関係がないため先後関係は不明である。梁行全長で4.45m、桁



※( )内は1小尺≒0.298mで除した値

Fig.23　SB250実測図（1/60）



※( )内は1小尺≒0.298mで除した値

Fig.24　SB290実測図（1/60）

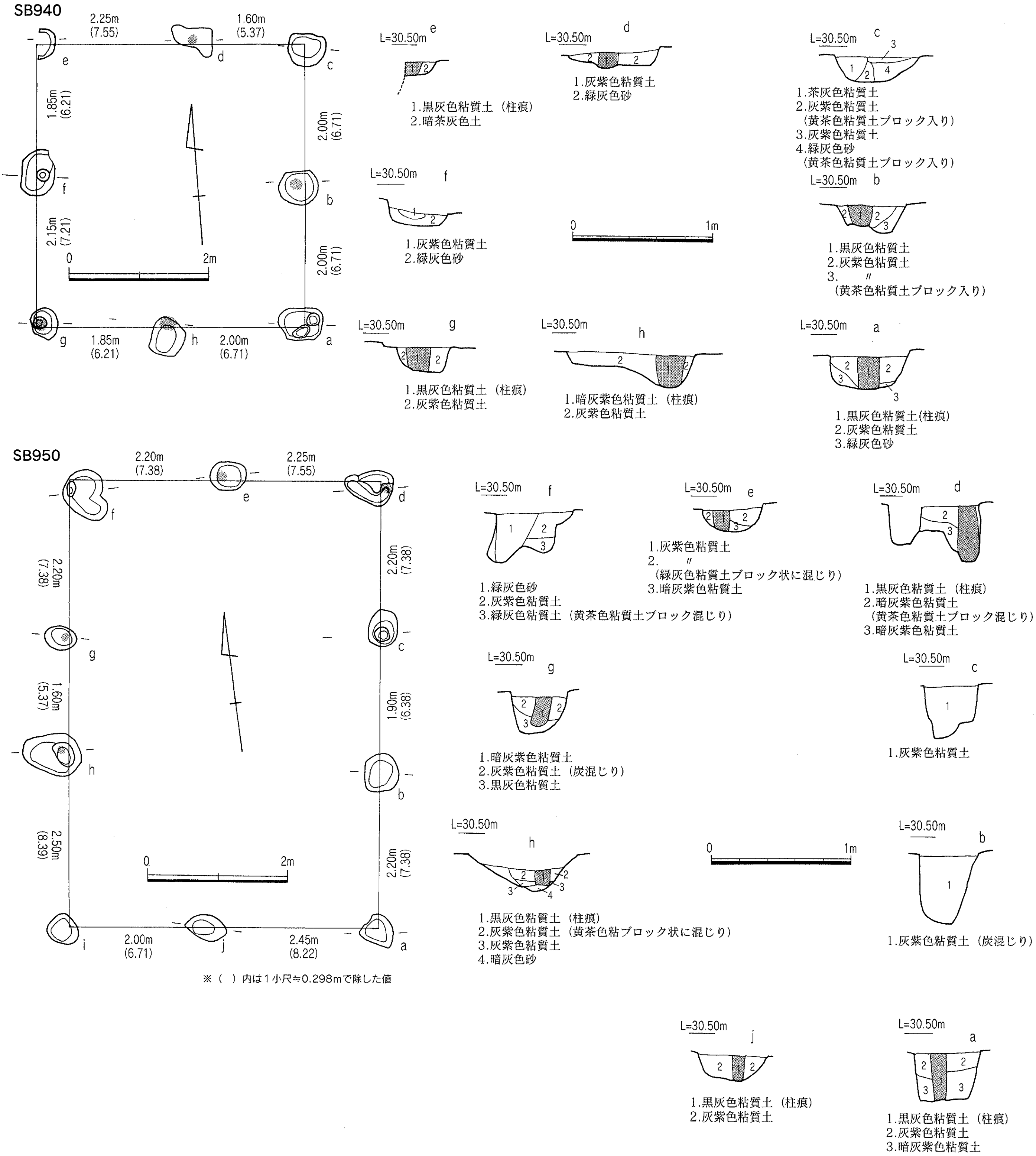


Fig.25　SB940・950 実測図（1/80。土層図は1/40）

行全長で6.30m。柱間寸法は梁行で2.0～2.45m、桁行で1.6～2.2mと一定でない。柱穴の土層は、掘方が灰紫色粘質土（茶黄色粘土ブロック状混じり）で、柱痕は黒灰色粘質土～暗灰紫色粘質土となるものが多かった。出土遺物より遺構の埋没時期は8世紀後半と考えられる。

第2遺構面検出溝

SD255

調査区中央で検出した南北溝である。SD285に沿った位置で同遺構を切っており、SD285を掘り替えた溝とみられる。溝は調査区を超えてさらに南に伸びている。検出長4.15m、幅0.26～0.43m、深さ最大0.12mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は茶色土で、奈良時代後期を下限とする遺物が出土している。基盤となる整地層は茶黄色粘土層・茶褐色粘土層である。本遺構は左郭一坊路とみられるSF200に伴うと考えられ、道路西側溝とみられる。

SD260

調査区西側で検出した南北溝である。溝は調査区を超えてさらに南に伸びている。検出長5.4m、幅0.56～0.87m、深さ最大0.13mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は淡茶灰色土で、奈良時代を下限とする遺物が出土している。基盤層は地山だが、SF210の項で述べるように第3遺構面に属する可能性は十分考えられる。なお本遺構はSF210に伴う道路側溝とみられ、関連する4条の溝のうち東から2番目に位置する。

SD265

調査区西側で検出した南北溝である。溝は調査区を超えてさらに南に伸びるとみられる。検出長5.75m、幅0.36～0.58m、深さ最大0.16mを測る。溝底は北と南で約10cmの差があり、南に下がっている。埋土は黒色土で、出土遺物はない。基盤層は地山だが、SF210の項で述べるように第3遺構面に属する可能性は十分考えられる。なお本遺構はSF210に伴う道路側溝とみられ、関連する4条の溝のうち最も東に位置する。

SD270

調査区西側で検出した南北溝である。溝は調査区を超えてさらに南に伸びている。検出長5.32m、幅0.64～1.0m、深さ最大0.14mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は淡灰褐色土で、古代の遺物が出土している。基盤層は地山だが、SF210の項で述べるように第3遺構面に属する可能性は十分考えられる。なお本遺構はSF210に伴う道路側溝とみられ、関連する4条の溝のうち西から2番目に位置する。

SD275

調査区中央で検出した南北溝である。溝は調査区を超えてさらに南に伸びている。検出長5.6m、最大幅1.5m、深さ最大0.26mを測る。溝底は北と南でほとんど差がないが、南端がやや低い。埋土は第2遺構面の遺構埋土と一見して異なり、遺構面を覆う灰色土層に類似した砂質土系の埋土である。上から茶色土、暗灰茶色土の順で遺物を取り上げ、平安時代後期初頭（大宰府編年XI～XII期）を下限とする遺物が出土している。埋土状況と出土遺物から、第1遺構面に帰属する遺構の可能性が高い。第1遺構面では左郭一坊路と想定する道路遺構SF190が付近にあり、本遺構もこれに伴うと考えられる。

SD280

調査区中央で検出した南北溝である。SD295に沿った位置で同遺構を切っており、SD295を掘り替えた溝とみられる。溝は削平が進んでいるが、調査区を超えてさらに南北に伸びる。また東側は第1遺構面のSD400の掘削により消失している。検出長6.0m、最大幅0.75m、深さ最大約0.15mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は茶色土で、砂および植物繊維のようなものを多く含む。7世紀後期～8世紀前期の遺物が出土している。基盤となる整地層は途切れているが、SD295との関係から茶褐色粘土層であることがわかる。本遺構は左郭一坊路と想定するSF200に伴うと考えられ、道路東側溝とみられる。

SD285

調査区中央で検出した南北溝である。SD255に沿った位置で同遺構に切られている。溝は削平が進んでいるが、調査区を超えてさらに南北に伸びるとみられる。検出長4.8m、幅約1.0～1.3m、深さ0.05～0.1mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は淡茶色土で、7世紀後期の遺物が出土している。基盤となる整地層は茶褐色粘土層である。本遺構は左郭一坊路とみられるSF200に伴うと考えられ、道路西側溝とみられる。

SD287・288・364

調査区西側で検出した溝群である。ほぼ一直線に並んで東西に走向する。検出長約6.5m、幅0.4～0.5m、深さ0.15m前後を測る。いずれも奈良時代の遺物が出土している。

SD295

調査区中央で検出した南北溝である。SD280に沿った位置で同遺構に切られている。SD280を掘り替えた溝とみられ、溝の東側はSD280により消失している。検出長4.75m、最大幅1.2m、深さ最大約0.15mを測る。溝底は北と南でほとんど差がない。埋土は茶色土で、砂および植物繊維のようなものを多く含む。ここから奈良時代頃とみられる遺物が出土している。基盤となる整地層は茶褐色粘土層で、本遺構埋土除去時に同層が溝底に広がっていることを確認している。本遺構は左郭一坊路とみられるSF200に伴うと考えられ、道路東側溝とみられる。

SD935

調査区東部の中央に位置する東西溝である。検出長4.65m、幅0.65m、深さ0.23m。この溝の東端より東へ2m延長した所に、検出長3.1m、幅0.65m、深さ0.08mの同規模の東西溝が検出されている。これらの溝群を一連のものと捉えるかどうかは、調査区外に伸びる西側延長部での溝の検出状況と比較して、再度検討をする必要がある。出土遺物より遺構の埋没年代は奈良時代と考えられる。

SD965

調査区東部の東寄りに位置する南北溝である。南北長7m、東西幅0.8m、深さ0.18m。埋土は茶灰色粘質土。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代前期と考えられる。

SD980

調査区東部の西寄りに位置する南北溝である。検出長8.6m、最大幅3.5m、深さ0.65m。埋土は古い堆積から暗黒色粘質土、灰紫色粘質土（白色粘土混じり）である。溝幅が一定ではなく、流路のように蛇行しながら流れていた可能性がある。出土遺物より遺構の埋没年代は弥生時代後期前半と考えられる。なおこの埋土については花粉分析を行っている。

第2遺構面検出道路

SF200

調査区の中央に位置する。関連する溝は第2遺構面検出のSD255・280・285・295で、いずれも南北に走向している。付近は周辺と比べて小穴等の遺構が極端に少ないことから、これらの溝群は道路側溝に該当するとみられる。路面部分は削平を受けて消失している。

道路に伴う遺物は、4条の溝の埋没土中から出土したもののみである。埋没土中に含まれる遺物の下限は、SD255は奈良時代後期、SD280は飛鳥時代～奈良時代前期、SD285は飛鳥時代、SD295は奈良時代である。ただ、この付近の遺構はいずれも飛鳥時代以降の古い遺物を多く含む傾向にあり、本遺構も同様である。このため道路基盤層である茶褐色粘土層が奈良時代中・後期に堆積していること、遺構を覆う灰色土層が平安時代前期末頃までに堆積していることから、奈良時代中・後期～平安時代前期末に機能した道路と考える。

この4条の溝がどのように関連して道路側溝として機能したかは不明であるが、SD255とSD285、またSD280とSD295が切り合い関係をもつことを考えると、前者が西側溝、後者が東側溝として機能したと考えられ、側溝構築が二時期以上あったといえる。一案として両側溝をもつ道路を想定した場合、SD285とSD295が古い時期の道路側溝、SD255とSD280が新しい時期の道路側溝と考えられよう。

後述の「VI. まとめ」で述べるように、左郭における条坊関連遺構例も増加しており、本遺構が政庁II期の左郭一坊路の蓋然性は高いと判断している。

SF210

調査区の西側に位置する。ここでは溝4条が南北に走向している。関連する溝は第1面検出のSD055、第2遺構面検出のSD260・265・270である。溝が複数南北に走行していることから、ここに何らかの境界意識が働いていたとみられる。これらは単なる区画溝の可能性もあるが、付近は周辺と比べて小穴等の遺構が極端に少なく、条坊内で見つかる道路遺構と類似している点もあることから、道路の可能性も考えられる。この場合溝群は道路側溝に相当する。いずれの溝もかなり削平を受けており、路面があったとしても消失している。なお道路とした場合、4条の溝がどのように関連し、どこに路面が通っていたかは不明である。

道路敷設時期について、SD265からは遺物の出土をみなかったものの、これ以外の溝から出土した遺物の下限は、SD055が奈良時代、SD260が奈良時代、SD270が古代である。またSD055以外は灰色土層除去後に検出しているが、この付近の灰色土層の下位には薄くあるいはまだらに存在した茶褐色粘土層があり、灰色土層除去時にこれを分けることができずに一緒に除去している。このため溝群が第2・3遺構面のいずれに該当するのか検証ができていないのだが、SD265以外の溝の埋土が第3遺構面の遺構群にみられる淡灰茶色～淡茶灰色～淡灰褐色を主体とする粘土～シルト系であり、SD265もどちらかというとシルト系の埋土であること、溝群より後出する井戸群が奈良時代後期～平安時代前期に掘削され時期的に第2遺構面に伴う可能性が高いことを併せて考えると、第3遺構面に伴う可能性は十分想定できる。このことから奈良時代を中心とした時期の道路と考える。

本遺構は推定朱雀大路（SF300）と左郭一坊路（SF200）との間に位置することから坊間路と考えられる。

第2遺構面検出小穴

SX251

調査区の西側、BP54地区で検出した小穴である。基盤層は茶褐色粘土層である。ここから7世紀後半の遺物とともに新羅土器蓋が出土している。

SX256

調査区の西側、BMBN53地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから奈良時代前期の遺物が出土している。

SX257

調査区の中央西側、BN55地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから奈良時代の遺物が出土している。

SX259

調査区の中央西側、BO55地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから奈良時代の遺物とともに鉄製手斧が出土している。

SX271

調査区の中央西側、BNBO52～53地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから飛鳥時代の遺物とともに内面に赤色顔料が付着する須恵器蓋1が出土している。

SX277

調査区の中央西側、BP55地区で検出した小穴である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから7世紀代の土師器椀が出土している。

SX281

調査区の中央西側、BN55地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから7世紀代の遺物とともにミガキのある土師器皿bが出土している。

SX292

調査区の中央、BN52地区で検出した小穴群である。基盤層は茶褐色粘土層で、SB250hを切っている。ここから奈良時代の遺物が出土している。

SX293

調査区の西端、BS62地区で検出した小穴群である。ここから玉縁状の口縁をもつ土師器甕が出土している。

SX294

調査区の西側、BS62地区で検出した小穴である。SD260に切られている。ここから奈良時代の遺物が出土している。

SX296

調査区の西側、BS62地区で検出した小穴である。SD270除去後に検出した。ここから須恵器壺×瓶が出土している。

SX310a

調査区の中央、BN50地区で検出した小穴である。基盤層は茶褐色粘土層で、ここから奈良時代の遺物とともに畿内系の土師器坏が出土している。

SX314

調査区の中央、BL51～52地区で検出した小穴群である。基盤層は茶灰色粘土層で、ここから畿内系の土師器坏が出土している。

SX315b

調査区の中央、BK49地区で検出した小穴である。基盤層は茶褐色粘土層あるいは茶灰色粘土層で、下層埋土から外面にミガキのある土師器甕aが出土している。

SX321

調査区の中央、BN50地区で検出した小穴群である。基盤層は茶灰色粘土層で、ここから平安時代の遺物とともに灰釉陶器椀が出土している。

SX356

調査区の中央、BL47地区で検出した小穴群である。基盤層は茶灰色粘土層で、ここから奈良時代前半の遺物とともにここから鉄塊とみられる不明鉄製品が出土している。

SX911

調査区東部の中央寄りに位置する小穴である。S-909に切られる。碁石が出土している。

SX918

調査区東部の中央寄りに位置する小穴群である。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代前期と考えられる。

SX960a

調査区東部の中央寄りに位置する小穴である。柱痕が明瞭に確認できたことから柵列や掘立柱建物の一部になる可能性が高い。南側でこの遺構に続く建物等が検出される可能性がある。

SX961

調査区東部の東寄りに位置する小穴群である。この小穴群はSX1000を切る遺構で、SX1000の遺構埋没年代の下限を考える上で重要な遺構である。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代後期と考えられる。

第2遺構面その他の遺構

SX374

調査区の西側、BQ59地区で検出したたまり状遺構である。平安時代中期の遺物を含む。ここから黒曜石製石鏃が出土している。

SX928

調査区東部の東寄りに位置するたまり状遺構である。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代前期と考えられる。

SX931

調査区東部の東寄りに位置するたまり状遺構である。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代前期と考えられる。

SX932

調査区東部の東寄りに位置するたまり状遺構である。出土遺物より遺構の埋没年代は平安時代前期と考えられる。

SX1000

調査区東部の東寄りに位置する窪み状遺構である。検出長6.3m、幅3.5m、深さ0.12m。
出土遺物は越州窯系青磁が多く出土している。越州窯系青磁の出土地点は20～24ラインの間に集中する傾向がある。SX1000の西側部分は赤灰色土層に覆われていた。埋土の堆積は古い順に灰青色砂質土、暗青灰色粘質土、灰褐色土である。遺構の切合い関係は平安時代後期に掘られたSX961に切られる。出土遺物と遺構の切合い関係により、遺構の埋没年代は平安時代前期末と考えられる。

(3) 第3遺構面検出遺構

第3遺構面検出掘立柱建物

SB305 (Fig.28・29)

調査区中央で検出した東西棟である。東西4間、南北2間の身舎で、北側に1間分の廂が付くとみられる。身舎は東西9.3m、南北4.1mで、廂は1.5mの幅で取り付く。埋土は基本的に周辺に広がる茶灰色粘土層・SX1115埋土が含まれており、SB250・290等のように砂やその他の土が混入している状況ではない。出土遺物はいずれも7世紀後期～末頃のものである。建物の基盤層である茶灰色粘土層は7世紀後期～末頃のもので、この層に含まれる遺物が第3遺構面の遺構埋土や上層の遺構・堆積層に多く混入していることを考えると、出土遺物から本遺構の時期を確定することはできないが、同じ第3遺構面の遺構には奈良時代の遺物を含むものがある中、大きく深い柱穴のいずれにも奈良時代の遺物が含まれないことは十分評価されるべき事象と考える。柱穴掘方埋土の状況からも茶灰色粘土層が整地された後あまり間をおかずに建築されたと想定できるため、7世紀後期～末に建築された建物と考える。

Fig.26　大宰府条坊跡第168次調査　第３遺構面全体図（1/200）

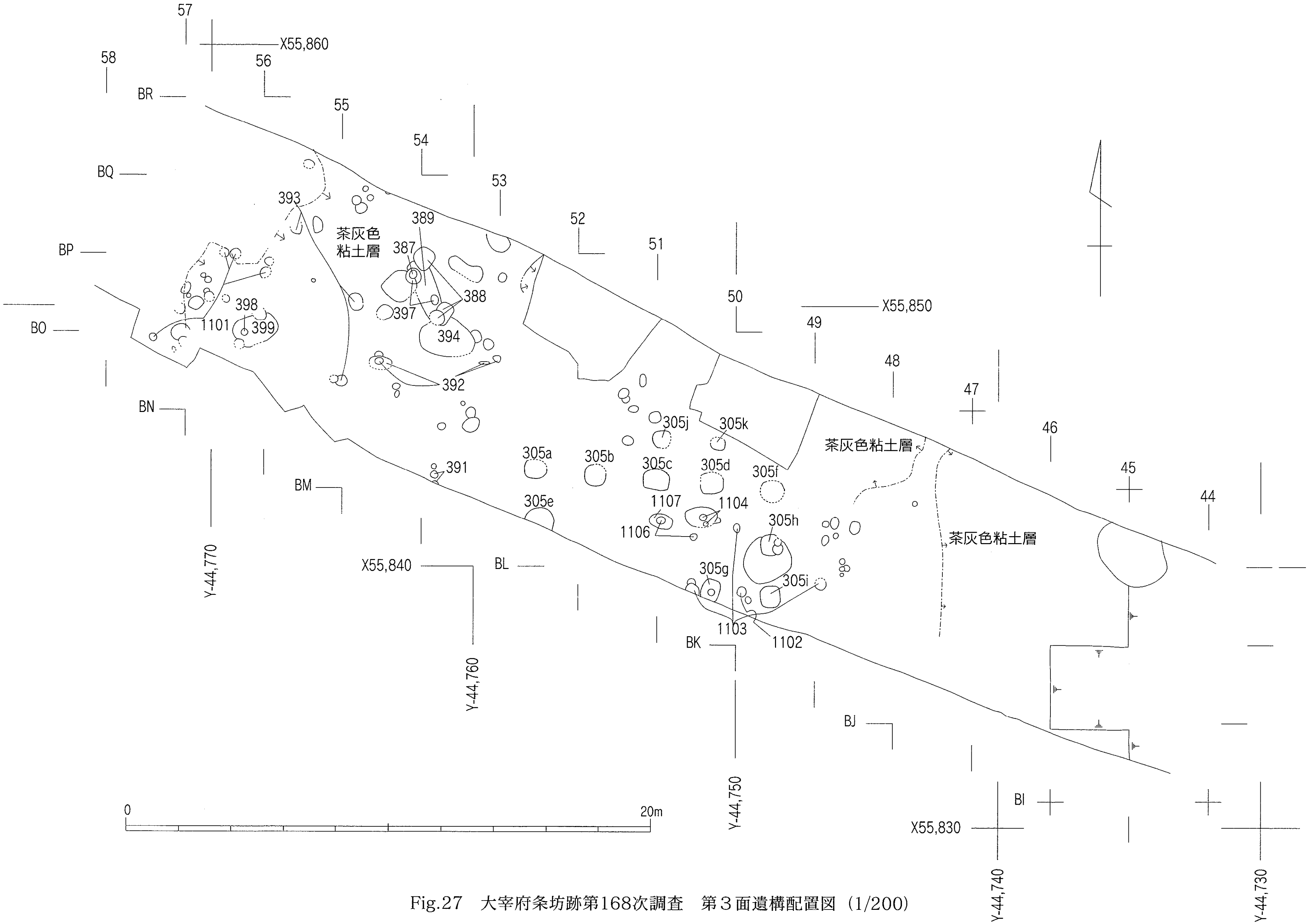


Fig.27　大宰府条坊跡第168次調査　第３面遺構配置図（1/200）

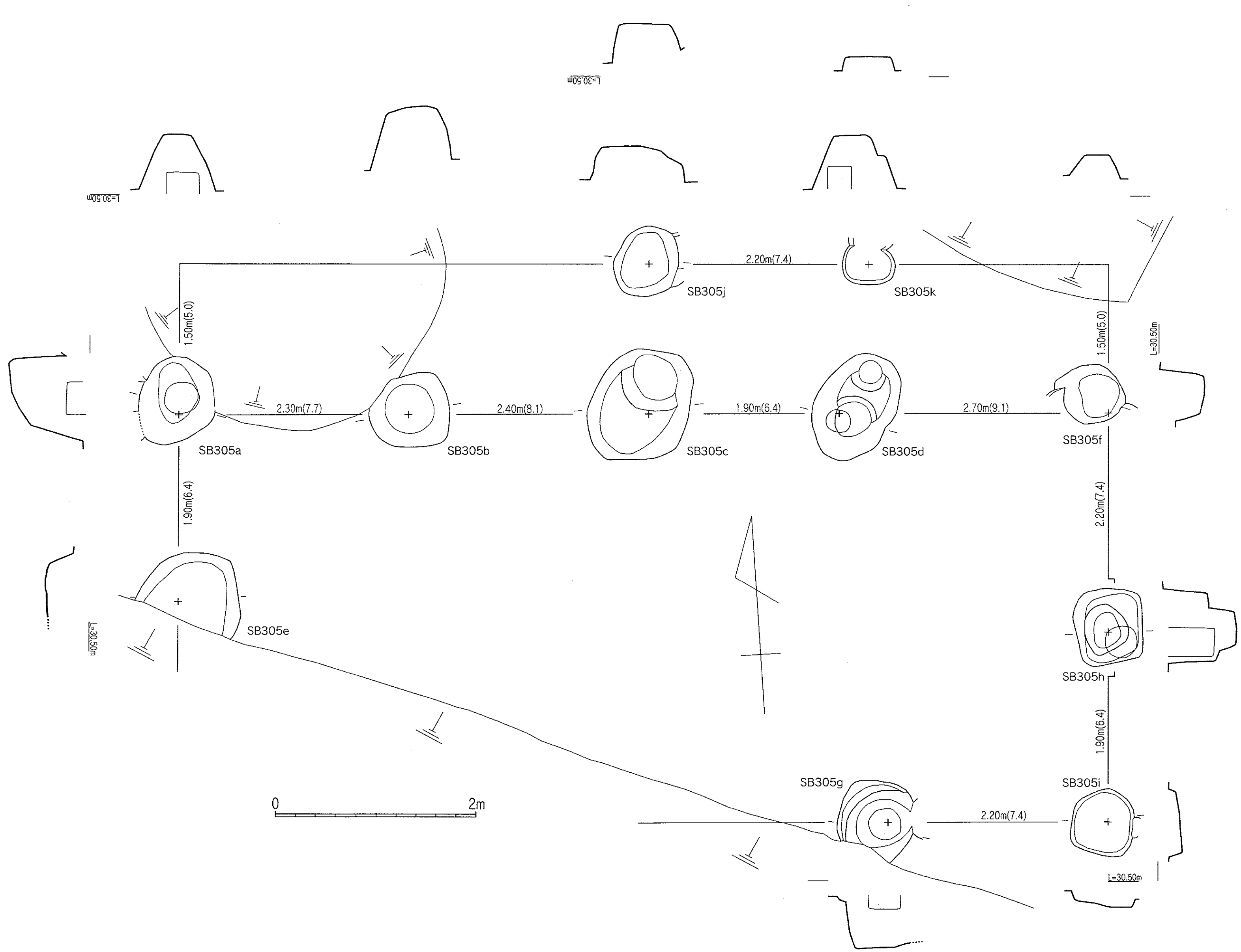


Fig.28　SB305実測図（1/60）

※( )内は1小尺≒0.298mで除した値

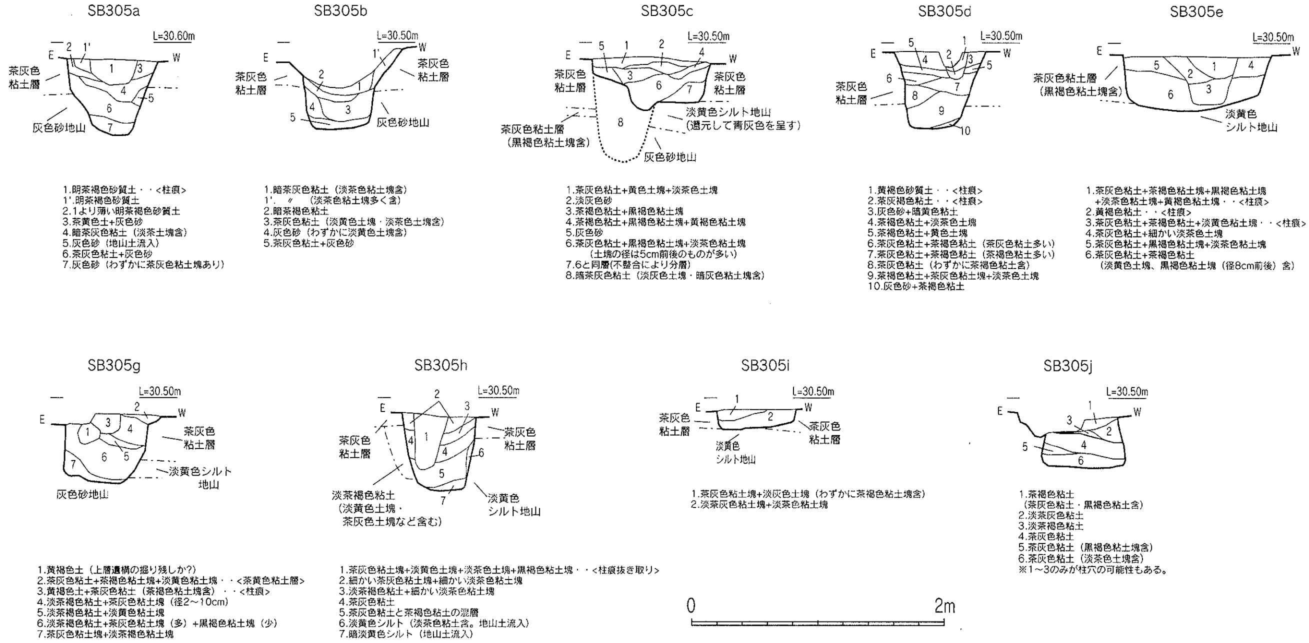


Fig.29　SB305土層図（1/60）

第3遺構面検出小穴

SX392

調査区の中央西側、BN53～54地区で検出した小穴群である。BN53地区の小穴2基については、この直上の第1遺構面に小穴があり（S-415の一部・420c）、これらの掘り残しの可能性がある。また同じくBN53地区の小穴の一つから弥生土器直口壺が出土しているが、直下には第4遺構面にSX1121があり、これに伴う可能性がある。

(4) 第4遺構面検出遺構

第4遺構面検出溝（Fig.32）

SD1110

北東から南西方向へ蛇行して流れ下る溝である。幅0.8～1.63m、深さ最大0.3mを測る。埋土は上から淡茶灰色砂、暗茶灰色砂である。暗茶灰色砂は水流による堆積でラミナがみられる。遺物がわずかに出土しており、これより弥生時代後期の遺構とみられる。

第4遺構面検出土坑（Fig.32）

SK1111

平面プラン円形を呈す。径2.0×2.2m、深さ0.31mを測る。埋土は上から暗茶灰色粘土、黒褐色粘土、灰褐色粘土の順である。最上層の暗茶灰色粘土層は遺構面を覆う茶灰色粘土層に類似しており、茶灰色粘土層の沈み込みによる堆積の可能性がある。この暗茶灰色粘土を除去すると、木の葉が面をなして検出された、この木の葉層の下位の黒褐色粘土層には、植物、葉、枝を含んでおり、ドングリとみられる種子も多く含まれる。ドングリピットの可能性もあるが、市内でみつかるドングリピットに比べる

と種子の出土量が少ないため、断定はできない。ここから縄文土器とみられるミガキをもつ遺物がごくわずかに出土しているが、細片のため図化できなかった。

SK1112

調査区北壁にかかっているが、平面プラン円形～楕円形を呈すとみられる。土層観察から茶灰色粘土層の下位にあることが明らかで、ここから7世紀後半とみられる須恵器坏cを出土しており、茶灰色粘土層の堆積上限を知ることができる。

SK1113

平面プラン円形を呈す。径1.85×1.9m、最大深さ0.34mを測る。埋土中には、植物遺存体とドングリとみられる種子含む。状況は前述のSK1111に類似するが、種子等の量はわずかである。遺物は出土していない。

SK1114

平面プラン円形を呈す。径1.6×1.7m、最大深さ0.98mを測る。埋土は上から茶灰色粘土、腐植土、黒褐色粘土の順に堆積しており、腐植土層に植物遺存体とドングリとみられる種子を含む。状況は前述のSK1111に類似するが、種子等の量は多くはない。遺物は出土していない。

SK1116

調査区南壁にかかっているが、平面プラン円形を呈すとみられる。径2m前後、最大深さ0.39mを測る。調査区壁の土層観察では茶灰色粘土層によく似た埋土が流入しており、茶灰色粘土層整地の際に同時に埋まったのではないかとも考えられる。遺物は出土していない。

SK1121

SD1110に平行する土坑である。溝の可能性もあるが不明である。ここから弥生土器のほか古代の遺物を出土する。このことについてはSX392の項で述べたように、直上の遺構の埋土がここまで達していた可能性があるが、遺構検出時にはそのプランを確認できなかったため、平安時代の黒色土器（1点）についてはなんらかの原因による混入の可能性も考えられる。

第4遺構面検出たまり状遺構

SX1115

調査区中央で検出した遺構である。埋土は、粘質の強い黒褐色粘土が広く堆積しており、これを除去すると中央付近に暗青褐色粘土が部分的に（あるいは溝状に）堆積する。整地の可能性も考えたが明らかではない。類似した遺構にSX980がある。ここから弥生時代後期の遺物がごくわずかに出土している。

3.遺物

(1) 第1遺構面出土遺物

第1遺構面柵列出土遺物 (Fig.33～36)

SA027出土遺物 (Fig.33)

石製品

砥石（1）　2面が残存している。図上天地長15.0cm、幅15.5cm、残存厚3.9cmを計る。砂岩製。S-27b出土。

SA120出土遺物 (Fig.33)

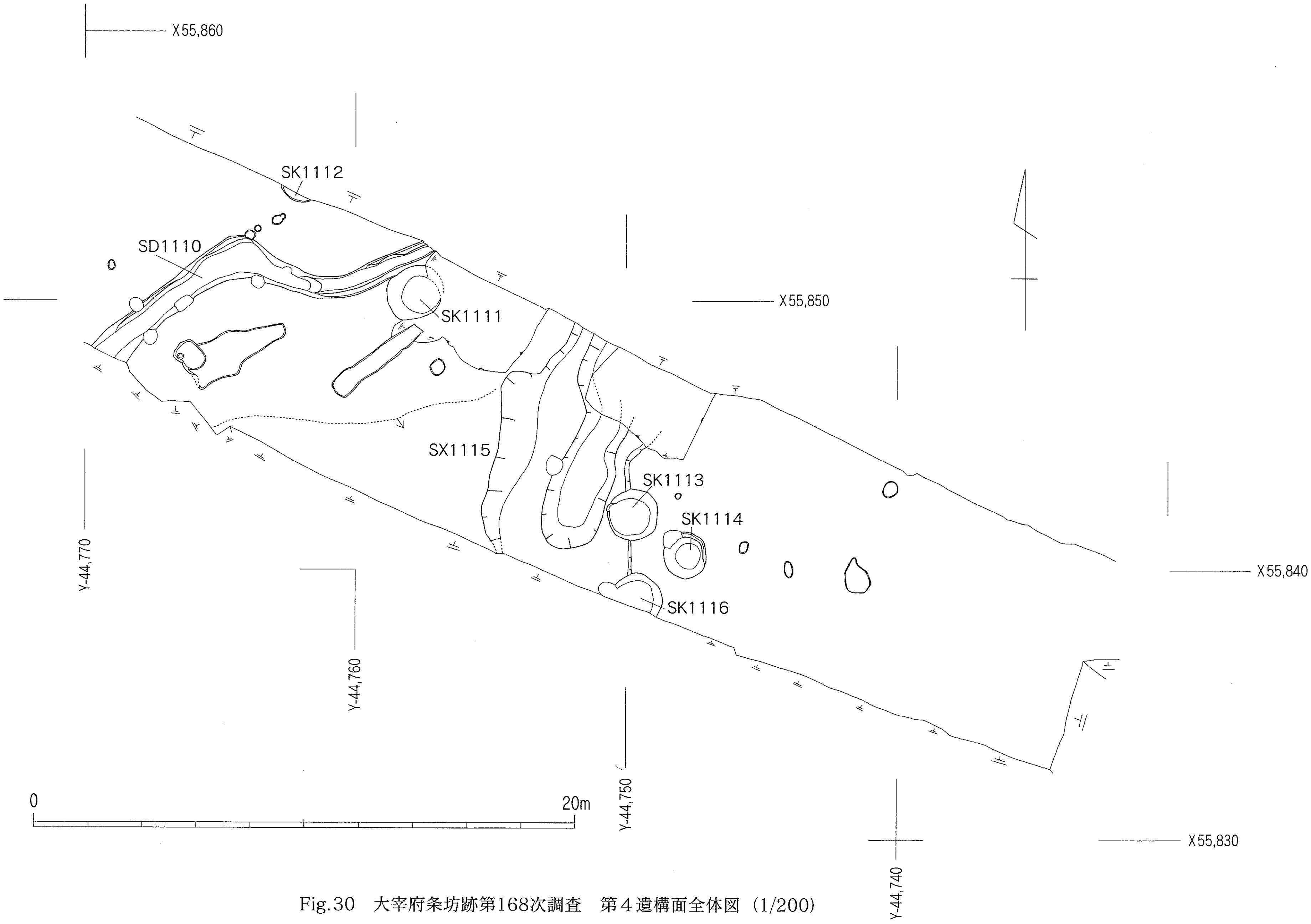


Fig.30　大宰府条坊跡第168次調査　第４遺構面全体図（1/200）

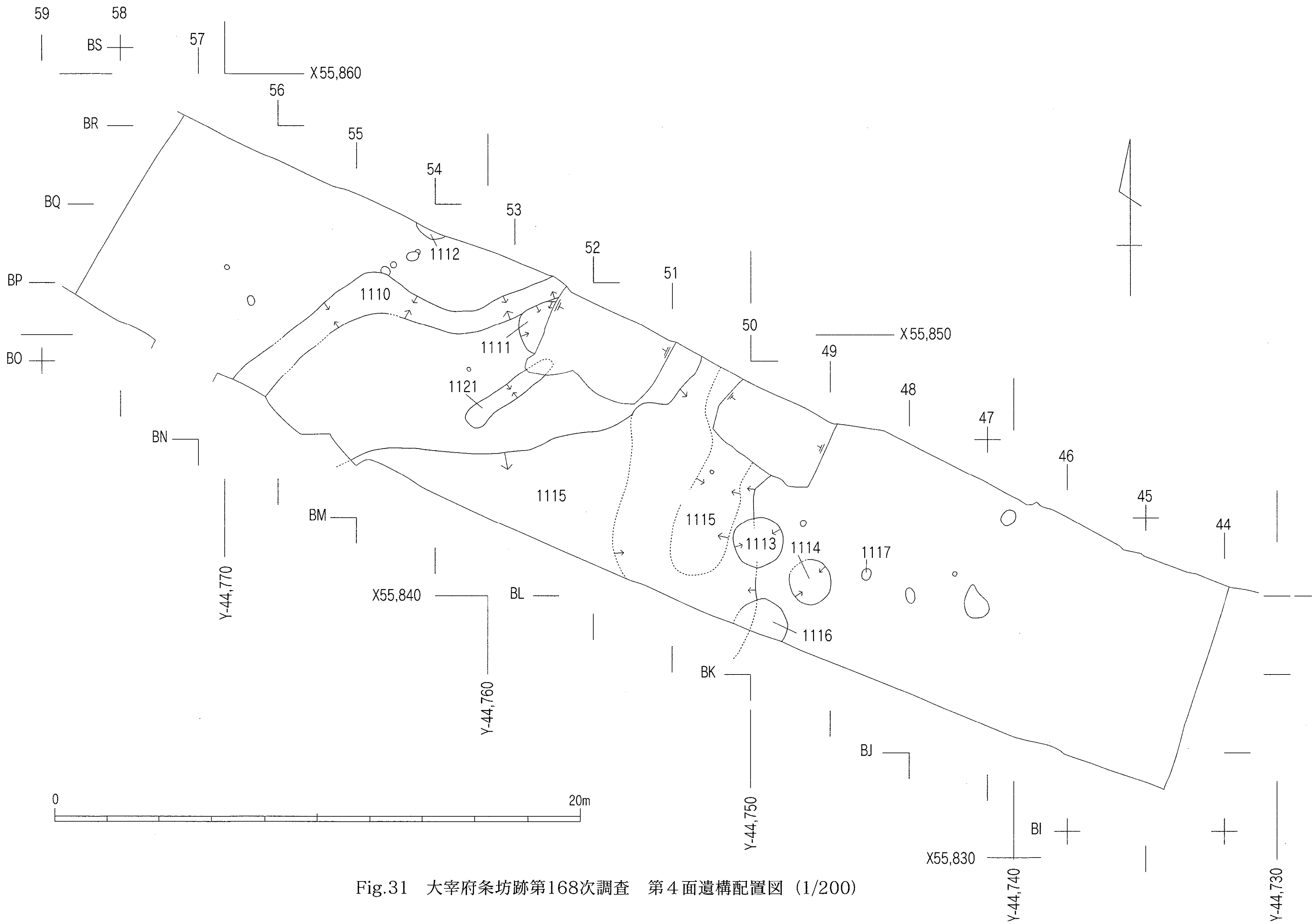


Fig.31　大宰府条坊跡第168次調査　第４面遺構配置図（1/200）

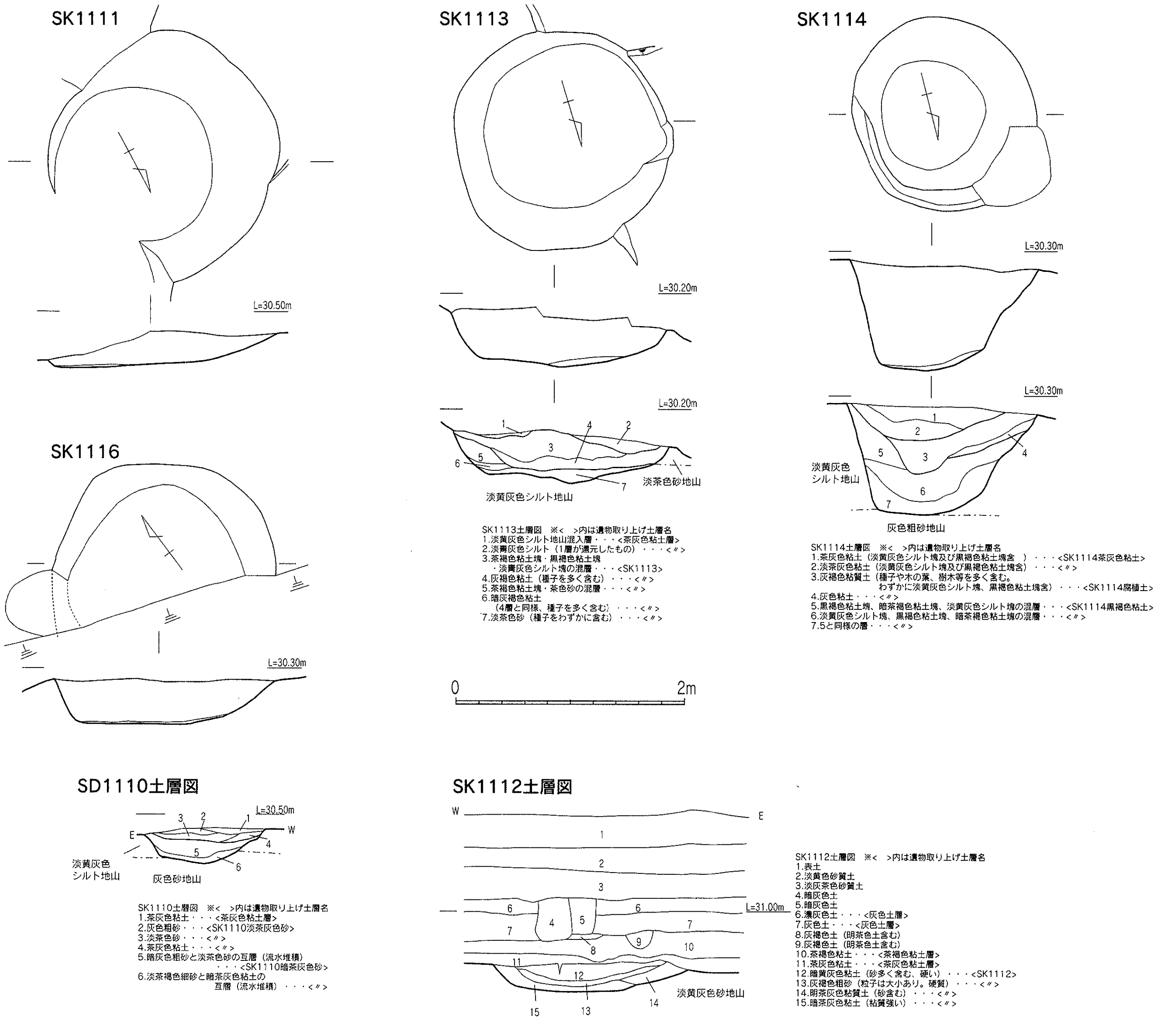


Fig.32　第4遺構面検出遺構実測図（1/60）

土師器

小皿a（2）　口縁部の破片である。残存高0.95cmを計る。摩耗のため調整不明。胎土は1mm以下の砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、内面は明茶橙色、外面は明茶橙色～淡茶白色を呈す。S-186出土。

椀c（3）　体部下位の破片である。高台部も欠損している。残存高1.6cm。摩耗のため調整不明。胎土のきめは細かく、1mm以下の白色砂粒をやや含む。焼成は不良で、内面は淡茶白色、外面は淡茶橙色を呈す。S-186柱痕出土。

SA150出土遺物（Fig.33）

黒色土器A類

椀c（4）　底部の破片である。残存高1.3cm。風化のため調整不明。2mm以下の白色砂粒を多量含む。焼成はやや良好で、内面は灰黒色、外面は茶灰色を呈す。S-233出土。

SA150出土遺物（Fig.33）

土製品

焼土塊（5～7）　平坦面と剥離面を有する。色調は、平坦面は淡褐黄色、剥離面は淡灰褐色を呈する物が多い。

SA520関連（S-513・536）出土遺物（Fig.36）

土師器

小皿a1（1）　底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。口径については不明。

椀c（2）　高台の破片資料で、やや高い高台形状をとる。

第1遺構面掘立柱建物出土遺物（Fig.34～37）

SB010出土遺物（Fig.34）

土師器

小皿a（1）　1は口縁部の破片である。残存高0.9cmを計る。底部切り離しは不明で、板状圧痕あり。胎土は0.5mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成はやや不良で、内面は橙白色、外面は黄白色を呈す。S-39出土。

その他の遺物

不明品　本遺構の柱穴の一つであるSX039の埋土中から赤紫色をした遺物が出土した。直径0.5cm程度のもので、ある程度の硬さはあるが、欠けやすい。蛍光X線による定性分析を行ったところ、金属のチタンが主たる成分であることがわかった。詳しくは後述の自然科学分析報告を参照していただきたい。これについては顔料などの可能性も考えているところであるが、詳細は不明である。

SB020出土遺物（Fig.34）

SB020柱痕出土遺物

須恵器

蓋3（2～4）　2は口縁部の破片である。残存高1.9cmを計る。全面に回転ナデを施した後、天井部内外面はナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色を呈す。S-20b出土。3は口縁部の破片である。残存高2.3cmを計る。全面に回転ナデを施した後、天井部内外面はナデを施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～暗灰青色を呈す。S-20b出土。4は口縁部の破片である。口径16.3cm、残存高1.9cmを計る。天井部切り離しはへ

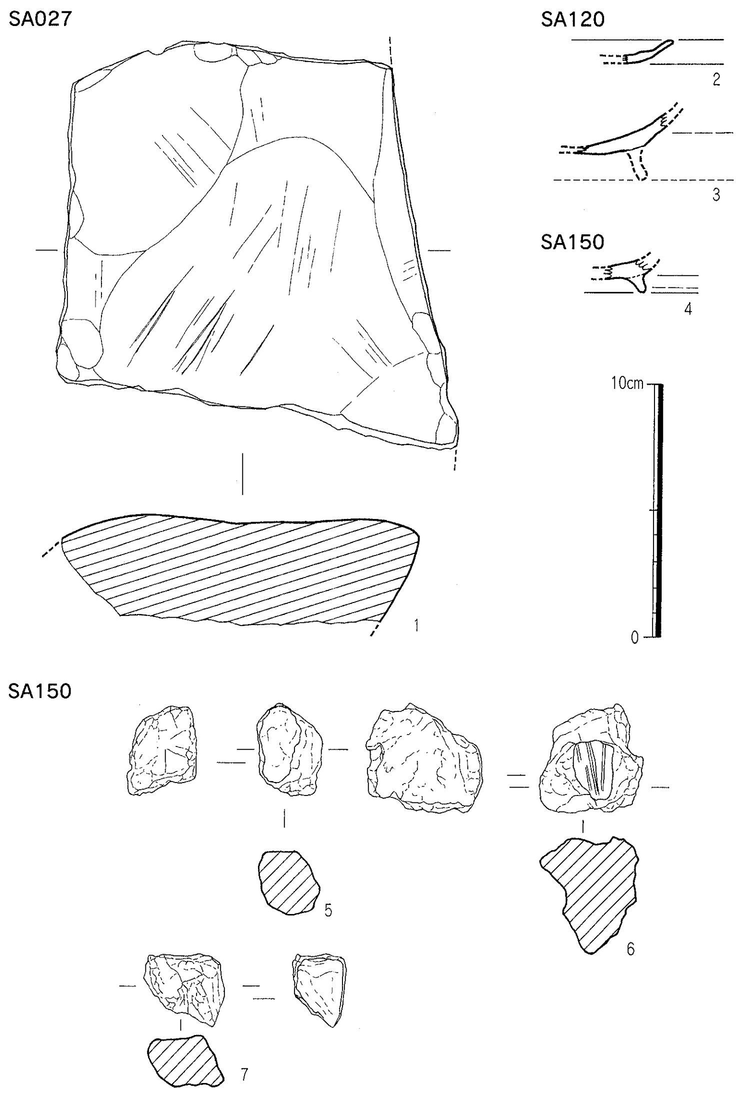


Fig.33　SA027・120・150 出土遺物実測図（1/3）

ラ切りで、全面に回転ナデを施した後、天井部内外面はナデを施す。胎土は0.2～1mmの砂粒を多量含む。焼成・還元ともに良好で、淡茶色～黒灰色を呈す。S-62出土。

蓋b（5） 天井部が残存する破片である。残存高2.7cm、輪状つまみ径7.7cmを計る。外面は、回転ヘラケズリを施し、その後つまみを回転ナデで取り付ける。内面はナデ調整。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色を呈す。S-20b出土。

坏c（6） 底部が残存する破片である。残存高1.3cm、高台径9.2cmを計る。底部外面は回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、0.2～1mmの砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、灰白色を呈す。S-94出土。

土師器

坏（7） 口径13.9cm、残存高3.3cmを計る。摩耗により不明な部分が多いが、全面にミガキaを施すようである。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、明茶褐色を呈す。S-20b出土。

坏d（8） 口径16.2cm、器高3.3cm、底径8.2cmを計る。外面底部～体部下位は回転ヘラケズリを施し、その他はミガキaを施す。胎土は0.5～3mmの砂粒・雲母片を多く含む。焼成は良好で、暗茶色～淡茶明色を呈す。S-94出土。

大椀c×鉢（9） 高台部の破片である。残存高4.4cm、高台径15.0cmを計る。胎土は3mm以下の砂粒を多量含む。焼成は良好で、内外面とも茶灰色、内面見込みは淡茶灰色を呈す。S-77出土。

金属製品

不明鉄製品（10） T字形をした製品である。図上天地残存長2.0cm、図上幅2.95cmを計り、断面径は約0.9cmである。S-7出土。

SB020掘方出土遺物

須恵器

蓋c3（11） つまみ部等が欠損している破片である。口径14.2cm、残存高2.4cm、天井部径10.5cmを計る。全面に回転ナデを施し、天井部内面はナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～淡黒灰色を呈す。S-4掘方出土。

土師器

坏a（12） 口縁部の破片である。残存高3.8cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、淡黄褐色を呈す。S-4掘方出土。

甕a（13） 口縁部の破片である。残存高3.6cmを計る。摩耗しているが、体部内面は指押さえによるナデの可能性もある。胎土は0.5～2mmの砂粒を少し含む。焼成は不良で、明茶褐色を呈す。S-4掘方出土。

SB060出土遺物（Fig.34）

SB060柱痕出土遺物

土師器

小皿a（14・15） 14は口径9.0cm、器高1.15cm、底径6.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切りか。S-60c柱痕出土。15は口径9.6cm、器高1.15cm、底径7.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。S-60d柱痕出土。

SB060掘方出土遺物

土製品

坩堝（16） 口縁端部の破片である。残存高3.0cmを計る。調整はナデ。内面に淡茶黄色・暗赤紫

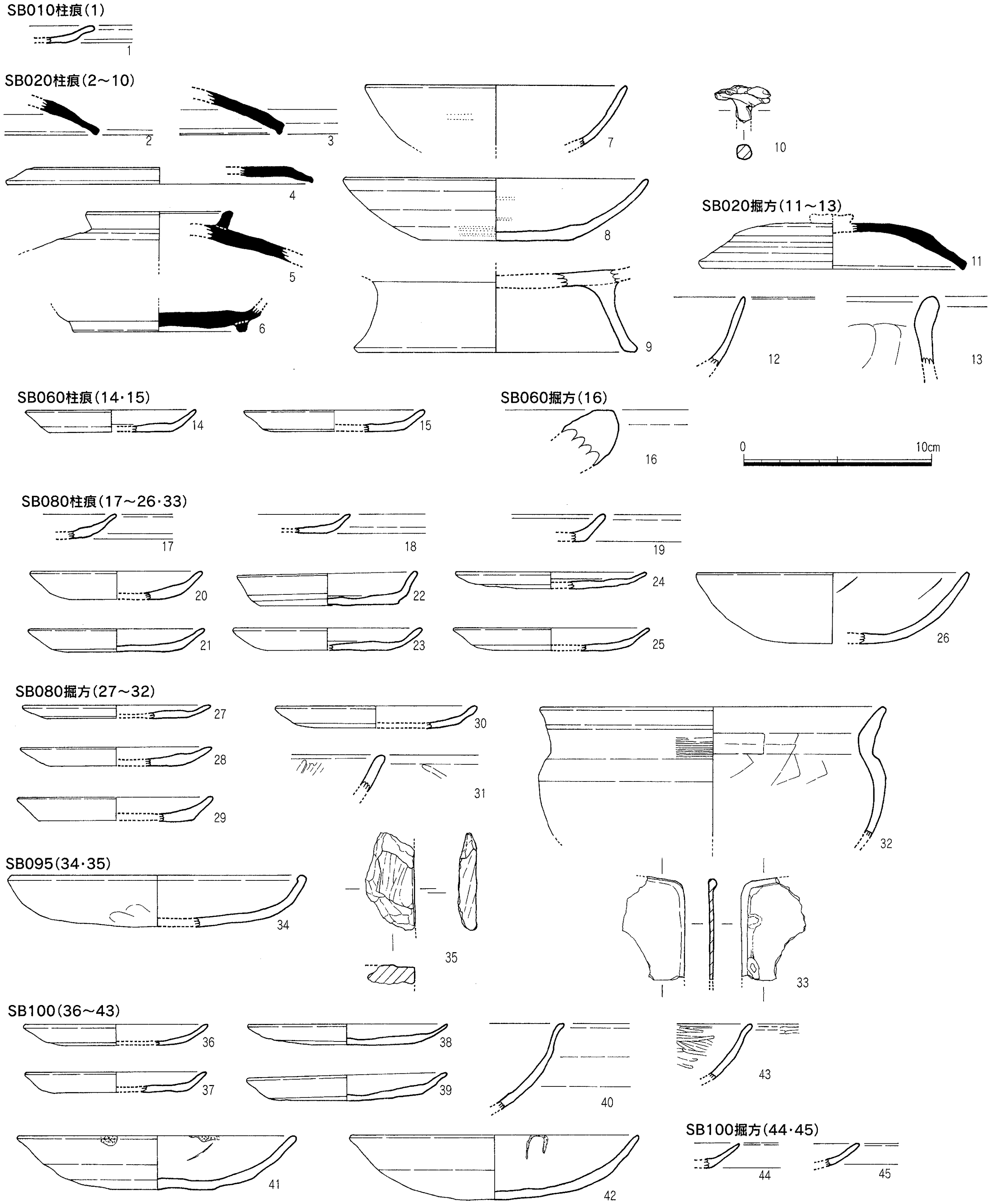


Fig.34　SB010・020・060・080・095・100 出土遺物実測図（1/3）

色を呈する金属が付着している。胎土のきめは粗く、0.5〜2mmの砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、明灰色〜淡灰色〜淡茶色を呈す。S-60b掘方出土。

SB080出土遺物（Fig.34）

SB080柱痕出土遺物

土師器

小皿a（17～25）　17は口縁部の破片である。残存高1.25cmを計る。底部切り離しは不明。S-85b柱痕出土。18は口縁部の破片である。残存高0.95cmを計る。推定口径は8.4cm前後。底部切り離しは不明。S-85明黄粘出土。19は口縁部の破片である。残存高1.4cmを計る。底部切り離しは不明。S-85c柱痕出土。20は口径9.2cm、器高1.5cm、底径4.7cmを計る。底部切り離しは不明。S-141出土。21は口径9.4cm、器高1.25cm、底径6.9cmを計る。底部切り離しは不明。S-141出土。22は口径9.6cm、器高1.7cm、底径7.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。S-164出土。23は口径10.0cm、器高1.2cm、底径6.4cmを計る。底部切り離しは不明。S-141出土。24は口径10.2cm、器高0.9cm、底径8.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。S-367出土。25は口径10.4cm、器高1.2cm、底径8.5cmを計る。底部切り離しは不明で、板状圧痕あり。S-85b出土。

丸底坏a（26）　口径14.4cm、器高3.75cmを計る。摩耗しているが、底部切り離しは回転ヘラ切りとみられ、内面にはミガキbのコテ当て痕がみられる。S-141出土。

金属製品

不明銅製品（33）　鏡の可能性がある薄い金属製品で、断面隅丸方形を呈した縁部を持つ。図上で天地残存長5.4cm、最大幅3.3cmを計る。厚さについては、縁は0.42cm、その他は約0.25cmを計る。S-60f出土。

SB080掘方出土遺物

土師器

小皿a（27～30）　27は口径10.0cm、器高0.7cm、底径8.0cmを計る。底部切り離しは不明。S-136掘方出土。28は口径10.2cm、器高1.0cm、底径6.9cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。S-85c掘方出土。29は口径10.4cm、器高1.25cm、底径8.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。S-85b掘方出土。30は口径10.7cm、器高1.2cm、底径8.8cmを計る。底部切り離しは不明。S-80a掘方出土。

甕×鉢（32）　口縁部～体部が残存する破片である。口径18.4cm、残存高6.95cmを計る。内面はケズリの後ナデを施す。外面は口縁部と体部の境に横方向のハケ目が観察される以外はナデを施す。胎土のきめは細かく0.5～1mmの砂粒を少量含み、雲母片を多く含む。焼成は良好で、内面は褐色～淡茶灰色～黒褐色～淡茶色を、外面は淡橙茶色～淡茶色を呈す。S-85c掘方出土。

黒色土器B類

椀（31）　口縁端部の破片である。残存高2.0cmを計る。内外面ともミガキaを施す。胎土のきめは細かく0.2mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好。S-80a掘方出土。

SB095出土遺物（Fig.34）

土師器

坏（34）　口径15.8cm、器高2.8cm、底径11.0cmを計る。摩耗のため調整は不明な部分が多いものの、外面底部には指頭痕がみられ、口縁端部内面には沈線が一条巡る。胎土は0.5mm大の砂粒を多く、1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で明橙褐色を呈す。畿内系。S-95h出土。

石製品

不明製品（35）　滑石の加工品である。展開図の右側の面を削っている。展開図左側の面も残っている可能性がある。S-95f柱痕出土。

SB100出土遺物 (Fig.34)

SB100出土遺物

土師器

小皿a（36～39）　36は口径9.8cm、器高1.15cm、底径7.4cmを計る。底部切り離しは不明。S-65b出土。37は口径9.6cm、器高1.1cm、底径7.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。S-75a柱痕出土。38は口径10.6cm、器高1.15cm、底径7.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。S-65a出土。39は口径10.6cm、器高1.2～1.4cm、底径8.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。S-65a出土。

椀×丸椀（40）　口縁部～体部が残存する破片である。残存高4.6cmを計る。摩耗のため調整は不明。胎土は2mm以下の砂粒を多量含み、雲母片をごく少量含む。焼成はやや良好で、淡茶灰色を呈す。S-75a柱痕出土。

丸底坏a（41・42）　41は口径14.8cm、器高2.85cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。内面にはミガキbのコテ当て痕がみられる。また、口縁部には煤の付着により黒茶色を呈した部分がある。灯明皿として使用されたとみられる。S-65a出土。42は口径15.4cm、器高3.4cmを計る。摩耗により調整は不明。口縁部には煤の付着により黒茶色を呈した部分がある。灯明皿として使用されたとみられ、中央の煤が付着していない部分が灯芯と考えられる。芯幅は推定0.8cm。S-65a出土。

黒色土器B類

椀（43）　口縁部～体部が残存する破片である。残存高3.0cmを計る。内外面にミガキcを施す。胎土は2mm以下の砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、灰黒色を呈す。S-75d柱痕出土。

SB100掘方出土遺物

土師器

小皿a（44・45）　44は口縁部の破片である。残存高1.3cmを計る。底部切り離しは不明。S-75a掘方出土。45は口縁部の破片である。残存高1.2cmを計る。底部切り離しは不明。S-75d掘方出土。

SB145出土遺物 (Fig.37)

土師器

小皿a（1）　底部の破片。摩耗が激しく調整は不明。

皿c（2）　高台部の破片。底径は13.2cmに復元可能である。

椀c（3）　高台から体部の破片。摩耗が激しく調整は不明。

緑釉陶器

椀（4）　口縁部の破片。内面は摩耗している。外面はミガキを施す。

土製品

焼土塊（5～7）　色調は淡褐灰色～淡橙黄色を呈する。ナデによる平坦な面と剥離面を持つ。表面観察からは、藁や棒状の圧痕が認められる。すべて剥離した個体であり、大きさは約3～5cm。剥離面の色調は灰色系、平坦面の色調は橙黄色系を呈するのは風化環境によるものか、二次焼成に由来するものかは判断が難しい。大宰府条坊跡第50次調査成果を参考にすると、木舞の存在が確認されていない本遺跡資料では、壁材の属性を満たさないが、平坦な面を持つ点や、圧痕跡などから、平面をもつ構造物に密着していたことが伺える。

【参考文献】

狭川真一「V、総括（2）各種土製品について」『大宰府条坊跡XI-第50次調査-』1999 太宰府市教育委員会

SB420出土遺物（Fig.35）

SB420a出土遺物

土師器

小皿（1～3）　口径が計測できる3は、8.8cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

丸底坏（4・5）　器面磨耗のため詳細不明。

SB420a柱痕出土遺物

土師器

坏×皿（6）　やや反り気味に立ち上がる形状を有する。

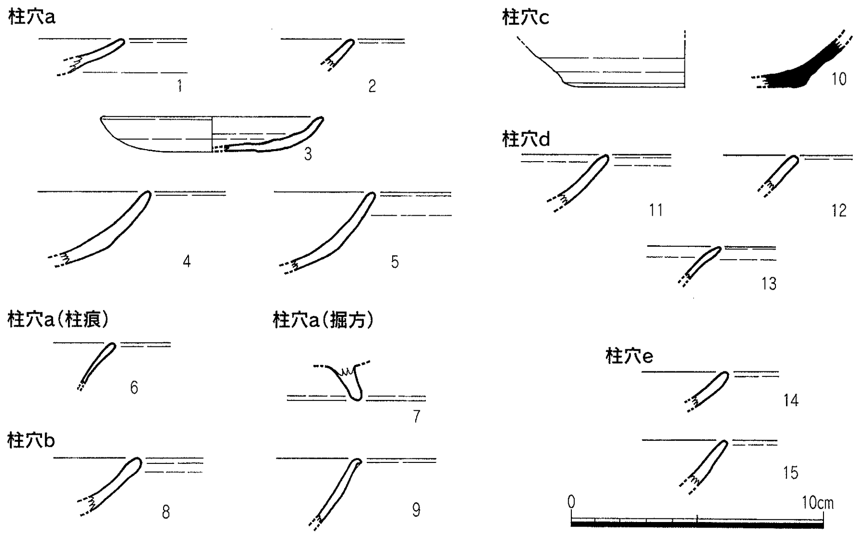


Fig.35　SB420 出土遺物実測図（1/3）

SB420a掘方出土遺物

土師器

高台（7）　高台のみの破片資料で、詳細不明。

SB420b出土遺物

土師器

小皿（8）　やや丸みを有する口縁部破片。

白磁

椀（9）　口縁端部をやや外反させる、V-3類。

SB420c出土遺物

須恵器

椀（10）　底部外面は回転ヘラ切りするもので、やや内湾しつつ口縁部へ移行するものと考えられる。生産地不明ながら、搬入品と考えられる。

SB420d出土遺物

土師器

坏×皿（11・12）　やや丸みを有する口縁部形態を有する。

青磁

椀（13）　口縁部の破片資料であることから全形については判然としない。II系。

SB420e出土遺物

土師器

坏×皿（14・15）　やや内湾気味に立ち上がる口縁部破片。

SB530関連（S-529・554・573）出土遺物（Fig.36）

須恵器

蓋（3）　断面三角形が退化した口縁部形状を有する。

坏c（7）　底部から体部への移行がやや丸みを有し、直立気味に口縁部へ移行する。

高坏（4）　やや深めの底部へ移行するものと考えられる高坏で、口縁端部に平坦面を形成する。

甕（8）　口縁部外面を断面三角形に肥厚させる。

土師器

椀c（6）　高台のみの破片資料。やや高めの高台を貼付する。

甕（5）　頸部屈曲があまりないもので、体部内面はヘラ削りによって調整。

土製品

土錘（9）　ナデ調整によって成形される。一部欠損。

SB535関連（S-542）出土遺物（Fig.36）

土師器

椀c（10）　やや高めの高台破片。胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

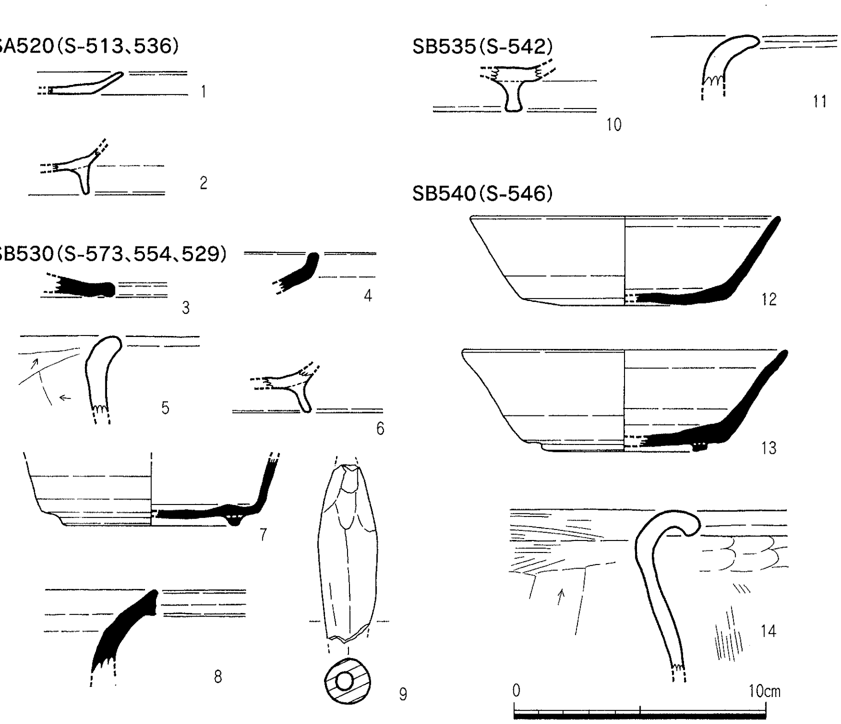


Fig.36　SA520・SB530・535・540 関連遺物実測図（1/3）

甕（11）　器面磨耗のため詳細は不明。口縁部の破片資料。

SB540関連（S-546）出土遺物（Fig.36）

須恵器

坏（12・13）　底部と体部の境界が明瞭で、直線的に外方へ開く体部形態を有する。高台を貼付する13は、高台貼付後に畳付部分を粗く回転ナデによって調整する。

土師器

甕a（14）　口縁部を大きく外方へ反らすもので、体部外面および口縁部内面をハケ調整、体部内面はヘラ削りによって器面調整する。胎土中には角閃石、白雲母細片を多く混入する。

SB810出土遺物

SB810e出土遺物（Fig.37）

土師器

小皿a1（8）　口径10.4cm、器高1.65cm、底径7.8cm。底部切り離しはヘラ切り。

第1遺構面溝出土遺物（Fig.38～45）

SD001出土遺物（Fig.38）

SD001（S-23）出土遺物

須恵器

坏c（1）　底部の破片である。残存高2.4cm、高台径8.3cmを計る。調整は回転ナデで、底部内外面にはナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～やや暗い灰青色を呈す。

土師器

坏a（2）　体部と底部の境が残存する破片である。残存高2.1cmを計る。摩耗により調整不明の部分が多いが、体部外面は回転ナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、淡橙黄色を呈す。

坏c（3）　底部の破片である。残存高1.4cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、淡赤茶色を呈す。

皿a（4）　口縁部～底部が残存する破片である。残存高1.7cmを計る。摩耗により調整不明の部分が多いが、底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5～1mmの砂粒、細かい雲母片を多く含む。焼成は不良で、淡橙黄色を呈す。

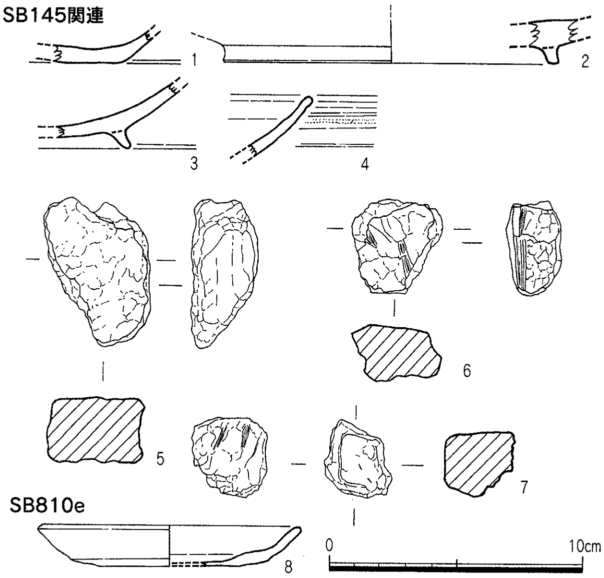


Fig.37　SB145・810 出土遺物実測図（1/3）

SD001（S-22）出土遺物

須恵器

蓋c（5）　つまみ部付近が残存する破片である。残存高1.5cmを計る。天井部切り離しは不明だが、その後ナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含み、黒褐色の粒子を少し含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色を呈す。

蓋3（6）　口縁部の破片である。残存高1.6cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、天井部は内外面ともナデを施す。胎土は0.5mmの砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰青色～淡灰青色を呈す。

坏c（7）　高台部の破片である。残存高1.8cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒を少し含み、黒灰色の粒子を少し含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～淡灰黒色～淡灰白色を呈す。

SD070出土遺物（Fig.38）

須恵器

蓋c3（8）　つまみ部が欠損している。口径17.6cm、残存高3.0cmを計る。天井部切り離しはヘラ切りで、その後器面調整を行う。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色を呈す。

坏c（9・10）　9は底部の破片である。残存高2.25cm、高台径9.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は1mm以下の黒色砂粒・白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰色を呈す。10は底部の破片である。残存高1.8cm、高台径11.0cmを計る。底部切り離しは不明。胎土は1mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成・還元ともに良好で、白灰色を呈す。

土師器

椀c1（11）　底部の破片である。残存高1.6cmを計る。推定高台径は6.6cm。底部切り離しは風化のため不明。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、茶灰色を呈す。

土製品

不明製品（12・13）　いずれも扁平な形状をした土製品である。12は図上天地残存長8.8cm、残存幅7.0cm、厚さ1.9～2.4cmを計る。器面は僅かに凹んだ面は何かを押しつけて調整したような印象を受け、反対面はナデを施す。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、凹面側は明灰色、

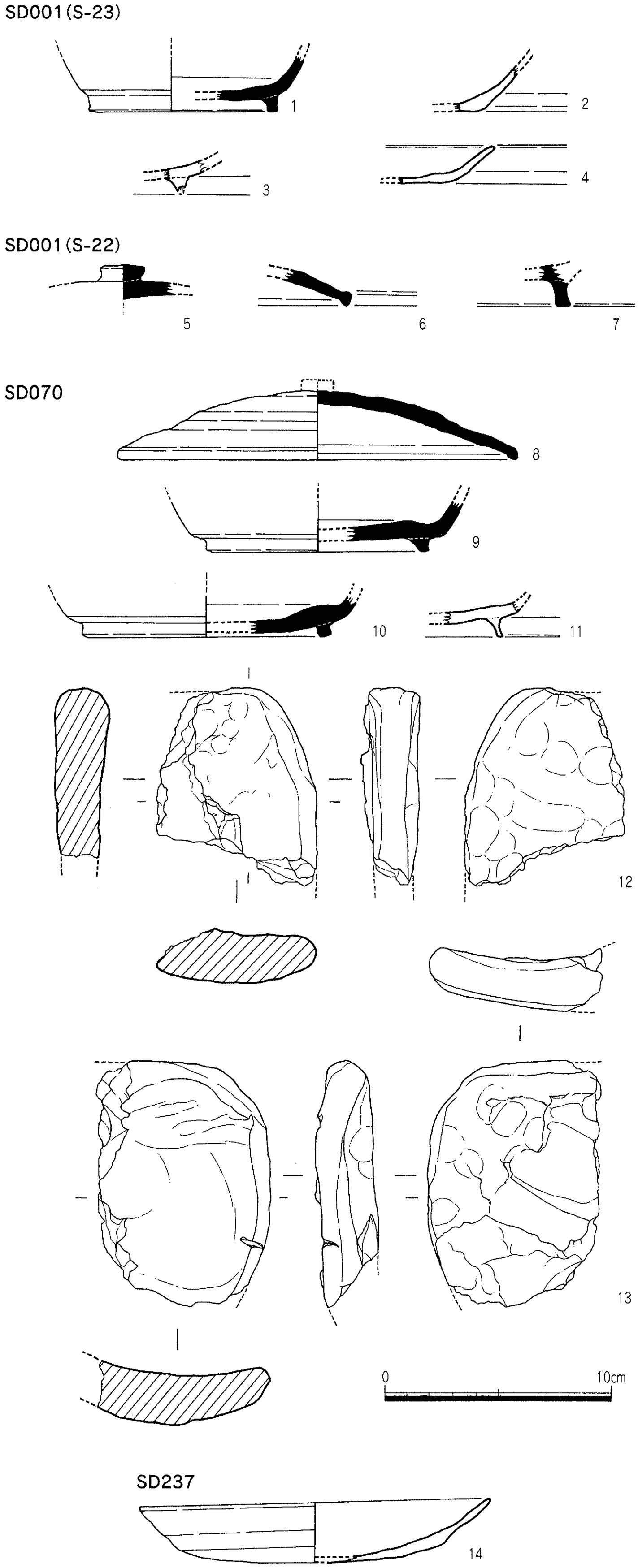


Fig.38　SD001・070・237 出土遺物実測図（1/3）

反対面は茶灰色～橙茶灰色（一部）を呈す。13は図上天地残存長10.8cm、残存幅7.6cm、厚さ2.8cmを計る。器面は僅かに凹んだ面は何かを押しつけて調整したような印象を受け、反対面はナデを施す。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、凹面側は明灰色～赤紫色（一部）、反対面は橙茶灰色～暗灰色を呈す。

SD237出土遺物（Fig.38）

土師器

丸底坏a（14）　口径15.4cm、器高2.5～2.9cm、底径11.5cmを計る。風化のため調整不明。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、黄白色を呈す。

SD400出土遺物（Fig.39）

土師器

皿a（1）　口径17.0cmを測るもので、底部から内湾気味に口縁部へ至る形状を有している。底部外面は回転ヘラ切り。

丸底坏（2・3）　口縁部の破片で、口径推定には至らなかった。

坏（4）　底部の破片で、外面に円盤状底部様の形状をとどめている。

黒色土器A類

甕（5）　口縁部が直線的に開き、端部を外方へやや屈曲させるものである。内面黒色化およびミガキcによって仕上げている。

土製品

瓦玉（6）　瓦再利用品で、布目痕跡が観察できる。

SD405出土遺物（Fig.40）

SD405出土遺物

土師器

小皿a1（7）　口径推定が困難な資料で、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

金属製品

釘（8）　鉄製の釘で、頭部分を折り曲

げによって形づくっている。先端部分が欠損。

SD405黄茶色土出土遺物

小皿a1（9）　口径10.8cmを測り、底部は回転ヘラ切りによって処理されている。

SD410出土遺物（Fig.40）

SD410出土遺物

須恵器

蓋1（10）　口縁部のみの破片資料で、口径推定が困難であり、型式認定までは至っていない。立ち上がりから飛鳥期（大宰府IA期）に位置付けることは可能であると考える。

坏c（11・14）　11は高台が剥離しているものの、底部から体部への移行部分に丸みを有する個体である。内外面ともに回転ナデによって調整されている。14は高台のみの破片で、坏部への貼付後に粗く畳付部分を回転ナデするものである。

供膳具（12）　口縁部の破片資料で、全形特定には至らない。

土師器

坏c（13）　高台のみの破片で、坏部への貼付後に粗く畳付部分を回転ナデするものである。

SD410淡茶色土出土遺物

須恵器

坏c（17・18）　高台の破片で、高台貼付後に丁寧に畳付部分を成形する18と、粗く成形する17がある。

土師器

供膳具（15・16）　口縁部のみの破片で全形特定には至らない。

甕a（19）　口縁部の破片で、内面には横方向のハケ痕跡が観察できる。

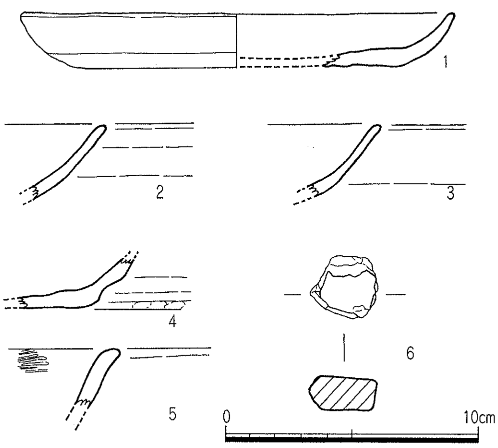


Fig.39　SD400 出土遺物実測図（1/3）

SD430出土遺物（Fig.40）

SD430出土遺物

須恵器

蓋3（20）　口縁端部の破片資料で、口縁端部折り曲げ後に端部のみを再調整するものである。

円面硯（21）　海部分および脚基部の破片で、形状から円面硯と推定した。

高坏（22）　口縁部の破片で、口縁部の立ち上がりおよび端部のやや平坦面形成意図などから高坏と推定した。

壺（23）　口縁部を外方へ屈曲させ、端部を面取りするものである。

獣脚（24）　168SE425出土のものと同一と考えられ（Fig55-43）、ナデによって成形している。

土師器

坏（25～33）　いずれも口縁部の破片資料で、口径が推定できる25～28では、11.4cm～13.0cmを測る。内外面ともに回転ナデ。なお27は胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

甕（34・35）　34は内外面を丁寧な回転ナデによって仕上げるもので精製の甕に位置付けることができる。35は、粗製の一般的な甕で、口縁部内面および体部外面についてはハケ調整がなされ、体部内面についてはヘラ削り、口縁部外面は横ナデであった。

黒色土器A類

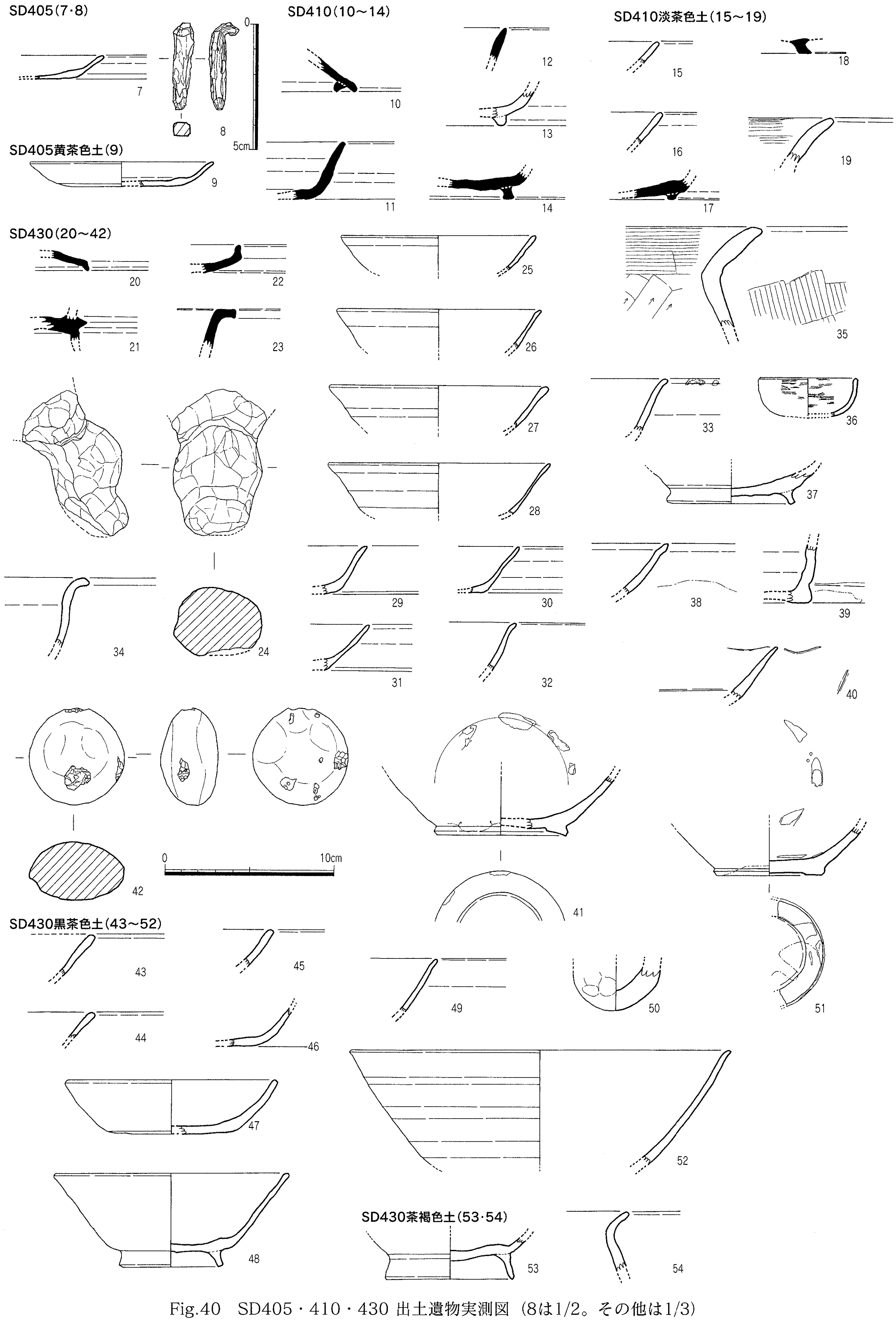


Fig.40　SD405・410・430 出土遺物実測図（8は1/2。その他は1/3）

椀c1（37）　見込み部分をミガキcによって仕上げているもので、体部形状は直線的に移行してゆく可能性がある。

黒色土器B類

小鉢（36）　小型のもので、内外面ともに丁寧なミガキcによって仕上げられている。胎土中に白雲母細片を多く混入している。

青磁

椀（38・41）　両者ともに越州窯系青磁で、38はII類、41はI-1b（2）類。

坏（40）　口縁部を波状に形づくるもので、越州窯系青磁坏I-2類。

水注（39）　底部のみの破片で、長沙窯系青磁水注。

石製品

磨石（42）　実測面に使用痕跡が観察できるもので、中粒砂岩礫を使用している。

SD430黒茶色土出土遺物

土師器

坏（43～47）　全形が分かる47は、口径12.4cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀c1（48）　高台高の高いもので、直線的な体部形状を有している。口径13.8cmを測る。

青磁

椀（49・51・52）　すべて越州窯系青磁で、49および52はI-5類、51はI-1b（2）類。

製塩土器

焼塩壺（50）　底の部分で、立ち上がり形状からは円筒状のものになるものと考えられる。内面には布目痕跡が観察できる。

SD430茶褐色土出土遺物

土師器

椀c（53）　高台高の高いもので、体部形状については判然としない。

黒色土器A類

甕（54）　内面を黒色化しているが、顕著なミガキ痕跡は観察できなかった。

SD445出土遺物（Fig.41）

須恵器

椀c1（55）　口径12.6cmを測り、高台高が高く、直線的に外方へ開く体部形態を有している。

土師器

坏a（56）　口径13.4cmを測り、底部切り離し痕跡は不明。底部から体部への移行形状は明瞭に底部と体部境界が区別できるように屈曲している。

SD455出土遺物（Fig.41・42）

SD455出土遺物（Fig.41）

土師器

小皿a1（57～82）　底部切り離しは、全て回転ヘラ切り。口径は8.3cm～10.8cmを測り、58・60・61・63・66・68・69・71・72は底部丸底化が図られている。なお62は、器高が高く特異な形態を有する。

皿（83・84）　底部から外方へ大きく開く形状を呈するもので、底部外面の処理が観察できる83では回転ヘラ切りによって処理されている。

丸椀（87）　後述する丸底坏に比べ、器高が高い特徴を有している。内外面ともに器面が磨耗しており詳細については不明。

丸底坏（85・86・88～99）　口径が推定できるもので、14.7cm～16.0cmを測る。底部は全て回転ヘラ切りによって処理されている。

甕a（100）　頸部上位の破片資料で、体部内面をヘラ削り、体部外面をハケによって調整している。胎土中に角閃石を多く含んでいる。

大皿c（101）　口縁端部をつまみ上げることで形づくるもので、高い高台を貼付する。

鉢（102）　口縁端部をつまみ上げるもので、口縁端部外面を面取りする。

壺（103）　内面に回転ナデによる凹凸が顕著に観察できるもので、全形については不明。

把手（104）　甕に貼付される把手と考えられ、甕本体に挿入する突起を有し、指頭圧による成形を行っている。

黒色土器A類

椀（107）　やや丸みを有する体部形態を有するもので、器面磨耗のため調整・装飾技法については定かではない。

黒色土器B類

椀（105・106・108）　いずれも口縁部の破片資料で、内外面にミガキc痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（110）　口縁部の破片資料で、全面に施釉されている。

砥石（109）　使用面は、実測図として表記した１面のみで、石材は細粒砂岩。

SD455黒色粘土出土遺物（Fig.42）

土師器

小皿a1（111～115）　口径が計測できるもので10.05cm～11.0cmを測る。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（116・117）　全体状況が観察できる117は、口径14.8cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（118）　口縁部の破片資料で、内外面にミガキc痕跡が観察できる。須恵質の焼き上がりを呈している。

瓦

平瓦（119）　「平井」文字瓦で、I-1類。

丸瓦（120）　文字瓦であろうが、「井」らしく判読できそうな痕跡のみ確認でき、大宰府分類のどれに該当するものか判然としない。

SD455黄色土出土遺物（Fig.42）

須恵器

蓋1（121）　やや丸みを有する天井部形状を呈しており、かえり部はつまむ程度に形づくられている。

土師器

小皿a1（122）　口径推定ができないもので、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（123）　口径14.8cmを測り、口縁端部には油煙痕跡が観察できる。

SD480出土遺物（Fig.42）

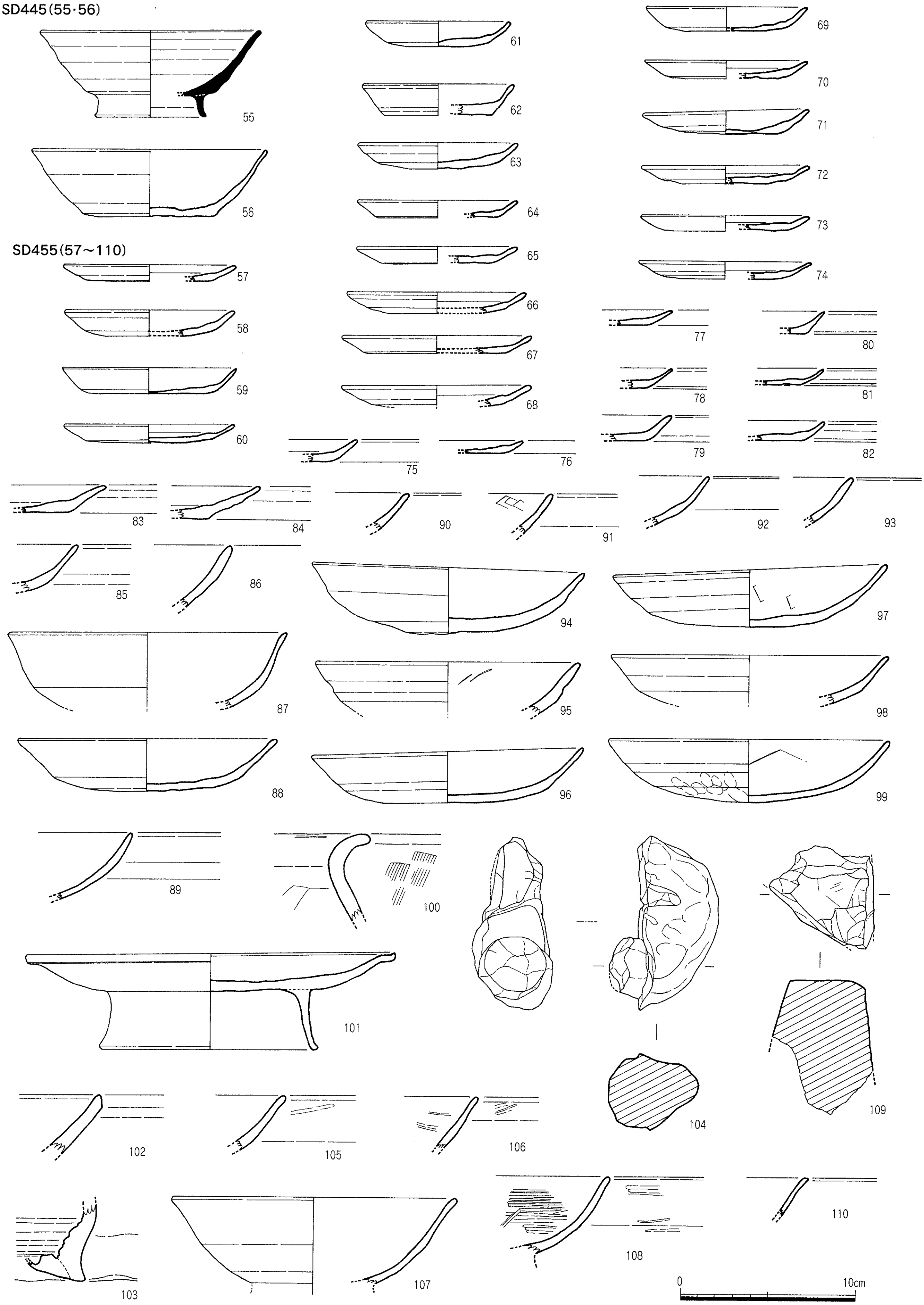


Fig.41　SD445・455 出土遺物実測図（1/3）

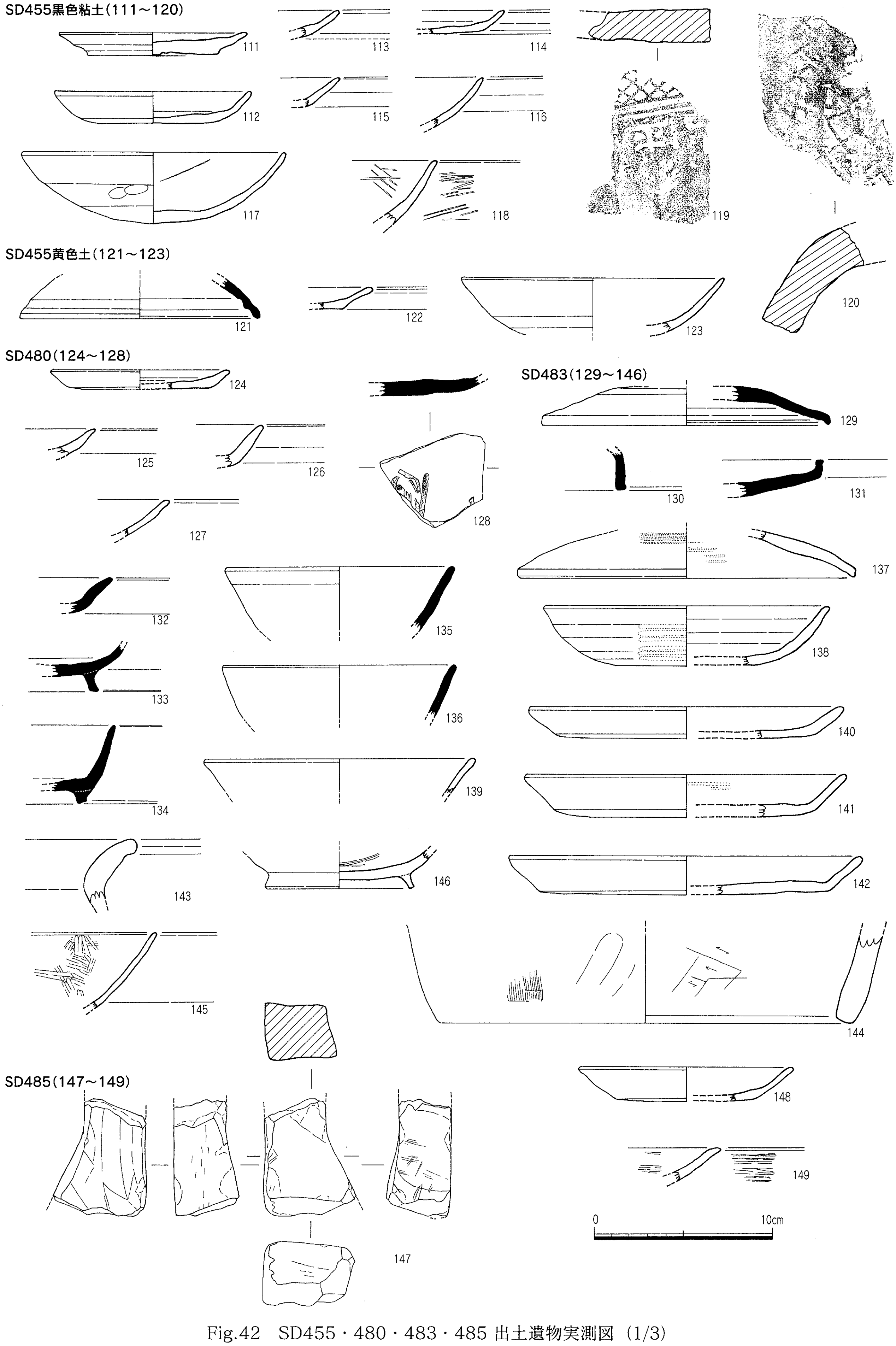


Fig.42　SD455・480・483・485 出土遺物実測図（1/3）

須恵器

転用硯（128）　供膳具の底部破片で、器種特定には至っていないものの、内面と考えられる箇所に磨り痕跡が観察できることから硯への転用がなされたものと考えられる。なお外面には墨書痕跡が観察できる。

土師器

小皿a1（124）　口径10.0cmを測り、底部外面は磨耗のため切り離し処理については不明。

小皿（125・126）　口縁部のみの破片資料で、口径ならびに全体形状については不明。

丸底坏（127）　口縁部のみの破片で、口径ならびに全体属性については不明。

なお、図化できなかった資料には、白磁Ⅳ、V-1a類、古式土師器壺などがある。

SD483出土遺物（Fig.42）

須恵器

蓋3（129）　天井部外面を回転ヘラ削りするもので、口縁端部は断面三角形に折り曲げる。

壺蓋（130）　口縁端部を平坦に仕上げるもので、口縁端部外面がやや凹んでいる。

高坏（131）　口縁端部を平坦に形づくるもので、坏部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。

皿（132）　口縁部の破片資料で、外方へやや開き気味の形態を有する。

坏c（133・134）　高台を貼付後に、形状を整える意図が読み取れる丁寧なナデが観察できるものである。口径ないしは高台径は復原できなかった。

坏（135・136）　口縁部の破片資料で、12.8cm・13.0cmをそれぞれ測る。

土師器

蓋3（137）　天井部外面は回転ヘラ削りによって器面調整するもので、内外面ともにその後ミガキaによって整えられている。口縁部成形はつまみによって断面三角形に形づくられている。

坏d（138）　ミガキaによって底部外面から体部外面にかけての回転ヘラ削り部位の特定ができなかった。内面に関しては、器面磨耗のため不明。胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

坏（139）　口縁部の破片資料で、口径15.2cmを測る。

皿a（140～142）　140は底部外面を回転ヘラ削りし、胎土中に白雲母を多く含んでいる。他のものは底部外面に回転ヘラ切り痕跡をとどめている。141は内面にミガキa痕跡が観察できる。

甕（143）　口縁部の破片資料で、外面に横ナデ痕跡が観察できる。

甑（144）　基部の破片資料で、全体形状に関しては不明。内面には横方向のへラ削り、外面にはハケ調整の痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀（145・146）　口縁部の破片資料である145は、内面に丁寧なミガキc痕跡が観察でき、胎土中に白雲母が多く観察できる。146は高台の破片資料で見込み部分にミガキc痕跡が観察できる。

SD485出土遺物（Fig.42）

土師器

小皿a1（148）　口径12.0cmを測り、口縁端部が黒褐色に変色している。

緑釉陶器

皿（149）　口縁部の破片資料で、内外面ともに丁寧なミガキc痕跡が残る。京都系と考えられる。

石製品

砥石（147）　実測面に使用痕跡が観察できるもので、細粒砂岩礫を用いている。

SD495出土遺物（Fig.43）

須恵器

壺（150）　外面を格子叩きするもので、縦耳状の把手を貼付している。

土師器

皿（151～155）　口径が明らかな個体では、12.3cm～12.4cmを測る。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏（156～165）　口径が計測できるものはなく、底部から直線的に口縁部へ至る。

鉢（166）　口縁端部を外方へ開くもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

黒色土器A類

椀（167）　内面を黒色化するもので、直線的な体部形態をとるものと考えられる。

SD500出土遺物（Fig.43）

須恵器

蓋3（168・169）　口縁端部を断面三角形に形づくるもので、口縁部成形に二工程が観察できる。

坏c×皿c（170）　高台のみの破片資料であり、器種特定には至っていない。高台は貼付後、畳付部分を粗く調整する回転ナデ痕跡が観察できる。

甕b（171）　口縁部を二重口縁に形づくる。

土師器

甕（172）　口縁部のみの破片資料で、器面についても磨耗していることから調整痕跡については判然としない。

SD505出土遺物（Fig.43）

土師器

小皿1（173）　器面磨耗のため調整痕跡等は観察できなかった。口径に関しても不明。

椀c1（174）　高台の破片で、やや低い高台高を呈する。

坏（175）　直線的な体部形態を有する。

黒色土器A類

椀c（176）　高台部分の破片で、胎土中に白雲母細片を多く混入している。

石製品

砥石（177）　実測面に使用痕跡が観察できたもので、細粒砂岩礫を用いていた。

SD510出土遺物（Fig.43）

土師器

小皿a1（178）　口径9.2cmを測り、底部外面は磨耗のため不明。

丸底坏（179）　口径13.9cmを測り、底部外面は磨耗のため不明。

SD648出土遺物（Fig.43）

須恵器

坏c（180）　断面台形の高台形状を有するもので、底部外面は回転ヘラ切り、見込み部分には不定方向のナデ痕跡が観察できる。

土師器

坏（181～184）　口径10.8cm～12.6cmを測り、181は底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏c（185）　高台から体部下位にかけての資料で、やや丸みをもって体部へ立ち上がる。底部外面は回転ヘラ切り。

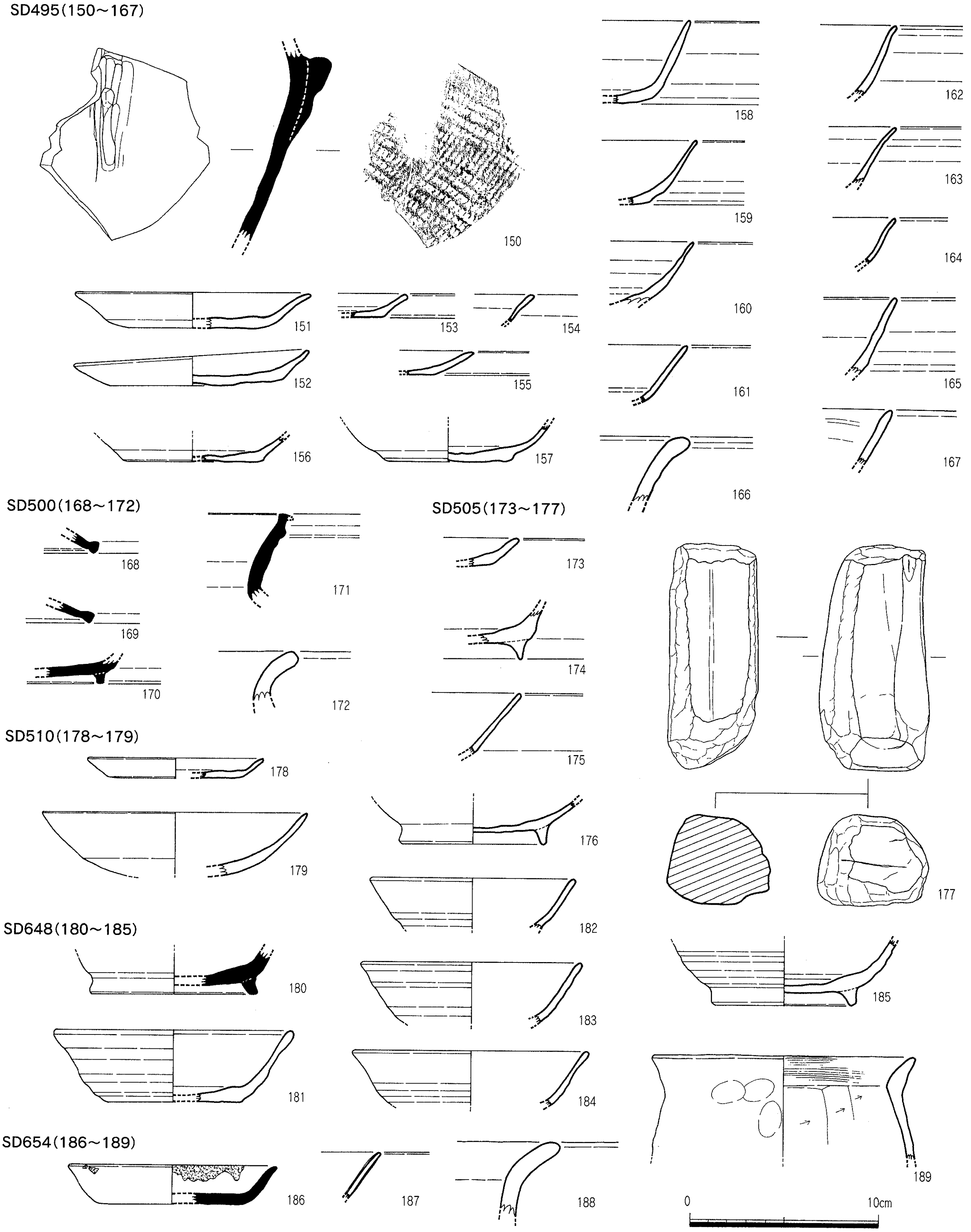


Fig.43　SD495・500・505・510・648・654 出土遺物実測図（1/3）

SD654出土遺物（Fig.43）

須恵器

皿a（186）　口径11.0cmを測り、底部外面には、回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

土師器

甕（188）　頸部から口縁部の破片資料で、頸部は緩やかに外反している。胎土中には白雲母細片が多く観察される。

白磁

椀（187）　口縁部の破片資料で、乳白色の色調を有しており、I-2類に該当するものと考えられる。

SD815出土遺物（Fig.44・45）

SD815出土遺物（Fig.44）

須恵器

こね鉢（1）　底径は8.6cm。底部切り離しは糸切り。内面は使用時により平滑になっている。

土師器

丸底坏a（2）　口径15.2cm、器高3.0cm、底径10.9cm。内外面摩滅が激しい。

鉢（3）　口径31.1cm、器高9.8cm、底径20.8cm。外面の調整痕跡は摩滅によって残存していない。内面には若干ではあるがハケ調整が見受けられる。円盤状の底部に体部を接合した痕跡が外面底面の接合部分で、粘土紐の継ぎ目として観察できる。焼成が不良のため色調は暗灰褐色である。口縁端部に暗褐色や暗灰褐色に変化した跡が見られる。

金属製品

不明品（4）　縦4.3cm×横4.4cm×厚み1.7cm。重さ100.2g。用途は不明。

SD815③暗茶灰色土出土遺物（Fig.44）

瓦器

椀（5）　口径16.9cm、器高4.75～5.2cm、底径6.8cm。内外面とも摩滅により調整不明。内底面だけミガキc調整が若干確認できる。高台は張り付け高台。

石製品

磨り石（6）　色調は明灰色。両面に敲打痕が見られる。石材は安山岩製。

SD815④暗茶灰色土出土遺物（Fig.44）

白磁

椀（7）　IV-1a類。完形で出土。焼け歪みが見られる。

土製品

羽口（8～10）　破片。厚み2cmに復元できる。

焼土塊（11）　暗褐色～淡褐色を呈する。6.1cm×4.45cm×4.3cm。

SD815①黒青色粘質土出土遺物（Fig.44）

土師器

小皿a（12）　口径9.8cm、器高1.75cm、底径6.8cm。底部切り離しはヘラ切りである。内外面に煤が付着している。

丸底坏a（13）　口径15.3cm、器高3.35cm、底径10.7cm。内外面摩滅のため調整は不明。

SD815②黒青色粘質土出土遺物（Fig.44）

小皿a（14～20）　口径8.4～9.5cm、器高1.1～1.35cm、底径6.3～7.9cm。10は小破片のため底部切り離しが不明だが、他はすべてヘラ切り。

丸底坏a（21～24）　口径14.2～15.4cm、器高1.75cm、底径6.8cm。

石製品

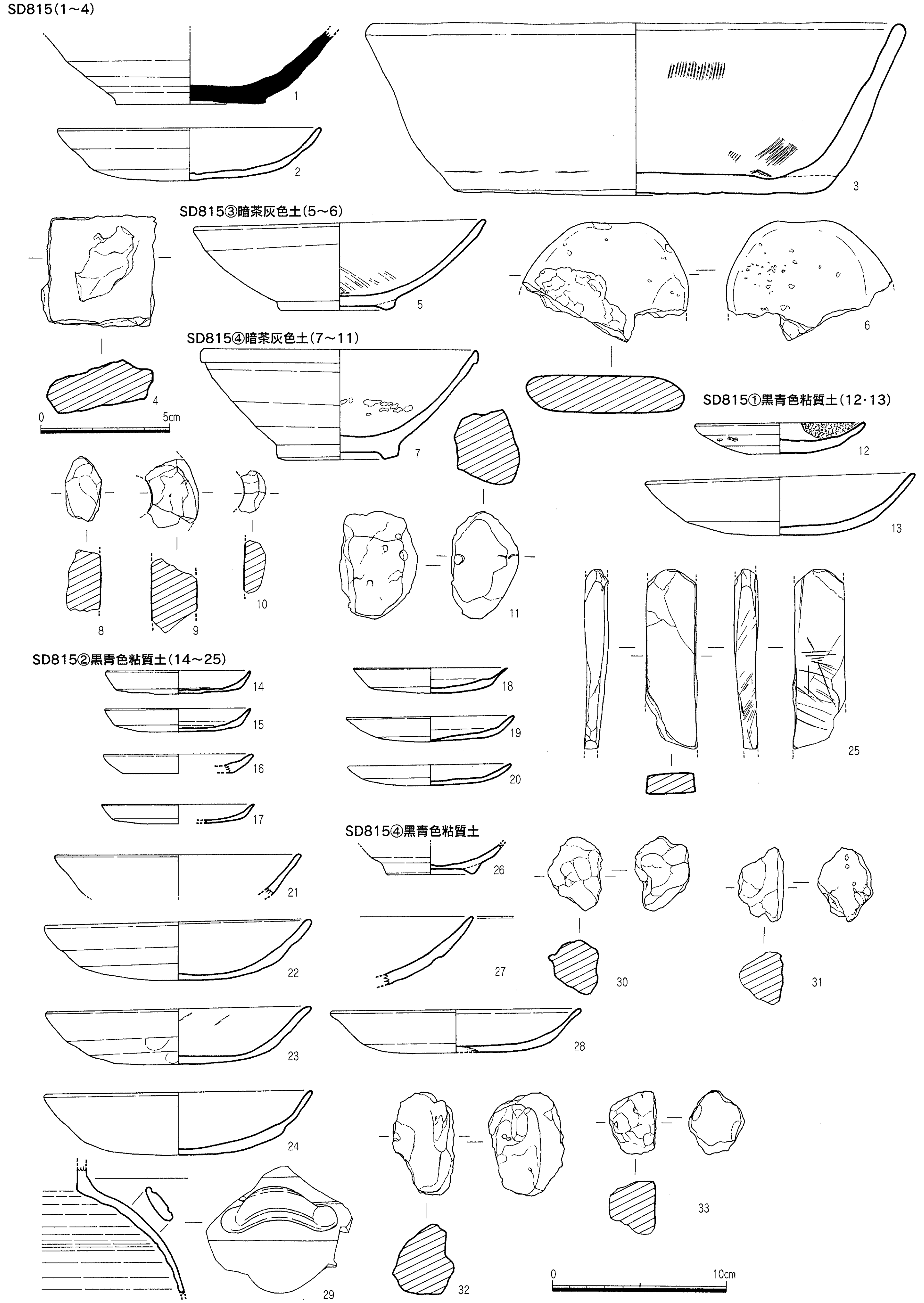


Fig.44　SD815暗茶灰色土③④・黒青色粘①②④出土遺物実測図（4 は1/2、その他は1/3）

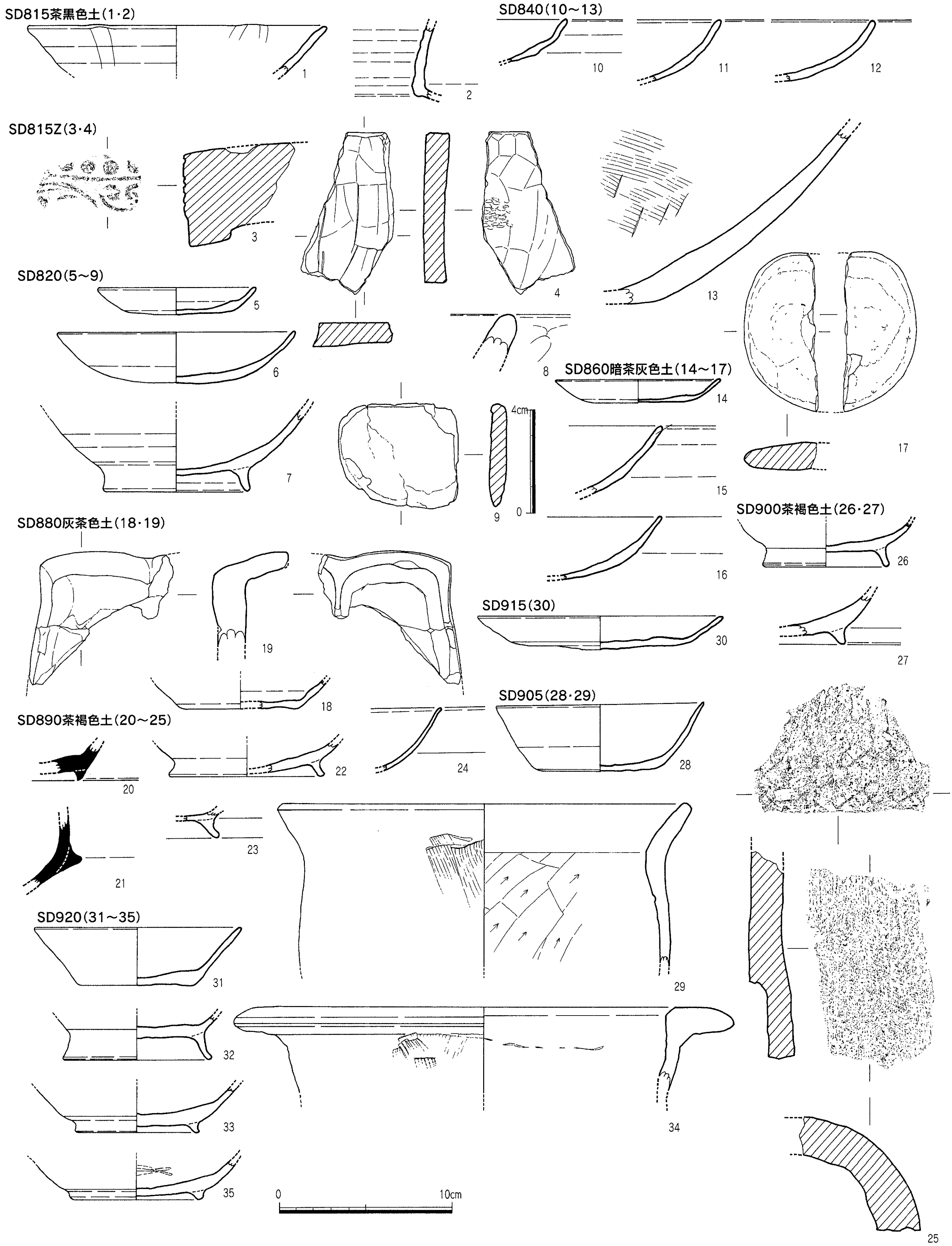


Fig.45　SD815茶黒色土・815Z・820・840・860暗茶灰色土・880灰茶色土・890茶褐色土・900茶褐色土・905・915・920出土遺物実測図（9は1/2、その他は1/3）

砥石（25）　色調は灰白色。四面すべてを砥石として使用しているため、表面は平滑になっている。

SD815④黒青色粘質土出土遺物（Fig.44）

土師器

椀（26）　底部の破片のみ。貼り付け高台。底径は5.6cm。全体的に摩滅しており調整は不明。

丸底坏a（27・28）　27は口縁部の破片。28は底部押し出しをあまりしないもの。

白磁

四耳壷（29）　II類。胎土はきめ細かく硬質。小さな隙間を多く含む。釉調は半透明で鈍い光沢がある。全体的に薄く施される。内面には部分的に施釉されている。

土製品

焼土塊（30〜33）　すべて小破片。平坦な面が見られる個体もあるが、壁材とするには属性の認定が難しい。

SD815茶黒色土出土遺物（Fig.45）

灰釉陶器

椀（1）　口径17.4cm。輪花を施す。

壺（2）　頸部の破片。

SD815Z出土遺物（Fig.45）

瓦

軒平瓦（3）　上外区に珠文、内区に均正唐草文を配する。下外区は欠損して不明。

石製品

不明品（4）　滑石製石鍋の再利用品か。

SD820出土遺物（Fig.45）

土師器

小皿a（5）　口径9.2cm、器高1.6cm、底径6.6cm。外底面に暗茶褐色の付着物があるため、底部切り離し技法は確認できない。

丸底坏a（6）　口径13.8cm、器高1.6cm、底径6.6cm。摩滅のため調整は不明。

黒色土器A類

椀（7）　摩滅により表面調整は不明だが、部分的にミガキ痕跡が見られる。

土製品

トリベ（8）　口縁部の破片。外面に指頭圧痕がある。色調は淡灰白色を呈す。

金属製品

不明品（9）　縦長4.1cm、横長4.65cm、厚み0.7cm。

SD840出土遺物（Fig.45）

土師器

坏a（10）　口縁部の破片。調整は摩滅のため不明。

丸底坏a（11・12）　摩耗のため不明。

鉢（13）　外面は摩滅のため調整不明。内面はハケ調整。胎土は1〜3mmの淡灰色の砂粒を多く含む。

SD860暗茶灰色土出土遺物（Fig.45）

土師器

小皿a（14）　口径9.6cm、器高1.3cm、底径6.7cm。摩滅のために調整は不明。

丸底坏a（15・16）　口縁部の破片。口縁部は外反せず、直線的に立ち上がる。

石製品

磨石（17）　石材は安山岩製。色調は淡灰色を呈す。重さは84.6g。全面を磨り潰しのために使用しており、摩耗により表面は平滑である。

SD880灰茶色土出土遺物（Fig.45）

土師器

小皿a（18）　底径6.8cm。底部切り離しはヘラ切り。

瓦質土器

硯（19）　硯の海部の破片か。平面形は方形で陸部が若干広がるような形状であったと思われる。海部は仕切りによって2つに分けられている。

SD890茶褐色土出土遺物（Fig.45）

須恵器

坏c（20）　底部高台部の破片。高台の位置は立ち上がりに連続する。

不明（21）　壺か。凸帯をもつ。0.6mm程度の白色砂粒を少量含む。

黒色土器A類

椀（22）　底部の破片。内外面摩耗しているため調整は不明。

黒色土器B類

椀（23）　底部高台部の破片。

緑釉陶器

椀（24）　口縁部から体部の破片。体部外面下位はヘラ削り。残存している部位にはすべて施釉される。

瓦

丸瓦（25）　玉縁部の破片。外面は格子叩き。

SD900茶褐色土出土遺物（Fig.45）

土師器

椀（26）　底部の破片。底径7.3cm。底部外面高台内に板状圧痕が見られる。

黒色土器A類

椀（27）　高台部の破片。内外面摩滅のため調整は不明。

SD905出土遺物（Fig.45）

土師器

坏a（28）　口径12cm、高さ3.85cm、底径7cm。底部切り離しはヘラ切り。口縁部外面に黒褐色の付着物あり。灯明皿として使用した可能性がある。

甕（29）　口径24cm、残存高9.4cm。くの字形に外反する口縁部。器壁調整は外面がハケ調整、内面はヘラ削りである。胎土は0.4～4.5mmの白色砂粒を多量に含んでおり、粒子の細かい白色の雲母も多量に含む。色調は外面が明茶橙色～淡茶橙色、内面は淡赤茶色、橙色である。

SD915出土遺物（Fig.45）

土師器

皿a（30）　口径14.2cm、器高1.9cm、底径10.4cm。底部切り離しはヘラ切り。

SD920出土遺物（Fig.45）

土師器

坏a（31）　口径12cm、器高3.4cm、底径6.8cm。内外面摩滅のため調整不明。

坏c×椀（32）　高台部の破片。底径は8.6cm。

坏c（33）　高台から体部の破片。底径は7.2cm。

甕（34）　口径29cm、残存高5cm。口縁部形状は水平方向へ引き延ばす形をしている。内面はヘラ削り調整、外面はハケ調整。

黒色土器A類

椀（35）　底径7.8cm。内面にミガキcがわずかに確認できる。

第1遺構面井戸出土遺物（Fig.46～82）

SE025出土遺物（Fig.46）

SE025暗灰色土出土遺物

土師器

椀c（1）　丸い形態を持つ椀の底部の破片である。残存高2.3cm、高台径7.7cmを計る。

灰釉陶器

椀（2）　底部の破片である。残存高2.3cm、高台径7.3cmを計る。外面体部は回転ヘラ削りを施し、底部切り離しは糸切り。底部にはトチンによる目跡がある。釉は内面全面にかかっており、見込みにハケを施したような釉ムラがみえる。釉は緑色を帯び光沢のある透明釉である。素地は灰白色を呈し、やや粗く、白色・黒色粒を多く含む。焼成は良好。K-14型式とみられる。

SE025灰褐色砂出土遺物

土師器

坏a（3・4）　3は口径12.5cm、器高3.6cm、底径6.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。4は底部の破片である。残存高2.9cm、底径7.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。板状圧痕あり。

大椀c（5）　体部付近は2/3程度残存する大型の椀cである。高台付の鉢とした方が良いかもしれないがこれで報告した。口径29.2cm、器高16.8cm、高台径18.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りと見られるが、その後のナデで判然としない。成形は回転ナデで、底部内面・体部外面には後にナデを施す。体部外面はナデに工具を使用している。胎土は淡灰白色の0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～5mm大の砂粒を少し含む。焼成は良好で、淡黄白色を呈す。

甕a（6・7）　6は口径24.8cm、器高20.6cmを計る。内面は横方向にハケ目を施した後、ナデおよびナデ押さえを施す。外面は縦方向にハケ目を施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、1～3mm大の砂粒を少し含む。また角閃石や細かい雲母片も少量含む。焼成は良好で、淡褐黄色～暗茶褐色を呈す。なお、二次的に焼成を受けており、外面底部は赤褐色化、内面底部は暗茶褐色化している。7は口縁部～体部が残存する破片で、口縁直下に沈線を一条施している。残存高11.7cmを計る。内面は横方向のヘラ削りを施し、外面は縦方向にハケ目を施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。また角閃石も含む。焼成はやや不良で、淡褐黄色～暗茶褐色～明茶褐色を呈す。二次的に焼成を受けている。

SE025灰色砂土出土遺物

黒色土器A類

椀c（8・9）　8は口径16.6cm、器高6.25cm、高台径7.5cmを計る。口縁および外面は回転ナデを施し、内面はミガキcを施す。底部切り離しは回転ヘラ切り。板状圧痕あり。9は底部が残存する破片である。残存高3.2cm、高台径8.6cmを計る。口縁および外面は回転ナデを施し、内面はミガキcを施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後ナデを施す。

緑釉陶器

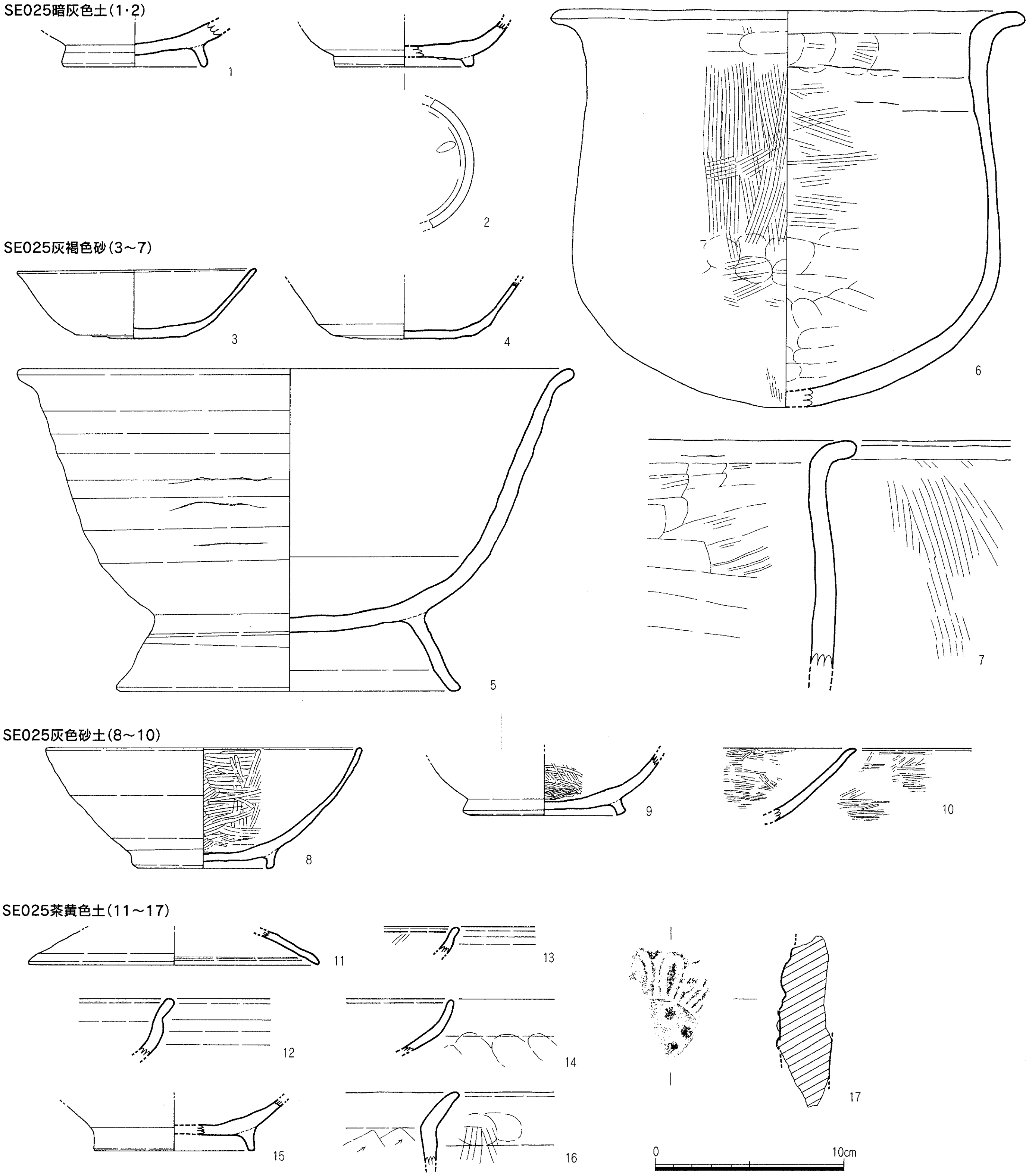


Fig.46　SE025 出土遺物実測図（1/3）

椀（10）　口縁部～体部が残存する破片である。残存高3.8cmを計る。内外面とも横方向のミガキcを施し、その上にわずかに光沢のある透明釉を施す。口縁部内面の一部には釉が暗緑色に発色している部分がある。素地は緻密で、淡茶黄色を呈す。焼成は良好。

SE025茶黄色土出土遺物

土師器

蓋（11）　口縁部の破片である。口径15.2cm、残存高1.8cmを計る。天井部から端部にかけてほぼ直線的に延びており、内面に沈線が一条巡る。今回蓋として報告したが、坏・皿等の可能性もあろう。調整は内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく0.2～2mmの砂粒を少量、微細な雲母片を多く含む。焼成は良好で、内外面とも淡橙茶色を呈す。この器形は在地土器にはなく、外来のものとみられる。

坏（12～14）　12は口縁部～体部が残存する破片である。残存高3.0cmを計る。体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部にかけてやや直線的に外反する。口縁部内面には沈線が一条めぐる。調整は内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく0.5mmの砂粒を少量、微細な雲母片をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも淡茶色を呈す。畿内系。13は口縁部の破片である。残存高1.4cmを計る。体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁部内面には沈線が一条巡る。調整は内外面とも回転ナデを施した後、右上がりの放射状暗文を施す。胎土のきめは細かく0.2～1mmの砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面とも淡橙茶色を呈す。畿内系。14は口縁部の破片である。残存高2.7cmを計る。口縁部内面には沈線が一条巡る。調整は内外面とも回転ナデを施し、外面底部は指押さえが見られる。胎土のきめは細かく0.2～0.5mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、内外面とも淡橙茶色を呈す。畿内系。

椀c（15）　底部の破片である。残存高2.7cm、高台径8.4cmを計る。胎土のきめはやや粗く、0.5～2mmの砂粒を含む。焼成は良好で、内面は淡茶黄色～淡茶赤色を、外面は淡茶赤色を呈す。

甕a（16）　口縁部の破片である。残存高3.7cmを計る。二次焼成を受けており、外面には煤が付着している。

瓦類

軒丸瓦（17）　図上の残存高9.5cm、厚さ2.7cmを計る。瓦当文様の凹凸ははっきりしており、作りは丁寧という印象を受ける。

SE035出土遺物（Fig.47・48）

SE035暗茶色土出土遺物（Fig.47）

土師器

坏a（1～4）　1は口径12.2cm、器高2.8cm、底径6.5cmを計る。底部切り離しは不明。胎土は精良で0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、暗茶灰色を呈す。2は底部の破片である。残存高2.3cm、底径8.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で1mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、茶灰色を呈す。3は口縁部～体部の破片である。残存高3.1cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、淡橙色～橙白色を呈す。4は口縁部～体部の破片である。残存高3.15cmを計る。摩耗のため調整不明。胎土は精良で2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成はあまく、内外面は薄白茶色を、断面は暗灰色を呈す。

製塩土器

焼塩壺（13）　底部の破片である。残存高4.2cmを計る。内面に布目痕が観察され、外面はナデを施す。胎土は2mm程度の茶色砂粒、1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈す。II-a類。

黒色土器A類

椀c（5～9）　いずれも底部の破片である。5は残存高1.9cmを計る。胎土は1mm程度の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は灰黒色、外面は橙茶色を呈す。6は残存高1.7cmを計る。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成はやや不良で、内面は黒灰色、外面は橙茶色を呈す。7は残存高1.9cm、高台径7.8cmを計る。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は灰黒色、外面は淡橙茶灰色を呈す。8は残存高2.0cm、高台径8.0cmを計る。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、内面は灰黒色、外面は明橙茶色を呈す。9は残存高2.75cm、高台径7.6cmを計り、底部切り離しはヘラ切りである。胎土はのきめは細かく0.2～1mmの砂粒をやや多く含む。焼成は不良で、内面は黒色、外面は黄茶色を呈す。

緑釉陶器

椀（10）　底部の破片である。残存高1.6cm、高台径6.4cmを計る。外面底部は削りだしにより、中心部が薄い円盤状の高台をつくる。釉は内外全面に施されており、明黄緑色～やや濁った黄緑色に発色する。見込みの釉は厚めで細かい貫入が一部入る。素地は若干粗く土師質で、明黄灰色を呈す。焼成は良好。京都系。

灰釉陶器

椀（11）　底部の破片である。残存高1.8cm、高台径7.6cmを計る。底部には角高台を貼り付けている。外面体部は回転ナデを施し、外面底部は回転ヘラケズリを施す。釉は刷毛塗りで内面全体に施されており、透明感のある淡い灰緑色に発色している。底部付近に径0.2mm大の釉が剥がれた痕跡があるが、ハリ痕とみられる。素地は明灰色を呈し、きめは細かく白色砂と黒色物質を少量含む。やや空隙がみられる。焼成は良好。

施釉法、高台形状、焼成法からみてK-14型式とみられる。

瓦類

軒平瓦（12）　残存長13.4cm、厚さ2.5～4.4cmを計る。瓦当は内区に均整唐草文を、上外区に珠文を、下外区に鋸歯文を施す。

SE035暗灰色土出土遺物（Fig.47）

須恵器

蓋（14）　あまり例をみない器形をしている。皿の可能性もあるが、壺蓋等を想定している。口径13.4cm、器高2.2cm、底径8.7cmを計る。天井部外面は口縁部との境まで丁寧に幅広の回転ヘラケズリを施す。ケズリの方向は上からみて反時計回りで、その後ヘラ記号を施す。口縁部～内面は回転ナデを施し、天井部内面はナデを施す。胎土は1mm未満の白色砂粒をわずかに含むが、非常に精良である。焼成・還元とも良好で、内外面とも灰褐色を呈す。

土師器

蓋（15）　口縁部の破片である。天井部から口縁端部に向かって直線的に成形し、口縁部付近でわずかに外に広がっている。口径15.0cm、残存高1.1cmを計る。調整は風化により不明の部分もあるが、回転ナデを施しているようである。胎土は1mm以下の白色砂粒、0.5mm以下の茶色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも淡橙茶色を呈す。

坏a（16～18）　16は口径11.9cm、器高2.9cm、底径7.1cmを計る。胎土は0.5mm以下の白色・茶色砂粒を含む。焼成は良好で、茶灰色～橙色を呈す。17は口径12.6cm、器高3.6cm、底径7.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.1～2mmの白色・茶色砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも赤茶色を呈す。18は口径13.4cm、器高4.0cm、底径8.35cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は1～3mmの砂粒を含む。焼成は良好で、明赤茶色～茶灰色を呈す。

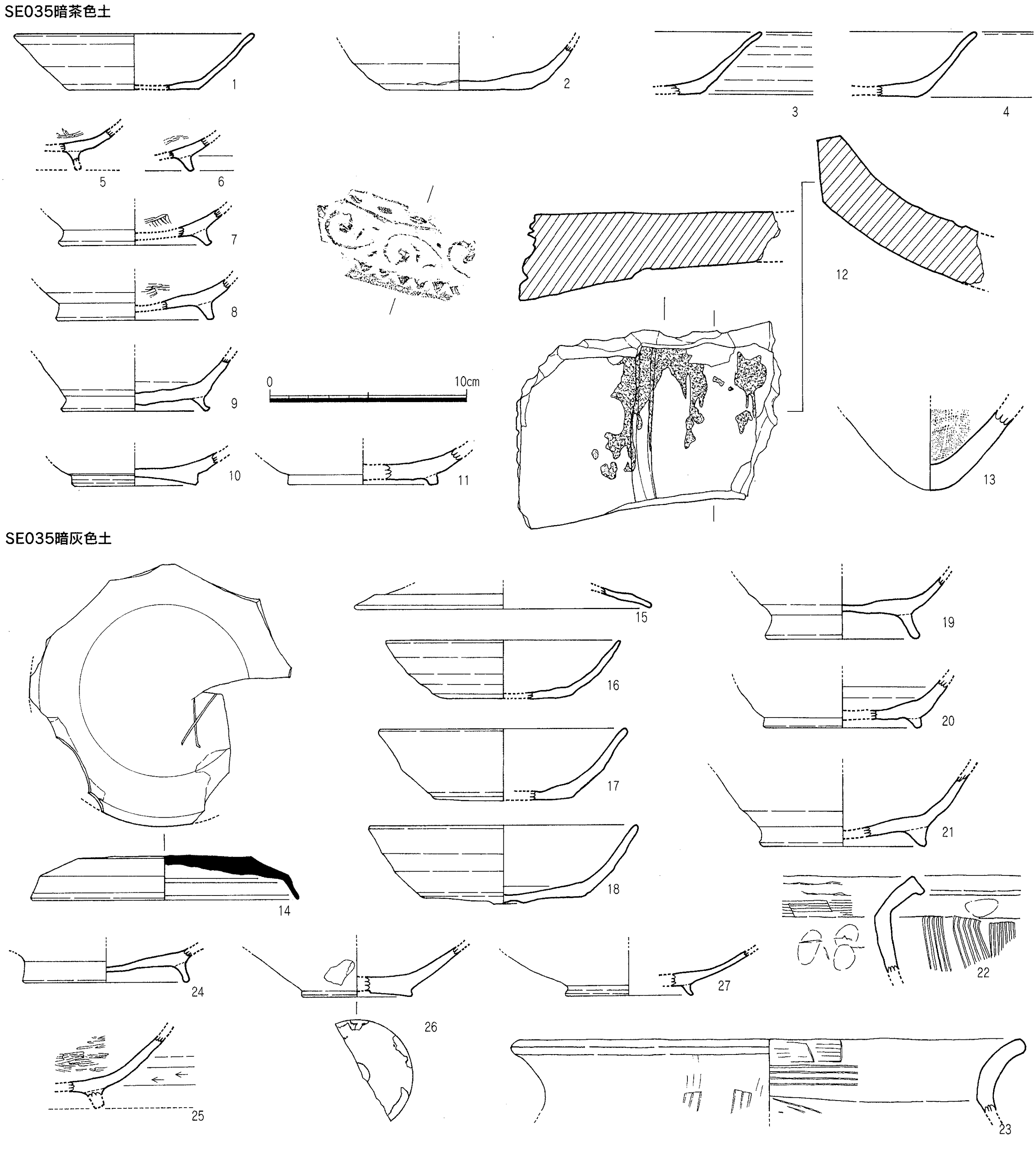
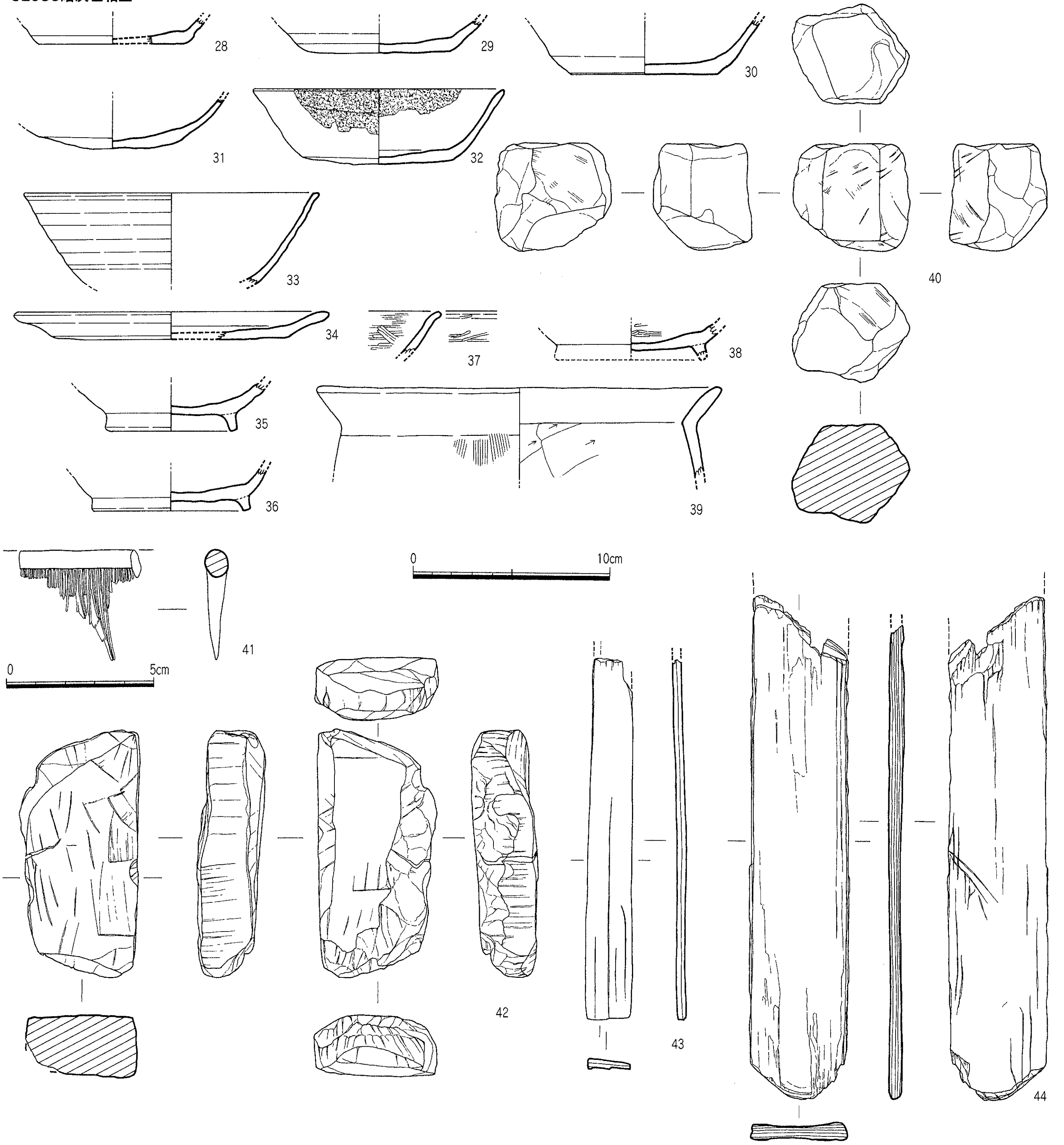


Fig.47　SE035 出土遺物実測図その1（1/3）

椀c（19～21）　いずれも底部の破片である。19は残存高3.2cm、底径7.8cmを計る。胎土は1mm以下の茶色・白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈す。20は残存高2.5cm、器高8.0cmを計る。胎土のきめは細かく、0.2～1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は茶灰色、外面は茶白色を呈す。21は残存高3.7cm、器高8.4cmを計る。胎土は1mm程度の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は白灰色、外面は淡茶灰色～暗茶色を呈す。

甕a（22・23）　いずれも口縁部の破片である。22は口縁端部を外方向につまんだような形態をし

SE035暗灰色粘土



SE035黄茶色土

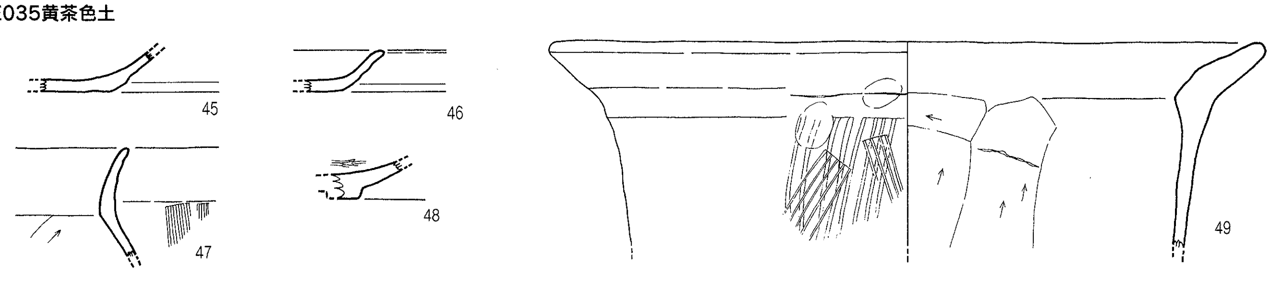


Fig.48　SE035 出土遺物実測図その2（41は1/2、その他は1/3）

ている。残存高4.9cmを計る。体部外面は縦方向にハケ目を、体部内面はケズリ後ナデをほどこす。口縁部内面は横方向のハケ目を、口縁部外面はヨコナデを施す。胎土は2mmまでの白色砂粒を多く含み、微細な金雲母をごく少量含む。焼成は良好で、内外面とも茶灰色を呈す。23は口径26.0cm、残存高3.6cmを計る。体部外面および口縁部内面にはハケ目を施す。胎土は1mm程度の白色砂粒を少量含み、雲母・角閃石を多く含む。焼成は良好で、内面は橙茶色、外面は桃茶色を呈す。

黒色土器A類

椀c（24・25）　24は高台部のみ残存する破片である。残存高1.7cm、高台径8.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5～1mmの白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は黒色、外面は明赤茶色～暗茶色を呈す。25は底部が残存する破片である。残存高3.1cmを計る。体部外面下位は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5mm以下の白色・茶色砂粒を多く含む。焼成は良好で、内面は灰黒色、外面は淡橙茶色を呈す。

緑釉陶器

皿（27）　底部の破片である。残存高2.3cm、高台径6.4cmを計る。高台は貼り付け高台である。内面および体部外面はヘラミガキを施した後施釉する。釉は内外全面に施されており、暗黄緑色に発色し細かい貫入が入る。素地は若干粗く土師質で、乳白色を呈す。焼成は良好。防長系。

越州窯系青磁

椀（26）　底部の破片である。残存高2.55cm、底径5.6cmを計る。釉は暗黄緑色を呈し、浅く貫入がある。素地は茶灰色を呈し、精選されている。I-1a類。

SE035暗灰色粘土出土遺物（Fig.48）

土師器

坏a（28～32）　28～31は底部の破片である。28は残存高1.8cm、底径8.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成はやや不良で、黄白色を呈す。29は残存高1.6cm、底径8.4cmを計る。胎土は精良で、1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面底部は灰色、その他は明茶灰色を呈す。30は残存高2.7cm、底径7.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は淡橙茶灰色を、外面は茶灰色を呈す。31は残存高2.5cm、底径7.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は明灰色を、外面は黒灰色を呈す。32は口径12.6cm、器高3.8cm、底径7.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.1～1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内外面とも茶灰色を呈す。なお、口縁部に煤が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。

坏（33）　口縁部が残存する破片である。口径14.8cm、残存高4.6cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、外面は調整により水平に段状の稜が入る。胎土は0.5mm以下の白色砂粒を少量含み、角閃石もごくわずか含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈す。

皿a（34）　口径15.8cm、器高1.4cm、底径12.1cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、口縁部内面から体部外面にかけて茶黒色を、その他は明灰色を呈す。

椀c（35・36）　いずれも底部の破片である。35は残存高2.4cm、高台径6.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、淡茶灰色～暗茶色～黒茶色を呈す。36は残存高2.0cm、高台径8.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、黄白灰色を呈す。

甕a（39）　口縁部の破片である。口径20.4cm、残存高4.7cmを計る。内面体部は図上右あがりのヘラケズリを、外面体部は縦方向のハケ目を施し、口縁部はヨコナデを施す。外面には煤の付着がみられる。胎土は1mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、暗紫灰色～茶黒色～明灰色を呈す。

黒色土器A類

椀（37）　口縁部のみ残存する破片である。残存高2.0cmを計る。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、内面から口縁部外面にかけては灰黒色、外面は茶灰色を呈す。

椀c（38）　底部のみ残存する破片である。残存高1.6cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は灰黒色、外面は茶灰色を呈す。

石製品

砥石（40）　6面ほど面取りされている。わずかに擦痕があるため砥石としたが、別の何らかの製品の可能性もある。図上残存長5.4cm、幅5.9×4.9cmを計る。花崗岩製。

木製品

櫛（41）　残存長4.1cm、天地幅3.8cm、最大厚0.8cmを計る。柄の中央より下寄りに沈線を引き、そこから先端に向かって細くなる歯を作る。歯は極めて薄くつくられる。樹種はイスノキである。

不明製品（42～44）　42は全面を削って面取りをした材である。図上天地長12.4cm、幅6.1cm、厚さ3.1cmを計る。43は板状製品である。残存長18.0cm、幅2.25cm、厚さ0.4cmを計る。図化した面は平滑に削っているが、裏面は割ったまま未調整である。図の上端は裏面より切り口を入れ、手前に引いて折っている。44は板状製品である。残存長25.3cm、幅5.1cm、厚さ0.9cmを計る。

SE035黄茶色土出土遺物（Fig.48）

土師器

坏a（45）　底部の破片である。残存高1.6cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、底部切り離しはヘラ切り。胎土は1mm以下の白色・茶色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも淡茶灰色を呈す。

皿a（46）　底部の破片である。残存高1.65cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、底部切り離しはヘラ切り。胎土は1mm以下の白色・茶色砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈す。

甕a（47・49）　47は口縁部～体部の破片である。残存高4.3cmを計る。体部内面はヘラケズリを、体部外面は縦方向のハケ目を施す。二次的に焼成を受け外面には煤の付着がみられる。胎土は2mm以下の白色砂粒・金雲母を多量含み、角閃石を少量含む。焼成は良好で、淡茶灰色を呈す。49は口縁部～体部の破片である。口径28.0cm、残存高8.0cmを計る。体部内面はヘラケズリを、体部外面は縦方向のハケ目を施す。二次的に焼成を受け外面には煤の付着がみられる。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈す。

緑釉陶器

椀×皿（48）　底部の破片である。残存高1.5cmを計る。外面底部は削りだしにより高台をつくる。外面体部は回転ヘラケズリを、内面はミガキを施す。釉は内外全面に薄く施されており、黄緑色に発色する。素地は精良で、淡黄白色を呈す。焼成は良好だが軟質に仕上がる。京都系。

SE040出土遺物（Fig.49）

SE040暗茶色土出土遺物

土師器

小皿a（1・2）　1は口径9.4cm、器高1.3cm、底径6.2cmを計る。全体に磨耗しているが、底部切

り離しはヘラ切り。2は口縁部の破片である。残存高1.1cmを計る。磨耗により調整不明。

丸底坏a（3・4）　3は口縁部の破片である。残存高3.2cmを計る。磨耗により調整不明。4は口縁部の破片である。口径14.0cm、残存高3.65cmを計る。磨耗により調整不明。

坏c（5）　口径14.6cm、残存高3.6cmを計る。磨耗により調整不明。

SE040暗灰色土出土遺物

土師器

丸椀（6）　口径は13.3cm、器高3.65cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切りで、底部はその後ナデを施す。板状圧痕あり。その他の部分は回転ナデを施し、内面底部はナデを施す。

SE040暗灰色土下層出土遺物

土師器

椀c（7）　底部の破片である。残存高2.0cm、高台径6.8cmを計る。胎土のきめは細かく、0.5mmまでの白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成は良好で、灰白色を呈す。

瓦類

平瓦（8）　図上残存長27.0cm、幅13.0cm、厚さ2.25cmを計る。格子目叩きで、「筑前」字の逆字が3ヶ所確認できる。VI-1類。

木製品

曲物（9・10）　9は曲物の桶底の破片である。厚さ0.85cmを計る。直径は16cm程度に復元される。10は曲物の桶底の破片である。厚さ0.7cmを計る。直径は21～23cm程度に復元される。

SE040茶褐色土出土遺物

土師器

小皿a（11）　口径9.8cm、器高1.38cm、底径7.0cmを計る。

黒色土器B類

椀c（12）　底部の破片である。残存高2.4cm、高台径7.4cmを計る。内外面とも磨耗が著しいが、外面にミガキcが観察される。

白磁

椀（13）　口縁部～体部の破片である。口径13.6cm、残存高3.1cmを計る。透明で光沢のある釉が、薄く全面に施される。素地は淡灰白色を呈し、きめ細かく硬質で小さな空隙を多く含む。XI-4類。

SE045出土遺物（Fig.50・51）

SE045暗茶色土出土遺物（Fig.50）

土師器

小皿a（1）　口径9.6cm、器高0.7cm、底径7.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。

椀c（2）　底部の破片である。残存高3.1cm、高台径7.5cmを計る。胎土は0.5～2mm以下の白色砂粒をとても多く含む。焼成はやや不良で、内外面とも茶灰色を呈す。

土製品

土錘（3）　ほぼ完形品である。長さ4.4cm、直径1.8cmを計る。中央に穿たれた孔は、径0.5～0.7cmを計る。1mm以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で、橙茶灰色を呈す。

瓦類

丸瓦（4）　破片資料である。残存長8.0cm、幅5.1cm、厚さ1.3cmを計る。格子目叩きで、「小ト瓦」の左字である。X類。

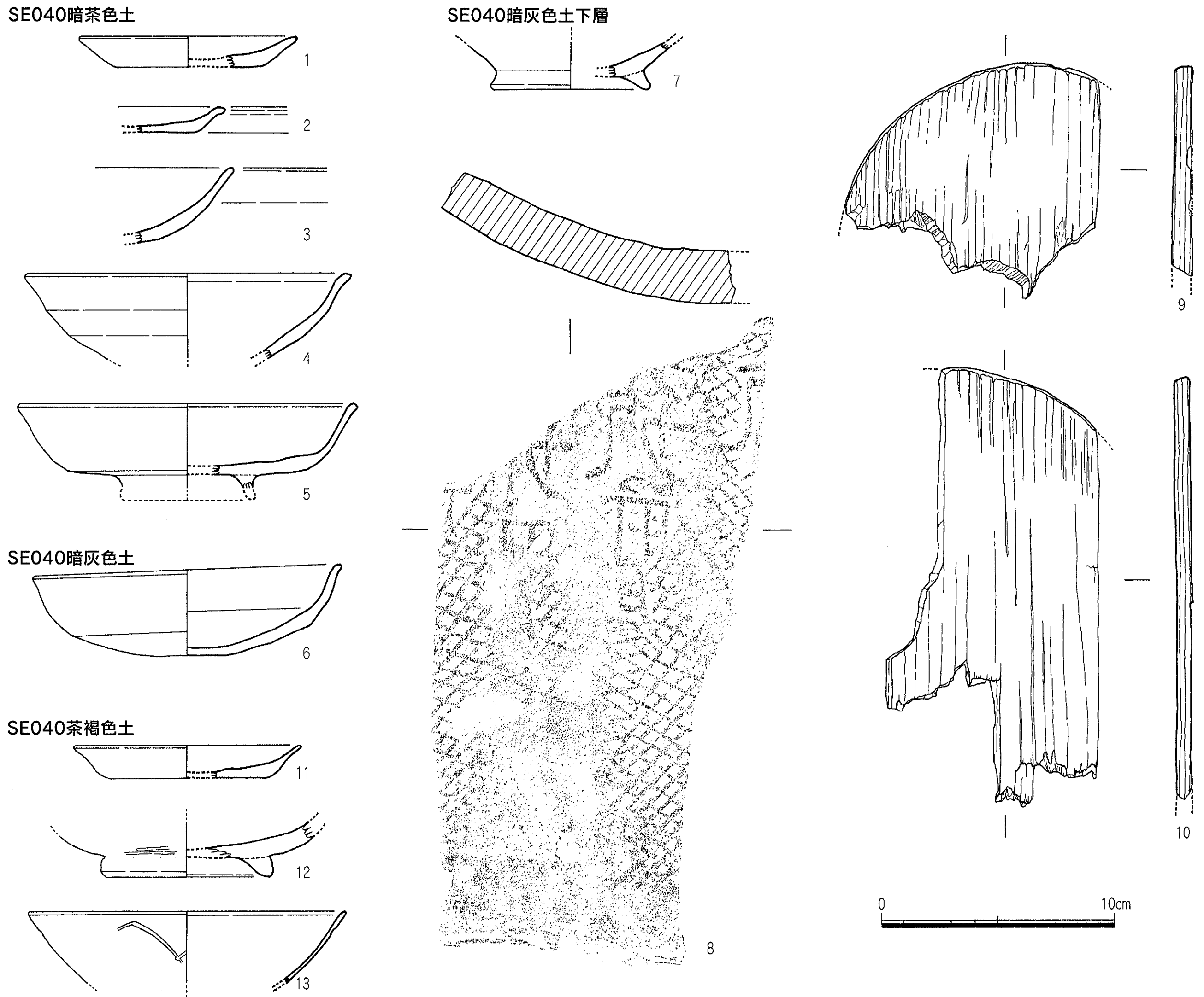


Fig.49　SE040 出土遺物実測図（1/3）

SE045茶褐色土出土遺物（Fig.50）

土師器

坏a×皿a（5）　口縁部～底部が残存する破片である。残存高2.35cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は1mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成はやや良好で、内外面とも明茶灰色を呈す。

緑釉陶器

坏×皿（6）　底部が残存する破片である。残存高1.0cm、高台径11.0cmを計る。高台は貼り付け高台である。内面にはヘラミガキを施しており、トチンの跡がある。釉は内外全面に薄く施されており、光沢のある明緑色に発色する。素地は精良で、黄灰白色を呈す。焼成は良好。防長系。

白磁

椀（7）　口縁部の破片である。口径13.8cm、残存高2.7cmを計る。やや黄色味を帯びた灰白色の釉が全面にかかる。器面は滑らかで光沢がある。素地は乳白色で精良である。I-1類。

瓦類

軒平瓦（8）　瓦当の上面の一部が残存する。残存厚3.8cmを計る。瓦当は内区に偏行唐草文を、上外区に珠文を施す。

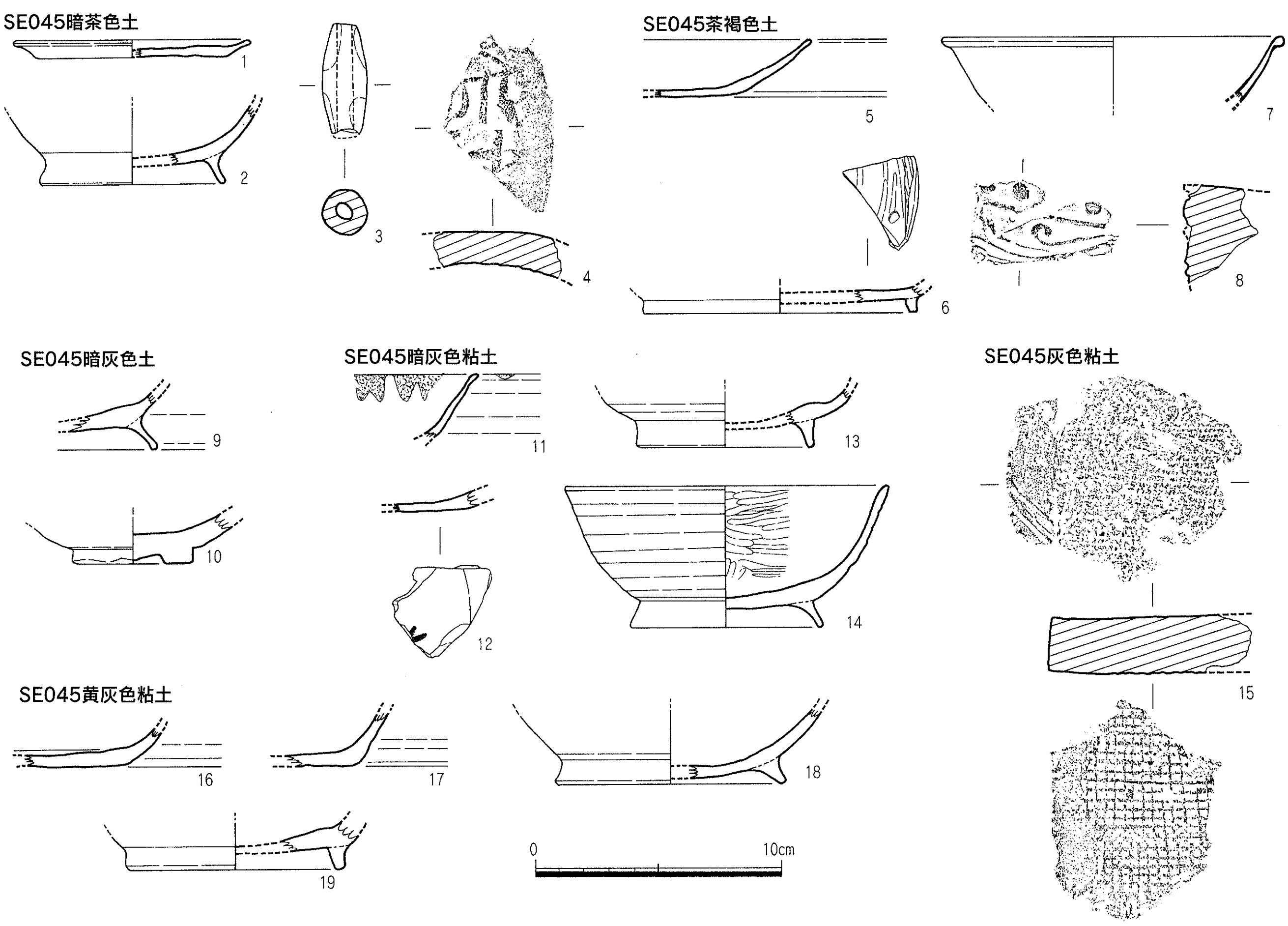


Fig.50　SE045 出土遺物実測図（1/3）

SE045暗灰色土出土遺物（Fig.50）

土師器

椀c（9）　底部の破片である。残存高2.3cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内面は灰白色、外面は橙白色を呈す。

長沙窯系青磁

椀（10）　底部の破片である。残存高1.9cm、高台径4.9cmを計る。外面は露胎で、高台は削りだして成形する。釉は内面全体に薄く施され、乳白色の化粧土の上に黄色味を帯びた透明釉がかかる。素地は明茶灰色を呈しており、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含み、やや粗い印象を受ける。

SE045暗灰色粘土出土遺物（Fig.50）

土師器

坏×椀（11）　口縁部の破片である。残存高2.5cmを計る。胎土は0.5mm以下の砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、内外面とも茶白色を呈す。なお口縁部の内外は煤の付着により黒茶色を呈しており、灯明皿として使用されたとみられる。

坏×皿（12）　底部の破片である。残存高0.8cmを計る。底部は回転ヘラケズリを施す。板状圧痕あり。胎土は0.5mm以下の砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は橙茶色、外面は茶灰色を呈す。なお、底部外面には墨痕がみえる。文字とみられるが内容は不明である。

椀c（13）　底部の破片である。残存高2.3cm、高台径7.2cmを計る。胎土は0.5mm以下の砂粒を

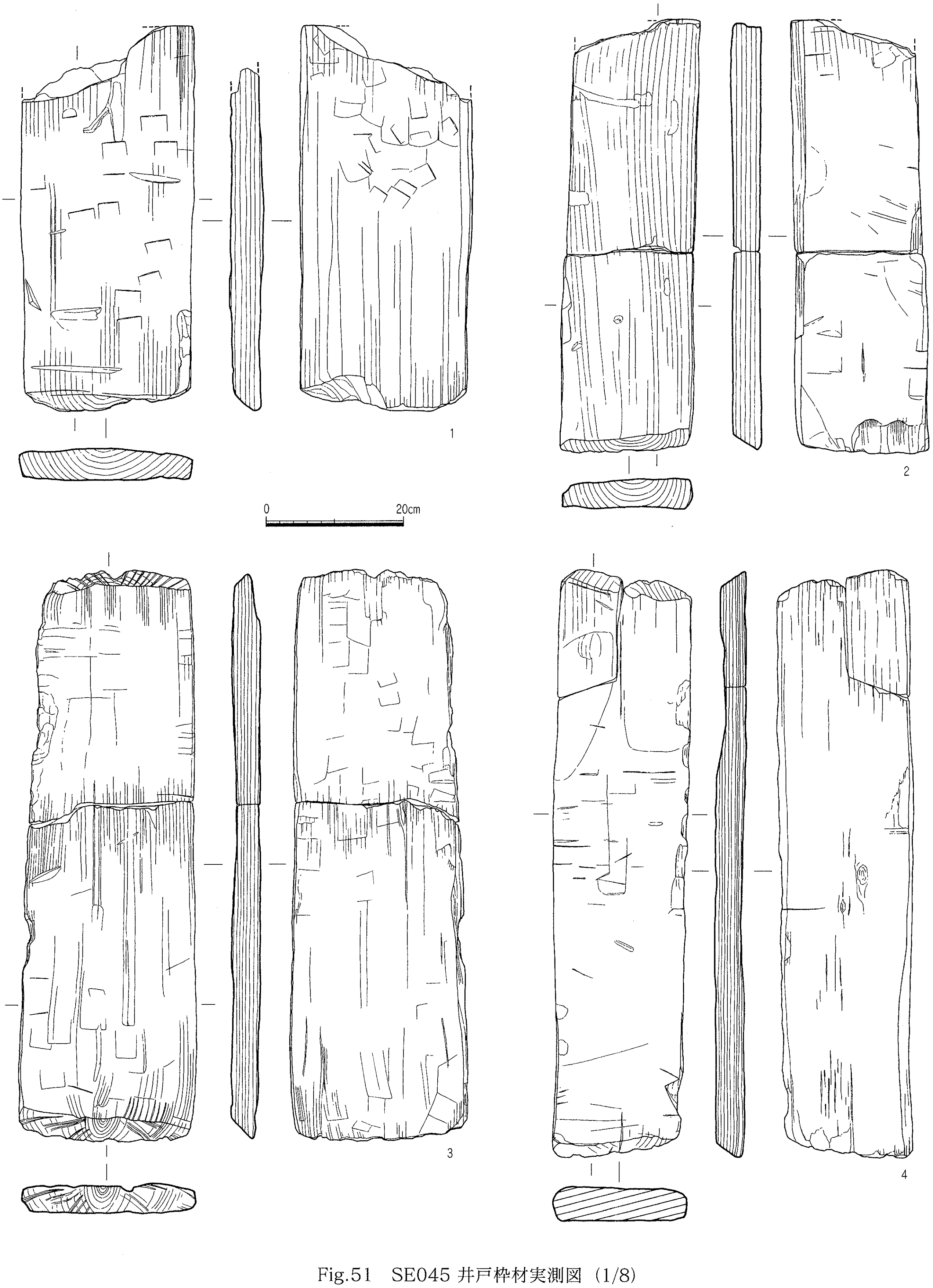


Fig.51　SE045 井戸枠材実測図（1/8）

やや多く含む。焼成は良好で、内面は灰白色、外面は茶白色、胎土芯は暗灰色を呈す。

黒色土器A類

椀c（14）　高台端部を欠損するのみのほぼ完形品である。口径13.0cm、器高5.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。外面体部下半は回転ヘラケズリを施す。胎土は1mm以下の白色・茶色砂粒を少量含む。焼成は良好で、内面は灰黒色、外面は橙白色を呈す。

SE045灰色粘土出土遺物（Fig.50）

瓦類

平瓦（15）　格子目叩きを施した平瓦の端部の一部である。格子の目が細かいのが特徴である。厚さ2.3cmを計る。

SE045黄灰色粘土出土遺物（Fig.50）

土師器

坏a（16・17）　16は底部の破片である。推定口径8.6cm、残存高1.5cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、淡茶灰色を呈す。17は底部の破片である。推定口径8.4cm、残存高2.1cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、橙白色を呈す。

椀c（18・19）　18は底部の破片である。残存高3.0cm、高台径9.3cmを計る。胎土は2mm以下の白色砂粒を多量含む。焼成はやや良好で、内面は橙白色、外面は明橙色を呈す。19は底部の破片である。残存高1.9cm、高台径8.8cmを計る。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごくわずかに含む。焼成はやや良好で、内面は淡橙白色、外面は灰白色を呈す。

SE045井戸枠（Fig.51）

井戸枠材（1～4）　いずれも井戸枠として使用されていた板材である。いずれも柾目材である。1は長さ55.0cm、幅20.0cm、厚さ4.9cmを計る。2は残存長61.8cm、幅19.9cm、厚さ4.35cmを計る。3は長さ81.7cm、幅25.6cm、厚さ4.2cmを計る。4は長さ84.0cm、幅19.7cm、厚さ4.3cmを計る。

SE050出土遺物（Fig.52）

SE050暗茶色土出土遺物

須恵器

蓋3（1）　口縁部の破片である。口径16.2cm、残存高1.6cmを計る。天井部切り離しはヘラ切り。胎土のきめは細かく0.7mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、還元は良好、明灰色を呈す。

坏c（2）　底部の破片である。残存高3.3cm、高台径9.3cmを計る。

壺（3）　口縁部の破片である。作りが丁寧な印象を受ける。口径15.6cm、残存高2.95cmを計る。二重口縁で、屈曲部外面に僅かに突帯をつくる。胎土のきめは細かく1.0mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色～暗灰色を呈す。なお、外面にはまだら状に、暗茶色～暗褐色～暗黄灰色の自然釉がかかる。肥後産とみられる。

土師器

坏a（4・5）　4は口径12.5cm、器高3.65cm、底径7.25cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土のきめは細かく、1.5mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成は良好で、淡灰褐色～暗灰褐色～黒褐色を呈す。5は口縁部の破片である。口径14.2cm、残存高3.3cmを計る。胎土のきめは細かく、1mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、白茶色～暗灰褐色～黒色を呈す。なお、口縁部内外面には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。

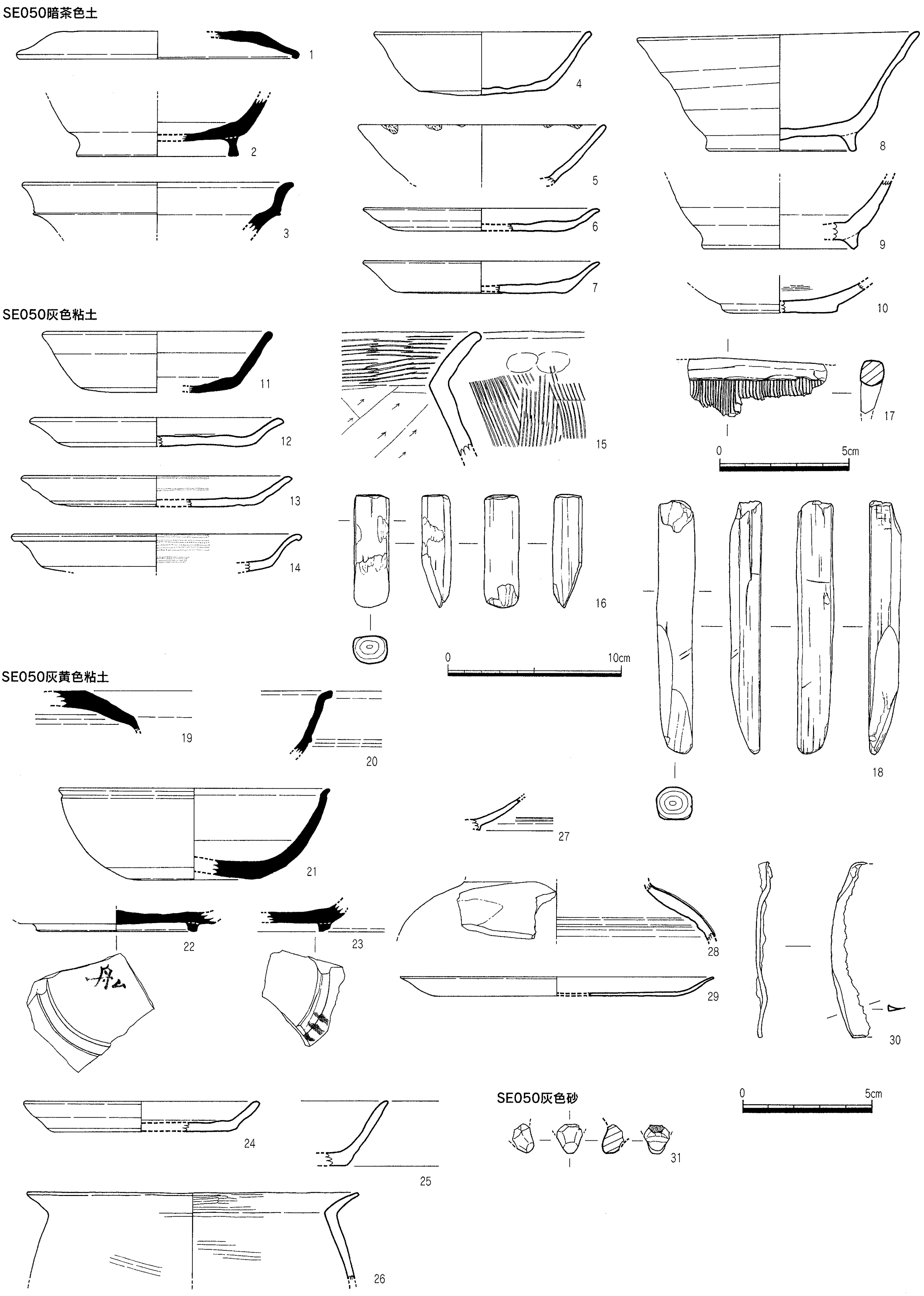


Fig.52　SE050 出土遺物実測図（17・30・31は1/2、その他は1/3）

皿a（6・7）　6は口径13.6cm、器高1.3cm、底径9.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土のきめは細かく、1.3mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、淡茶色～橙茶色を呈す。7は口径13.6cm、器高1.85cm、底径9.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、淡茶色～淡橙茶色～暗灰褐色～淡茶赤色を呈す。

椀c（8・9）　口径16.2cm、器高6.65cm、高台径8.65cmを計る。底部は内外面とも摩耗しており、その他は回転ナデが観察できる。胎土のきめは細かく、3.5mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、内面は白茶色～暗灰褐色～黒色を、外面は白茶色～淡茶赤色～黒褐色を呈す。9は体部～底部が残存する破片である。残存高3.9cm、高台径9.0cmを計る。内外面とも摩耗しており、一部に回転ナデがみられる。胎土のきめは細かく、1mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや良好で、淡灰茶色～暗褐灰色を呈す。

緑釉陶器

椀（10）　底部が残存する破片である。残存高1.75cm、底径6.6cmを計る。外面は回転ヘラケズリで、高台も削りだして成形している。内面はヘラミガキを施す。釉は内外全面に薄く施されており、半透明で光沢のある淡黄緑色に発色する。素地はきめ細かく軟質で、灰茶白色を呈す。焼成は良好。京都系。

SE050灰色粘土出土遺物

須恵器

坏a（11）　口径13.2cm、器高3.45cm、底径8.8cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。内面底部には煤が付着する。胎土のきめは細かく1.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元とも良好で、明灰色を呈す。

土師器

皿a（12・13）　12は口径14.6cm、器高1.7cm、底径11.5cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。外面底部を除く部分は回転ナデを施し、内面底部はナデで仕上げる。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒、雲母を少量含む。焼成は良好で、内外面は淡茶色～明茶色～黒褐色を、断面は淡褐灰色～淡赤茶色～黒褐色を呈す。13は口径15.6cm、器高1.7cm、底径12.3cmを計る。底部切り離しは回転ヘラ切り。外面は、底部と口縁部の境は回転ヘラケズリを施し、口縁部は回転ナデを施す。内面は回転ナデの後、ミガキaを隙間をあけて施す。胎土のきめは細かく、1mm以下の白色砂粒、雲母を少量含む。焼成は良好で、淡茶灰色～橙茶色を呈す。

皿×坏（14）　口縁部の破片である。丁寧につくられた印象を受ける。口径16.6cm、器高2.2cm、底径13.3cmを計る。外面の口縁部と底部の境は稜がつく。口縁部はやや外反しつつ立ち上がり、口縁端部でさらに外反している。底部は回転ヘラケズリを施し、口縁部外面は回転ナデを施す。内面および口縁端部は回転ナデの後ミガキaを施す。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒、雲母を少量含む。焼成は良好で、淡茶色～淡灰茶色～暗灰色を呈す。見慣れない器形であり、搬入品の可能性がある。

甕a（15）　口縁部～体部が残存する破片である。二次的に焼成を受けている。残存高7.1cmを計る。体部内面は図上右上がりのヘラケズリを施し、口縁部内面及び体部外面はハケ目を施す。口縁部外面はヨコナデを施し、一部に指頭痕がみられる。胎土のきめは細かく2.5mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成は良好で、内面は淡茶色～淡橙茶色、外面は灰褐色～黒褐色を呈す。

木製品

櫛（17）　残存長5.3cm、天地幅2.2cm、最大厚0.9cmを計る。柄の中央より下寄りに沈線を引き、そこから極めて薄い歯を作り出す。歯の先端は腐蝕で欠損している。

杭（16・18）　いずれも先端を鑿の刃のように削った材である。16は残存長6.5cm、幅1.7×2.05cmを計る。18は残存長14.5cm、幅1.85×2.1cmを計る。

SE050灰黄色粘土出土遺物

須恵器

蓋（19）　天井部が残存する破片である。残存高2.3cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施す。内面に墨痕があり、転用硯とみられる。

椀?（20）　口縁部の破片である。残存高3.7cmを計る。口縁部に向かってやや内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部は外反し、端部は断面四角形に成形する。体部には突帯が一条確認される。調整は内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒を微量含む。焼成・還元ともに良好で、内面及び断面は明灰色を呈し、内面は淡橙茶色を呈した筋が幾筋も回転ナデの方向に走向する。外面は明灰色～暗褐色を呈す。

坏a（21）　1/2程残存する資料で、丁寧に作られた印象を受ける。口径15.6cm、器高5.3cm、底径7.6cmを計る。丸い体部を有し、口縁端部を僅かに外反しており、このため口縁端部外面は窪みが巡る。底部外面はヘラ切り後器面調整を施す。体部と底部の境に回転ヘラケズリを施し、その他は内外面とも回転ナデを施す。底部内面はその後ナデを施す。胎土は精良で、1～2mmの白色砂粒をごくわずかに含む。なお表面には1mm弱の黒色粒がみえるが、断面にはほとんどみえない。焼成は良好で、断面は灰色～暗茶灰色を呈す。内外の表面は暗茶灰色を呈し、ロクロ回転方向に明茶灰色の筋が巡っている。肥後産。

坏c（22・23）　22は底部の破片である。残存高1.7cm、高台径9.2cmを計る。外面底部中央に墨書文字がある。「舩」の可能性が高い。23は底部の破片である。残存高1.6cmを計る。外面の体部下位から高台にかけて墨書がある。記号か文字とみられるが、文字の場合「川」「三」「卅」等の可能性がある。

土師器

坏a（25）　口縁部の破片である。残存高3.7cmを計る。推定される口径は約13cm弱である。底部切り離しはヘラ切りで、その他の部位は内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で、茶白色～淡橙茶色～赤橙茶色を呈す。

皿a（24）　口径13.6cm、器高1.75cm、底径11.0cmを計る。底部切り離しはヘラきりで、その他の部位は内外面とも回転ナデを施す。内面には油煙の可能性がある黒色の付着物がある。胎土のきめは細かく、1.5mm以下の白色砂粒、雲母片を少量含む。焼成は良好で、褐白色～淡褐色～黒灰褐色を呈す。

黒色土器B類

甕（26）　口縁部～体部が残存する破片である。口径19.0cm、残存高5.05cmを計る。内外面ともヨコナデを施しその後ミガキcを施す。胎土のきめは細かく、0.7mm以下の白色砂粒を少量含む。また、細かな雲母片が多い。焼成は良好で、内面は暗褐色～黒褐灰色～黒色、外面は暗赤茶色～黒褐灰色～黒色を呈す。

白磁

椀（27）　体部及び底部の破片である。残存高1.95cmを計る。滑らかで光沢のある透明釉が全面にかかる。素地は白色で精良である。I類。

長沙窯系青磁

水注×壺（28）　肩部の一部とみられる破片である。上端に口縁もしくは頚部に立ち上がるとみられる屈曲があり、図はこれを元に復元した。残存高3.2cmを計る。内面は回転ナデを施す。その後、外面に化粧土を施して施釉する。釉は不透明の乳白色～白色に発色する他、緑灰色～深緑色に発色する釉が一部にかかっている。内面は露胎で、化粧土や釉の飛沫がかかっている。素地は薄茶色を呈しており比較的均質であるが、褐斑や黒色粒もみられ、やや粗い印象を受ける。

木製品

漆皿（29）　丁寧に作られた印象を受ける漆皿である。口径18.0cm、器高1.12cm、底径13.6cmを計る。器厚は薄く、底部は2.5～3mm、口縁部は1.5～2.5mmを計る。全面を漆に覆われており成形は不明。内面は口縁端部上面に至るまで暗赤茶色の漆が塗られ、外面は黒色の漆が塗られる。分析の結果、木地の樹種はケヤキと判明した。なお木地の樹種分析・漆塗膜分析については、4.自然科学分析の項で述べる。

金属製品

鉄製刀子×鉄製刃先（30）　図上長6.7cm、最大幅0.9cm、最大厚0.25cmを計る。

SE050灰色砂出土遺物

ガラス製品

不明製品（31）　深味のある暗青色をした不透明のガラス製品の一部である。最大長1.1cm、最大幅1.0cm程度を計る。図の上端部は欠けているがその下位は元来の形が残っている。小片のためはっきりとしない部分も多いが、器の小さな足脚のような形状で、装飾的な突起物の可能性もある。ガラスを分析したところ、暗青色を呈すのはコバルトによることが判明した。なお欠損部には土器の胎土のような赤茶色を呈したものが付着するのが注目される。一見すると土師質であり、微細な白色砂粒が多く含まれる。確認される範囲は0.6×0.35cmで、厚さ0.3mm以下が残存している。これは後に付着したものではなく、ガラス部と一体となり製品を構成しているようで、胎土本体の大半がすでに剥離し、表面のみがガラスに接着して残存したとみられる。なおこの資料の欠損部をみると、偶然に欠損したものではなく、胎土とみられる部分を意識してその周辺を細かく打ち欠いていることが注目される。なぜこのような所作を行っているのかは不明である。

土師質の部分がこの製品の胎土と仮定すれば、ガラス部分は釉で釉垂れが残存している可能性も考えられる。仮に釉と考えた場合、出土した層の堆積時期が奈良時代後期の可能性が高いことを勘案すると、この当時コバルト釉を使用したものに唐三彩が挙げられるが、唐三彩のコバルト釉は、釉ムラがあるものがほとんどで、本資料ほど釉が均質で厚いものはなかなか想定しにくいとのことである。

陶磁器ではないとすると、ガラス製品を想定することになる。ただし、4.自然科学分析では、これまで知られている古代のガラスと比べてコバルトがかなり多く含まれているという結果が出ている。本資料は、本遺構の中では最古層から出土しているが、調査区北壁と接しており、新しい時期のものが混入した可能性は十分ある。

このように近現代の製品が混入した可能性もあるが、混入を肯定することも難しいため、今回は分析結果と併せて報告することにした。類例の増加を待ちたい。

SE105出土遺物（Fig.53）

SE105茶褐色土出土遺物

土師器

小皿a（1・2）　1は口径9.4cm、器高1.3cm、底径6.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板

状圧痕あり。胎土は0.5～1mm大の白色砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡褐黄色を呈す。2は口径10.0cm、器高1.1cm、底径7.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡褐灰色～淡褐黄色を呈す。

SE105暗茶色土出土遺物

土師器

小皿a（3）　口縁部の破片である。器高1.0cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、淡黄褐色～淡灰褐色を呈す。

丸底坏a（4）　口縁部の破片である。口径15.1cm、器高3.1cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡褐黄色～淡褐黄色を呈す。

金属製品

鉄釘（5）　断面が方形に近い形状をしている。残存長2.3cm、幅0.5×0.5cmを計る。

SE105暗灰色粘土出土遺物

土師器

小皿a（6・7）　6は口縁部の破片である。器高1.3cmを計る。推定口径は9.7cm。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土は0.5～2mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡褐黄色～褐灰色を呈す。7は口縁部の破片である。器高0.6cmを計る。推定口径は8.9cm。底部切り離しは不明。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含み、微細な雲母をわずかに含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。

丸底坏（8）　口径14.9cm、器高3.5cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。内面はミガキbを施し、コテ当ての痕跡がみえる。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含み、微細な雲母をわずかに含む。焼成は良好で、淡褐白色を呈す。

石製品

石帯（9）　巡方の破片である。図上天地幅3.5cm、残存幅2.7cm、厚さ0.6cmを計る。糸かがりの孔が一ヶ所確認される。色は黒色。粘板岩製か。

瓦類

軒平瓦（10）　残存長18.0cm、厚さ2.7cm、瓦当は5.6cmを計る。瓦当は内区に均整唐草文を、上外区に珠文を、下外区に鋸歯文を施す。なお、下面にはベンガラとみられる赤色顔料の付着が確認される。

SE105目玉出土遺物

土師器

小皿a（11）　2/3ほど残存する。口径9.2cm、器高1.2cm、底径7.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含み、白色の雲母を少し含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。

SE330出土遺物（Fig.54）

SE330茶黒色砂土出土遺物

土師器

丸底坏a（1）　口縁部～体部が残存する破片である。口径15.0cm、器高3.6cmを計る。内面はミガキbを施し、口縁部は回転ナデを施す。外面は器壁が剥落している。胎土のきめは細かく、0.5～2mmの砂流をやや多く含む。焼成は良好で、茶白色を呈す。

SE330暗灰色土出土遺物

緑釉陶器

椀（2）　底部が残存する破片である。残存高2.1cmを計る。外面は回転ヘラケズリで、高台も削り

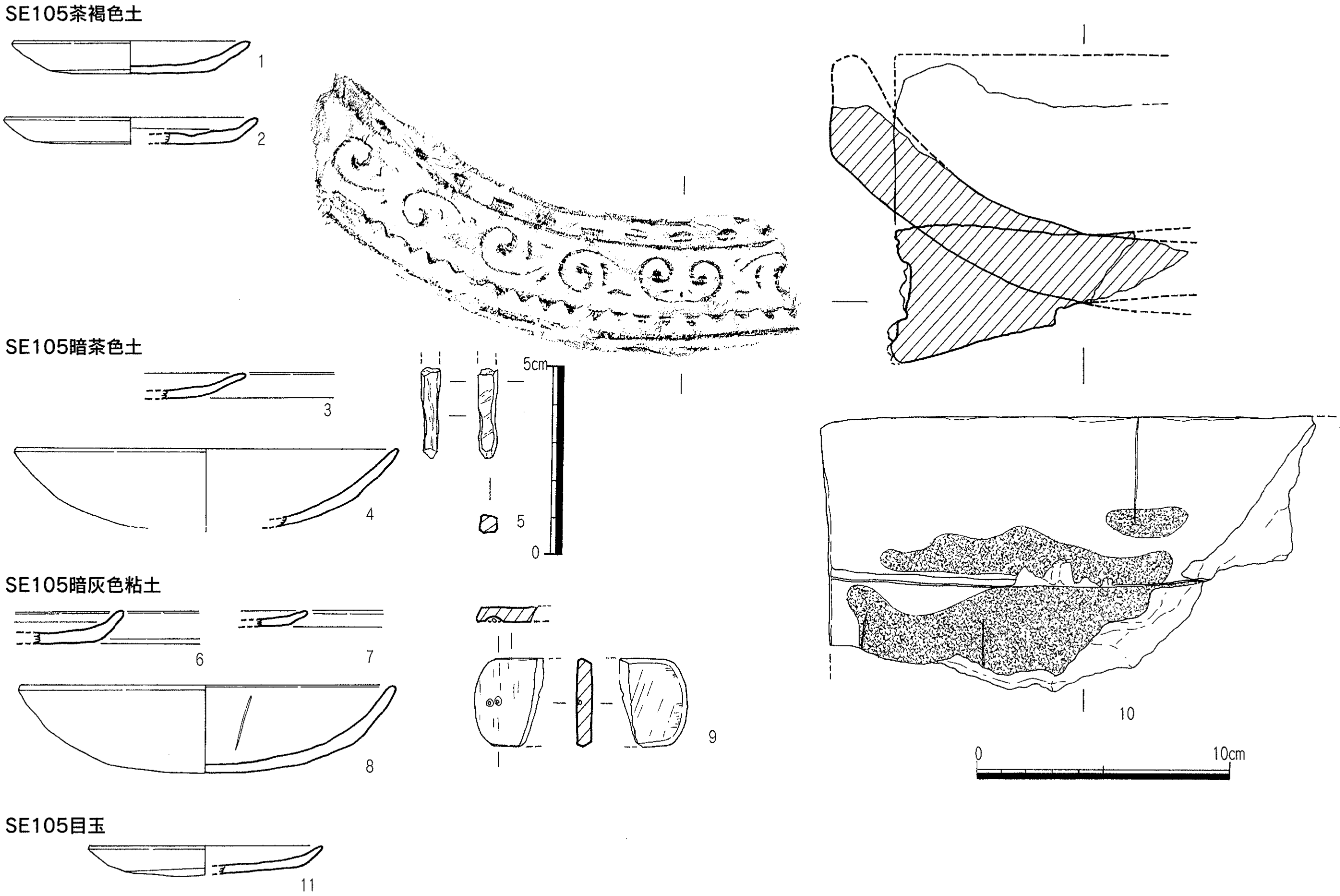


Fig.53　SE105 出土遺物実測図（5は1/2、その他は1/3）

だして成形しているようである。外面は回転ヘラケズリを施す。釉は全面に施されており、光沢のある暗緑色～明茶色に発色する。素地は緻密で暗青灰色を呈す。焼成は良好。京都系。

SE330青灰色粘土出土遺物

土師器

小皿a（3・4）　3は口縁部の破片である。残存高1.15cmを計る。底部切り離しはヘラ切りとみられる。胎土のきめは細かく、0.5～1mmの砂粒を若干含む。焼成は良好で、灰白色～淡茶色を呈す。4は口縁部の破片である。残存高0.85cmを計る。推定口径は10.2cm程度。底部切り離しはヘラ切り。胎土のきめは細かく、0.2～0.5mmの砂粒、微細な雲母片を若干含む。焼成は良好で、淡茶色～淡橙茶色を呈す。

白磁

椀（5）　口縁部～体部の破片である。口径17.3cm、器高5.0cmを計る。Ⅳ-1類。

石製品

権（6）　滑石製石鍋を転用した製品で、ほぼ完存する資料である。図上天地長10.6cm、幅11.05cm、最大厚2.3cmを計る。上部に一ヶ所穿孔を施す。図右面は、比較的深い多数の傷が入る。罫線らしきものもみられる。図左面には、縦3本、横3本の罫線を刻む。中には間隔が3.6cm程に広がるものもあるが、ほとんどが約3.0～3.3cm程度の間隔で平行に引いている。おそらく当時の一寸を目安としたものと推測される。

SE425出土遺物（Fig.55・56・57）

SE425出土遺物（Fig.55）

土師器

小皿a1（1）　口径10.8cmを測るもので、底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りが行われている。

小皿a2（2～6）　2・3は口径推定ができなかった。4～6は口径11.0cm～11.6cmを測る。全体形状が不明確な2～4を除く5・6は底部押し出しによって、底部丸底化が図られている。口縁端部はいずれもつまみ出しによる屈曲形状が形成されている。底部外面切り離し処理は観察できる個体全て回転ヘラ切りである。

耳皿（8）　口縁部欠損しているが、折り曲げによる口縁部は一方のみであると考えられる。底部外面の切り離し処理は回転ヘラ切りによってなされている。

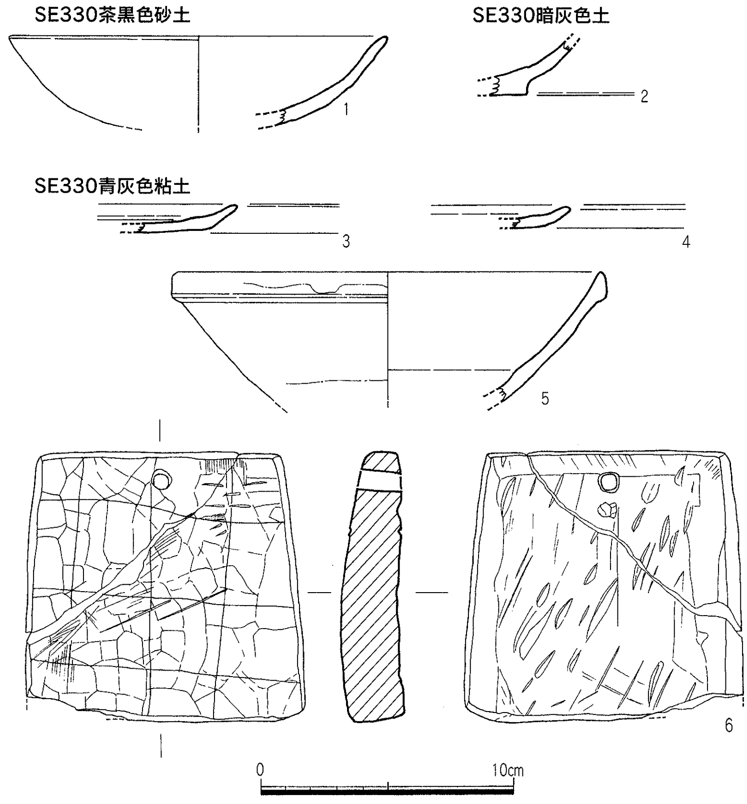


Fig.54　SE330 出土遺物実測図（1/3）

椀×坏（7）　口縁部のみの破片で、全体形状については不明。破片状況からは、直線的な体部形状を有するものと判断できる。

SE425黒色土出土遺物（Fig.55）

須恵器

脚（43）　獣脚の形骸化したものと判断でき、大型の盤（盆）などの脚と推定される。印象としては正倉院中倉宝物にある白石火舎様のものを想定している（成瀬正和、2002）。全面ナデによって成形されており、獣脚をイメージする指形状はつくりだされていない。焼成は良好ながら還元がやや悪く、瓦質の焼き上がりになっている。（【引用文献】成瀬正和（2002）『日本の美術　439　正倉院宝物の素材』至文堂）

土師器

小皿a1（9～14）　口径の分かるものは9・10で、10.8cm・11.0cmを測る。底部外面の切り離し処理はいずれも回転ヘラ切りによって処理されている。

小皿a2（15～29）　口縁端部をつまみ上げることで端部折り曲げを形づくるもので、口径の分かる15～20では、11.0cm～11.4cmをそれぞれ測る。底部状況が分かるものは全て押し出しによって丸底化傾向にある。

丸椀（31・32）　高台の有無が判然としないことから、丸椀としたが、後述する丸椀aないしは椀c2のどちらかに帰属するものと考えられる。31は口縁部内外面に煤状炭化物が付着している。

丸椀a（30・33～36）　内面を「コテあて」と呼称されるミガキbによって器面調整し、丸椀化が図られるもので、口縁端部をやや外傾させるものである。器高が丸底坏に比べまだ高く維持されており、丸椀化される前の原形である坏の体部と底部の境界部位における肥厚度合いが顕著ではないという特徴

を有している。

椀c2（37～40）　高台を貼付したもので、高台径が広いものである。体部内面にはミガキb痕跡が顕著ではなく、40に至っては、低器高化が進みつつある状況が観察できる。

黒色土器A類

椀c2（41）　高台を貼付する椀c2にあたり、内外面ともに丁寧なミガキcによって仕上げられている。口縁端部はやや外傾させており、底部外面が回転ヘラ削りによって仕上げられている。

白磁

椀（42）　I-1類の口縁部で、内外面ともに乳白色の色調を有している。

土製品

坩堝（44）　小破片で、内面に明緑色ないしは白灰色の付着物が観察できる。

SE425灰色土出土遺物（Fig.56）

土師器

小皿a1（45～60）　底部外面を回転ヘラ切りするもので、口径9.4cm～11.0cmをそれぞれ測る。47・48は底部押し出しによって丸底化が図られている。

小皿a2（61～68）　口縁端部をつまみ上げることによって折り曲げ形状を呈するもので、底部外面を回転ヘラ切りによって処理している。

椀（69～71）　口縁部の破片で高台の有無については不明。69の胎土には白雲母細片が顕著に観察できる。

椀c2（72・73）　口縁部欠損資料で、全形が判然としない。見込み部には不定方向のナデ痕跡が観察できる。

甑（79）　底部付近の破片で、外方へ開くものと推定される。内面は横方向のヘラ削り、外面には指頭圧痕が顕著に残っている。

黒色土器A類

椀（74・75）　口縁部のみの破片資料で、全体形状については明らかにし難い。74は内面にミガキcが観察できるが、75については器面磨耗のため不明確。

緑釉陶器

皿×椀（76）　貼り付けによる高台を有し、底部外面はミガキcによって仕上げられている。全体形状については明らかにし難い。内外面には光沢のある黄緑色釉が掛けられている。素地は黄白色で軟質である。

白磁

皿（77）　I類の範疇に入るものと考えられ、やや青みがかった色調を有しているが、乳白色を呈している。口縁部の破片で全体形状については不明ながら、極めて薄い器厚である。

椀（78）　乳白色の色調を内外面ともに有しており、玉縁がやや大きめであるもののI類の範疇で捉えることのできる個体であると考えられる。

SE425黄色土出土遺物（Fig.56）

土師器

小皿a1（80～83）　口径が推定できる80・81は、10.8cm・11.2cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

小皿a2（84～86）　口径が推定できる84・85は、両者とも11.5cmを測り、底部外面処理が観察できる個体は全て回転ヘラ切りによって処理されている。

丸椀（88）　口縁端部をわずかに外傾させるもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。
椀c2（87）　高台および体部下位の破片資料で、全体形状については不明。見込み部分には不定方向のナデが観察できる。
緑釉陶器
椀（89）　直線的に外方へ開く体部形状を有するもので、内外面には淡い黄緑色の釉が掛けられ、素地特徴は淡灰色の粗雑な印象を受ける。
青磁
椀（90）　口縁部のみの破片であるが、淡灰色で気泡が僅かに含まれる粗い素地特徴を有し、内外面には黄緑色のやや濁った釉が掛けられている。特徴から判断して越州窯系青磁椀I-5類に属するものと考えられる。

SE425茶黒色土出土遺物（Fig.56）

土師器
小皿a1（91～95）　口径9.6cm～11.0cmを測り、いずれも回転ヘラ切りによって底部外面切り離し処理がなされている。
小皿a2（96・97）　口縁端部をつまみ上げによって折り曲げるもので、底部外面は回転ヘラ切り痕跡が観察できる。
丸椀a（98）　内外面を回転ナデによって仕上げているもので、ミガキbの顕著な痕跡は観察できなかった。
丸椀（99・100）　高台の有無が明らかでないもので、口縁端部をやや外傾させる。100の外面は赤茶色の色調を呈している。
椀c2（101）　高台および体部下位の破片資料で、体部形状が丸みを有していることから、椀c2と判断される。

SE425黒色粘土出土遺物（Fig.56）

土師器
小皿a1（102・103）　口径10.4cm・10.9cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。両者とも底部丸底化傾向は看取できない。
椀×坏（104・105）　口縁部の破片で、全体形状が不明なため器種特定には至っていない。
椀c2（106）　高台を有し、丸みのある体部形状を呈しているもので、口縁端部内面に沈線を1条巡らせている。内外面ともに回転ナデ痕跡が観察でき、胎土・成形技法から在地産であると考えられることから、畿内産黒色土器（楠葉型）の器形模倣形態であると考えられる。
黒色土器A類
椀（107）　口縁部から体部下位の破片資料で、口縁端部をわずかに外傾させる。胎土に白雲母を多く含んでいる。
黒色土器B類
椀（108～110）　いずれも口縁部破片であることから、全体形状については不明。いずれも口縁端部をわずかに外傾させる特徴を有している。

SE425茶褐色土出土遺物（Fig.57）

土師器
小皿1（111・112）　口縁部の破片資料で、底部外面の処理は不明。112は胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

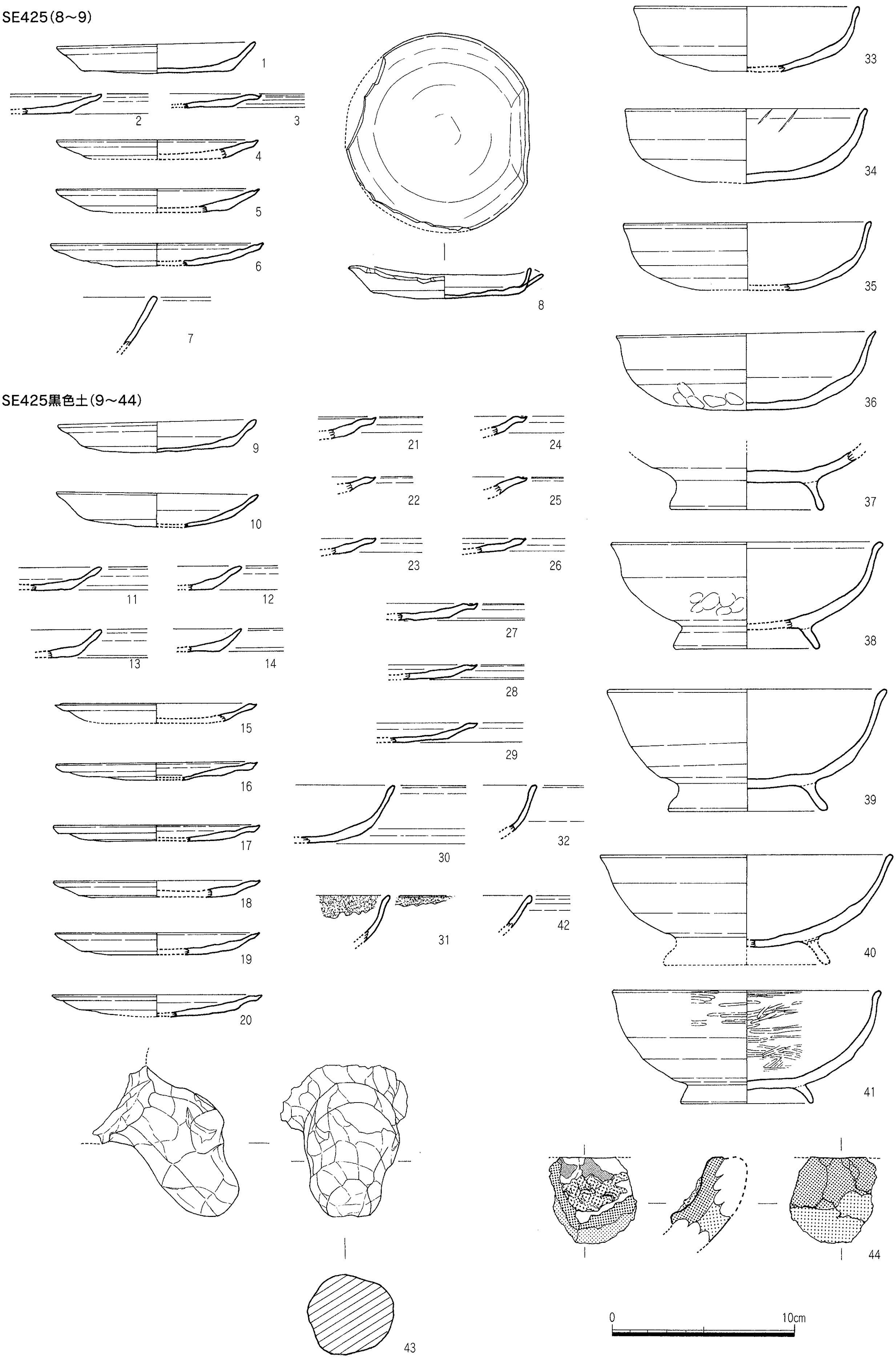


Fig.55　SE425 出土遺物実測図その1（1/3）

丸椀（113）　高台有無が判然としないことから、椀c2の可能性も残る。内外面ともに回転ナデの後、内面のみ不定方向のナデが観察できる。

黒色土器A類

椀（114）　口縁部の破片資料で、口縁端部をわずかに外傾させる。なお胎土中に白雲母を多く含んでいる。

SE425灰黒色粘土出土遺物（Fig.57）

土師器

小皿1（115）　口縁部から体部下位の破片資料で、底部外面処理状況については明らかにし難い。

椀c（116）　体部下位が残存しているものの、残存部分からは直線的な印象を受け、椀c1に特定できそうであるが、体部上位での判断も必要であることから、形式特定については躊躇する。

SE435出土遺物（Fig.57・58・59）

SE435出土遺物（Fig.57）

須恵器

壺（137）　把手のみの破片で器種特定は困難であるが、形状から壺に付帯する把手と判断した。不定方向によるナデによって成形され、1孔を穿つ。

土師器

小皿a1（117～128）　口縁端部を丸く仕上げるもので、底部外面処理が観察できるものは全て回転ヘラ切り痕跡が観察できる。口径は、8.6cm～10.0cmを測る。なお120・124以外のものは全て底部丸底化が行われている。

丸底坏a（129～134）　口径15.3cm～15.6cmを測り、丸底化前の坏底部切り離し処理は、観察できるもので全て回転ヘラ切りによって処理されている。

黒色土器B類

椀×坏（135・136）　口縁部のみの破片資料で全形については明らかにし難い。

白磁

椀（138～141）　138・140はⅣ類。139はⅡ類。141はⅩⅢ-2b類。

石製品

石鍋（142）　底部のみの破片資料で、細分については不明。外面には成形のための削り痕跡が観察でき煤状炭化物も付着している。

SE435灰茶色土出土遺物（Fig.57）

土師器

小皿a1（143・144）　口径が推定できない破片資料で、底部切り離し処理が観察できる143は、回転ヘラ切りであった。

丸底坏（145～148）　いずれも口径が推定できない破片資料で、底部外面処理が観察できる148は、回転ヘラ切り離し痕跡が観察できた。

石製品

用途不明（149）　玄武岩と考えられ、実測面に凹凸が観察でき、研磨痕跡が残る。

SE435茶灰色粘土出土遺物（Fig.58）

土師器

小皿a1（150～152）　口径が測定できる150は10.6cmを測り、底部外面処理が観察できるものは全て回転ヘラ切り痕跡が観察できる。150は底部丸底化傾向が看取できる。

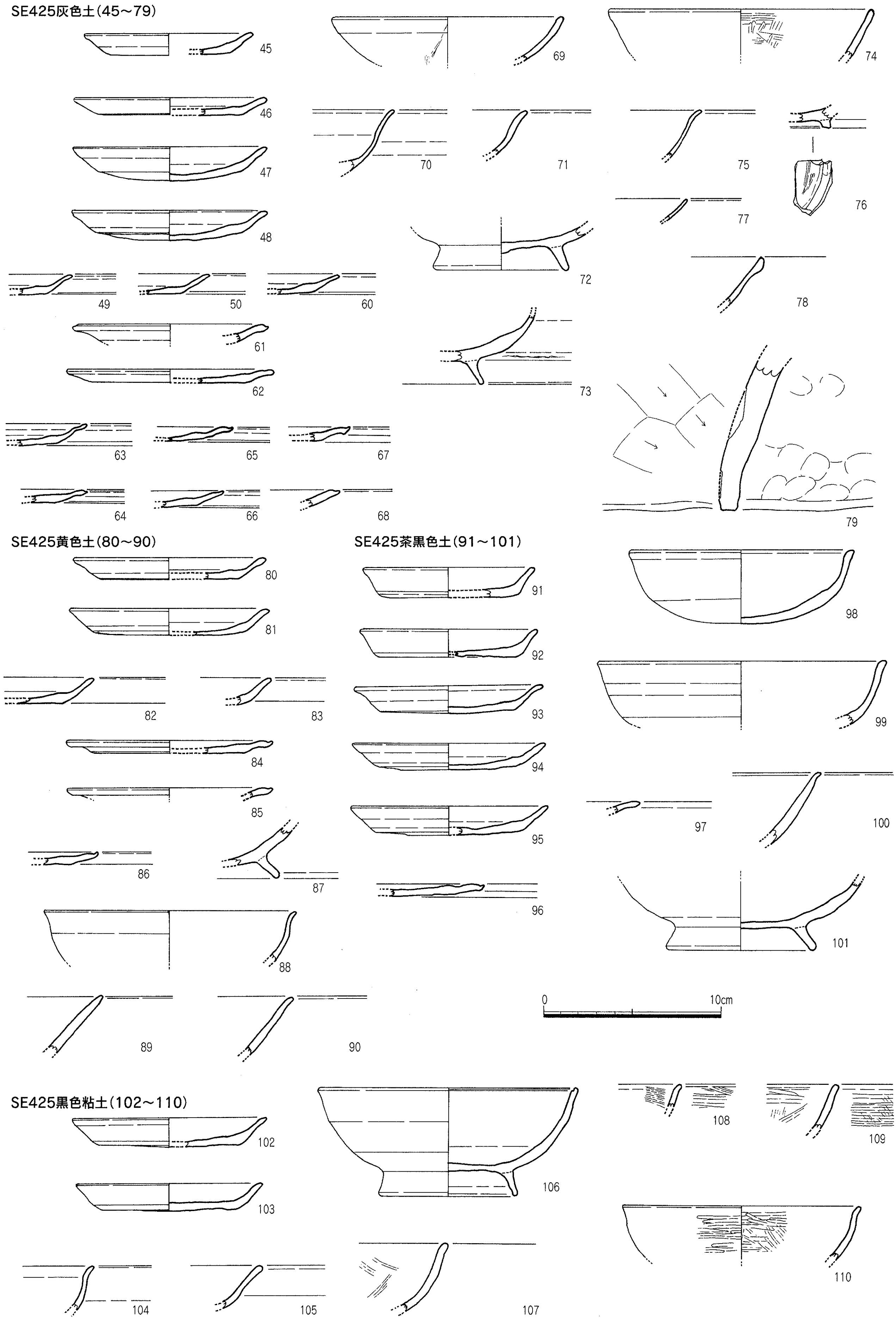


Fig.56　SE425 出土遺物実測図その2 (1/3)

丸椀（154）　底部から体部への移行に際して屈曲部が形成され、器高がやや深めであることから、丸椀に分類した。

丸底坏（153・155～167）　全形が分かる166は、内面にミガキbによる器面調整が観察できるが、底部外面の処理は磨耗のため明らかではない。他の資料は口縁部の破片資料で調整属性の詳細について観察できなかった。

瓦器

椀（168）　口縁部の破片資料で、内外面ともに丁寧な細いミガキcによって仕上げており、体部外面下位は粗いナデ痕跡が観察できる。畿内産瓦器と考えられる。

石製品

石鍋（169）　鍔が口縁部外面に観察できないことから、石鍋A群の範疇に入るものと考えられる。内外面には削り痕跡が観察でき、外面には煤状炭化物が付着している。

白磁

椀（170・171）　両者ともIV類。

瓦

丸瓦（172）　「平井」の文字が確認でき、大宰府分類I-7bに該当するものと考えられる。

軒丸瓦（173）　瓦当の1/4が残存するもので、蓮弁がわずかに二葉観察できる状況で簡略化が進行しているものである。丸瓦部と瓦当の接合構造については明らかにし難いが、貼り付けのための粘土およびナデ痕跡が観察できる。

石製品

砥石（174）　実測面のみに使用痕跡が観察でき、平坦な研ぎ面ではないことから、先の尖ったものを磨いだものと考えられる。材質はアルコース質細粒砂岩。

SE435暗黒灰色粘土出土遺物（Fig.58）

土師器

丸底坏（175）　口縁端部のみの破片で、内面にミガキb痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀c（177）　底部のみの破片資料で、内外面ともに丁寧なミガキcによって仕上げられている。

青磁

坏（176）　口縁部を輪花状に作り出すもので、越州窯系青磁坏I-1類に分類できる。

SE435暗灰色粘土出土遺物（Fig.58）

土師器

丸底坏（178～181）　口縁端部のみの破片で、全形その他底部に関する属性は不明。180・181は内面にミガキb痕跡が観察できる。

白磁

椀（182）　高台から体部下位にかけての破片資料。II類に分類できる。

SE435井戸枠（Fig.74）

井戸枠材（415～420）

415～417・419は四隅杭、418は横桟、420は水澄まし曲げ物底である。

SE465出土遺物（Fig.58・59）

SE465灰黒色粘土出土遺物（Fig.58）

小皿a1（183～189）　口径が明らかなもので、8.4cm～11.0cmを測る。底部外面処理が観察でき

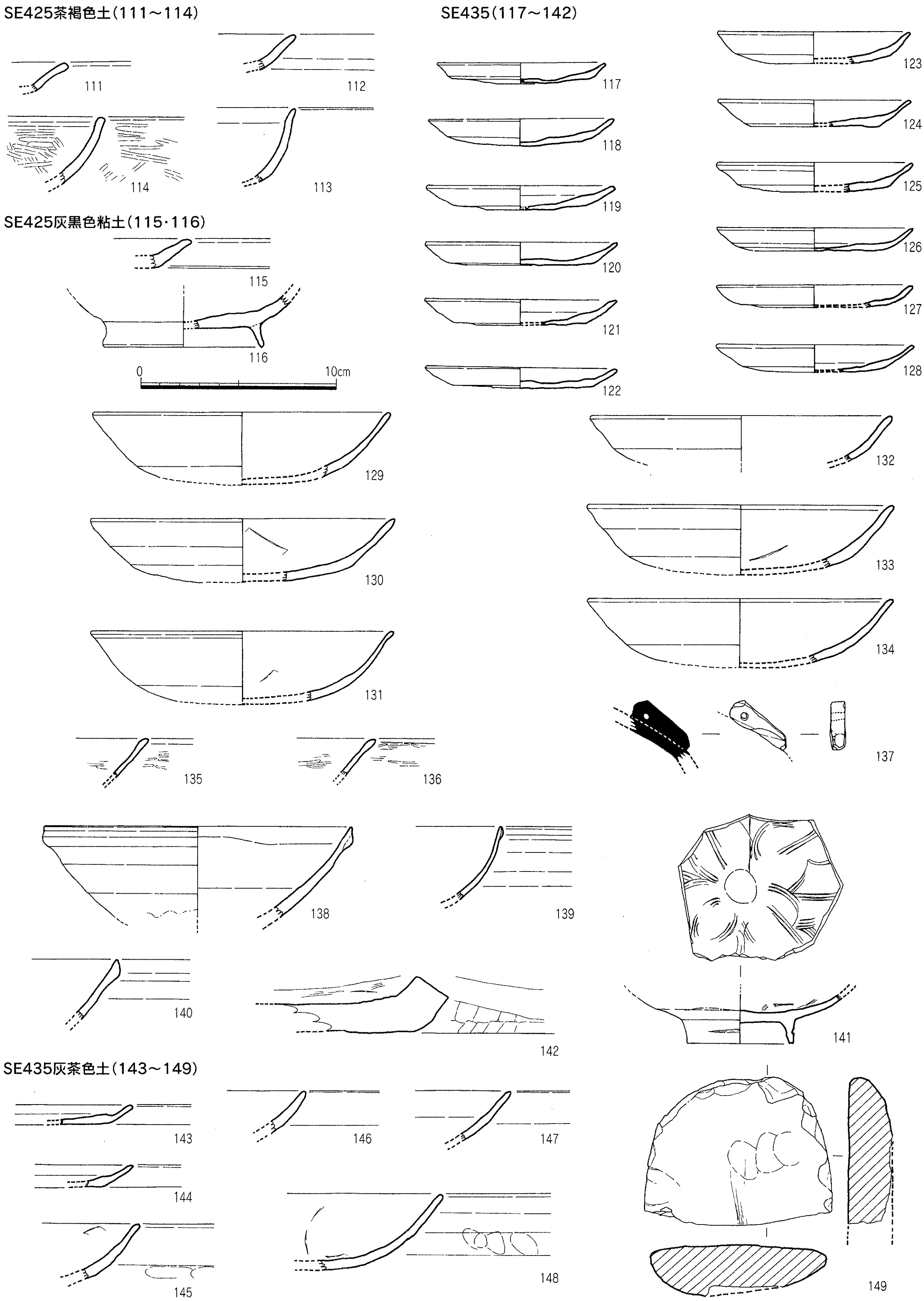


Fig.57　SE425・435 出土遺物実測図（1/3）

るもので、回転ヘラ切り痕跡が観察できる。なお187は底部外面に墨痕跡が確認できた。
丸底坏（190～193） 口縁部の破片でかろうじて口径が推定できる193は、13.3cmを測る。内面にはミガキb痕跡が観察できた。

SE465灰色砂質土出土遺物（Fig.59）

須恵器

こね鉢（203） 口縁端部を丸く仕上げているもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。生産地については不明。

土師器

小皿a1（194・195） 口径が推定できる194は、8.8cmを測る。底部外面の処理は、194のみ観察でき回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（196～202） 口径が明らかな200～202は、15.6cm～16.0cmを測る。底部外面の処理はいずれも回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

SE470出土遺物（Fig.59～61）

SE470出土遺物（Fig.59）

土師器

蓋4（204） 口縁端部のみの破片資料で、外面にミガキ痕跡が観察できる。口縁端部の面取りが顕著ではなく、畿内産土師器の可能性もとどめていることから、図化して報告した。

小皿a1（205～224） 口径が明らかな個体での計測値は、8.8cm～11.0cmをそれぞれ測り、底部外面が観察できる個体では、全て回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿a2（225・226） 口縁端部をつまみ上げるもので、225は器面磨耗のため調整属性があきらかでないものの、226は回転ヘラ切り痕跡が底部外面に観察できる。

小皿c（227） 高台端部を欠損しているが、口径12.0cmを測る。胎土中に白雲母を多く含んでいる。

丸底坏（228～236） 口径の明らかな231～236では、13.8cm～15.2cmを測り、底部外面の切り離し処理は、回転ヘラ切りによって切り離されている。なお236は、底径が他の個体と異なり、小さい。

椀c（237・238） 高台周辺の破片資料で、全形については明らかにし難い。

土製品

瓦玉（239・240） 瓦の再利用品で、正確な用途を推定することはできない。240については、ほぼ立方体を呈していることから、サイコロ未製品として考えることは可能かもしれない。

石帯（241） 1/2が残存するもので、白灰色の脈が貫入する緑灰色の蛇紋岩製で、紐通しの孔が観察できる。

SE470茶色土出土遺物（Fig.60）

小皿a2（242） 口縁端部をつまみ上げるもので、底部が残存しないことから、底部外面の処理は不明。

丸底坏（243・244） 口径推定が困難な資料で、内面にミガキb痕跡が観察できる。

SE470黒色土出土遺物（Fig.60）

土師器

小皿a1（245・246） 口径10.4cm・10.6cmを測り、底部外面処理は回転ヘラ切りによって切り離されている。

丸底坏（247～249） 口径が推定できる個体では、15.1cm・16.4cmを測り、内面にはミガキb痕

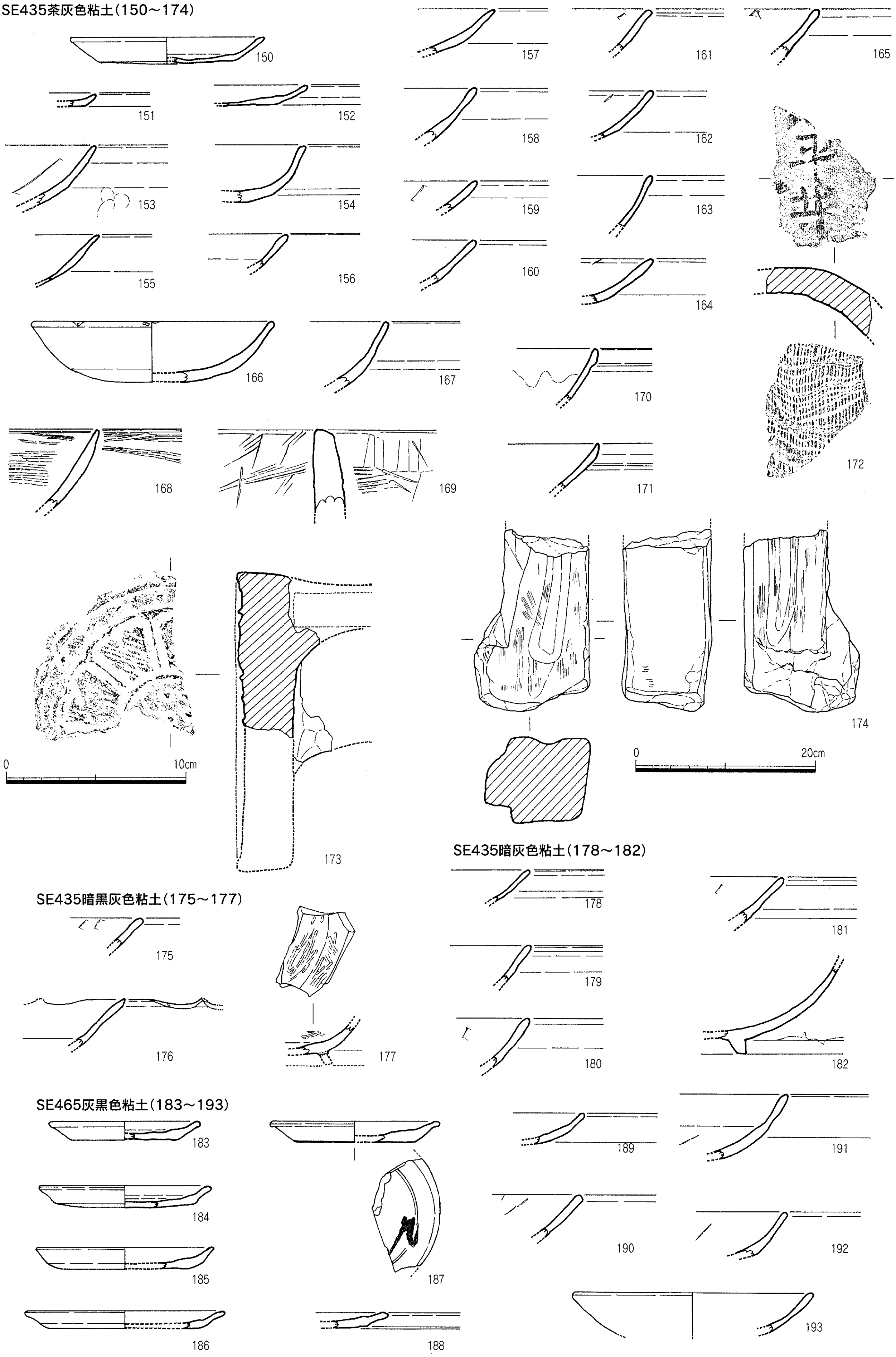


Fig.58　SE435・465 出土遺物実測図（174は1/6、その他は1/3）

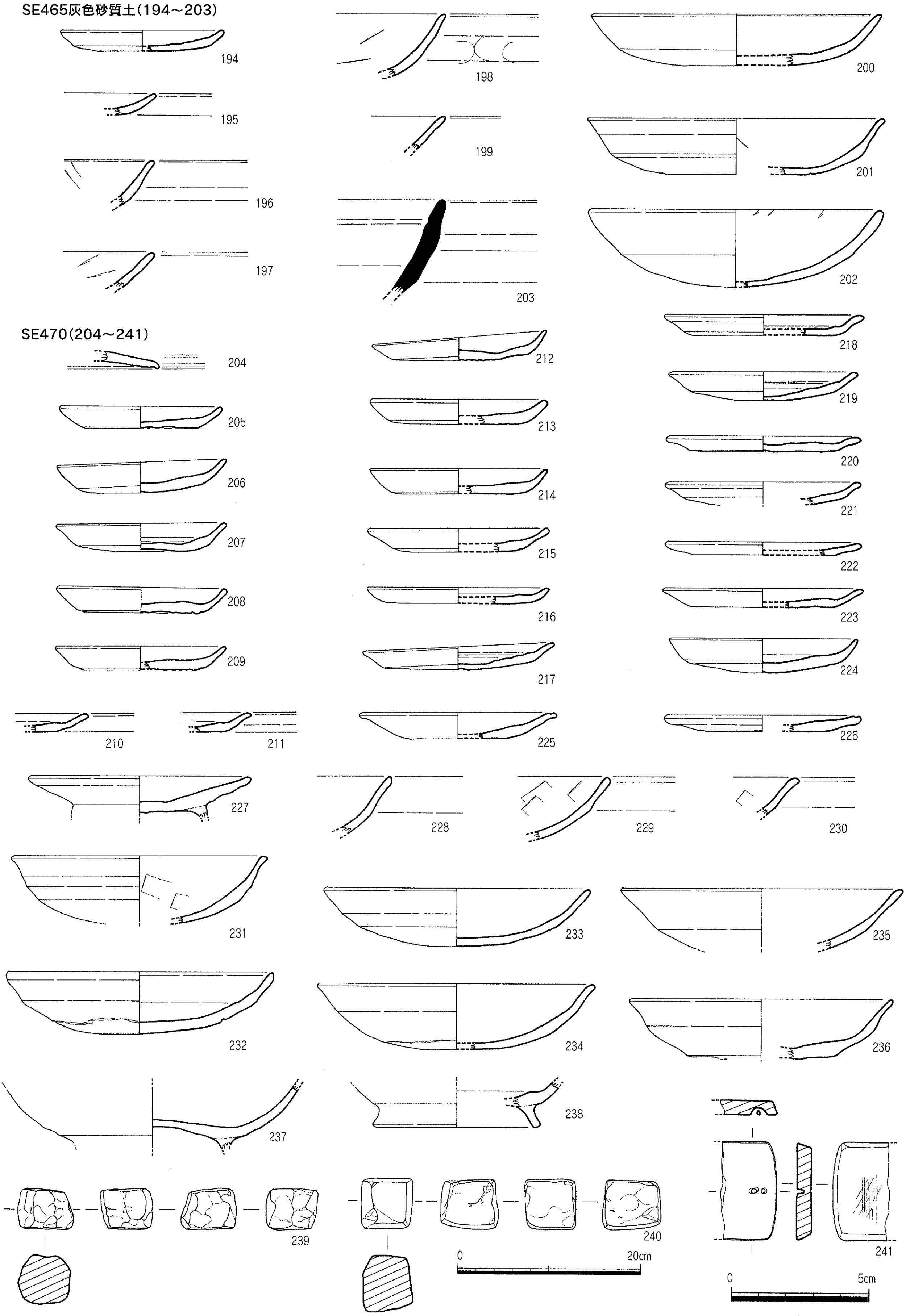


Fig.59　SE465・470 出土遺物実測図（241は1/2、その他は1/3）

跡が観察できる。

丸底坏c（250）　底部から高台にかけての破片資料で、丸底坏に高台を貼付したものと考えられる。見込み部分には不定方向のナデ痕跡が観察できる。

鍋（251）　口縁部を外方へ曲げるもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げられている。

白磁

皿（252）　やや内湾する口縁部形状を有しており、器厚が極めて薄いという特徴を有している。皿V類に属するものと考えられる。

SE470フショク土出土遺物（Fig.60）

土師器

小皿a1（253）　口径が推定困難な破片資料で、底部外面は回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（254）　口径14.0cmを測るもので、内面にはミガキb痕跡が観察できる。

丸底坏c（255）　底部から高台にかけての破片資料で、全形については明らかにし難い。

甕×鍋（256～258）　口縁部の破片で、器種特定には至っていない。口縁部を外方へ屈曲させるもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

鍋（259）　先述した256～258はおそらく259と同一形態を有するものと判断される。259は口縁部を外方へやや屈曲させ、内外面は回転ナデによって調整している。外面には3条の沈線が観察できる。煤状炭化物の付着は観察できず、煮炊き具としての性格付与の可能性については消極的にならざるを得ない。

SE470フショク土2出土遺物（Fig.60）

土師器

小皿a1（261）　口径10.0cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって切り離されている。

丸底坏（262）　口縁部のみの破片で、丸底坏と判別するには躊躇するが、内面にミガキb痕跡が観察されることから、丸底坏に分類した。

坏（263）　直線的な体部形態を有しており、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

椀（264）　体部下位においてやや丸みを有しており、内外面ともに回転ヘラミガキによって仕上げている。先の263も含めて平安時代前期の遺物の混入と考えられる。

SE470灰色砂質土出土遺物（Fig.60）

土師器

小皿a1（265）　口径10.8cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

鉢（266）　鉄鉢様の形状をとり、口縁部を内側へ屈曲させる。内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

石製品

石鍋（267）　断面方形の把手がつくり出されたもので、石鍋A群に分類される。内外面には器面調整のための削り痕跡が観察できる。

木製品（Fig.61）

用途不明製品（421～423）　削り出しによる把手状のものを有する421と、逆に抉り込む422・423がある。いずれもフショク土から出土したものである。

箸（424）　両端を細く削り出すものである。フショク土から出土した。

SE490出土遺物（Fig.60～73）

SE490出土遺物（Fig.60）

須恵器

鉢（281）　口径を復原できない破片で、底部からやや開き気味に外反するもので、口縁部に至ってやや内湾する。体部外面にはナデ上げによると考えられる痕跡が観察できる。

土師器

坏d（268）　口径13.2cmを測り、体部外面を回転ヘラ削りによって器面調整するもので、外面にのみ粗いミガキa痕跡が観察できる。胎土中に雲母細片を多く含む。

坏a（269・270）　口径11.2cm・12.6cmを測り、両者ともに回転ヘラ切りによって底部外面切り離し処理がなされている。270は底部と体部境界は丸く形づくられている。

坏c（271・275）　底部から高台にかけての破片資料で、高台高が低いことから坏cとして記述する。なお形式上は後述する椀c1と同一であり、業務分類として理解いただきたい。底部外面は回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

椀c1（272・276）　底部および高台の破片資料で、体部内外面は回転ナデ痕跡が観察できるものの、他の部位については、器面磨耗のため不明。276は高脚の椀c1。

甕a（273・274）　体部外面はハケ調整、体部内面は手持ちによるヘラ削りによって仕上げているもので、口縁部は横ナデによって調整している。両者ともに角閃石を多く混入している。

黒色土器A類

椀（278）　口縁部から体部の破片資料で、内面を丁寧なミガキcによって仕上げている。

椀c2（279）　同一個体と判断されたことから図上復原を行った。内面にミガキc痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀c（277）　高台部分の破片で、全形については定かではない。見込み部分にミガキc痕跡が観察できる。

青磁

椀（282・283）　両者ともに越州窯系青磁で、282はI-4類、283はI-5類。

SE490灰色粘土出土遺物（Fig.62）

須恵器

椀（284）　円盤状の底部を有するもので、底部外面は回転ヘラ切り痕跡が観察できる。見込み部分は回転ナデ。

土師器

坏（285～293）　全形を復原できるものはなく、口径が推定できる285は10.9cm、293は13.6cmをそれぞれ測る。

黒色土器A類

椀c2（294）　直径の大きい高台を貼付するもので、見込み部分に丁寧なミガキcが観察できる。

緑釉陶器

椀×皿（295・296）　両者ともに高台部分の破片であることから、全体形状については不明。295は外面にミガキc痕跡が観察できる。両者ともに京都系緑釉陶器と考えられる。

青磁

椀（297～299）　全て越州窯系青磁で、297はI類、298はII類、299はI-5類。

SE490白色粗粒砂出土遺物（Fig.62）

土師器

坏（300）　口縁部のみの破片資料で詳細は不明。

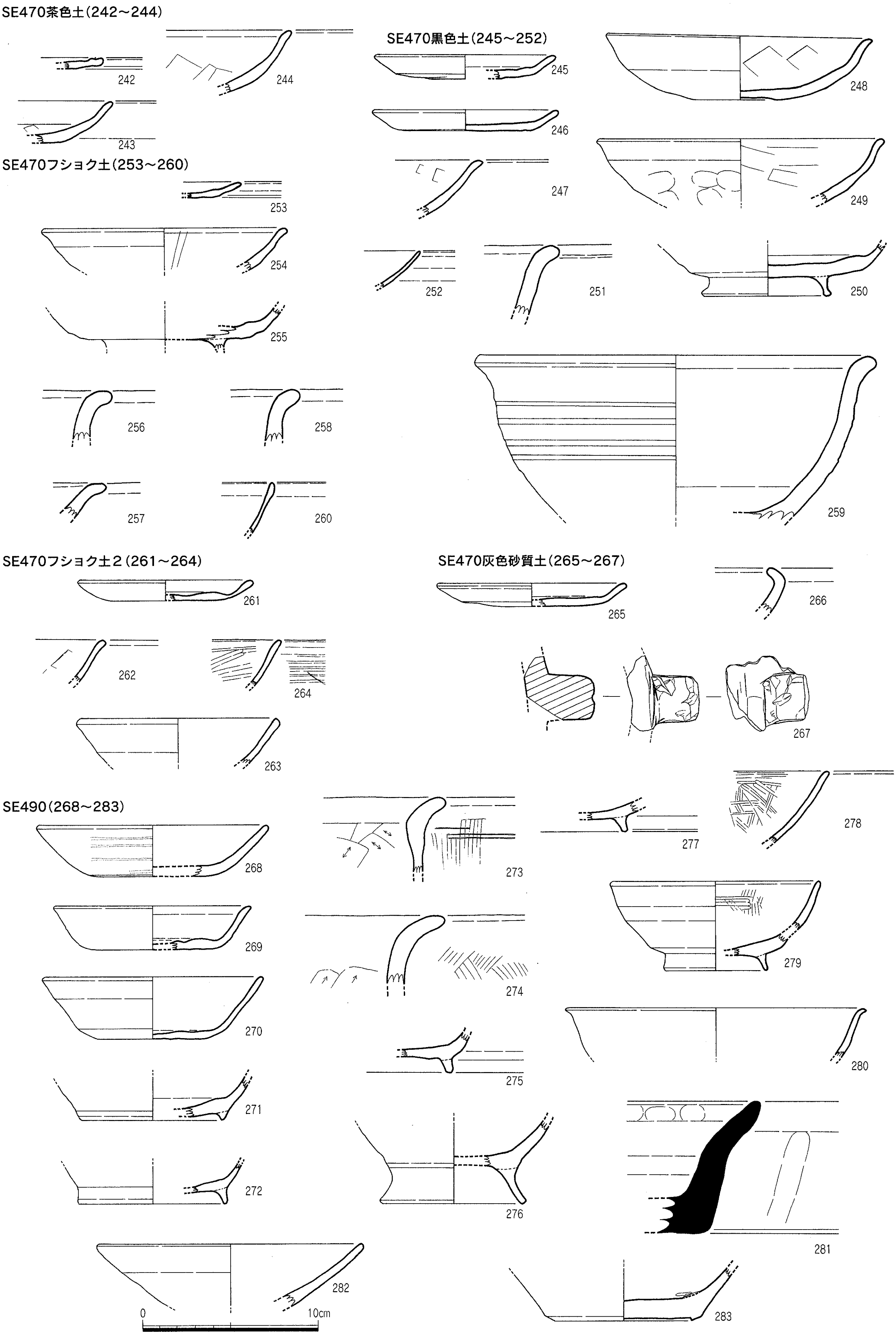


Fig.60　SE470・490 出土遺物実測図 (1/3)

SE490黒灰色土出土遺物（Fig.62）

須恵器

椀c（304）　体部下位以下が残存するもので、高台高が高く、内外面は回転ナデによって仕上げている。体部外面から高台脇にかけて黒褐色に変色している。

土師器

坏（301・302）　直線的に口縁部へ至るものと判断されるが、口縁部のみの破片資料であることから、詳細は不明。

甕（303）　口縁部を横ナデによって玉縁状に折り返すもので、鍋の可能性も残る。

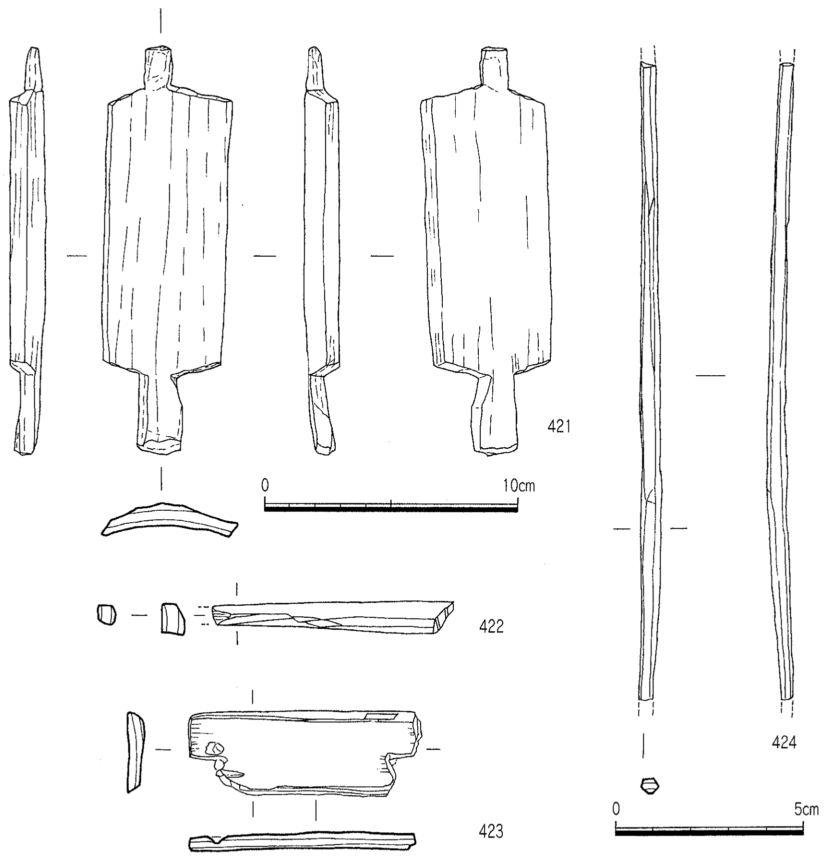


Fig.61　SE470 出土遺物実測図（424は1/2、その他は1/3）

SE490暗青灰色土出土遺物（Fig.62）

須恵器

鉢b（310）　口縁端部を平坦に形づくるもので、内外面ともに回転ナデ調整。

土師器

皿（305）　口縁部の破片であるが、下位の方で屈曲部が観察でき、底部へ移行するものと判断されたことから皿と分類した。内外面ともに回転ナデ。

坏a（306）　底部の破片で、全形については不明。底部外面は回転ヘラ切り。

椀c1（307・311）　高台高が高く、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。311は見込み部分に丁寧なミガキc痕跡が観察でき資料限界から土師器へ分類したが、黒色土器A類の可能性も残る。

供膳具（308）　器種特定には至らないが、外面に墨書痕跡が観察できる。

甕（309）　頸部を「く」字状に屈曲させるもので、頸部外面にハケ痕跡が観察できる。

黒色土器A類

鉢（312）　内外面を丁寧なミガキcによって仕上げているもので、鉄鉢模倣形の鉢と考えられる。

SE490井戸枠（Fig.62～73）

SE490井戸枠材には、材同定分析の結果、横桟にはユズリハ、サカキが用いられ、板材としてはスギ材が用いられていることが明らかとなっている。

構築材ごとに図化しており、内容は下記のとおり。

四隅杭（313～318）、横桟（319～328）、立板材（329～400）。なお横桟として加工されたものは、ホゾ孔を穿つもの（325～328）と、差し込むもの（319～324）の二者がある。枠板材の多くは

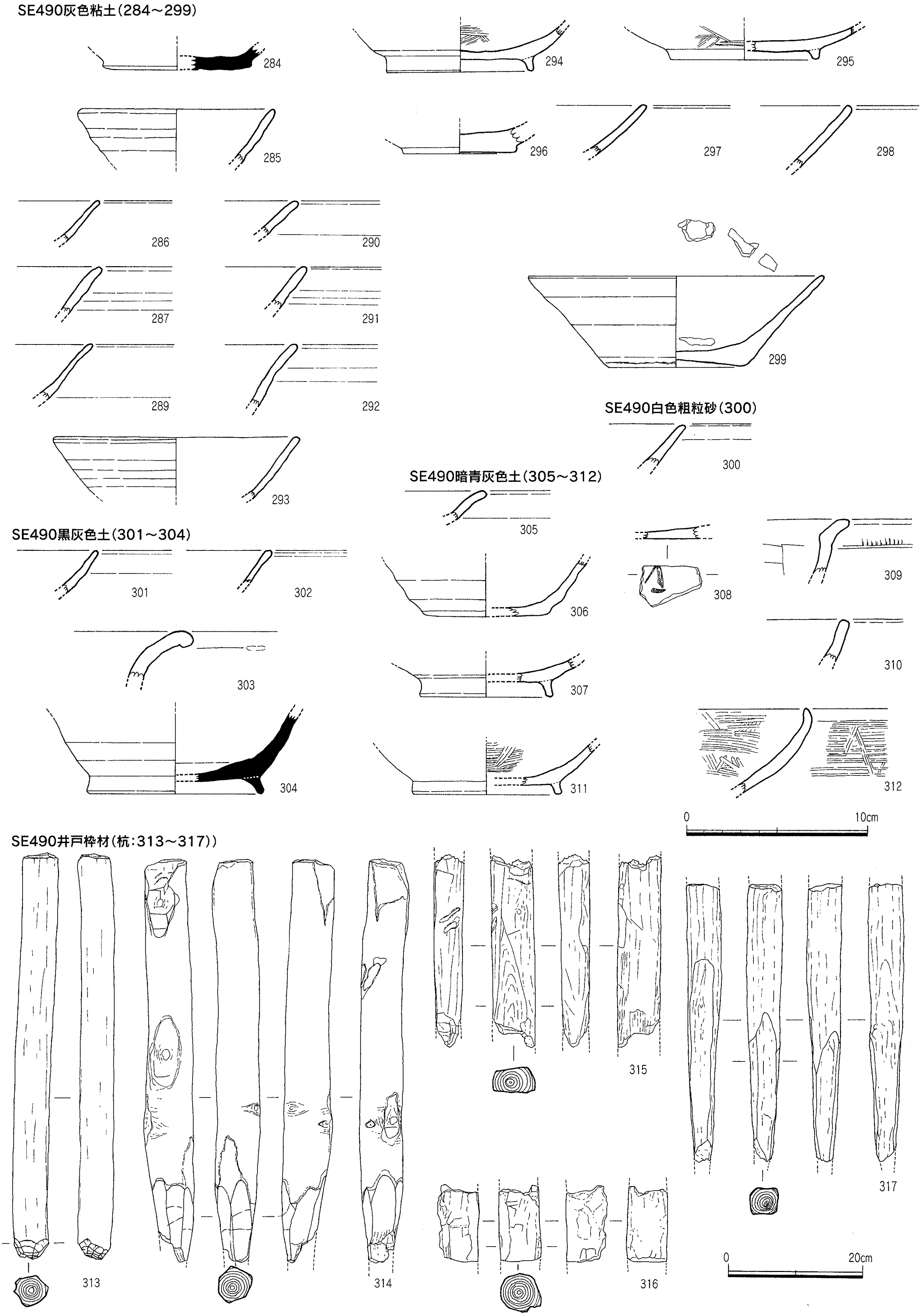
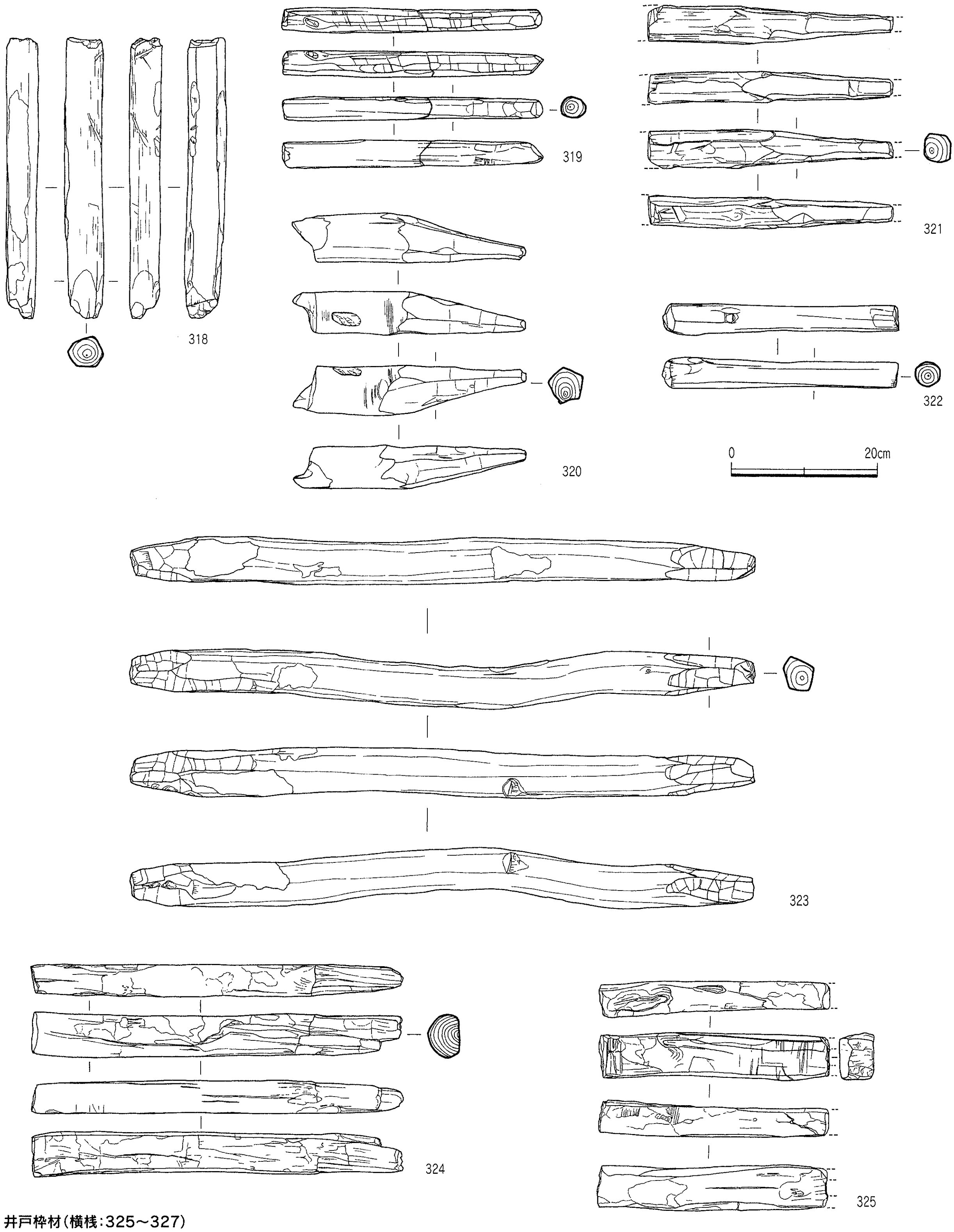


Fig.62　SE490 出土遺物実測図その2（313～317は1/8、その他は1/3）

井戸枠材(杭:318～324)



井戸枠材(横桟:325～327)

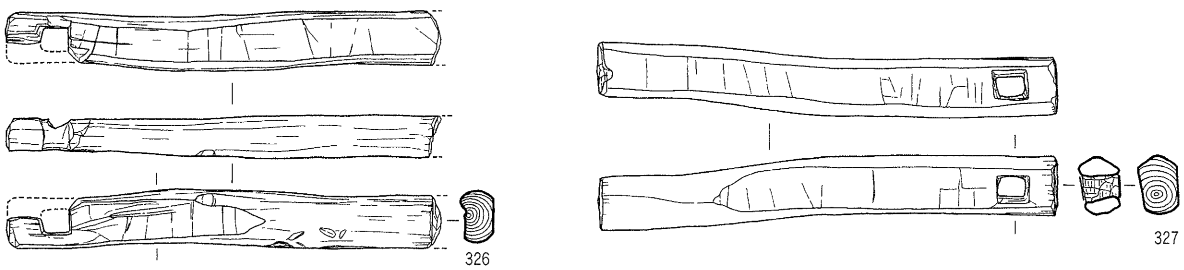


Fig.63　SE490 井戸枠材実測図その1（1/8）

上位が腐蝕して欠失しており全長が計測できるものが無かった。なお残存部分のみの観察結果であるが、1ないしは2つの小穴を穿つものが確認できる。

SE526出土遺物 (Fig.73)

SE526出土遺物

土師器

皿（401）　底部から外方へ開き気味に立ち上がる体部形態を有する。底部外面の切り離しは不明。

坏（402・403）　402については口縁部の破片であることから、皿の可能性も残る。内外面ともに回転ナデ。

椀c（405）　高台から底部の破片資料で、皿cの可能性も残している。体部形態は不明。

坏c（404）　高台を削り出すもので、筑後形坏として考えられる。器面磨耗のためミガキ痕跡については不明。

黒色土器A類

椀c（406）　底部の破片で詳細は不明。

緑釉陶器

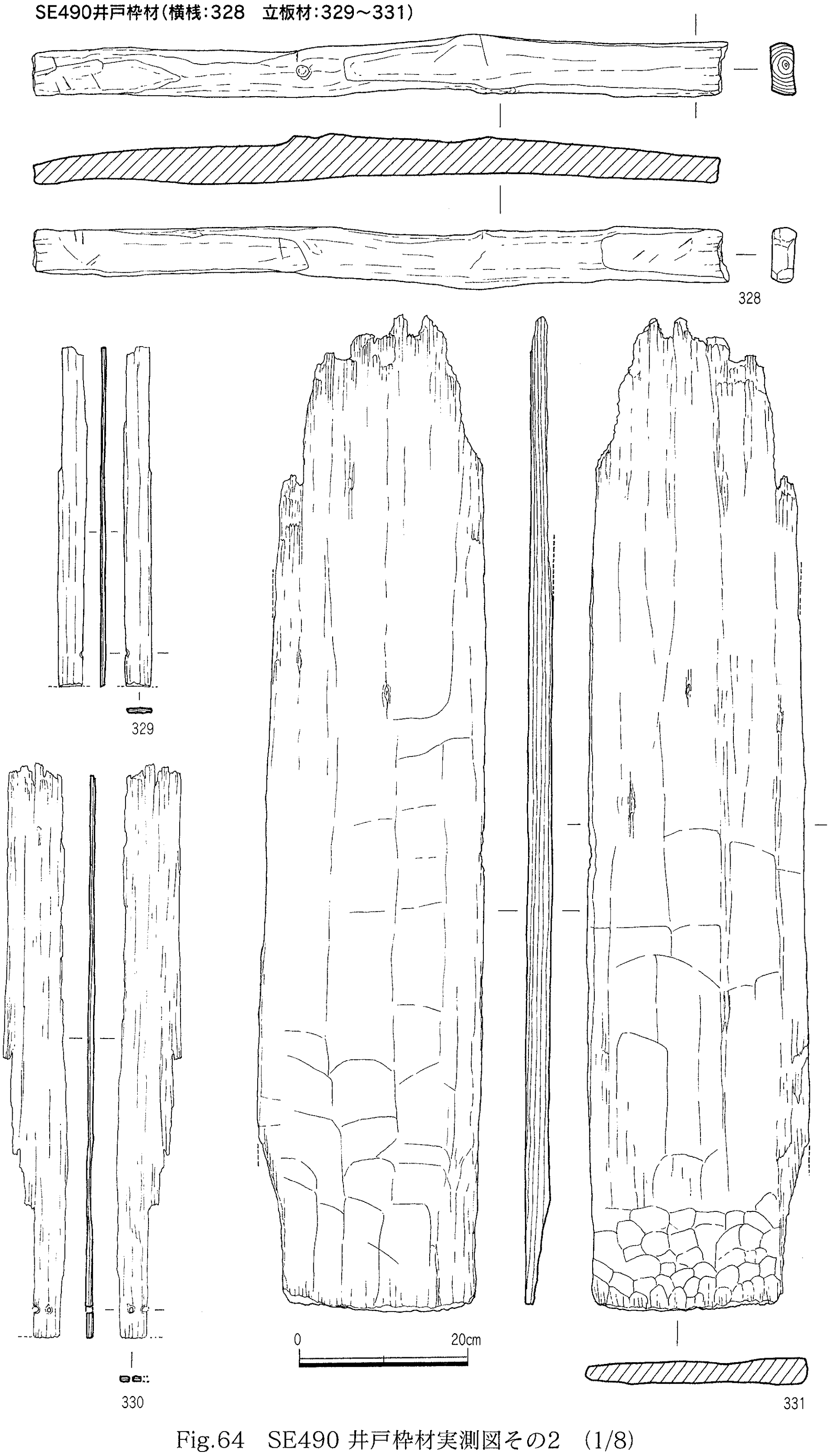


Fig.64　SE490 井戸枠材実測図その2 (1/8)

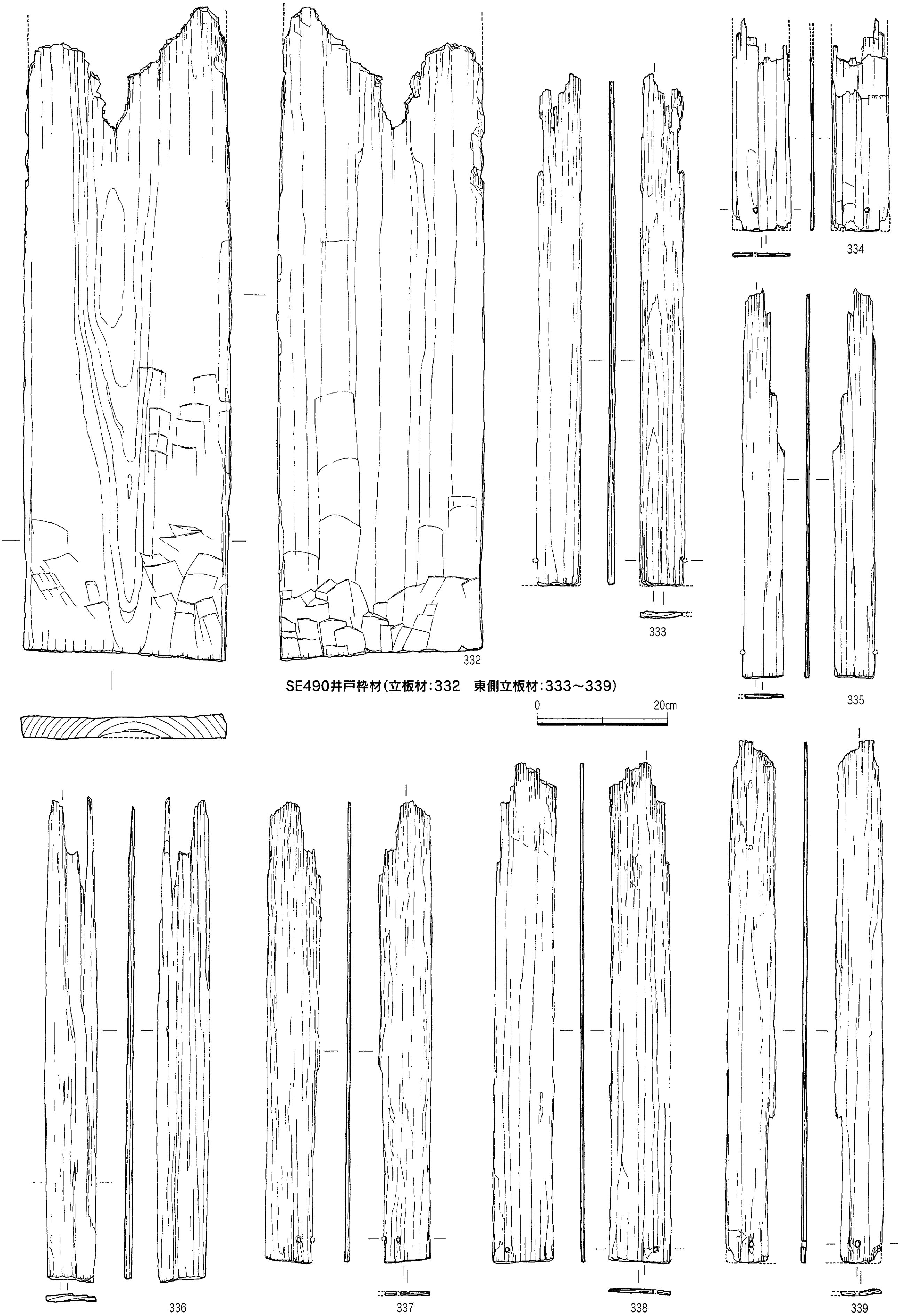


Fig.65　SE490 井戸枠材実測図その3 (1/8)

井戸枠材（東側立板材：340～347）

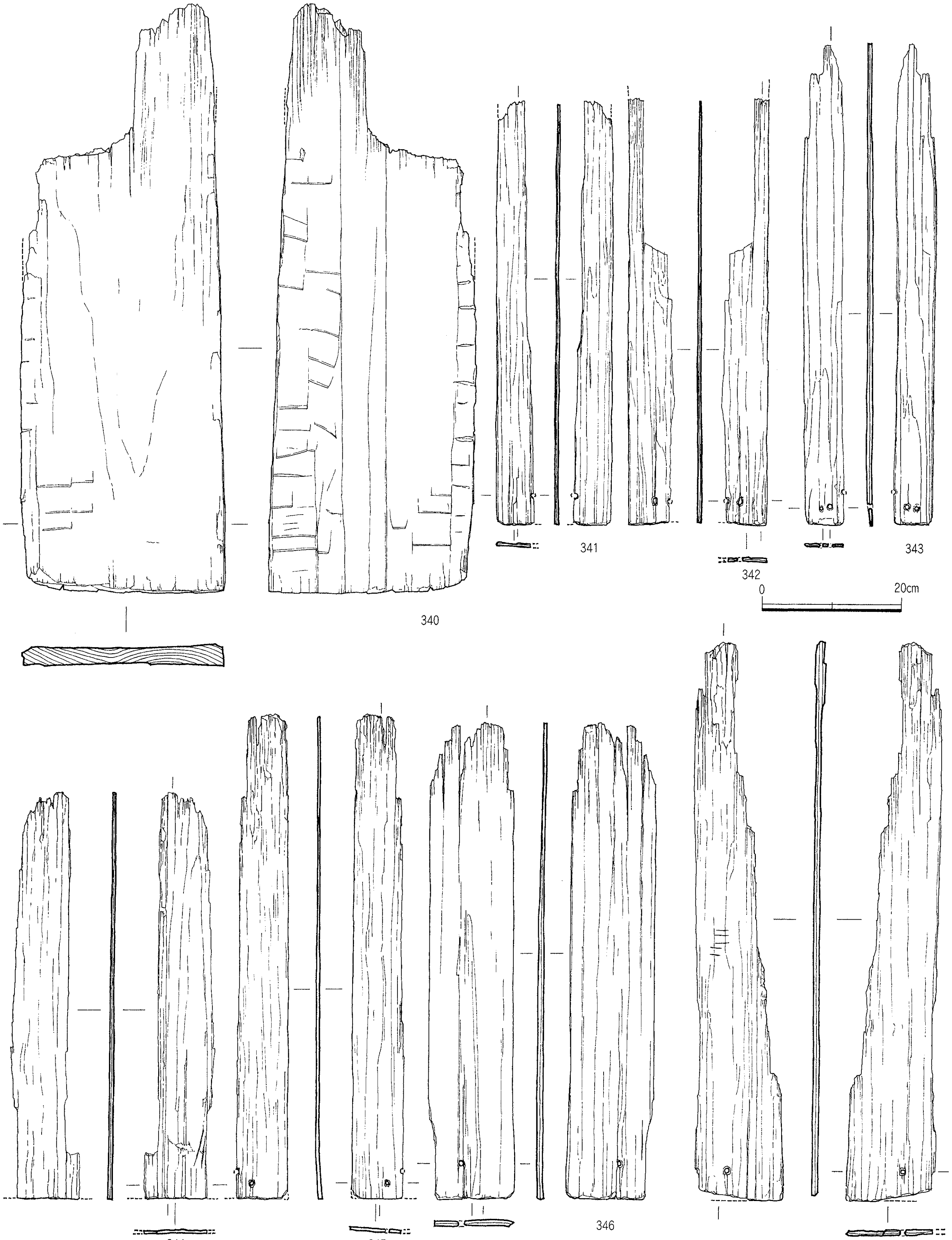


Fig.66　SE490 井戸枠材実測図その4　(1/8)

井戸枠材（南側立板材：348～356）

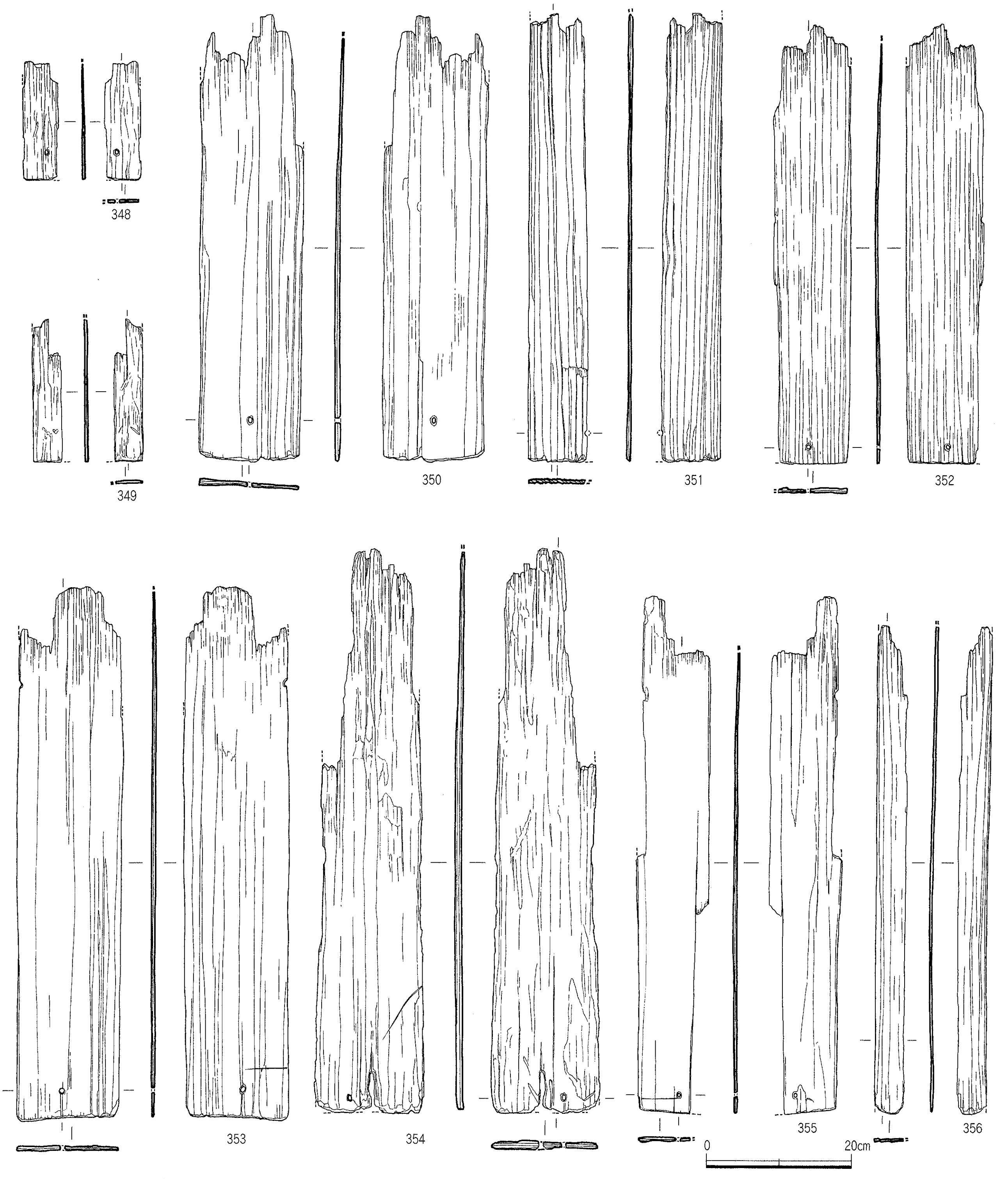


Fig.67　SE490 井戸枠材実測図その5　(1/8)

SE490井戸枠材(南側立板材：357～366)

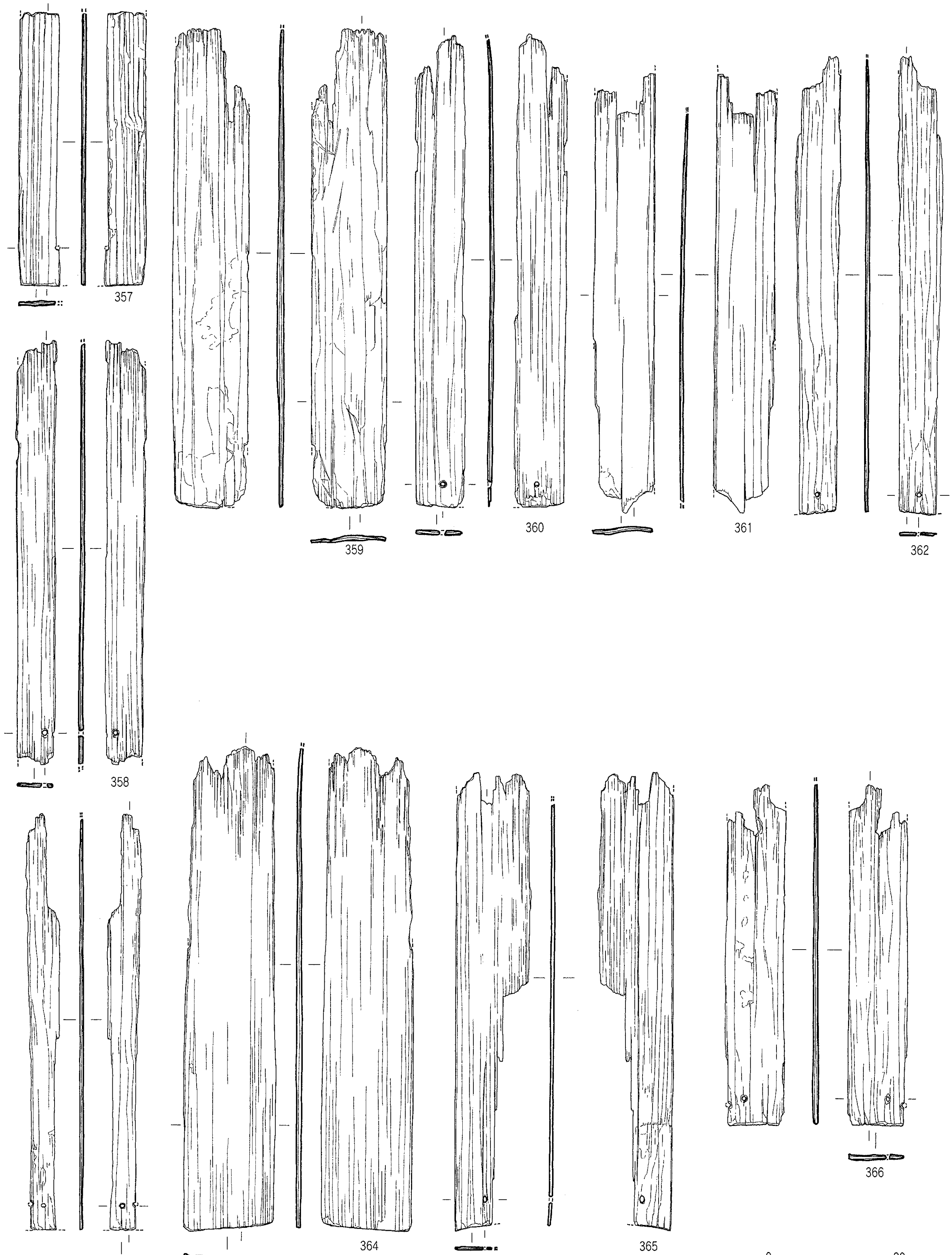


Fig.68　SE490 井戸枠材実測図その6 (1/8)

井戸枠材(西側立板材:367~374)

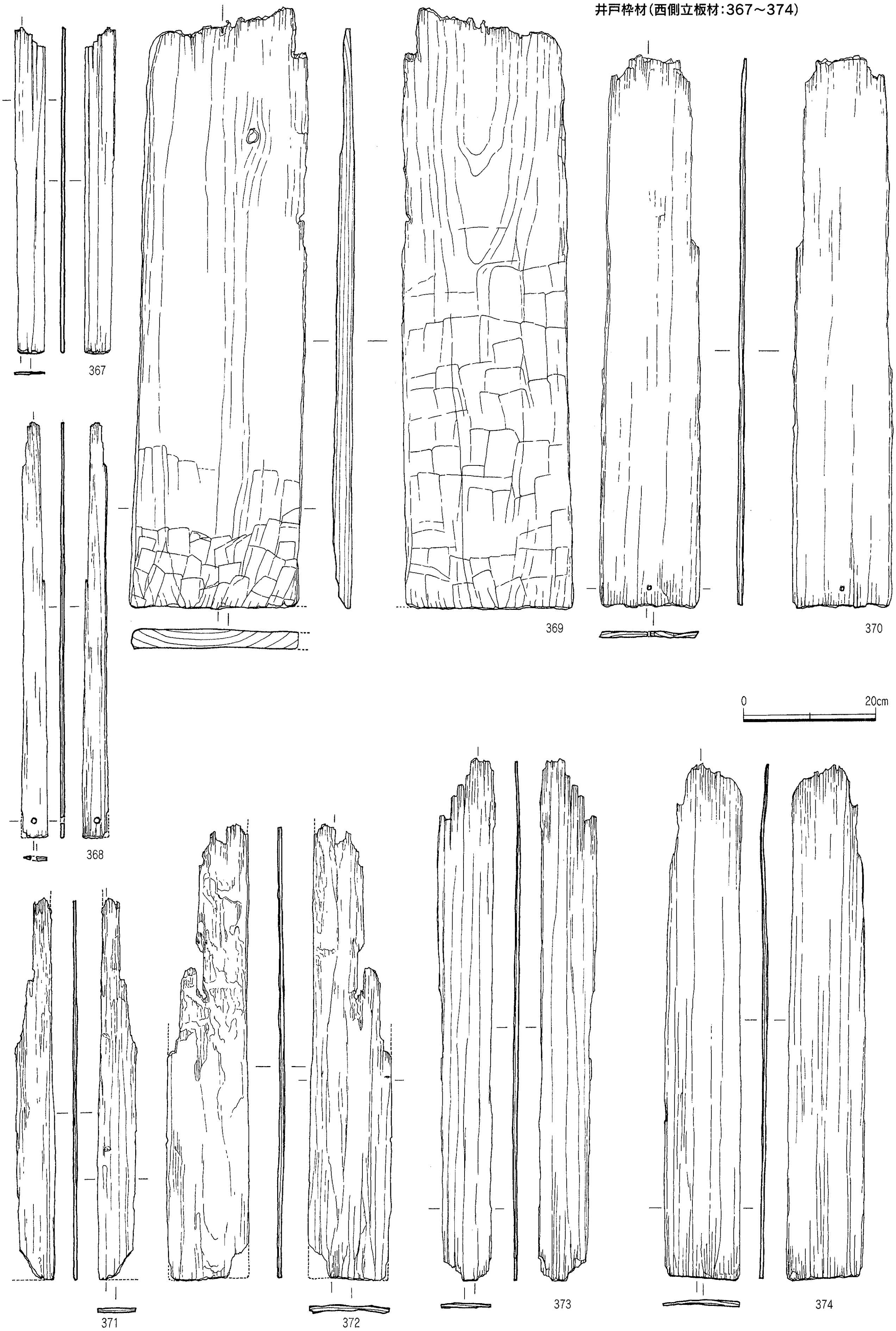


Fig.69　SE490 井戸枠材実測図その7　(1/8)

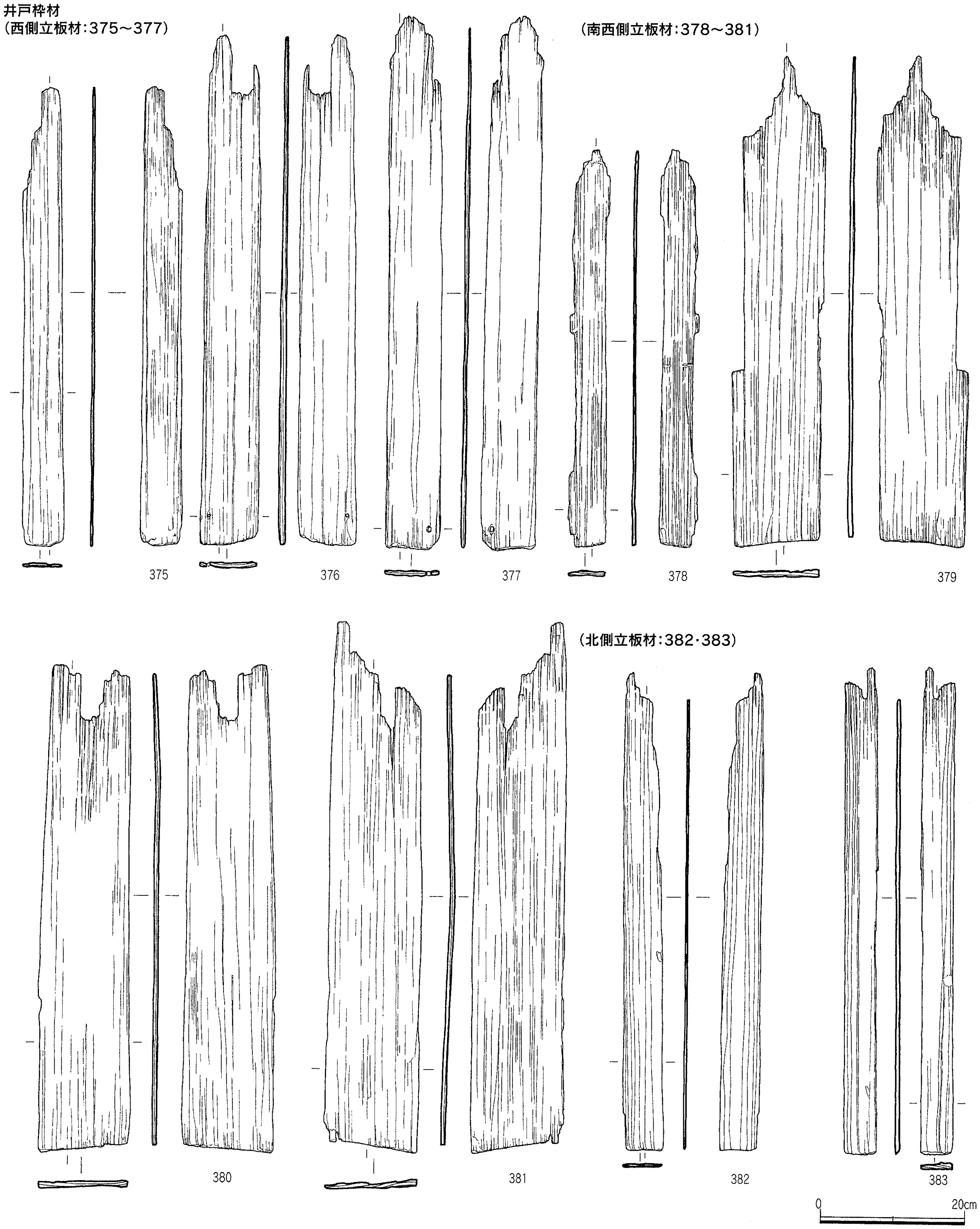


Fig.70　SE490 井戸枠材実測図その8 (1/8)

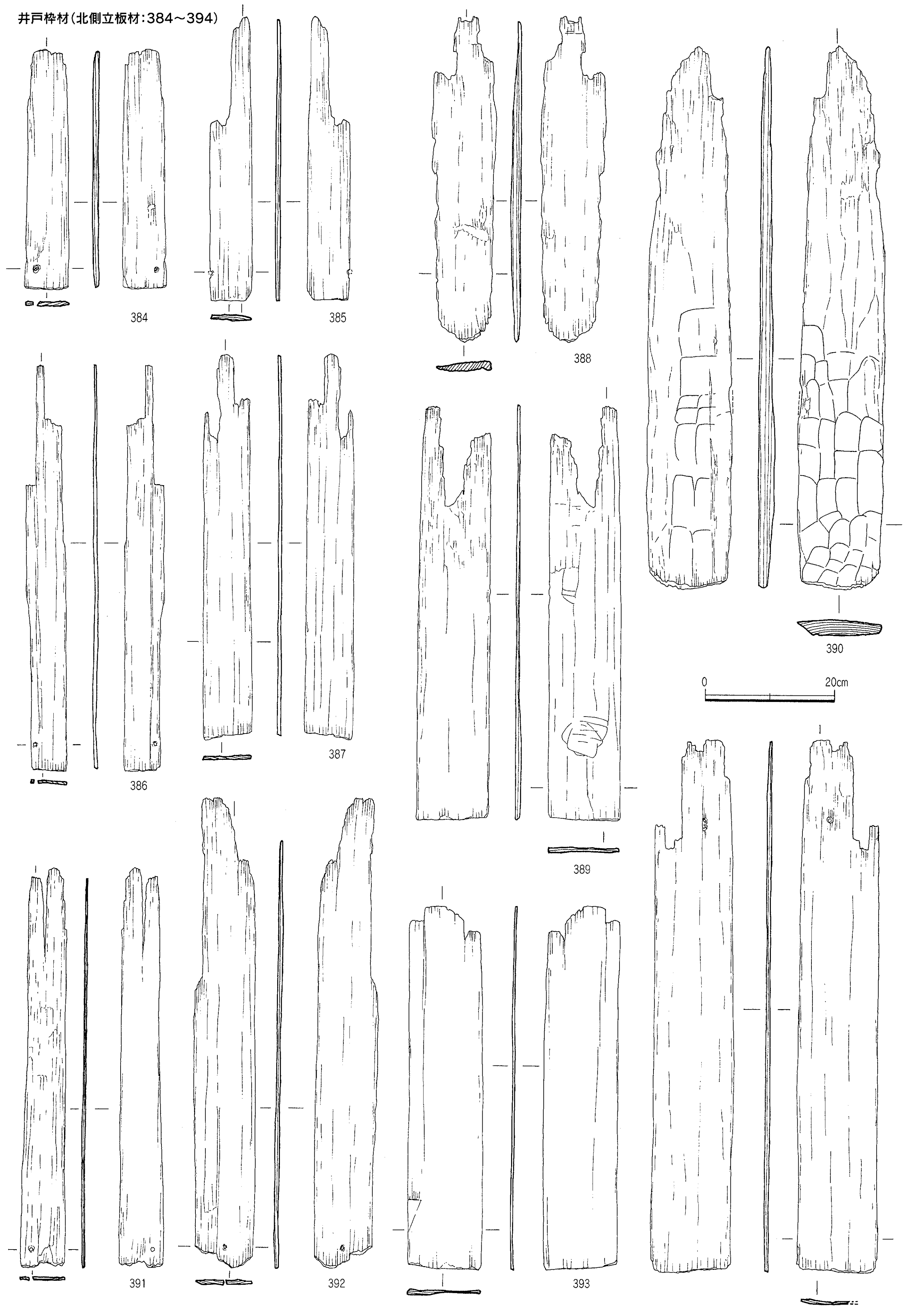


Fig.71　SE490 井戸枠材実測図その9（1/8）

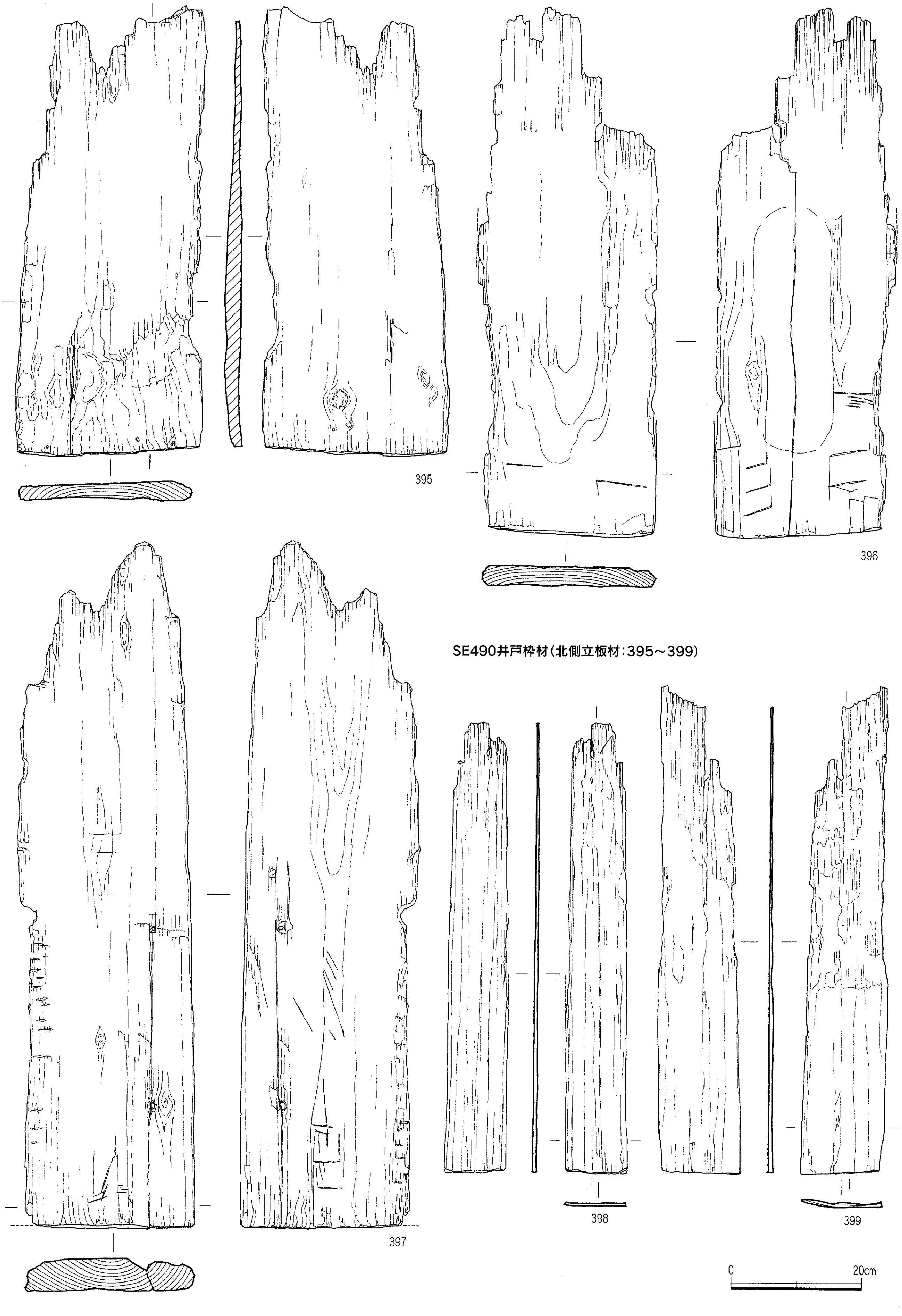


Fig.72　SE490 井戸枠材実測図その10　(1/8)

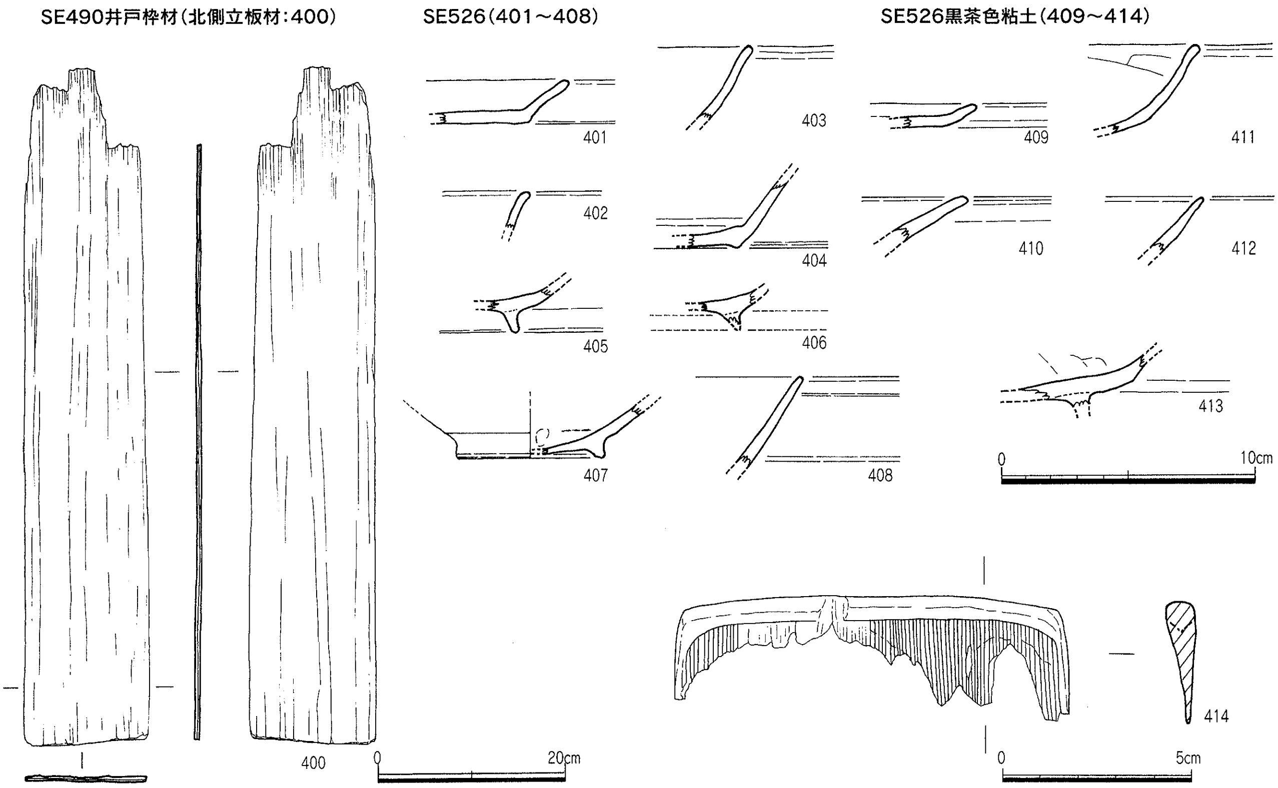


Fig.73　SE490・526 出土遺物実測図（400は1/8。414は1/2。その他は1/3）

椀（407）　体部下位以下の破片資料で、高台畳付部分を凹ませる形態をとる。須恵質の焼き上がりで、暗黄緑色の釉が底部以外全面に施釉されている。見込み部分には目跡が観察できる。篠産と考えられる。

青磁

椀（408）　口縁部の破片資料で、越州窯系青磁椀I類。

SE526黒茶色粘土出土遺物（Fig.74）

土師器

小皿a1（409）　底部ヘラ切りするもので、口径復原はできなかった。

器台×皿（410）　直線的に外方へ開くもので、全形特定には至らなかった。内外面ともに回転ナデ。

丸椀×丸底坏（411）　器高の面からみると丸椀の可能性が残る。内面にはミガキb痕跡が観察できる。

椀c2（413）　底部と体部の境界部分からは底部中心へ高台貼付位置が隔たっているもので、見込み部分にはミガキb痕跡が観察できる。

緑釉陶器

椀（412）　口縁部の破片で、全形は定かではない。須恵質の焼き上がりで、暗緑色の釉が掛けられている。近江産と考えられる。

木製品

櫛（414）　井戸枠内にて出土したもので、井戸埋没後の土坑化した状態で埋没したものと考えられる。極めて微細な櫛部を有しており、断面形状では櫛歯作り出しを記載しているが、極めて脆いことから推定で記載している。

SE850出土遺物（Fig.75～79）

SE850出土遺物（Fig.75）

土師器

丸底坏a（1）　口径15.6cm、器高4.1cm、底径11.1cm。口縁部は外反せず直線的に立ち上がる。

SE850暗茶灰色土出土遺物（Fig.75）

須恵質土器

鉢（2）　口縁から体部までの破片。残存部の高さは6.3cm。立ち上がり部が屈曲している。胎土は、淡白灰色の0.5～2mm大の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好。色調は淡灰白色、口縁端部は淡灰色を呈する。

瓦

平瓦（3）　凸面に斜格子叩き目が施される。格子内に細く×状の叩きがある。焼成は不良で、色調が全体的に灰白色を呈する。

SE850枠内出土遺物（Fig.75）

石製品

碁石（4）　長軸1.8×短軸1.6×厚み0.7cm。色調は黒灰色。

SE850明茶灰色粘質土出土遺物（Fig.75）

土師器

小皿a1（5）　口径9.6cm、器高1.4cm、底径8.2cm。底部切り離しはヘラ切り。

丸底坏a（6）　口径14.7cm、器高3.1cm、底径11.2cm。底部切り離しはヘラ切り。内面にコテ当て痕跡が認められる。

SE850緑灰色粘質土出土遺物（Fig.75）

土師器

小皿a1（7）　口径8.8cm、器高1.2cm、底径6.8cm。底部切り離しは摩滅により不明。

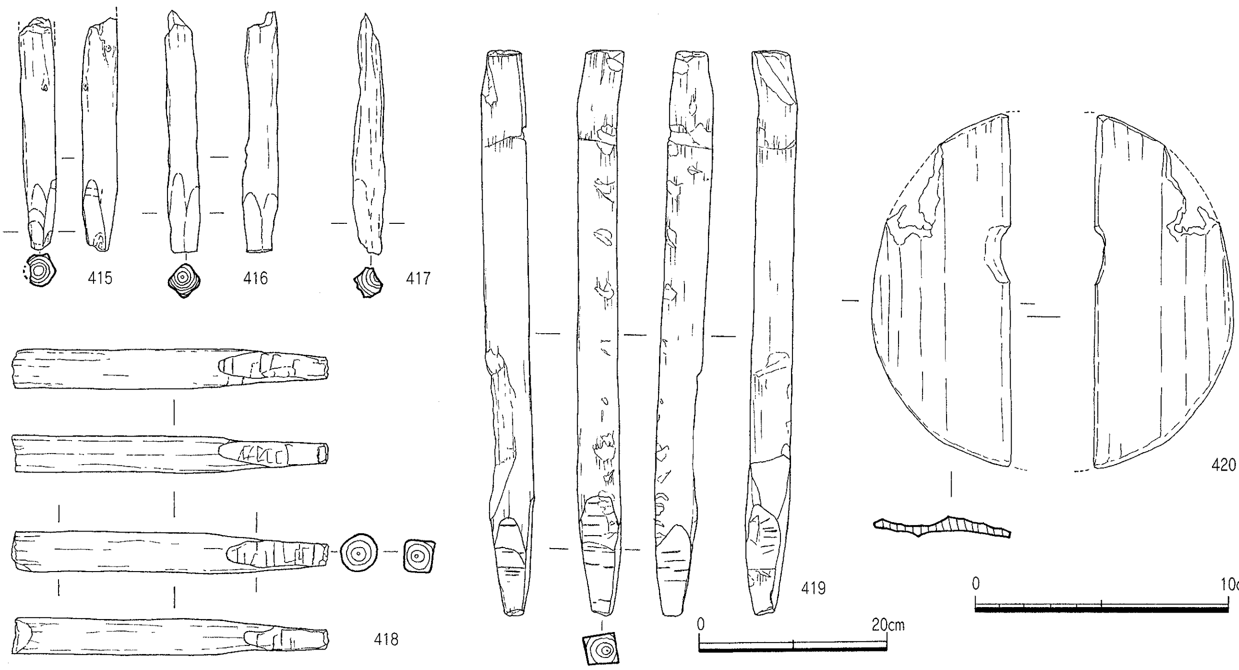


Fig.74　SE435 出土遺物実測図（420は1/3。その他は1/8）

丸底坏a（8・9）　口径14.7～15.6cm、器高3.0～3.1cm、底径11.2～11.3cm。8は押し出し成形を丁寧に行っており、体部と口縁部の段差が顕著ではない。9は底部を押し出しているものの内面のコテ当て調整が十分には行われておらず、体部と口縁部との器壁の厚みに差がでている。

坏a（10）　口径14.6cm、器高2.6cm、底径10.8cm。丸底坏aの底部を押し出していないタイプだと考えられる。

鉢（11）　口径17.4cm、残器高5.8cm、底径16.6cm。底部は平底で、体部は直線的に立ち上がる。体部外面に指頭圧痕がある。底部外周面に脚の痕跡が認められ、底部残存状況から本来は三脚であったと考えられる。口縁部内面に煤付着により黒茶色に変化した箇所がある。

SE850明緑黄灰色土出土遺物（Fig.75）

須恵器

把手（12）　壺の把手か。粘土を体部へ接合してヘラにより頂部を削り、周辺をナデ調整している。焼成は不良。還元も悪く、色調は灰色である。

土師器

小皿a1（13・14）　口径9.0cm、器高1.3～1.4cm、底径7.1～7.4cm。底部切り離し技法はヘラ切りである。

丸底坏a（15）　口径15.4cm、器高3.2cm、底径11.7cm。内面底部から口縁部にかけて茶黒色に変化している。これは煤による変化で、内面立ち上がり付近はタール状に固着しており、灯明皿として使われていたと思われる。

丸底坏c（16）　口径16.3cm、器高4.8cm、底径7.7cm。口縁部は外反しない。

土製品

焼土塊（17～20）　胎土は5mm前後の白色砂質粒と2cmの長石を多量に含む。色調は茶灰色であるが、部分的に橙黄色や暗灰茶色を呈する。17は三面が平坦面であり、厚みはおおよそ6cmである。18・19ともに断面半円形の窪みがあり、棒状のものが当たっていたと考えられる。20は小破片ではあるが、胎土・焼成とも他と共通点が多い。

SE850黒色炭土出土遺物（Fig.75）

土師器

丸底坏a（21）　口径15.7cm、器高3.5cm、底径13.4cm。口縁部は若干外反する。内面はコテ当て技法（ミガキb）を施している。

SE850緑黄灰色土出土遺物（Fig.75）

土師器

小皿a（22・23）　口径8.6～8.9cm、器高1.2～1.3cm、底径7.1～7.2cm。底部切り離しはヘラ切りである。

須恵質土器

鉢（24）　口径29.7cm、残存高7.0cm。東播系須恵器の片口鉢である。

SE850出土遺物（Fig.76）

木製品

井戸枠材（1～5）　井戸枠部の立板材である。上部が腐食して欠落しているため、全長は明らかにならないが、比較的残りがいい部材から、65cm以上はあったことが推定可能である。表面も腐蝕により木目が浮き出ている状況で、表面調整については不明である。1は広範囲にわたって両面とも幅4cm程度の刃を持つ工具で調整されている。5は12×7cm程度の穴があけられており、再利用品の可能性が

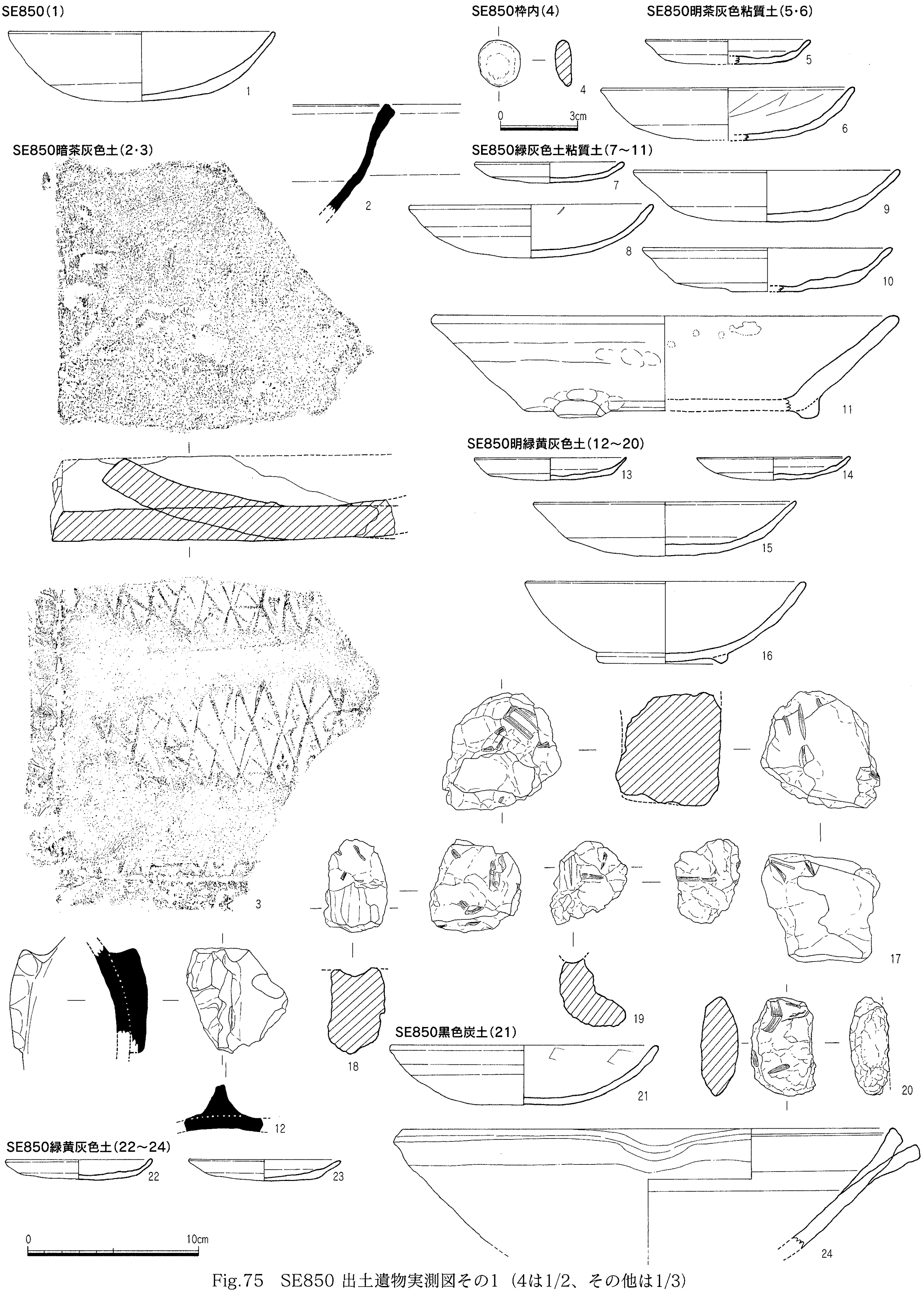


Fig.75　SE850 出土遺物実測図その1（4は1/2、その他は1/3）

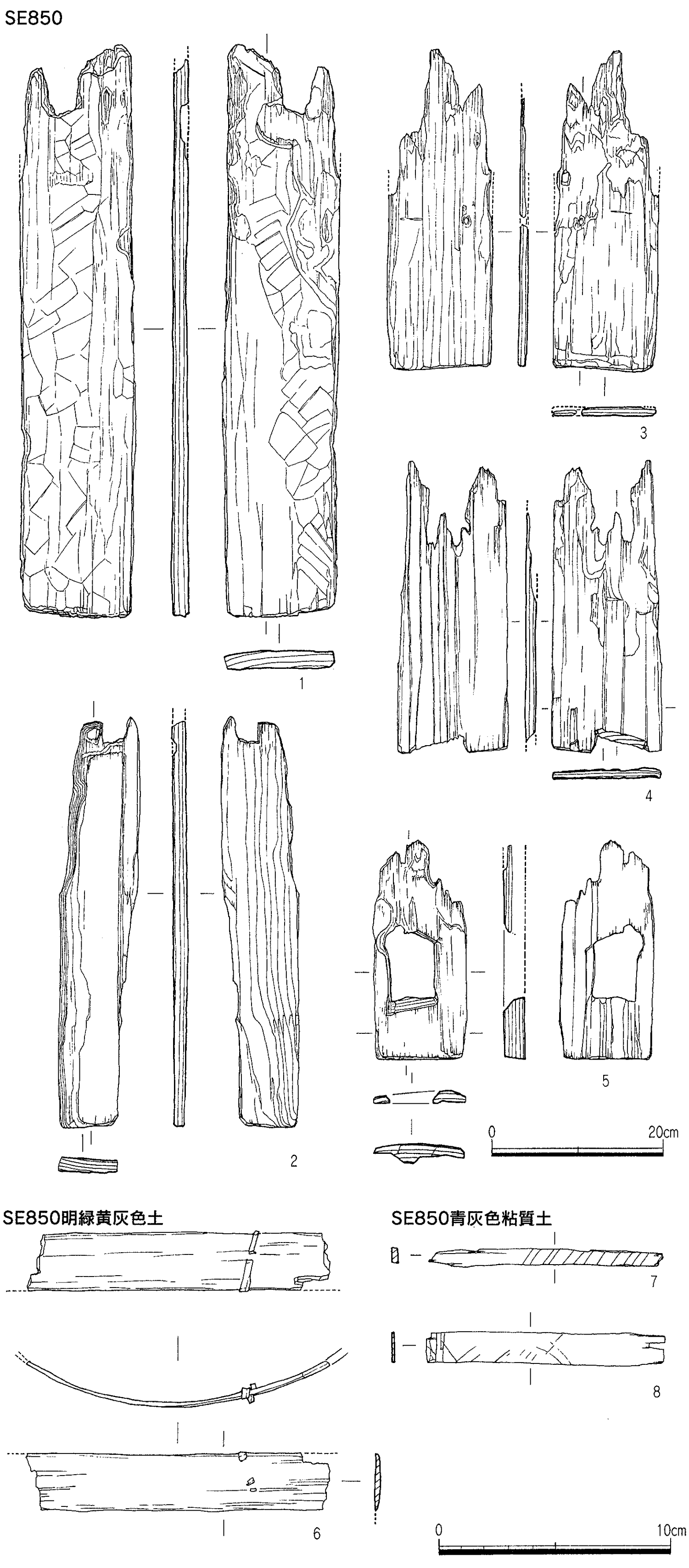


Fig.76　SE850 出土遺物実測図その2
（6～8は1/3、その他は1/8）

高い。

SE850明緑黄灰色土出土遺物（Fig.76）

木製品

曲物（6）　曲物の破片である。幅2.6cm、厚み3mm。他の部材にかがるための幅3mm程度の木皮が残存している。外面側に焼けこげた跡があり、黒色化している。

SE850青灰色粘質土出土遺物（Fig.76）

木製品

不明木片（7・8）　7は長さ10.1cm、幅0.8cm、厚さ0.3cm。曲物の部材の一部か。8は長さ10.3cm、幅1.35cm、厚さ0.3cm。

SE850井戸枠（Fig.77～79）

木製品

井戸枠材（1～22）　井戸枠部の横桟材（1～4）。材木より5×6cmの方形に切り出した後、両端をホゾ組みにするために削りだしている。両端の形状は組み合わせ部の形状差で、凹部（1～2）と凸部（3～4）に分かれる。1は長さ93.8cm、幅4.8cm、厚み5.8cm。2は長さ94.4cm、幅6cm、厚み6.4cm。3は長さ93.2cm、幅5.6cm、厚み4.6cm。4は長さ92.6cm、幅5.5cm、厚み4.9cm。組み合わせると、内枠で80×83cm程度になると推定される。

結桶（5～22）　井戸枠に転用された桶の部材。構成していた18枚をすべて図示した。長さは上端が腐食しており正確な数値が出ないが、おしなべて56cm前後を計る。厚みは1.5～1.9cm。横幅は7.3～9.6cmの範囲に収まる狭いもの（5～14）と、横幅が12.8～16.5cmの範囲に収まる広いもの（15～22）に大別2種のグループに分けられる。桶を組み上げた際に歪まないように、桶底部に向かってすぼめている。下端部は外面から内面に向かって斜めに面取りをしている。また、底部短片に木製の楔を打ち込んでいる板（5・11・15～17・21・22）があるが、

これは本来桶底をはめ込んでいた際に、タガと併せて桶底板を固定する効果があったと思われる。タガだが発掘調査現場では三条回っていることを確認したが、腐食が激しい状態であった。板材を確認すると、桶底側から上部に向かって5cm、8cm、50cm付近におおよそ2cm幅で圧痕が認められるため、この部位にタガが回っていたと考えられる。内面に桶の底板痕跡は確認できなかったため、本来は結筒と呼称すべきだが縦板底部に楔を打ち込んでいる様子から桶の可能性も否定できないため、ここでは仮に結桶と推定しておく。

SE870出土遺物 (Fig.80)

木製品

不明製品 (1)

須恵器壺の外底

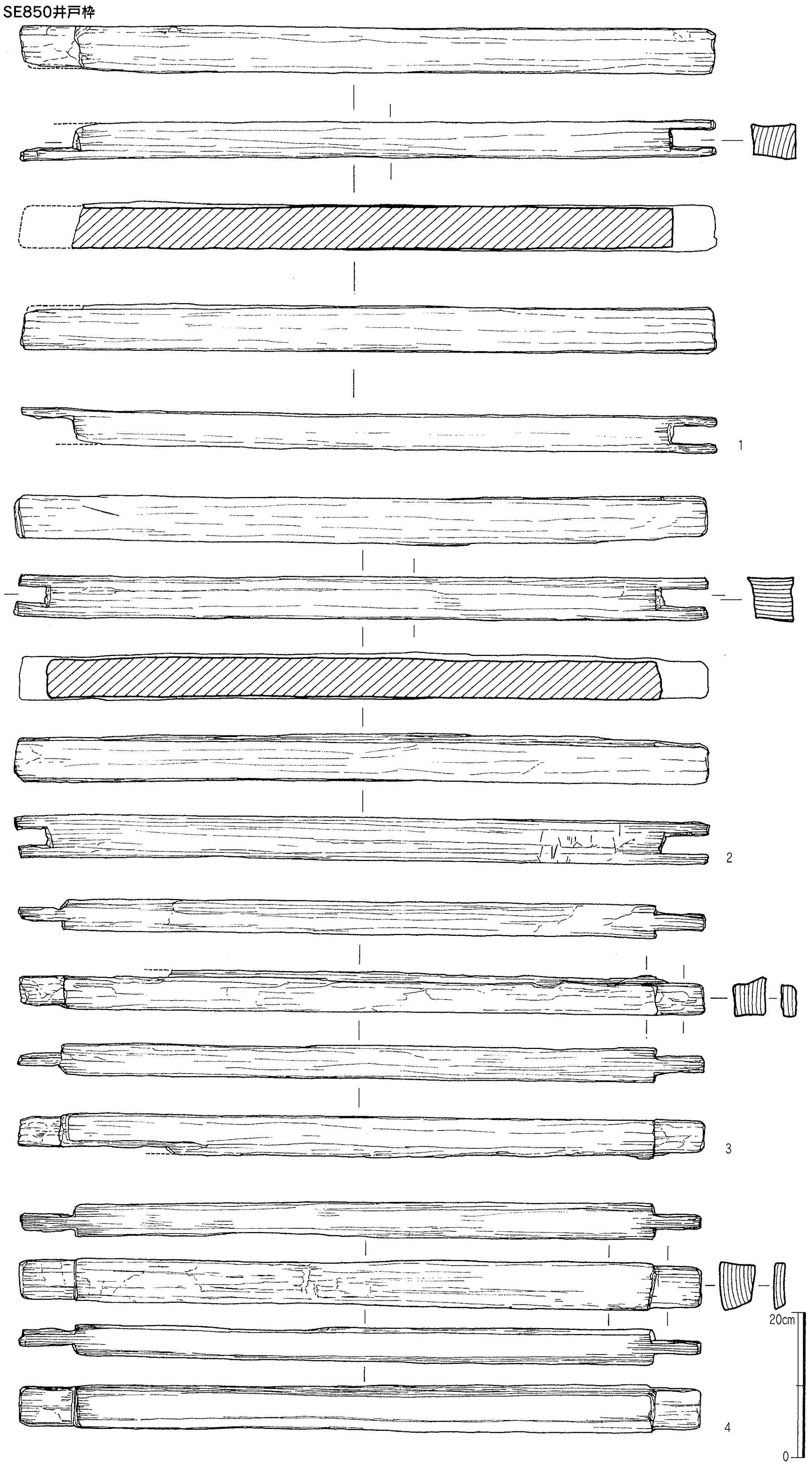


Fig.77　SE850 井戸枠材実測図その1 (1/8)

SE850井戸枠

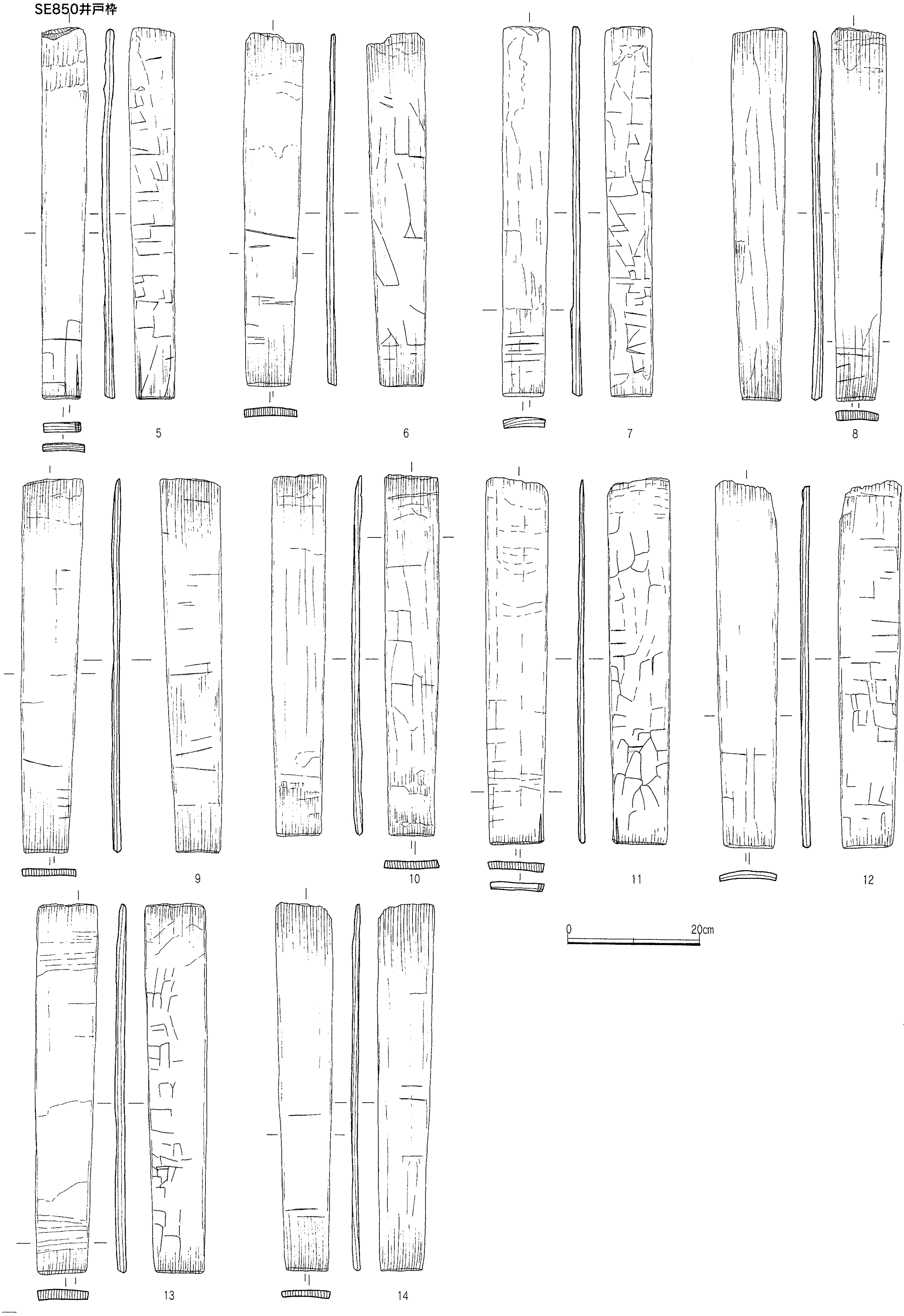


Fig.78　SE850 井戸枠材実測図その2（1/8）

SE850井戸枠

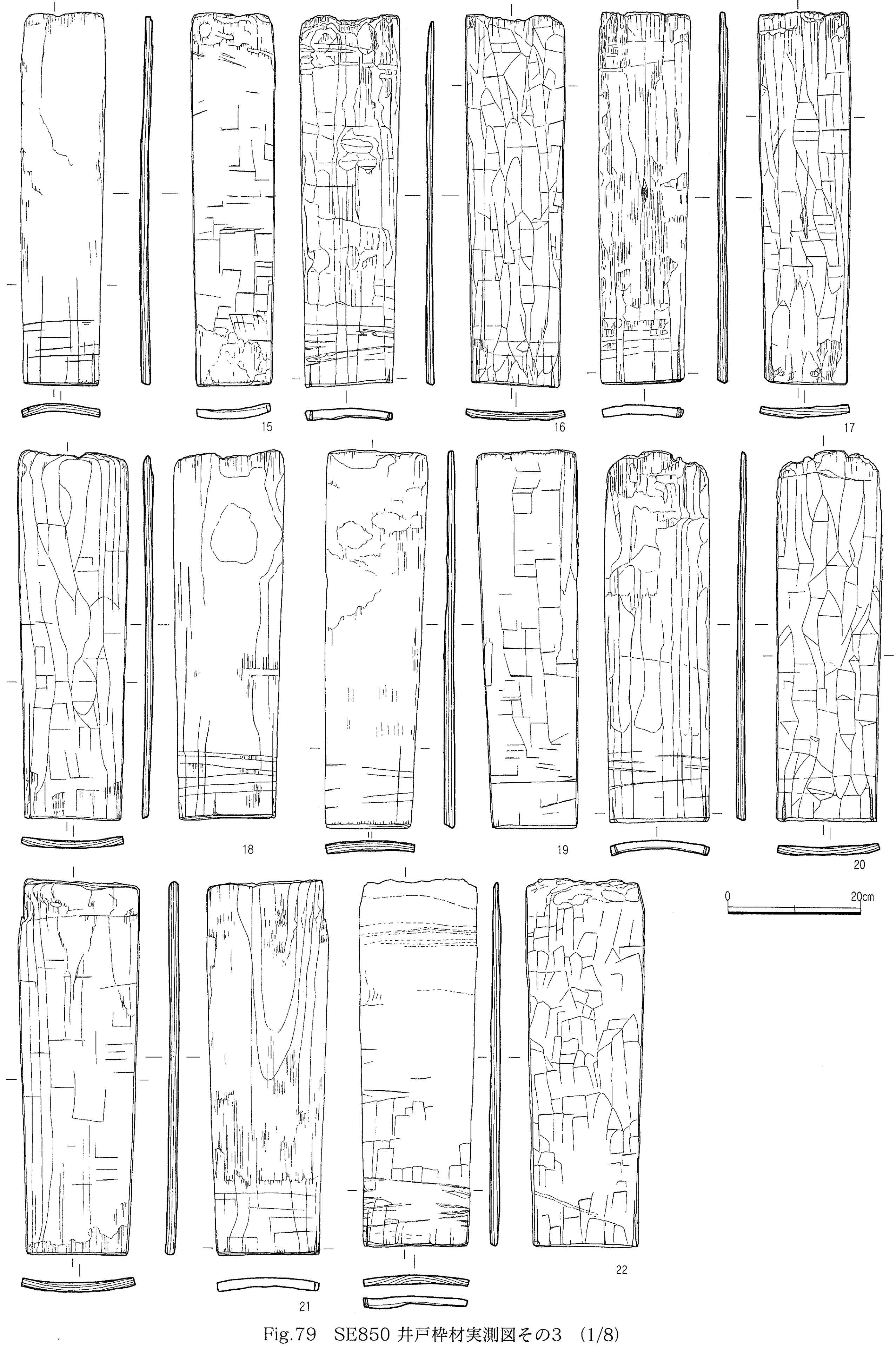


Fig.79　SE850 井戸枠材実測図その3　(1/8)

部に付着していた木片。長さ9cm、幅2cm、厚み2mm。表面に調整痕はなく薄い木の皮であろう。

SE870青灰色粘質土目玉出土遺物（Fig.80）

土師器

小皿a（2）　口径10.2cm、器高1.35cm、底径7.8cm。底部切り離しはヘラ切り。

丸底坏a（3）　口径15.8cm、残存器高3.85cm、底径12.4cm。

黒色土器A類

椀（4）　残存器高4cm、底径6.9cm。調整は摩滅のため不明。

木製品

木片（5）　短冊形の破片。5mm程度の厚みを持つ。用途は不明。

SE870茶褐黄色土出土遺物（Fig.80）

緑釉陶器

皿（6）　高台部の破片。貼り付け状の高台。全面施釉で釉が厚い。東海産。

SE870暗青灰色粘質土出土遺物（Fig.80）

須恵器

壺（7）　底部の破片。

土師器

甕（8〜10）　8・10は外面をハケ調整、内面をヘラ削り調整する。9は残存部で見る限り内外面を横ナデ調整する。8・10は大宰府編年VI期以前の様相を呈している。

黒色土器B類

椀（11）　内外面にミガキaを施す。

土製品

不明品（12）　土玉か。

SE910緑灰色シルト出土遺物（Fig.80）

土師器

小皿a（13）　口径10.4cm、器高1.3cm、底径7.0cm。底部切り離しはヘラ切りである。

丸底坏a（14）　口径15.4cm、器高3.7cm、底径10.7cm。口縁部は直線的に立ち上がる。内面はミガキb調整。内外面の黒灰色変化は焼成時に生じた焼き斑か。

黒色土器A類

椀（15）　口縁端部は外反する。外面体部下位はヘラ削りを施している。内外面をミガキc調整する。

SE910掘方出土遺物（Fig.80）

土師器

小皿a（16）　口径9.5cm、器高1.5cm、底径7.7cm。底部切り離しはヘラ切りである。

丸底坏a（17）　口縁部破片。詳細は不明。

石製品

石鍋（18）　滑石製石鍋の破片。内面しか残っておらず、外面は欠損している。

SE910暗茶灰色土出土遺物（Fig.80）

須恵器

蓋（19）　口縁端部の破片。端部は3型。

土師器

小皿a（20）　口径9.9cm、器高1.3cm、底径7.5cm。底部切り離しはヘラ切りである。

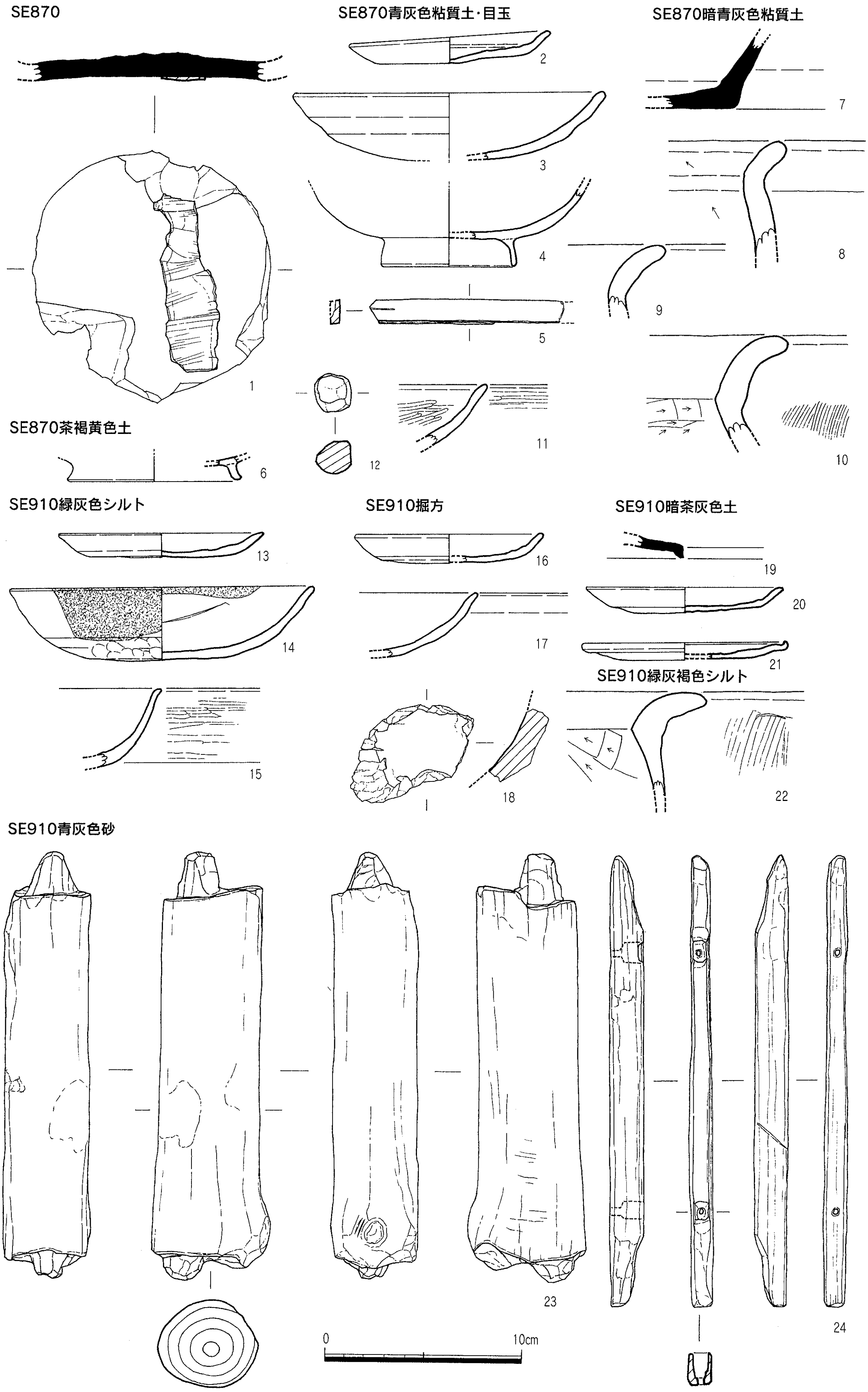


Fig.80　SE870・910 出土遺物実測図（1/3）

小皿a2（21）　口径10.4cm、器高0.9cm、底径7.0cm。底部切り離しはヘラ切りである。a2形式は口縁端部を上方へつまみ上げるものである。京都系土師器皿を意識したものであろう。

SE910緑灰褐色シルト出土遺物（Fig.80）

甕（22）　口縁部破片。直線的な体部に口縁部が「く」の字形に外反する。内面にヘラ削り調整による稜をもつ。外面はハケ調整。

SE910青灰色砂出土遺物（Fig.80）

木製品

不明木製品（23）　長軸長21.5cm、短軸長6cm、幅4.4cm。左右に突出部を持つ。左突出部は先端が欠損しており、本来の長さを保っていない。残存高は1.5cm、断面でみると上端より0.8cm、下端より3.2cmの位置にする。突出部は楕円形で1.5cm×2.7cmを計る。右突出部は高さ2.5cm。断面でみると上端より0.8cm、下端より2.3cm。突出部は楕円形で2.2×2.0cmを計る。左部は節目があり歪な形状をしているが、それを削り落とすことをしていない。突出部と本体との接合部は平行ではなく、正面から見るとやや「ハの字」をしている。表面は皮を落として若干削り調整をしているだけで目立った調整痕跡は見あたらない。樹木は広葉樹か。また、突出部周辺に回転に伴う痕跡は確認できなかった。なにかをつなぐための部材か。ただし接合部は精密な組み合わせではないと思われる。後述の糸巻きと同じ所から出土していることから、紡織具関連の可能性もあろう。今後、類例の増加を待ちたい。

糸巻き（24）　長軸長22.7cm×短軸長1.7cm×厚み1.2cm。平たい板状の製品だが、両端に刳り抜いた穴を持つ。穴を穿った位置から突端に向けて斜めに削りこんでおり、三角形状を呈す。両端は若干摩滅しているか。おおよそ両端より4.5cmの位置に長さ1.1cm×幅0.6cm×深さ1.7cmの平面方形の凸型の穴が穿たれている。深さ1cmの位置から2mm×3mmの穴になり反対側まで貫通している。この部材４つを十字形に組み合わせ、糸巻きとして使用することが類例より知られている。

SE910出土遺物（Fig.81）

木製品

杭（1・2）　1は残存長48.1cm、径は5.4cm×5.6cm。直線に近い細い自然木を利用している。節はとばしており、杭先は2方向から乱雑に削り落として鋭くしている。途中、縦4cm、横2.6cmのホゾ状の穴が貫通している。2も1と同様な形状である。残存長44.5cm、径5.5cm×4.8cm。杭先は4方向から削っている。途中のホゾ穴状の穴は、縦4cm×横3cmで貫通している。

不明木製品（3）　枝分かれを利用してY字型を作る。用途は不明。

井戸枠立板（4）　井戸枠の西側の物。一枚板である。表面は腐蝕して木目が浮き出ているため、調整は不明。高さ78.8cm、幅55cm、厚み2.4cm。底面から11.4cm上に、直径1.6cmの穴が穿たれている。転用材の可能性もある。

SE910枠内褐灰色土出土遺物（Fig.81）

木製品

横櫛（5）　長軸長5.1cm×横軸長2.8cm×厚み0.6cm。残存する歯の長さは2.2cm、幅1mm。

SE930黄橙褐色土出土遺物（Fig.82）

須恵器

壺（1）　口縁部の破片。

土師器

甕（2）　口縁部をくの字形に屈曲させる形式。口縁部と体部内面の境に、内面のヘラ削りによる稜

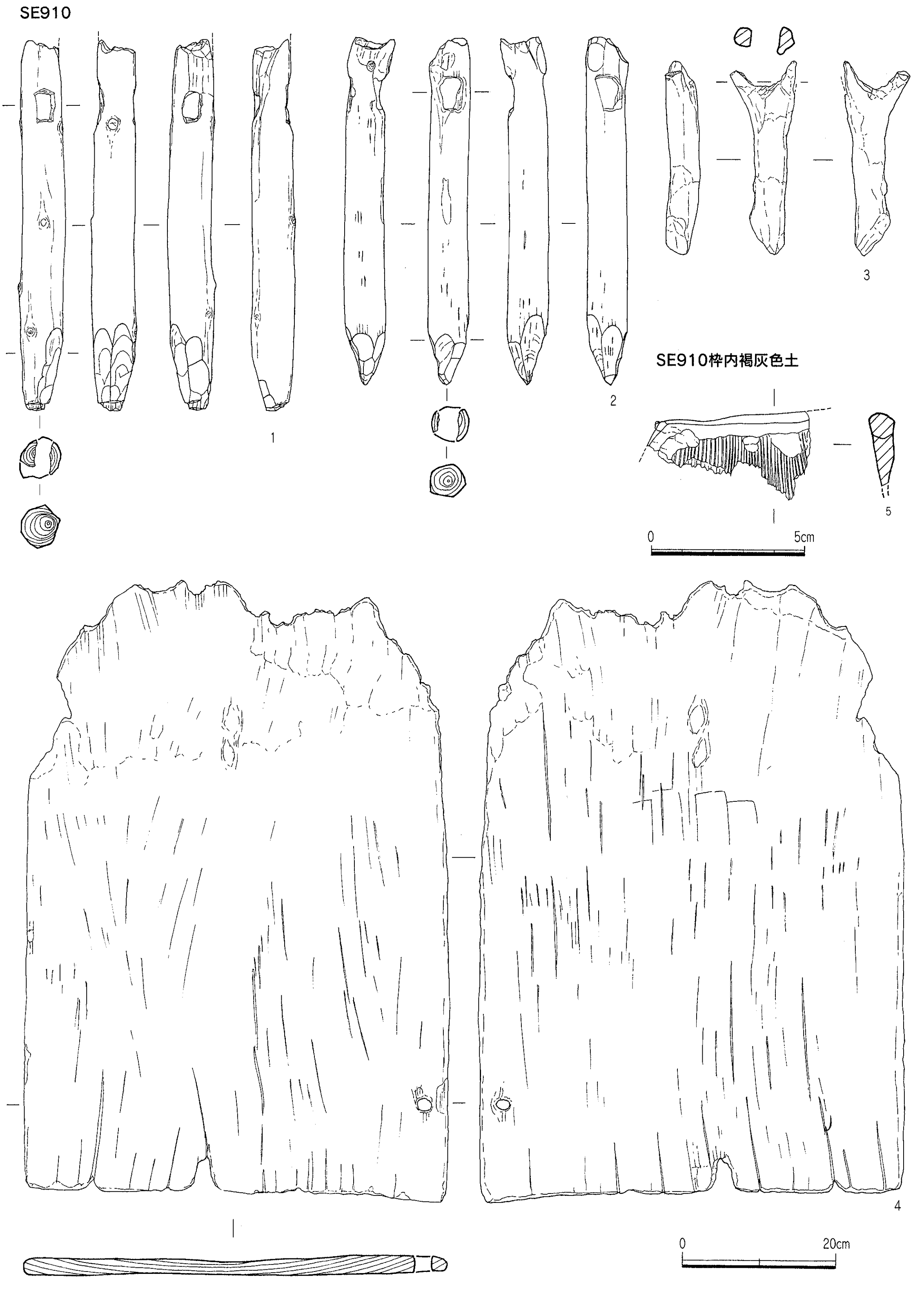


Fig.81　SE910・910枠内褐灰色土出土遺物実測図（5は1/2、その他は1/8）

が明瞭に見られる。外面はハケ調整。

SE930暗茶灰色土出土遺物（Fig.82）

金属製品

鉄釘（3・4）　3は鉄釘の部分が3mm×4mmの不整方形を示す。4は金属部分が確認できなかった。残存長は、5.25cmである。

石製品

不明（5）　部分的に平滑になっているが自然石の可能性が高い。角閃石の針状の結晶を多量に含む。

SE930緑灰色粘質土出土遺物（Fig.82）

須恵器

甕（6）　内面の当て具痕跡は車輪文である。外面は平行叩き。焼成・還元ともに良好。

瓦

軒平瓦（7）　軒平面が部分的に残存している。唐草文が確認できる。

SE930暗灰緑色粘質土出土遺物（Fig.82）

瓦

平瓦（8）　外面、斜格子叩き。

第1遺構面土坑出土遺物（Fig.83～89）

SK005出土遺物（Fig.83）

土師器

小皿a（1）　口径8.7cm、器高1.0cm、底径6.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は1.5mm大の砂粒を少し含む。焼成はやや不良で、淡黄褐色～淡褐黄色を呈す。

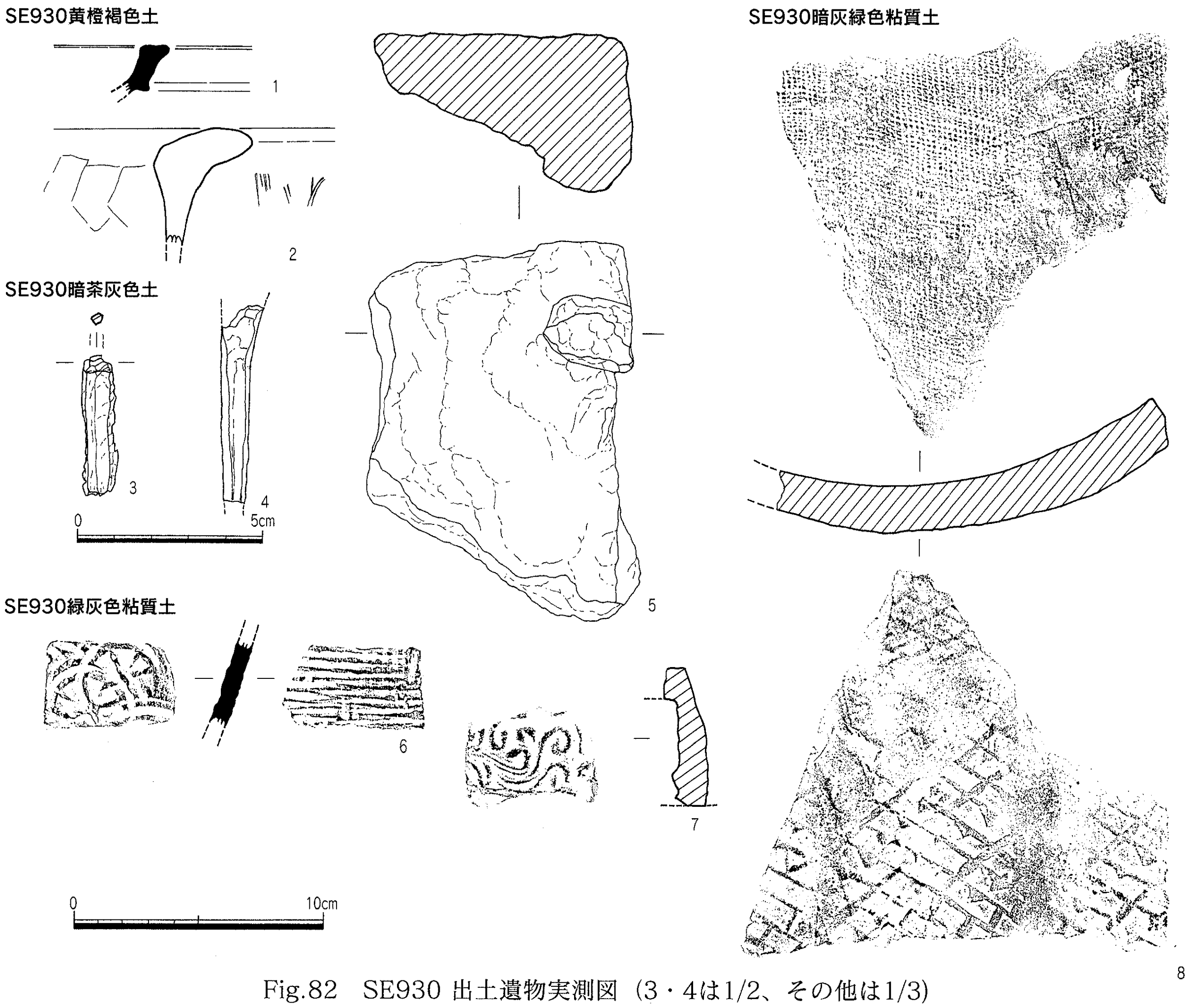


Fig.82　SE930 出土遺物実測図（3・4は1/2、その他は1/3）

白磁

椀（2）　口縁部の破片である。残存高2.3cmを計る。Ⅳ類。

SK015出土遺物（Fig.83）

SK015黒色土出土遺物

土師器

小皿a（3～7）　口径8.4～9.2cm、器高0.8～1.15cm、底径6.2～7.4cmを計る。4・5・6は底部切り離しはヘラ切り。4・6は板状圧痕あり。

丸底坏（8・9）　8は残存高2.6cm、9は残存高3.2cmを計る。いずれも底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。

手づくね土器（10）　口径2.8cm、器高1.4cmを計る。

緑釉陶器

香炉×合子（11）　口縁部～体部の破片である。口径8.0cm、残存高2.1cmを計る。内外面とも回転ナデで成形・調整している。釉は全面に施され、淡緑色で光沢のある透明釉である。素地はやや緻密で、白色砂粒を含み、やや赤味かかった灰褐色を呈す。焼成は良好。東海産とみられる。

高麗青磁

椀（12）　体部～底部にかけて残存する破片である。残存高4.0cm、高台径6.0cmを計る。体部外面には回転ヘラケズリ調整が観察され、その後全面に施釉する。底部外面の畳付には目跡がある。釉は半透明だが光沢があり、黄緑色に発色する。細かな貫入がみられる。素地は淡灰色を呈し、やや粗い。焼成は良好。I-1類。

SK015黄茶色土出土遺物

瓦類

不明製品（13）　方形を呈す端部の破片である。比較的丁寧なつくりの印象を受ける。図上天地残存長5.3cm、残存幅4.9cm、厚さ1.85cmを計る。端部は垂直に切り一方の角を面取りする。面取りした側は布目痕があり、反対側の面は模骨痕のような筋がみられる。胎土のきめは細かく、0.5～3mmの砂粒を少量含む。焼成・還元とも良好で、表裏両面とも暗灰色、断面は淡灰色～黒灰色を呈す。

SK163出土遺物（Fig.84・85）

SK163暗茶色土出土遺物（Fig.84・85）

土師器

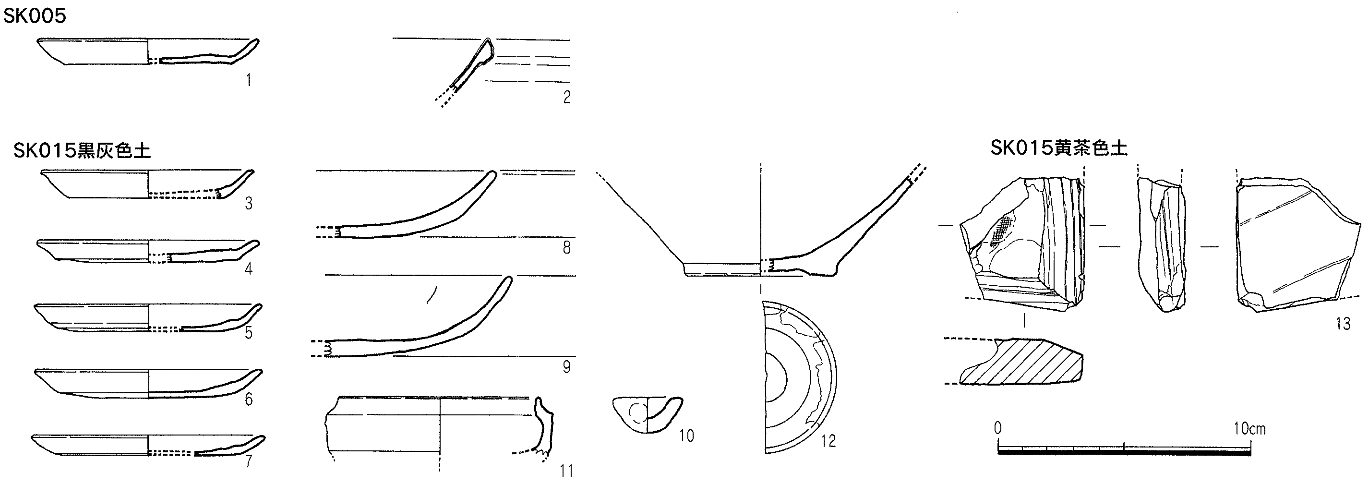


Fig.83　SK005・015 出土遺物実測図（1/3）

小皿a（1・2）　1は口径9.6cm、器高1.1cm、底径7.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土のきめは細かく、2mm以下の砂粒を含む。焼成は不良で、内面は白茶色～明茶色、外面は白茶色～橙茶色～灰黒色を呈す。2は口径9.8cm、器高0.9cm、底径8.1cmを計る。摩耗により底部切り離しは不明。胎土のきめは細かく、3.5mm以下の砂粒を含む。焼成は不良で、白茶色を呈す。

皿a（3～5）　口径12.4～14.0cm、器高1.45～2.2cm、底径9.0～10.8cmを計る。いずれも底部切り離しはヘラ切り。3の焼成は不良で、白茶色～淡茶色～明茶色を呈す。4の焼成はやや甘く、淡白茶色を呈す。5は胎土に微量の角閃石を含む。焼成はやや甘く、淡白茶色を呈す。

坏a（6～20）　口径12.2～14.0cm、器高3.0～3.9cm、底径7.1～10.2cmを計る。摩耗しているものもあるが、いずれも底部切り離しはヘラ切りとみられる。大宰府編年VIB期を中心とする同編年VI～VII期頃のものと、同編年XII期を前後する時期のものと混在しているようである。

坏×椀（21）　口縁部～体部が残存する破片である。口径16.0cm、残存高5.1cmを計る。摩耗により調整不明。胎土のきめは細かく、2mm以下の砂粒・雲母片を少量含む。焼成は不良で、橙茶色を呈す。

椀c（22～25）　22は体部～底部が残存する破片である。残存高5.0cm、高台径9.95cmを計る。23～25は口径14.3～17.4cm、器高6.3～7.0cm、底径8.2～11.0cmを計る。いずれも底部切り離しはヘラ切り。22・23は淡橙茶色～淡橙色、24・25は乳白色を呈す。

甕a（27～29）　いずれも口縁部～体部が残存する破片である。風化が進んでいるものもあるが、いずれも体部内面はヘラケズリを、体部外面にはハケ目を施す。また、いずれも二次的に焼成を受けている。27は口径22.8cm、残存高5.65cmを計る。胎土のきめは粗く0.5～2mm以下の砂粒を多く含み、角閃石もやや多く含む。焼成は不良で、茶白色～褐色～淡褐色を呈す。28は口径30.0cm、残存高7.5cmを計る。胎土のきめは粗く0.5～5mm以下の砂粒を多く含み、微細な雲母片、角閃石をわずかに含む。焼成はやや不良で、茶白色～淡茶色～淡橙色を呈す。29は口径24.6cm、残存高17.05cmを計る。胎土のきめは粗く0.5～5mm以下の砂粒を多く含み、微細な雲母片、角閃石をわずかに含む。焼成は良好で、淡茶色～淡褐色～黒褐色を呈す。

土製品

把手？（26）　容器の体部の脇に取り付く把手とみられる製品である。把手部分は中空の円筒形で完存している。長さ7.7cm、径3.6cmを計り、中空部分の奥は径約1.5cm、入口部は1.8×2.2cmを計る。柄を挿して使用したのであろうか。調整はいずれもナデを施し、器部内面も同様である。胎土は0.5～2mm以下の砂粒・雲母片を多く含み、角閃石も混入している。焼成は良好で、淡茶色～淡橙茶色～茶褐色～灰黒色を呈す。

緑釉陶器

椀（30）　口径19.6cm、器高1.6cm、高台径9.3cmを計る。外面体部下半から外面底部にかけて回転ヘラケズリを施し、削りだしにより蛇ノ目高台をつくる。その他は回転ナデを施し、内面はその後ミガキcを施す。釉はごく薄くかけられ、淡オリーブ色に発色する。ただ、釉の多くは剥落しており口縁部の一部に残存するのみである。素地は密で、淡白橙色～乳白色を呈す。焼成はやや甘い。京都系。

瓦類

無文塼（31）　直方体の塼の一角が残存する破片である。残存長11.9cm、残存幅9.4cm、残存厚6.9cmを計る。展開図下側の面は器面を削ってやや窪んでおり、二次的に加工があった可能性もある。その他はナデ調整を施す。胎土のきめは粗く、0.5～4mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、灰白色～淡橙色を呈す。

SK163暗茶色土

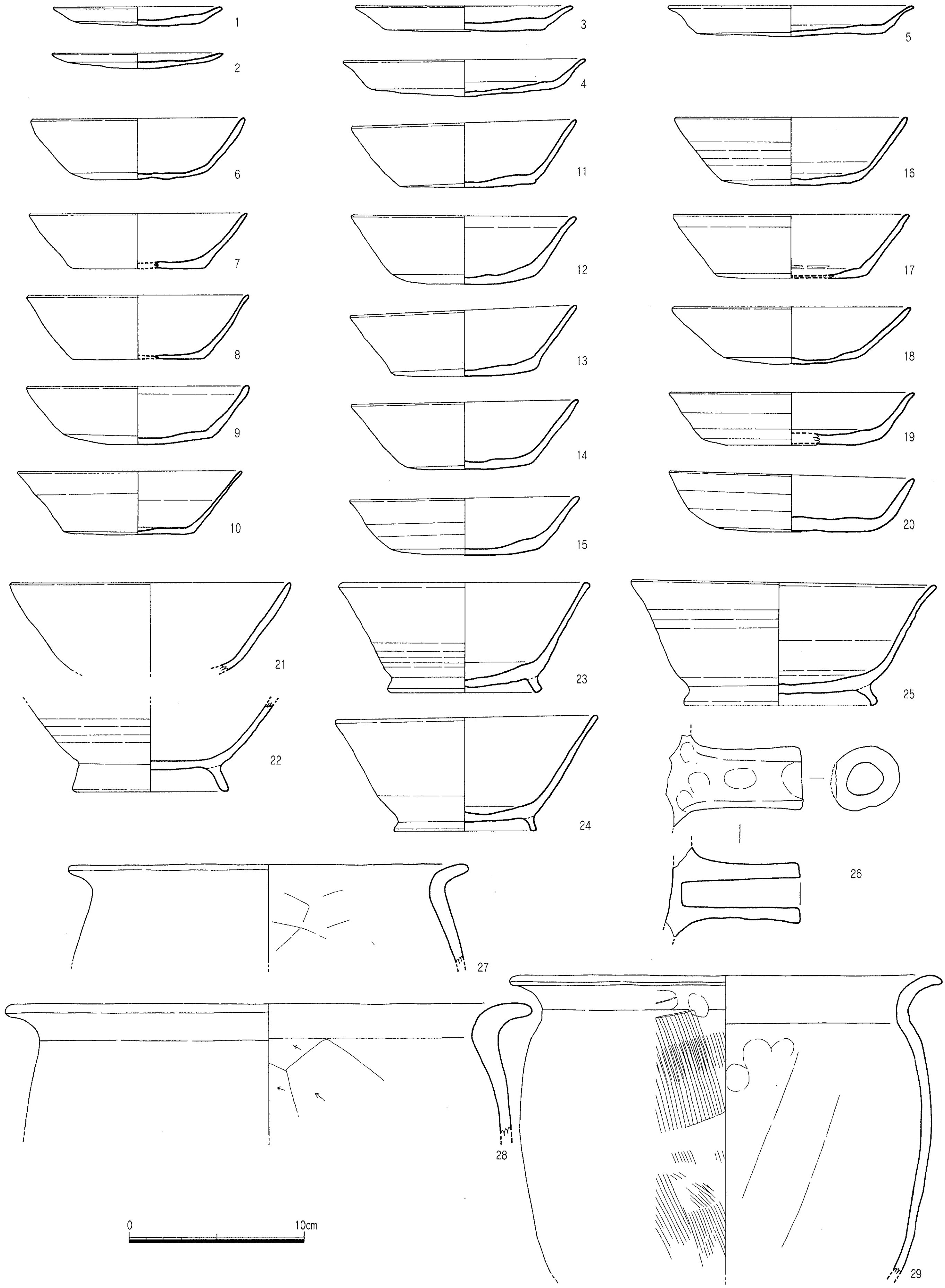


Fig.84　SK163 出土遺物実測図その1（1/3）

SK163茶黄色土出土遺物（Fig.85）

土師器

小皿a（32～34）　口径9.8cm～10.0cm、器高0.65～1.25cm、底径7.6～8.6cmを計る。32・33は底部切り離しは不明で、板状圧痕あり。34は底部切り離しはヘラ切りとみられる。

坏a（35）　口径13.2cm、器高3.5cm、底径8.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。焼成は良好で、内面は明茶色～淡橙茶色、外面は淡橙茶色～淡褐色～淡茶色を呈す。

甕（36）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。残存高5.6cmを計る。体部内面はヘラケズリを、その他はヨコナデを施す。胎土のきめは粗く、0.5～4mmの砂粒、雲母片を多く含む。焼成は良好で、淡茶色～淡褐色を呈す。

SK415出土遺物（Fig.86）

SK415出土遺物

土師器

椀c（1）　高台が欠損するもので、底部から体部への移行は、丸みを有している。

SK415黄色土出土遺物

須恵器

蓋3（2）　断面三角形を呈する口縁部形状を有している。

皿（3・5）　底部から体部への移行が丸みを有している皿で、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

供膳具（4）　口縁端部に平坦面を有するものである。

坏（6）　口縁部のみの破片資料で詳細は不明。

SK440出土遺物（Fig.86）

SK440出土遺物

土師器

小皿a1（7～16）　口径9.2cm～10.5cmを測り、底部外面には全て回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

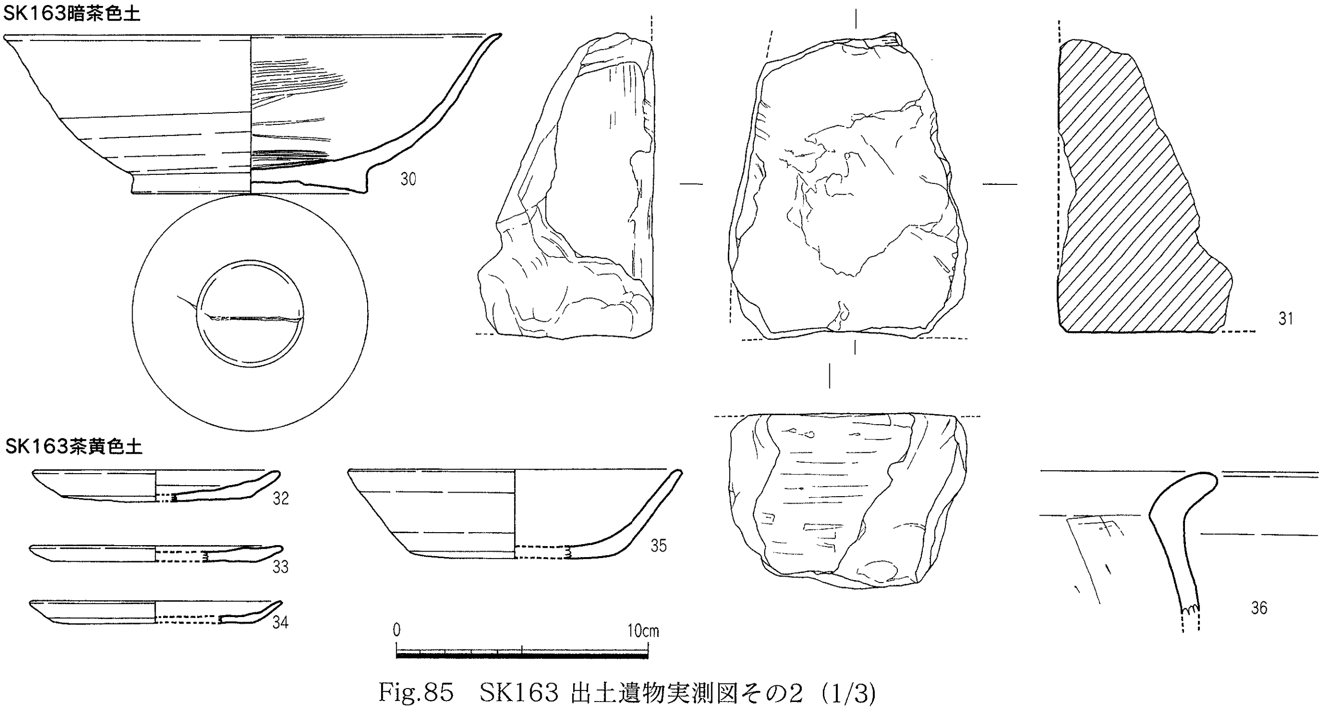


Fig.85　SK163 出土遺物実測図その2（1/3）

10は口縁部が著しく歪んでいる。

皿（18）　底部から大きく開く体部形態を有するもので、底部外面の処理については不明。

丸底坏（17・19～21）　口縁部の破片資料で、21は内面にミガキb痕跡をとどめている。

甕×鍋（22・23）　口縁部の破片資料で、23は口縁部内面に横方向のハケ痕跡が観察できる。

黒色土器B類

椀（24）　口縁部のみの破片資料で、口縁端部を僅かに外方へ屈曲させている。

SK440茶色土出土遺物

土師器

小皿a1（25～34）　口径9.4cm～10.6cmを測り、底部外面は全て回転ヘラ切り。30および33を除いて他の資料は全て丸底化傾向がうかがえる。

丸底坏（35～40）　口径が計測できるものでは、15.4cm・15.8cmを測り、底部外面は全て回転ヘラ切りであった。

白磁

椀（41）　体部から見込み部分への境界部分が凹むもので、Ⅳ-2bに該当する。

SK450出土遺物（Fig.92）

本遺構出土遺物は、SX450として小穴の項で述べているので参照いただきたい。なお正式な名称はSK450で統一したい。

SK475出土遺物（Fig.86・87・88）

SK475出土遺物（Fig.86）

土師器

小皿a1（42～52）　口径9.2cm～10.6cmを測り、底部外面は全て回転ヘラ切りであった。多くが丸底化傾向が観察できる。

丸底坏（53・54）　53は口径14.4cmを測り、内面にミガキb痕跡が観察できる。底部外面の処理については器面磨耗のため不明。54では底部外面は回転ヘラ切りであった。

黒色土器A類

椀（55）　体部下位から丸みをもって口縁部へ達するもので、口縁端部がわずかに外方へ反る。内面にわずかにミガキc痕跡が観察できる。

SK475茶灰色砂質土出土遺物（Fig.86・87）

土師器

小皿a1（56～60）　口径10.1cm～10.8cmを測り、底部外面には全て回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

小皿a2（61・62）　口縁端部をつまみ上げによって形づくるもので、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（63・64）　63は口径14.3cmを測り、底部外面には両者とも回転ヘラ切り痕跡が観察できた。

黒色土器B類

椀（65）　口縁端部内面に沈線を巡らせ、内外面ともに丁寧で細いミガキc痕跡が観察できる。楠葉産黒色土器と考えられる。

木製品

用途不明（66）　下部を腐植によって欠失しており、全体形状について明らかにし難い。板状を呈し、両面に削り痕跡をとどめていることから、木簡廃棄板材の可能性もある。

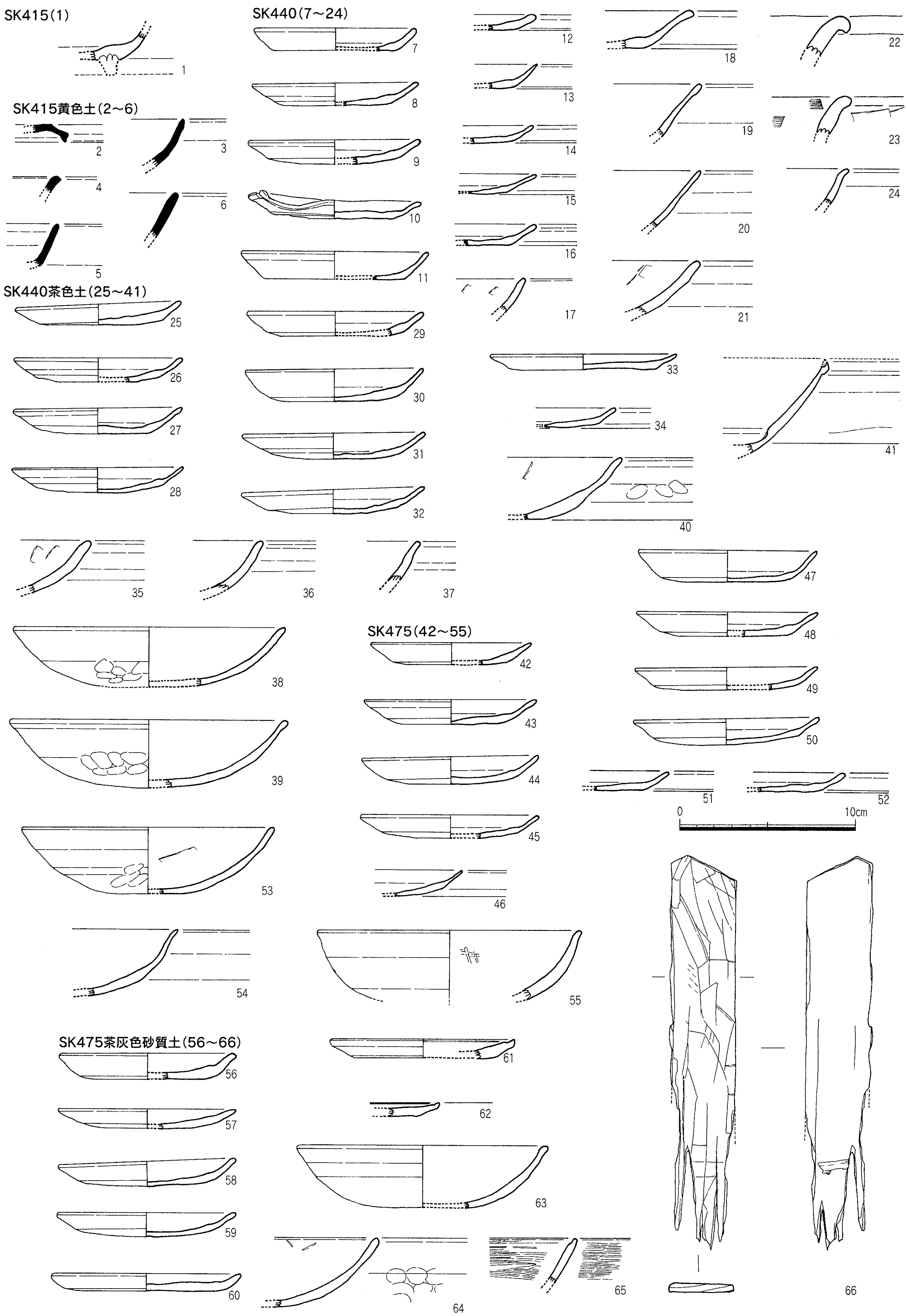


Fig.86　SK415・440・475 出土遺物実測図（1/3）

墨書木札（Fig.87-1）　残存長7.2cm、残存幅1.7cm、厚さ0.2cmを計る。板目の板片で、上下端は切り込みを入れずに折られている。また側面の一方も折られており、もともとは現況より幅広の板材であったことが窺える。奈文研081形式。両面に墨書が施されている。細筆、太筆により2～3回異なった運筆が観察され、習書の印象を受ける。内容は不明であるが、釈読は以下のとおりである。

・×（□）□』□［月か］『□』□［卅か］□×

・×□□』□『□×

SK475黒色粘土出土遺物（Fig.88）

土師器

小皿a1（67～69）　口径10.0cm～10.8cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

丸底坏（70・71）　口径12.2cm・15.0cmをそれぞれ測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

黒色土器A類

椀c2（72）　丸底坏に高台を貼付した形状をとり、内面には丁寧なミガキc痕跡が観察できる。

SK475灰色砂質土出土遺物（Fig.88）

土師器

小皿a1（73～75）　口径10.6cm～11.2cmを測る。底部外面はいずれも回転ヘラ切り。

丸底坏（76～79）　口径14.8cm～15.6cmを測る。内面にはミガキb痕跡が観察でき、底部外面は回転ヘラ切りである。

SK475フショク土出土遺物（Fig.88・87）

土師器

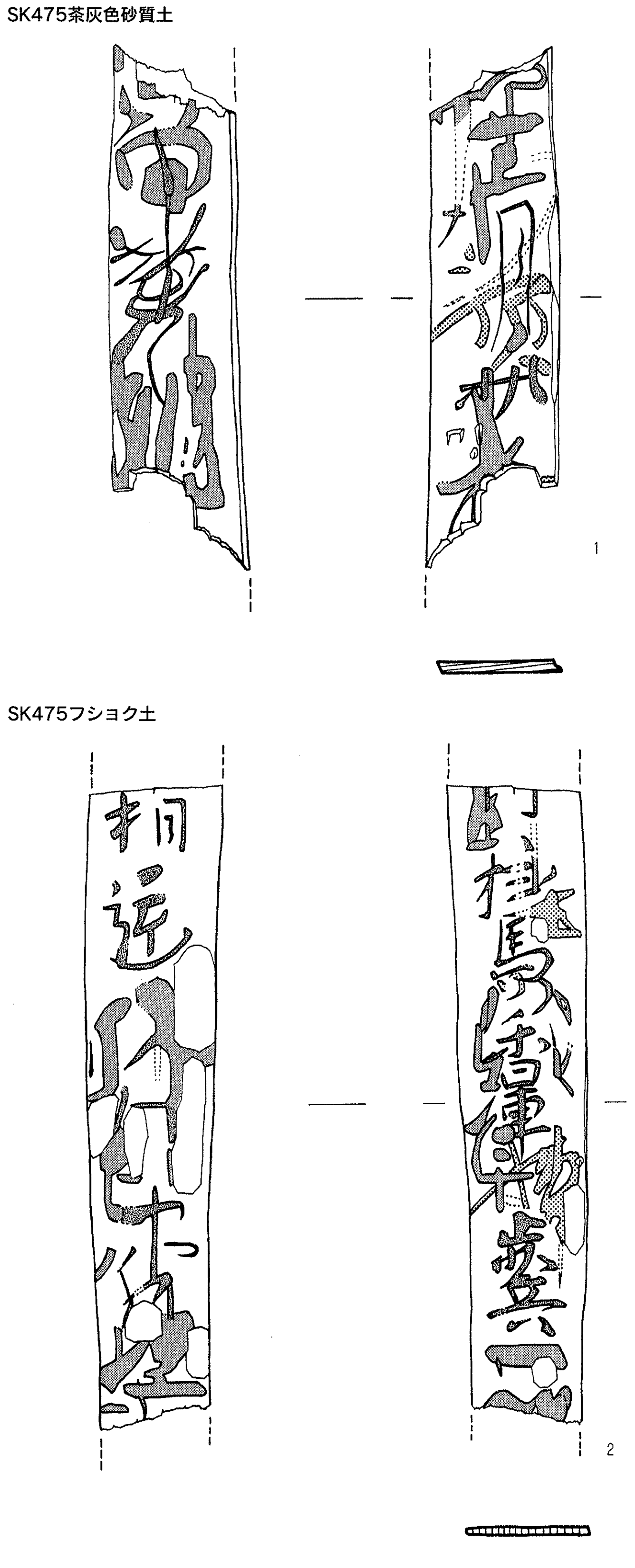


Fig.87　SK475 出土墨書木札実測図（1/1）
※いずれも運筆の違いをスクリーントーンで表現した。

小皿a1（80～83）　口径9.4cm～10.8cmを測り、底部外面は全て回転ヘラ切り。81は口縁部が著しく歪んでいる。

丸底坏（84～93）　口径が計測できるもので、14.2cm～15.7cmを測り、底部外面観察可能なもので全て回転ヘラ切り痕跡が観察できた。

木製品

用途不明（94）　板材で、腐植によって欠失しており全形は定かではない。

墨書木札（Fig.87-2）　残存長8.9cm、残存幅1.8cm、厚さ0.15cmを計る。柾目の板片で、上下端ともに刃物で切り込みを入れた後折られている。奈文研081形式。両面に墨書がほどこされており、細筆、太筆により2～3回異なった運筆が観察され、習書の印象を受ける。片側の面には将棋の駒名が記されている。この墨痕が一番明瞭であり、もともと習書されていた木札に駒名を書いたような印象を受ける。駒として再利用する予定だったとも考えられなくはないが、それを確定できる痕跡はみられない。なお11世紀後～12世紀初頭に遡る将棋に関連する資料は現在のところ九州では初出である。釈読は以下のとおりである。

『□□□□』
・×□［将か］桂馬香車歩兵『一□』×
『□』　『□□［車?］』

・×相□［違または運か］『□』□ □『□』『□×
『□』

SK522出土遺物（Fig.88）

土師器

皿（95・96）　口径が計測できる95は、12.4cmを測る。底部外面は回転ヘラ切り。

坏（97～101）　口縁部破片であることから、全体形状については不明。

甕（102）　体部上位から口縁部にかけての破片で、内外面ともに体部には指頭圧痕が観察できる。胎土中には白雲母細片が顕著である。

黒色土器A類

椀（103～105）　内面黒色化するもので、103および105には胎土中に白雲母細片が顕著であった。

青磁

坏（106）　やや凹む平底を呈するもので、越州窯系青磁坏I類。

SK676出土遺物（Fig.88）

須恵器

盤（107）　浅い器高を有しており、外面は全面回転ヘラ削り痕跡が観察できる。

椀（108）　外面に凹凸が顕著なもので、口縁端部を内傾させるように平坦部を形成している。

土師器

小皿a1（109）　口径9.6cmを測るが、器面磨耗のため底部外面処理については明らかにし難い。

黒色土器A類

鉢（110）　頸部を有し、内外面は丁寧なミガキcによって仕上げられている。

SK677出土遺物（Fig.88）

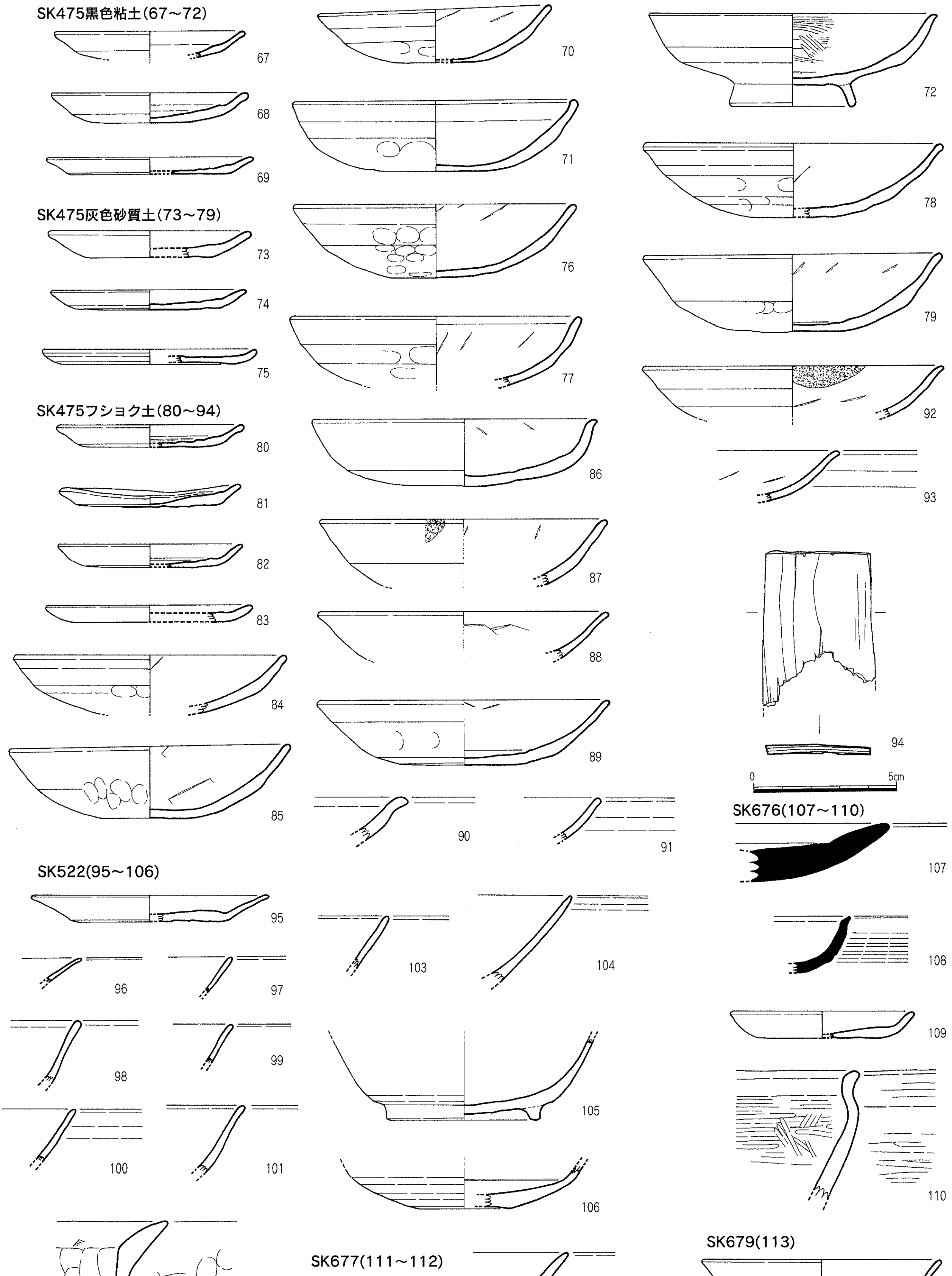


Fig.88　SK475・522・676・677・679 出土遺物実測図（94は1/2、その他は1/3）

土師器

小皿a1（111）　口径計測ならびに器面磨耗のため底部外面の処理は観察できなかった。

丸底坏（112）　小皿同様破片化ならびに器面磨耗のため詳細な属性観察はできなかった。

SK679出土遺物（Fig.88）

土師器

坏a（113）　口径12.4cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

SK800出土遺物（Fig.89）

SK800暗茶灰色土出土遺物

土師器

小皿a（1・2）　1は破片で調整も不明。2は口径10.4cm、器高1.1cm、底径8.0cm。底部切り離しは摩滅により不明。

坏a（3）　口径14.2cm、器高3.3cm、底径8.4cm。平坦な底部から丸みを帯びて立ち上がる体部。器壁が3.5～7.5mmと厚手である。底部切り離しは糸切り技法。胎土は淡黄灰色の0.5mm～1mm大の砂粒を少々含む。細かい金色雲母片を少量含む。色調は明茶褐色。豊前産の土師器と考えられる。

丸底坏a（4）　摩滅により調整不明。器高3.4cmで、押し出しが弱い。

瓦器

椀（5）　口縁部破片。やや内湾気味に立ち上がる。内面に強い回転ナデが施される。

緑釉陶器

椀×皿（6）　底径9.0cm。内外面に施釉をする。内面はミガキc、外面はヘラ削り。高台は貼り付けている。

石製品

再加工品（7）　滑石製石鍋の再利用品。重さ255.1g。中央部に直径1cmの穴が穿たれている。

SK800黒青色粘質土出土遺物

土製品

焼土塊（8）　部分的に平滑な面があるが、ほとんどが欠損している。長軸長4cm、短軸長3.3cm、厚み2.5cm。

石製品

砥石（9）　石材は泥岩。重さは594.5g。2方向の面を砥石として使っている。火をうけて煤けて黒灰色へ変化している部位が認められる。本来、長方形の棒状だったものが割れて現状の形となったと思われる。

SK873出土遺物（Fig.89）

土製品

焼土塊（10）　小破片。長さ3.5cm、幅2.35cm、厚み1.9cm。

第1遺構面小穴出土遺物（Fig.90～95）

SX029出土遺物（Fig.90）

黒色土器A類

椀c（1）　底部の破片である。器壁が薄く、丁寧なつくりの印象を受ける。残存高1.35cmを計る。摩耗している部分が多いが、体部外面は回転ナデを、内面はミガキを施す。胎土のきめは細かく、0.8mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや良好で、内面は黒色、外面は淡茶色～明茶色、断面は淡茶色～淡灰色～黒色を呈す。畿内系。

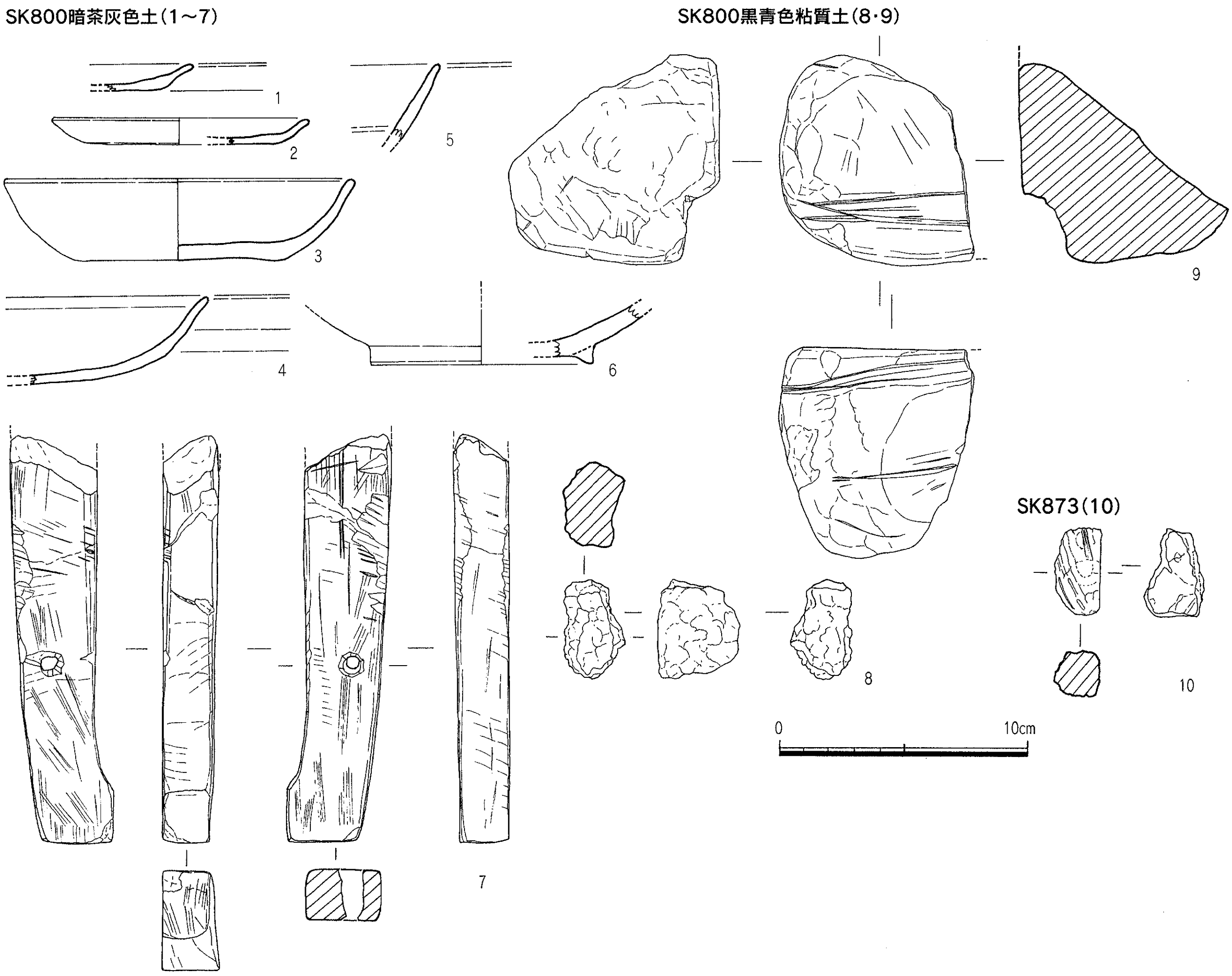


Fig.89　SK800暗茶灰色土・800黒青色粘・873出土遺物実測図(1/3)

SX048出土遺物（Fig.90）

須恵質土器

鉢（2）　口縁部の破片である。残存高2.2cmを計る。胎土のきめは細かく、0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色を呈す。篠窯産。

SX054出土遺物（Fig.90）

瓦類

平瓦（3）　図上残存長8.5cm、幅12.4cm、厚さ2.3cmを計る。格子目叩きで、「井」字の正字がみられる。内容は「平井」とみられる。I-8a類。

SX057出土遺物（Fig.90）

須恵器

坏×鉢（4）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径21.4cm、器高5.3cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、外面体部下位には回転ヘラケズリを、内面体部下位にはナデを施す。胎土のきめは細かく0.2～2mm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好、還元はやや不良で、淡灰色～灰色～黒灰色を呈す。なお、体部外面には墨書がみられる。内容は不明。

SX064出土遺物（Fig.90）

土師器

小皿a（5・6）　5は口径10.2cm、残存高1.0cmを計る。6は残存高1.0cmを計る。底部切り離しは不明。

丸底坏（7）　口径10.6cm、残存高3.0cmを測る。

黒色土器B類

鉢（8）　口縁部の破片である。残存高4.1cmを計る。推定口径は約29.0cm。内外面ともミガキcを施す。胎土は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、灰黒色を呈す。

石製品

石鍋？（9）　口縁部の破片である。残存高9.1cmを計る。推定口径は約26.0cm。内外面ともケズリを施す。滑石製。

SX097出土遺物（Fig.90）

土師器

坏a×小皿a（10）　口径10.8cm、器高1.6cm、底径8.0cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。焼成は不良で、やや暗い褐黄色を呈す。

坏×椀（11）　口縁部～体部が残存する破片である。口径14.0cm、器高3.0cmを計る。口縁端部は外に屈曲しており、口縁端部内面に沈線が一条巡り、口縁部外面に段状の窪みが巡る。胎土は0.5～2mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡橙黄色を呈す。産地不明だが、畿内からの搬入品の可能性がある。

椀c（12・13）　いずれも底部の破片である。12は残存高1.6cm、高台径6.0cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒、微細な雲母片をわずかに含む。焼成は不良で明茶褐色～灰褐色～灰黒色を呈す。13は残存高1.8cm、高台径6.6cmを計る。胎土は0.5～2mmの砂粒、微細な雲母片をわずかに含む。焼成は不良で淡赤褐色～淡褐灰色を呈す。

SX101出土遺物（Fig.90）

須恵器

蓋3（14）　口縁部の破片である。残存高1.3cmを計る。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色～淡灰色を呈す。

土師器

皿a（15）　口径17.0cm、器高1.9cm、底径13.4cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～3mmの砂粒を含む。焼成は不良で、明茶褐色～淡褐灰色を呈す。

SX124出土遺物（Fig.91）

石製品

砥石（46）　二面に研磨面がある。図上天地長23.0cm、残存幅16.6cm、残存厚7.4cmを計る。玄武岩製。

SX138出土遺物（Fig.90）

土師器

椀（16）　体部下半～底部にかけて残存する破片である。残存高2.6cm、底径9.0cmを計る。器形は平安時代中期に近畿から瀬戸内・山陰にみられる須恵器・土師器の椀に類似する。須恵器の可能性もあるが、後述のように胎土中に雲母片を含むため高温焼成はなされていないと判断し、土師器とした。底部切り離しはヘラ切りで、その後ナデ等の器面調整を行う。その他は回転ナデを施す。胎土のきめは細かく3mm以下の白色砂粒を少量、雲母片を微量含む。焼成は良好で、内面は灰褐灰色～淡灰色、外面は暗灰色、断面は暗灰色～灰褐白色を呈す。

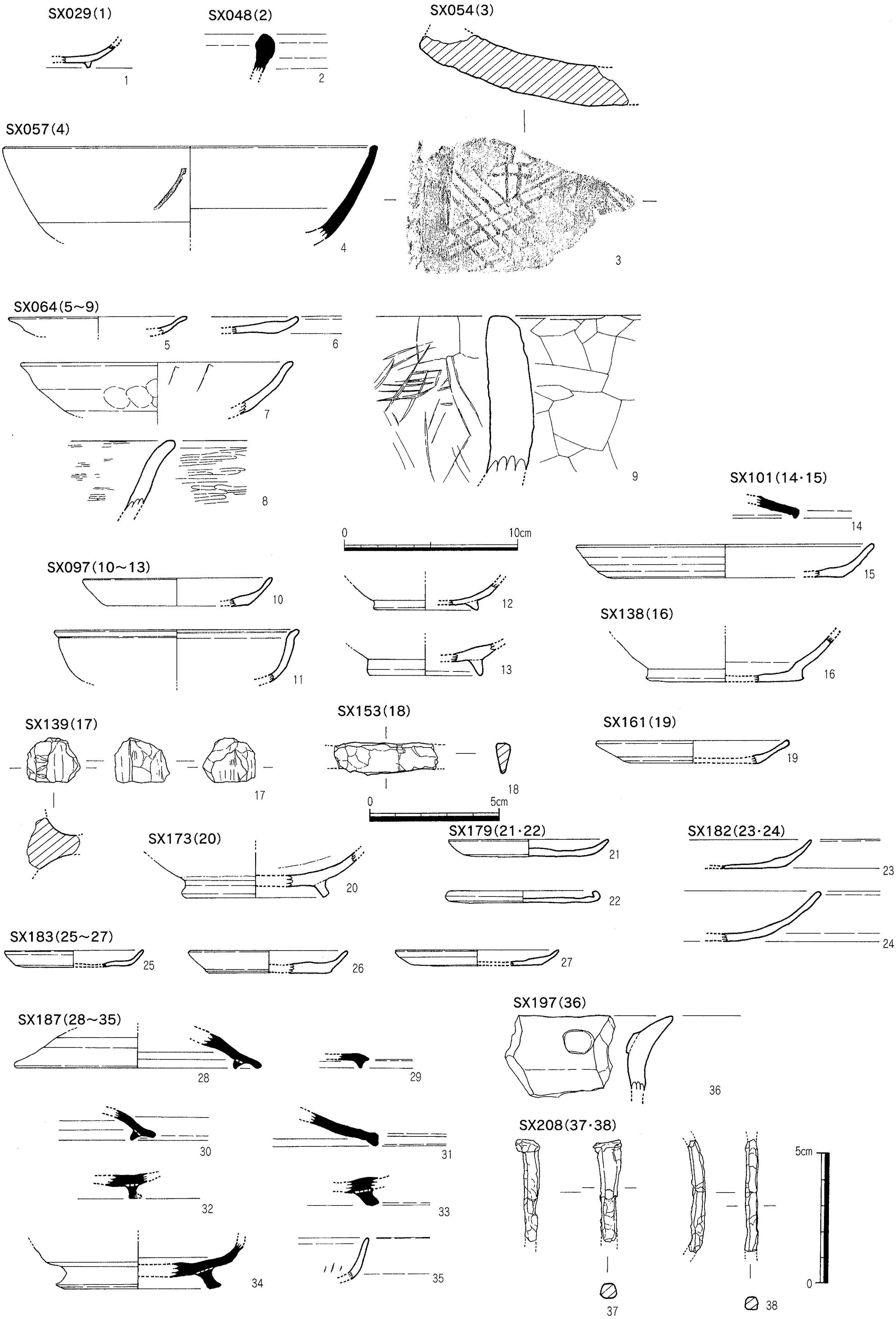


Fig.90 第1遺構面小穴出土遺物実測図その1（18・37・38は1/2、その他は1/3）

SX139出土遺物（Fig.90）

土製品

焼土塊（17）　図上天地方向に筒状のものを押しあてた痕跡が二ヶ所確認される。胎土は2mm以下の砂粒を多量含み、角閃石がごく少量混入する。焼成は良好で、橙茶色～茶黒色を呈す。

SX153出土遺物（Fig.90）

金属製品

鉄製刀子（18）　刀子の柄部とみられる。図上残存長4.0cm、幅1.2cm、最大厚0.55cmを計る。

SX161出土遺物（Fig.90）

土師器

小皿a（19）　口径11.0cm、器高1.3cm、底径8.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土のきめはやや細かく、0.2～1mmの砂粒を少量、微細な雲母片を多く含む。焼成は良好で、内面は淡褐色～淡茶色、外面は茶白色～淡茶褐色を呈す。

SX173出土遺物（Fig.90）

灰釉陶器

椀（20）　体部下半～底部が残存する破片である。残存高2.65cm、高台径8.4cmを計る。底部切り離しは糸切りか。釉は内面上部にかかっているが、見込みは露胎しており、つけがけを行ったとみられる。釉は光沢のある透明釉である。素地は緻密で白味を帯びた灰色を呈す。焼成は良好。K-90型式、またはO-53型式とみられる。

SX179出土遺物（Fig.90）

土師器

小皿a（21）　口径9.1cm、器高1.0cm、底径7.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、板状圧痕あり。胎土のきめはやや細かく、0.2～3mmの砂粒を多く、微細な雲母片をやや多く含む。焼成は良好で、茶白色を呈す。

小皿（22）　平たい底部を持ち、口縁部が上方に折れ曲がっており、コースターのような器形を呈す。口径8.8cm、器高0.7cm、底径8.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切りとみられ、板状圧痕あり。胎土のきめはやや細かく、0.2～2mmの砂粒、微細な雲母片をやや多く含む。焼成は良好で、淡茶色を呈す。京都系。

SX181出土遺物（Fig.91）

石製品

砥石（47）　二面に研磨面がある。図上天地残存長3.1cm、残存幅5.1cm、残存厚1.3cmを計る。石材は堆積岩の一種とみられる。

SX182出土遺物（Fig.90）

土師器

小皿a（23）　口縁部が残存する破片である。残存高1.65cmを計る。摩耗のため調整不明。胎土のきめは細かく、0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、淡橙白色～淡茶白色を呈す。

丸底坏（24）　口縁部が残存する破片である。残存高2.85cmを計る。摩耗のため調整不明。胎土のきめは細かく、0.5～1.5mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、淡橙白色～淡黄白色を呈す。

SX183出土遺物（Fig.90）

小皿a（25～27）　口径7.4～9.4cm、器高0.9～1.3cm、底径6.55～7.3cmを計る。25は底部切り離しはヘラ切りで、26も摩耗しているがヘラ切りとみられる。

SX187出土遺物（Fig.90）

須恵器

蓋1（28～30）　いずれも口縁部の破片である。28は口径14.0cm、残存高2.0cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面はナデを施す。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をやや含む。焼成・還元ともに良好で、明灰白色を呈す。29は残存高0.8cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をやや含む。焼成・還元ともに良好で、外面は淡黒灰色～暗灰色、内面は暗黒灰色を呈す。30は残存高1.8cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、天井部内面はナデを施す。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに不良で、淡黄灰色～淡茶灰色を呈す。

蓋3×高坏（31）　残存高2.0cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、外面はナデを施す。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、淡青灰色～淡灰白色を呈す。

坏c（32～34）　いずれも底部の破片である。32は残存高1.4cmを計る。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、内面は暗灰白色、外面は暗黒灰色、断面は赤茶褐色～暗灰白色を呈す。33は残存高1.5cmを計る。胎土のきめは細かく、1mm前後の白色砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに不良で、明灰白色を呈す。34は残存高2.8cm、高台径9.35cmを計る。胎土のきめは細かく、0.5～3mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、内面は暗青灰色、外面は暗灰白色を呈す。

土師器

坏（35）　口縁部の破片である。残存高2.4cmを計る。口縁端部内面は斜めに切り込むような平坦面をもつ。摩耗により調整不明だが、内面に放射状の暗文を施す。胎土のきめは細かく精錬されている。焼成は良好で、内外面とも明茶橙色を呈す。畿内系。

SX197出土遺物（Fig.90）

土師器

甕（36）　口縁部の破片である。残存高4.3cmを計る。内面に径1.2×1.8cm、厚さ0.3cmの円盤状の粘土塊が貼り付いている。製品に伴うものか、偶然に付着したものかは不明。調整は摩耗が著しく不明である。胎土のきめは細かく1～1.5mmの砂粒を含み、1mm前後の角閃石を多量含む。焼成は不良で、淡茶橙色～淡茶白色を呈す。

SX208出土遺物（Fig.90）

金属製品

鉄釘（37・38）　37は頭部が残存する。残存長3.9cm、幅1.0×0.9cmを計る。38は残存長4.3cm、幅0.7×0.5cmを計る。

SX216出土遺物（Fig.91）

須恵器

蓋3（39）　口縁部の破片である。残存高0.95cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく1～2mmの白色砂粒をやや含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰白色を呈す。

土師器

坏（40・41）　40は口縁部の破片である。残存高2.4cmを計る。口縁端部内面に沈線が一条巡る。摩耗により調整不明。胎土のきめは細かく1mm以下の砂粒をごくわずかに含む。焼成は不良で、内外面とも明茶橙色を呈す。畿内系。41は体部下位～底部にかけて残存する破片である。残存高1.75cmを

計る。外面はミガキcを施し、内面はヨコナデ後、右上がりの放射状暗文を施す。胎土のきめは細かく精錬されている。焼成は良好で、内外面とも明茶橙色を呈す。畿内系。

SX219出土遺物(Fig.91)

須恵器

坏（42）　口径16.6cm、残存高4.65cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、0.5～2mmの白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、内面は淡暗灰色、外面は暗灰白色～淡暗灰色を呈す。

坏c（43）　底部が残存する破片である。残存高2.1cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土のきめは細かく、2mm以下の白色砂粒をやや含む。焼成・還元ともに良好で、淡青灰色を呈す。

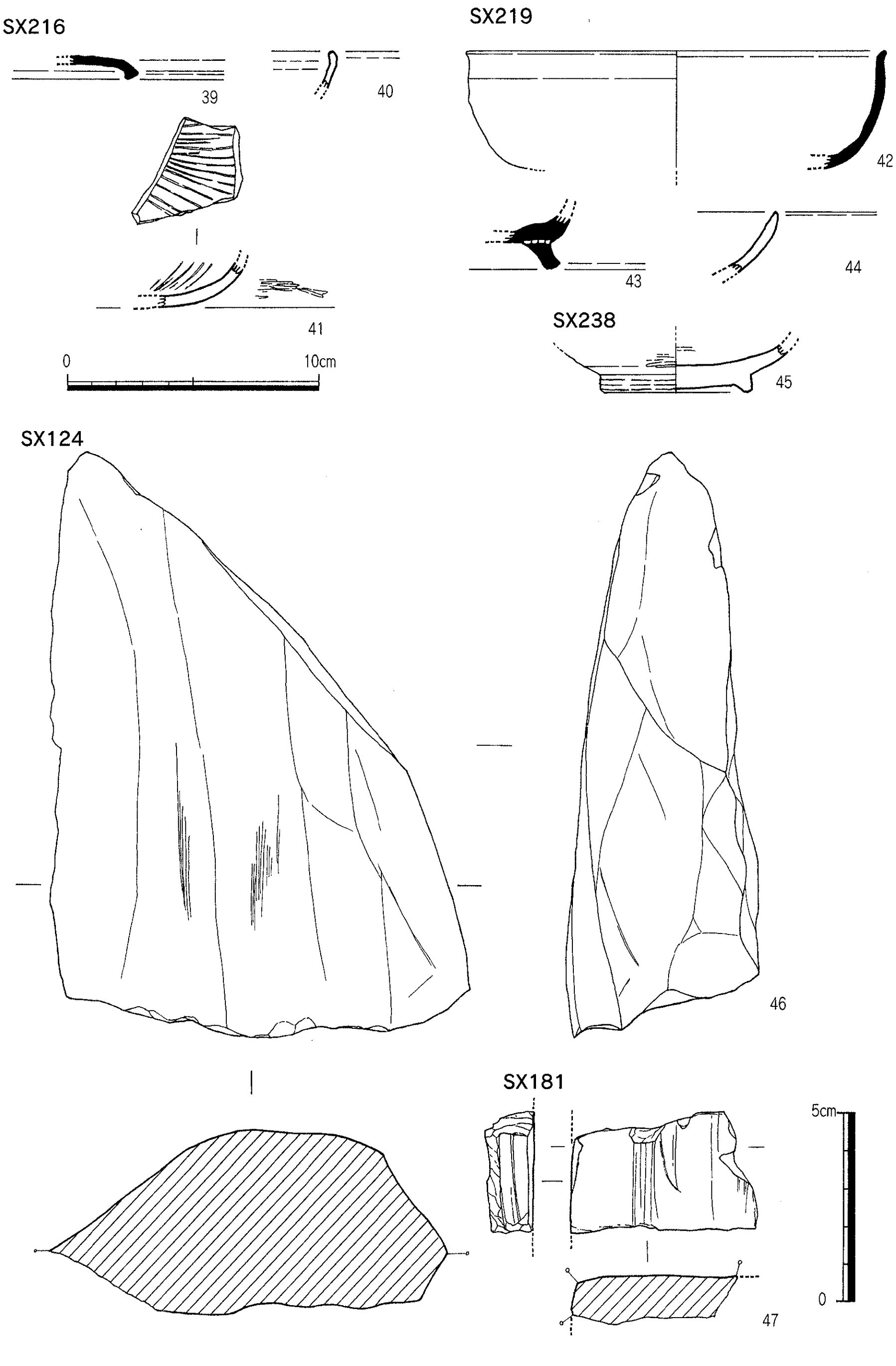


Fig.91　第１遺構面小穴出土遺物実測図その2（47は1/2、その他は1/3）

土師器

坏×皿b（44）　口縁部の破片である。残存高2.35cmを計る。摩耗のため調整不明だが、外面に朱塗りの痕跡が観察される。胎土のきめは細かく精錬されている。焼成は良好で、明茶橙色を呈す。

SX238出土遺物（Fig.91）

緑釉陶器

椀（45）　底部の破片である。残存高2.0cm、高台径6.0cmを計る。外面底部は削りだしにより高

台をつくる。外面底部は露胎している。その他の部分は内外面ともミガキcを施し、その後施釉する。釉は薄く、光沢のある濃緑色に発色する。素地は精良で、0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含み、青灰色を呈す。焼成は良好で、素地は硬質に仕上がる。京都系。

SX450出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋c3（1）　ボタン状のつまみを有し、天井部と体部の境界部分の外面を回転ヘラ削りするもので、二工程の口縁端部成形の回転ナデを行う。口縁端部の断面三角形に関しては、退化傾向がうかがえる。

坏c（2）　底部と体部の境界が明瞭で、外方へ開く体部形態を有している。高台は断面正方形を呈するものの、貼付後粗い回転ナデによって畳付部分を調整するにとどまる。

SX477出土遺物（Fig.92）

土師器

皿（3～5）　いずれも手持ち成形によるもので、3および5は口縁端部を内方へ肥厚させる。3はさらに見込み部分に放射状の暗文を施す。畿内産土師器。

丸底坏（6）　口径15.6cmを測り、底部には指頭圧痕をとどめているが、底部切り離し技法については磨耗のため不明。

SX481出土遺物（Fig.92）

緑釉陶器

椀（7）　直線的に外方へ開き、口縁端部をさらに外方へ屈曲させる。

SX506出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋（8～12）　断面三角形を呈する口縁部形態を有する蓋（8・11・12）。ややつぶれた擬宝珠形を呈するつまみを有するもので、属性相関からは同一型式に属するものである。

坏（13～16）　高台貼付後にやや高台外面へ反る形状をまだ意識しているもので、やや丁寧な回転ナデによって畳付部分の調整を行っている。体部の立ち上がりは直線的に外方へ開く形態へ移行しつつある。

土師器

蓋3（17）　口縁端部を断面三角形に形づくるもの。

甕（18）　頸部を「く」字に反らせるもので、体部内面をヘラ削りによって調整している。

石製品

砥石（19）　実測面の一面のみを使用しているもので、細粒砂岩礫を使用している。

SX518出土遺物（Fig.92）

白磁

椀（20）　蛇の目高台を有しており、高台および底部外面を除いて、全面に乳白色の釉を施している。I類。

SX519出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋（21～23）　いずれも断面三角形を形づくる口縁部形態を有しており、21はボタン状のつまみを貼付し、天井部外面には指頭圧痕を顕著に観察できる。

壺蓋（24）　環状のつまみを有し、天井部外面に沈線、穿孔による装飾が施されている。天井部と体部の境界部分には凸帯が貼付されているものと考えられるが、剥離しており形状については定かでは

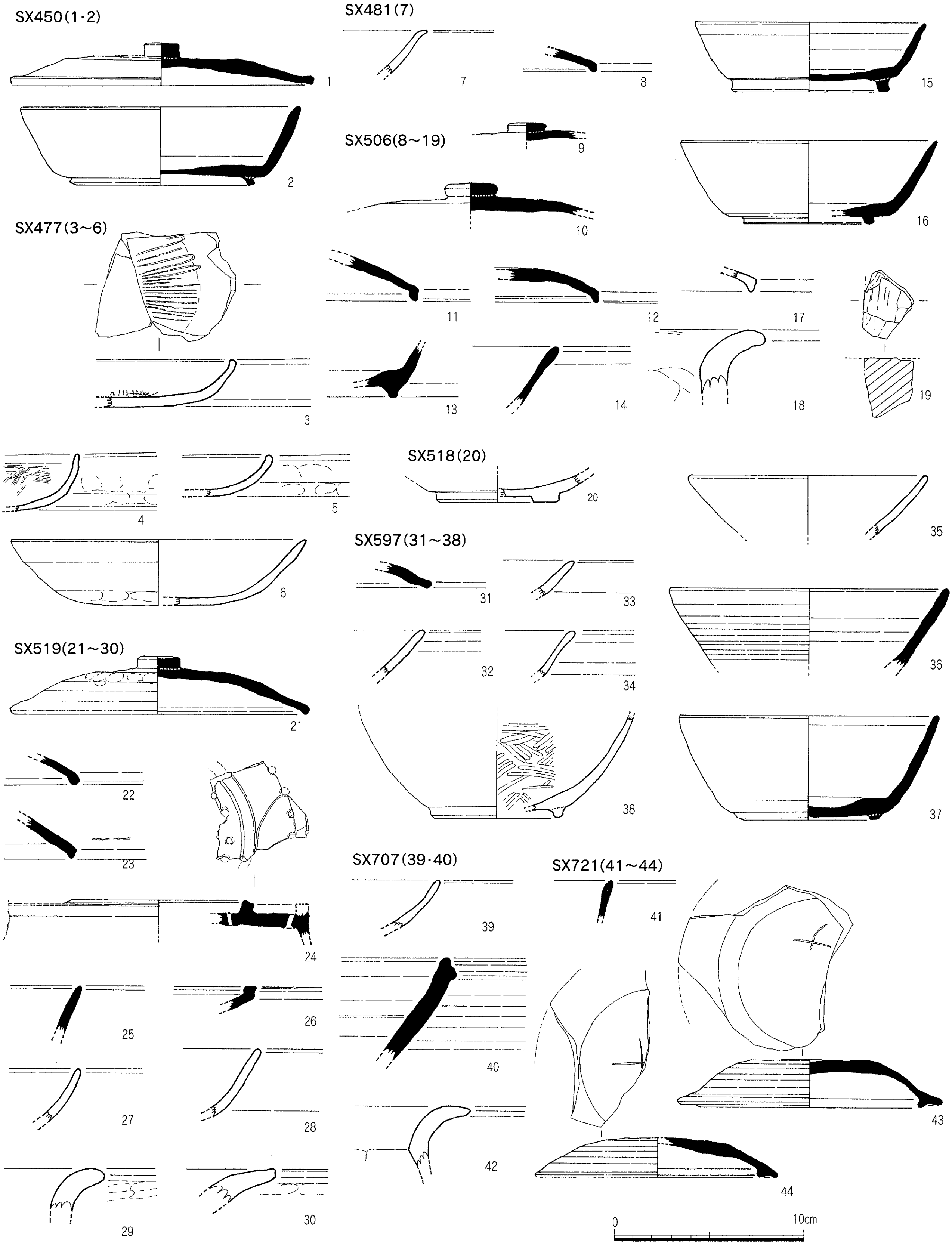


Fig.92　第1遺構面小穴出土遺物実測図その3　(1/3)

ない。

坏（25）　直線的に上方へ立ち上がる。

高坏（26）　口縁端部に平坦面を形づくるもの。

土師器

坏（27・28）　やや丸みを有する27と、直線的に外方へ開く28がある。

甕（29・30）　口縁部のみの破片資料で詳細に関しては不明。なお30は口縁端部を面取りしており古式土師器に属するものと考えられる。

SX597出土遺物（Fig.92）

須恵器

蓋（31）　口縁端部をつまむことによって成形するもの。

坏（36・37）　直線的に外方へ開く体部形態を有しており、高台が観察できる37は、高台貼付後に畳付部分を粗く回転ナデによって調整している。口径は13.7cm・14.8cmを測る。

土師器

皿（33）　底部へ移行する屈曲が観察できることから、皿と推定した。器面調整については磨耗していることから不明。

坏（32・34・35）　直線的に外方へ開く体部形態を有する。器面調整については磨耗のため不明。

黒色土器A類

椀c2（38）　やや深めの体部形態を有しており、内面は丁寧なミガキcによって調整されている。

SX707出土遺物（Fig.92）

土師器

丸底坏（39）　口縁部の破片資料で、口縁端部に油煙痕跡が観察できる。

須恵器

こね鉢（40）　口縁端部をやや肥厚させたもので、東播磨系須恵器と考えられる。荻野分類II群に属するものと考えられる（荻野、1986）。

【引用文献】荻野繁春（1986）「近畿地方における中世の須恵器」『東洋陶磁　第14号』

SX721出土遺物（Fig.92）

須恵器

坏（41）　口縁部の破片資料で、内外面回転ナデによって調整している。

蓋a1（43・44）　天井部外面に「十」字を描いたヘラ記号が観察できる。口径12.8cm、14.0cmをそれぞれ測る。

土師器

甕（42）　反り気味に外方へ屈曲させる頸部形態を有しており、胎土中に白雲母細片を多く観察できる。

SX802出土遺物（Fig.95）

土師器

甕a（5）　口径16.3cm、器高10.3cm。調整は外面がハケ調整、内面はヘラ削り。口縁部の内面立ち上がりに稜がみられる。

SX805出土遺物（Fig.93・94）

SX805出土遺物（Fig.93）

土師器

小皿a（1～50）　口径8.8～10.2cm、器高1.1～1.8cm、底径6.5～8.3cm。底部切り離しはすべてヘラ切り。

丸底坏a（53～83）　53・54は口径12～12.5cm、器高2.3～2.5cmと他の丸底坏aと比べると法量に明らかな違いがあり小ぶりである。54は口縁部に煤が付着していることから灯明皿として使用されていたことがわかる。55～82は、口径14.2～15.4cm、器高2.7～3.9cm。83は口径16cm、器高2.5～3.5cm、底径10.8cm。底部を押し出すことをせずに簡略化したため坏a化している。

蓋（84）　口径8.4cm、器高3cm。頂部に簡略ではあるが宝珠状のツマミを有する。色調は内外面ともに淡茶灰色。天井部に墨書を施される。「屠□」と読める。2文字目は字形が明らかだが、当てはまる字が不明である。

器台（85・86）　85は器部破片。86は支柱部破片。

黒色土器B類

小皿a（51・52）　口径9.6～9.8cm、器高1.4～1.8cm、底径6.8～8cm。内外面を黒く燻し、ミガキcを細く施す。底部切り離しはヘラ切り。

SX805①出土遺物（Fig.94）

土師器

小皿a（87）　口径9.6cm、器高1.1cm、底径8.1cm。底部切り離しはヘラ切り。

SX805②出土遺物（Fig.94）

土師器

丸底坏a（88）　口径16.2cm、器高3.2cm。内面は丁寧なミガキbが施される。

SX805③出土遺物（Fig.94）

土師器

器台（89）　支柱径は2.3cm。

SX805④出土遺物（Fig.94）

土師器

小皿a（90）　口径9.5cm、器高1.3cm、底径7.6cm。底部切り離しはヘラ切り。

SX805⑥出土遺物（Fig.94）

土師器

丸底坏a（91）　口径15.6cm、器高3.4cm。体部外面に指頭圧痕が認められる。

SX805⑦出土遺物（Fig.94）

土師器

小皿a（92）　口径9.1cm、器高1.3cm、底径7.1cm。底部切り離しはヘラ切り。

SX805⑧出土遺物（Fig.94）

土師器

小皿a（93）　口径9.4cm、器高1.5cm、底径7.5cm。底部切り離しはヘラ切り。

SX805⑨出土遺物（Fig.94）

土師器

丸底坏a（94）　口径15.8cm、器高3.3cm。

SX805⑩出土遺物（Fig.94）

土師器

丸底坏a（95）　口径15.6cm、器高3.35cm。

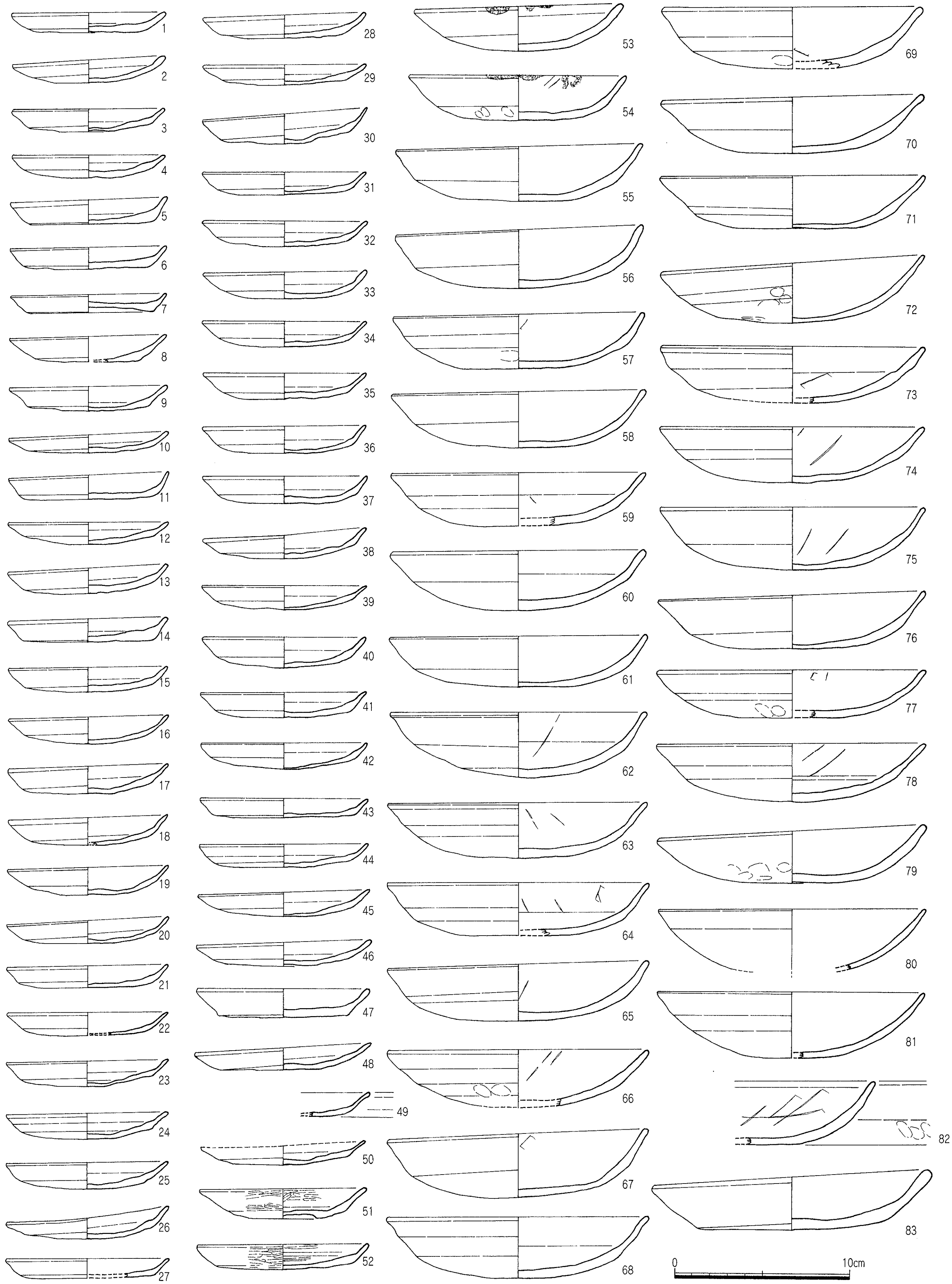


Fig.93　SX805 出土遺物実測図その1(1/3)

SX819出土遺物（Fig.95）

石製品

碁石（6）　長軸長1.45cm、短軸長1.2cm、厚み0.6cm。色調は白色。

SX864出土遺物（Fig.95）

土師器

坏（7）　口縁部破片。色調は淡褐黄色。

土製品

焼土塊（8～11）　平坦な面が1面残り、あとはすべて欠損している。

SX867出土遺物（Fig.95）

金属製品

釘（12）　錆に覆われている。重さ4g。

SX881出土遺物（Fig.95）

土製品

焼土塊（13・14）　破片である。胎土に2.5～3mmの白色砂粒を少量と雲母を少量含む。

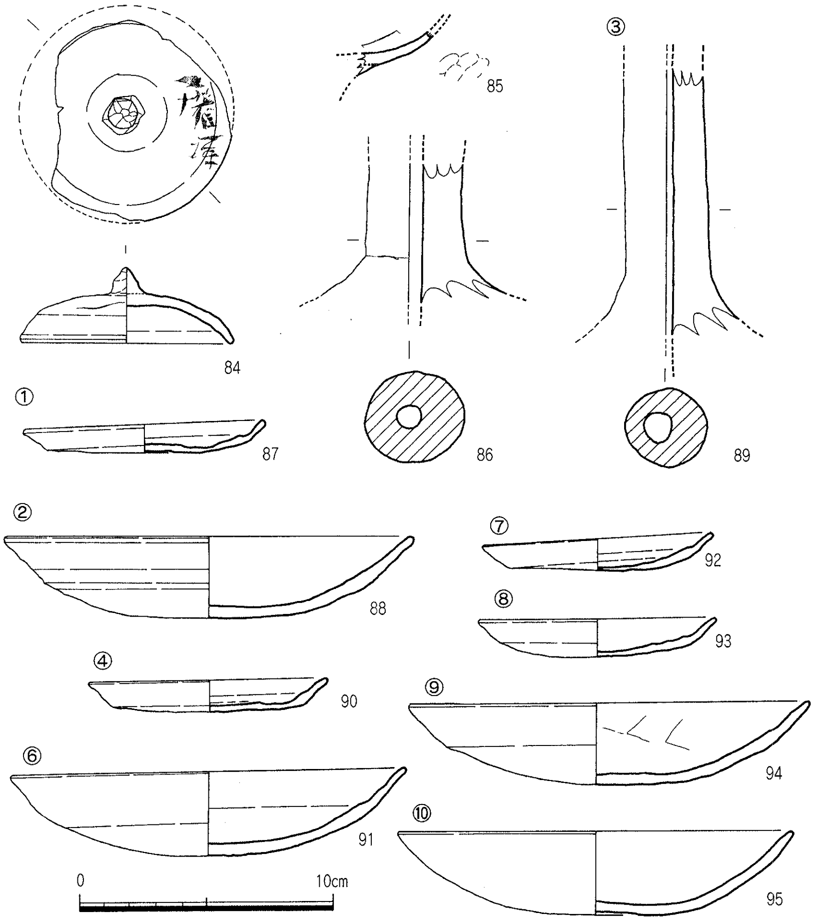


Fig.94　SX805 出土遺物実測図その2(1/3)

SX883出土遺物（Fig.95）

金属製品

刀子（15）　錆に覆われている。刃部とみられる。重さは4.4g。

SX897出土遺物（Fig.95）

緑釉陶器

皿（20）　底径8.6cm。全面施釉。貼り付け高台。軟質な焼き上がり。見込み部にトチン跡あり。長門産。

第1遺構面その他の遺構出土遺物（Fig.95～101）

SX302出土遺物（Fig.95）

須恵器

壺（1）　底部破片。底径は7.4cm。内外面に黒色の付着物あり。

土師器

坏a（2）　体部は「く」の字形に屈曲する。内外面は風化のため摩滅しており、調整は不明。色調は、内外面とも淡茶色～黄茶色を呈する。胎土は0.5～2.0mmの砂粒や、微細な雲母片をやや多く含む。大宰府編年XX期以降に下る可能性がある。

灰釉陶器

皿（3）　貼り付け高台。底部外面に糸切りによる切り離し痕跡が残る。体部外面はヘラ削り。内面

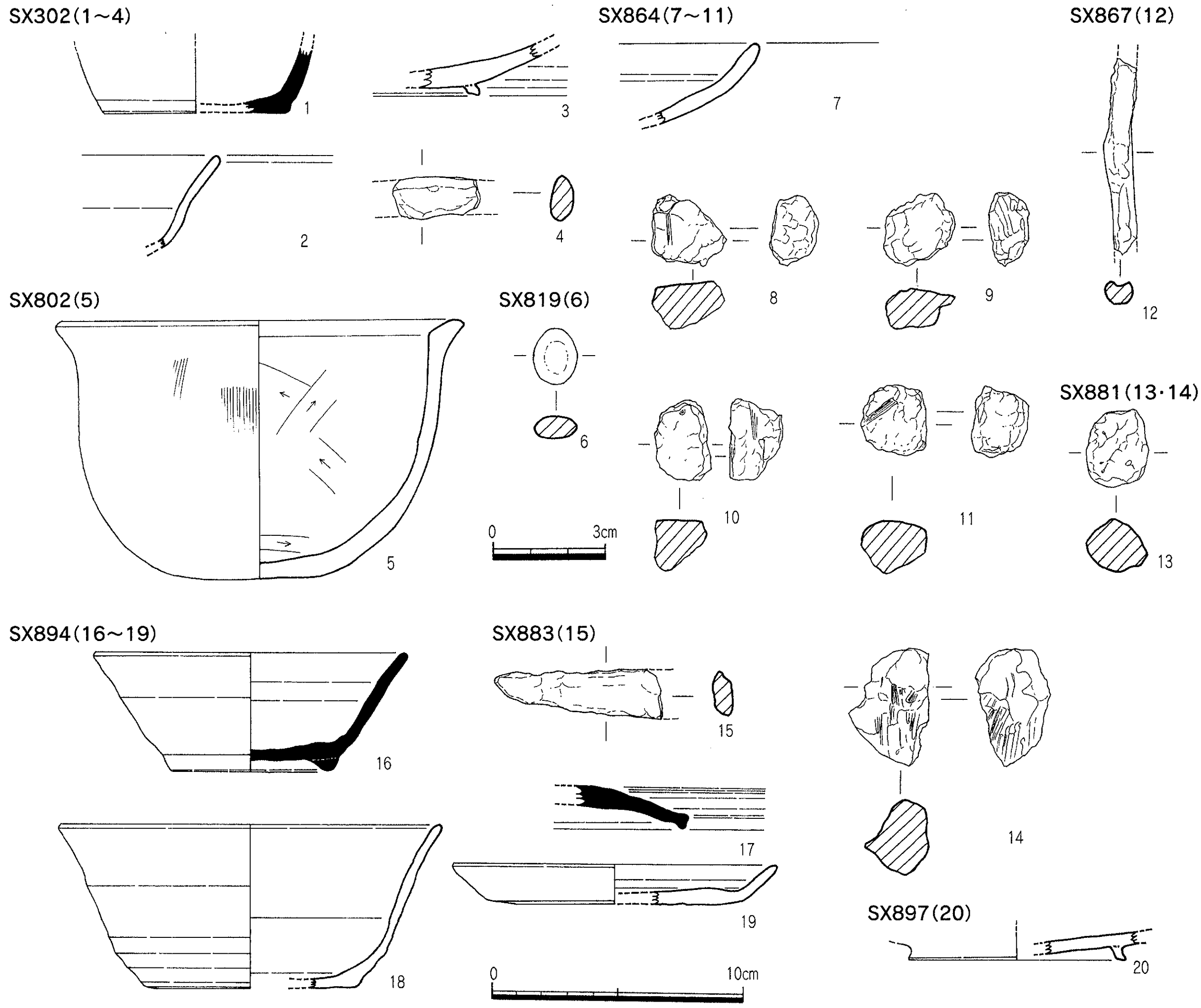


Fig.95　第１遺構面小穴出土遺物その4、第１遺構面その他の遺構（SX302・894）出土遺物実測図
(4・6・12・15は1/2、その他は1/3)

を施釉する。

金属製品

刀子（4）　破片。柄の部分の可能性がある。

なお、本遺構からは、この他に龍泉窯系青磁椀II-b類片が出土している。

SX406出土遺物（Fig.96）

土師器

丸椀（1・2）　丸底坏に比して器高が高い。口縁端部をやや外方へ開く傾向がある。

SX428出土遺物（Fig.96）

土師器

小皿（3～7）　口径が明らかな5は、9.4cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

SX484出土遺物（Fig.96）

須恵器

蓋（8～11）　天井部外面を回転ヘラ削りするもので、8には扁平な擬宝珠つまみが貼付されている。口縁部は断面三角形の形状を呈しており、三工程の回転ナデにより成形されている。

坏（12～17）　直立気味に口縁部へ移行するもので、高台形状が明らかなものでは、高台貼付後、

粗い回転ナデによって畳付が調整されているもので構成されている。

土師器

蓋（18・19）　断面三角形を呈する口縁部を有し、18には胎土中に白雲母細片が多く観察できた。

皿×高坏（20）　口縁部のみの破片資料で器種特定には至っていない。

坏（21）　直線的に口縁部へ移行するもので、胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

皿c×坏c（23）　高台のみの破片資料で詳細に関しては不明。高台は貼付後に内傾気味に畳付部分が成形されている。

皿b（24）　手持ち成形によるもので、底部外面は手持ちヘラ削りによって器面調整されている。

甕a（25）　頸部を「く」字に屈曲させるもので体部外面はハケ、体部内面はヘラ削りを行い、口縁部内外面は横ナデによって仕上げている。

土製品

土錘（22）　半分ほど欠損しているものと判断され、前面に指頭圧痕が観察できる。

SX487出土遺物（Fig.96・97）

須恵器

蓋（26～29・31）　扁平な擬宝珠形を呈するつまみや、断面三角形を示す口縁部の破片資料である。いずれも属性相関上は同一型式に属してもおかしくはない。

壺蓋（30）　口縁端部に平坦面を形成するもので、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

壺（32・33・35）　いずれも口縁部の破片資料で、口縁部を外方へ屈曲させるものである。

高坏（36・37）　口縁端部上面に平坦部を形成するもの。

皿（38・39・46）　底部から外方へ直線的に開くもので、底部外面にはわずかに回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏（40・41・43～45）　直立気味に口縁部へ移行するもので、高台は貼付後に高台外側を反り上げるように意識的に回転ナデされたものである。なお45については、底部回転糸切りによって切り離しされていることから、九州外からの搬入品であると考えられる。

把手（42）　把手のみの破片で、内面当て具痕跡から縦方向で復原した。

甕（34）　口縁部外面をやや肥厚させる。

土師器

蓋（47）　断面三角形の形状をとる蓋で、内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

皿（48）　底部外面に回転ヘラ切り痕跡が観察できるもので、直線的に外方へ開く。胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

坏（49・50）　器面磨耗のため調整痕跡については判然としない。50は胎土中に白雲母細片を多く混入している。

坏（51・53）　口径が計測できる53は、12.8cmを測る。53は底部外面を回転ヘラ削りによって調整している。

皿c（52）　直線的に口縁部へ開く皿に、頑丈な印象を受ける高台が貼付されている。器面調整については、磨耗のため不明。

甕（54～58）　いずれも外方へ「く」形を呈する頸部形状を有し、54は胎土中に白雲母細片を、55・57は胎土中に角閃石を多く含んでいる。

SX488出土遺物（Fig.97）

須恵器

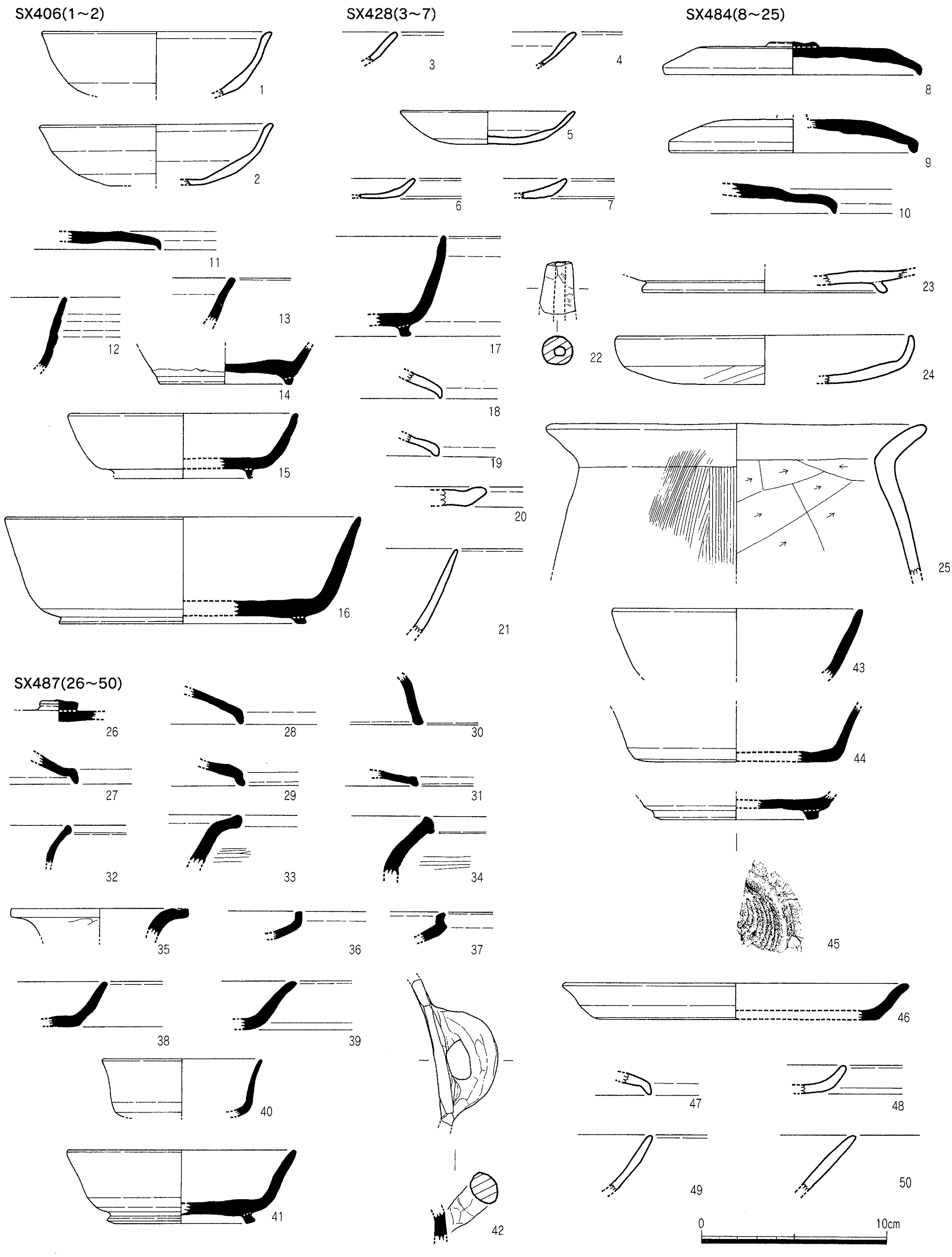


Fig.96　凹み遺構出土遺物実測図その1　(1/3)

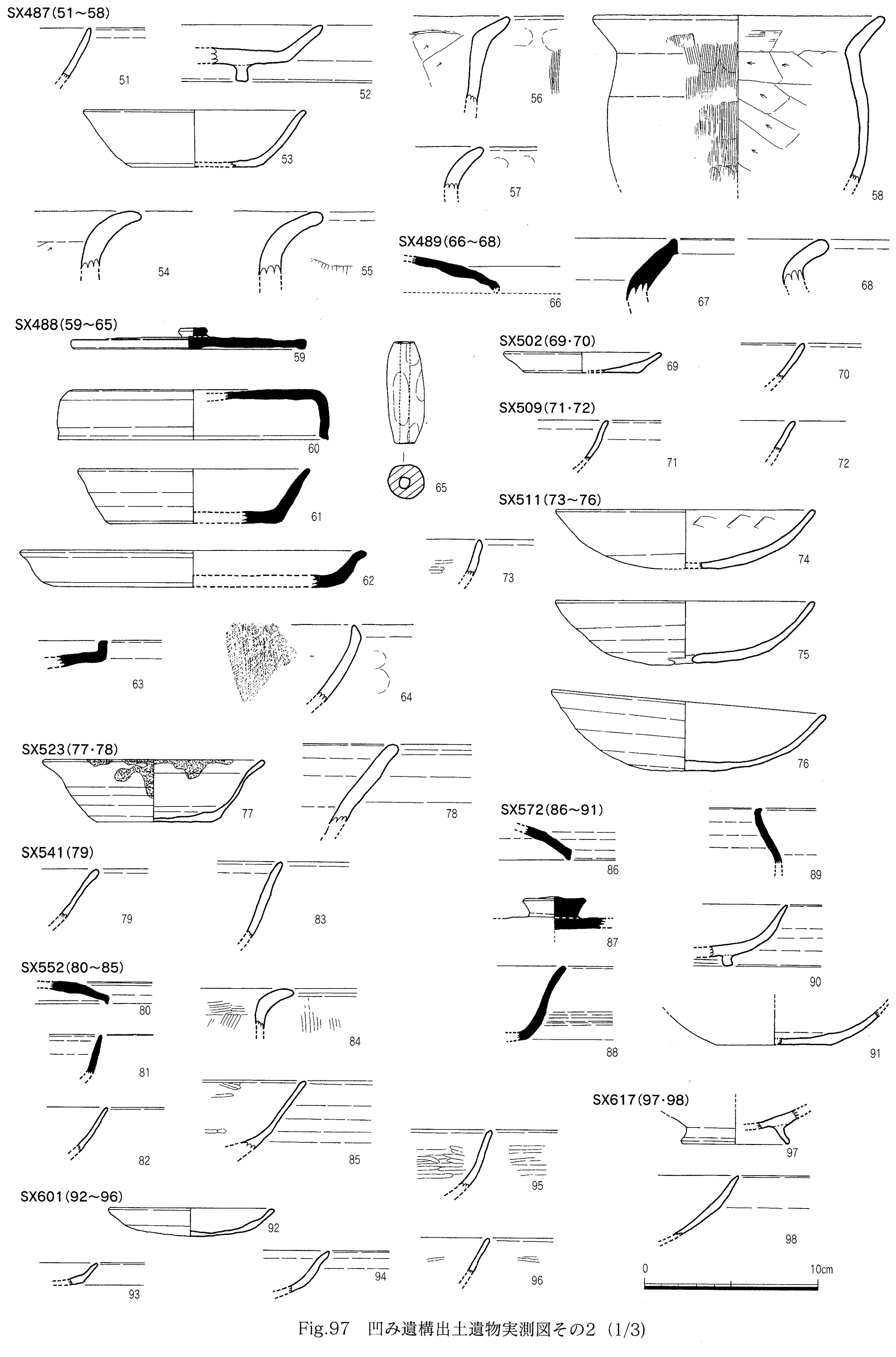


Fig.97　凹み遺構出土遺物実測図その2（1/3）

蓋（59）　扁平な体部形状に、ボタン状のつまみを貼付する。天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。

壺蓋（60）　口縁端部をやや内傾気味に平坦面を形成するもので、天井部外面は回転ヘラ削りによって仕上げている。

坏（61）　口径13.4cmを測り、底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

皿（62）　底部から体部への移行が丸みを有し、底部外面にはわずかに回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

高坏（63）　口縁端部に平坦面を形成するもの。坏部の器高はさほど深くないものと考えられる。

製塩土器

焼塩壺（64）　円錐形の鉢形を呈するもので、内面には布目が観察できる。

土製品

土錘（65）　ナデによって成形され、重量は25.8gを量る。

SX489出土遺物（Fig.97）

須恵器

蓋（66）　口縁端部を欠損しているが、断面三角形の口縁部形状を有するものと考えられる。天井部外面は回転ヘラ切りのままで未処理であった。

甕（67）　口縁端部外面をやや肥厚する。

土師器

甕（68）　頸部を「く」字形に屈曲させるもので、胎土中に角閃石を多く含んでいる。

SX502出土遺物（Fig.97）

土師器

小皿a1（69）　口径9.1cmを測り、底部より大きく開き気味に口縁部へ至る。底部切り離しは不明。

坏（70）　口縁部の破片資料、器面磨耗のため調整痕跡は不明。

SX509出土遺物（Fig.97）

土師器

坏（71）　体部下位において、やや丸みを有するもので、内外面ともに回転ナデによって調整。

緑釉陶器

椀（72）　内外面に施釉しており、近江産緑釉陶器を考えられる。

SX511出土遺物（Fig.97）

土師器

丸底坏（74～76）　口径14.8cm～15.8cmを測り、底部切り離しは器面磨耗のため不明。

黒色土器B類

椀（73）　口縁部のみの破片資料で詳細は不明。内面にミガキc痕跡が観察できる。

SX523出土遺物（Fig.97）

土師器

坏（77）　口径12.8cmを測り、口縁端部が黒色に変色している。底部は回転ヘラ切り。

鉢（78）　直線的に外方へ大きく開く体部形態を有しており、口径計測には至っていない。

SX541出土遺物（Fig.97）

黒色土器A類

椀（79）　直線的な体部形態を呈し、口縁部外面まで黒色化している。胎土中に白雲母細片を多く

観察できる。

SX552出土遺物（Fig.97）

須恵器

蓋（80）　天井部と体部の境界部分の外面を回転ヘラ削りするもので、断面三角形の口縁部形状を示す。

坏（81）　口縁部の破片資料。内外面ともに回転ナデ。

土師器

坏（82・83）　口縁部の破片資料で、器面磨耗のため詳細は不明。

甕a（84）　頸部を「く」字形に屈曲させるもので、胎土中に角閃石を多く混入している。

黒色土器A類

椀（85）　体部下位においてやや丸みを有するもので、胎土中に白雲母細片を多く観察できる。

SX572出土遺物（Fig.97）

須恵器

蓋（86・87）　断面三角形を呈する口縁部と、擬宝珠形を有するつまみである。

坏（88）　体部下位に丸みを有する坏で、口縁部がやや外反している。

小壺（89）　口縁端部に平坦面を形成し、やや下膨れ形状を呈する。

土師器

皿c（90）　底部から丸みを有しつつ口縁部へ移行するもので、断面正方形の丁寧な高台が貼付されている。胎土中には白雲母細片が多く観察できる。

坏d（91）　底部外面を回転ヘラ削りするもので、やや内湾しつつ口縁部へ移行するものと考えられる。

SX601出土遺物（Fig.97）

土師器

小皿a1（92・93）　口径が計測できる92は、9.6cmを測り、底部は回転ヘラ切りによって処理されている。93は胎土中に白雲母細片を多く混入している。

丸底坏（94）　口縁部から体部下位までの破片資料で器面磨耗のため詳細は不明。

黒色土器B類

椀（95・96）　丸みを有する椀で、内外面ともにミガキcによって仕上げられている。両者ともに胎土中に白雲母細片を多く混入している。

SX602出土遺物（Fig.98）

土師器

小皿a1（99～107）　口径8.8cm～9.8cmのもので、底部切り離し処理が観察できるものは全て回転ヘラ切りである。なお、107は胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

丸底坏（108～116）　口径が計測できるもので、11.5cm～14.7cmを測り、114は通常の丸底坏にあって小型のものである。底部切り離し処理が観察できるものは全て回転ヘラ切りであった。

器台（117）　6角形に面取りするもので、脚部の破片である。

SX612出土遺物（Fig.98）

須恵器

蓋（118）　天井部外面を回転ヘラ削りするもので、口縁端部を断面三角形に形づくる。

坏（119・120）　直線的に外方へ開く体部形態をとる。

土師器

胎土特徴として、白雲母細片を多く混入しているもの（121・123・125・128・129）がある。

蓋（121・122）　天井部外面を回転ヘラ削りするもので、口縁端部はやや形骸化した断面三角形を呈している。内外面ともにミガキの痕跡は観察できなかった。

坏（123～126）　いずれも直線的に外方へ大きく開く体部形態を呈している。

小皿a1（127）　この1点のみ平安後期のものであり、混入と考えられる。器面磨耗のため詳細は不明。

坏d（129・130）　内湾しつつ口縁部へ至る体部形態をとる。両者とも底部外面は回転ヘラ切り未調整で、坏dの分類属性の一つである回転ヘラ削りが欠失している。最新型式に位置付けることができるものと考えられる。

坏a（132）　口径14.1cmを測り、底部切り離しは回転ヘラ切りである。

坏c（133）　削り出し高台を有するもので、ミガキなどの器面調整については観察できなかった。筑後形坏と考えられる。

甕（128・131）　両者とも頸部を「く」字形に屈曲させるもので、131は体部上位に把手を貼付している。

SX617出土遺物（Fig.97）

土師器

丸底坏（98）　器面磨耗のため詳細不明。

黒色土器B類

椀c（97）　やや「八」字状に開く高台形状を呈する。

SX633出土遺物（Fig.98）

須恵器

蓋（134・135）　天井部まで残存している134は、外面において天井部と体部の境界部分のみを回転ヘラ削りする。口縁端部は断面三角形を呈している。

坏（136～139）　直立気味に立ち上がる体部形態を有し、高台形状が明らかな139は高台形状を外傾させることを意識した丁寧な回転ナデによる成形がなされている。

鉢（141）　口縁部を「く」字状に屈曲させるもので、口縁端部に平坦面を形成している。

土師器

坏c（140）　畳付部分を外傾させる意識的な回転ナデによって成形し、底部から直立気味に立ち上がる体部形態を有する。ミガキなどの装飾技法については、器面磨耗のため判然としない。

SX636出土遺物（Fig.98）

土師器

小皿a1（142～144）　口径8.6cm～9.0cmを測り、底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。

丸底坏（145～147）　口縁部の破片資料で全体形状については不明。145と146は胎土中に白雲母細片を多く含んでいる。

白磁

椀（148・151・152）　148はII-5類、151はIV類、152は未分類椀。

鉢（149）　内外面ともに文様が描かれており、鉢II類に該当するものと考えられる。

皿（150）　見込み部分に線描きによる文様が描かれており、皿VII-c類に該当すると考えられる。

SX639出土遺物（Fig.99）

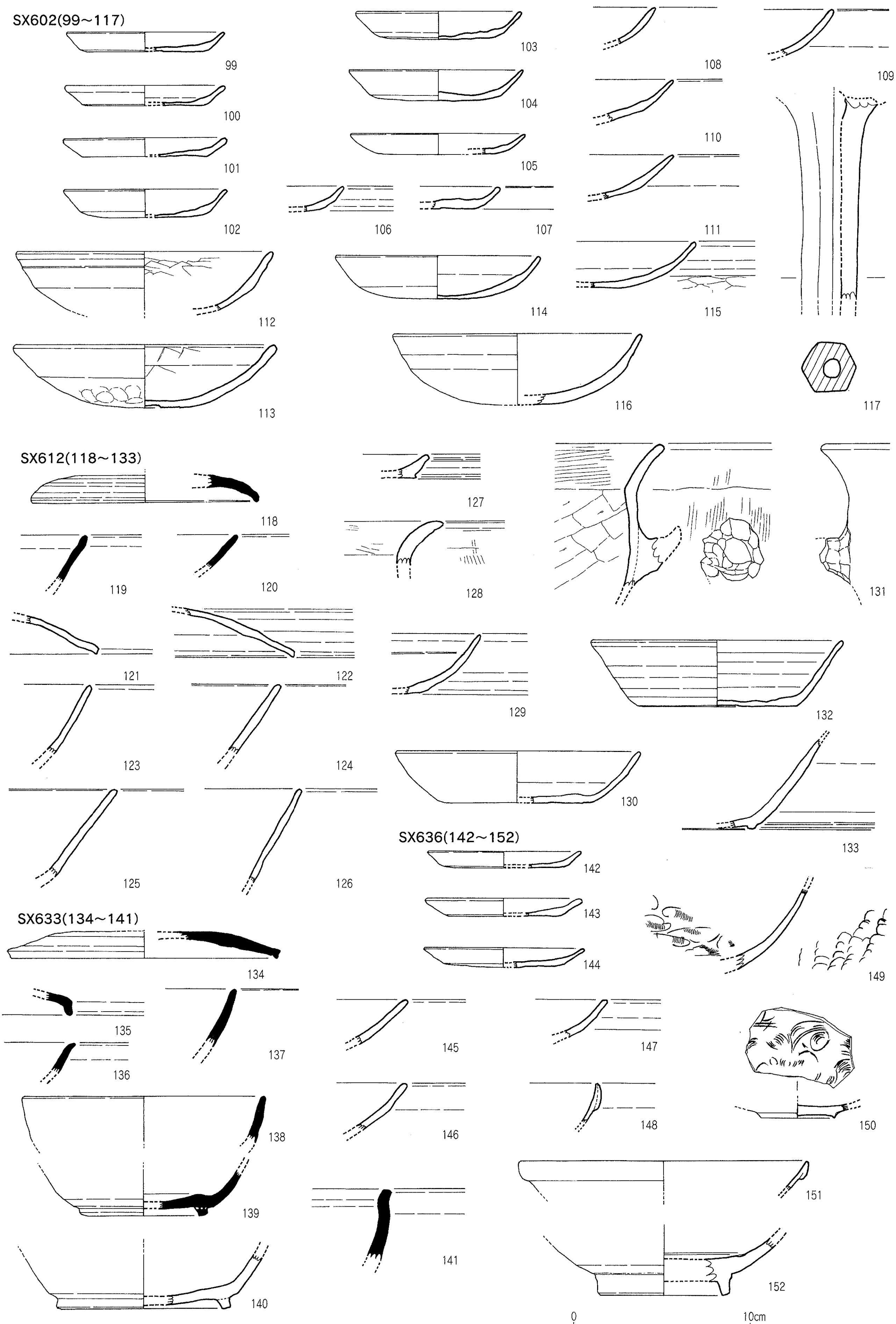


Fig.98　凹み遺構出土遺物実測図その3　(1/3)

須恵器

蓋（153・154）　口縁端部を断面三角形に形づくる。

坏（155～162）　底部から直立気味に立ち上がる体部形態を有するもの（155・159・160）、外方へ開く体部形態を有するもの（156～158・161）の二者がある。ただし両者とも高台のつくりは丁寧である。

甕（163）　口縁部外面をやや肥厚する。

土師器

胎土特徴として、白雲母細片を多く含むもの（164・166・168・171・173・174・176・178）がある。

蓋（164）　器面磨耗しているため、調整については不明。

坏（166～168・170・171）　丸みを有する体部形態をとる。171は内外面ともにミガキaによって丁寧に仕上げられている。

小壺（165）　肩部を屈曲させ、短頸の壺で内外面ともに回転ナデによって仕上げている。

皿（172～178）　底部から直線的に外方へ開く体部形態をとるもので、175を除く、底部外面が観察できるものは全て回転ヘラ切り未調整であった。175は底部外面を回転ヘラ削りによって再調整している。

甕（169）　内外面を回転ナデによって器面調整するもので、精製の甕と考えられる。

SX642出土遺物（Fig.99）

土師器

蓋（179）　天井部外面未調整、口縁端部は丸く仕上げるもので、最も形骸化した蓋に位置付けられる。

坏a（180～184）　口径12.8cm～13.1cmを測り、底部と体部の境界は不明瞭なものである。

皿（185）　口径13.1cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

SX643出土遺物（Fig.99）

土師器

小皿a1（186～191）　口径9.6cm～11.0cmを測り、底部切り離しは全て回転ヘラ切り。

小皿2（192・193）　口縁端部をつまみ上げるもの。

坏a（194）　口径14.0cmを測り、口縁部が若干外反している。

SX647出土遺物（Fig.99）

土師器

小皿a1（195）　口径10.0cmを測り、底部切り離しは回転ヘラ切り。

坏c（196）　削り出し高台を有するもので、筑後形坏に位置付けられる。

丸底坏（197）　器面磨耗のため調整痕跡については不明。

SX649出土遺物（Fig.99）

須恵器

用途不明（201）　高坏の脚とも考えられ、中位に断面三角形の凸帯を巡らせている。

土師器

坏（198～200）　直線的に口縁部へ開くものと考えられる。

SX664出土遺物（Fig.99）

須恵器

こね鉢（203）　底部外面に回転糸切り痕跡が観察でき、内面には回転ナデ痕跡が残存している。搬入品と考えられる。

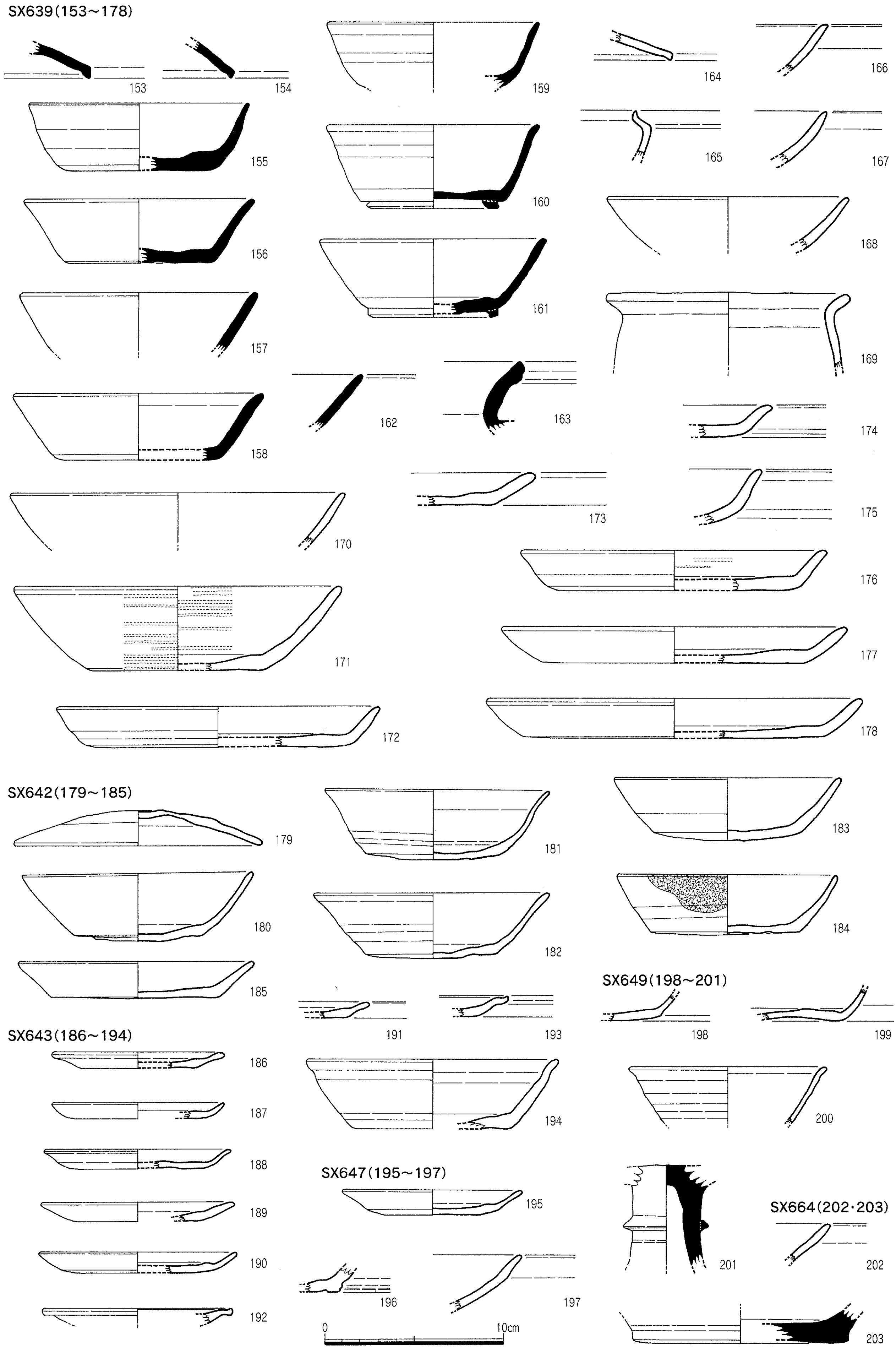


Fig.99　凹み遺構出土遺物実測図その4　(1/3)

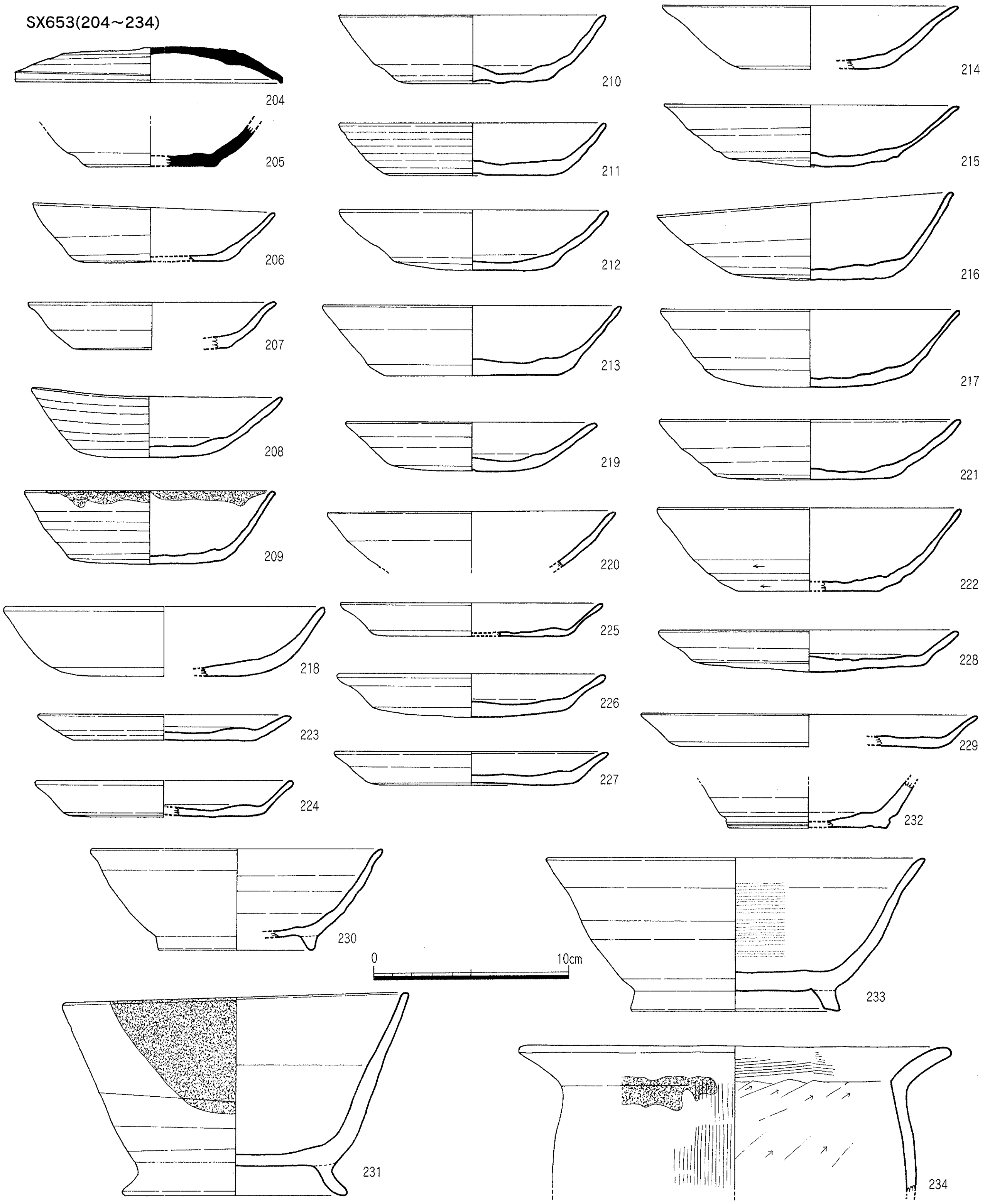


Fig.100　凹み遺構出土遺物実測図その5　(1/3)

土師器

坏（202）　口縁部の破片で、器面磨耗のため調整等の詳細については不明。

SX653出土遺物（Fig.100）

須恵器

蓋a3（204）　天井部外面は回転ヘラ切り後、ナデによって仕上げるもので、口縁部の断面三角形の形状も退化傾向を示す。

坏（205）　底部からやや内湾気味に立ち上がるもので、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

土師器

坏a（206～211・213・216・217）　底部より直線的に口縁部へ至るもので、後述する坏dとは体部形態において異なっている。口径は12.4cm～15.2cmまでの幅がある。底部外面には回転ヘラ切り痕跡が観察できる。

坏d（212・214・215・218～222）　底部から丸みを有しつつ口縁部へ移行するもので、底部外面を本来回転ヘラ削りによって調整するものであったが、当該遺構からは省略化したものが多く、坏dの最新型式に位置付けられる。

皿a（223～229）　やや器高が浅めのものが多く、口径13.0cm～17.0cmを測る。225・229が底部外面を回転ヘラ削りするのに対し、他のものは回転ヘラ切りのみによって処理されている。

坏c（230～233）　232以外は、やや高めの高台を貼付しており、233は内面にミガキa痕跡が観察できる。232は回転ヘラ削りによって高台を成形しており、筑後形坏として考えられる。見込み部分は回転ナデ。

甕a（234）　頸部を「く」字状に外反させるもので、頸部外面が黒色に変色している。なお胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

SX663出土遺物（Fig.101）

土師器

坏（235～239）　全体形状の明らかなものは、口径13.0cmから14.9cmを測り、全て直線的に外方へ開く体部形態を有している。239は胎土中に角閃石が観察できる。

甕（240・241）　頸部屈曲が顕著ではなく、器面調整に関しては磨耗のため詳細は不明。241については胎土中に角閃石を多く含んでいる。

黒色土器A類

椀（243・244）　体部下位に丸みを有するもので、243には胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

緑釉陶器

壺（246）　緑釉緑彩のもので外面全面を施釉。

青磁

水注（247）　頸部の破片資料で全形については定かではない。長沙窯系青磁と考えられる。

瓦

平瓦（242）　「大国」の文字が判読でき、大宰府分類VII類に該当する。

金属製品

鏡（245）　鏡片で、一箇所抉りが表現されており、図上復原で4箇所形づくられているものと推定できる。堆積環境のためか、さほど腐蝕していなかった。

SX672出土遺物（Fig.101）

土師器

小皿a1（248）　口縁部を丸く仕上げるもので、器面磨耗のため詳細不明。

SX697出土遺物（Fig.101）

土師器

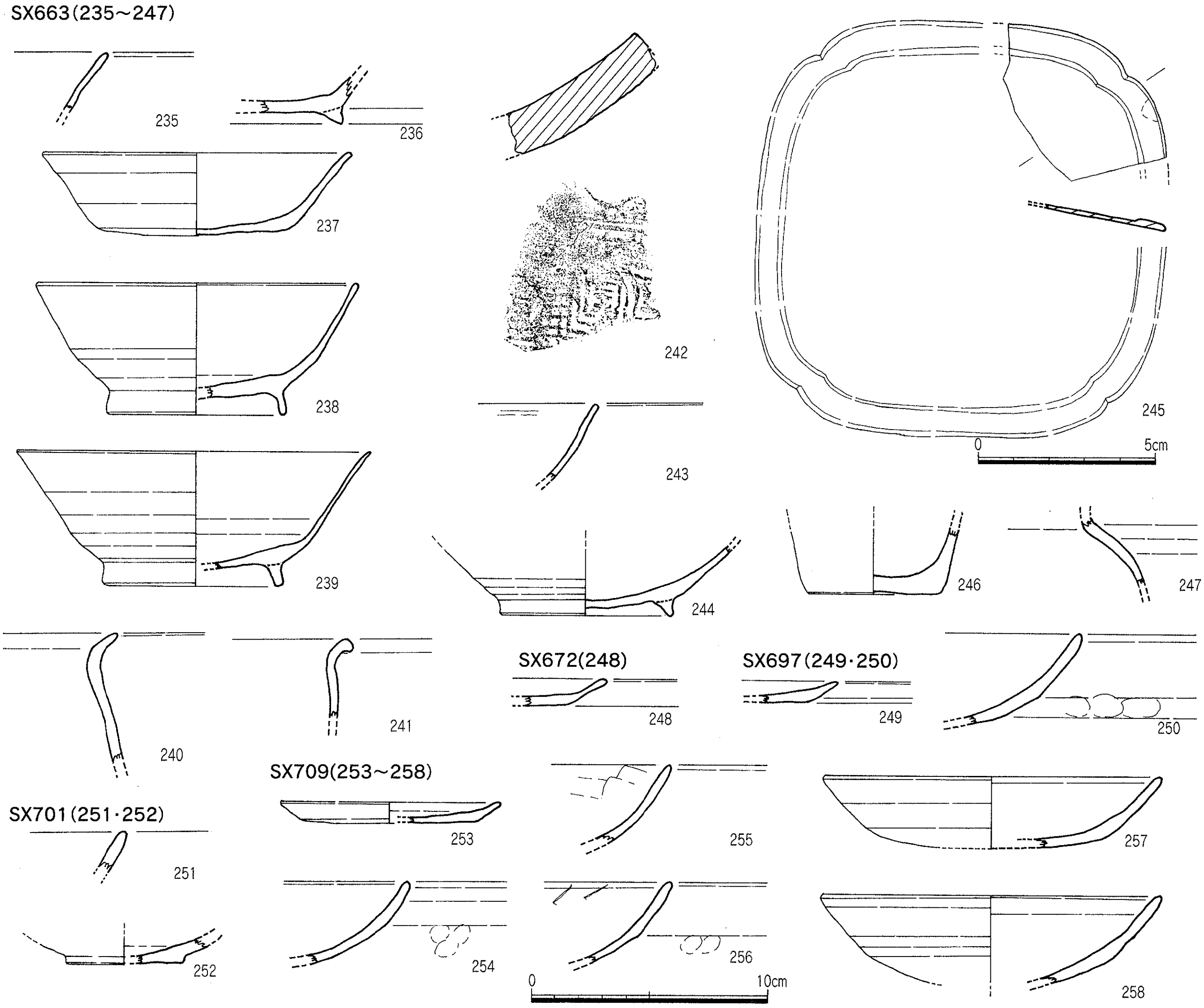


Fig.101　凹み遺構出土遺物実測図その6（245は1/2、その他は1/3）

小皿a1（249）　口縁部を丸く仕上げるもので、器面磨耗のため詳細不明。

丸底坏（250）　口径計測ができないもので、底部外面に指頭圧痕が観察できる。

SX701出土遺物（Fig.101）

土師器

坏（251・252）　いずれも破片資料であることから詳細は不明。なお251については胎土中に白雲母細片が多く観察できる。

SX709出土遺物（Fig.101）

土師器

小皿a1（253）　口径9.2cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

丸底坏（254～258）　口径が明らかな個体では、14.2cm～14.3cmを測り、底部外面は回転ヘラ切りによって処理されている。

SX894出土遺物（Fig.95）

須恵器

坏c（16）　口径12.6cm、器高4.75cm、底径6.8cm。貼り付け高台が体部の立ち上がり近くに付けられる。

蓋3（17）　天井部を回転ヘラ削り調整する。

土師器

椀a（18）　口径15.4cm、器高6.5cm、底径8.8cm。全体が摩耗しているため調整は不明。色調は明茶色～暗褐色。

皿a（19）　口径13cm、器高1.65cm、底径10.2cm。底部切り離しはヘラ切り技法。

(2) 第2遺構面出土遺物

第2遺構面柵列出土遺物（Fig.102）

SA320出土遺物

須恵器

坏c（1）　底部の破片である。残存高2.8cm、高台径11.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。内面および体部外面は回転ナデを施し、内面底部はナデを施す。胎土のきめは細かく0.2～2mmの砂粒、微細な雲母片をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰色～灰白色を呈す。SA320b出土。

SA975出土遺物

土師器

甕（2）　くの字形口縁部破片。内面は削り調整、外面は荒いナデ押さえの後ハケ調整。SA975a出土。

SA990出土遺物

須恵器

蓋3（3）　口縁部破片。焼成・還元ともに良好。全体的に粗雑な調整痕跡である。SA990d出土。

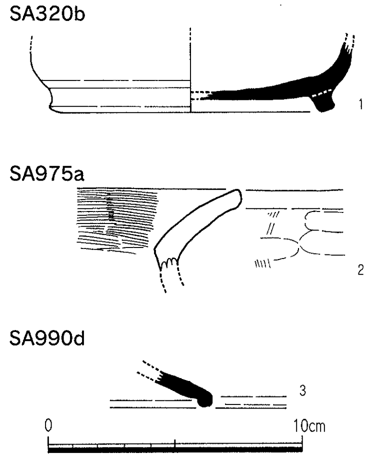


Fig.102　第2遺構面柵列
出土遺物実測図（1/3）

第2遺構面掘立柱建物出土遺物（Fig.103・104）

SB250出土遺物（Fig.103）

SB250出土遺物

須恵器

蓋1（1・2）　1は口縁部の破片である。残存高1.8cmで、推定口径は約18.0cm前後である。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、青灰色を呈す。S-250a出土。2は口縁部の破片である。口径14.0cm、残存高1.8cmを計る。胎土は1mm以下の白色砂粒を多量含む。焼成・還元ともに良好で、内面は暗灰色、外面は青灰色を呈す。S-250f出土。

坏c（3）　底部の破片である。残存高2.2cm、高台径9.8cmを計る。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成・還元ともに良好で、内面は青灰色、外面は暗灰色を呈す。S-250f出土。

皿×高坏（4）　口縁部の破片である。口径15.0cm、残存高2.25cmを計る。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、内面は青灰色、外面は黒灰色を呈す。S-250b出土。

土師器

坏（5・6）　5は口縁部の破片である。残存高3.1cmを計る。内面口縁端部は沈線が一条めぐる。外面体部下半は手持ちのヘラケズリを施し、その他は回転ナデを施す。内面には右斜め方向の放射状暗文を施す。胎土は精良で、焼成は良好。内外面とも橙茶色を呈す。畿内系。S-250f出土。6は口縁部の破片である。残存高2.9cmを計る。外面体部下半は手持ちのヘラケズリを施し、その他は回転ナデを施

す。内面には右斜め方向の放射状暗文を施す。胎土は精良で0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好で、内外面とも橙茶色を呈し、黄白色の細い筋がまじる。畿内系。S-250f出土。

SB250掘方出土遺物

須恵器

蓋1（7）　口縁部の破片である。残存高1.4cmを計る。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、青灰色を呈す。S-250d掘方出土。

土師器

皿b（8）　口縁部の破片である。残存高1.8cmを計る。胎土は1mm以下の茶色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内面は暗茶灰色、外面は一部灰黒色を呈す他は茶灰色を呈す。S-250j掘方出土。

皿b×鉢（9）　口縁部の破片である。口径17.0cm、残存高2.95cmを計る。風化により調整不明。胎土は1mm以下の白色・茶色砂粒をごく少量含み、微細な角閃石もごく少量混入する。焼成はやや不良で、内面は茶灰色、外面は明茶灰色を呈す。外面には赤色顔料が付着している。S-250c掘方出土。

甕（10・11）　10は口縁部の破片である。残存高2.6cmを計る。風化が進んでいるが、体部内面はヘラケズリが、体部外面はハケ目の当て具痕が観察される。胎土は1mm以下の砂粒を多量含み、微細な白雲母片を多く含む。焼成はやや不良で、明茶灰色～橙茶色を呈す。S-250h掘方出土。11は口縁部の破片である。残存高2.4cmを計る。風化が進んでいるが、体部内面はヘラケズリが観察される。胎土は2mm以下の砂粒を多量含み、微細な白雲母片を多く含む。焼成はやや不良で、明茶灰色～茶灰色を呈す。S-250h掘方出土。

SB290出土遺物（Fig.103）

SB290出土遺物

須恵器

蓋3（12）　天井部～口縁部にかけて残存する破片である。口径13.5cm、残存高1.2cmを計る。天井部はヘラ切り後ナデを施し、焼成前にヘラ記号を施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、灰青色～暗灰青色を呈す。S-290b出土。

蓋a3（13）　口径14.8cm、器高2.8cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施すが、やや雑で粘土が削り取られていない部分がある。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～暗灰青色を呈す。S-290g出土。

坏c（14）　底部の破片である。残存高2.6cm、高台径10.2cmを計る。底部外面は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色～暗灰白色～黒灰色を呈す。S-290c出土。

壺（15）　底部の破片である。残存高2.1cm、高台径8.8cmを計る。底部外面は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、内外面は淡茶黄色、断面は淡灰白色を呈す。S-290g出土。

土師器

蓋3（16）　口縁部の破片である。残存高1.7cmを計る。内外面ともミガキaを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、淡橙黄色を呈す。S-290k出土。

坏（17）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。残存高4.1cmを計る。摩耗が進んでいるが、ミガキaが観察される。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、淡橙黄色～明茶褐色を呈す。S-290c出土。

皿a（18）　口縁部の破片である。残存高2.6cmを計る。内外面ともミガキaを施す。胎土は0.5～

1mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、明茶褐色を呈す。S-290g出土。

盤×坏c（19）　底部の破片である。残存高2.2cmを計る。摩耗が進んでいるが、内面底部にミガキaが観察される。胎土は0.5mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、明茶褐色～淡黄褐色を呈す。S-290j出土。

壺（20）　底部の破片である。残存高3.6cmを計る。摩耗が進んでいるが、外面体部下半には回転ナデが観察される。胎土は0.5mmの砂粒を多く含む。焼成はやや不良で、内面は淡橙黄色、外面は暗橙黄色を呈す。なお、内面には漆が付着している。S-290k出土。

甕（21・22）　21は口縁部付近が残存する破片である。残存高4.9cmを計る。摩耗が進んでいるが、体部内面はケズリが観察される。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含み、角閃石・雲母も少し含む　。焼成はやや不良で、二次的に焼成を受けているため淡赤褐色～暗茶褐色を呈す。S-290j出土。22は口縁部付近が残存する破片である。残存高4.5cmを計る。体部内面はヘラケズリ、体部外面は縦方向のハケ目調整、その他はヨコナデを施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を少し含む。角閃石もごくわずかに含んでいる。焼成はやや良好で、淡褐白色～淡橙黄色を呈す。二次的に焼成を受けているため淡茶黒色を呈す部分もある。S-290h出土。

金属製品

鉄釘（23）　比較的大きな叩部をもつ。残存長3.1cm、幅1.9×1.1cmを計る。X線撮影で観察すると、釘の頭は比較的扁平で、頭に取り付く部分の棒部は太く、下に行くにつれて細くなり断面四角形になる。S-290g出土。

SB290柱痕出土遺物

須恵器

蓋3（24）　天井部～口縁部にかけて残存する破片である。残存高2.0cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色～暗灰白色を呈す。S-290f柱痕出土。

坏c（25）　底部が残存する破片である。残存高1.2cm、高台径10.1cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、淡青灰色を呈す。S-290d柱痕出土。

SB290掘方出土遺物

須恵器

蓋（26～29）　26はつまみ付近が残存する蓋cの破片である。残存高1.6cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、内面は暗茶褐色、外面は淡灰青色を呈す。なお、内面は擦痕があり墨痕らしいものが付着している。転用硯の可能性がある。S-290e掘方出土。27は天井部～口縁部にかけて残存する蓋3の破片である。口径10.8cm、残存高1.8cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰青色～淡灰青色を呈す。S-290g掘方出土。28は蓋c3の破片である。口径12.9cm、器高2.2cmを計る。天井部はヘラ切り後ナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、やや暗い灰青色を呈す。S-290b掘方出土。29は蓋c3の破片である。つまみは欠損している。口径13.2cm、器高1.8cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色を呈す。S-290f掘方出土。

坏c（30～32）　30は口径9.9cm、器高3.7cm、高台径6.9cmを計る。胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰青色を呈す。S-290i掘方出土。31は底部の破片である。残存高1.3cm、高台径8.6cmを計る。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色を

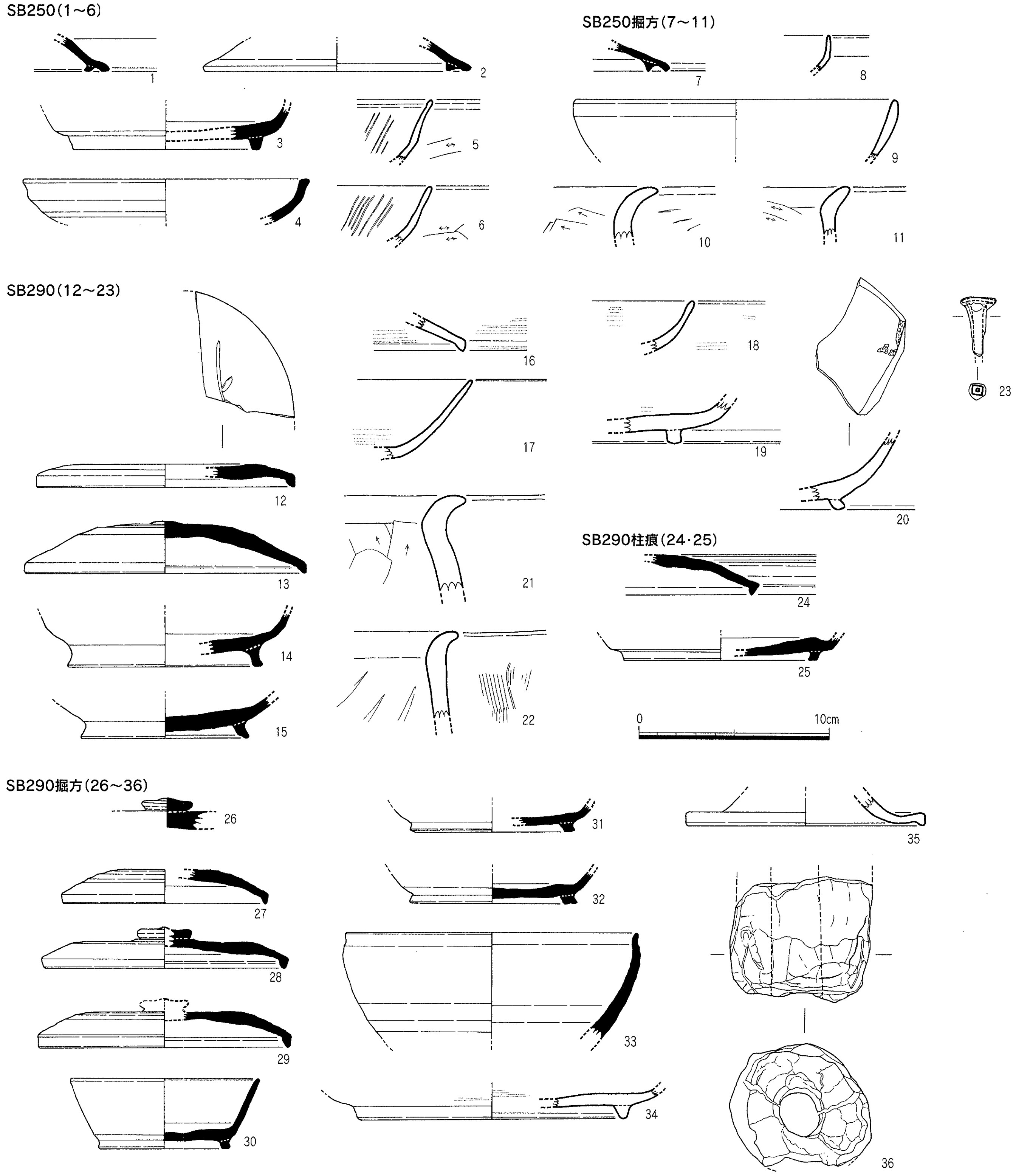


Fig.103　SB250・290 出土遺物実測図（1/3）

呈す。S-290j掘方出土。32は底部の破片である。残存高1.5cm、高台径8.7cmを計る。胎土は0.5～2mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰青色を呈す。S-290f掘方出土。

鉢（33）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径15.3cm、残存高5.6cmを計る。調整は内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5mm大の砂粒を多く含み、1～2mm大の砂粒を少し含む。焼

成・還元ともに良好で、灰青色を呈す。S-290k掘方出土。

土師器

盤×皿c（34）　底部の破片である。残存高1.5cm、高台径14.2cmを計る。高台部以外はいずれも回転ナデの後ミガキaを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少し含む。焼成は良好で、淡黄褐色を呈す。S-290f掘方出土。

高坏（35）　底部の破片である。残存高1.4cm、脚部底径12.5cmを計る。摩耗により調整は不明。胎土は0.5～2mmの砂粒を少し含む。焼成は不良で、淡黄褐色～橙黄色を呈す。S-290c掘方出土。

土製品

鞴羽口（36）　羽口の先端部である。図上残存長6.5cm、直径6.1～7.3cmを計る。通気孔は2.5～2.7cm程度である。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、1～2mm大・2～5mm大の砂粒をわずかに含む。二次的に被熱を受けており、下端に向かうにつれ灰色味が強くなる。図上端部より、淡茶黄色～淡黄白色～淡白灰色～淡灰白色を呈す。S-290f掘方出土。

SB950出土遺物（Fig.104）

SB950b出土遺物

須恵器

高坏（1）　脚部裾破片。

SB950c出土遺物

須恵器

蓋（2）　口縁～体部の破片。天井部はナデ調整される。

SB950d出土遺物

須恵器

坏c（3）　高台～体部破片。体部外面は回転ナデ調整。

土師器

甕（4）　摩耗により調整は不明瞭。外面はハケ調整。胎土は淡白灰色の0.5～1mm程度の砂粒を多く含む。茶褐色の粒子を少量含む。

製塩土器

壺（5）　II-b類。外面にナデによる指頭圧痕が目立つ。

SB950f出土遺物

須恵器

蓋3（6）　内外面ともナデ調整。天井部は回転ヘラ削り調整。

壺（7）　残器高7.2cm、底径5.8cm。外面は回転ナデを施した後に粗雑なナデを施す。肩部に自然釉がかかる。内面底部に接合時の櫛状工具痕跡が明瞭に残る。

SB950g出土遺物

須恵器

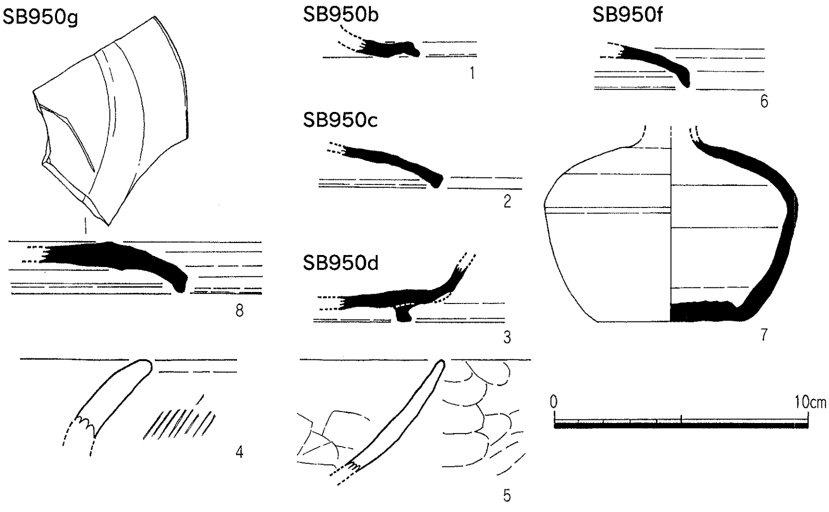


Fig.104　SB950 出土遺物実測図（1/3）

蓋3（8）　天井部はヘラ削り調整。回転ナデ調整を外面と内面に施す。調整は丁寧。天井部にヘラ記号あり。

第2遺構面溝出土遺物（Fig.105・106）

SD255出土遺物（Fig.105）

SD255茶色土出土遺物

須恵器

蓋c3（1）　口径17.4cm、器高1.5cm、天井部径12.9cmを計る。内外面とも回転ナデ調整で、天井部の内外面にナデを施す。胎土は2mm以下の白色・茶色砂粒を多量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色を呈す。

坏（2）　口縁部の破片である。残存高2.1cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成・還元ともに良好で、青灰色～暗灰色を呈す。

SD260出土遺物（Fig.105）

須恵器

坏（3）　口縁部の破片である。残存高3.0cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～やや暗い灰青色を呈す。

土師器

坏×椀（4）　口縁部の破片である。残存高1.9cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡黄橙色を呈す。

SD275出土遺物（Fig.105）

SD275茶色土出土遺物

土師器

小皿a1（5・6）　5は口径9.8cm、器高1.0cm、底径7.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡褐白色を呈す。6は口径10.7cm、器高1.2cm、底径8.0cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～2mm大の砂粒を少量含む。焼成は不良で、淡褐黄色を呈す。

小皿a2（7）　口縁端部内面に窪みがめぐる小皿a2である。口径12.0cm、器高0.9cm、底径9.2cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡黄褐色を呈す。

丸底坏×椀（8）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径17.8cm、器高4.5cmを計る。かなり器面が剥離しており調整不明。胎土は0.5～2mm大の砂粒を多く含む。焼成は不良で、淡褐灰色を呈す。

SD280出土遺物（Fig.105）

SD280茶色土出土遺物

須恵器

蓋1（9）　口縁部の破片である。残存高1.3cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。天井部はナデか。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰色～灰黒色を呈す。

坏a（10）　口縁部から底部にかけて残存する破片である。残存高3.5cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、底部はナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、暗灰色～灰白色を呈す。

土師器

皿b（11）　口縁部の破片である。残存高1.9cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mm大

の砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、橙褐色を呈す。

甕（12）　口縁部の破片である。残存高2.4mを計る。体部内面はヘラケズリ、その他は摩耗しているが、指押さえまたはハケ目で成形・調整を施しているようである。胎土は0.5～1mm大の砂粒および0.5mm大の雲母をわずかに含む。焼成は不良で、褐黄色を呈す。なお二次的に焼成を受けており、淡赤褐色～暗褐灰色～暗灰黒色を呈す部分もある。

SD285出土遺物（Fig.105）

SD285淡茶色土出土遺物

須恵器

蓋1（14）　口縁部の破片である。残存高1.8cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、灰黒色を呈す。

坏a（15）　口縁部から底部にかけて残存する破片である。口径11.6cm、残存高3.6cm、底径6.9cmを計る。体部外面には沈線状の筋が巡る。内外面とも回転ナデを施し、底部はヘラ切り後雑なナデを施す。胎土は0.5mm以下の砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、内外面は淡青灰色～暗青灰色を、断面は淡赤褐色を呈す。

坏c（16）　底部の破片である。残存高1.6cm、高台径8.7cmを計る。胎土は0.5mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、淡青灰色～黒灰色を呈す。

土師器

坏（17・18）　17は口縁部の破片である。残存高2.5cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mmの砂粒を少し含む。焼成は良好で、淡橙黄色を呈す。18は口縁部～体部が残存する破片である。残存高3.0cmを計る。口縁部内面には沈線が一条めぐる。摩耗により調整不明だが、体部内面には右上がりの放射状暗文を施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成は良好で、内外面とも明茶褐色を呈す。畿内系。

SD287出土遺物（Fig.105）

土師器

坏（13）　口縁部の破片である。残存高2.1cmを計る。口縁部内面には沈線が一条めぐる。摩耗によりほとんどの調整は不明だが、体部外面には横方向のミガキとみられる調整が観察される。胎土は0.5mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡橙黄色を呈す。畿内系。

SD288出土遺物（Fig.105）

須恵器

蓋c3（19）　口径15.3cm、器高2.0cm、天井部径9.9cmを計る。天井部外面はヘラ切り後、雑なナデを施す。その他は回転ナデを施し、天井部内面はナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～3mm大の砂粒を少し含む。焼成はやや良好、還元は良好で、淡青灰色を呈す。

坏c（21・22）　21は口径13.8cm、器高4.1cm、高台径9.8cmを計る。底部外面はヘラ切り後、雑なナデを施す。その他は回転ナデを施し、底部内面はナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色を呈す。22は口径14.2cm、器高4.0cm、高台径8.5cmを計る。底部外面は雑なナデを施す。その他は回転ナデを施し、底部内面はナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、暗青灰色～淡灰青色を呈す。

高坏（20）　皿部と脚部がそれぞれ1点づつ出土している。接合はしないものの、両者は同一個体とみられるため、同一個体として報告する。口径22.2cm、復元残存高9.2cmを計る。全面に回転ナデを施した後、皿部内面にはナデを、皿部外面には回転ヘラケズリを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多

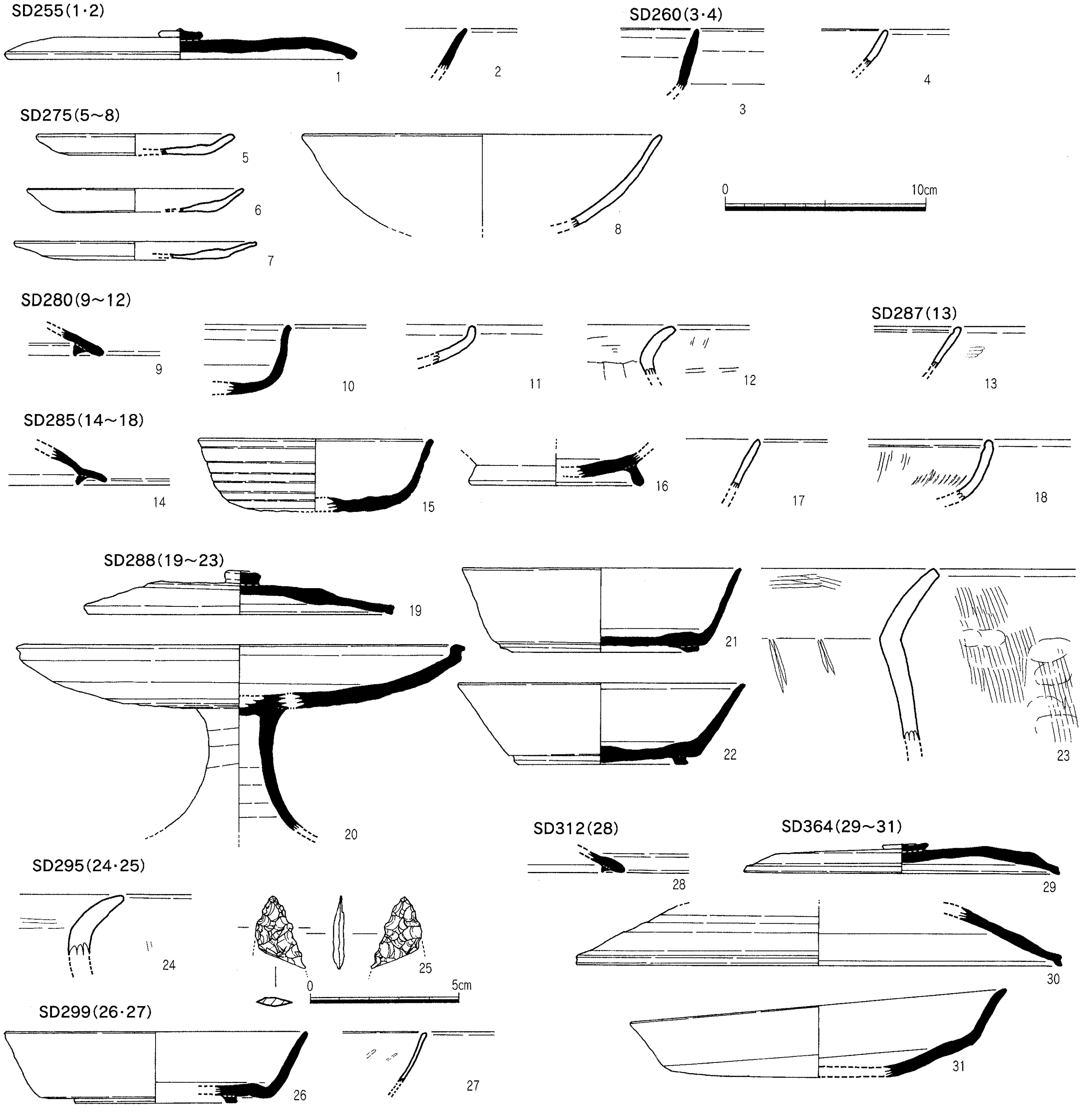


Fig.105　第2遺構面溝出土遺物実測図その1（25は1/2、その他は1/3）

く含む。焼成・還元ともに良好で、灰白色～暗灰色を呈す。

土師器

甕a（23）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。残存高8.3cmを計る。体部内面には縦方向のヘラケズリを施し、口縁部内面には横方向のハケ目を、外面は縦方向のハケ目を施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～3mm大の砂粒を少し含む。また、雲母片・角閃石もわずかに含む。焼成はやや良好で、淡黄褐色を呈す。なお二次的に焼成を受けており、内外に黒灰色を呈した部分がある。

SD295出土遺物（Fig.105）

土師器

甕a（24）　口縁部の破片である。残存高2.9cmを計る。内外にハケ目と見られる調整痕跡がみられる。胎土は0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、明茶褐色を呈す。

石製品

鏃（25）　図の下部が欠損している。残存高2.35cm、図上幅1.7cm、厚さ0.3cmを計る。黒曜石製。

SD299出土遺物（Fig.105）

須恵器

坏c（26）　口径15.0cm、器高3.5cm、高台径11.4cmを計る。全面に回転ナデを施し、内面底部はナデを施す。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く、2～3mmの砂粒を少し含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色～暗灰色～暗灰黒色を呈す。

黒色土器A類

椀（27）　口縁部の破片である。残存高2.5cmを計る。摩耗によりほとんどの調整は不明だが、内面にミガキcが観察される。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、内面は黒灰色、外面は淡褐黄色を呈す。

SD312出土遺物（Fig.105）

須恵器

蓋1（28）　口縁部の破片である。残存高1.1cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少し含む。焼成は良好だが、還元はしていない。淡黄橙色を呈す。

SD364出土遺物（Fig.105）

須恵器

蓋c3（29）　口径15.6cm、器高1.5cmを計る。天井部外面はヘラ切りで、その後全面に回転ナデを施し、天井部内面はナデを施す。胎土は2mm以下の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、内外面とも青灰色～黒灰色～明灰色を、断面は紫灰色を呈す。

蓋3（30）　口縁部の破片である。口径24.0cm、残存高2.9cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、天井部外面は回転ヘラケズリを、天井部内面はナデを施す。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元とも不良で、内外面とも暗灰色～暗茶色、断面は暗茶色を呈す。

皿a（31）　口径18.6cm、器高3.8cm、底径15.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、その後ナデを施す。その他は回転ナデを施し、底部内面はナデを施す。胎土は2mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色を呈す。

SD965出土遺物（Fig.106）

瓦

丸瓦（1）　玉縁部破片。外面は叩きのあとナデ消している。焼成は不良。色調は明灰赤色を呈する。

SD980出土遺物（Fig.106）

SD980暗黒色粘質土出土遺物

土師器

壺（2）　内外面ハケ調整。底部が若干凸状である。底径は11cm。

第2遺構面小穴出土遺物（Fig.107・108）

SX251出土遺物（Fig.107）

新羅土器

蓋（1）　口縁部の破片である。口径11.0cm、残存高1.8cmを計る。内面および口縁端部は回転ナデを施し、外面は二重円の竹管状の文様が押印される。胎土は良好で、1mm以下の細かい砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、内外面ともに暗灰色を、内面のかえり接合部から口縁端部にかけて一部黒灰色を呈す。西暦650年前後に生産された可能性があるとの見解がある。

SX256出土遺物（Fig.107）

須恵器

蓋（2）　口縁部の破片である。残存高2.0cmを計る。推定口径は23.0cm。内外面とも回転ナデを施す。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、青灰色を呈す。

坏c（3）　底部の破片である。残存高2.6cm、高台径10.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切りで、内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色～暗灰色を呈す。

SX257出土遺物（Fig.107）

須恵器

鉢×椀（4）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径12.9cm、残存高4.7cmを計る。口縁部外面には凹線が1条巡る。調整は内外面とも回転ナデを施す。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、灰黒色～明灰色を呈す。

Fig.106　第2遺構面溝出土遺物
実測図その2（1/3）

SX259出土遺物（Fig.107）

金属製品

鉄製手斧（5）　長さ6.15cm、刃先の幅3.8cm、最大厚1.8cmを計る。柄を取り付ける部分は断面四角形の袋状になっている。外法は推定3.2×1.9cm、内法は推定2.65×1.5cmを計る。袋内部は錆により不明。図右側の中心部には縦方向の継ぎ目が観察される。

SX271出土遺物（Fig.107）

須恵器

蓋1（6）　口縁部の破片である。残存高1.7cmを計る。内面に赤色顔料のような付着物が観察される。口縁端部は回転ナデを施し、天井部内面はナデ、天井部外面は回転ヘラケズリとみられる調整を施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰白色を呈す。

SX277出土遺物（Fig.107）

土師器

椀（7）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径16.9cm、残存高6.2cmを計る。内外面とも摩耗により不明な部分が多いが、口縁部外面にミガキが観察されるほか、外面には赤色顔料が塗布されていたことを確認することができる。胎土は0.5～2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、淡橙黄色～淡灰褐色を呈す。

SX281出土遺物（Fig.107）

土師器

皿b（8）　口縁部～体部にかけて残存する破片である。口径16.2cm、器高3.0cmを計る。外面底部は手持ちのケズリを施し、外面口縁部はヨコナデを施す。内面はミガキを施す。外面には赤色顔料が塗布されている。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、角閃石も含む。焼成は良好で、淡灰褐色～淡褐灰色を呈す。

SX292出土遺物（Fig.107）

土師器

甕（9）　口縁部の破片である。残存高4.3cmを計る。摩耗により調整不明。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～3mm大の砂粒をわずかに含む。角閃石あり。焼成は不良で、明茶褐色を呈す。

SX293出土遺物（Fig.107）

土師器

甕a（10・11）　いずれも玉縁状の口縁をもつ破片である。10は体部内面はナデとみられ、口縁部内面及び体部外面はハケ目を施す。11は体部内面はケズリとみられ、口縁部内面及び体部外面はハケ目を施す。いずれも0.5～2mmの砂粒を多く含む。焼成はやや良好で、淡褐黄色～灰黒色を呈す。

SX294出土遺物（Fig.107）

須恵器

蓋3（12）　口縁部の破片である。残存高1.0cmを計る。胎土は0.5mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰褐色～暗灰褐色を呈す。

坏c（14）　底部の破片である。残存高3.6cm、高台径9.0cmを計る。内外面とも回転ナデを施し、底部は内外面ともナデを施す。外面体部と底部の境には回転ヘラケズリとみられる調整が観察される。胎土は0.5～1mmの砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色を呈す。

土師器

坏c（13）　底部の破片である。残存高1.2cmを計る。摩耗がかなり進んでおり調整不明。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成は不良で、明茶褐色を呈す。

SX296出土遺物（Fig.107）

須恵器

壺×瓶（15）　平底で袋状の胴部を持つ器種の破片である。残存高5.2cm、底径8.5cmを計る。外面は摩耗により調整不明。体部内面は強い回転ナデを施す。肩部から上位は欠損しているが、肩部は水平に延びており、その上に何か付着している。破片でしか残っていないので、この付着物が器形に伴うものか、焼成時の付着物かの判断は難しい。ただ、付着物の上面はナデを施している。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含み、2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、内面は灰黒色、外面は淡灰黒色を呈す。

SX310a出土遺物（Fig.107）

須恵器

蓋1（16・17）　16は口径11.6cm、残存高2.9cmを計る。天井部切り離しはヘラ切りで、その後雑なナデを施す。その他は回転ナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～3mm大の砂粒を多く含む。焼成・還元ともに良好で、灰青色～淡灰青色を呈す。S-310a出土。17は口縁部の破片である。残存高1.5cmを計る。口縁端部は回転ナデを施し、天井部内面はナデ、天井部外面は回転ヘラケズリとみられる調整を施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡褐

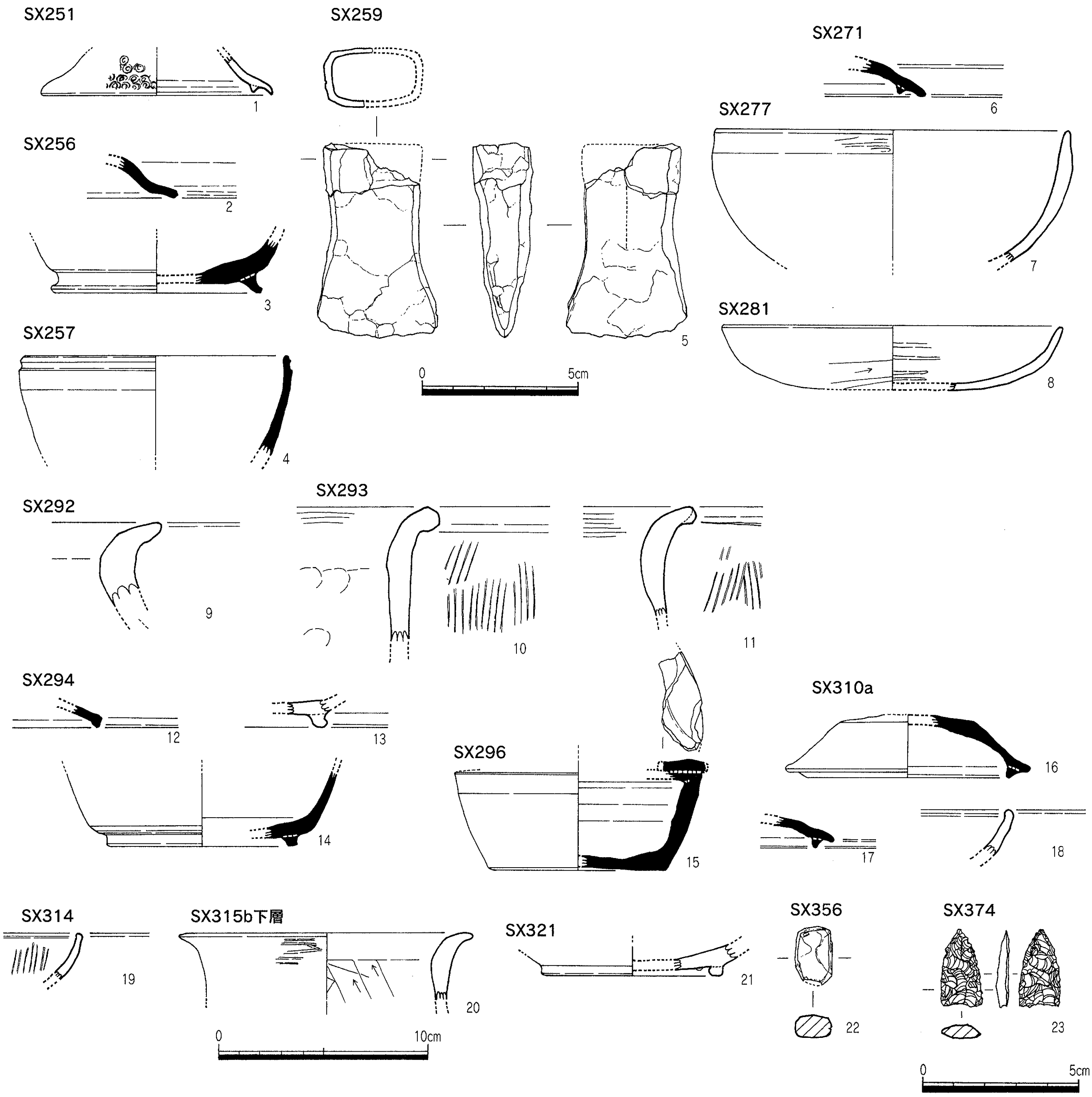


Fig.107　第２遺構面その他の遺構出土遺物実測図その1（5・23は1/2、その他は1/3）

灰色～淡灰白色を呈す。S-310a出土。

土師器

坏（18）　口縁部の破片である。残存高2.2cmを計る。口縁端部内面は沈線状の凹みがある。摩耗により調整は不明。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は不良で、内面は明茶褐色、外面は淡褐黄色を呈す。畿内系。S-310a掘方出土。

SX314出土遺物（Fig.107）

坏（19）　口縁部の破片である。残存高2.2cmを計る。口縁端部内面は沈線状の凹みがある。外面は摩耗により調整は不明だが、内面はヨコナデの後、右上がりの放射状暗文を施す。胎土は0.5～1mmの砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、内面は明茶褐色を呈す。畿内系。

SX315b出土遺物（Fig.107）

土師器

甕a（20）　口縁部～体部上位が残存する破片である。口径13.9cm、残存高3.2cmを計る。体部内面はヘラケズリを施し、体部外面はナデまたはミガキを施す。胎土のきめはやや粗く、0.5～5mmの砂粒、微細な雲母を多く含む。焼成は良好で、内面は明茶色～淡褐色、外面は明茶色～淡茶褐色～暗茶色を呈す。S-315b下層出土。

SX321出土遺物（Fig.107）

灰釉陶器

椀（21）　底部の破片である。残存高1.5cm、底径8.6cmを計る。底部切り離しは糸切りで、高台の近くに目跡がみられる。淡緑灰色で光沢のある釉が内面・体部外面～高台畳付までかかる。素地は灰白色を呈し、所々に黒粒がみられ、やや緻密さに欠ける。焼成は良好である。K-14型式。

SX356出土遺物（Fig.107）

金属製品

不明鉄製品（22）　鉄塊とみられるが製品の可能性もある。図上天地長2.8cm、幅1.8cm、厚さ1.05cmを計る。

SX911出土遺物（Fig.108）

石製品

碁石（32）　白色。長軸長1.6cm、短軸長1.1cm、厚み0.65cm。

SX918出土遺物（Fig.108）

土師器

片口鉢（33）　鉢の片口部破片。外面は摩滅により調整は不明だが、内面はヘラ削りの後がわずかに残る。胎土は0.5～2.5mmほどの白色・半透明の砂粒を多量に含む。粒子の細かい白色雲母も多量に含む。焼成は不良。色調は淡茶灰色。

SX960a出土遺物（Fig.108）

木製品

柱材（38）　柱の最下部である。底面は面取り加工している。上部は腐食しており、芯の部分が欠損している。

SX961出土遺物（Fig.108）

土師器

甕（39）　内外面をナデ調整。胎土は淡白黄色の0.5～1mm大の砂粒を少量含む。雲母、角閃石を含む。色調は内面が淡褐灰色～淡橙褐色、外面は淡橙褐色～暗茶褐色を呈する。

黒色土器B類

椀（40）　高台部破片。

緑釉陶器

椀（41）　口縁部破片。稜椀形式か。胎土焼成が不良のため、釉調が一定ではない。ミガキが粗雑。残存部はすべて施釉されている。京都産、洛西窯か。

第2遺構面その他の遺構出土遺物（Fig.107・108）

SX374出土遺物（Fig.107）

石製品

鏃（23）　長さ2.45cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmを計る。黒曜石製。

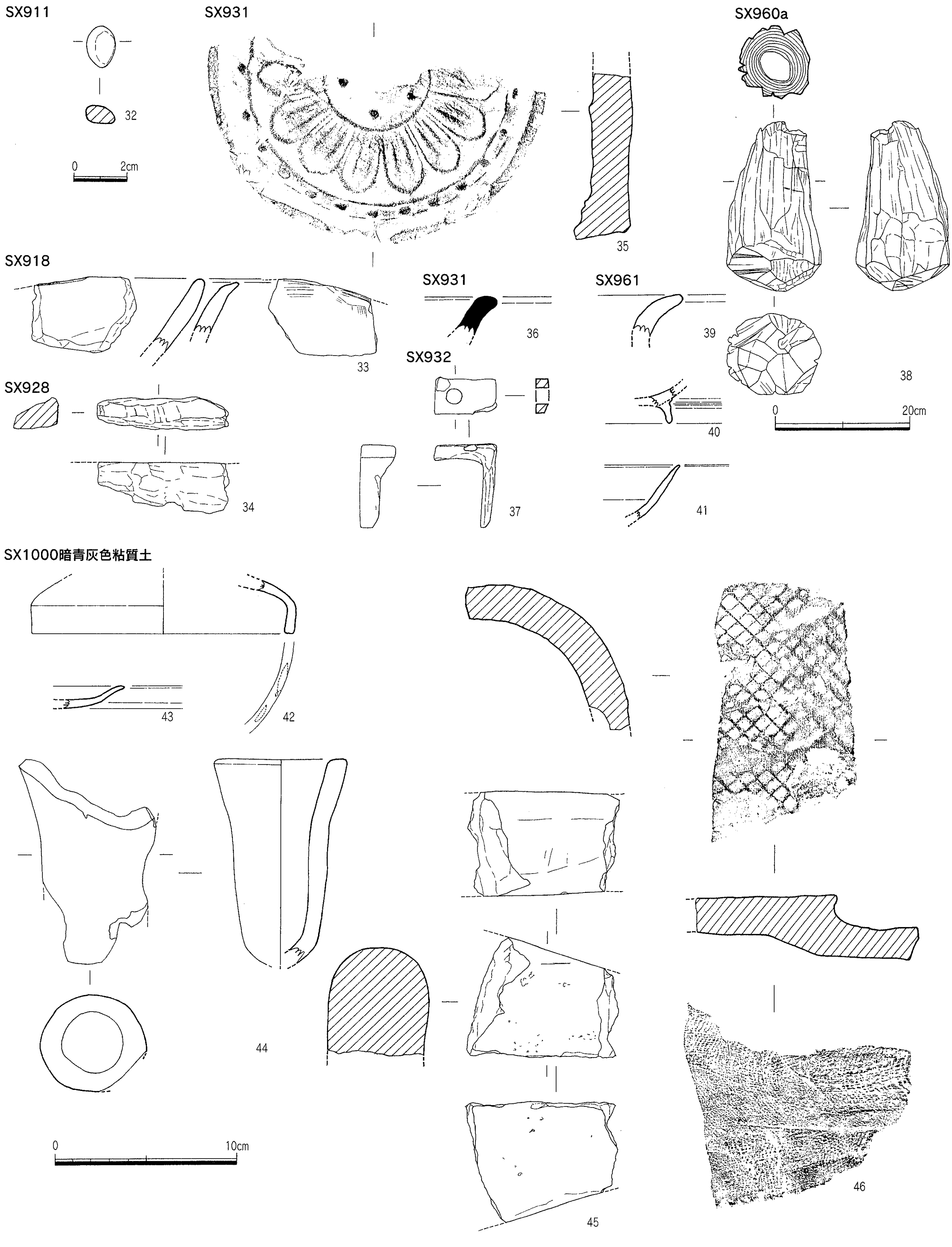


Fig.108　第2遺構面その他の遺構出土遺物実測図その2（32・37は1/2、38は1/8、その他は1/3）

SX928出土遺物（Fig.108）

石製品

石鍋（34）　滑石製石鍋の破片。

SX931出土遺物（Fig.108）

須恵器

甕（36）　口縁部破片。全体を回転ナデ調整で仕上げる。

瓦

軒平瓦（35）　複弁蓮華文。中房には1+4の蓮子を配置する。

SX932出土遺物（Fig.108）

金属製品

不明製品（37）　L字形の金具。上部に直形6mmほどの穴が穿たれている。

SX1000暗青灰色粘質土出土遺物（Fig.108）

青磁

蓋（42）　越州窯系青磁。口径14.4cm、残存器高3cm。口縁端部平坦面に目跡が残る。

緑釉陶器

皿（43）　全面施釉。素地は明白色で緻密。釉調は緑黄色で光沢がある。

製塩土器

壺（44）　口径7.4cm、器高11.2cm。色調は内面、茶褐色、外面は暗茶色～灰色である。胎土は粗く、0.5～7mmの砂粒を多量に含み、雲母片を少量、角閃石を少量含む。焼成は不良で脆い。

石製品

磨石（45）　全面が摩滅により平滑になっている。敲打痕跡あり。重さ465.1g。

瓦

丸瓦（46）　玉縁部破片。外面に格子目叩きあり。内面は布目痕。

(3) 第3遺構面出土遺物

第3遺構面掘立柱建物出土遺物（Fig.109）

SB305出土遺物

SB305出土遺物

須恵器

坏c（1）　口縁部～高台部直上までが残存する破片である。残存高4.2cmを計る。外面体部下位にケズリがみられる他は回転ナデ調整。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、内外面は淡灰黒色、断面は暗赤灰色を呈す。S-305b出土。

坏a×坏身（2）　口径13.1cm、器高3.3cm、底径10.4cmを計る。外面底部はヘラ切り後、雑なナデを施す。その他は回転ナデを施し、内面底部と外面体部下半はナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成・還元ともに良好で、内面は灰青色、外面は暗灰青色、断面は暗茶灰色を呈す。S-305d出土。

土師器

坏（3・4）　3は口縁部の破片である。残存高3.0cmを計る。内面口縁端部は沈線が一条めぐる。摩耗により不明な部分が多いが、外面体部下半は手持ちのナデを施す。胎土は0.5mm大の砂粒を少し含

み、角閃石もみられる。焼成はやや良好。明茶褐色を呈す。畿内系。S-305a出土。

4は口縁部の破片である。残存高3.2cmを計る。内面口縁端部は沈線が一条めぐるが雑なつくりのため不明瞭である。外面体部下半は手持ちのナデを施し、上半は横方向のミガキを施す。内面は回転ナデの後、正放射に近い放射状暗文と右上がりの放射状暗文を二段に分けて施す。胎土は0.5mmの砂粒を少し含む。焼成は良好。淡褐黄色を呈す。畿内系。S-305c出土。

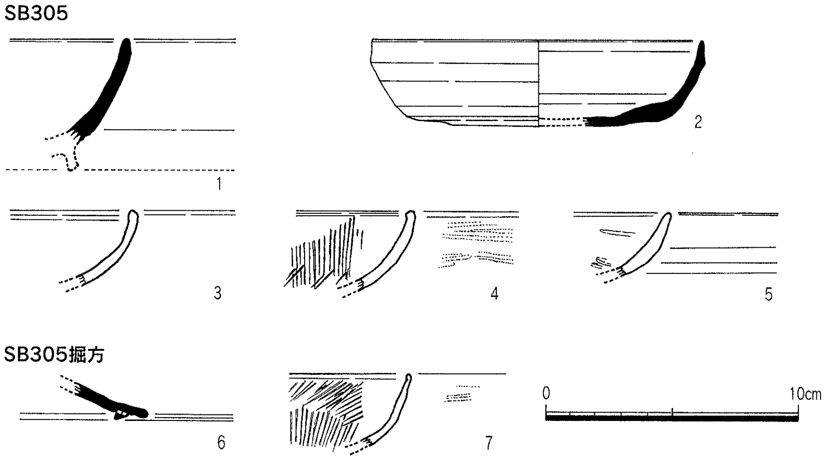


Fig.109　SB305 出土遺物実測図（1/3）

皿b（5）　口縁部の破片である。残存高2.3cmを計る。摩耗により調整不明の部分が多いが、外面体部下半は手持ちのケズリとみられ、内面にも手持ちのミガキがみられる。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。焼成は不良で、明茶褐色～淡橙褐色を呈す。S-305e出土。

SB305掘方出土遺物

須恵器

蓋1（6）　口縁部の破片である。残存高1.5cmを計る。内外面とも回転ナデを施す。胎土は0.5～1mm大の砂粒を含む。焼成・還元ともに良好で、内面は淡灰白色、外面はやや暗い灰白色を呈す。S-305c掘方出土。

土師器

坏（7）　口縁部の破片である。残存高2.9cmを計る。内面口縁端部は沈線が一条めぐる。摩耗により調整不明の部分が多いが、外面は横方向のミガキを、内面は回転ナデの後、右上がりの放射状暗文を二段に分けて施す。胎土は0.5mmの砂粒を少し含む。焼成はやや良好。淡褐黄色を呈す。畿内系。S-305c掘方出土。

第3遺構面小穴出土遺物（Fig.110）

SX392出土遺物

弥生土器

直口壺（1）　口縁部13.5cm、残存高20.4cm、胴部最大径23.4cmを計る。胴部内面は下から上方向の細かいハケ目を施した後、やや太めのハケ目調整を施す。胴部外面は斜め方向の叩き目を施した後、縦方向にハケ目を施す。口縁部はヨコナデを施し、内面の口縁部と胴部の境には、接合に伴うヨコナデ及び指押さえが観察される。胎土は3mm以下の白色砂粒・赤色砂粒を多量に含む。焼成は不良で、内外面とも暗黄白色を呈す。なお外面胴部上位～肩部には焼成に伴う黒斑がある。

(4) 第4遺構面出土遺物

第4遺構面土坑出土遺物（Fig.110）

SK1112出土遺物

須恵器

坏c（2）　底部の破片である。残存高2.3cm、高台径6.0cmを計る。内外面とも回転ナデを施した後、内面底部はナデを、外面体部下位は掻き目を施す。胎土のきめは細かく、2mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、内外面は青灰色、断面は淡赤褐色を呈す。

SK1121出土遺物

土師器

椀（3）　口縁部～体部が残存する破片である。残存高3.75cmを計る。磨耗により調整不明。胎土のきめは細かく、2mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや良好で、橙茶色を呈す。

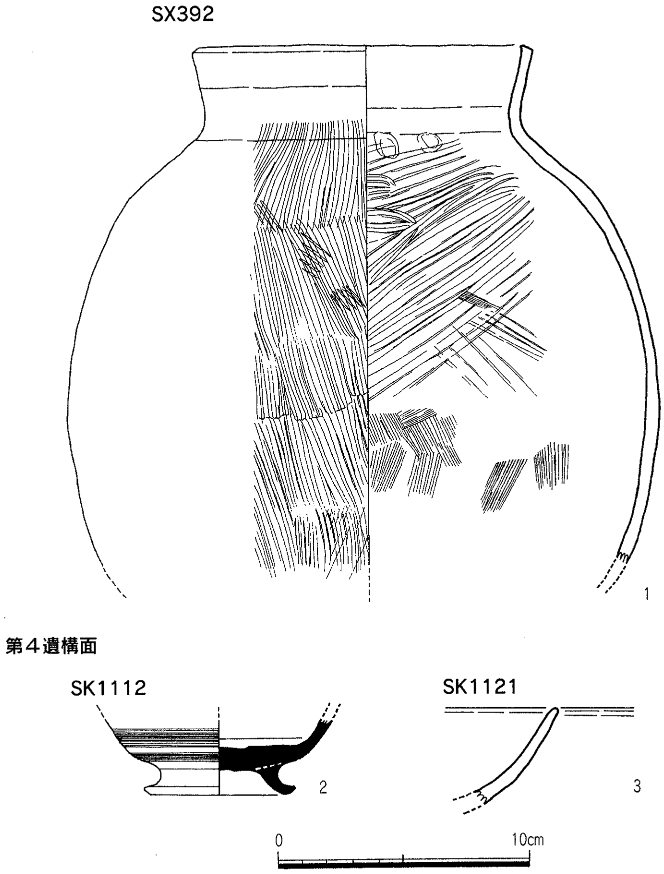


Fig.110　第３遺構面小穴、第４遺構面土坑出土遺物実測図（1/3）

(5) 整地層・堆積層出土遺物

暗灰色粘土上層出土遺物（Fig.111）

土師器

小皿ａ（1・2）　1は口径9.0cm、器高1.2～1.6cm、底径7.9cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。2は口径9.0cm、器高1.3cm、底径7.5cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。

小皿ａ（供膳具計測表(11)を参照）　上述の小皿ａ以外に、口径が1/3以上残存するものが43点出土している。口径8.6～12.0cm、器高0.8～1.6cm、底径5.6～9.4cmを計る。底部切り離しは大半がヘラ切りである。ヘラ切りか糸切りか不明なものは大半がヘラ切りに帰属される可能性がある。

小皿（3・4）　3は平底で口縁端部を垂直に立ち上げるコースターのような形態をもつ。口径8.4cm、器高1.1cm、底径7.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5～2mm大の砂粒を多く含み、淡灰色の1～2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成はやや良好で、淡橙褐色を呈す。京都系。4は平底で口縁端部外側を断面三角形の嘴状に作る形態をもつ。口径8.4cm、器高1.1cm、底径7.7cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、淡灰色の1～2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成はやや甘く、内面は淡褐黄色、外面は淡褐黄色～淡褐灰色を呈し、外面の一部に暗茶褐色を呈す部分がある。なおこのタイプの小皿はこれ一点である。在地の土師器でこの形態のものはなく、外来のタイプとみられる。

小皿（供膳具計測表(11)を参照）　上述の京都系土師器小皿以外に、口径が1/3以上残存するものが4点出土している。いずれもコースターの形状をしている。口径8.2～10.0cm、器高1.0～1.3cm、底径7.4～8.6cmを計る。底部切り離しは大半でヘラ切りが確認されており、確実に糸切りとみられるものは1点である。

坏ａ（5）　口径15.0cm、器高2.4～3.0cm、底径11.2cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。

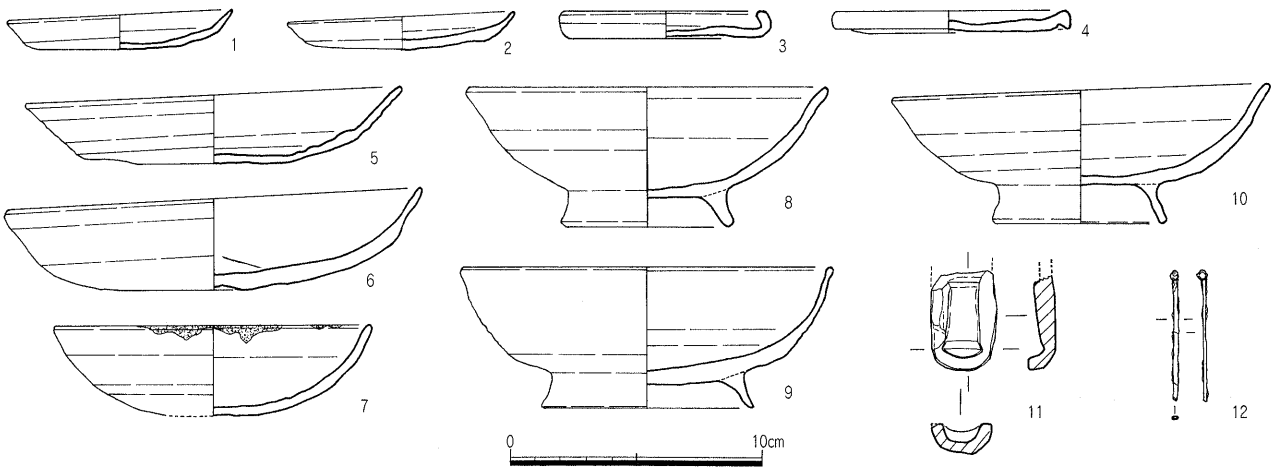


Fig.111　暗灰色粘土上層出土遺物実測図（1/3）

坏ａ（供膳具計測表(11)を参照）　上述の坏ａ以外に、口径が1/3以上残存するものが6点出土している。口径14.0～16.0cm、器高2.3～3.1cm、底径9.8～12.0cmを計る。底部切り離しは大半でヘラ切りが確認される。

丸坏ａ（6）　口径16.6cm、器高3.2～4.0cmを計る。内面にミガキｃを施し、その際に付いたコテ当ての痕跡が一部に見える。底部切り離しはヘラ切り。

丸坏ａ（供膳具計測表(11)を参照）　上述の丸坏ａ以外に、口径が1/3以上残存するものが16点出土している。口径14.4～17.8cm、器高1.9～3.1cmを計る。底部切り離しは大半でヘラ切りが確認される。

椀ａ（7）　口径12.6cm、器高3.6cm、底径8.4cmを計る。内面は回転ナデを施した後、底部に不定方向のナデを施す。底部切り離しはヘラ切り。口縁部には油煙が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。

椀ｃ（8～10）　8は口径14.4cm、器高5.5cm、高台径6.9cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。9は口径14.8cm、器高5.5cm、高台径8.4cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。
10は口径15.0cm、器高5.3cm、高台径6.9cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。

土製品

鋳型（11）　長さ2.1cm・幅約1.5cm程度の、図下端に向かって緩やかに広がる円筒状の製品の半面の鋳型片である。製品は下端より約1.1cm程度の位置から広がりはじめ、最大で径1.65cm程度になる。また、図上端には1.5～2mm程度に突起した突帯が一条巡っている。鋳型は残存長4.0cm、幅2.7cm、厚さ0.5～0.9cmを計る。胎土は精良で、0.5mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、淡灰褐色～淡灰黒色を呈す。

金属製品

ピン状製品（12）　0.2×0.1cmの金属の細長い板を折り曲げた製品である。現代の髪留めのピンが混入したとも考えられるが、これを肯定する理由も乏しいため掲載した。長さ5.2cm。

暗灰色粘土層出土遺物（Fig.112～114）

須恵器

壺蓋（1）　大きなつまみとほぼ垂直に立つかえりが特徴的な蓋である。口縁端部は残存していない

が、さほど大きな口径を有していないとみられる。その形態から壺蓋とみられる。器高は2.8cmを計る。焼成・還元とも良好で、内外面とも暗灰色を呈す。BI45地区出土。

蓋ｃ（3）　天井部の破片である。天井部外面はヘラ切り後、回転ナデを施しており、天井中心部付近にはつまみ取り付けに伴う回転ナデがみられる。残存高1.15cmを計る。天井部外面には「田」とみられる墨書がある。焼成はやや不良だが、還元は良好。明灰色～暗灰色を呈す。BI38地区出土。

坏ｃ（2）　底部の破片である。残存高3.1cmを計る。やや薄手の器壁をもち、細く高い高台を有している。内外面とも回転ナデを施し、底部内面は最後に不定方向のナデを施す。胎土はきめ細かい2.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰色～明灰色を呈す。胎土や形態より、在地ではなく外来の須恵器の可能性が考えられる。なお、これはBH43地区から出土しているが、BJ43のSD445出土の須恵器坏ｃに非常によく似ており、両者は同一個体の可能性がある。

甕（4・5）　4は肩～胴部の破片とみられる。残存高4.5cm。外面には縦方向の条痕状のナデの後、横方向の二条の条痕を施す。内面は回転ナデを施す。胎土は1mm以下の白色・黒色砂粒をやや多く含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰色を呈す。BR60～BS61地区出土。5は胴部の破片である。残存高4.4cmを計る。内面には当て具痕が見え、外面は平行叩きの後、ヘラ書きを施す。ヘラ書きは記号か文字かは不明。胎土のきめは細かく、2.0mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で淡灰色～暗灰色～暗褐色～淡褐色を呈す。BO54地区出土。

土師器

蓋3（6・7）　6は口縁部の破片である。残存高1.8cmを計る。内面および口縁端部外面の一部に漆と見られる黒褐色の付着物がみられる。胎土は0.5mm大の砂粒をわずかに含み、角閃石をわずかに含む。焼成はやや良好で、淡茶褐色を呈す。BPBQ55地区出土。7も口縁部の破片である。残存高2.5cmを計る。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、角閃石をわずかに含む。焼成はやや良好で淡茶褐色を呈す。BPBQ55地区出土。

坏（8～10）　8は口縁部の破片である。残存高2.1cmを計る。口縁部内面は沈線状のくぼみが巡り、右あがりの放射状暗文がみられる。胎土はきめ細かく雲母を少量含む。焼成はやや甘く、内面・断面は橙茶色、外面は橙茶色～淡橙茶色を呈す。畿内産か。BO57地区出土。9は底部の破片である。残存高1.15cmを計る。表面は風化や剥離が進んでいるが、内面底部に暗文がみられる。胎土はきめ細かく1mm以下の砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、橙茶色を呈す。畿内産か。BNBO55～56地区出土。10は体部～口縁部にかけて残存する破片である。残存高3.05cmを計る。内外面とも摩耗しているが、口縁部内面にわずかに沈線状のくぼみが巡る。胎土はきめ細かく、0.5mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。焼成は不良で、内外面は淡茶色～橙茶色、断面は淡茶色～茶褐色を呈す。BNBO55～56地区出土。

坏ａ（11・13）　11は口縁部の破片である。残存高2.7cm。全面摩耗が進んでおり、調整は不明だが、内外面に黒色の煤が付着しており、灯明皿として使用されたことが窺える。BK46地区出土。13は口径15.0cm、器高3.0cm、底径10.9cmを計る。摩耗により調整は不明。焼成は不良で、淡褐黄色を呈す。丸坏の可能性もある。BD33地区出土。

坏ｃ（12）　底部が残存する破片である。残存高2.1cm、底径約7.4cmを計る。内面は回転ヘラミガキとみられる調整を施す。外面は体部底部とも回転ヘラケズリを施しており、高台部も削りだし成形とみられる。胎土はきめ細かく1.0mm以下の砂粒と雲母片を少量含む。焼成はやや不良で、内面は淡茶色、外面・断面は淡茶色～橙茶色を呈す。筑後産。BH38地区出土。

甕（14～16）　14は口縁～体部が残存する甕ａの破片である。残存高4.7cmを計り、口径は推定約

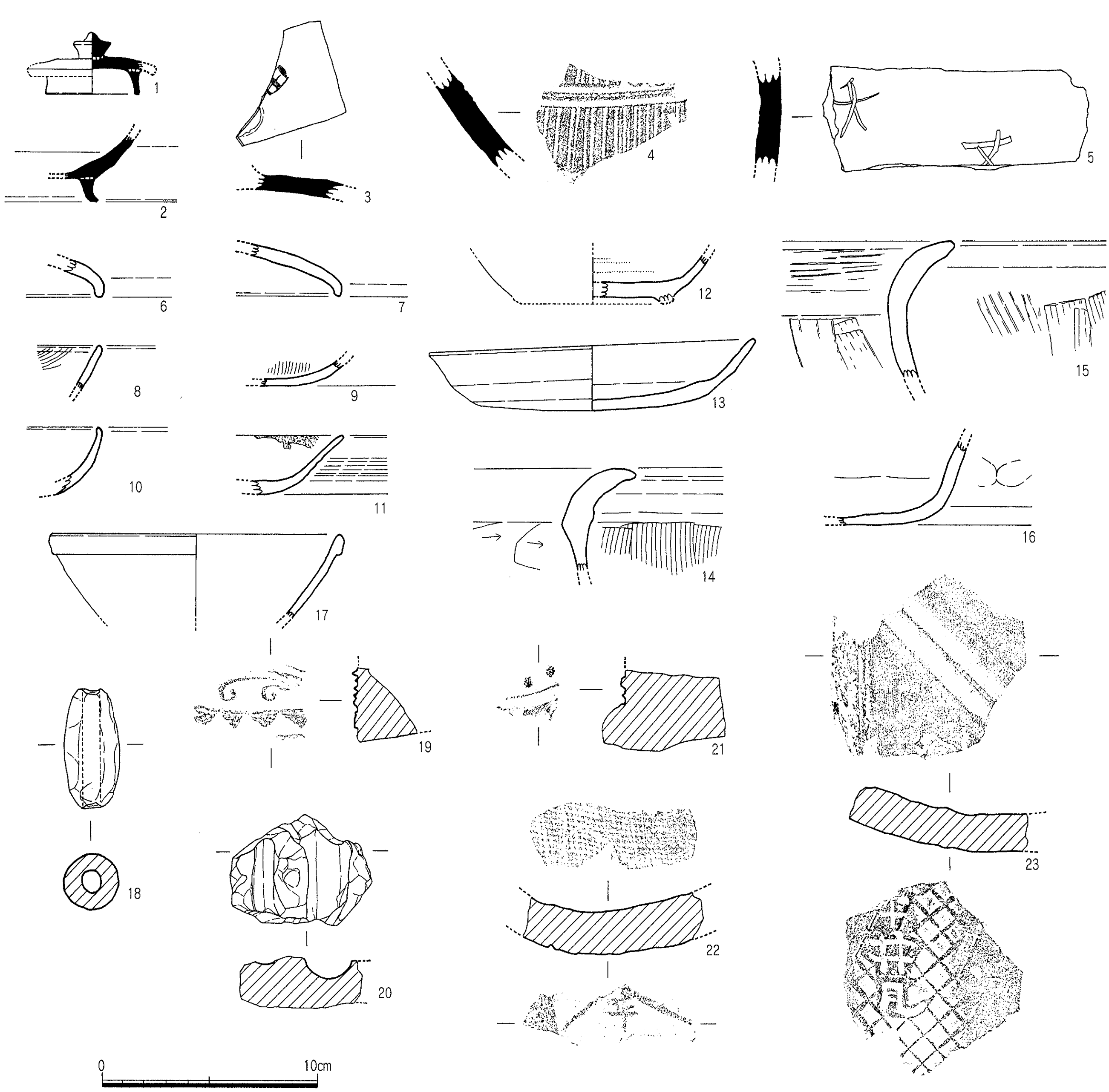


Fig.112　暗灰色粘土層出土遺物実測図（1/3）

27cm程度に復元されそうである。内面体部は横方向のヘラケズリを、外面体部は縦方向のハケ目を施し、口縁部はヨコナデを施す。外面には煤の付着がみられる。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、その他金雲母・角閃石をやや多く含む。焼成は良好で、茶灰色～黒茶色～赤茶色を呈す。BG39地区出土。15は口縁～体部が残存する甕ａの破片である。残存高6.3cmを計る。内面体部は縦方向のヘラケズリを、外面体部は縦方向のハケ目を施し、口縁部内面は横方向のハケ目を施す。胎土は0.5～2mmの白色砂粒を多量含み、2mm以下の角閃石をやや多く含む。焼成は不良で、外面は暗茶橙色～淡茶褐色、内面は淡橙茶白色を呈す。BJ45地区出土。16は底部の破片である。残存高3.8cmを計る。風化のため調整不明の部分が多い。胎土は3mm以下の白色・茶色砂粒を多く含み、角閃石をやや多く含む。焼成は不良で、内面は暗茶灰色、外面は赤茶色を呈す。BR60～BS61地区出土。

白磁

椀（17）　口縁部～体部が残存する破片である。口径13.6cm、残存高3.8cmを計る。Ⅳ類。BG41地区出土。

瓦

軒平瓦（19）　瓦当の底部の破片である。図上天地高3.4cm、幅5.0cm、厚さ2.6cmを計る。内区に扁行唐草文が、外区に鋸歯文がみられる。老司II式。BJ46地区出土。

軒丸瓦（21）　瓦当の一部が残存する破片である。図上天地高3.5cm、幅3.0cm、厚さ5.6cmを計る。連子、及び外側に鋸歯文がみられる。老司式。BN52地区出土。

平瓦（22・23）　22は格子叩きの中に「平」字を陽刻した文字瓦である。I-9類。BG37地区出土。23は格子叩きの中に「平井瓦」と陰刻した文字瓦である。I-2類。BG39地区出土。

土製品

土錘（18）　ほぼ完存する製品である。長さ5.4cmで、断面径2.5～2.6cmを計り、穿孔は径0.8～0.9mm程度である。胎土は2mm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は良好。白灰色～明灰色を呈す。BF36地区出土。

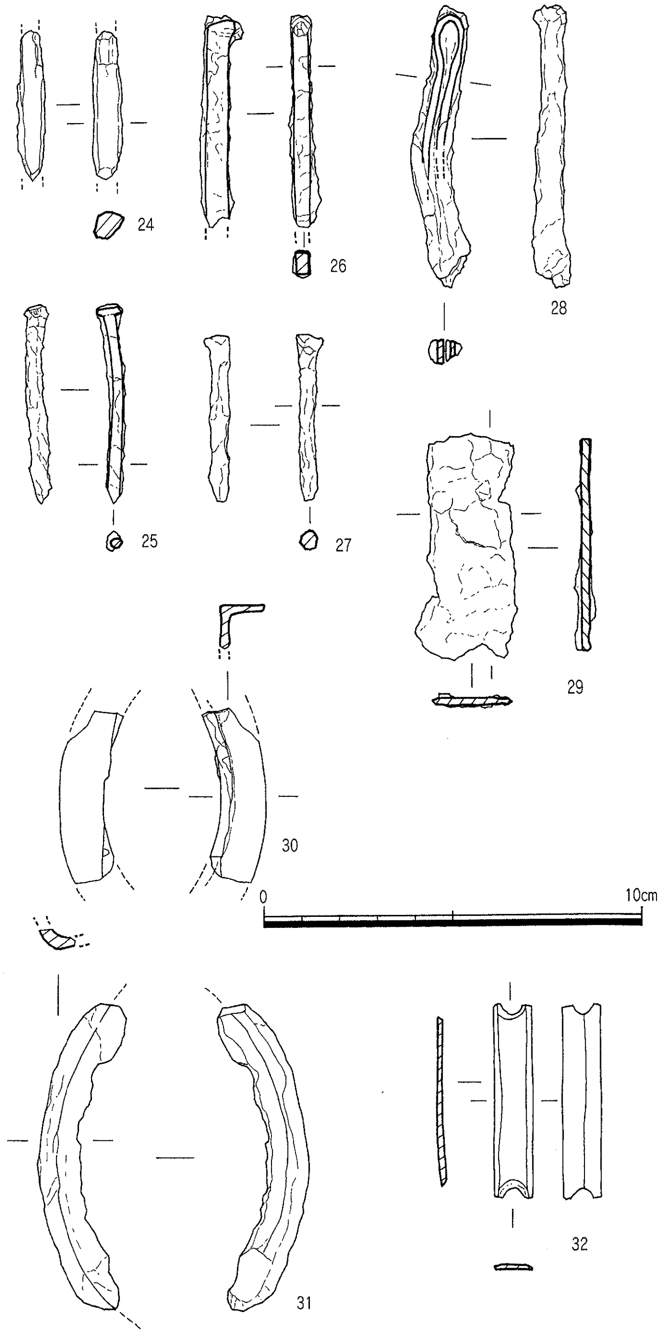


Fig.113　暗灰色粘土層出土金属製品実測図（1/2）

不明製品（20）　図上天地高5.0cm、幅6.5cm、最大厚2.5cmを計る。一面に円筒状のものが当たったような凹みが２ヶ所みられる。凹みは図右側で直径約2.2～2.3cm程度である。胎土はややきめ粗く0.5～5mm程度の白色砂粒を多量含み、粒の細かい白雲母も多く含む。焼成はやや不良で、明茶橙色～淡茶白色を呈す。BT61～62地区出土。

金属製品（Fig.113）

鉄釘（24～27）　24は断面が方形に近い形状をしている。残存長3.9cm、幅0.8×0.7cmを計る。BJ41地区出土。25は現代の丸釘の可能性もあるが判然としない。長さ5.25cm、幅0.25×0.25cmを計る。BH37地区出土。26の断面は長方形を呈す。残存長5.1cm、幅0.35×0.55～0.7cmを計る。BA24地区出土。27は断面が方形に近い形状をしている。長さ4.4cm、幅0.7×0.75cmを計る。BI38地区出土。

ピン状鉄製品（28）　割りピンの形を呈した製品である。ピンの断面は長方形を呈す。残存長7.35cm（図上）、幅0.9×0.15～0.2cm。BO57地区出土。

板状鉄製品（29）　長方形を呈した薄い製品である。長さ5.9cm、最大幅2.5cm、厚さ0.2cmを計る。BV67～68地区出土。

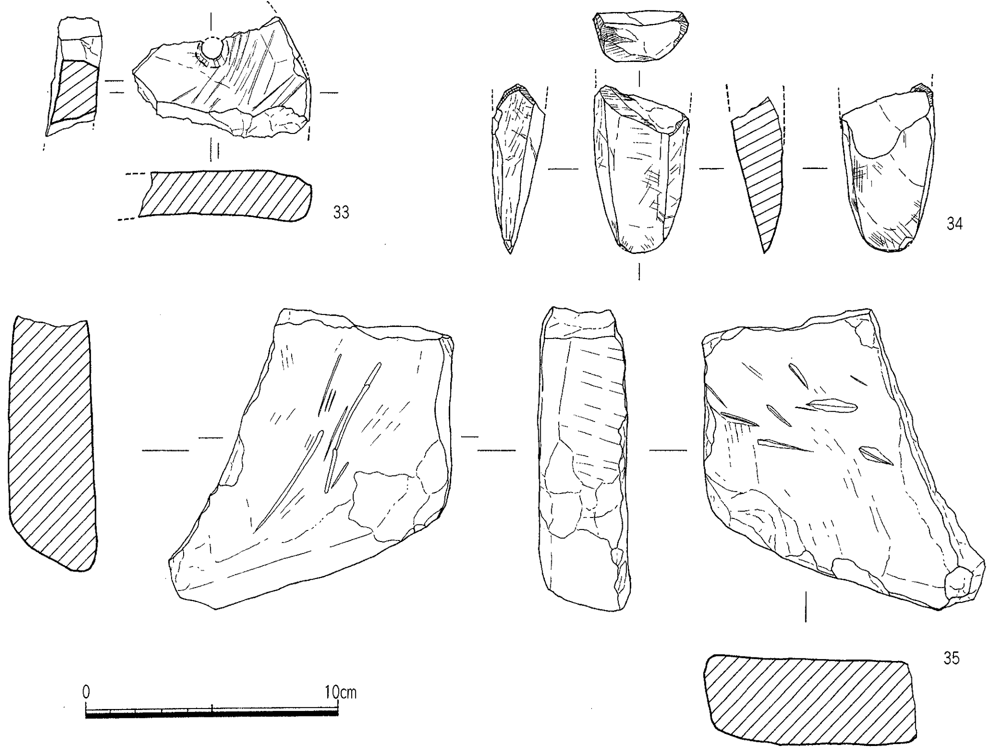


Fig.114　暗灰色粘土層出土石製品実測図（1/3）

不明製品（30～32）　30は断面L字形を呈した製品である。L字の一方は端部まで完存している（以下、完存部とする。）が、もう一方は欠損している（以下、欠損部とする）。完存している部分を水平に置き上から覗くと、円形に巡っているのがわかる。器形製品の口縁部もしくは接地部の一部とみられる。図上計測で、長さ5.05cm、完存部は幅1.2cm、厚さ0.2cm。欠損部は残存幅1.15cm、厚さ0.25cmを計る。BL52地区出土。31も断面がほぼL字形を呈した製品である。L字の両端とも欠損しており、図のように置くと円形に巡っていることがわかる。器方製品の底の端部とみられる。図上計測で長さ8.05cm、厚さ0.3～0.35cmを計る。BE34地区出土。なお、30と31は現状の色や錆の具合が類似している。32は細長い板状製品の完形品で、両端部が半円形に抉れている。片面は周辺部の角をとるように成形しており、反対の面はほぼ平らで中央に筋が一条みえる。鋳造製品とみられる。長さ5.1cm、幅1.0cm、厚さ0.15cmを計る。BL52地区出土。

石製品（Fig.114）

滑石製品（33）　石鍋の再加工品で、穿孔をほどこす。穿孔は径0.8～1.2cm。BWBX68地区出土。

磨製石斧（34）　片刃石斧の刃部である。残存長6.6cm、残存幅3.7cm、最大厚2.0cmを計る。刃部が折損した後、折損部を二次的に使用しており、折損部縁辺に沿って擦痕がみられる。泥岩製。BU65地区出土。

砥石（35）　現状で四面使用している。残存長11.8cm（図上）、最大幅11.2cm、厚さ3.2cmを計る。砂岩製。BD33地区出土。

茶色土層出土遺物（Fig.115）

須恵器

蓋3（1）　口径29cm、残存器高2.5cm。内外面を回転ナデ調整する。還元・焼成ともに良好。

土師器

小皿a（2〜4）　口径9.3〜10.2cm、器高1.3〜1.6cm、底径7〜8.4cm。底部切り離しはヘラ切り。3は煤の付着がみられることから灯明皿として使用されていた可能性が高い。

丸底坏a（5・6）　口径15.2〜15.4cm、器高3.2〜3.4cm。内面にミガキbが認められる。

鉢（12）　脚部の破片。色調は内外面とも淡茶灰色、断面中心部は暗灰色。胎土は5mmまでの白色・茶色砂粒を多量に含む。

緑釉陶器

椀（7）　口径12cm、残器高2.9cm。釉調は光沢のある灰緑色で全体に薄くかかる。素地は明灰色で硬質。

灰釉陶器

皿（8）　残存器高1.4cm、底径8cm。貼り付け高台。内面のみ施釉。内外面に目跡あり。

椀（9）　残存器高1.9cm、底径8cm。内面、外面高台部まで施釉。高台内は露胎。内面に重ね焼きの高台痕跡がみられる。

白磁

皿（10）　XI類。口縁部は輪花状を呈す。

土製品

竈（11）　上部と庇部の接合部破片。色調は内外面とも茶灰色。胎土は3mmまでの白色・茶色砂粒を多量に含む。

土錘（13）　長さ4.9cm、最大幅2.3cm。中央に直径4mmの穴が穿たれている。色調は茶灰色を呈す。

瓦

平瓦（14）　「平井」瓦。I-7b類。

石製品

砥石（15）　全面を砥石として使用。色調は明白色。断面は暗灰色。重さ53.2g。石材は泥岩製。

転用品（16）　滑石製石鍋の再利用品か。上部に直径6×7mmの穴を穿つ。重さ91.1g。

赤灰色土層出土遺物（Fig.115）

土製品

炉壁（17）　直軸長15.4cm、短軸長11.7cm、厚み5.9cm。一部平坦面が認められる。色調は明灰色〜青灰色だが、内面の割れ面は赤茶色〜暗赤茶色を呈する。これは高温を受けたためと思われる。胎土は4mmまでの白色砂粒を多く含む。角閃石をやや多く含む。焼成・還元は共に良好で須恵質に近い。

黒茶色土層出土遺物（Fig.116）

須恵器

蓋4（1・2）　天井部外面には回転ヘラ切り痕跡をとどめ、口縁端部内面をやや凹ませる。

獣脚（11）　これまで記述してきたSE425、SD430出土資料中にみられた獣脚と同一のものと考えられる。

土師器

皿（3・6）　3は口縁部をやや屈曲させるもので、6は直線的にやや外方に開く体部形態を有している。6の底部外面は回転ヘラ切りであった。

小皿a1（4・5）　口径9.6cm・9.8cmを測り、底部外面処理が観察できる5は回転ヘラ切りであった。

坏c（10）　底部から直線的に外方へ開くもので、体部下位は回転ヘラ削りによって器形を整え、内

茶色土層

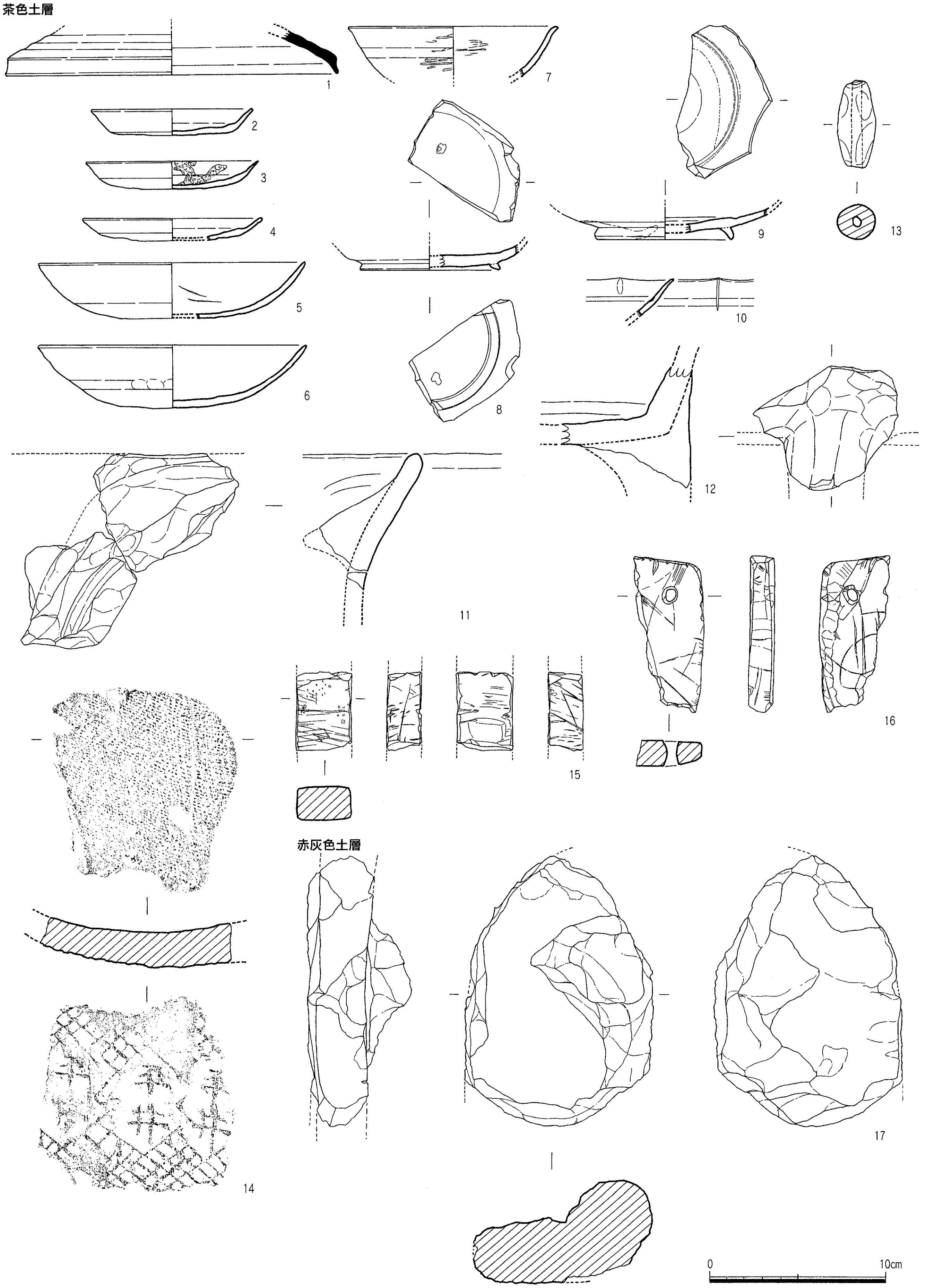


Fig.115　茶色土層・赤灰色土層出土遺物実測図（1/3）

外面ともにやや丁寧なミガキaによって仕上げられている。

甕（7～9）　いずれも頸部の屈曲が顕著ではなく、体部内面は横方向のヘラ削りによって仕上げている。なお、9は胎土中に角閃石を多く含んでいる。

土製品

瓦玉（12）　用途不明で、一部に瓦の名残である縄目叩き痕跡が観察できた。

灰色土層出土遺物（Fig.117～119）

須恵器

蓋（1～7）　1は天井部の破片である。残存高1.9cmを計る。天井部はヘラ切り後回転ナデを施し、その後焼成前にヘラ記号を施す。内面には擦痕がみられる。焼成・還元ともに良好で、明灰色～明灰白色を呈す。BN51地区出土。2は蓋c1で、口径16.2cm、器高3.1cmを計る。天井部は全体に回転ヘラ削りを施す。焼成・還元ともに良好で、淡茶灰色～淡灰褐色を呈す。BM54地区出土。3は蓋c3で、口径13.0cm、器高2.8cmを計る。天井部はヘラ切り後、雑なナデを施す。焼成・還元ともに良好で、暗灰白色～黒灰色～明青灰色を呈す。4は蓋c3で、口径17.6cm、器高1.95cmを計る。天井部は回転ヘラ削りを施す。内面は焼成前にヘラ記号を施す。焼成・還元ともに良好で、明青灰色を呈す。63～64地区出土。5は蓋c1で、口径15.0cm、器高3.8cmを計る。天井部は全体に回転ヘラ削りを施し、焼成前にヘラ記号を施す。焼成・還元ともに良好で、内外面とも茶褐色～淡茶褐色を、断面は淡灰白色を呈す。BN54地区出土。6は蓋4で、口径15.4cm、残存高1.6cmを計る。天井部はヘラ切り後ナデを施す。焼成・還元ともに良好で、淡灰青色～淡灰色を呈す。BN54地区出土。

7はほぼ完存しており、口径12.5cm、器高2.9cmを計る。天井部はヘラ切り後雑なナデを施し、焼成前にヘラ記号を施す。口縁部内面には煤が付着しており、灯明皿として使用されたとみられる。焼成は良好で、還元は不良。明茶白色～明橙茶色を呈す。BP55地区出土。

坏a（8・9）　8は口径12.2cm、器高3.7cm、底径8.4cmを計る。底部はヘラ切り後雑なナデを施し、焼成前にヘラ記号を施す。焼成は良好。断面は灰色に還元しているが、表面は還元しておらず茶褐色を呈す。BO54地区出土。9は口径13.4cm、器高3.3cm、底径10.2cmを計る。焼成・還元ともに良好で、淡灰黒色～暗灰色を呈す。BO54地区出土。

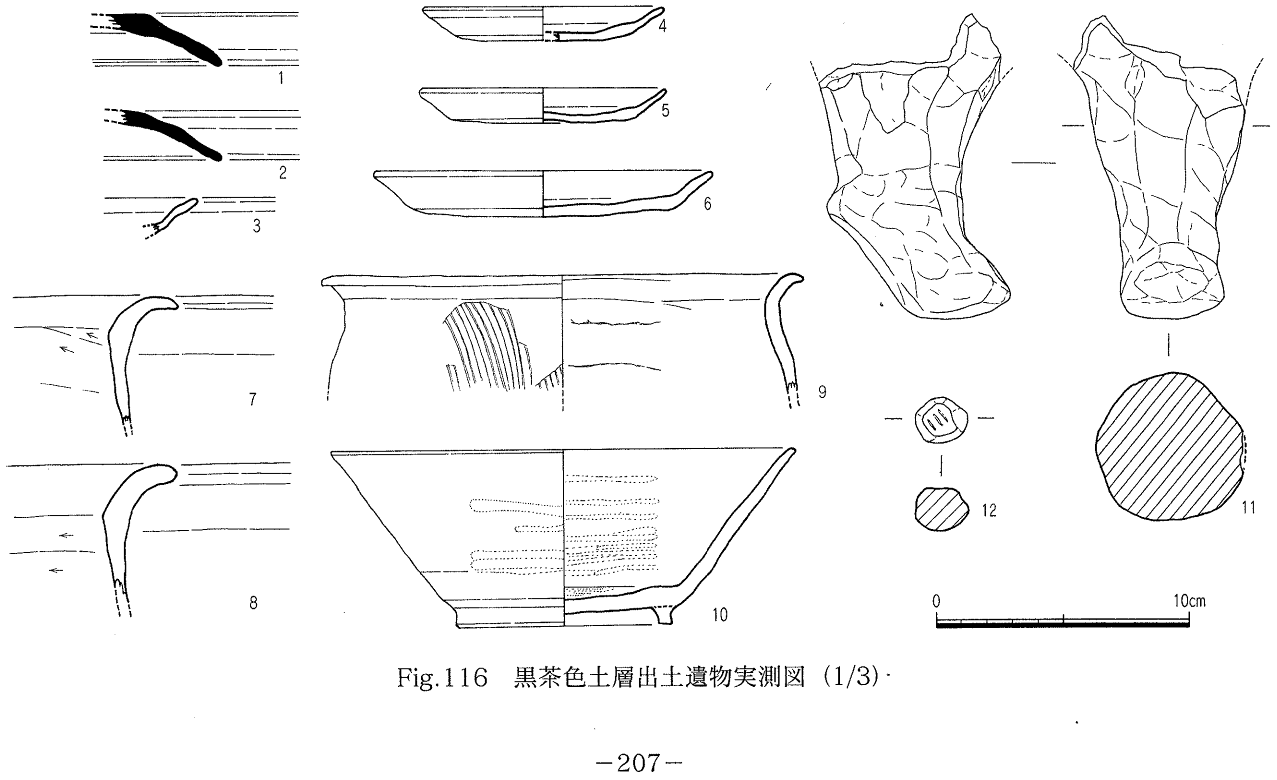


Fig.116　黒茶色土層出土遺物実測図（1/3）

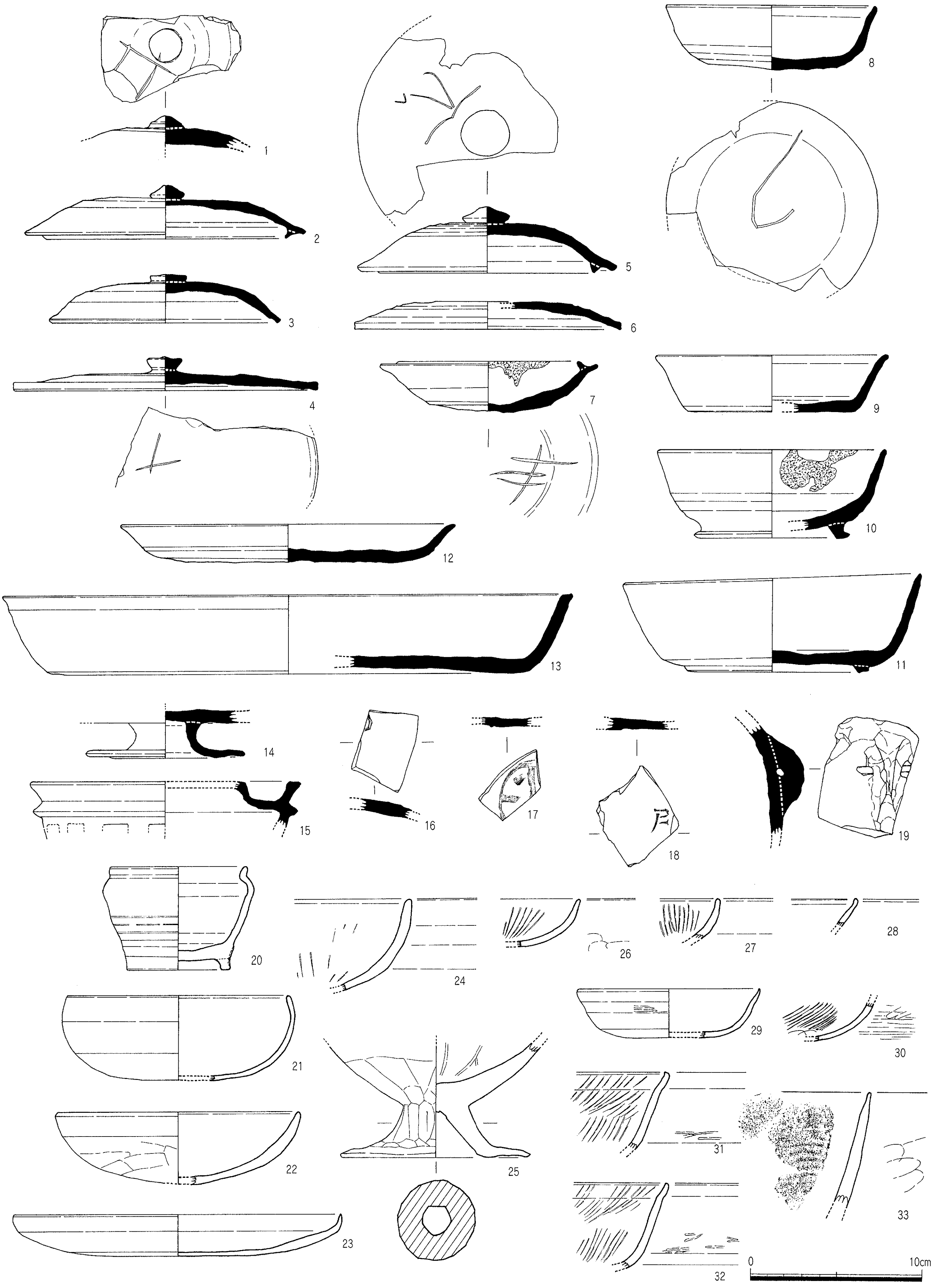


Fig.117　灰色土層出土遺物実測図その1（1/3）

坏c（10・11）　10は口径13.2cm、器高5.1cm、高台径8.9cmを計る。底部と体部の境にわずかに擦痕が認められる。また口縁部内面に黒灰色の付着物がみられるが墨痕かどうかは定かでない。焼成・還元とも良好で、やや暗い灰色を呈す。BL46地区出土。11は口径17.1cm、器高5.3cm、高台径10.3cmを計る。焼成・還元ともに良好で淡灰白色を呈す。BL45地区出土。

皿a（12・13）　12は口径19.2cm、器高2.25cm、底径14.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。焼成・還元ともに良好。黄灰色～淡青灰色を呈す。63～64地区出土。13は口縁端部に水平面をもつ大皿である。口径33.0cm、器高4.1cm、底径27.9cmを計る。外面底部は回転ヘラ削りを施す。その他の調整は回転ナデで、内面底部は回転ナデ後ナデを施す。丁寧な作りの印象を受ける。焼成・還元とも良好で、内面は淡灰白色、外面は淡灰褐色を呈す。BQ59地区出土。

高坏（14）　短脚の高坏である。残存高2.7cm、脚の底部径9.2cm、脚の最小径3.4cmを計る。焼成・還元ともに良好で、灰白色～灰黒色を呈す。BM54地区出土。

硯（15）　円面硯である。口径15.6cm、残存高2.7cmを計る。

供膳具（16～18）　16は蓋または皿の破片であるが、蓋と想定して図示した。図上残存高1.1cm。調整は全体的に回転ナデを施し、断面図の上部に雑なナデがみられる。ここに墨書とみられる墨痕があるが、内容は不明。焼成・還元ともに良好で、暗灰色～淡灰白色を呈す。BL48地区出土。17は坏か皿の底部とみられる破片である。図の底部は回転ヘラ切り後板状圧痕がみられ、その後墨書を施す。墨書の内容は不明だが記号の可能性がある。内面は不定方向のナデを施す。焼成・還元ともに良好で、暗灰黄色～淡灰白色を呈す。BK46地区出土。18は坏か皿の底部とみられる破片である。図の底部は回転ヘラ切りを施し、その後墨書を施す。墨書の内容は不明だが文字の一部とみられる。内面は風化により調整不明。焼成・還元ともに良好で、白灰色を呈す。BS59地区出土。

壺（19）　把手の一部である。図上で残存高6.8cmを計る。態度のきめ刃細かく1mm前後の白色砂粒をやや含む。焼成は良好で、断面をみると還元して灰色を呈している。ただ表面は再び酸化炎があたったようで、明黄茶褐色～暗黄褐色を呈す。45～46地区出土。

土師器

小皿a（34～37）　34は口径9.1cm、器高1.4cm、底径6.3cmを計る。BR59地区出土。35は口径9.8cm、器高1.1cm、底径7.0 cmを計る。BR59地区出土。36は口径10.1cm、器高1.0cm、底径6.8cmを計る。BR59地区出土。37は口径10.4cm、器高1.5cm、底径7.6cmを計る。BR59地区出土。なお、いずれも磨耗しているが底部切り離しはヘラ切りとみられる。

坏a（38・39）　38は口径10.4cm、器高1.8cm、底径7.3cmを計る。底部切り離しはヘラ切りとみられる。BK48地区出土。39は口径13.6cm、器高3.6cm、底径9.2cmを計る。風化しており、調整および底部切り離しは不明。BL50地区出土。

坏（26～32）　26は口縁～体部にかけて残存する破片である。残存高2.8cmを計る。内外面とも磨耗で調整不明な部分が多いが、外面に指頭痕がみられる他、内面には右上がりの放射状暗文が一段みられる。胎土は淡黄褐色を呈した0.5～1mm大の砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で、明茶褐色を呈す。畿内産とみられる。BN54地区出土。27は口縁～体部にかけて残存する破片である。残存高2.3cmを計る。内外面とも磨耗で調整不明な部分が多いが、内面に放射状暗文が一段みられる。胎土は0.5mm以下の白色砂粒をごく少量含む。焼成は良好。内外面とも赤茶色を呈す。畿内産とみられる。BM50地区出土。28は口縁部の破片である。残存高1.6cmを計る。口縁端部内面は、一段凹んでいる。内外面とも磨滅しており調整不明。胎土はきめ細かく0.5mm以下の白色砂粒をわずかに含む。焼成はやや不良で、明茶橙色を呈す。畿内産とみられる。BO55地区出土。29は口径10.6cm、器高2.8cm、

底径8.0cmを計る。比較的薄い器壁で、体部から口縁部に向かって一度わずかに外反し、口縁端部に至って垂直方向につまみ上げて成形する。風化のため調整不明の部分が多いが、外面体部にわずかに横方向の手持ちミガキがみえる。胎土は1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成は不良。内外面とも赤茶色を呈し、外面体部の一部は黒色を呈す。畿内産とみられる。BN53地区出土。30は底部の破片である。残存高2.3cmを計る。内面体部はヨコナデ後右上がりの放射状暗文を施し、内面底部はらせん状の暗文を施す。外面は横方向のミガキがみられる。胎土は1mm以下の砂粒を含む。焼成は良好で、内面は薄茶色、外面は明茶色を呈す。畿内産とみられる。BO55地区出土。31は口縁～体部にかけて残存する破片である。残存高4.4cmを計る。体部から口縁部に向かって一度わずかに外反し、口縁端部に至って垂直方向につまみ上げている。口縁端部内面は一段凹んでいる。内面には右上がりの放射状暗文が二段施されており、外面にはミガキが観察される。胎土は0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内外面とも赤茶色を呈す。BP55地区出土。32も口縁～体部にかけて残存する破片である。残存高5.0cmを計る。体部から口縁部に向かって一度わずかに外反し、口縁端部に至って垂直方向につまみ上げている。口縁端部内面は一段凹んでいる。内面には右上がりの放射状暗文が二段施されており、外面にはミガキが観察される。胎土は0.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内外面とも赤茶色を呈す。BP55地区出土。なお31・32は同一個体の可能性がある。

椀（24）　口縁～体部にかけて残存する破片である。残存高5.3cmを計る。口縁端部内面はわずかに内傾するよう成形している。磨耗により調整不明の部分が多いが、内面には放射状暗文が一段施されており、外面底部には赤色顔料の付着が認められる。胎土は0.5～1mm大の砂粒を含む。焼成はやや良好で、内面は淡茶褐色、外面は淡茶灰色を呈す。在地産とみられる。BL46地区出土。

椀c（40・41）　40は小椀cの底部の破片である。残存高1.1cm、底径4.6cmを計る。風化により調整不明。BP58地区出土。41は底部の破片である。残存高2.7cm、高台径9.0cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。BP53地区出土。

皿b（21～23）　21は口径12.8cm、残存高4.9cm、底径12.0cmを計る。薄い器壁をもち、口縁に向かって内湾している。風化のため調整不明。胎土は1mmまでの白色砂粒をごく少量含む。焼成はやや不良で、内外面とも橙茶色を、断面は赤茶色を呈す。BK48地区出土。22は口径14.1cm、残存高4.2cmを計る。内面底部は磨耗により調整不明だが、外面底部は手持ちヘラ削りを施し、その他は回転ナデを施す。胎土は淡黄褐色を呈した0.5mm大の砂粒をわずかに含み、淡灰褐色を呈した1～2mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、内面は淡褐黄色～褐灰色を、外面は茶褐色～淡褐橙色を呈す。BM54地区出土。23は口径19.0cm、器高2.4cm、底径12.6cmを計る。内外面とも風化のため調整不明。胎土は1mm程度の茶色・白色の砂粒を少量含む。焼成は不良で、内外面とも赤茶色を呈す。BP53地区出土。

高坏（25）　底部の破片である。残存高6.4cm、脚部最小径3.8cm、脚部底径11.0cmを計る。坏部内面は垂直方向に粗いミガキを施し、坏部外面および脚部外面は縦方向のヘラ削りを施す。脚底端部の調整はナデを施す。胎土は1mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成はやや良好で、内外面とも明橙色を、断面は明灰色～暗灰色を呈す。BL50地区出土。

小壺（20）　口径8.0cm、器高6.0cm、高台径6.0cmを計る。内外面とも基本的に回転ナデ調整で、底部は回転ヘラ切り後板状圧痕を施す。外面体部下半は浅い沈線が数条巡る。胎土は0.1～0.5mmの砂粒を少量含み、赤茶色の粒子が若干みられる。焼成は良好で、内外面とも薄赤茶色を呈す。なお体部外面はやや黒色を呈す。BK48～49地区出土。

縄文土器

深鉢（33）　口縁部の破片である。残存高6.7cmを計る。内面は横方向のミガキが観察される。胎土は淡褐灰色の0.5～2mm大の砂粒を多く含み、淡灰色の1mm大の砂粒及び細かい雲母片を少量含む。焼成は良好で、内面は灰褐色～赤褐色、外面は赤褐色を呈す。BM53地区出土。

土製品

紡錘車（42）　直径4.9～5.0cm、厚さ0.4～1.2cmを計る。胎土は3mmまでの白色砂粒を多く含む。焼成はやや不良。淡茶灰色を呈す。BO56地区出土。

土玉（43）　比較的丸く整形した製品のため、土玉ということで報告した。図上において残存長2.2cm、幅3.4cm、厚さ1.8cmを計る。胎土は3mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で須恵質に仕上がり、淡灰色～黒灰色を呈す。BO52地区出土。

鞴羽口（44）　羽口の先端部である。残存長10.3cm、図の下端で直径4.0cm、図の上部で直径5.2～5.6cmを計る。通気孔は、下端が細く直径1.9cm、上端で2.85cm程度である。二次的に被熱を受けており、下端になるほど灰色味が強くなる。下端の通気孔近くには青灰色を呈した錆または金属が付着している。胎土は1mm以下の白色砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、図上端部は橙茶色、中央は白灰色、下端部は明灰色を呈す。BP53地区出土。

瓦類

丸瓦（45）　厚さ1.8cm程度の文字瓦である。格子目叩きを施しており、この中に「佐」字の逆字がみえる。BL48地区出土。

無文塼(46)　直方体の塼の一辺が残存する小破片である。図上残存長8.6cm、残存幅6.6cm、残存厚4.1cmを計る。胎土は0.5～1mm大の砂粒を多く含み、2～3mm大の砂粒をわずかに含む。焼成はやや良好で、淡橙灰色～淡褐灰色を呈す。BN52地区出土。

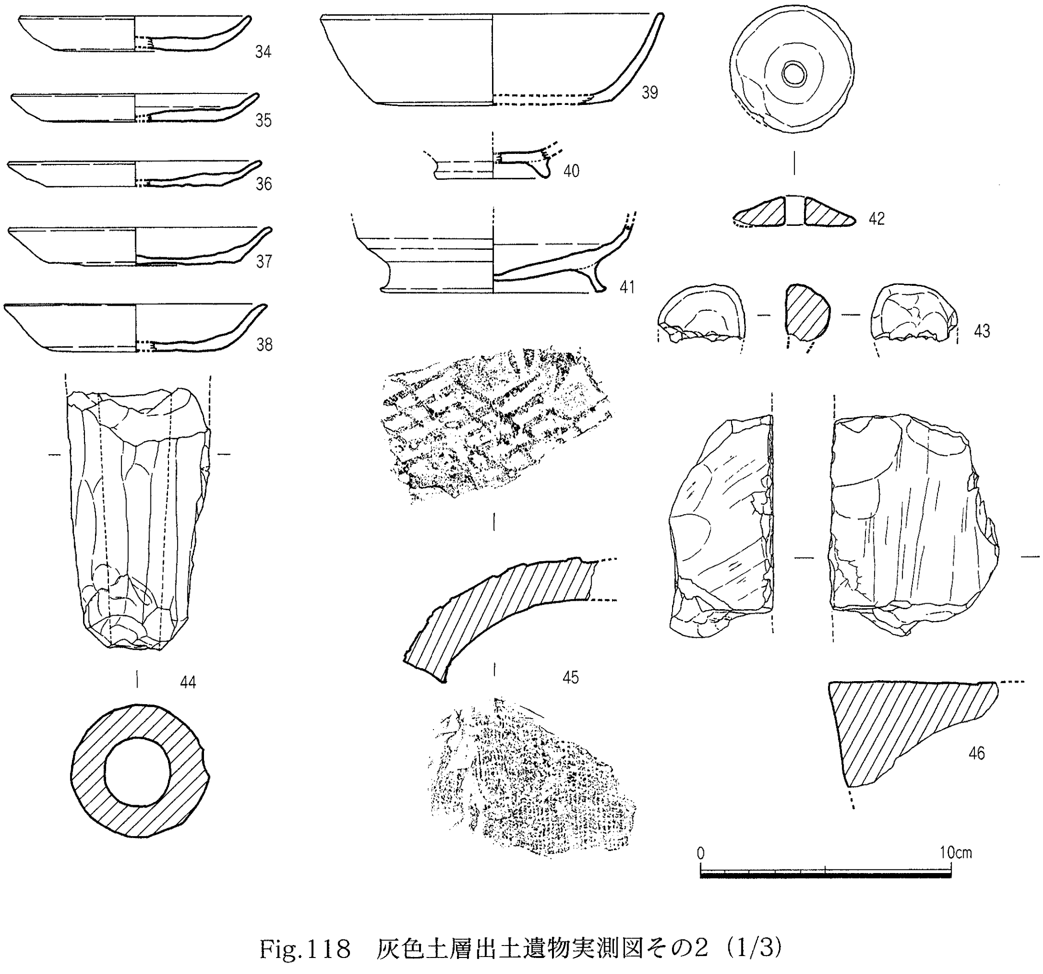


Fig.118　灰色土層出土遺物実測図その2（1/3）

金属製品

(Fig.119)

鉄釘（47・48）　47は断面が方形に近い形状をしている。残存長2.95cm、幅0.75×0.4cmを計る。BK48地区出土。48は断面が方形を呈す。残存長3.2cm、幅0.3×0.35cmを計る。BL50地区出土。

ピン状鉄製品（51）　割りピンの形を呈した製品である。残存長7.2cm、幅0.45cm、厚さ0.15～0.25 cm。ピンの断面は長方形を呈す。BL49地区出土。

不明銅製品（49）　これ自体が製品かどうか不明だが、二箇所に直径0.5cm前後の棒状のものが当たっていたことが窺える。大きさは図上1.4×1.35×0.7cmを計る。BS59地区出土。

不明鉄製品（50）　幅1.2～1.3cm、厚さ0.6cm程度のU字型の板材を中央で二つ折りにしたものである。図上残存長4.4cmを計る。BK49地区出土。

石製品（Fig.119）

石包丁（52）　長さ11.6cm、幅3.7cm、厚さ0.6cmを計る。中央上部寄りに二箇所の穿孔を施す。穿孔はいずれも両面から断面台形状に穿たれる。BO57地区出土。

茶灰色土層出土遺物（Fig.120・121）

須恵器

蓋1（1～5）　3・5をのぞいて天井部はヘラ削りを施す。

蓋c3（6・7）　6は口径14.8cm、器高1.6cm。ツマミ部は欠落しているが貼り付けのためのナデが確認できている。7は口径16.2cm、器高3.35cm。ボタン形のツマミを有する。

坏a（8）　口径13.2cm、器高3.45cm、底径8.2cm。底部切り離しはヘラ切り。

横瓶（9）　口縁部から体部の破片。口縁部と体部の接合部に施される回転ナデの方向が直交しているため横瓶と考えられる。肩部に自然釉がかかる。横瓶は古墳時代の資料が多いが、この資料は奈良時代的な口縁部属性を持つため、奈良時代に作られた可能性が高い。今後の類例を待ちたい。

土師器

坏c（10）　口径17.2cm、器高5.7cm、底径9.15cm。全体的に摩耗していて調整はやや不明瞭。

皿a（11）　口径15.4cm、器高1.8cm、底径10.7cm。底部切り離しはヘラ切り。

坏a（12～15）　12は底部～体部の破片。底部切り離しはヘラ切り。立ち上がり部にヘラ削りを施す。13は口径12.2cm、器高4.1cm、底径7.3cm。底部切り離しはヘラ切り。大宰府編年VIB期。14は口径14.2cm、器高2.75cm、底径7.8cm。15は口径15.2cm、器高3.4cm、底径9.8cm。14・15は大宰府編年XII期か。

坏（16）　口径18cm、残存器高7.8cm。内面器壁は剥離しており、調整は不明瞭だがミガキ痕が若干認められる。外面はヘラ削り調整。

甕（17・18）　17は口径20.2cm、残存

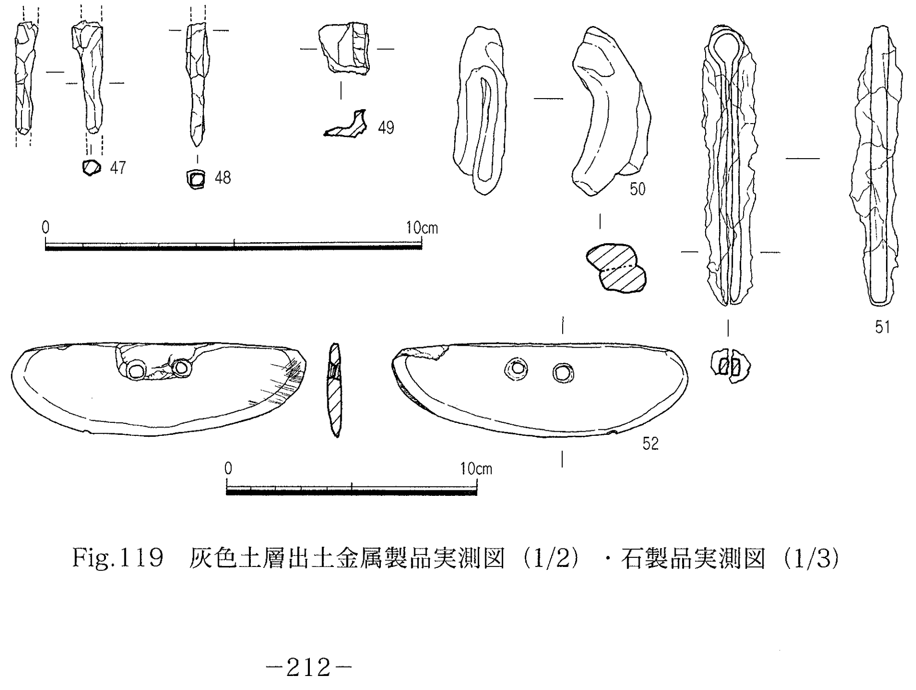


Fig.119　灰色土層出土金属製品実測図（1/2）・石製品実測図（1/3）

器高7.1cm。くの字形口縁。外面はハケ調整、内面はヘラ削り調整。18は口径21.4cm、残存器高7.05cm。内外面ハケ調整。

鉢（19～20・22）　19は口径23.2cm、器高14cm。内面はハケ調整、外面は体部下半分がヘラ削りで、上部はハケ調整。色調は内面が茶白色～淡灰色、外面が淡茶色。胎土は0.5～3mmの砂粒を多く含む。20は口径20.4cm、残存器高8.6cm。外面下部は指押さえで整形して、その後にハケ調整。内面はハケ調整。色調は内外面とも茶灰色。胎土は0.5～1mmの砂粒を多く含む。雲母片も少量含む。22は口縁部近くに穿孔するもの。色調は明茶色。8世紀後半頃のものとみられ、般若寺周辺などの局地的な出土傾向を見せる。

高坏（21）　坏部破片。内外面ともハケ調整。

脚部（23）　脚部破片。脚付皿とも考えられる。残存器高2.85cm。色調は茶灰色を呈す。

製塩土器

焼塩壺（24）　底部の破片。II-a類。

緑釉陶器

椀（25）　底径は7cm。削りだし高台。全面施釉。素地は淡茶色～暗茶色でやや緻密。釉調は暗緑色で光沢のある半透明釉。焼成は良好。内面見込みから体部の境に稜が入る。見込み部に一次焼成痕跡あり。胎土に流紋構造が観察できる資料である。京都産、篠窯。

白磁

皿×椀（26）　未分類資料のため図示した。外面にヘラ描き文様あり。素地は淡灰白色でやや緻密。釉調は茶灰色で光沢のある半透明釉。

弥生土器

壺（29）　二重口縁壺の口縁部。口縁部は内外面ナデ調整。それ以外はハケ調整。

土製品

土錘（27・28）　27は欠損している。残存長4.1cm、最大幅1.85cm。中央をややずれて直径6mmの穿孔がされる。28は長さ6.5cm、最大幅2.3cm。中央に直径5mmの穿孔がされる。

焼土塊（35）　部分的にスサの痕跡が認められる。色調は淡橙茶色～淡茶色を呈す。

石製品

権（36）　秤のおもり。II-a-1類。高さ3.75cm、平面部縦長さ2.6cm、横長さ2.85cm。平面形は隅丸方形、正面形は三角錐型である。上部近くに直径3.5mmの穿孔をする。色調は明灰色で、白色と黒色粒子が目立つ。表面は丁寧に磨いて成形している。石材は閃緑岩。重さ38.1g。

【参考文献】

吉村靖徳「権衡に関する一考察-福岡県内出土権状製品の検討と課題-」九州歴史資料館研究論集20 1995

碁石（37～39）　37は色調が暗灰色。38は色調が暗緑色。39は色調が白色。

石斧（40）　磨製小型石斧。長さ8.6cm、幅4.05cm、厚み1.6cm。石材は緑色片岩。重さ87g。

金属製品

鉄釘（30～32）　30は直線的。31・32は先端が屈曲している。

鉄鏃（33）　現存長は、長さ9.4cm、最大幅2.85cm、厚み0.7cm。先端部が広く開いている。

鉱滓（34）　長さ3.5cm、幅2.9cm、厚み2.3cm。重さ23.8g。

茶黄色粘土層出土遺物（Fig.122）

須恵器

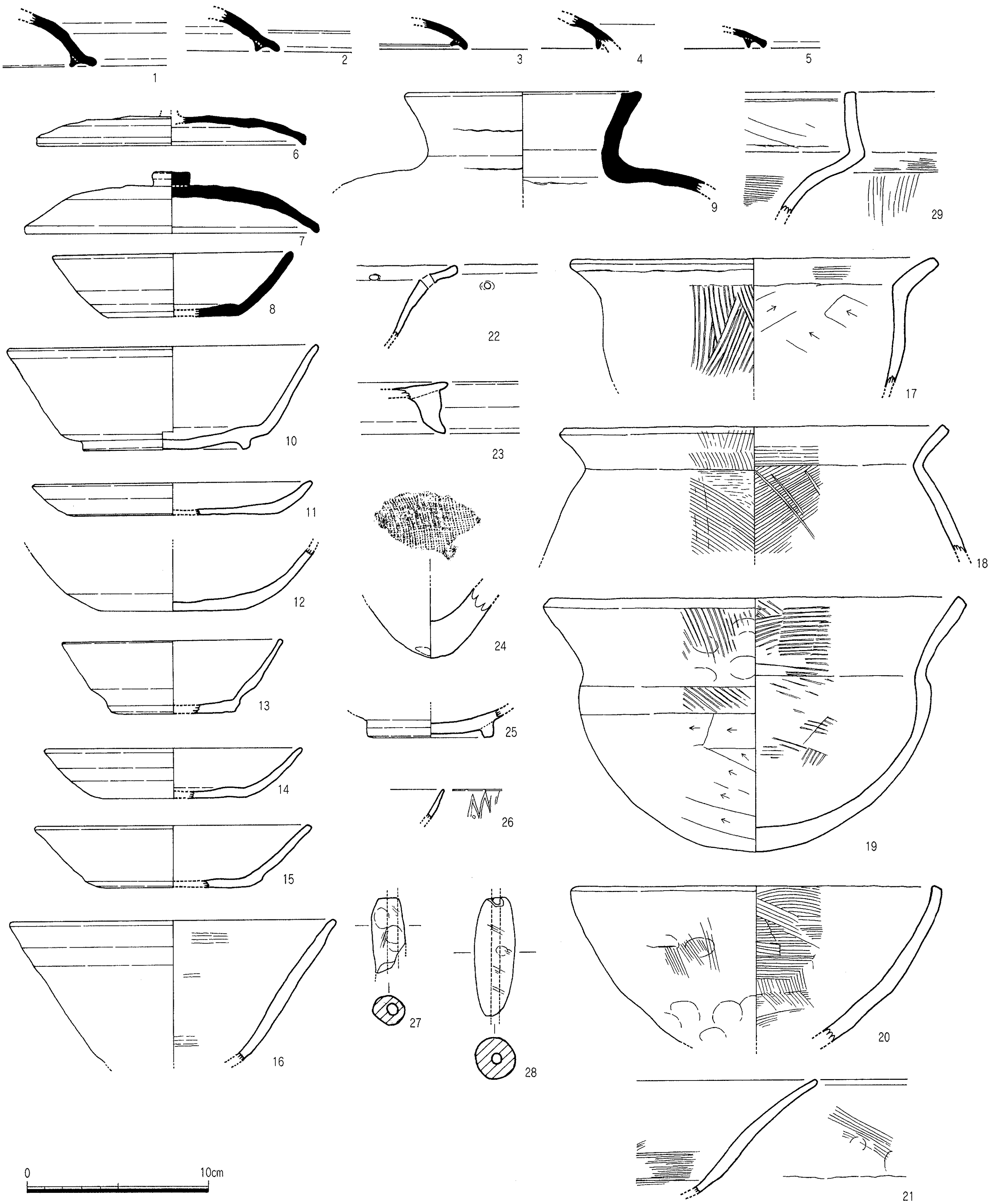


Fig.120　茶灰色土層出土遺物実測図その1（1/3）

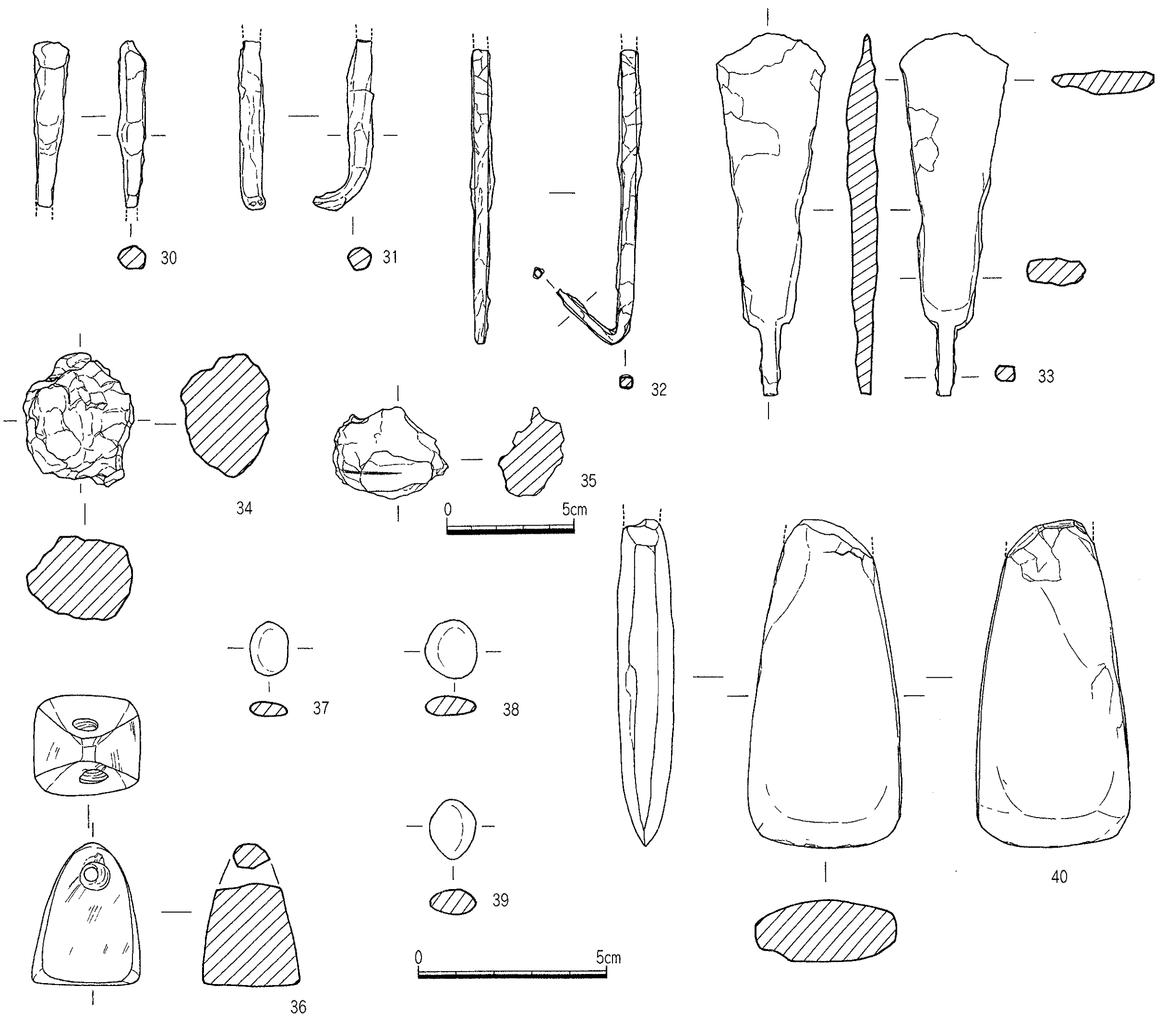


Fig.121　茶灰色土層出土遺物実測図その2（35は1/3、その他は1/2）

蓋1（1）　口縁部の破片である。残存高1.4cmを計る。胎土のきめは細かく1.8mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色～青灰色～灰黒色を呈す。BL50付近出土。

蓋3（2）　口縁部の破片である。残存高1.7cmを計る。胎土のきめは細かく2.2mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、暗青灰色～暗褐色～黒褐色を呈す。BL50付近出土。

茶褐色粘土層出土遺物（Fig.122）

須恵器

坏（3）　口縁部の破片である。残存高2.9cmを計る。胎土のきめは細かく0.5mmまでの白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、淡灰色～明灰色を呈す。BM53地区出土。

高坏（4）　脚底の破片である。残存高1.25cmを計る。胎土のきめは細かく1.0mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、明灰色を呈す。BM53地区出土。

土師器

坏c（5）　底部の破片である。残存高1.0cmを計る。胎土のきめは細かく1.5mm以下の白色砂粒・雲母片を少量含む。焼成は不良で、明橙茶色～淡茶色を呈す。BN53地区出土。

坏（6）　口縁部の破片である。残存高2.5cmを計る。胎土のきめは細かく1.5mm以下の白色砂粒・雲母片を少量含む。焼成は不良で、明橙茶色～淡茶色を呈す。BO54地区出土。

椀（7）　口縁部の破片である。残存高3.5cmを計る。胎土のきめは細かく1.2mm以下の白色砂粒・雲母片を少量含む。焼成は不良で、内外面とも白茶色～淡茶色を呈す。BL48地区出土。

甕（8）　口縁部～体部が残存する破片である。残存高6.3cmを計る。胎土のきめは細かく1.5mm以下の白色砂粒・雲母片を少量含む。焼成は不良で、内外面とも風化しているが、内面体部にはヘラ削りが観察される。二次的に被熱しており、淡茶色～灰茶色～灰褐色～黒色を呈す。BP54地区出土。

瓦類

平瓦（9）　厚さ2.1cm程度の平瓦の破片である。縄目叩きを施す。BN56地区出土。

茶灰色粘土層出土遺物（Fig.122）

須恵器

蓋1（10）　口縁部の破片である。残存高2.2cmを計る。胎土のきめは細かく2.5mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成・還元ともに良好で、暗青灰色～暗灰色を呈す。BM50地区出土。

土師器

皿b（11）　口縁部の破片である。残存高2.0cmを計る。胎土のきめは細かく、1.0mm以下の白色砂粒と雲母片を少量含む。内外面とも回転ナデを施し、底部は手持ちヘラ削りとみられる。焼成は良好で、内面は明橙茶色～白灰茶色を、外面は明橙茶色～淡茶色を、断面は明橙茶色～白灰茶色～灰白色を呈す。BM50地区出土。

施釉陶器

壺（12）　壺とみられる器種の底部の破片である。残存高2.15cm、底径8.7cmを計る。底部外面は平底で、胴部と底部の境では胴部側に胎土がわずかにはみ出している状況が観察される。底部内面は幅広の平たい工具を使って回転ナデを施しており、外面が平底であるのに対して、最底部が内底の中心となっている。胴部は底部から上方に向かって立ち上がり気味に開いている。このことから胴部は長胴となる可能性が高いといえるが、破片資料のため袋状の体部を有する可能性も考えておく必要があろう。素地はきめ細かく、0.2mm以下の白色砂粒をごく少量含む。赤味の強い明茶色～明茶褐色を呈しており、一見したところでは焼成は良好で、硬質に仕上がっているような印象を受ける。釉は外面体部～外面底部に施しており、内面は露胎している。外面体部の釉は均質で比較的薄く施釉しているが、外面底部は薄くハケ塗りをした後ふき取ったような部分もみられる。肉眼では乳白色～白色の釉がかかっているようにみえるが、釉の断面を観察すると、外側は透明で素地に近い部分が乳白色～白色を呈している

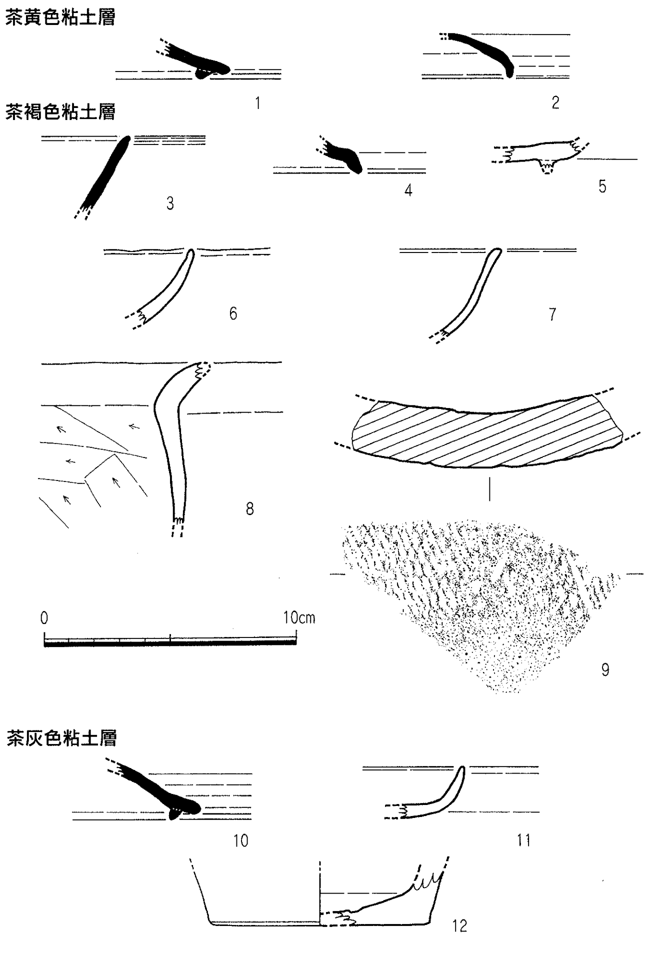


Fig.122　茶黄色粘土層・茶褐色粘土層・茶灰色粘土層出土遺物実測図（1/3）

ことがわかる。BM50地区で出土し、出土層位および共伴遺物から7世紀後期～末に茶灰色粘土層に埋没したとみられる。

産地については、施釉方法等がこれまで知られる中国の輸入陶磁器に類似していることから、中国からの舶載品の可能性が高いが、この時期の陶磁器は国内での類例もほとんどなく、また見慣れない素地でもあり、現在のところ確定には至っていない。

なお、本資料の数少ない類例として、福岡県久留米市の安武地区遺跡群の念仏塚遺跡Ｂ地点で検出した8世紀前葉～中葉の井戸SE71の最下層より出土した施釉陶器がある（『安武地区遺跡群Ⅳ』久留米市文化財調査報告書第72集 久留米市教育委員会 1992年3月）。国内出土資料の中での類似資料はこの一点のみであり、この報告にあたり、久留米市教育委員会にてこの施釉陶器を実見させていただき、当資料と実際に比較する機会を得た。念仏塚遺跡出土資料は内面の釉が深緑色を呈しており、本資料の透明釉とは異なっているものの、素地については、色、素地中の白色砂粒の混じり具合、焼き上がりの状況などほぼ同じという印象を得ることができた。

このほか7世紀代の資料として、東京国立博物館にて法隆寺正倉院伝来の古越州窯系青磁盤口壺（国重要文化財）を実見することができた。素地・釉は本資料とは異なっていたが、外面の底部と胴部の境に胎土がわずかにはみ出している状況や内面底部の調整・内面器形などに類似点があることを観察することができた。また長谷部楽爾氏、今井敦氏に本資料を見ていただいた中で、素地の色、および釉が外側のみ透明化している状況からみて、生焼けの可能性があるというご指摘をいただいた。また、あくまでも可能性の問題だという前提の中で、焼成が進めば古越州窯系青磁と同様の素地・色となることも考えておく必要もあろうという意見もいただいた。今後の国内外での類例の増加を待ちたい。

表土出土遺物（Fig.123・124）

須恵器

蓋ｃ3（1）　口径15.2cm、器高1.3cmを計る。天井部は回転ヘラケズリを施す。内面には墨痕がみられ、表面が平滑であることから、転用硯として利用されたとみられる。BK43地区出土。

壺（2）　体部下半から底部にかけて残存する破片である。残存高3.25cm、底径5.5cmを計る。焼成はやや甘いが、還元は良好。内面は淡灰色、外面は明灰色を呈す。

土師器

蓋ｃ3（4）　口径19.7cm、器高2.65cmを計る。切り離しはヘラ切りで、外面は、天井部と口縁部の境にヘラケズリを施した後、回転ヘラミガキを施す。内面は摩耗のため調整不明。焼成はやや甘く、淡茶色～淡橙色を呈す。

坏（3）　口縁部の破片である。残存高2.25cmを計る。口縁部内面に沈線がみえる。調整は風化により不明。焼成はやや不良で、内外面とも明茶色を呈す。畿内系土師器とみられる。53～56地区出土。

皿ａ（5）　口径18.2cm、器高2.25cm、底径15.6cmを計る。底部切り離しはヘラ切り。風化がすすみ、調整が不明な部分が多いが、口縁部内面には回転ナデがみえる。焼成はやや甘く、内外面とも明茶色を呈す。

白磁

椀（6）　口縁部から高台にかけて残存する破片である。口径17.0cm、器高4.65cm、底径7.4cm。底部をのぞく内外面に施釉されている。釉はわずかに青みを帯びた透明釉で光沢がある。素地はわずかに乳白色を呈し、精選されている。Ⅰ-1類。

金属製品

刃（8）　蒲鉾形をした鉄製品で、刃を有す。図上で天地長6.1cm、幅7.1cm、厚さ最大0.9cmを計る。近現代のカンナの刃とみられる。55地区以西にて出土。

ピン状鉄製品（9）　割りピンの形を呈した製品である。残存長10.2cm、幅1.4×1.1cm。ピンの間に何か挟まっているようにみえるが、腐食により錆が浮いているだけの可能性もあり、判然としない。55地区以西にて出土。

棒状鉄製品（10）　長さ13.3cm、幅1.7×2.2cmを計る。55地区以西にて出土。

不明鉄製品（7）　長方形を呈した製品である。図上で天地長4.2cm、幅4.8cm、厚さ1.4cmを計る。BF35地区出土。

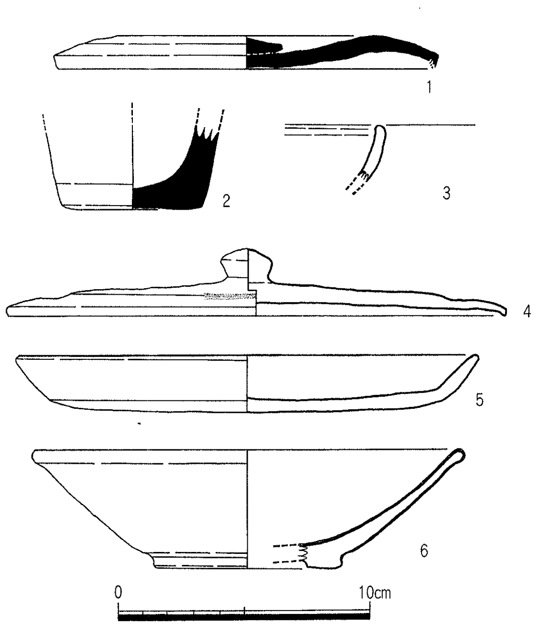


Fig.123　表土出土遺物実測図（1/3）

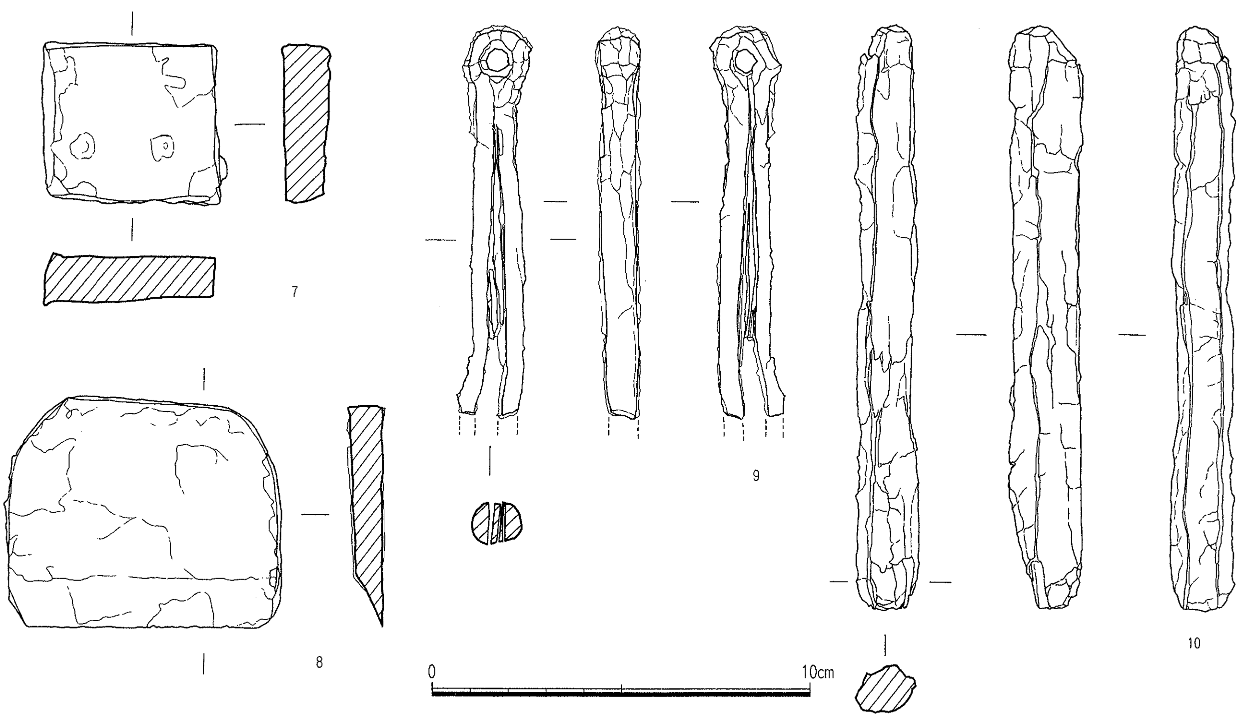


Fig.124　表土出土金属製品実測図（1/2）

4. 自然科学分析・保存処理報告

A.分析の目的

大宰府条坊跡第168次調査において得られた様々な資料のうち、考古資料としての報告をこれまで行ってきた。しかし歴史資料として見た場合、生活自然環境論としての古環境復原、分業論としての生産材の種類同定など、考古資料の表面観察ないしは考古学分析では解明できない諸点を、自然科学分析法という別の目をもって分析することが、総括的な目的である。個々の分析目的に関しては、各報告において記載されているが、委託者としての分析目的をここで整理しておく。

a) 樹種同定

遺構や遺物に使用された材の植物種同定である。視点としては植物種同定という基礎資料の確認があるが、その目的には二つある。植物材という資料の性格上、古環境復原のための資料であること。また材入手経路ならびに入手階層の確認のための資料であるという二点である。この両者の目的は、材の成育諸環境（自然ならびに社会環境）に直結しており、必ずしも遺構構築場の環境ではない。したがってこの点を考慮した上で、各分析結果を読み取る必要がある。

b) 動物種同定

遺構内から出土した動物骨の種同定であり、当時の食生活、生活環境を解明するための素材提供とともに、先の植物材入手環境の解明という分業論の視野に立脚した素材としても目的とし得る。

c) 花粉分析、種実同定

自然古環境の復原を基礎的な目的とし、その背後に外部依存的な生産基盤を有する都市概念にとって、大宰府条坊域がどのような環境におかれていたのか、生産基盤の有無という都市論の視点からの素材提供を意図している。ただし、邸宅内耕作行為を想定した場合、栽培種の存否が一次資料となるとは思えない。したがって、その量を視点として持つ必要がある。

d) 材質（鉱物種）同定

土坑内から出土した灰白色粘土の材（鉱物種）を同定する。この粘土の質を分析することで、何らかの生産行為の有無を考える素材提供を目的としている。都市内における生産行為の有無へと論展開を意図するが、生産行為者の背景が関ってくることから、その規模、生産背景の検討など、この他に整えるべき材料は多々ある。ここではこれらの問題を考える上での基礎資料提供でしかない。

e) 土器胎土分析

大宰府条坊域およびその周辺において出土する古代から中世の土師器について、胎土の肉眼観察から3種存在することが明らかとなっている（中島、1999）。具体的には1)角閃石を多く含むもの、2)白雲母を多く含むもの、3)・1)・2)以外の花崗岩風化生成物からなるものである。これら三種の大宰府内での出土量は感覚的なものでしかないが、これまでの経験からは、3)＞1)＞2)であると考えている。これらの生産地については確定的な情報が得られておらず、これまでのところ角閃石を多く含む1)は、胎土属性のみならず形態、製作属性を総合して考えて筑後国の中で考えることができる。また、その量の多さ、胎土構成物から「在地」生産品として考えているものに3)がある。残る2)については、花崗岩風化生成物でも生じるため生産地が不明であり今後の課題である。これらの製品の産地についての情報を確定することは、分業論としての土器のあり方から始まり、これらの土器を持ち込んだ人々の移動背景、さらに移動してきた人々の活動目的から導き出される別次元の分業論など、背後にある歴史事象へ論を昇華するための基礎作業となる。特に今回実施した胎土分析方法は、混入鉱物種ならびに粒度、形状か

ら群構成を考察するものであり、製作者の範型を推察する上で貴重な情報を得ることができる。今回報告する古代における土師器の他に、弥生土器の分析も行っており、自然環境としての太宰府における胎土構成物質の原料土傾向を知る上で、資料の蓄積が必要と考えている。

以上が各分析を実施した目的であるが、埋蔵文化財から得られる様々な情報を的確な方法を用いて引き出してやる方法を練磨する必要がある。一つは調査者、報告者の学問的蓄積であり、今一つは分析解釈手法の練磨である。このような視点に立脚して自然科学分析法を導入してきているが、自然科学分析手法に対する理解がブラックボックス化するのではないかとの危惧も抱いている。各分析手法の有効性と限界を十分に認識し、得られる情報の質を常に把握しながら進めてゆくことが必要であると感じている。これは、「自然科学分析法への懐疑の念」という低い階層から導き出されるものとは質が異なっており、また妄信とも異なっている。しかし日々進歩し続ける分析法の改善に対して、一人の知識の蓄積量は比較にならないほど極微量である。また根底にある歴史資料としての活用、活用のための情報処理・集積が埋蔵文化財行政の一つの任務であると理解したとき、目的の中で記載してきた分業論、都市論、環境論など様々な視点からの分析法の選択を行う必要があり、単に興味本位での分析は慎まなければならない。

【引用文献】

中島恒次郎（1999）「古代土師器の生産と流通　－大宰府条坊域内使用土師器－」
『特定研究　古代土師器の生産と流通』奈良国立文化財研究所

f）漆塗膜分析

市が行ったこれまでの発掘調査では、約70点あまりの漆製品が見つかっているが、平安時代のものと考えられるものはごくわずかで、今回出土した漆皿2点も当該時期の貴重な資料である。これらについて製作工程や材料、劣化状態等の情報を得るために塗膜構造の分析を試みた。

g）材質分析

本調査では、肉眼観察だけでは材質やその用途が不明な遺物が複数出土している。これらが何であるかを知る手がかりとして、蛍光X線分析による材質分析を行った。

B.分析

以下、各項目に沿って報告する。

a）樹種同定

ここでは、SE470出土曲物・SE490井戸構築材・SE050出土漆皿の木地、SE460出土漆皿の木地を分析している。

a-1.S-470出土材の樹種同定(Pla.12、a-1.樹種同定)

1.目的

平安時代中期末（整理の結果平安時代後期と考えられる）のS-470から、曲物の可能性が指摘されている木材が出土した。その樹種を知り、過去の用材選択の例と比較検討することを目的とする。

2.方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3.結果

試料は、仮道管を主とすることから、針葉樹である。観察した限りでは、樹脂道が認められないことから、少なくともマツ科のカラマツ・マツ属・トウヒ属・トガサワラは除外される。しかし、その他の特徴については、保存状態が良好でないために観察できず、種類の同定には至らなかった。なお試料は、観察結果から板目板である。

4.考察

曲物の可能性がある木材は針葉樹であった。遺跡から出土した曲物には、針葉樹のヒノキ属やスギが比較的多く確認されている（島地・伊東,1988；伊東,1990）。今回の結果は、針葉樹である点で曲物の用材選択と調和的であり、試料が曲物である可能性を支持している。しかし、樹種の同定に至らなかったため、詳細は不明である。

【a-1引用文献】
島地　謙・伊東隆夫編（1988）　日本の遺跡出土木製品総覧.296p.,雄山閣.
伊東隆夫（1990）　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II.
木材研究・資料,26,p.91-189.

a-2.樹種同定（Tab.1　Pla.13、a-2.樹種同定）

1.目的

平安時代の井戸（S-490）構築材の樹種を調べ、当時の木材利用に関する情報を得る。

2.試料

試料は、平安時代の井戸構築材である。井戸は、内部の枠木で板を押さえる構造となっている。樹種同定試料は、枠木の内、上下の横木から各１点と、板材２点が採取された。各試料の詳細は、樹種同定結果と共にTab.1に記した。

3.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール, アラビアゴム粉末, グリセリン, 蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

4.結果

樹種同定結果をTab.1に示す。試料は、針葉樹１種類（スギ）と広葉樹２種類（サカキ・ユズリハ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

Tab.1　樹種同定結果

調査区	遺構名	時代	用途	試料名	部位	樹種
BG38	S-490	平安時代	井戸構築材	立板東	板材	スギ
				横上①	横木(上)	ユズリハ属
				横下③	横木(下)	サカキ
				横板北	板材	スギ

・スギ（*Cryptomeria japonica*(L.f.)D.Don）　スギ科スギ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、接線方向に配列する。樹脂細胞の水平壁は平滑となるものが多い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・サカキ（*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend.Sieb.et Zucc.）　ツバキ科サカキ属

散在孔で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および２～３個が複合し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、単列、１～20細胞高。

柔組織は散在状。

・ユズリハ属（*Daphniphyllum* sp.）　トウダイグサ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、単独および２～３個が複合する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性II型、１～２細胞幅、１～20細胞高で、時に上下に連結する。柔組織はターミナル状および散在状。

5.考察

井戸の横板には針葉樹のスギ、横木には常緑広葉樹のサカキとユズリハ属が使用されていたことが明らかとなった。横木は、発掘調査所見では両端を加工した細い丸木である。樹種が複数であること等を考慮すると、これらの木材は周辺で入手可能な種類を利用した可能性がある。

一方、板材は板状の加工が比較的容易なスギが利用されている。同時期の井戸材には、ヒノキ属と共に比較的よく利用されている種類でもある（島地・伊東,1988；伊東,1990）。今回の結果についても、板状の加工が容易なスギを意図的に使用したことが推定される。

今回の調査では、井戸構築材のうち枠木と板材とで用材選択が異なっていた可能性がある。しかし、井戸構築材は今回同定した以外にも多数出土している。そのため、今後これらの樹種も明らかにした上で、樹種構成の詳細を明らかにする必要がある。

【a-2.引用文献】

島地　謙・伊東隆夫編（1988）　日本の遺跡出土木製品総覧.296p.,雄山閣.

伊東隆夫（1990）　日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途II.
木材研究・資料,26,p91-189.

a-3.樹種同定（Pla.12、a-3.樹種同定）

1.目的

平安時代の漆製品の木地の樹種を調べ、当時の木材利用に関する情報を得る。

SE050灰黄色粘土出土　皿１点（9世紀）　(Fig.52-29)

SE460出土　皿１点（11世紀末）　（写真をCD-ROMに収録）

2.方法

樹種鑑定に必要な木口面（横断面)、板目面（接線断面)、柾目面（放射断面）の3方向の切片を、カミソリを用いて作製した。切片はサフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤を用いて永久プレパラートとした後、生物顕微鏡で観察した。針葉樹では早材から晩材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無および配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等を観察し、同定をおこなった。広葉樹では道管の大きさや配列状態およびせん孔の形態、柔組織の分布や結晶構造の有無、放射組織の形態等を観察しおこなった。

3.結果

2点とも、ケヤキと同定された。

ニレ科ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

木　口　面：広葉散孔材で道管は多数分布する。道管の複合は4個以下である。放射組織は幅の狭いものと列幅の広いものが見られる。

柾　目　面：道管の穿孔は単穿孔と階段穿孔である。

板　目　面：放射組織は単列のもの、2～数列のもの、幅の広い広放射がみられる。

分　　　布：北海道（南部)、本州、四国、九州（温帯）

性質・用途：日本特産の落葉高木で、通常樹高は20～25m,胸高直径は60～70mである。辺・

心材ともに淡紅色である。

材は堅硬、緻密、靭性があるが保存性は低い。

器具、家具、土木、ろくろ細工、漆器などに利用される。

b）動物種同定

ここでは、SE025・SE035・SE050・SX086・SX094（SB020の一部）・SX108・SE470・SE490出土動物骨の同定を行っている。

b-1.S-35出土骨の同定

1.目的

8世紀～9世紀初頭と考えられるS-35遺構覆土からは、動物や魚骨などの骨が出土した。今回の調査では、これらの骨の種類を明らかにし、当時の動物に関する情報を得る。なお骨の同定は金子浩昌氏が行った。

2.試料・方法

試料は遺構覆土より出土した骨類で試料番号1～12の袋に分類されたものである。各試料を肉眼および実態顕微鏡下で観察しながら種類の同定を行った。

3.同定結果

出土した骨は、魚類１種と、獣類３種に同定された。以下に同定された種と部位について示す。

＜魚類＞

・マダイ（試料番号11・12）

試料番号11：前上顎骨右。大型のもので、全長61.0mm。

試料番号12：遊離したタイの歯と骨片

＜獣類＞

・ウマ（試料番号2）

試料番号12：中手骨。遠位端部分のみを残すもので、折れたような破損痕と、切痕らしい傷がみられる。

・イノシシ（試料番号3）

試料番号3：左下顎骨片。M1～M3が残植する部分の体部が残り、骨体は破損する。臼歯の咬耗は著しく、M1は咬面のエナメル質は失われ、M2・M3の咬面部分のエナメル質も部分的に残るのみである。

試料番号6：基節部。ほぼ完存する。

・ニホンジカ（試料番号9・8・7・5・1・4）

試料番号9：右下顎骨。M1～M3を残す。

試料番号8：右下顎骨。P2～P4、M1～M2が残る。

試料番号7：左下顎骨。M3部分が残る。

試料番号5：左下顎骨。M2・M3が残る。

試料番号1：左下顎骨。下顎骨の角部が残る。

試料番号4：右大腿骨。遠位部のみが残る。骨端にはイヌなどによると思われる咬み痕が顕著に残る。

試料番号10：大腿骨。骨端で上記標本に接合する。

4.考察

本遺構から出土した骨は、マダイ、ウマ、イノシシ、ニホンジカに同定された。骨の形態的特徴から以下のようなことが推定される。

マダイは、前上顎骨の大きさから体長70cmになる大ダイであったと考えられる。

ウマの中手骨遠位端幅は45.0mmであった。この大きさから、本種は従来ウマのうち御崎馬に匹敵する中小型のウマであると推定される。

イノシシは、老成のもので、これも現生のものと比較すれば大きい。過去には、このような大きさのイノシシが普通に分布していたとみられる。

ニホンジカはいずれも成獣であるが、今日のキュウシュウジカのようなやや小さいタイプのシカであることが推定される。下顎骨は、大きさ・歯の咬耗状況からみて、全て別個体であるが、良く似た生育状況の個体の下顎骨であるといえる。

本遺構に関しては、現段階ではその性格に関する情報が少なく、生活残滓であるのか、何らかの供献と関係があるのか判断がつかないが、本時代の動物の扱い方を示す数少ない例の一つとして注目される資料といえよう。

b-2.S-490出土骨同定（Tab.2）

1.試料

試料は、168次S-490（中略）から出土した骨１式である。試料の時代性や覆土の状態などは結果と共にTab.2に示す。

2.方法

試料を肉眼および実態顕微鏡下で観察し、種類および部位の同定を行った。なお骨の同定は、早稲田大学金子浩昌先生にお願いした。

3.結果

結果をTab.2に示す。同定された種類は、以下に示す全部で４種類である。

鳥綱　Class Aves

・ワシタカ目　Order Falcoiformes

ノスリ類　Buteo sp.

・ガンカモ目　Order Anseriformes

ガンカモ科　Family Anatidae

Tab.2　骨同定結果

グリッド名	遺構名	時代	試料名	種類および部位名	備考
BG38	S-490	平安時代前期	灰色粘土	ノスリ類　中足骨　右（1）	
				ノスリ類　脛骨　右（2）	
				ノスリ類　大腿骨　左（1）	
				ノスリ類　尺骨　左（1）	*
				ノスリ類　橈骨　右（1）	*
				ノスリ類　橈骨　左（1）	*
				ノスリ類　上腕骨　右（1）	◎
				ノスリ類　上腕骨　左（1）	◎
				鳥類　破片　（2）	
				カモ類　尺骨　右（1）	
				カモ類　胸骨　（1）	破片
				ニホンジカ　大腿骨近位部　左（1）	
				イノシシorシカ　肋骨　（1）	
				イノシシ　橈骨　右（1）	
				魚骨　（1）	
				貝片　（1）	

注．種類および部位の（　）内の数字は個数を示す。備考欄の＊印・◎印は同一個体と考えられるもの。

カモ類　　Anas sp.

哺乳綱　Class Mammalia

・偶蹄目　Order Artiodactyla

シカ科　Family Cervidae

ニホンジカ　　Cervus nippon

イノシシ科　Family Suidae

イノシシ　　Sus scrofa

4.考察

168次S-490遺構からは、ノスリ類、カモ類、ニホンジカ、イノシシの他、魚骨片、貝片などが同定された。いずれも完全個体でなく、バラバラであったことから、食用とされたものである可能性がある。ただし、猛禽類のノスリ類が食べられたものかは不明である。種類も多いことをみると、生活残滓を捨てた遺構の可能性があるが、この点については発掘調査成果を含めて再検討したい。(後略)

【b-2.引用文献】

石河寛昭（1977）　最新液体シンチレーション測定法.189p.,南山堂.

富樫茂子・松本英二（1983）　ベンゼン－液体シンチレーションによる14C年代測定法.　地質調査所月報,34,p.513-527.

日本化学会編（1976）　同位体,年代測定.「新実験化学講座10　宇宙地球化学」,p.337-353,丸善.

b-3.骨同定（Tab.3）

1.試料

骨同定を実施した試料は(中略）第168次調査で得られた10点（中略）である。(後略)

2.分析方法

肉眼およびルーペで観察し、標本との比較により、種と部位を同定する。骨表面に残る傷などの観察は、主に肉眼で行う。(中略)

3.結果

（前略）結果をTab.3に示す。出土骨はウマ（Equuscaballus)、シカ（Cervus）に同定された。なお、本結果の解析については出土状況と合わせて評価するようにする。

Tab.3　動物骨同定・観察結果

地区番号	遺構名	分類群	部位	左右	備考
BT64	S-86	ウマ	上顎 臼歯		粘土中に埋没して破損 詳細な同定が困難
BG38	S-490暗青灰色土	ウシ	中手骨片		縦半截表面に切り傷がある。 現長132.0mm･原長150.0mm±
BG38	S-490暗青灰色土	シカ	橈骨片		縦に割れた破片
BG38	S-490暗青灰色土	シカ	脛骨 破片		割った破片
BU62	S-50灰黄色粘土	シカ	基節 略完		GL長さ42.72mm
BH39	S-470	ウマ	上顎歯 $M^{2/3}$	右	高さ53.88mm
BU64	S-25茶黄色土	ウマ	上顎 臼歯片	左	
BU62	S-50灰色粘土	シカ	脛骨 dis	左	骨体部を割っている Bd31.43mm
BG38	S-490堀方黒灰色土	シカ	上腕骨 dis骨端	左	Bd34.59mm
BT64	S-94	ウマ？	臼歯		
BT62	S-108	ウマ	下顎臼歯 M_1?		高さ65.0mm±
BU62	S-50灰色粘土	ウマ	下顎 M_1	左	歯冠高39.68mm 歯冠長×歯冠幅24.63mm×13.84mm

dis：遠位端　M：大臼歯

c）花粉分析、種実同定

ここでは、SE035・SE050・SE174・SE470・SK475・SE490・SX980・SK1111より出土した花粉・種子の分析を行っている。

c-1.花粉分析（Tab.4　Fig.125）

1.目的

今回対象とする遺構は、S-475、S-470、S-980である。S-475、S-470はともに平安時代中期末（※整理の結果平安時代後期と考えられる）の土坑である。これらは、遺構底部から採取された土壌を対象とした調査を行い、埋積当時の環境を復元することを目的とする。一方、S-980は奈良時代以前に構築されたとみられているが、詳細な時代は明確でない。そこで既存の花粉分析結果と対比を行うことにより、遺構の構築時期を明らかにするとともに、当時の環境について検討する。

2.試料

試料は、S-475より２点、S-470より４点、S-980より１点の計７点である。

3.分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、総花粉・胞子数から不明花粉とシダ類胞子を除いたものを基数として出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

4.結果

Tab.4　花粉分析結果

種　類	S-475	S-470				S-980	S-475
試料番号	5層	茶色腐植土1	黒色粘土質	茶色腐植土2	暗黒灰色粘土	暗黒色粘土	6層
木本花粉							
モミ属	1	2	-	-	-	6	-
ツガ属	-	1	-	1	-	2	-
マツ属	-	4	1	3	-	4	5
スギ属	-	-	-	7	-	1	-
ハンノキ属	-	-	-	1	-	74	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	4	-
コナラ属アカガシ亜属	1	3	4	4	-	2	-
ニレ属－ケヤキ属	-	-	-	1	-	-	-
ブドウ属	-	-	-	1	-	-	-
草本花粉							
イネ科	90	102	68	539	-	2	-
カヤツリグサ科	-	-	-	2	-	-	-
ギシギシ属	-	2	7	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	1	-	43	4
ソバ属	-	-	-	1	-	-	-
アカザ科	1	3	2	4	-	-	-
ナデシコ科	-	1	-	7	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	3	-	-	-
フウロソウ属	-	-	1	-	-	2	-
セリ科	-	1	-	-	-	-	-
リンドウ属	-	-	-	1	-	-	-
オミナエシ属	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属	86	21	34	153	-	23	2
他のキク亜科	1	1	1	1	1	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	4	-	8	-
不明花粉	1	1	-	2	-	-	-
シダ類胞子							
シダ類胞子	18	14	2	42	-	1048	31
合　計							
木本花粉	2	10	5	18	0	93	5
草本花粉	178	131	113	717	1	78	6
不明花粉	1	1	0	2	0	0	0
シダ類胞子	18	14	2	42	0	1048	31
総計（不明を除く）	198	155	120	777	1	1219	42

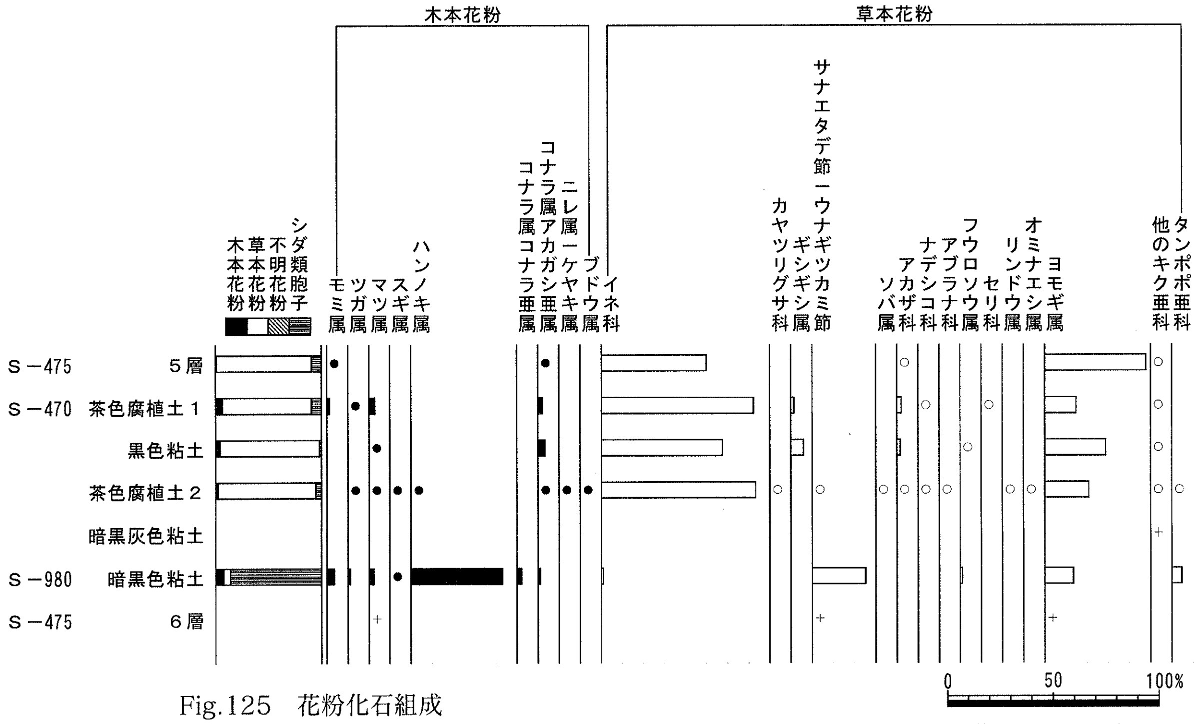


Fig.125　花粉化石組成

出現率は、木本花粉・草本花粉とも総数より不明花粉・シダ類胞子を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満、＋は木本花粉100個体未満の種類を示す。

結果をTab.4、Fig.125に示す。以下に各遺構毎の出現傾向を記す。

・S-475

５層からは比較的多くの花粉化石が得られるが６層中からはほとんど検出されない。５層は、ほとんどが草本花粉からなり、特にイネ科とヨモギ属の割合が高い。

・S-470

最下層の暗黒褐色粘土からは花粉化石が検出されないが、他の３試料からは多く検出され、組成は近似する。これらは、ほとんどが草本花粉からなり、特にイネ科とヨモギ属の割合が高い。

・S-980

化石の保存状態が悪く、シダ類胞子の割合が非常に高い。木本花粉ではハンノキ属、草本花粉では、サナエタデ節－ウナギツカミ節、ヨモギ属の割合が高い。

5.考察

S-475とS-470は、ともに草本花粉が卓越し、特にイネ科とヨモギ属が多産する。これまでに当社で行った本遺跡の分析結果をみると、第120次調査のS-61遺構で草本類（イネ科）が多産する。イネ科やヨモギ属の多産は周辺に草地が生育するような開けた空間があったためと考えられる。また、種類数が少ないのは、短期間に埋積したなどの理由で局地性を反映しているためとみられる。一方、森林は後背山地を中心に分布していたと思われるが、先に報告した第143次調査のS-10遺構の結果でも述べたように、シイ・カシ類などの照葉樹から構成される暖温帯林であったと推定される。ソバ属の花粉化石は、これまで行ってきた太宰府市内の遺跡の花粉分析結果でも普遍的にみられており、平安時代に栽培が行われていたことが示唆される。

S-980から採取された試料の分析結果をみると、ハンノキ属の産出する割合が高い。おそらく、当時ハンノキ湿地林が周辺に存在していたため多産したものとみられる。このような組成を示す花粉分析結果を、当社でこれまで行った分析結果と比較してみても、類似するものが認められない。一方、ハンノ

キ属の多産は、局地的なものであると考えられることから、北九州全体の花粉化石群集の変遷(Hatanaka,1985など)に当てはめることは難しい。したがって、既存資料と比較して遺構の構築時期を推定することは難しい。

ところで、本遺跡周辺の植生変遷として、ハンノキ湿地林から草地へ変化が推測される。同様の類例としては、千葉県の村田川流域での調査事例があげられる。花粉分析の結果、ハンノキ湿地林からイネ科を中心とする草地への急激な変化が確認されたことから、ハンノキ林を開拓して水田が営まれるようになったことが示唆されている(辻ほか,1983)。この変化は約2,000年前に起こったといわれていたが、テフラ層の再検討結果により、平安時代の中頃と修正されている(辻,1986)。本遺跡では、中世以降の層準について連続的に植生変遷を試みた例はあるが、今後は大宰府条坊が構築される以前の堆積物についても花粉分析を行い、各時代時期ごとの古植生変遷を検討することが課題と考える。

【c-1.引用文献】

Hatanaka ken' ichi (1985)　Palynological Stadies on the Vagetational Succession　the Wurm Glacial age in Kyushu and Adjacent Areas.Journal of the Faculty of Literature,Kitakyushu University(Series B),18,p.29-71).

辻　誠一郎・南木睦彦・小池裕子 (1983)
縄文時代以降の植生変化と農耕－村田川流域を例にして.第四紀研究,22,p.251-266.

辻　誠一郎 (1986)　日本の第四紀植生史研究の諸問題.植生史研究,1,p.3-18.

c-2.種実同定 (Tab.5　写真1)

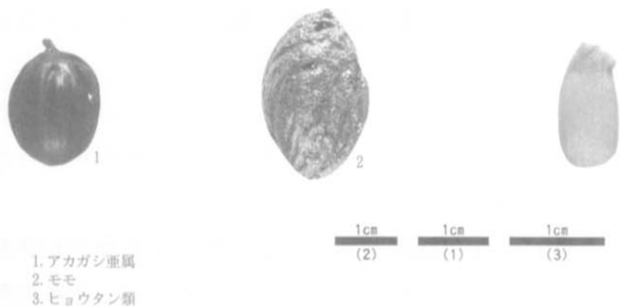
1.目的

弥生時代の土坑(S-1111。なお整理の結果縄文時代の可能性も考えられる)、平安時代の土坑(S-490)から検出された種実遺体の同定を行い、当時の植物利用に関する情報を得る。

2.試料

S-1111の覆土(暗褐色粘土・黒褐色粘土)2試料とS-490の覆土1試料(暗青灰色粘土)の3試料である。また、S-490の覆土(灰色粘土)中から検出された単体種実遺体1点も同定の対象とした。

写真１.種実写真



Tab.5　種実同定結果

遺構名	土色・岩質	種類(個数)
S-1111	暗褐色粘土	アカガシ亜属(15)
	黒褐色粘土	アカガシ亜属(3)
S-490	灰色粘土	モモ(1)
	暗青灰色粘土	ヒョウタン類(14)

3.分析方法

肉眼あるいは双眼実体顕微鏡下でその形態的特徴から種類を同定する。なお、土壌ごと採取された試料は、水酸化ナトリウム水溶液を加えて泥化させ、種実遺体に付着した土壌を洗い流した後に同定した。

4.結果

結果をTab.5に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を示す。

・コナラ属アカガシ亜属(*Quercus subgen.Cyclobalanopsis* sp.)　ブナ科

果実が検出された。黒褐色で大きさは15mm程度。表面は薄くて堅く、平滑で光沢がある。先端部の花柱の根元に輪状の文様があることから、アカガシ亜属であると推定される。

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2cm程度。核の形は楕円形でやや偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

・ヒョウタン類（*Lagenaria* sp.）　ウリ科ユウガオ属

種子が検出された。褐色で長さ10mm程度。長楕円形をしている。表面はざらつき、やや柔らかく弾力がある。縁が比厚する。

5.考察

平安時代の遺構から検出された種実（モモ、ヒョウタン類）はいずれも渡来した栽培種で、周辺での栽培が示唆される。なお、太宰府市内の遺跡を扱った当社報告の中では、これらの種類は尾崎遺跡の古墳時代と思われる層位からも検出されている。一方、弥生時代の遺構から検出されたアカガシ亜属は、当時の周辺植生に由来すると思われる。当時の周辺植生は、カシ類が卓越する植生が推定されており(Hatanaka,1985など)、今回の調査と調和的であるといえる。栽培植物を含む植物利用は、井戸などの遺構から検出される植物遺体によって推定されることが多く、今後の資料蓄積が必要であると思われる。

【c-2.引用文献】

Hatanaka ken' ichi（1985）　Palynological Stadies on the Vagetational Succession　the Wurm Glacial age in Kyushu and Adjacent Areas.Journal of the Faculty of Literature,Kitakyushu University(Series B),18,p.29-71）.

c-3.種実同定（Tab.6）

1.試料

試料は、S-470から出土した種子5粒である。試料の詳細は結果と併せてTab.6に示す。

Tab.6　種実同定結果

試料番号	地区番号	遺構番号	採集日付	種類（個数）
148	BH39	S-470	950825	モモ(5)

2.方法

試料を洗浄後、双眼実体顕微鏡下で観察し、種実遺体を抽出、同定する。同定された種実遺体は、種類ごとに瓶にいれ、ホウ酸・ホウ砂水溶液中に保存する。

3.結果

（前略）結果をTab.6に示す。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。(中略)

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは3cm程度。核の形は楕円形で偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。(後略)

c-4.種実同定（Tab.7）

1.目的・試料

奈良・平安時代の遺構から出土した種実遺体の種類を知り、当時の植物利用に関する情報を得る。試料は、平安時代後期の遺構から出土した10点である。試料の詳細はそれぞれの同定結果とともにTab.7に示す。

2.方法

Tab.7　種実同定結果

遺構名	遺構性格	堆積状況	時代	種類（個数）
S-35暗灰粘	井戸	流れ無し	奈良	モモ(1)
S-50灰黄粘	井戸	流れ無し	奈良	モモ(1)
S-174	ピット	流れ無し	平安	モモ(1)
S-470腐植土	井戸	流れ無し	平安中期	モモ(1)

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、その形態的特徴から種類を同定する。

3.結果

結果をTab.7に示す。モモ（中略）が検出された。以下に検出された種類の形態的特徴をしるす。

（中略）

・モモ（*Prunus parsica* Batsch）　バラ科サクラ属

核（内果皮）が検出された。褐色～黒褐色で大きさは2.5cm程度。核の形は楕円形で偏平である。基部は丸く大きな臍点がありへこんでおり、先端部はやや尖る。一方の側面にのみ、縫合線が顕著に見られる。表面は、不規則な線状のくぼみがあり、全体としてあらいしわ状に見える。

（後略）

d）材質（鉱物種）同定（Tab.8　Fig.126～129）

d-1.Ｘ線回折分析

1.目的および試料

平安時代後期の遺構（S-460）埋土について、鉱物組成を知る目的でＸ線回折分析を行う。試料は各層から検出された①～④の４点である。

2.分析方法

各試料をＸ線分析用試料粉砕器（平工製作所製ＴＩ－100）で微粉砕した。この微粉砕試料をアルミ板試料法により作成した。また、微粉砕試料を簡易に水ひさせ、この懸濁液役0.2mlを鉱物同定用スライドガラス（2.8×4.9cm）に直接塗布し、ガラス塗布定方位試料を作成した（日本粘土学会,1987）。この両試料について、次の条件でＸ線回折を行った。

装置：島津製作所製ＸＤ－３Ａ

Target:Ｃｕ（Ｋα）

Filter:Ｎｉ

Voltage:30KVP

Current:30mA

Count Full Scale:5,000c/s

Time Constant:1.0sec

Scanning Speed:2°/min

Chart Speed:2cm/min

Divergency:1°

Receiving Slit:0.3mm

Scanning Range:3～45°

Ｘ線回折によって得られた回折線の回折角度、原子面間隔および相対強度を計算によって求め、それに該当するとみられる主要鉱物をＸ線粉末回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索し

た。

3.結果

各試料のＸ線回折チャートとＸ線粉末回折線総合解析プログラムによって検出された鉱物の略号をFig.126～129に示す。また、回折線強度より推定される各鉱物の量比をTab.8に示す。

試料番号①（Fig.126）

アルミ板試料では多量の石英（quartz）、少量の曹長石（albite）、カリ長石（potassium feldspar）、微量のカオリン鉱物（kaolin minerals）、菱沸石（chabazite）、赤鉄鉱（hematite）、極めて微量の雲母鉱物（mica minerals）が検出される。一方、ガラス塗布定方位試料では石英（quartz）、カリ長石（potassium feldspar）などは水ひによってＸ線強度は弱くなるが、逆に粘土鉱物は強度が強くなる。その中でギブサイト（gibbsite）が新たに検出される。

試料番号②（Fig.127）

アルミ板試料では多量の石英（quartz）、中量のカリ長石（potassium feldspar）、少量の斜長石（plagioclase）、微量のカオリン鉱物（kaolin minerals）、雲母鉱物（mica minerals）、菱沸石（chabazite）、赤鉄鉱（hematite）、トリディマイト（Trdymite）、極めて微量の角閃石（hornblende）が検出される。一方、ガラス塗布定方位試料では石英（quartz）、カリ長石（potassium feldspar）のＸ線強度は弱くなり、粘土鉱物の強度は強くなる。

試料番号③（Fig.128）

アルミ板試料では多量の石英（quartz）、中量のカリ長石（potassium feldspar）、少量の曹長石（albite）、微量の菱沸石（chabazite）、雲母鉱物（mica minerals）、極めて微量の角閃石（hornblende）が検出される。一方、ガラス塗布定方位試料では石英（quartz）のＸ線強度は弱くなり、逆に粘土鉱物の強度は強くなる。

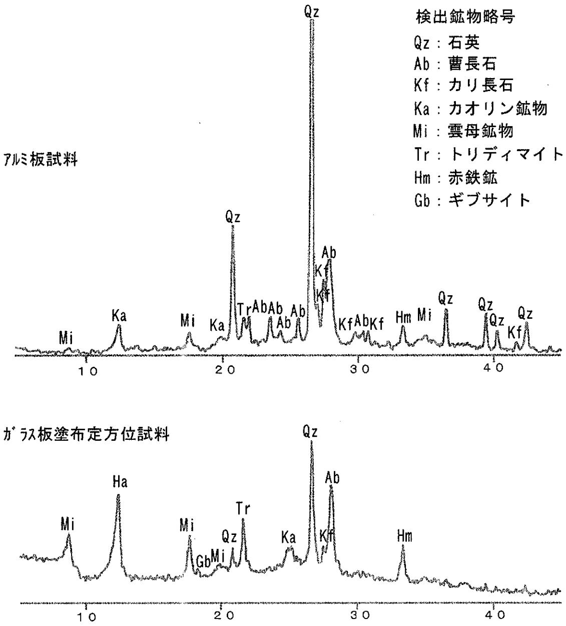


Fig.126　試料①X線回析チャートおよび検出鉱物

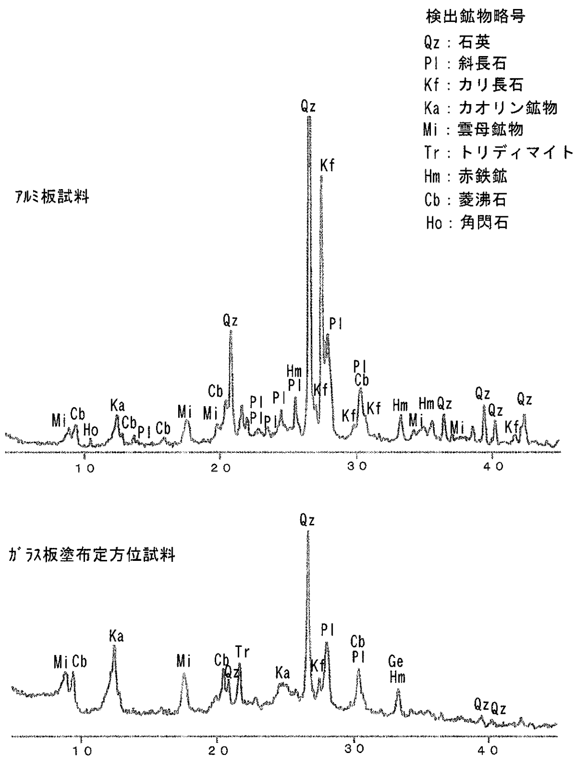


Fig.127　試料②X線回析チャートおよび検出鉱物

試料番号④（Fig.129）

アルミ板試料では多量の石英（quartz）、曹長石（albite）、微量のカリ長石（potassium feldspar）、カオリン鉱物（kaolin minerals）、雲母鉱物（mica minerals）、極めて微量の角閃石（hornblende）

が検出される。一方、ガラス塗布定方位試料では石英（quartz）、曹長石（albite）のX線強度は弱くなり、逆に粘土鉱物のカオリン鉱物(kaolin minerals)、雲母鉱物（mica minerals）の強度は強くなる。その中でもギブサイト(gibbsite）が新たに検出される。

4.考察

各試料ともに石英（quartz）および曹長石(albite)、斜長石（plagioclase）などの長石類(feldspars）が量比として高い。特に試料番号④では両者が顕著に高い。また、長石の中でもカリ長石の量比が高い試料は②と③で共通する。この両者は菱沸石（chabazite）が検出されることでも共通しており、母材および風化過程が同じ覆土と考えられる。

粘土鉱物としては雲母鉱物、カオリン鉱物が主な鉱物として検出される。しかし、いずれも存在量は微量であり、産地を推定するほどの顕著な特徴は認められない。その中でカオリン鉱物にはカオリナイト、ディッカイト、ナクライト、ハロイサイトの４鉱物があるが、今回のように存在量が微量で結晶度の悪い場合には４鉱物を細分することは困難である。したがって、本文の「カオリン鉱物」はこれら４鉱物を総称した用語として用いることにしたが、各試料のX線回折線はハロイサイトにもっとも類似している。このことから、カオリン鉱物とした鉱物はおそらくハロイサイトであり、火山ガラス風化による２次生成物と考えられる。また、雲母鉱物とした鉱物のX線回折線は、一般に白雲母の一種で、muscovite 1Mとされるものを標準として解析される。この他に黒雲母もこれときわめて近似した回折線を有するため、今回の試料のように微量含まれている場合にはX線回折線のみで雲母鉱物を区別することは困難である。細区分には顕微鏡観察等を要する。また、雲母族に属する粘土鉱物、いわゆる雲母粘土鉱物（mica clay mineral）のセリサイト(sericite）またはイライト（illite）も同じ、回折線を有する。したがって、本文の「雲母鉱物」

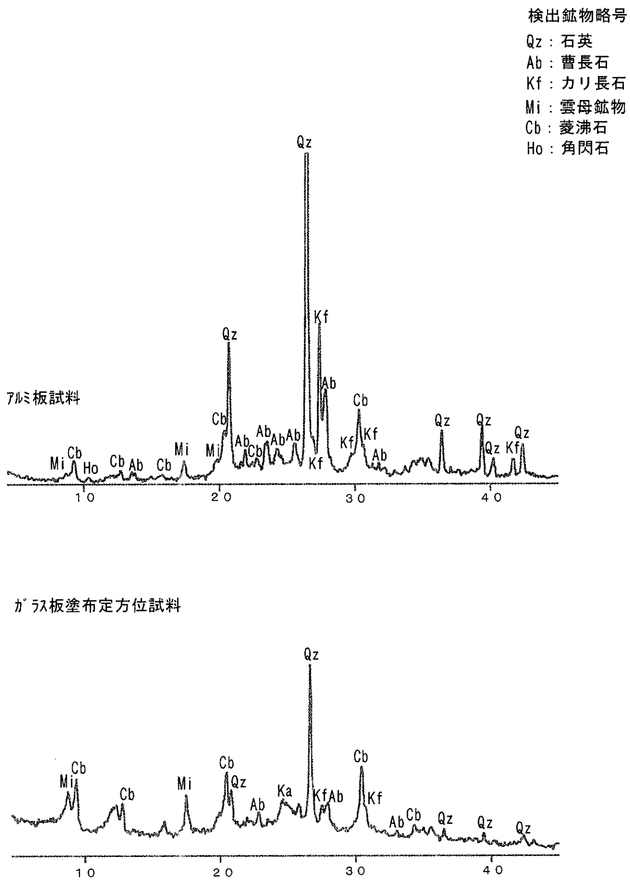


Fig.128　試料③X線回析チャートおよび検出鉱物

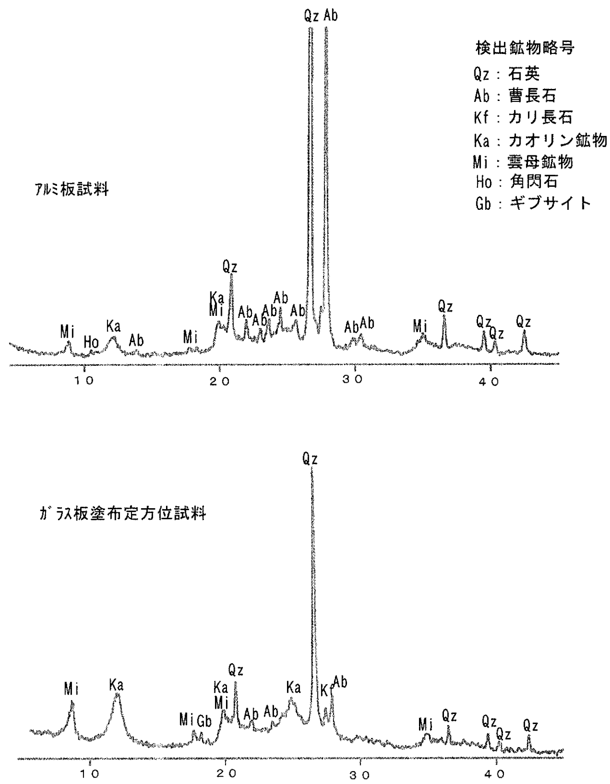


Fig.129　試料④X線回析チャートおよび検出鉱物

Tab.8　X線回折試料の検出鉱物および量比

試料	Qz	Ab	Pl	Kf	Mi	Ka	Cb	Ho	Hm	Tr	Gb
①	◎	△		△	±	+		±	+	+	±
②	◎		△	○	+	+	+	±	+	+	
③	◎	△		○	+		+	±			
④	◎	◎		+	+	+		±			±

注. (1)量比

◎ ：多量、○：中量、△：少量、＋：微量、±：極めて微量

(2)鉱物略号（ﾁｬｰﾄ記号と共通）

Qz：石英（quartz）、Ab：曹長石（albite）、
Pl ：斜長石（plagioclase）、Kf：カリ長石（potassium feldspar）、
Mi ：雲母鉱物（mica minerals）、Ka：カオリン鉱物（kaolin minerals）、
Cb：菱沸石（chabazite）、Ho：角閃石（hornblende）、赤鉄鉱（hematite）、
Tr ：トリディマイト（Trdymite）、Gb：ギブサイト（gibbsite）

は白雲母・黒雲母、あるいは雲母粘土鉱物のセリサイトまたはイライトを総称した用語として用いることにしたが、試料から判断しておそらくは後者の雲母粘土鉱物であろう。この他の特徴として鉄およびアルミ酸化鉱物が試料番号①と②では認められる。特に赤鉄鉱（hematite）　の存在は酸化的環境が想定され、熱履歴を受けた焼土などでよく検出される。但し、今回の試料がそのような環境にあったかは不明である。

【d.引用文献】

足立吟也（1980）　６章 粉末X線回折法,機器分析のてびき３.p.64-76.,化学同人

久間一剛・佐久間敏雄・庄子貞雄・鈴木皓・服部勉・三土正則・和田光史（1993）
「土壌の事典」.566p.,朝倉書店.

日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック　第二版.技報堂出版,1289p.

e）土器胎土分析（Tab.9　Pla.15・16）

はじめに

大宰府条坊跡第168次調査では、奈良・平安期のものとされる土師器が多量に出土している。本報告では、これらの土器を対象とし、その材質（胎土）の特性を明らかにして、周辺地質およびこれまでに行った周辺遺跡での弥生土器胎土などとの比較から、土器の生産と使用に関わる資料を作成する。

1.試料

試料は、大宰府条坊跡第168次調査で出土した奈良・平安期の土師器片20点である。このうち、18点は甕であり、残る2点は坏と丸坏である。試料の一覧をTab.9に示す。

発掘調査者所見では、該期の土師器胎土は、肉眼観察により、1)角閃石を多く含むもの、2)雲母を多く含むもの、3)角閃石も雲母も少量のものの3種類に分類されている。このうち、1)については、形態的属性から在地のものではないと考えられており、2)および3)については、推定される地域は不明とされている。

2.分析方法

既報告の弥生土器の胎土分析と同様に松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイアモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて１mm間隔で移動させ、

Tab.9　試料一覧

試料番号	出土遺構・土層	地区	日付	色調		胎土観察	実測有無	器種	胎土分類
				外面	内面				
1	黒茶土	BF38	950901	白茶灰色	茶灰色	角閃石多く混入	実測	甕	Ⅰa
2	暗灰粘	BK49	950714	白茶灰色	白茶灰色	角閃石多く混入	実測	甕	Ⅰa
3	暗灰粘	BJ40	950811	白茶灰色	白茶灰色	角閃石多く混入		甕	Ⅰa
4	暗灰粘	BK44	950809	黒灰茶色	白茶灰色	角閃石多く混入		甕	Ⅰb
5	暗灰粘	BL51	950717	赤褐色	黒色	角閃石多く混入		甕	Ⅰa
6	暗灰粘	BJ45	950802	赤褐色	暗茶黒色	角閃石多く混入		甕	Ⅰa
7	暗灰粘	BS60	950825	赤褐色	灰茶色～白茶灰色	角閃石多く混入		甕	Ⅰa
8	暗灰粘	BK43	950803	赤褐色	暗灰茶色	角閃石多く混入		甕	Ⅰb
9	暗灰粘	44ライン	950802	暗褐茶色	暗灰茶色	雲母多く混入		甕	Ⅱa
10	暗灰粘	BT61～62	950802	暗黄茶色	暗茶黒色	雲母多く混入		坏a	Ⅱb
11	暗灰粘	BE34	950906	暗黄白色	白灰色	雲母多く混入		丸坏a	Ⅱb
12	暗灰粘	BL51	950717	赤褐色	赤褐色	雲母多く混入		甕	Ⅱc
13	暗灰粘	BO51	950718	赤褐色	赤褐色	雲母多く混入		甕	Ⅱa
14	暗灰粘	BJ41	950810	黒灰茶色	淡茶灰色	雲母多く混入		甕	Ⅱc
15	暗灰粘	BK43	950803	淡茶灰色	淡茶灰色	雲母多く混入		甕	Ⅱc
16	暗灰粘	BG38	950830	黒茶灰色	暗茶色	雲母多く混入	実測	甕	Ⅱd
17	暗灰粘	BU・BV64	950717	淡茶灰色	黄茶色	角閃石やや多く混入	実測	甕	Ⅱe
18	暗灰粘	BU63～64	950803	淡茶灰色	黄茶色	角閃石やや多く混入	実測	甕	Ⅱf
19	暗灰粘	BJ39	950811	赤褐色	赤褐色	角閃石やや多く混入		甕	Ⅱg
20	暗灰粘	48～53	950714	白茶灰色	白茶灰色	白色砂粒多く混入		甕	Ⅱh

胎土分類以外の記載は発掘調査者による。

細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、砂粒の粒径組成、孔隙・砂粒・基質の割合を求めた。

3.結果

各試料の計数結果をe表2に、各粒度階における鉱物・岩石出現頻度を分析e図1、胎土の砂粒の割合を同e図2、胎土中の砂の粒径組成を同e図3に示す。（e表２、分析e図1～3は、CD-ROM内の「分析_a-e表.xls」「分析_e図1-3.xls」）に所収）

砂粒組成から、試料は試料番号1～8までと試料番号9～20とに大きく2分することができる。前者は斜長石の鉱物片を主体とし、石英、角閃石の鉱物片と溶結凝灰岩、安山岩の岩石片および山ガラスを伴うことが特徴であり、後者は石英、カリ長石、斜長石の3種の鉱物片を主体とし、黒雲母の鉱物片あるいは多結晶石英および花崗岩類の岩石片を伴うことが特徴となる。この大分類は、肉眼観察により指摘された胎土分類の追認となる。前者は前述した肉眼観察による分類の1)に相当し、後者は2)、3)に相当する。ここで、前者の分類をⅠ類とし、後者をⅡ類とする。今回の胎土分析結果では、Ⅰ類はさらにⅠa、Ⅰbの各類に細分され、Ⅱ類は、Ⅱa～Ⅱh類まで細分される。以下に各分類の特徴を述べる。

Ⅰa類：Ⅰb類との違いは、全体的な砂粒の割合と粒径組成に認められる。鉱物片および岩石片の種類構成については、両分類間で特に顕著な差はない。砂粒の割合は、Ⅰa類の方がやや多く、また粒径組成では、中粒砂を最頻値とする比較的明瞭な単独峰形を呈するヒストグラムが特徴である。Ⅰa類に分類される試料は、試料番号1～3、5～7の6点である。

Ⅰb類：Ⅰa類に比べてやや砂の割合が低く、粒径組成では、粗粒砂と中粒砂がほぼ同量程度で最頻値を示す。Ⅰb類に分類される試料は、試料番号4と8の2点である。

Ⅱa類：砂粒の種類構成では、石英の量比がカリ長石および斜長石に対して高く、また黒雲母の量比

も高いことが特徴である。さらに火山ガラスの少ない傾向も窺える。砂粒全体の割合は、以下に述べるII類全てにおいて細分された分類ごとの特徴は認められない。粒径組成では、粗粒砂から細粒砂までが同量程度で最頻値となり、台形に近いヒストグラムを示す。これに分類される試料は、試料番号9と13の2点である。

IIb類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者がほぼ同量程度であり、II類の特徴とした黒雲母、多結晶石英、花崗岩類のいずれも量比の少ないことが特徴である。粒径組成では、細粒砂または極細粒砂に最頻値があり、IIa類に比べると尖度がやや突出している。これに分類される試料は、試料番号10、11の2点である。

IIc類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者がほぼ同量程度であり、黒雲母は比較的少量である。粒径組成では、粗粒砂と中粒砂に最頻値があり、細粒側に裾野が広がるヒストグラムを示すことが特徴

である。これに分類される試料は、試料番号12、14、15の3点である。

IId類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者のうち、斜長石がやや多い傾向にあり、粒径組成では、細粒砂を最頻値とする左右対称形に近いヒストグラムを示すことが特徴である。これに分類される試料は試料番号16の1点である。

IIe類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者のうち、斜長石がやや多い傾向にあり、黒雲母や多結晶石英、花崗岩類は微量である。また、II類の中では珍しく角閃石を少量伴っている。粒径組成では、淘汰度が不良であり、非常に扁平なヒストグラムを示す。これに分類される試料は試料番号17の1点である。

II f 類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者のうち、石英が多い傾向にあり、黒雲母や多結晶石英、花崗岩類は微量である。また、火山ガラスを比較的多く含むことも特徴となる。粒径組成では、淘汰度が不良であり、非常に扁平なヒストグラムを示す。これに分類される試料は試料番号18の1点である。

IIg類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者のうち、石英が突出して多い傾向にあり、粒径組成では、中粒砂を最頻値とする左右対称形に近いヒストグラムを示すことが特徴である。これに分類される試料は試料番号19の1点である。

IIh類：砂粒の種類構成では、石英、カリ長石、斜長石の3者がほぼ同量程度であり、粗粒の花崗岩類の量比がやや高い。粒径組成では、淘汰度が不良であり、非常に扁平なヒストグラムを示す。これに分類される試料は試料番号20の1点である。

以上の分類を各試料について記入した一覧をTab.9に併記する。

4.考察

今回の分析により識別されたI類とII類の胎土は、明らかに異なる地質学的背景を有する地域に由来する。ここで、まず大宰府条坊跡の位置する二日市低地帯(磯,2001：以下地形の名称は同様)の地質学的背景を概観する。二日市低地帯は、南西側に牛頸低山地、北東側に四王寺山脈および三郡山地、東～南東側に高尾丘陵の各山地または丘陵に囲まれている。これらの山地はいずれも白亜紀に貫入した早良花崗岩と呼ばれる地質により構成されている(久保ほか,1993)。早良花崗岩は、主に粗粒な黒雲母アダメロ岩により構成されている(日本の地質「九州地方」編集委員会,1992)。二日市低地帯には、御笠川とその支流である大佐野川、鷺田川、高雄川などの河川により、早良花崗岩に由来する砕屑物が供給され、砂層や粘土層として堆積していることになる。

胎土の砂粒の種類構成からみれば、上述の二日市低地帯の地質学的背景は、II類の胎土とよく一致し、

Ⅰ類の胎土とは全く異なっているといえる。また、Ⅱ類の砂粒の種類構成は、これまでに当社で分析した大宰府条坊跡、国分松本遺跡、脇道遺跡の各所出土の弥生土器とも類似し、その弥生土器の中には考古学所見から在地とされているものもある。これらのことから、今回の分析によりⅠ類に分類された試料は、少なくとも二日市低地帯あるいは御笠川流域内で作られた可能性は非常に低く、一方で、Ⅱ類に分類された試料は、二日市低地帯あるいは御笠川流域内で作られた可能性がある。なお、Ⅱ類から推定される地質である黒雲母を含む花崗岩類は、九州北部に広く分布しているから、現時点では、Ⅱ類の胎土を二日市低地帯あるいは御笠川流域内に限定するものではない。今回の分析においてⅡ類の胎土が比較的多くの種類に細分されたことも、同地域内における製作事情の違いを示すのかあるいは異なる花崗岩の分布地域からの搬入品である可能性もあるかも知れない。

Ⅰ類の砂粒の種類構成から地質学的背景を推定する際にポイントとなるのは、溶結凝灰岩の存在である。溶結凝灰岩の多くは、大規模な火砕流堆積物において圧密と高温で火山ガラスが変形、付着して形成される。九州北部における大規模火砕流堆積物といえば、阿蘇4(Aso-4)火砕流堆積物の分布が長崎から佐賀、福岡、大分の各県において確認されている(小野,1984)。また、太宰府市内でも、高尾丘陵南端部にAso-4火砕流堆積物からなる台地の分布が認められている(磯,2001)。Ⅰ類の特徴である斜長石、角閃石の鉱物片および火山ガラスなどもこの火砕流に由来すると考えることができる。しかし、福岡市周辺地域に分布するAso-4火砕流堆積物中には溶結部分が認められない(唐木田ほか,1994)ことやⅠ類の中に花崗岩類の岩石片が微量であり、かつ九州北部ではほとんど分布しない安山岩類の岩石片を少量伴うことなどから、Ⅰ類の由来する地域は、Aso-4火砕流堆積物の分布する地域の中でも、より厚い堆積物の見られる地域である可能性が高い。現時点では、その地域名を具体的に示すことはできないが、Aso-4火砕流の給源である阿蘇カルデラに近い熊本県北部から大分県南部地域であろうか。

今回の試料においてⅠ類およびⅡ類という異なる地域に由来する胎土が存在することが明らかになったが、各胎土の地域性については、今後の課題となる。周辺遺跡における当該期の土器の分析例を蓄積することと考古学による研究成果との総合的な解析により、課題の解決が期待される。

【e.引用文献】

磯　望,2001,第1編　太宰府市の地形と地質　第1章　地形.
太宰府市史　環境資料編,7-32,太宰府市.

唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々和一豊,1994,福岡地域の地質.
地域地質研究報告(5万分の1図幅),地質調査所,192p.

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本　博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男,1993,
20万分の１地質図幅　福岡,地質調査所.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高,1999,
瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－.
日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集,120-121.

日本の地質「九州地方」編集委員会,1992,日本の地質９　九州地方,共立出版,371p.

小野晃司,1984,阿蘇火山１　火砕流堆積物とカルデラ.アーバンクボタ,22,42-45.

f) 漆塗膜分析 (Fig.130　Pla.17)

1.目的

平安時代の漆製品の漆の断面を観察し、当時の漆製品に関する情報を得る。

資料A　SE050灰黄色粘土出土　皿１点 (9世紀)　　(Fig.52-29)

資料B　SE460出土　皿１点（11世紀末）　　　（写真はCD-ROMに収録）

2.分析方法

各資料について肉眼観察後、内外面それぞれの微少な破片をエポキシ樹脂で包埋し、断面が観察できるようにカット、研磨して薄片プレパラートを作製した。これらを落射光と透過光により観察した。また、赤色漆層で確認された赤色鉱物については蛍光X線分析による定性分析を行った。

3.肉眼観察結果

資料A

内面を赤色、外面を黒色に塗られた皿。無文。土圧により器体は変形し、内外面の漆膜部分は大きな亀裂を生じているものの、厚みがあり堅牢である。内面には刷毛の跡と考えられる筋状の線がわずかに認められる。

資料B

内外面ともに黒色に塗られた皿。無文。木地の劣化が著しく非常に柔らかくなっている。漆膜も薄く剥がれやすい状態にある。

4.分析結果

各資料について、塗膜断面の顕微鏡写真（Pla.17の写真1）を示す。

資料A　（外面）

塗膜層全体の厚みは100μm前後。下地の厚みは60～70μm。暗い黄褐色を呈し、大小の白色（無色？）の粒が散在する。落射光下の観察で、何らかの鉱物であろうと判断した。第1層は黒色の微粒子を高密度に混和した漆層で、層高は均一でなく下地の凹凸を埋める様に塗布される。第2層にもごくわずかに黒色の微粒子がみられる。層高は20～30μm。劣化により表面から約12μmの厚みで茶褐色に変色している。

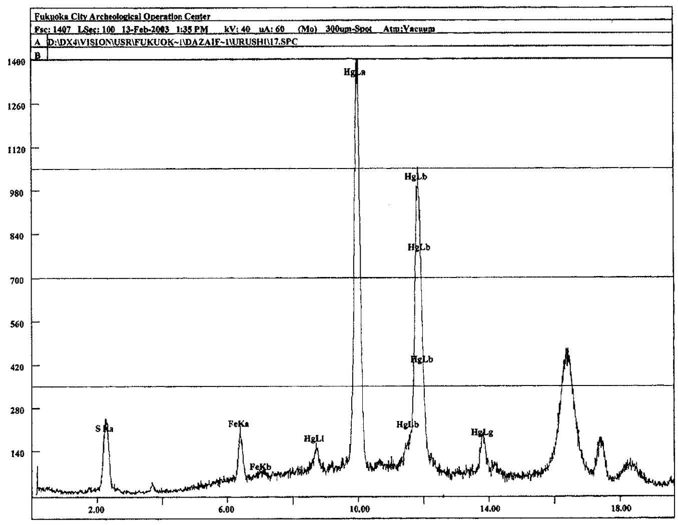


Fig.130　資料A内面の赤色鉱物の蛍光X線分析結果

資料A　（内面）

塗膜層全体の厚みは約190μm前後で均一。下地層の厚みは65～75μm。層全体はやや暗い黄褐色を呈し、外面と同様大小の白色の粒が散在する。第1層は25～50μmの厚みで、黄褐色を呈し、1μm以下の非常に細かな黒色の微粒子を高密度に混和している。第2層も同様で厚みは15μm前後。1、2層に混和された黒色物質はそれぞれ下方に沈殿するように固まっている。第3層は赤色を呈し、厚みは最大60μm。層全体に1～10μm前後の大きさの赤色鉱物が均一に分布する。蛍光X線分析の結果、水銀および硫黄の成分が検出され、辰砂（水銀朱）であると判断した。(Fig.130)

資料B　（外面）

下地は炭粉が認められる黄褐色の層で、15～20μm。膠着材は漆であろうか。第1層は黄褐色を呈し、厚みは約5～15μm。第2層は茶褐色に見える層で15μm前後。層全体が劣化により変色している。わずかに炭粉が混じる。

資料B　（内面）

外面と同様、下地には炭粉と考えられる黒色の物質が見られる。第1層は黄褐色を呈する透明漆層で厚みは約5～20μm。第2層は茶褐色で層厚約10μm。わずかに炭粉が混在し、層全体が変色している。

5.まとめ

漆器の塗膜分析についてはこれまでにも多くの報告例があるが、それらを参考に今回の資料との比較検討を行った[1)]。資料Aについては内外面とも下地に微細な白色鉱物が含まれている事や肉眼観察結果をもとに、下地は土と漆を混ぜ合わせた、いわゆる漆地粉と考えられる。また、2層の漆層に混和された1μm以下の黒色の微粒子はその状態から油煙類であろうと判断した。資料Bでは、漆と考えられる膠着材に炭粉を混ぜて塗布した後、薄く漆を1～2回塗りつけて施工しており、資料Aと比較すると簡略化された工程であった。

これらは技法的に見れば、同様器種における過去の分析結果から導かれた、時代的な特徴と符合している事がわかった[2)]。しかしながら、これら2点の分析のみで平安時代の大宰府における漆芸品のありようを語る事はもちろんできない。大宰府条坊跡[3)]や宮ノ本遺跡[4)]などの平安期の木棺墓からは副葬品として漆塗りの箱が検出され、櫛や烏帽子の断片など当時の生活を知る事のできる資料も見つかっており、これらを含め考古学的にどのような位置づけができるのか分析データの蓄積を進めていきたい。また、『延喜式』には大宰府より民部省に納める年料として漆器の器物を定めた記述[5)]があり、当時の大宰府管内での漆器生産を含め、その扱われ方を考える上で文献資料の検討も必要であろう。

最後に、漆膜のプレパラート作成については（財）元興寺文化財研究所保存科学センターの藤田浩明氏に多大なる御協力と御教示を頂き、また蛍光X線分析については赤色部分にポイントを絞って分析を行えるよう、福岡市埋蔵文化財センター設置の走査型電子顕微鏡付属の蛍光X線分析装置を使用させていただいた。ここに記して感謝いたします。

註

1）今回の分析にあたっては岡田氏の以下の文献を主に参考にした。

岡田文男『古代出土漆器の研究-顕微鏡で見る材質と技法』京都書院　1995年

2）1）岡田氏の文献より。京都市内で出土した平安前期の漆器の分析結果から、9世紀前半においては漆地粉による下地や黒色顔料を混和して塗布する技法が確認され、時代が下ると漆と木炭を混和した、下地工程を省略した技法が出現し、10世紀以後の油煙類の確認は稀となっていく事を導き出している。

3）太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡XI-第50次調査-』　1999年

4）宮ノ本遺跡第13次調査で鏡を入れた漆塗りの箱と考えられる断片が見つかっている。未発表

5）『延喜式』巻二十三　民部下に

「凡大宰府年料造進朱漆酒海六合。三合徑二尺。三合徑一尺六寸。・・中略・・黒漆提壷十四口。右以正税充料造進」とある。

【f.参考文献】

中里寿克「古代漆下地の研究」『保存科学第24号』東京国立文化財研究所　1985年

成瀬正和「古櫃の漆塗膜構造調査」『正倉院紀要第24号』宮内庁正倉院事務所　2002年

小松大秀・加藤寛『漆芸品の鑑賞基礎知識』至文堂　1997年

小松大秀編『日本の美術No.229 漆工（原始・古代編）』至文堂　1985年

黒田真頼『増訂工芸志料』東洋文庫254　平凡社　1976年

Tab.10　分析の内容と目的

	出土地点	種類	目的
a	SX039（SB010柱穴）	紫色物質	材質分析
b	SE050灰色砂	ガラス質遺物	ガラス質部分と胎土（の様に見える）部分の材質分析
c	茶灰色粘土層	施釉陶器	釉薬の成分分析を行い、緑釉であるかどうか判断する

g）材質分析（Tab.10　Fig.131・132　Pla.17）

1.資料と目的

それぞれTab.10のような目的で蛍光X線分析を行った。

2.分析方法

それぞれ肉眼観察後、太宰府市文化ふれあい館設置の微小部エネルギー分散型蛍光X線分析装置（TREX650（株）テクノス社製）を用いて行った。各資料の分析点はPla.17の写真２で示している。また、aについては蛍光X線分析後、結晶構造を明らかにする事を目的としてX線回折分析を行った。これに関しては福岡市埋蔵文化財センター設置のX線回折装置（PW-3050日本フィリップス社製）を使用させて頂き、分析サンプルを得るため資料から微量を採取して実施した。各分析条件は以下の通りである。

（蛍光X線分析）

X線管電圧：40KV　X線管電流：3.00mA　コリメーター：0.3mm

フィルター：無し　対陰極：Mo（モリブデン）

測定時間：300秒　分析環境：真空

（X線回折）

X線管電圧：40KV　X線管電流：50mA　測定時間：15分　マスク：10mm

測定角度：1°～80°

3.結果

それぞれの分析結果を以下に記す。(Fig.131・132)

資料a

（肉眼観察）

赤みがかった紫色を呈し、何らかの製品の一部と考えるよりは粘土状の物質が固まった、自然のものという印象。分析の為に表面をアルコールで拭き取ると、ペーパーに紫色の着色が見られた。

（分析結果）

分析で検出された元素はチタン（Ti）、鉄（Fe）、ケイ素（Si）、マンガン（Mn）である。特にチタンのピークが顕著。X線回折分析より酸化チタンである事が判明した。

資料b

（肉眼観察）

不透明な濃青色を呈すが、表面は光の具合でやや緑がかった色に見える。表面には細かな傷がみられ、また胎土部分を意識して打ち欠いたと判断される部分ではその時の衝撃であろう微細な亀裂が確認できる。また整形される時に生じたと考えられる皺状の平行線が観察された。明茶色を呈する胎土のような部分には微細な透明鉱物が混じっている。

（分析結果）

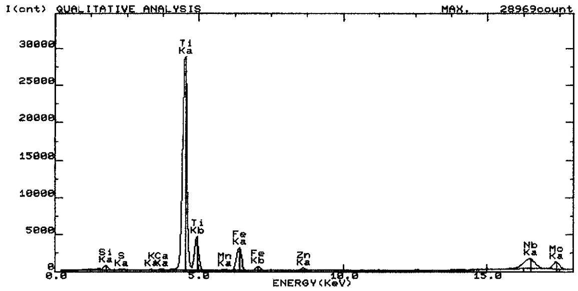
濃青色のガラス部分で検出されたのは、ケイ素、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、ストロンチウム（Sr）、コバルト（Co）、亜鉛（Zn）、アルミニウム（Al）、鉄、クロム（Cr）などである。胎土のような部分では鉄、ケイ素、アルミニウム、チタンが検出された。

資料c

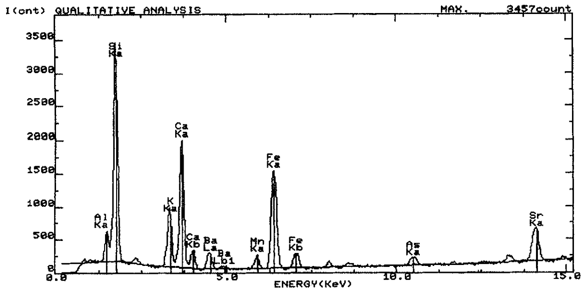
（肉眼観察）

欠損した断面から釉部分を見ると、ガラス化した層と白色の微粒子層の2層が確認される。(Pla.17の写真3)

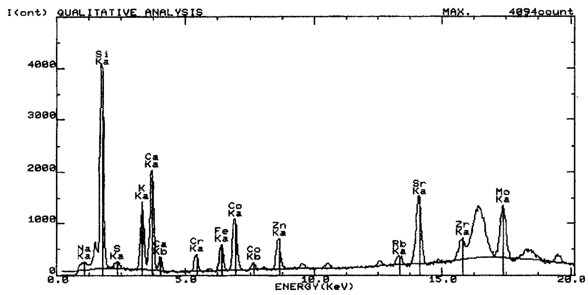
資料a　紫色物質



資料c　施釉陶器（釉部分）



資料b-1　ガラス質部分



資料b-2　胎土部分

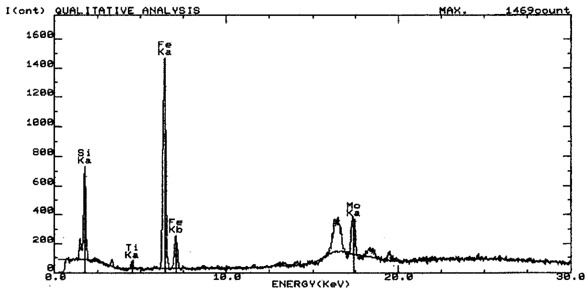


Fig.131　蛍光X線分析結果

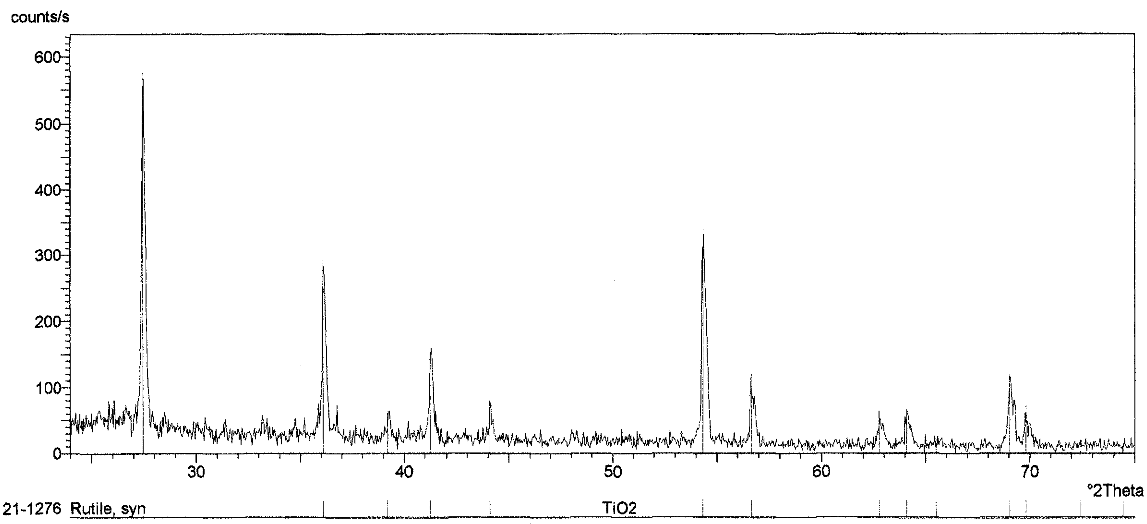


Fig.132　資料aX線回析分析結果

(分析結果)

検出された元素はケイ素、アルミニウム、カルシウム、バリウム（Ba)、ストロンチウムの他、鉄、カリウム、マンガン、ヒ素が認められた。緑釉に見られる鉛成分は認められなかった。

4.まとめ

資料aはの酸化チタンの塊である事が判明したが、なぜ紫色を呈するのかについてまではわからなかった。紫色という事に着目すると、古代中国の紫色の顔料にチタン系の鉱物が混和されていたという報

告例があるようで[1]、この資料そのものが顔料としての用途があったかどうかは別にして、粉末サンプルにした際の鮮やかな発色はまさに顔料を彷彿とさせるものであった。また、生産遺跡などから出土する鉱滓類に紫色をした部分が付着している場合があり、これらの分析との比較も有効であろうと考えている。

資料bは成分からいえばソーダ石灰ガラスであることがわかったが、古代ガラスの蛍光X線分析結果と比較すると着色剤としてのコバルトのピークが非常に顕著である事やクロム、亜鉛のピークも大きいとのご教示を福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎氏から頂いた。胎土のような部分が付着する事から釉が流れて固まったものなどを考えていたが結局分析結果からは資料の原形を推定するまでには至っていない。出土した遺構年代との整合性も含め、類似のものがないか調査を継続したい。

資料cは緑釉の主成分である酸化鉛の鉛成分が検出されなかった事から、緑釉陶器ではないと判断した。釉の種類については定量化を行っておらず、表面からの分析にすぎない事から判断は避け、含有される成分を把握するにとどまっている。

最後にこの分析にあたっては福岡市埋蔵文化財センターの比佐陽一郎、片多雅樹両氏には多大なご協力と貴重なご教示を頂いた。末筆ながら、記して感謝致します。

註1）原著は未確認だが、西域壁画の顔料分析でチタン鉄鉱（$FeTiO_3$）や金紅石(TiO_2)などが確認された報告が複数あるようである。
沢田正昭「顔料の調査研究法」『日本の美術No.400 美術を科学する』至文堂1999年より。

C.SK475出土墨書木札保存処理報告

将棋木簡・墨書木札の保存処理および経年変化について（写真2・3）

1.はじめに

将棋木簡と木札の保存処理は、遺物に対する処理の緊急性や、当市所有の保存処理設備を用いての墨書木簡の処理実績が皆無な事を考慮し、（財）元興寺文化財研究所に委託する事となった。ここでは、処理についての概略とその後の経時変化について報告する。

2.保存処理

処理前の状況は将棋木簡、木札とも墨書部分の残りが良く、木質の部分も際だった割れやヤセ等の劣化、変形を生じている部分は無かった。

処理はアルコール・キシレン樹脂法が選択され、2点とも墨書の具合も木の質感も良く仕上がっていたが、繊維に対して垂直方向の細かい亀裂が若干認められた。また、木札については処理中に反りが生じ、2つに折れ、接合と彩色により仕上げられていた。

3.経時変化

処理終了時以来、それぞれの遺物は黒いウレタンシート（厚み約7mm）の中央を遺物の形状に沿って切り抜いたものの中に挿し入れ、これを透明アクリル板（厚み約3mm）で表裏両面から挟み込んだ形で保管している。(写真2）これは、処理委託と同時にそれぞれの遺物に対して作成してもらったもので、常に両面の墨書や状態がアクリル板を通して観察できる事や、遺物に直接的な衝撃が加わらない事、そのまま展示できる事などの利点がある。この状態のままさらに菓子箱の中に入れて通常の室内環境中に置いていた。

現在、保存処理を終えてから約6年が経過しているが、処理終了時と比較してみると、将棋木簡については垂直方向の細かな亀裂が若干目につくものの、大きな変化は見られない。木札に関しては反りが大きくなったような感があり、補修部分において補修材が木質から離れている状況が見られた。(写真

3）アクリル板で押さえられている為、反りの力が逆方向に働いたものであろう。顕微鏡で観察して初めて確認できる程度の変化ではあるが、この先もまだ拡大していくようであれば何らかの対策が必要である。現在は遺物に大きな負担のかかる再処理はまだ検討しておらず、ウレタンシートの厚みを2mm程厚くして変化を観察している。

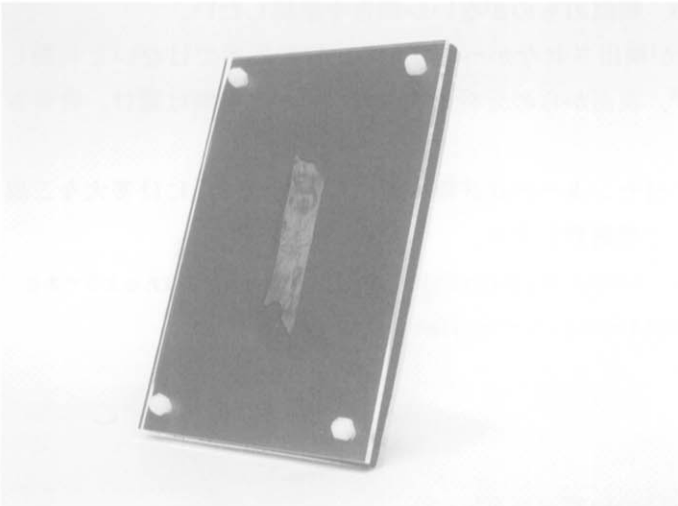


写真2　墨書木札保管状況

写真3　補修部分現況

Ⅵ．まとめ

今回の調査は、大宰府条坊のほぼ中心部の左郭1～2坊を東西に幅8m長さ200mに亘ってトレンチを入れるという、これまでにない規模の調査となった。さらに複数の遺構面が良好な状態で保存されており、左郭における道路遺構の把握と坊路認定、条坊一区画内部の状況把握をはじめ、街区の変遷を窺う上で大きな成果があった。以下、時期を追って変遷について述べる。

なお大宰府政庁跡調査における時期区分を街区との比較を行う際に有効と考え使用する。ただここでは、政庁の変遷よりもそれに伴う街区の変遷に重点を置くため、政庁I期は8世紀第1四半期建造とされる政庁域の第II期礎石建物建築以前の時期、政庁III期は藤原純友の乱後に再整備された街区の時期、政庁II期はI期とIII期の間の時期という捉え方をしている。

(1) 7世紀以前

第4遺構面に展開する遺構群等が該当する。ここではドングリを含む土坑群（SK1111·1113·1114)、自然流路とみられる溝（SD1110)、たまり状遺構（SX980·1115）が検出されている。

自然流路とたまり状遺構からはいずれも弥生時代後期頃の土器が出土している。今回の調査区で出土した遺物のうち弥生時代のものは後期に限られることから、両者はこの頃の遺構とみなしてよいだろう。ただSD1110とSX1115は近接しているものの、前者は流水堆積で、後者は滞水状態で堆積しているという差があり、これらが同時に併存していたかどうかは検討を要するところである。なおSX980·1115の埋土は類似しており、前者を花粉分析したところハンノキが繁茂していた状況を示す結果が出ている（V.自然科学分析 c-1)。

またドングリ種子が出土した土坑群については、いずれもドングリの量は少なくSK1111以外は散見される程度であった。ドングリピットという程のものではないとも考えられる。その他、時期を窺うことができる遺物は少なく、SK1111から縄文土器とみられる破片が1点出土しているのみである。これを基に縄文時代の遺構の可能性を考えている。ただこれらの土坑はSX1115の縁に広がっている状況も窺うことができることから、これらが一連のものであれば弥生時代後期まで下る遺構の可能性も考えられよう。周辺調査に期待したい。

弥生時代後期以降、古墳時代の大半は人の活動はほとんどみられず、遺構・遺物とも当該時期のものはほとんどない。大宰府成立直前まで土地の利用はなかった可能性が高いようである。

(2) 7世紀後期から8世紀初頭（政庁I期併行期、大宰府編年I～II期）

2-1.整地について

7世紀に入ると人の活動があったようで、遺物がごくわずかに認められるようになる。その後7世紀後期～末になると、広い範囲にわたって整地（茶灰色粘土層）が行われ、すぐに掘立柱建物（SB305）が建築されるなど、土地利用の大きな画期があったことを窺うことができる。狭川（1993）では、7世紀末前後に太宰府市内各所で谷や旧河川を埋める造成・整地が行われていることから、これらを条坊造営にかかわるものとして注目しているが、本調査の茶灰色粘土層もその一例とみることができよう。おそらく下層のSX1115に関わる地盤の沈み込みがあり、これを水平にすることを目的としたのであろう。なお第4遺構面検出のSK1112は、埋没後に茶灰色粘土層に覆われていることが土層観察でも明らかになっているが、ここから出土した須恵器坏は整地時期の上限を窺う資料として注目される。

2-2.遺構について

茶灰色粘土層整地直後の遺構については、同層の範囲外にも広く存在するとみられる。確かに8世紀初頭までの遺物を出土する遺構は点在している。ただ当時の遺物のみ出土した遺構の全てがこの時期の

遺構に該当するわけではなく、埋土の状況等も加味して検討する必要がある。検討の結果は本文中や遺構番号台帳に掲載しているが、これらの中で時期や性格が明らかなものに、第3遺構面検出のSB305がある。この建物は廂を有するとみられる東西棟で、正方位を意識した建物配置であることは注目される。この当時の建物検出例はそれほど多くはないが、大宰府政庁跡周辺をはじめ、榎社周辺（第43次調査）、般若寺跡付近、条坊南端付近（第136次調査）など、大宰府条坊域に関連する地域ではいずれも正方位を意識しており、条坊縁辺部丘陵上（第191次調査）、条坊域外（カヤノ遺跡・長ヶ坪遺跡）等で検出した掘立柱建物は北からやや振れた軸を基に配置している。7世紀末前後の時期に正方位を意識した配置がなされている地域については街区成立とも関連して注目していく必要があろう。

2-3.出土遺物について

この頃は大宰府の組織整備・官衙造営の初期段階といえる時期であるが、条坊のほぼ中心という位置で、比較的多くの遺物が出土したことは注目すべきである。特に調査区中心部では、整地層が良好に遺存していたことも幸いしてか、後代の整地層や遺構埋土中にもこの当時の遺物が多く含まれており、もし整地層がなかったならば、多くの遺構を7世紀末前後埋没と想定せざるを得なかったほどであった。また搬入品も多くみられた。まず畿内系の暗文土師器が比較的多く出土している。詳しい分析は行っていないが、その出土点数は当時の在地系土師器供膳具の皿bの確認点数と比べても大差がないように思われる。これらのほとんどが在地で模倣したものではなく畿内からの搬入品とみられ、都との密接な繋がりを示すものとして注目される。この他、7世紀中頃に製作されたとみられる新羅土器の蓋が第2遺構面の小穴より出土している他、茶灰色粘土層からは中国産とみられる施釉陶器が出土している。この施釉陶器については遺物の項で詳しく述べているが、古代から中世に至る時期の国内屈指の貿易陶磁器消費地である大宰府における初現期の舶載陶磁器例として注目される。類例が乏しく具体的な産地等の特定はできていないが、古越州窯系青磁など唐前期の陶磁器の可能性をも想定しつつ、今後の類例増加を待ちたい。

（3）奈良時代（政庁II期前半、大宰府編年III～V期）

3-1.整地について

8世紀も引き続き活発な活動が窺え、本調査区においては、平安時代中期以降と並んで一つのピークを形成する。当期の遺物は調査区全体からかなり多く出土しており、遺構も多いようである。

奈良時代中～後期頃になると茶褐色粘土層等の整地層が堆積する。これも下層のSX1115に関連した茶灰色粘土層の沈み込みが原因とみられるが、この整地は沈み込みとは直接関係ないとみられる西側にも広がっている。ところが、東側は左郭一坊路の位置で止まり左郭二坊には至っていない。この茶褐色粘土層整地以前の左郭一坊路は検出していないが、このことは、範囲の意識があったことを想定させる事象とも考えられる。今後、左郭一坊路が検出されることを期待したい。

3-2.条坊区画関連遺構について

茶褐色粘土層堆積後には、政庁II期の街区割りに関する道路・区画が施工されている状況をみることができる。SD001（推定朱雀大路東側溝）、SF200（左郭一坊路）、SF210（左郭一坊内坊間路）のほか、東西に走行する溝SD935等がこれに該当する。

推定朱雀大路については調査事例も増えてきた。この頃は約35～36mという推定朱雀大路の中でも最大幅をもつ時期である。最新の第200・220次調査等の成果によると、最大幅をもつ時期が奈良時代から平安時代前期末・中期頃に亘っているとみられる。また平安時代中期以降徐々に路面幅が縮小されることが第64・133次調査成果から論じられている。こうした調査研究に照らすと今回検出したSD001は路面幅が最大の時期のものということができる。なお、今回検出したS-22・23は埋土差によ

るものと解釈しSD001に統合して報告した。ただ、第181・220次調査では側溝の掘り返しによる溝同士の切り合いが確認され、第133次調査では陸橋状に溝が途切れている部分も検出されるなど、北から南まで溝一条で伸びているわけではない状況が知られるようになっている。SD001の検出範囲が狭小だったこともあり具体的な様相は不明だが、今後の調査で明らかになるものと期待したい。

左郭における条坊関連南北道路について、調査時点では、条坊プランは政庁中軸線を軸に線対称だと考えられていた。ところが、右郭で検出した南北路を折り返した位置と異なる位置で南北溝が集中するところが数箇所検出され、いずれが坊路であるかの判断に苦慮することとなった。右郭の調査例を基に条坊復元案を検討した狭川（1990）では、奈良～平安時代中・後期にかけてほぼ同位置で溝群が掘削され、長期間大区画境界・道路として利用されたことを述べている。これを基に本調査の遺構をみてみると、SF200とその後SF190に引き継がれる道路が最適と考えられた。この後第181・199次調査においてSF200（190）の北延長にあたる位置より同様の溝群（道路）が検出され、これを左郭一坊路と考えるに至った（井上（1997）他）。その後左郭では条坊区画に伴うとみられる南北溝群（道路）の検出例が相次ぎ（第157・209・217次調査他）、SF200（190）を含むこれらの南北溝群（道路）の芯々間距離が左右両郭を通してほぼ等間隔（約90m）あったと想定されるようになっている（井上(2001)）。

SF200はほぼ同じ位置で掘り替えがなされている。施工時期については、茶褐色粘土層に切り込んでいるため、同層の整地時期（8世紀中～後期）をもって施工の上限とすることも考えられなくはないが、前述のように茶褐色粘土層は一坊内の広範囲で、しかも左郭一坊内に限って整地されていることを考えると、すでに一坊の範囲が確定していたことも推測される。SF200自体かなり削平されていること、茶褐色粘土層を含む側溝の基盤層は比較的やわらかく削られやすいものであること、SF200の側溝が比較的幅広く検出されていることを考えると、前段階の道路側溝は消失していることも十分考えられよう。また第3遺構面でもこの付近の遺構密度は上層と同様低く、ここが道路路面だった可能性も今後検討する必要がある。北側が丘陵地であり、これに向かって地形が上がっていることも削平を受けた原因の一つとみられ、南側に向かって残存状況はよくなっていることから、南側の調査で明らかになることを期待したい。

3-3.坊間路（溝）について

大宰府条坊跡では坊路以外にも南北溝群（道路）は検出される。付近は小穴密度が周囲と比べて低い傾向にあることも特徴的で、長年にわたって敷地境と認識されてきた結果によるものと考えられる。このような溝群は条坊一区画内部を区切るものと考えられ、宅地割りに伴う遺構とみることができる。このほか溝・道路以外にも、柵列が敷設されたり、井戸・土坑等の大型遺構が密集しているところもある。こうした遺構のあり方は条坊間を1/2ないしは1/4する位置で検出される傾向にあるようである。また、時期によってはこの位置に建物が建つなど、土地利用に変化がみられ、空間利用の変遷を窺うことができる。この点において条坊路遺構のあり方と大きく異なっている（井上（1997）他）。こうした状況を本調査区でよりよく窺うことができた。

SF210は推定朱雀大路（SF300）と左郭一坊路（SF200）との間に位置することから左郭一坊内の坊間路と考えられる。この遺構は推定朱雀大路の東側溝SD001とSF200の間を、およそ三等分した場合の中央西側の境界上に位置している。本遺構の北延長上においては、第181次調査で空閑地が、第220次調査で8世紀初頭頃の南北に走向する柵列・東西道路の陸橋等が検出されており、いずれも宅地境界に関するとみられる（いずれも未報告）。他の坊と異なり1/3で分割しているのは、左郭一坊の東西幅が狭いことに理由があるとみられる。前項3-2の坊路認定で述べたように、坊路は左右両郭を通し

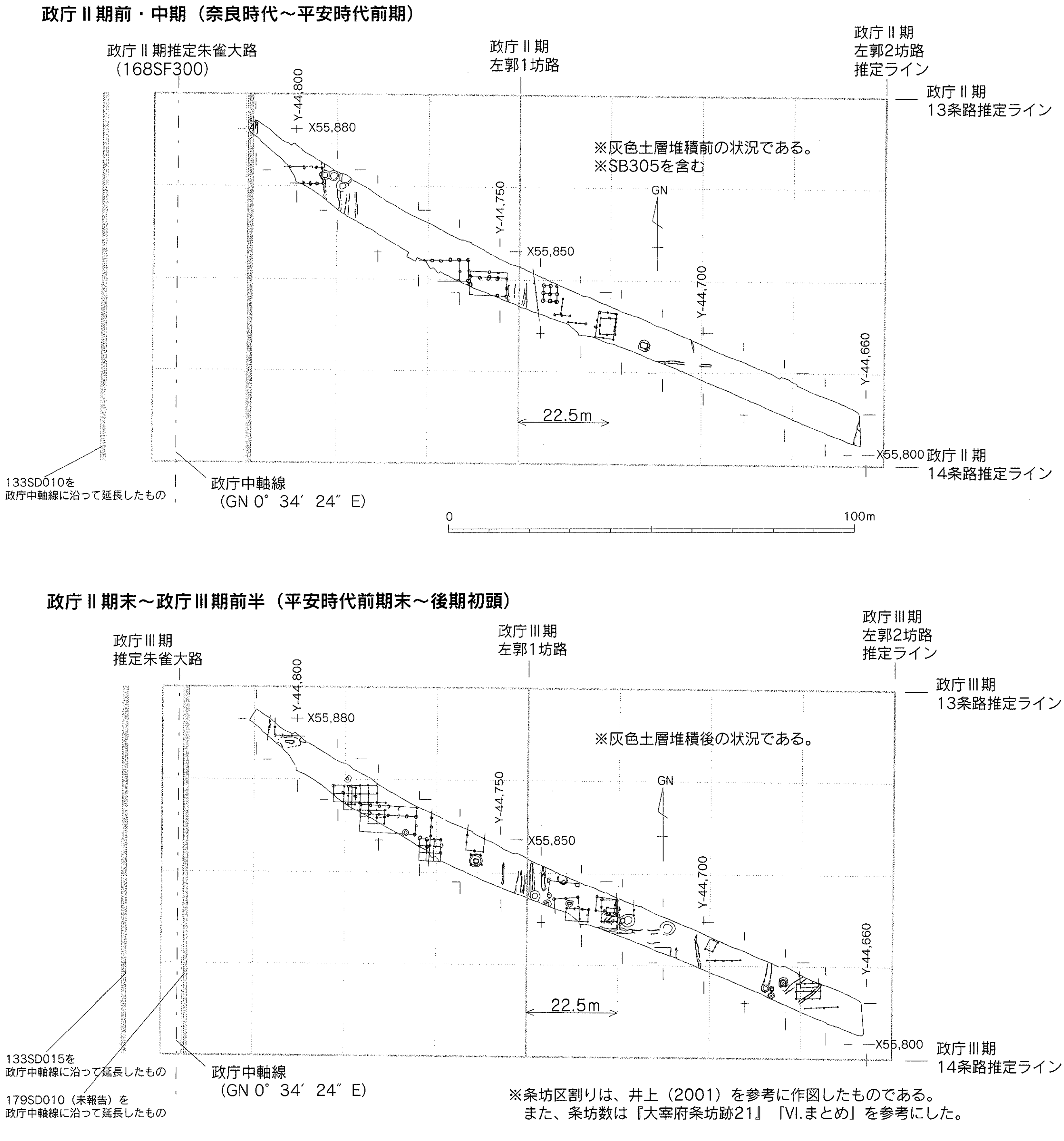


Fig.133　第168次調査における政庁Ⅱ～Ⅲ期の区割り状況（1/1,500）

て約90m間隔で設計されていることが明らかになりつつある。ただ条坊中央においては推定朱雀大路が第II期政庁の位置と関連して幅36mもの広さで占有しているため、位置の制約から左郭一坊については東西幅が他坊と比べて3/4しかなく、西側1/4が推定朱雀大路に充てられている状況である。左郭一坊内部を三等分する理由はこのためだと考えられる。

SF210廃絶後は井戸が密集して掘削される上、その後も柱穴等に想定されるような小穴は周辺と比べて極端に少ない。本遺構廃絶後もここに境界もしくは境界意識が存在し続けたことは注目される。

条坊関連東西道路（溝群）についても同様の内容で条路・条間路認定ができると考えているが、これ

については、南北道路ほど設計が厳密ではない様子も窺える。その中でもSD935については条間を1/4した南側の境界上に位置するようであるが、類例の増加を待ちたい。

3-4.平安時代前期の状況（政庁II期後半、大宰府編年VI～VIII期）

奈良時代は活発な活動が行われていたことが窺えるが、平安時代前期前半（大宰府編年VI～VII期）については明確ではない。これは当期の遺物が非常に少なく、井戸や土器集積等の遺構以外からはほとんど出土していないことに起因する。ただ、出土遺物から遺構の時期を想定するため、この頃の遺構でも前代の遺物しか含まない場合は古く見なしている可能性は考えられる。当期の遺構は左郭一坊坊間に井戸が集中しているほか、左郭二坊路推定ラインの西に隣接し道路側溝の可能性も想定されるSX1000や、左郭二坊坊間（Y=-44,700付近）を南北に走行するSD495・SX663などが検出されている。奈良期ほど活動が活発ではないにせよ、街区はそれなりに機能していたと考えている。なおSX1000は左郭一坊路としたSF200より約85mほど東にあり、第209次調査（未報告）で検出されている左郭二坊路の推定ライン西側に位置している。肝心の推定ライン部分は、種々の制約で今回は調査ができなかったが、SX1000が左郭二坊路に関する遺構の可能性もある。今後の調査に期待したい。

さてこの時期、灰色土層（茶灰色土層）が広い範囲で堆積する。灰色土層の時期の特定については本文中に述べるとおり困難な状況にはあるものの、大宰府編年VIII期の遺構（SD430・SE490）、同編年IX期の井戸（SE425）等に切られていることから、平安時代前期末の堆積と考えるのが妥当であろう。平安時代前期に推定朱雀大路周辺で大規模な整地が行われたことはすでに指摘されており、同様の成果を得られたとみている。

（4）平安時代前期末～中期（政庁II期後期～政庁III期前期、大宰府編年VIII～XI期）

灰色土層堆積した前後の遺構・遺物についてはよくわからない。ただ左郭一坊路（SF190）は灰色土層上に新たに掘削されている。

大きく動きが認められるのは平安時代中期（大宰府編年X～XI期）になってからである。この頃になると、埋没した遺構の他、新たに掘削された井戸・建物などをみることができる。この時期は政庁III期の条坊施工時期と考えられているが、左郭一坊路（SF190）に伴う側溝SD405等（SD400も含む可能性あり）がこれを前後する時期に埋没し、同じくSF190側溝のSD275・400がその後掘り直されたと想定することもできよう。ただし本文中にも述べたように側溝埋没時期の認定に未だ疑義があるため、詳細については周辺調査に期待したい。

この頃の宅地割りについても注目すべき点が見受けられる。政庁III期には推定朱雀大路は縮小し、第133次調査検出の133SD015（西側溝）および第179次調査検出の179SD010（東側溝、未報告）が最狭期の側溝とみられる。179SD010は左郭一坊路推定ラインから約90m西に位置しており、この時期に至ってようやく左郭一坊は他坊の東西幅と同規模を有することになったといえよう。このことで左郭一坊でも東西幅を四分割した土地利用が認められるようになる。

推定朱雀大路東側溝（SD001）が位置していた左郭一坊西端1/4坊の東の境には、柵SA027が設置される。SD001上面の削平土は平安時代中～後期の遺物を含むため、この時期あるいはそれ以前に掘削されており、段差の脇にSA027が設置されたとみられる。

左郭一坊坊間1/2の地点は前代に続き井戸が掘削され（SE040）、周辺に比べて小穴が少ないなど、境界意識があったことを窺うこともできる。ただある時期にはSB100という大型の総柱掘立柱建物が建設されている。坊の中心を占有する大型建物であり、建物の性格、当時の土地利用を検討する上で興味深い事例といえる。

左郭一坊東側1/4坊間境の、前代にSB250やSB095といった掘立柱建物が建っていた位置には、柵

SA120が設置される。この柵はSB080と柱筋を並べることから同契機で設置された可能性も考えている。

左郭二坊西側1/4坊間では、SF180と北側敷地との出入口とも想定される側溝の張り出し部分が設けられている。こうした遺構は第220次調査に同様の検出例がある。これは条間1/4の位置で検出されており、同様に宅地内への出入り口と想定している（未報告）。

左郭二坊の1/2坊間ではSF185を検出した。左郭二坊東側1/4坊間境では南北溝SD860を検出し、付近には当期の井戸が密集している。

こうした境界付近の東西両側の小穴の密度に違いがみられたり、その部分の小穴の密度が周囲と比べて低い傾向にあるなど、境界だったことを間接的に裏付けることができるものも多いことも前述のとおりである。ただ、坊路のように空閑地が継続していた状況とも言い難い。他所より少ないながらも小穴や建物跡が検出されることは、宅地範囲や境界が変化した結果として捉えることができ、坊間1/4を境界とするのは永続的なものではなかったことを推察することができる。坊間1/2の地点でも坊間1/4ほどではないにせよ変化が認められるのは同様である。ただ坊間を四等分するという意識は保たれたと推測される。

なお、SF185・SD860は坊間を四等分する各境界より若干西に偏っているようである。この理由は明確ではないが、前述のSX1000が左郭二坊路推定ラインより西側で検出されたことも関係するとも考えられる。またSF215など北東－南西方向を意識した遺構がSF185以東にみられるなど、左郭二坊東側の土地利用が他と異なっていたことも窺うことができる。調査区東端（Y=-44,660以東）で検出した遺構はほとんどが近現代のものであり、この南の般若寺丘陵に沿った部分の試掘調査でも、遺構はほとんど検出されないことなど、付近は広く削平を受けているとみられている。こうしたことから、当時、般若寺が所在する東の丘陵がこの付近まで伸びていて、ここでは丘陵際に沿った土地利用をしていたことも推測できなくはないだろう。

現状では付近の左郭二坊路が明確でないこと、また鎌倉時代の遺構とみられるSX302を道路とする見解もあることなど不明な点が多く、周辺調査を待ちたい。

(5) 平安時代後期以降（政庁III期前半、大宰府編年XI～XII期）

今回検出した遺構の大半は、大宰府編年XII期（11世紀後～12世紀初頭）頃には廃絶している。この様相は周辺調査事例とほぼ同様といえよう。その後については具体的な様相は明らかではなく、調査区西端で検出されたSX302が埋土に鎌倉時代の遺物をわずかに含んでいるほか、ごくわずかに鎌倉期の遺物が散見される程度である。

なおこの頃の遺物として特記すべきものに、SK475から出土した墨書木札が2点がある。この中の1点に「□桂馬香車歩兵」という将棋駒名を記すものあった。将棋関連資料としては、興福寺境内出土の将棋駒が11世紀中頃に遡る国内最古例として知られるが、この他11世紀に遡るものとして、但馬国府推定地例（共伴資料に嘉保（1094～96）年銘の資料あり）が知られる。本遺構は11世紀末～12世紀初頭に埋没したもので、後者とほぼ同時期のものといえる。本資料は木札を切って使用すれば駒として利用できそうであるが、これを実際に遊戯に使用していたかどうかは不明である。このころ大宰府において将棋の駒を占いに使用していたことを窺う史料もあることから、今後こうした観点からも検討する必要はあろう。（『長秋記』大治四年五月二十日条）(註)

(6) さいごに

以上、本調査区からみた土地利用の変遷をみてきた。条坊施工状況や条坊内部の変遷について窺う重要な内容を含んでいる画期的な調査であったといえよう。出土遺物も多種多様で、当時の様子を解明す

る上での新知見も多かったといえる。

調査成果はこの他にも多岐にわたっており、この項で全てを述べることはできなかったが、今後の調査研究の進展に期する部分も多い。

なお本調査区周辺には、同様に密度高い遺構・整地層が包蔵されている可能性が高いが、ここに開発の波が押し寄せ、記録保存措置を採らざるを得ない状況は目前まで迫っている。遺跡の調査·記録・保存は、遺跡の破壊と引き換えに過去の情報を現在·未来に提供するものである。本調査で新たに生まれた問題点や課題を基に、今後の調査・研究で活かし、また得られた情報を広く公開・共有することが重要である。

註) 『長秋記』大治四(1129)年五月廿日丁酉条

(前略)

新院御方覆物御占事、

新院御方有覆物御占、覆以将棊馬、其數十二也、新院如指令占給、依前生戒力受人主法給、依是諸事如此歟、主典代通景進占書一帖、號靈棊経(筭カ)、以管占之、唐人自筆也、兄通国朝臣於鎮西傳学云々、

【参考文献】

狭川真一「大宰府条坊の復原-発掘調査成果からの試案-」
『条里制研究第6号』条里制研究会　1990年

狭川真一「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢第30集』九州古文化研究会　1993年

太宰府市史編集委員会編『太宰府市史考古資料編』太宰府市　1993年

『大宰府条坊跡第136次調査』筑紫野市文化財調査報告書第42集　筑紫野市教育委員会　1994年

『大宰府条坊跡VIII』太宰府市の文化財第29集　太宰府市教育委員会　1995年

『大宰府条坊跡IX』太宰府市の文化財第30集　太宰府市教育委員会　1995年

井上信正「大宰府条坊の町並み」『遺跡だより第31号』　太宰府市教育委員会　1996年3月

井上信正「大宰府条坊の発掘～大宰府条坊跡第168次調査速報」
『都府楼第21号』　古都大宰府保存協会　1996年3月

井上信正「平安時代の将棋」『遺跡だより第32号』　太宰府市教育委員会　1996年7月

井上信正「発掘調査の見解が変わる!?」
『遺跡だより第33号』　太宰府市教育委員会　1996年9月

井上信正・中島恒次郎「1995年度出土の木簡　～福岡・大宰府条坊跡～」
『木簡研究』第18号　日本木簡学会　1996年12月

宮崎亮一「御笠軍団発見?」『遺跡だより第38号』太宰府市教育委員会　1997年5月

井上信正「大宰府条坊の区割りについて-発掘調査からの試案-」
『条里制研究第13号』条里制研究会　1997年

井上信正「大宰府出土の将棋関連資料」
『考古学ジャーナル』No.428　ニューサイエンス社　1998年3月

『大宰府条坊跡X』太宰府市の文化財第37集　太宰府市教育委員会　1998年

井上信正「大佐野の古代のムラ」『遺跡だより第46号』太宰府市教育委員会　2000年9月

井上信正「大宰府の街区割りと街区成立についての予察」
『条里制・古代都市研究通巻17号』条里制・古代都市研究会　2001年12月

『大宰府条坊跡20』太宰府市の文化財第60集　太宰府市教育委員会　2002年

『大宰府条坊跡21』太宰府市の文化財第61集　太宰府市教育委員会　2002年

『大宰府条坊跡-第200次発掘調査-』
筑紫野市文化財調査報告書第75集　筑紫野市教育委員会　2003年

大宰府条坊跡第168次調査　柵列・掘立柱建物・溝の座標・方位一覧

※数値は小数点以下第4位を五捨五入している。
※政庁南門中点は、X=56,708.680、Y=-44,820.730（国土座標第II系）である。
※政庁南門中点からの距離は、政庁中軸線の振れ（G.N.0°　34′　24″　E）を考慮
※道路は各側溝芯々間任意中点を計測している。

遺構名	計測位置	X座標	Y座標	政庁南門中点からの距離(m) 南北距離(Δx)	東西距離(Δy)	遺構の方向
168SA027	北端任意中点	55879.347	−44806.861	−829.153	22.167	G.N.6°　16′　34″　E
	南端任意中点	55875.919	−44807.238	−832.584	21.824	
168SA120	北端任意中点	55855.508	−44767.014	−852.592	62.250	G.N.3°　41′　37″　E
	南端任意中点	55846.911	−44767.569	−861.194	61.782	
168SA150	東端任意中点	55809.256	−44667.082	−897.842	162.640	G.E.2°　41′　53″　N
	西端任意中点	55808.875	−44675.167	−898.303	154.560	
168SA320	北端任意中点	55842.325	−44741.395	−865.518	88.000	G.N.6°　50′　33″　W
	南端任意中点	55835.758	−44740.607	−872.076	88.854	
168SA520	北東端任意中点	55839.288	−44730.959	−868.450	98.466	G.E.7°　47′　5″　S
	北西端任意中点	55840.238	−44737.908	−867.570	91.508	
168SA525	北端任意中点	55836.181	−44730.998	−871.557	98.458	G.N.5°　56′　4″　W
	南端任意中点	55830.861	−44730.445	−876.872	99.064	
168SA808	東端任意中点	55820.579	−44691.032	−886.759	138.578	G.E.0°　0′　0″
	西端任意中点	55820.579	−44699.229	−886.841	130.382	
168SA975	北端任意中点	55838.510	−44734.369	−869.262	95.064	G.N.8°　41′　42″　E
	南端任意中点	55834.894	−44734.922	−872.884	94.547	
168SA985	東端任意中点	55832.342	−44728.788	−875.374	100.706	G.E.5°　37′　46″　S
	西端任意中点	55832.762	−44733.049	−874.997	96.441	
168SA990	北東端任意中点	55834.269	−44732.820	−873.488	96.655	G.E.7°　35′　15″　S
	北西端任意中点	55834.758	−44736.491	−873.035	92.980	
168SB010	南東端任意中点	55875.699	−44801.308	−832.745	27.756	G.E.1°　57′　8″　S
	南西端任意中点	55875.845	−44805.591	−832.642	23.472	
168SB020	北東端任意中点	55870.616	−44793.574	−837.750	35.541	G.E.1°　32′　35″　S
	北西端任意中点	55870.832	−44801.593	−837.614	27.520	
168SB060	北西端任意中点	55863.072	−44787.410	−845.232	41.780	G.N.1°　28′　22″　E
	南西端任意中点	55858.794	−44787.520	−849.511	41.713	
168SB080	北東端任意中点	55858.004	−44770.616	−850.132	58.624	G.E.3°　28′　45″　S
	北西端任意中点	55858.835	−44784.284	−849.438	44.948	
168SB095	北東端任意中点	55850.046	−44764.679	−858.030	64.640	G.E.3°　3′　53″　S
	北西端任意中点	55850.328	−44769.946	−857.801	59.370	
168SB100	北東端任意中点	55863.386	−44780.299	−844.847	48.887	G.E.1°　3′　35″　S
	北西端任意中点	55863.584	−44791.002	−844.756	38.183	
168SB145	南東端任意中点	55811.158	−44671.292	−895.982	158.411	G.E.0°　45′　32″　N
	南西端任意中点	55811.080	−44677.180	−896.119	152.524	
168SB250	北東端任意中点	55847.929	−44757.734	−860.078	71.606	G.E.0°　21′　30″　S
	北西側任意中点	55847.997	−44768.606	−860.118	60.734	
168SB290	北西端任意中点	55841.823	−44739.150	−865.997	90.250	G.N.2°　51′　53″　E
	南西端任意中点	55837.986	−44739.342	−869.836	90.096	
168SB305	北東側任意中点	55843.597	−44748.202	−864.314	81.181	G.E.2°　42′　28″　S
	北西側任意中点	55844.029	−44757.336	−863.973	72.043	
168SB420	北西側任意中点	55851.186	−44758.236	−856.826	71.071	G.N.5°　22′　31″　E
	南西端任意中点	55847.615	−44758.572	−860.400	70.771	
168SB515	北西端任意中点	55846.520	−44757.356	−861.483	71.998	G.N.0°　27′　17″　E
	南西端任意中点	55844.126	−44757.375	−863.877	72.003	
168SB530	北東端任意中点	55833.233	−44728.306	−874.478	101.179	G.E.3°　5′　19″　S
	北西端任意中点	55833.530	−44733.810	−874.236	95.673	
168SB535	北東端任意中点	55835.442	−44721.538	−872.202	107.925	G.E.8°　2′　26″　S
	北西端任意中点	55836.101	−44726.203	−871.589	103.254	
168SB540	北東端任意中点	55835.577	−44721.200	−872.063	108.262	G.N.0°　31′　48″　E
	南東端任意中点	55830.172	−44721.250	−877.468	108.266	
168SB545	北東端任意中点	55833.196	−44720.642	−874.439	108.843	G.E.8°　57′　9″　S
	北西端任意中点	55833.702	−44723.854	−873.965	105.626	
168SB550	北西側任意中点	55835.358	−44721.402	−872.284	108.062	G.N.1°　5′　35″　E
	南西端任意中点	55831.794	−44721.470	−875.849	108.029	
168SB810	北東端任意中点	55825.078	−44696.692	−882.316	132.873	G.N.25°　16′　18″　E
	南東端任意中点	55822.695	−44697.817	−884.711	131.772	
168SB940	北東端任意中点	55833.573	−44721.381	−874.069	108.101	G.N.3°　9′　38″　E
	南東端任意中点	55829.625	−44721.599	−878.019	107.922	
168SB950	北東端任意中点	55834.764	−44721.156	−872.876	108.314	G.N.8°　5′　30″　E
	南東端任意中点	55828.504	−44722.046	−879.144	107.486	
168SB995	北西側任意中点	55816.699	−44676.353	−890.492	153.295	G.N.2°　17′　26″　W
	南西端任意中点	55813.824	−44676.238	−893.365	153.439	

168SD001	北端任意中点	55881.350	−44810.054	−827.182	18.954	G.N.0° 12′ 5″ E
	南端任意中点	55879.928	−44810.059	−828.604	18.963	
168SD055	北端任意中点	55871.415	−44793.525	−836.951	35.582	G.N.3° 47′ 55″ W
	南端任意中点	55863.041	−44792.969	−845.319	36.221	
168SD260	北端任意中点	55864.640	−44789.506	−843.685	39.668	G.N.2° 18′ 17″ W
	南端任意中点	55860.416	−44789.336	−847.907	39.880	
168SD265	北端任意中点	55864.387	−44785.407	−843.897	43.770	G.N.1° 18′ 28″ W
	南端任意中点	55858.824	−44785.280	−849.459	43.952	
168SD270	北端任意中点	55863.890	−44787.309	−844.413	41.873	G.N.6° 0′ 53″ E
	南端任意中点	55859.192	−44787.804	−849.116	41.425	
168SD275	北端任意中点	55842.278	−44745.328	−865.604	84.068	G.N.4° 30′ 43″ E
	南端任意中点	55837.678	−44745.691	−870.208	83.751	
168SD295	北端任意中点	55840.974	−44743.563	−866.890	85.846	G.N.5° 48′ 16″ E
	南端任意中点	55837.226	−44743.944	−870.642	85.502	
168SD255	北端任意中点	55841.558	−44747.716	−866.348	81.687	G.N.4° 28′ 36″ E
	南端任意中点	55838.071	−44747.989	−869.838	81.449	
168SD280	北端任意中点	55842.322	−44743.121	−865.538	86.274	G.N.0° 4′ 20″ E
	南端任意中点	55836.766	−44743.128	−871.094	86.323	
168SD285	北端任意中点	55841.837	−44746.889	−866.061	82.511	G.N.2° 36′ 35″ E
	南端任意中点	55838.963	−44747.020	−868.936	82.409	
168SD400	北端任意中点	55843.948	−44742.390	−863.905	86.989	G.N.0° 32′ 9″ W
	南端任意中点	55837.960	−44742.334	−869.892	87.105	
168SD405	北端任意中点	55841.938	−44744.207	−865.933	85.192	G.N.6° 23′ 30″ E
	南端任意中点	55837.412	−44744.714	−870.464	84.730	
168SD410	北端任意中点	55844.490	−44749.164	−863.431	80.210	G.N.3° 46′ 1″ E
	南端任意中点	55839.888	−44749.467	−868.035	79.953	
168SD430	北端任意中点	55843.299	−44739.540	−864.525	89.845	G.N.3° 3′ 44″ W
	南端任意中点	55838.327	−44739.274	−869.494	90.161	
168SD455	東端任意中点	55827.597	−44712.126	−879.952	117.415	G.E.1° 59′ 4″ S
	西端任意中点	55827.953	−44722.400	−879.699	107.138	
168SD485	東端任意中点	55824.445	−44710.938	−883.092	118.634	G.E.0° 57′ 14″ N
	西端任意中点	55824.429	−44711.899	−883.118	117.674	
168SD505	北端任意中点	55826.264	−44701.928	−881.183	127.626	G.N.7° 31′ 34″ W
	南端任意中点	55819.308	−44701.009	−888.129	128.614	
168SD815	北東端任意中点	55820.877	−44688.394	−886.434	141.213	G.E.14° 4′ 5″ N
	南西端任意中点	55818.330	−44698.558	−889.083	131.075	
168SD860	北端任意中点	55819.569	−44683.879	−887.697	145.741	G.N.10° 6′ 50″ E
	南端任意中点	55814.759	−44684.737	−892.515	144.931	
168SD880	北東端任意中点	55816.185	−44675.259	−890.995	154.394	G.N.53° 30′ 58″ E
	南西端任意中点	55812.795	−44679.843	−894.430	149.844	
168SD890	北東端任意中点	55814.174	−44671.431	−892.967	158.242	G.N.52° 21′ 11″ E
	南西端任意中点	55810.310	−44676.440	−896.881	153.272	
168SD935	東端任意中点	55821.936	−44698.343	−885.475	131.254	G.E.5° 9′ 47″ S
	西端任意中点	55822.870	−44708.680	−884.644	120.908	
168SF185	北側任意中点	55824.631	−44704.651	−882.843	124.919	G.N.5° 20′ 28″ W
SD480・505間	南側任意中点	55820.406	−44704.256	−887.064	125.356	
168SF190	北側任意中点	55842.788	−44742.434	−865.065	86.956	G.N.0° 35′ 12″ E
SD275・430間	南側任意中点	55838.002	−44742.483	−869.851	86.955	
168SF190	北側任意中点	55842.618	−44741.874	−865.230	87.518	G.N.1° 26′ 51″ E
SD405・430間	南側任意中点	55837.869	−44741.994	−869.980	87.446	
168SF190	北側任意中点	55843.113	−44743.859	−864.754	85.528	G.N.1° 39′ 58″ E
SD275・400間	南側任意中点	55837.819	−44744.013	−870.050	85.427	
168SF200	北側任意中点	55841.406	−44745.226	−866.475	84.178	G.N.4° 25′ 12″ E
SD285・295間	南側任意中点	55838.094	−44745.482	−869.789	83.956	
168SF200	北側任意中点	55841.940	−44745.418	−865.943	83.981	G.N.1° 46′ 24″ E
SD255・280間	南側任意中点	55837.418	−44745.558	−870.466	83.886	
168SF210	北側任意中点	55864.662	−44789.257	−843.661	39.917	G.N.2° 2′ 52″ W
SD055・265間	南側任意中点	55861.026	−44789.127	−847.295	40.083	
168SF215	北東側任意中点	55815.180	−44673.345	−891.980	156.318	G.N.52° 54′ 26″ E
SD880・890間	南西側任意中点	55811.553	−44678.142	−895.655	151.558	
168SX1000	北側任意点	55807.188	−44661.292	−899.851	168.451	G.N.10° 5′ 45″ E
	南側任意点	55802.431	−44662.139	−904.617	167.651	

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（1）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
1	168SD001	溝	政庁II期の推定朱雀大路東側溝。S-22・23が該当。	灰褐色粘質土（S-22）→黒灰色粘質土（S-23）		1(2or3)		70地区
2		小穴群				1	平安～	BWBX67
3		土坑				1	平安～	BX66
4	168SB020	小穴	168SB020の柱穴	掘方→柱痕		1	平安前～	BV65
5	168SK005	土坑	東西に走行。15と関連か。	暗灰色粘土埋土。		1	XIII期～	BW66
6		小穴群				1	奈良～平安	BVBW65～66
7		小穴群				1	奈良～平安中	BVBW66
8		小穴群				1	平安後～	BV65
9		小穴群				1	奈良～平安	BUBV65
10	168SB010	掘立柱建物	3×2間以上。12・39・29の一部・34の一部が該当。			1	平安中～後	BW66～68
11		小穴				1		BV65
12	168SB010	小穴	168SB010の柱穴	掘方→柱痕		1	平安前～	BW67
13		小穴		掘方→柱痕		1	奈良～	BW67
14		小穴			15→14	1	平安後	BW66
15	168SK015	土坑	東西に走行。5と関連か。	黄茶色土→黒灰色土	74・79・81→15→47・14	1	平安後	BW66～68
16		土坑		暗茶色土		1	XII期	BV65
17		土坑		暗茶色土	21→18→17	1	IX期前後	BV65
18		土坑		暗灰色土	21→18→17	1		BV65
19		小穴			19→16	1	平安か	BV65
20	168SB020	掘立柱建物	5×2?間を検出。4・20b・20c・53の一部・57の一部・62・76の一部・77・94が該当。		55→63・66・109→20→(25)	1	～平安前	BT65～66
21		小穴群	18除去後検出			1	奈良	BV65
22	168SD001	溝	推定朱雀大路東側溝。埋土の一部か	灰色粘質土	22→23	1(2or3)	奈良～	BY70
23	168SD001	溝	推定朱雀大路東側溝。埋土の一部か	黒灰色粘質土	22→23	1(2or3)	奈良～平安前	BY70
24		たまり	包含層の可能性もある。	灰褐色砂質土	300→24	1	平安前～	BY70
25	168SE025	井戸	方形縦板井戸枠で底に曲物を据える	茶黄色土→灰色粘土→灰色砂土→灰褐色砂→暗灰色土→灰黄色土	35・55・93→25→69・89	1	VIB期掘削、VIII期埋没	BU64
26		小穴群				1	平安前～	BX69
27	168SA027	柵列	a～h（d・gは除く）が該当。bは石が投げ込まれている。	黒色土		1	平安中～後期	BX69
28		たまり				1	平安	BY69
29	168SX029	小穴群				1	奈良～平安	BX68
30		土坑	方形を呈す	黒灰色砂→黒色土	107→104→30	1	VII期	BU63
31		カクラン	三和土に類するもので基礎枠をつくり、中に灰色粗砂が入っている。埋土から昭和14年の銭貨が出土。			1	昭和	BX68
32		土坑		黒色土		1	平安中～後	BX69
33		たまり状遺構				1	平安中～後	BX68～69
34		小穴群				1	奈良～平安	BW68
35	168SE035	井戸	方形縦板井戸枠で底に曲物を据える	黄茶色土→灰色粘土→暗灰色粘土→暗灰色土→暗茶色土	35→25・64	1	平安前期掘削、VII期埋没	BU63
36		浅いたまりか		灰茶色粘土+白色土ブロック・黄色土ブロック		1	平安後～	BX69
37		小穴		掘方→柱痕		1	平安	BW68
38		小穴群		黒色土		1	奈良	BX68
39	168SB010	小穴	168SB010の柱穴			1	平安中～	BW67
40	168SE040	井戸	方形縦板井戸枠で底に曲物を据える	茶褐色土→暗灰色土下層→暗灰色土→暗茶色土	45→40→108	1	XI～XII期	BT62
41		小穴				1	平安中～後	BW68
42		小穴	36除去後検出			1	平安後～	BX69

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（2）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
43		小穴群				1	平安中〜後	BW67〜68
44		小穴群				1	平安	BV67
45	168SE045	井戸	横板を４段に組んだ方形井戸枠	灰色砂→明黄色粘土→黄灰色粘土→灰色粘土→暗灰色粘土→暗灰色土→茶褐色土(暗茶色土)		1	平安前〜VII期	BT62〜63
46		小穴群				1	平安中〜	BX69
47		小穴群			15→47	1	平安中〜後	BW67付近
48	168SX048	小穴群				1	奈良〜平安	BTBU65〜66
49		小穴群	奈良時代の遺物多い			1	奈良〜平安	BU65〜66
50	168SE050	井戸	方形縦板井戸枠。付近で最も古い井戸。出土遺物に特殊品や搬入品が多い。	灰色砂→灰黄色粘土→暗灰青色粘土→灰色粘土→灰茶色土→暗茶色土	50→45→108→83·104	1	V〜VIA期	BU62〜63
51		小穴群				1	奈良中〜平安	BU65
52		小穴群				1	奈良〜平安	BT64〜65
53		小穴群				1	奈良後〜平安前	BV66
54	168SX054	小穴群				1	平安後〜	BV66〜67
55	168SD055 168SF210	溝	南北に走行。政庁II期の宅地割りに関する溝または道路側溝。	灰茶色粘土（第3遺構面の遺構にみられる埋土に類似）	55→20→25·93·101	1(<3)	〜奈良	BSBT64
56		小穴群	BTBU64〜65地区で同番号のものはS-1118に変更した。			1	平安	BV67
57	168SX057	小穴	墨痕のある須恵器、骨片出土			1	奈良後半	BV66
58		土坑				1	平安前	BV66
59		小穴				1	平安後?	BU66
60	168SB060	掘立柱建物	b〜e·g·h（60a·fは別遺構。60fはSB080の柱穴の一つ）		70→60	1	〜XII期	BR61〜62
61		小穴群				1	平安	BU66
62	168SB020	小穴	168SB020の一部			1	奈良後〜	BV67
63		たまり状遺構			68→63	1	平安前	BT66
64	168SX064	小穴	暗灰色粘土上層除去後検出。暗灰色粘土層に切り込む。		35→64→暗灰色粘土上層	1	XI期	BU63
65	168SB100	小穴群	a〜cが168SB100の柱穴			1	平安後	BRBS63付近
66		たまり			67→66	1	平安後	BUBT66
67		小穴群	66除去後検出			1	奈良前〜	BT66
68		小穴群	63除去後検出			1		BT66
69		土坑	暗灰色粘土上層除去後検出。暗灰色粘土層に切り込む。		25→69→暗灰色粘土上層（BU64区）	1	平安後〜	BU64
70	168SD070	溝	南北溝	黒褐色土		1	平安前〜中	BRBS61
71		小穴		掘方（明茶色粘土）→柱痕（黒茶色土）		1	奈良	BT65
72		小穴				1	平安中〜	BU65
73		土坑		灰茶色粘土		1		BV67
74		小穴	15除去後検出			1		BW68
75	168SB100	小穴群	a·c·d·fが168SB100の柱穴			1	平安後	BS60
76		小穴群		黒色土		1	奈良前〜	BUBV64
77	168SB020	小穴	168SB020の柱穴			1	平安前〜	BV65
78		小穴群		灰色粘土		1	奈良後半〜	BUBV64
79		小穴群	15除去後検出			1	平安後〜	BW67
80	168SB080	掘立柱建物	2×6間の東西棟。北に1間の廂付く。60f·80a（367）·80b·80c·80d·80e·80g·85a·85b·85c·136·141·177の一部·204の一部·214·222が該当。80fは別遺構。		176·212·213→80→143·161	1	X〜XI期建築、XII期廃絶	BQBR59〜61
81		小穴群	15除去後検出			1	奈良〜	BW67

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（3）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
82		小穴群				1	平安後	BSBT61～62
83		小穴			50→108→83	1	平安前	BTBU62
84		小穴	丸底坏が破片で廃棄されている			1	平安後	BT64
85	168SB080	小穴群	a～cは80の一部。85明黄色粘土・85b明黄色粘土・85b黄色粘土・85c明黄色粘土は、85b柱痕と同一。			1		BPBQ57～58
86		小穴群				1	奈良～平安	BSBT63～64
87		土坑	浅い。		91→87	1	平安後	BT63
88	168SB100	小穴	168SB100の一部	下層→上層		1	平安後	BS63
89		小穴群			25→89	1	平安後	BU64
90		小穴群	1×1間以上の建物とも考えたが、確定する材料がない。			1	平安	BR58
91		小穴群			92→91→87	1	平安後～	BT63
92		小穴	底に石を３つ据えている。		92→91	1	平安～	BT63
93		小穴			55→93→25	1	奈良	BU64
94	168SB020	小穴	168SB020の柱穴		109→94	1	奈良後～	BT64
95	168SB095	掘立柱建物	3×3間以上総柱建物の可能性あり。95a～jが該当。遺物は奈良～平安前期のものしか出土していない。		灰色土層・202→95→201・181	1	平安中～後	BNBO55～56
96		小穴				1	奈良前～	BT64
97	168SX097	小穴				1	平安中～	BS64
98		小穴			99→98	1	平安後	BT64～65
99		小穴			99→98	1		BT64
100	168SB100	大型総柱建物	5×6間以上の総柱建物。65a・65b・65c・75a・75c・75d・75f・82の一部・88・117の一部・118の一部・121の一部・133の一部・138の一部・142の一部・147の一部・152の一部・153の一部・162の一部・246が該当。		113・114→100→60f	1	XII期に廃絶	BPBS59～63
101	168SX101	小穴群	55に切り込む		55→101	1	奈良後	BT64
102		小穴群				1	平安前	BU65
103		小穴			104→103	1	平安前～	BU62
104		たまり状遺構			108→104→30	1	VIB期	BU62
105	168SE105	井戸	底に曲物を据える。	濃茶灰色土→濃黄褐色粘土→目玉→暗灰色粘土→暗茶色土→茶褐色土	218・219→105	1	XI～XII期	BO57
106		小穴群				1		BU63
107		土坑	方形を呈す		107→104→30	1	VIA期	BU62～63
108		たまり	40・45・50を覆う人工遺構。最新遺物は40に帰属。			1	XII期	BU62
109		土坑	浅い。		109→94	1	奈良～	BT64
110	168SD110	溝	およそ南北に走行。	茶黄色土→灰茶色土	145・236・302・890→110	1		BABC23
111		小穴群				1	平安～	BS63
112		小穴群				1	平安～	BRBS63付近
113		小穴群			113→65b	1	奈良～	BS62
114		小穴群			114→65a	1	平安中～	BS62
115	168SD115	溝		灰茶色土	302→115→223・229	1		BB22
116		小穴群	荒尾産の須恵器壺？			1	奈良後～	BR62～63
117		小穴群				1	奈良～平安	BR61・62
118		小穴群				1	奈良～平安	BR62
119		小穴				1		BR61
120	168SA120	柵列	168SB080の桁行と柱筋が対応する。174の一部・178・186・189の一部・199の一部が対応。			1	平安中～後	55地区
121		小穴群				1	平安中～	BR61
122		小穴				1	平安前	BQ61
123		小穴				1	平安前	BQ61

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（4）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
124		小穴群				1	X期～	BS60
125		欠番				—		—
126		小穴				1	奈良～	BS59
127		小穴群				1	奈良～	BR59
128		小穴群				1	奈良～平安後	BR58
129		小穴群				1	平安後～	BR59
130		欠番	—	—	—	—	—	—
131		小穴				1		BR59
132		小穴群				1	平安中～	BQ60
133		小穴群				1	平安前	BQ60
134		小穴				1	平安前	BQ60
135		欠番	—	—	—	—	—	—
136	168SB080	小穴	168SB080の柱穴(SB080H)	茶色土		1	平安中	BQ60
137		小穴群		黒色土		1	平安	BPBQ59～60
138	168SX138	小穴群	土師器（中四国産か）出土			1	奈良～平安後	BPBR59～60
139	168SX139	小穴	土器片多い。黒色土埋土	掘方→柱痕		1	平安後～	BQ60～61
140		欠番	—	—	—	—	—	—
141	168SB080	小穴	168SB080の柱穴(SB080B)	黒灰色土		1	平安後	BR60
142		小穴群		茶色土		1	奈良～平安	BQ60～61
143		小穴		茶色土	80g→143	1	平安後	BQ60
144		小穴群		黒色土		1	平安	BS62
145	168SB145	掘立柱建物	2×3間の東西棟。224の一部・226の一部・861の一部・862の一部・864の一部・867の一部・878の一部が該当。		145→110	1	平安中～後	BBBC23～25
146		小穴				1		BQ60
147		小穴群				1	奈良中～	BSBT62
148		小穴群				1	平安中～	BS61～62
149		小穴群	82除去後検出。	黒色土		1	奈良～	BS61
150	168SA150	柵列	東西に走行。233・242の一部・869の一部が該当。		302→150	1	鎌倉～	BA22～25
151		小穴群				1	奈良～	BS61～62
152		小穴群				1	奈良～平安中	BRBS61
153	168SX153	小穴群				1	奈良～平安後	BR60
154		土坑				1	VIA期>>平安中	BR60
155		欠番	—	—	—	—	—	—
156		小穴群				1	奈良後	BS60
157		土坑	奈良後半の遺物のみ出土			1	平安中～	BS61
158		小穴	157除去後検出			1	平安中～	BS61
159		小穴	154除去後検出			1	平安中～	BR60
160		欠番	—	—	—	—	—	—
161	168SX161	小穴群			80→161	1	平安後～	BR59
162		小穴群				1	奈良～平安後	BQBR59
163	168SK163	土坑	VI～VII期の遺物を多く含む。茶黄色土については調査時に土色名を混同したもので、暗茶色土より下位の埋土である。	暗茶褐色土・淡茶褐色土→暗茶色土		1	平安中～後	BQ58～59
164		小穴	168SB080の柱穴の可能性もある。			1	平安中～後	BR58
165		欠番	—	—	—	—	—	—
166		小穴				1	平安中	BQ58
167		小穴	柱痕あり	暗灰色粘土+黄色地山土ブロック		1		BQ56
168		小穴		暗灰色粘土+黄色地山土ブロック	169→168	1		BQ56
169		小穴		暗灰色粘土+黄色地山土ブロック	169→168	1		BP56
170		欠番	—	—	—	—	—	—
171		小穴群		茶褐色粘土系埋土		1	奈良前～	BP56付近
172		小穴群		黒褐色土系埋土		1	奈良～	BPBQ55～56
173	168SX173	小穴群		茶色土系埋土		1	平安～	BOBP55

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（5）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
174		小穴群		茶褐色粘土上の小穴群。黒褐色土・茶色土埋土。		1	平安後～	BQ55
175		欠番	―	―	―	―	―	―
176		小穴			176→85c	1	奈良～	BQ56
177	168SB080	小穴群	168SB080の一部を含む。南側の小さい方の小穴は奈良時代の土師器片１点のみ出土	黒色土		1	平安中～	BQ56
178	168SA120	小穴	168SA120の一部。茶灰色土から掘り込む。			1	平安～	BP55
179	168SX179	小穴群	京都系土師器小皿出土	黒色土		1	平安中～	BO55
180	168SF180	道路	東西に走行。SD455・485が道路側溝とみられる。			1		BFBG 36～42
181		小穴群		黒色土		1	平安	BN56
182	168SX182	小穴	土師器細片多量含む。	黒灰砂質土系埋土		1	平安後	BN55
183	168SX183	小穴	土師器細片多量含む。	黒灰砂質土系埋土		1	XII・XIII期～	BN55
184		小穴	土師器細片多量含む。	黒灰砂質土系埋土		1	平安～	BN55
185	168SF185	道路?	南北に走行。宅地境界道路か。SD495・505が道路側溝。			1		34～36地区
186	168SA120	小穴	168SA120の柱穴			1	平安中～	BN55
187	168SX187	小穴群				1	7c末～	BOBN56
188		小穴群				1	平安後～	BO56
189		小穴群	カクランに切られる。			1	平安中～	BO55
190	168SF190	道路	政庁III期左郭１坊路。SD275・400・405・430が道路側溝とみられる。			1（275は2面で検出）	平安中～後	46～48地区
191		小穴				1	奈良後～	BO55
192		小穴群		黒色土埋土	192→191→カクラン	1	奈良後～	BO55
193		小穴群				1	平安中～	BN56
194		小穴群				1	平安	BNBO55
195		欠番	―	―	―	―	―	―
196		小穴群				1	平安中～	BO55
197	168SX197	小穴		黄茶色粘質土（粘質強い）		1		BN56
198		小穴				1	奈良前～	BN55
199		小穴群	カクラン（BN55～56）除去後検出。			1		BN55～56
200	168SF200	道路	政庁II期左郭１坊路。SD255・280・285・295が道路側溝。			2	奈良後半～平安中	47～49地区
201		小穴			95b掘方→201	1	平安～	BO56
202		小穴			202→95a掘方	1		BO56
203		小穴				1		BR58
204		小穴群	168SB080の一部を含む。			1	平安後～	BP58
205		不明	遺物はあるが場所不明	茶色砂	―	―	―	―
206		小穴群				1	奈良後～	BP58
207		小穴群				1	奈良	BOBP58
208	168SX208	小穴				1	奈良～	BP57
209		小穴群				1	平安～	BP57
210	168SF210	道路×区画溝群	政庁II期以前の左郭1坊内の坊間道路。SD055・260・265・270が道路側溝とみられる。			2(<3)	奈良	62～64地区
211		小穴				1	奈良後～	BP57
212		小穴		212→213→214		1	奈良後半	BP57
213		小穴		212→213→214		1	平安～	BP57
214	168SB080	小穴	168SB080の柱穴(SB080M)	212→213→214		1	平安～	BP57
215	168SF215	道路	北東-南西方向に走行する。880・890が側溝			1	～平安後	23～27地区
216	168SX216	小穴		217→216		1	平安～	BP57
217		土坑		217→216		1	平安～	BP57
218		小穴		218→105		1	奈良～	BO57
219	168SX219	小穴				1(<2・3)	飛鳥	BO57
220		欠番	―	―	―	―	―	―
221		小穴群				1	飛鳥	BO57
222	168SB080	小穴	168SB080の柱穴(SB080O)			1	平安後	BO57
223		小穴群		302→115→229→223		1		BB22
224		小穴群				1	平安	BB23
225		欠番	―	―	―	―	―	―

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（6）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
226		小穴群				1	奈良～平安	BC23
227		小穴			302→232→227	1		BB23
228		小穴群			302→208	1		BB22
229		たまり状遺構		炭灰系の黒色土	302→115→229	1	平安中～	BB22
230		欠番	—	—	—	—	—	—
231	168SD231	溝	およそ南北に走行。	炭灰混じった暗茶褐色土	302→231	1	平安～	BA23付近
232	168SD232	溝	およそ南北に走行。	暗茶褐色土	239・302→232→227	1	奈良後～	BB23
233	168SA150	小穴	168SA150の柱穴		302→233	1	平安～	BA23
234		小穴群	浅い。			1	奈良後～	AYBA23
235		欠番	—	—	—	—	—	—
236		小穴群			236→110	1	平安	BABC23
237	168SD237	溝		灰茶色土。わずかに炭含む。		1	平安後	21地区
238	168SX238	小穴			238→890	1	平安	BC23
239		小穴			239→232	1		BB23
240	168SA240	柵列	東西に走行。702の一部、806の一部、808の一部、821の一部が該当		703→240	1	平安後～	BE30～33
241		小穴群			241→229	1		BB22
242		小穴群			302→242	1	平安～	AYBA22～23
243		小穴			244→243	1	奈良	BO52
244		小穴			244→243	1	平安～	BO52
245		欠番	—	—	—	—	—	—
246	168SB100	小穴	168SB100の柱穴(SB100C)。遺物なし。			1		BS63
247		欠番	—	—	—	—	—	—
248		欠番	—	—	—	—	—	—
249		欠番	—	—	—	—	—	—
250	168SB250	掘立柱建物	2×4間の東西棟。東に1間廂付き。250a～jが該当。		337→250→292・357・361	2	8c後～平安前	BMBO53～56
251	168SX251	小穴	新羅土器壺蓋出土。	暗褐色粘質土系埋土		2	7c後～	BP54
252		小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2		BOBP53～54
253		小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2	平安～	BNBO54
254		小穴		暗褐色粘質土系埋土。柱痕は暗茶色土。		2	奈良～平安	BN54
255	168SD255	溝	南北に走行。政庁II期左郭1坊路西側溝か。	茶色土（灰色土層と同層か）	285→255	2	8c後～	49地区
256	168SX256	小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2	奈良前	BMBN53
257	168SX257	小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2	奈良	BN55
258		小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2	飛鳥～	BP55
259	168SX259	小穴群		暗褐色粘質土系埋土		2	奈良～	BO55
260	168SD260 168SF210	溝	南北に走行。政庁II期の宅地割りに関する溝。坊間路側溝の可能性あり。	淡茶灰色土（第3遺構面の遺構にみられる埋土）	294→260	2(<3)	奈良～	BR～BT63
261		小穴	第1遺構面遺構の掘り残しの可能性あり。			2	平安中～	BP54
262		小穴	第1遺構面遺構の掘り残しの可能性あり。			2	奈良	BO53
263		小穴	第3遺構面に帰属するか。			2(3?)	奈良～	BO53
264		小穴		黒茶色土（柔らかく炭多い）		2		BP55
265	168SD265 168SF210	溝	南北に走行。政庁II期の宅地割りに関する溝。坊間路側溝の可能性あり。遺物なし。	黒色土		2(<3)	—	BSBT61
266		小穴群		暗灰土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良～	BO55
267		小穴群		暗灰土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良～	BM53
268		小穴		暗灰土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良～	BM53
269		小穴		暗灰土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2		BN54

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（7）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
270	168SD270 168SF210	溝	南北に走行。政庁II期の宅地割りに関する溝。坊間路側溝の可能性あり。	淡灰褐色土（第3遺構面の遺構にみられる埋土）	296・297→270	2(<3)	古代	BRBS62
271	168SX271	小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	飛鳥～	BNB053
272		小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良～	BN54
273		小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良?	BP54
274		小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良～	BN56
275		溝	埋土状況および出土遺物から灰茶色土層の掘り残しとみられる。第1遺構面の遺構の可能性もある。	暗灰茶色土→茶色土	茶褐色粘土層・341・304→275→303	2(1or2)	XI～XII期	48地区
276		小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	奈良前	B055
277	168SX277	小穴			258除去後検出	2	7c代～	BP55
278		小穴群	遺物なし			2		BP55
279		小穴群			266除去後検出	2	奈良～	BP55
280	168SD280 168SF200	溝	政庁II期左郭1坊路東側溝。	茶色土（植物繊維を多く含むような埋土。砂気が多い）	295→280→298	2	飛鳥～奈良前	47地区
281	168SX281	小穴群		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	7c代～	BN55
282		不明	場所不明	暗灰色土→黄褐色土		2	平安後	BN54
283		たまり状遺構		暗灰色土（細かな黄褐色粘土ブロックを多量に含む）		2	飛鳥	BM54
284		たまり状遺構		暗灰色粘土（黄褐色粘土ブロック・灰褐色粘土ブロックを含む）		2	奈良～	BP55
285	168SD285 168SF200	溝	政庁II期の左郭１坊路西側溝。	淡茶色土	茶褐色粘土層・315b・306→285→255	2	飛鳥	48地区
286		小穴群			283除去後検出	2		BM54
287	168SD287	溝	東西に走向。288・367と同一遺構とみられる。	黒褐色土（砂質）		2(or3)	奈良	BS59～60
288	168SD288	溝	東西に走向。287・367と同一遺構とみられる。	黒褐色土（砂質）		2(or3)	奈良後	BS60～61
289		小穴群		灰褐色土他		2(or3)	奈良	BRBT59～62
290	168SB290	掘立柱建物	2×2間総柱建物と考える。290b～jが該当。290a・k・lも柱筋を揃えているが、同一遺構と考えるには情報不足のため今回ははずした。		362→290→358・359	2(or3)	8c後半	45～46地区
291		小穴群	第3遺構面の可能性あり			2(<3)	奈良	BS59
292	168SX292	小穴群			250h→292	2	奈良	BN52
293	168SX293	小穴群	第3遺構面の可能性あり			2(<3)		BS62
294	168SX294	小穴	第3遺構面の可能性あり	暗灰褐色粘土	294→260	2(<3)	奈良～	BS62
295	168SD295 168SF200	溝	政庁II期左郭１坊路東側溝か	淡黒褐色土	茶褐色粘土層→295→280	2	奈良	48地区
296	168SX296	小穴	第3遺構面の可能性あり		296→270	2(<3)		BS62
297		小穴	第3遺構面の可能性あり		297→270	2(<3)		BT62
298		小穴群			298→280	2		BKBL47
299		溝	280の埋土の可能性がある。		280→299	2	奈良後半	BJ47
300	168SF300	道路	政庁II期の推定朱雀大路。今回は東側溝のみ検出。		300→24	1（2or3）	～平安前	70地区

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（8）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
301		溝	南北に走行			1	平安～	BABB21～22
302	168SX302	たまり×溝	遺物の大半がローリングしており、鉄分沈着したものが多い。	明茶褐色土	302→110・115・223・227・228・229・231・232・233・234・242	1	XIX～XX期	AYBB22～23
303		小穴		黒色土		1	平安後	BK48
304		小穴	275の下層の小穴と考える	暗灰褐色粘土	303除去後検出	2	奈良～	BK48
305	168SB305	掘立柱建物	4×2間の東西棟。北側に１間廂付く。305a～kが該当。305hは柱抜取の可能性あり。		茶灰色粘土層→305→茶黄色粘土層	3	7c末～8c初	BN50～52
306		小穴群		茶色土混暗灰茶色粘土	285除去後検出	2(or3)	奈良～	BKBL49
307		小穴群				2(～3)	奈良～	BL49
308		小穴群				2(～3)	奈良～	BM50
309		小穴群				2(～3)	奈良～	BL50
310	168SX310a	小穴群	a～cあり			2(～3)		BN50～51
311		小穴				2(～3)	奈良	BKBL50
312		溝			313→312	2(～3)	奈良～	BK49～50
313		小穴			313→312	2(～3)	～奈良前	BK49
314		小穴群				2(～3)	7c後～	BL51～52
315	168SX315b	小穴群	a・bあり		315b→255・285	2(or3)		BK49～50
316		小穴		黄褐色土		2(～3)		BM51
317		小穴		黄褐色土		2(～3)		BM51
318		小穴		黄褐色土		2(～3)	奈良前	BM51
319	168SB305	小穴	319=305j。第2遺構面の茶褐色粘土層の切れ目で検出	黄褐色土		3		BM50
320	168SA320	柵列？	大きく西に振れている。b～f。a・dは別遺構。			2(or3)	奈良（前期）～	47地区
321	168SX321	小穴群			310b→321	2(>3)	平安～	BN50
322		小穴				2		BN51
323		小穴		灰色土		2		BN50
324		小穴		灰色土		2	7c後～8c	BN50
325		欠番	－	－	－	－	－	－
326		小穴		黄褐色土		2	平安	BN52
327		小穴群		黒色土・黄褐色土・灰色土		2(～3)	奈良	BN51
328		カクラン	第1面のカクランの掘り残し			2(<1)	現代	BN50
329		小穴				2	奈良～	BO56
330	168SE330	井戸	井戸枠は破壊されているが、方形と推測できる。第1遺構面の掘り残し。	淡茶色砂→青灰色粘土→暗灰色土→茶黒色砂土		2(1)	平安後～	BKBL44～45
331		小穴群				2	奈良	BO56
332		小穴群		黄色土		2	奈良	BO57
333		小穴群				2(1～2)	奈良	BN56
334		小穴		黒色土	343→336→334	2(or3)		BL51
335		井戸の裏込？	カクランに大きく切られているため不明な部分が多いが、１面目の掘り残しとみられる。	黒色土→灰黄色土		1	平安後～	BJ47
336		小穴		黄褐色土	343→336→334	2(or3)		BM52
337		小穴	250jと切り合いはない。	黒褐色土+黄褐色土		2	VII期～	BL52
338		小穴群		黄褐色土		2(～3)	飛鳥～	BN52
339		小穴群		黄褐色土		2(～3)		BM52
340		欠番	－	－	－	－	－	－
341		小穴	402の掘り残しの可能性も想定している。	黒褐色砂土	275除去後検出	2	平安	BK48
342	168SB305	小穴	342=305k。第2遺構面の茶褐色粘土層の切れ目で検出	暗灰褐色粘土		3		BM50
343		小穴				2(～3)	奈良	BL52
344		小穴				2(～3)	奈良	BN57
345		欠番	－	－	－	－	－	－
346		欠番	－	－	－	－	－	－
347		小穴				2(～3)	奈良	BL45
348		小穴	カクランではないが、そのようにもみえる埋土である。	明黄褐色土細ブロック含む		2(～3)	平安中～後	BL46

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（9）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
349		小穴群				2(～3)	奈良	BL46
350		欠番	—	—	—	—	—	—
351		小穴				2(～3)	奈良	BL46
352		小穴群				2(～3)		BK46
353		土坑				2(～3)	奈良前	BK45
354		小穴群				2(～3)	奈良	BI45
355		欠番	—	—	—	—	—	—
356	168SX356	小穴群		黒色土系		2	奈良前半	BL47
357		小穴			250b→357	2	奈良～	BN55
358		小穴群	奈良時代前期の遺物が出土		290i・290j→358	2(or3)	8c後半～	BK45
359		小穴		黒色土	290d→359	2	奈良後～	BL45
360		欠番	—	—	—	—	—	—
361		小穴		黒色土	250d→361	2	奈良～	BN54
362		たまり		暗茶褐色土（砂質系）	362→290i	2(or3)	奈良～	BK45
363		土坑		淡茶灰色粘土（砂わずかに含む）	363→372	2(<3)	奈良～	BP58
364	168SD364	溝か	287・288と同一遺構とみられる。	黒褐色土系（砂質あり）		2(or3)	8c中～	BS59
365		欠番	—	—	—	—	—	—
366		溝		淡茶灰色粘土（砂わずかに含む）		2(or3)		BR58
367	168SB080	小穴	80a(168SB080D)の掘り残し	黒色土	374→367	2(1)	平安後～	BR59
368		小穴	１面目の遺構か	明茶褐色土		2(1?)		BQ59
369		小穴群			371→369	2(～3)	奈良～	BP59
370		欠番	—	—	—	—	—	—
371		溝		淡茶灰色粘土		2(<3)	弥生～	BP59
372		たまり状遺構		淡茶灰色粘土	363→372	2(<3)	弥生～	BP58
373		小穴		暗灰褐色粘土		2(or3)		BO58
374	168SX374	たまり状遺構	第1遺構面に帰属する遺構の可能性あり。	灰褐色土（粘質強い）	374→367	2(<1?)	平安中～	BQ59
375		欠番	—	—	—	—	—	—
376		たまり状遺構			377→376	2(or3)		BR60
377		小穴		暗灰褐色粘土	377→376	2(or3)		BQ60
378		小穴		暗灰色土→黒褐色土		2(or3)		BS59
379		たまり		淡黄褐色土（砂質系）		2(<3)		BR60
380		欠番	—	—	—	—	—	—
381		小穴	123の掘り残しか（第１面遺構か）。	黒褐色土		2(<1?)		BQ61
382		土坑？				2(or3)		BQ61
383		小穴	386と関連か	黒色土		2(<1)	平安～	BN57
384		小穴		淡灰茶色土（掘方）→黒色土（柱痕）		2	奈良	BN57
385		欠番	—	—	—	—	—	—
386		小穴		黄茶色粘質土（掘方）→淡茶色粘質土（柱痕）		2	奈良～	BN57
387		小穴		明茶褐色土		3		BO54
388		小穴群			388→389	3		BO53
389		たまり			388→389	3		BO54
390		欠番	—	—	—	—	—	—
391		小穴群				3		BM53
392	168SX392	小穴				3	奈良～	BN53～54
393		小穴群				3		BNBO54
394		たまり状遺構		灰色土系		3		BNBO53
395		欠番	—	—	—	—	—	—
396		小穴						BP55
397		小穴群			389除去後検出	3		BO54
398		小穴				3		BO56
399		たまり				3		BO56
400		溝				1	平安中	47地区
401				茶灰色細砂土		1	平安中	BM47
402		小穴群		黒茶色土		1	平安後期	BM48
403		小穴群		黒茶色土		1	平安中	BK49
404		小穴群		黒茶色土		1	平安中期以降	BK50
405	168SD405	溝		黒茶色土		1	平安中	BK48
406	168SX406	凹み		黒茶色土		1	XI期	BK49
407		小穴群		黒茶色土		1		BM47

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（10）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
408		小穴群		黄色土ブロック混入灰黒色土		1		BM49
409		凹み	馬歯出土		405→409	1	平安	BL48
410	168SD410	溝か			410→403	1	奈良～	BL49
411		小穴群				1	平安	BL48
412		小穴群		黄色土ブロック混入灰黒色土		1	奈良～	BM49
413		小穴群		淡茶色土		1	平安	BL49
414		小穴群		茶色砂土		1	平安	BK48
415	168SK415	土坑か？				1	平安	BN52
416		小穴群	鉄塊出土	暗茶色土		1	平安	BM50
417		小穴群		茶色土		1		BN50
418		小穴群		暗灰色土	417→418	1		BN50
419		小穴群				1	平安後期	BL50
420	168SB420	掘立柱建物				1	平安後期	BN51
421		小穴群		灰黒色土		1		BL51
422		小穴群		灰黒色土		1	平安	BN51
423		小穴群		灰黒色土		1	平安中	BO52
424		小穴群		灰黒色土		1	平安中（X期）	BN52
425	168SE425	井戸				1		BM52
426		小穴群		灰黒色土		1	平安中～	BN52
427		小穴群		灰黒色土		1	平安中～	BN52
428	168SX428	凹み				1	平安後	BP53
429		小穴群		灰黒色土	428→429	1	平安	BP53
430	168SD430	溝				1	平安前期（VIII期）	BKBL46
431		小穴群				1	平安後期	BP54
432		小穴群				1	平安後期	BP54
433		小穴群		黒茶色土		1	平安中～	BM52
434		小穴群	SB515の柱穴含む			1	平安中～	BM52
435	168SE435	井戸		焼土および炭混入	400→435	1	平安後	BJ47
436		小穴群				1	平安中	BM51
437		小穴				1	平安	BM52
438		小穴				1	平安前期	BL52
439		小穴群				1	平安～	BM51
440	168SK440	土坑				1	平安後～	BJ46
441		小穴群				1	平安後	BP53
442		小穴群			442→428	1	平安中	BP53
443		小穴群				1	平安後	BP54
444		小穴群				1	平安	BO53
445	168SD445	溝		黒茶色土		1	平安前期（VIII期）	BJ43
446		小穴群				1	平安後	BO54
447		小穴群		茶黒色土		1	平安中	BO54
448		小穴群		茶黒色土		1	奈良後半	BO53
449		小穴群		茶黒色土		1	奈良後半	BO53
450	168SK450	凹み	須恵器坏蓋埋置			1	奈良後半	BI42
451		小穴		茶灰色土		1	平安後期（XII期）	BO54
452		小穴		茶灰色土		1	平安中～	BO53
453		小穴		茶灰色土		1	平安後	BO54
454		小穴		白灰色ブロック混入、茶黒色土		1	平安中～	BO54
455	168SD455	溝	条坊溝か？			1	平安後期（XII期）	BH41他
456		溝		茶黒色土		1	平安後	BO54
457		溝		茶黒色土		1	奈良	BO54
458		小穴群				1	平安後	BL53
459		小穴群				1	平安	BM53
460	168SK460	土坑	黄白色粘土集中土坑	灰色土		1	平安後期	BH42
461		小穴群				1	平安中～	BM53
462		凹み		黒灰色土	462→421	1	平安中～	BL51
463		小穴群		黒灰色土		1	平安後～	BK51
464		小穴群		黒灰色土	464→415	1	平安	BM53
465	168SE465	井戸				1	平安後期（XII期）	BH40
466		小穴群		黒茶色土		1	平安中～	BM54
467		小穴群				1	平安後	BM54

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（11）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時期	地区番号
468		溝				1	平安	BM54
469		小穴				1	奈良	BN53
470	168SE470	井戸	井戸下位に樹木堆積層		470→601→465	1	平安後期	BH39
471		小穴群				1	平安	BN53
472		小穴群				1	平安中～	BN53
473		小穴				1	平安後期	BN53
474		小穴群				1	平安後期（XII期）	BN54
475	168SK475	土坑	腐植土層より将棋関連墨書木札出土。茶灰色砂質土層からも墨書木札出土。	475暗灰色砂質土→475腐植土→475灰色砂質土→475黒色粘土→475茶灰色砂質土→475	475→616・617	1	平安後期（XII期）	BH36
476		小穴		淡灰茶色土		1	平安	BL46
477	168SX477	小穴		黒茶色土		1	平安後	BN54
478		小穴		茶灰色土		1	平安後期	B47
479		小穴		茶黒色土		1	古代	BL47
480	168SD480	溝		茶褐色土		1	平安後期（XII期）	BF35
481	168SX481	小穴				1	平安中	BK47
482		小穴群				1	奈良後半	BL46
483	168SD483	溝か？		黒茶土（埋土は平安的）		1	奈良後半	BL45
484	168SX484	凹み		黒茶土(S-483と同一)		1	奈良後半	BK44
485	168SD485	溝	遺物は平安前期とみられるものが出土			1	平安後期（XII期）	BF36他
486		小穴		黒茶色土		1	平安後期（XII～）	BL44
487	168SX487	凹み			487→483	1	奈良後半	BL45
488	168SX488	凹み				1	奈良後半	BJ45
489	168SX489	包含層	包含層の取り残し			1	奈良	BI45
490	168SE490	井戸				1(<2)	平安前期（VII期）	BG38
491		小穴群	SB525の柱穴含む	黒色土		1	平安後期	BJ45
492		小穴		黒色土		1	奈良後半	BI45
493		小穴	SA520の柱穴含む	黄色土ブロック混入土		1	平安後期	BJ46
494		小穴				1	古代	BJ46
495	168SD495	溝			495→500→701→505→697→673・676・681	1	平安前期	BF34他
496		小穴				1	古代	BK45
497		小穴群				1	奈良後半	BK46
498		小穴群				1	奈良	BJ46
499		小穴			499→440	1	奈良	BJ46
500	168SD500	溝		茶色土		1	奈良遺物多い	BE33
501		小穴群				1	平安前期	BJ46
502	168SX502		S-435の残存か？	黄色ブロック混入土		1	平安後期	BJ47
503		小穴			503→502→435	1	古代	BJ47
504		小穴				1	平安前期	BK45
505	168SD505	溝		茶黒色土		1	平安前期	BE33
506	168SX506	小穴群				1	奈良後半	BK45
507		小穴群				1	平安後期	BL44
508		小穴				1	奈良	BK46
509	168SX509	凹み				1	平安	BK46
510	168SD510	溝	168SD815と同一遺構	茶色土	845→510→821	1	平安後期	BD33
511	168SX511	凹み		黄色土		1	平安後期（XII期）	BL46
512		小穴群				1	平安	BK47
513		小穴	SA520の柱穴含む、根石か？			1		BL46
514		小穴群				1	奈良後半	BK46
515	168SB515	掘立柱建物	1間×1間			1		BM52他
516		小穴				1	奈良	BL46
517		小穴				1	平安後期	BL46
518	168SX518	小穴				1	平安	BJ46
519	168SX519	小穴群		黄色土ブロック混入		1	奈良後半	BJ45
520	168SA520	柵				1		BK45他
521		小穴	SA520の柱穴含む	黄色土ブロック混入		1	平安中～	BK44

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（12）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
522	168SK522 168SD445	土坑	溝の残欠か？			1	平安前期	BJ44
523	168SX523	凹み				1	平安前期（VII×VIII期）	BJ44
524		小穴群				1	平安	BK44
525	168SB525	掘立柱建物				1		BI44他
526	168SE526	井戸		茶黒色土		1	平安	BJ44
527		小穴群	SB525の柱穴含む			1	平安	BJ44
528		小穴群		茶黒色土		1	平安前	BJ45
529		小穴群	SB530の柱穴含む		529→489	1	奈良後半	BI44
530	168SB530	掘立柱建物	3間×2間			1		BI43
531		小穴群		茶黒色土		1	平安	BI44
532		小穴群		茶黒色土		1	平安前	BI44
533		小穴群	SB525の柱穴含む	茶黒色土		1	平安	BJ43
534		小穴群		茶黒色土		1	平安前	BJ43
535	168SB535	掘立柱建物	2間×1間			1		BJ41
536		小穴	SA520の柱穴含む	炭化物混入		1	平安	BK43
537		凹み				1	平安中～	BK43
538		小穴			538→484	1	古代	BL43
539		小穴群		茶黒色土		1	奈良	BJ42
540	168SB540	掘立柱建物	3間×3間			1		BI41他
541	168SX541	凹み				1	平安前	BJ41
542		小穴群	SB535の柱穴含む			1	奈良	BJ42
543		小穴群				1	平安	BJ41
544		小穴群				1	平安前	BJ42
545	168SB545	掘立柱建物	2間×1間			1		BI40他
546		小穴群	SB540の柱穴含む		546→541	1	奈良後半	BJ41
547		小穴				1	古代	BJ43
548		小穴群				1	平安前	BI43
549		小穴	SB535の柱穴含む		450→549	1	古代	BI42
550	168SB550	掘立柱建物				1		BI39他
551		小穴群				1	奈良	BI42
552	168SX552	凹み		茶色土		1	奈良後半	BI43
553		凹み		黒茶色土		1	平安前期	BI43
554		小穴群	SB530の柱穴含む			1	平安	BI43
555		欠番	—	—	—	—	—	—
556		溝か				1	古代	BI43
557		小穴群	SB540の柱穴含む			1	平安前期	BI42
558		小穴群	SB525の柱穴含む			1	平安前期	BH43
559		小穴群	SB530の柱穴含む			1	平安	BH43
560		欠番	—	—	—	—	—	—
561		小穴群				1	平安前期	BH43
562		小穴				1	平安	BH43
563		小穴				1	平安	BI42
564		小穴群		黒茶色土		1	平安後期	BI41
565		欠番	—	—	—	—	—	—
566		小穴群	SB535・SB545の柱穴含む			1	平安後期	BI41
567		小穴群		黄色土		1	平安前	BH41
568		小穴群		茶黒色土		1	奈良	BK44
569		小穴群				1	奈良	BJ44
570		欠番	—	—	—	—	—	—
571		小穴群	SB525の柱穴含む			1	奈良	BI43
572	168SX572	凹み				1	奈良後半	BK44
573		小穴群	SB530の柱穴含む			1	平安初	BH42
574		小穴				1	奈良	BI42
575		欠番	—	—	—	—	—	—
576		小穴群				1	平安中～	BK44
577		小穴				1	奈良後半	BK44
578		凹み				1	奈良後半	BH42
579		小穴群				1	奈良	BK43
580		欠番	—	—	—	—	—	—
581		小穴群				1	奈良	BI42
582		小穴群				1	平安前	BJ42
583		小穴群	SB530・SB540・SB545の柱穴含む			1	奈良後半	BI41
584		小穴群	SB535・SB540の柱穴含む			1	平安	BJ41
585		欠番	—	—	—	—	—	—
586		小穴群				1	奈良後半	BI41
587		小穴群	SB530の柱穴含む		587→551	1	奈良	BI42
588		小穴			588→455	1	～平安	BH41
589		小穴群	SB540の柱穴含む			1	奈良	BH41

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（13）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
590		欠番	—	—	—	—	—	—
591		小穴群	SB540の柱穴含む		591→455	1	奈良	BH41
592		小穴群	SB550の柱穴含む	茶黒色土		1	平安後～	BI39
593		小穴	焼土検出			1	奈良前半	BJ40
594		小穴群	SB535・SB545の柱穴含む			1	奈良後半	BI40
595		欠番	—	—	—	—	—	—
596		小穴群	SB535・SB540・SB550の柱穴含む			1	奈良	BJ40
597	168SX597	小穴群				1	奈良末	BI39
598		小穴群	SB540・SB545・SB550の柱穴含む			1	平安前	BI40
599		小穴群				1	平安前	BI39
600		欠番	—	—	—	—	—	—
601	168SX601	凹み		黒色土	470→601→592	1	平安後期	BI39
602	168SX602	凹み		茶色土		1	平安後期	BI40
603		小穴群	SB540・SB545・SB550の柱穴含む			1	平安前期	BI40
604		小穴群	SB540の柱穴含む	黒茶色土		1	奈良	BH40
605		欠番	—	—	—	—	—	—
606		小穴群	SB540の柱穴含む	黒茶色土		1	平安前期	BH40
607		小穴群		黒茶色土		1	平安	BG40
608		小穴群		黄土ブロック混入、		1	平安中～	BH39
609		小穴群		茶黒色土		1	平安中～	BG40
610		欠番	—	—	—	—	—	—
611		小穴群				1	奈良後半	BI38
612	168SX612	凹み				1	平安前期初め	BG39
613		小穴				1	奈良	BG39
614		溝				1	奈良	BG39
615		欠番	—	—	—	—	—	—
616		小穴				1	平安後期	BH36
617	168SX617	凹み		褐色土	475→617	1	平安後期	BH36
618		小穴群				1	奈良	BH35
619		小穴群				1	奈良	BH35
620		欠番	—	—	—	—	—	—
621		小穴群		茶黒色土		1	奈良	BH37
622		小穴群		茶黒色土		1	平安	BH39
623		小穴群			623→485	1	古代、平安後	BF36
624		小穴群			624→480	1	奈良	BF35
625		欠番	—	—	—	—	—	—
626		小穴群				1	平安前期	BF35
627		小穴群				1	平安中～	BF35
628		小穴群				1	平安	BF35
629		溝か？				1	平安中～	BG35
630		欠番	—	—	—	—	—	—
631		小穴群				1	平安中～	BF35
632		小穴				1	平安前	BF36
633	168SX633	凹み		黄茶色土		1	奈良前半	BI38
634		小穴群				1	奈良後半	BH38
635		欠番	—	—	—	—	—	—
636	168SX636	凹み		黄色土ブロック散乱		1	平安後期	BG38
637		小穴				1	平安後期	BG38
638		小穴群			599と同一	1	奈良後半	BI39
639	168SX639	凹み		茶色土（炭化物やや混入）、砂っぽい		1	奈良後半	BI39
640		欠番	—	—	—	—	—	—
641		小穴群				1	平安中～	BE35
642	168SX642	土器堆積			642→636	1	VIB期	BG39
643	168SX643	凹み			643→黒茶色土層	1	平安後期	BG38
644		小穴群				1	平安	BG39
645		欠番	—	—	—	—	—	—
646		小穴			646→643→637	1	平安	BG38
647	168SX647	凹み			455→647	1	平安後期	BG38
648	168SD648	溝か				1	平安前期（VIII期）	BG38
649	168SX649	凹み				1	VII×VIII期	BG37

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（14）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
650		欠番	―	―	―	―	―	―
651		小穴群				1	平安前期	BG37
652		凹み				1	平安前期	BF37
653	168SX653	凹み				1	VIB期	BG39
654	168SD654	溝				1	奈良後半の遺物多い	BG37
655		欠番	―	―	―	―	―	―
656		溝か				1	平安前～	BF37
657		凹み				1	平安後～	BG38
658		小穴群				1	奈良	BG35
659		小穴群		茶黒色土		1	平安中～	BG36
660		欠番	―	―	―	―	―	―
661		小穴		茶色土		1	平安後	BF36
662		凹み			662→485→480	1	奈良	BG36
663	168SX663	凹み				1	VIII期	BG34～35
664	168SX664	凹み				1	平安前期	BG36
665		欠番	―	―	―	―	―	―
666		小穴群			666→654	1	平安後	BG37
667		小穴群				1	平安前	BE35
668		小穴				1	平安前	BG38
669		小穴		黄土ブロック混入、茶黒土		1	奈良	BG36
670		欠番	―	―	―	―	―	―
671		凹み		茶黒色土		1	平安中～	BF35
672	168SX672	凹み		茶黒色土		1	古代	BE35
673		小穴		茶黒色土		1	平安	BE35
674		小穴		茶黒色土		1	平安中～	BF36
675		欠番	―	―	―	―	―	―
676	168SK676	土坑				1	平安中～	BE34
677	168SK677	土坑				1	平安後	BG34
678		小穴				1	平安後	BG34
679	168SK679	土坑		茶黒色土		1	平安中	BE34
680		欠番	―	―	―	―	―	―
681		凹み	包含層の取り残しか？			1	平安中～	BE34
682		小穴			682→676	1	平安	BE34
683		凹み	下層遺構	黄茶色（黄土ブロック混入）		1(<2?)	奈良後	BG34
684		小穴			684→663	1	平安	BG34
685		欠番	―	―	―	―	―	―
686		小穴				1		BH34
687		溝か？				1	平安	BH34
688		凹み				1	平安	BF34
689		小穴群				1	平安	BF34
690		欠番	―	―	―	―	―	―
691		小穴群				1	平安前期	BF35
692		凹み		黒茶色土		1	平安	BE35
693		小穴群				1	平安前期	BE35
694		小穴			694→495	1	奈良	BE34
695		欠番	―	―	―	―	―	―
696		凹み	下層遺構	黄灰色土	696→495	1(<2?)	奈良	BE34
697	168SX697	凹み				1	平安後期	BE33
698		溝		茶黒色土		1	平安後期	BD33
699		小穴群（柱穴か）				1	平安中期（IX～X期）	BE33
700		欠番	―	―	―	―	―	―
701	168SX701	凹み		黒茶色土		1	平安	BE33
702		小穴			702→500	1	平安	BE33
703		小穴群				1	平安	AX16
704		凹み	包含層の取り残し			1	平安	AW15
705		欠番	―	―	―	―	―	―
706		小穴群			706→704	1	平安前	AV15
707	168SX707	小穴群				1	平安後	AX14
708		小穴群				1		AV14
709	168SX709	凹み				1	平安後期	AV14
710		欠番	―	―	―	―	―	―
711		溝か				1	平安後期	AV13
712		凹み				1	古代	AV13
713		小穴群				1	平安	AW12
714		小穴群	畦畔の杭列か？			1	中世	AV11
715		欠番	―	―	―	―	―	―

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（15）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
716		小穴群		灰色土		1	中世	AV11
717		溝か	旧畦畔溝の可能性あり			1	中世	AU11
718		小穴群			718→455	1	奈良	BH42
719		小穴				1	奈良前～	BP54
720		欠番	―	―	―	―	―	―
721	168SX721	小穴群				1		BO53
722		小穴群				1	奈良～	BO53
723		小穴群				1	奈良後	BO52
724		小穴		灰色土		1	奈良～	BO53
725		欠番	―	―	―	―	―	―
726		小穴				1		BO53
727		小穴				1	奈良前	BO54
728		小穴				1	奈良後	BO54
729		小穴				1	奈良中～	BN54
730		欠番	―	―	―	―	―	―
731		小穴				1		BN54
732		小穴群				1		BN54
800	168SK800	土坑	豊前産土師器が出土	暗茶灰色土→黒青色粘質土		1	XI期～	BG33
801		小穴群		灰色粘質土→茶灰色土		1	奈良～	BF32
802	168SX802	包含層？	検出時に完形で土師器鉢出土			1	～奈良	BF33
803		小穴				1	～平安	BF33
804		溝				1	～奈良	BE・BF32
805	168SX805	小穴	土師器大量投棄遺構　墨書土器「屠口」			1	XII期～	BF33
806		小穴				1	奈良～	BE32
807		溝				1	奈良～	BD32
808	168SA240	小穴群	168SA240の一部			1	～平安	BE31
809		小穴群			811→809	1	奈良～	BF31
810	168SB810	掘立柱建物	2×2間			1	XI期～	BF32
811		土坑			811→809	1	奈良～	BF31
812		土坑		茶黒色土		1	奈良～	BF31
813		小穴			814→813	1	奈良～	BF31
814		土坑			814→813	1	奈良～	BF31
815	168SD815	溝	168SD510と同一遺構	茶黒色土	845→815→821	1	XII期～	BD33～BE29
816		小穴				1	奈良～	BF30
817		小穴				1	奈良～	BD31
818		小穴				1	奈良～	BD30
819	168SX819	小穴群				1	奈良～	BD29
820	168SD820	溝	連続土坑状掘方	黒青色粘質土→暗茶灰色土	836→820→910	1	平安後期～	BC29～BD30
821		小穴				1	平安～	BC30
822		小穴				1	奈良～	BC30
823		小穴				1	奈良～	BD30
824		小穴				1	奈良～	BD31
825		溝				1	奈良～	BC30
826		小穴群				1	奈良～	BE30
827		土坑		灰白色砂		1	平安～	BD29
828		小穴		灰白色砂質土		1	奈良～	BF29
829		小穴群				1	平安後期～	BD30
830		溝		暗茶灰色土		1	奈良～	BC30～BF30
831		小穴群				1	鎌倉～	BC29
832		土坑				1	奈良～	BD29
833		土坑				1	～平安	BD29
834		土坑				1	奈良～	BD29
835		溝				1		BC30
836		土坑				1	奈良～	BC30
837		土坑				1	奈良～	BD29
838		小穴群				1	奈良～	BC30
839		小穴				1	奈良～	BC29
840	168SD840	溝			840→860	1	平安後期～	BD28～29
841		小穴群				1	奈良～	BD30
842		小穴				1	奈良～	BD29
843		小穴群				1	奈良～	BE29
844		小穴				1	平安～	BE28
845		溝			845→815	1		BD32

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（16）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
846		小穴群				1	平安～	BD28～BE28
847		小穴群				1	平安～	BD28
848		小穴群				1	奈良～	BD27
849		小穴群				1	奈良～	BC27
850	168SE850	井戸			860→850	1	XII期～	BC28
851		小穴				1	平安～	BC28
852		溝				1	平安～	BC27
853		小穴			840→853	1	平安～	BD28～29
854		小穴				1	平安	BC29
855		溝				1	平安～	BC27
856		小穴				1	奈良～	BD30
857		小穴		黒茶色土		1	平安～	BE28
858		小穴				1	奈良～	BD29
859		小穴				1		BC31
860	168SD860	溝		茶黒色粘質土		1	平安後期～	BC28～BE28
861		小穴			862→890	1	平安～	BC24～25
862		小穴群				1	平安～	BB25～BC24
863		小穴				1	平安～	BC24
864	168SX864	小穴			864→880	1	平安～	BC25
865		小穴群				2	奈良	BI40
866		小穴			866→880	1	平安～	BC25
867	168SX867	小穴群				1	平安～	BB25
868		小穴				1	平安～	BD25
869		小穴群				1	奈良～平安	BA24
870	168SE870	井戸				1	XI期～	BC26
871		たまり状				1	平安～	BA24
872		小穴				1	平安～	AI24
873	168SK873	土坑				1	平安～	BA24
874		溝				1	平安～	BB24
875		小穴				1	奈良～	BI40
876		小穴			876→874	1	平安～	BB24
877		小穴群				1	平安～	BB24
878		小穴				1	平安～	BB24
879		たまり状				1	平安～	BB24付近
880	168SD880	溝	890と並行			1	XII期～	BB・BC25～26
881	168SX881	小穴			881→879	1	平安～	BB24
882		土坑？	890の延長の可能性あり			1	奈良～	BA25
883	168SX883	小穴		灰色砂質土		1	奈良～	BB25
884		小穴			860→884	1	奈良～	BC28
885		小穴		灰茶色土→暗灰色粘質土		2	奈良～	BI41
886		小穴			886→900	1	平安～	BA24
887		たまり				1	平安前期～	BC26
888		小穴				1	平安	BC26
889		小穴				1	XI期～	BB28
890	168SD890	溝	880と並行			1	平安後期～	BA26～BC23
891		小穴群		灰色粘質土		1	平安後期～	BB27
892		たまり				1	平安前期～	BB27
893		たまり				1	奈良～	BB26
894	168SX894	たまり		茶褐色土		1	平安前期～	BB27
895	168SB940	小穴群	895bは168SB940の柱穴f			2	奈良～	BI41
896		小穴				1		BB26
897	168SX897	小穴		暗茶灰色土	897→891	1	平安前期～	BB27
898		小穴			898→894	1	平安前期～	BB26
899		たまり		黒茶灰色土		1	奈良～	BF33
900	168SD900	溝				1	平安後期～	BA24・25
901		小穴群				1		BF33
902		小穴			902→800	1	奈良～	BF32

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（17）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
903		小穴				1	奈良～	BH40
904	168SB950	柱穴	168SB950の柱穴e			2	奈良～	BJ41
905	168SD905	溝	SD915の溝底部埋土か		905→915	1	VIB期～	BB26
906	168SB950	小穴	168SB950の柱穴f			2	奈良～	BJ41
907		小穴				2	奈良～	BI41
908	168SB950	柱穴	168SB950の柱穴g			2	奈良～	BI42
909		小穴				2	奈良～	BG36
910	168SE910	井戸			920→910	1	XII期～	BB27
911	168SX911	小穴				2	奈良～	BG36
912		小穴				2	奈良～	BG35
913		小穴				2	奈良～	BG35
914		小穴				2	奈良～	BH42
915		窪み		黒青色粘質土	905→915→920	2	VIB期～	BB26
916		土坑				2	平安後期～	BF36
917		小穴群		黒褐色土		2	奈良～	BF37
918	168SX918	小穴群		黒褐色土		2	奈良～	BG36
919		小穴		黒褐色土		2	平安前期～	BF37
920	168SD920	溝			905・892→920	2	VII期～	BB26
921		小穴				2	奈良～	BF37
922		小穴				2	平安前期～	BF36
923		小穴				2		BF37
924		小穴			924→923	2	奈良～	BF37
925		小穴群	柵列の可能性あり			2	奈良～	BE33～35
926		小穴				2	平安前期～	BF32
927		小穴			927→302	2	平安前期～	BA23
928	168SX928	たまり状遺構				2	平安前期～	BB22
929		小穴			928→929	2	平安前期～	BB22
930	168SE930	井戸			930→850・910	1	平安後期～	BC27
931	168SX931	たまり			931→302	2	平安前期～	BA22
932	168SX932	小穴				2	平安前期～	BA21
933		小穴				2	平安～	BE28
934		小穴群				2	奈良～	BC28
935		溝		灰茶色土		2	奈良	BF35・36
936		土坑		暗茶褐色土	936→930	2	奈良～平安	BC27
937		土坑		暗茶褐色土	937→910	2	奈良～平安	BB27
938		土坑		暗茶褐色土		2	奈良～平安	BB27
939		小穴		暗茶褐色土	939→938	2	奈良～平安	BB27
940	168SB940	掘立柱建物	柱穴は895b・940a～c・963・964の一部・966・968が該当	灰褐色土		2	奈良～	BH40～BI41
941		小穴				2	奈良～	AY21
942		小穴				2	平安前期末～	AY21
943		小穴				2	平安前期末～	AY21
944		小穴群				2	平安後期～	AY21
945		土坑				2	平安後期～	BF36
946		土坑				2	奈良～平安	BK43
947		小穴				2	奈良	BJ45
948		小穴			990b→948	2	奈良	BJ44
949		小穴				2	奈良～	BI42

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（18）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
950	168SB950	掘立柱建物	柱穴は904・906・908・950a～d・951a・954が該当			2	奈良～	BH40～BJ40
951a	168SB950	小穴	168SB950の柱穴			2	奈良～	BH41
952		小穴				2	奈良～	BH43
953		小穴			906→953	2	奈良～	BJ41
954	168SB950	小穴	168SB950の柱穴h			2	奈良～	BI41
955		小穴？				2	奈良～	BE32
956		小穴				2	奈良～	BJ42
957		小穴				2	奈良～	BI44
958		土坑				2	奈良～	BG37
959		土坑				2	平安～	BA21
960	168SX960	小穴群	掘立柱建物の一部か？			2	奈良～	BE33
961	168SX961	小穴				2	平安後期～	AY・AX21
962		小穴				2	奈良～	BB21
963	168SB940	小穴	168SB940の柱穴g			2		BH41
964		小穴群	168SB940の柱穴hを含む			2	奈良～	BH41
965	168SD965	溝		茶灰色粘質土	965→302	2	奈良～	AY22～BC22
966	168SB940	小穴	168SB940の柱穴e			2	奈良～	BI41
967		小穴				2		BJ41
968	168SB940	柱穴	168SB940の柱穴d			2	奈良～	BI41
969		欠番						
970		柱穴	掘立柱建物か？			2	奈良	BG34・35
975	168SA975	柵列	おおよそ南北に走向。柱穴はa,b,c			2	奈良	BK44
980	168SD980	溝		暗黒色粘質土		2	弥生後期前半	BG38
985	168SA985	柵列	東西に走向。柱穴はa,b,c,d			2	奈良～	BI43
990	168SA990	柵列	東西に走向し、東端は南へ走向する。柱穴はa～d			2	奈良～	BJ44
995	168SB995	掘立柱建物	2×3間以上。861の一部・863・868で構成される。			2	～平安	BC24～BD25
1000	168SX1000	溝か	土器取り上げは暗青灰粘で取り上げている	灰青色砂質土→暗青灰色粘質土→灰褐色土		2	～平安前期末	AY20～BB20
1101		小穴群				3		B056
1102		小穴	上層の小穴の掘り残し。			3(<1·2)		BK49
1103		小穴	灰色土除去時検出の小穴（第2面）			3(<2)		BL49付近
1104		小穴	上層の小穴の掘り残しともみられるが、第3面の遺構と考える。	黄褐色土に似た埋土		3(2?)	奈良～	BL50
1105		欠番	－	－	－	－	－	－
1106		小穴群	第2面遺構の掘り残し。	黄褐色土		3(2)	奈良～	BL50
1107		小穴		茶褐色粘土＋茶灰色粘土		3		BL50
1108		欠番	－	－	－	－	－	－
1109		欠番	－	－	－	－	－	－
1110	168SD1110	溝	北東から南西に流れる小川	暗茶灰色砂→淡茶灰色砂		4	弥生後～	BNB0ライン
1111	168SK1111	土坑	ドングリピットか	灰褐色粘土→黒褐色粘土→暗茶灰色粘土		4	縄文?	B052
1112	168SK1112	土坑				4	7c後半	BP54
1113	168SK1113	土坑	ドングリピットか			4		BL49·50
1114	168SK1114	土坑	ドングリピットか	黒褐色粘土→腐植土→茶灰色粘土		4		BL49
1115	168SX1115	たまり状遺構	黒褐色粘土が一面に広がっている。下位は溝の可能性あり。	暗青褐色粘土→黒褐色粘土		4	弥生後～	50～54ライン付近
1116	168SK1116	土坑	茶灰色粘土層堆積時に開口していた可能性あり。			4	7c後半	BK49～50
1117		小穴	茶灰色粘土層のたまりの可能性あり			4		BL48
1118		小穴群	BTBU64～65地区でS-56として遺物取り上げをしたものの番号をつけかえたもの			1		BTBU64～65
1121	168SK1121	土坑×溝状遺構				3(2?)	奈良以前	BM52～53

大宰府条坊跡第168次調査遺構番号台帳（19）

※主要遺構の時期は総合的に判断しているが、その他は出土遺物の編年観に基づく。

S-番号	遺構番号	種　別	備　考	埋土状況（古→新）	遺構間切合（古→新）	遺構面	時　期	地区番号
暗灰粘上層	暗灰色粘土層上層		BU63付近の暗灰色粘土層の上部に広がる遺物集中部分を指す。		64→暗灰粘上層		平安後期	BU63～64付近
暗灰粘	暗灰色粘土層		第１遺構面を覆う人工層位。茶色土層と同層。除去後、第1遺構面検出。		第1遺構面→暗灰粘		平安後期～	46～47ライン付近以西
茶色土	茶色土層		第１遺構面を覆う人工層位。暗灰色粘土層と同層。除去後、第1遺構面検出。		第1遺構面→茶色土		平安後期～	46～48ライン付近以東
黒茶色土	黒茶色土層	整地層	部分的な整地層。		黒茶色土層→SF180		～平安後期	BG38～39付近
赤灰色土	赤灰色土層	堆積層	除去後、SX1000等を検出。		SX1000→赤灰色土層→SX302		～平安後期	20～23ライン
灰色土	灰色土層・灰茶色土層	堆積層	除去後、第2遺構面検出。		第2遺構面→灰色土		～平安中期	45～63ライン
茶灰色土	茶灰色土層	堆積層	除去後、第2遺構面検出。除去の際、一緒に最下位の茶灰色粘土層まで除去している。		第2遺構面→茶灰色土		～平安中期	45ライン付近以東
茶黄粘	茶黄色粘土層	整地層	茶褐色粘土層上に部分的に残存する。除去後にSB305を検出		305→茶黄粘		奈良～	BKBL49～50
茶褐粘	茶褐色粘土層	整地層	灰色土層に削平を受けているようで、薄く残存。除去後、第3遺構面検出。		第3遺構面→茶褐粘→茶黄粘		8c中・後～平安前	48～57ライン
茶灰粘	茶灰色粘土層		除去後、第4遺構面検出。		第4遺構面→茶灰粘→第3遺構面		7c後～	46～56ライン
表土	表土							調査区全体

大宰府条坊跡第168次調査　供膳具計測表（1）

A:内底ナデ　B:板状圧痕　なお計測値の（ ）は復元値

S-4掘方

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a		R-002	—	3.8+	—			片	

S-5

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(8.7)	1.0	(6.6)	—	—	1/8	

S-15黒灰色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002	(8.4)	1.1	(6.2)	—	—	1/4	
	小皿a1	—	R-005	(8.8)	0.9	(7.3)	—	○	1/6	
	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.0)	1.1	(7.2)	—	—	1/4	
	小皿a1	—	R-006	(9.0)	1.15	(7.0)	—	○	1/4	
	小皿a1	—	R-004	(9.2)	0.8	(7.4)	—	—	1/6	
	坏a×丸坏		R-007	—	2.2+	—			片	
	丸底坏		R-008	—	3.2+	—			片	
	丸底坏		R-009	—	2.6+	—			片	

S-20 b

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-004	(13.9)	3.3+	—			1/6	

S-23

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a		R-002	—	1.7	—			1/10	
	坏a		R-003	—	2.1+	—			1/8	
	坏c		R-004	—	1.4+	—			1/6	

S-25暗灰色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a	ヘラ	R-002	(15.8)	1.95	(13.0)	—	○	1/6	
	椀c	—	R-003	—	2.3+	(7.7)	○	○	1/2	

S-25灰褐色砂

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	12.5	3.6	6.0	○	—	5/6	
	坏a	糸	R-002	—	2.9+	(7.7)	—	○	2/3	
	大椀c	ヘラ??	R-003	(29.2)	16.8	(18.0)	○	—	1/3	

S-25灰色砂

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀c	ヘラ	R-001	—	3.2+	8.6	—	×	底部1/1	
	椀c	ヘラ	R-002	(16.6)	6.25	7.5	—	○	1/2	

S-25茶黄色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	蓋		R-003	(15.2)	1.8+	—			1/7	畿内系か
	坏		R-002	—	1.4+	—			片	畿内系
	坏		R-004	—	3.0+	—			片	畿内系か
	坏		R-005	—	2.7+	—			片	畿内系
	椀c	—	R-001	—	2.7+	(8.4)	○	○?	1/4	

S-29

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀c	—	R-001	—	1.35+	—			片	搬入品

S-30黒色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a	ヘラ	R-001	(15.4)	2.35	(12.9)	—	—	1/4	

S-30黒灰色砂

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	(13.6)	3.1+	—			1/5	

S-35暗茶色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-003	(12.2)	2.8	(6.5)	○	—	1/6	
	坏a	ヘラ	R-001	—	2.3+	(8.4)	—	×	1/4	
	坏a	ヘラ	R-007	—	3.1+	—	—	—	片	
	坏a	ヘラ	R-013	—	3.15	—	—	—	1/6	
	皿a	—	R-005	—	1.6+	—	—	○	片	
	皿a	ヘラ	R-006	(15.0)	2.0	(12.4)	—	—	1/8	
黒色土器A類	椀c	—	R-009	—	1.9+	(7.8)	—	—	1/8	
	椀c	—	R-008	—	2.0+	(8.0)	—	—	1/6	
	椀c		R-004	—	1.9+	—	—		片	
	椀c		R-010	—	1.7+	—	—		片	
	椀c1	ヘラ	R-012	—	2.75+	7.6	—	—	底部1/1	

S-35暗灰色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	蓋		R-001	(15.0)	1.1+	—			1/12	
	坏a	—	R-002	(11.9)	2.9	(7.1)	—	—	1/6	
	坏a	ヘラ	R-013	(12.6)	3.6	(7.2)	×	×	1/4	
	坏a	ヘラ	R-011	(13.4)	4.0	(8.35)	○	○	1/2	
	椀c	ヘラ	R-003	—	3.2+	7.8	—	×	底部1/1	
	椀c	ヘラ	R-012	—	2.5+	(8.0)	○	×	1/3	
	椀c	ヘラ	R-004	—	3.7+	(8.4)	—	×	1/3	
黒色土器A類	椀c	ヘラ	R-014	—	1.7+	8.4	—	○	底部1/1	
	椀c	—	R-005	—	3.1+	—	—	—	片	

S-35暗灰色粘土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	(14.8)	4.6+	—			1/6	
	坏a	ヘラ	R-008	—	2.5+	7.2	—	○	底部1/1	
	坏a	ヘラ	R-017	12.6	3.8	7.6	○	○	3/4	灯明
	坏a	ヘラ	R-006	—	2.7+	(7.6)	○	—	1/4	
	坏a	ヘラ	R-007	—	1.8+	(8.2)	—	—	1/6	
	坏a	—	R-009	—	1.6+	(8.4)	—	—	1/8	
	椀c	ヘラ	R-011	—	2.4+	(6.6)	×	—	1/2	
	椀c	ヘラ	R-002	—	2.0+	8.0	—	○	1/2	
	皿a	ヘラ	R-004	(15.8)	1.4	(12.1)	○	—	1/8	
	皿b	ヘラ	R-005	(11.6)	2.1+	(10.4)			1/8	
黒色土器A類	椀		R-013	—	2.0+	—			1/12	
	椀c	ヘラ	R-014	—	1.6+	—	—	○	1/6	

S-35黄茶色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-002	—	1.6+	—	—	—	片	
	皿a	ヘラ	R-001	—	1.65	—	—	—	片	

S-39柱痕

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	0.9+	—	—	○	片	

S-40暗茶色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	1.1	—	—	—	片	
	小皿a1	ヘラ	R-002	(9.4)	1.3	(6.2)	—	—	1/4	
	坏c		R-005	(14.6)	3.6+	—			1/5	
	丸底坏		R-003	(14.0)	3.65+	—			1/6	
	丸底坏		R-004	—	3.2+	—			片	

S-40暗灰色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	ヘラ	R-001	13.3	3.65	—	○	○	1/1	

S-40暗灰色土下層

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c		R-002	—	2.0+	(6.8)			1/5	

S-40茶褐色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	—	R-001	(9.8)	1.38	(7.0)	—	—	1/5	
黒色土器B類	椀c	—	R-002	—	2.4+	(7.4)	—	—	1/7	

S-45暗茶色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.6)	0.7	(7.8)	—	○	1/6	
	椀c		R-002	—	3.1+	(7.5)			1/4	

S-45茶褐色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a×坏a	ヘラ	R-001	—	2.35+	—	—	—	片	

S-45暗灰色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c	ヘラ	R-001	—	2.3+	—	—	—	1/2	

S-45暗灰色粘土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×皿	—	R-001	—	0.8+	—	—	○	片	墨痕
	椀×皿		R-002	—	2.5+	—			片	灯明
	椀c		R-003	—	2.3+	(7.2)	—		1/4	
黒色土器A類	椀c	ヘラ	R-005	13.0	5.2+	—	—	○	1/1	

S-45黄灰色粘土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	—	2.1+	—	×	○	片	
	坏a	ヘラ	R-002	—	1.5+	—	○	○	片	
	椀c	—	R-003	—	1.9+	(8.8)	○	—	1/4	
	椀c	—	R-004	—	3.0+	(9.3)	—	—	1/2	

S-50灰黄色粘土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	—	3.7	—	—	—	片	
	皿a	ヘラ	R-002	(13.6)	1.75	(11.0)	—	×	1/5	

S-50灰色粘土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	—	R-003	(16.6)	2.2+	(13.3)	○	×	1/5	搬入品?
	皿a	ヘラ	R-002	(14.6)	1.7	(11.5)	○	×	1/4	
	皿a	ヘラ	R-004	(15.6)	1.7	(12.3)	—	×	1/9	

S-50暗茶色土

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-004	(12.5)	3.65	7.25	—	×	1/2	
	坏a		R-005	(14.2)	3.3+	—			1/7	灯明
	椀c	—	R-001	16.2	6.65	8.65	—	—	1/2	
	椀c	—	R-002	—	3.9+	(9.0)		—	1/6	
	坏×椀		R-006	—	3.0+	—			片	油煙付着
	皿a		R-010	(13.6)	1.3	(9.8)			1/8	
	皿a		R-009	(13.6)	1.85	(9.8)			1/6	

S-60c柱痕

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ?	R-001	(9.0)	1.15	(6.7)	○	—	1/6	

S-60d柱痕

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.6)	1.15	(7.6)	○	—	1/4	

S-60f

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏	—	R-002	(15.2)	2.9+	—		—	1/6	
	丸底坏	—	R-001	(15.4)	3.6+	—		—	1/4	

S-60f柱痕

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.5)	1.1	(7.0)	—	—	1/5	
	小皿a1	ヘラ	R-002	(9.6)	1.25	(7.4)	—	○	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	R-003	(15.6)	3.3	—		—	1/4	

S-62

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	大坏c×盤	—	R-002	—	2.45+	—	—	—	片	

S-64

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	—	R-002	—	1.0	—	—	—		
	小皿a		R-001	(10.2)	1.0+	—				
	丸底坏		R-003	(10.6)	3.0+	—				

S-65a

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-002	(10.6)	1.15	7.8	—	○	1/2	
	小皿a1	ヘラ	R-001	10.6	1.4	8.2	—	○	1/1	
	丸底坏a	ヘラ	R-004	(14.8)	2.85	—		○	1/8	灯明
	丸底坏a	—	R-003	15.4	3.4	—		—	3/4	灯明

S-65b

器別	器 種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	(9.8)	1.15	(7.4)	—	—	1/4	

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（2）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-70

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c1	—	R-001	—	1.6+	—	—	—	片	

S-75a

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	1.0	—	—	—	1/8	

S-75a柱痕

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.6)	1.1	(7.8)	—	○	1/4	
	椀×丸椀		R-002	—	4.6+	—			片	

S-75a掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	1.3+	—	—	—	片	

S-75d

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a2	—	R-001	—	0.9+	—	—	○	片	

S-75d柱痕

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器B類	椀		R-001	—	3.0+	—			片	

S-75d掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	—	1.2+	—			片	

S-77

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	大椀c×鉢	—	R-001	—	4.4+	(15.0)	—	—	1/4	

S-80a掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器B類	椀		R-001	—	2.0+	—			片	
土師器	小皿a1	—	R-002	(10.7)	1.2	8.8	—	—	1/8	

S-85明黄色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	0.95	—	—	—	1/6	

S-85b

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小坏a	—	R-001	(10.4)	1.2	(8.5)	—	○?	1/6	

S-85b柱痕

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	—	1.25	—	—	—	片	

S-85b掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.4)	1.25	(8.0)	○	○?	1/6	

S-85c柱痕

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	1.4	—	—	○	片	

S-85c掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.2)	1.0	(6.9)	○	—	1/5	

S-94

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	—	R-002	(16.2)	3.3	8.2	○	—	1/2	

S-95h

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	—	R-001	(15.8)	2.8+	(11.0)	—	—	1/8	畿内系

S-97

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×椀	—	R-001	(14.0)	3.0+		—	—	片	
	坏a×小皿a	—	R-002	(10.8)	1.6	(8.0)	—	—	1/8	
	椀c	—	R-003	—	1.6+	(6.0)	—	—	片	
	椀c	—	R-004	—	1.8+	(6.6)	—	—	片	

S-101

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a	—	R-001	(17.0)	1.9	(13.4)	—	—		

S-104

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-001	—	2.2+	(7.6)	—	—	1/5	
	坏a	ヘラ	R-002	—	3.0+	(8.3)	—	○	1/5	

S-105茶褐色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a 1	ヘラ	R-001	(9.4)	1.3	(6.6)	—	○	1/3	
	小皿a 1	ヘラ	R-002	(10.0)	1.1	(7.7)	○	○	1/5	

S-105暗茶色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a 1	—	R-002	—	1.0	—	—	—	片	
	丸底坏a	—	R-001	(15.1)	3.1+	—	—	—	1/8	

S-105暗灰色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a 1	—	R-001	—	0.6	—	○	—	1/8	
	小皿a 1	—	R-005		1.0		—	—	片	
	小皿a 1	ヘラ	R-002	—	1.3	—	○	○	1/8	
	丸底坏a	ヘラ	R-003	14.9	3.5	—	—	○	2/3	

S-105目玉

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	9.2	1.2	7.2	○	×	2/3	

S-108

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c×丸坏c	—	R-002	—	2.5+	7.7+	—	—		

S-136掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-003	(10.0)	0.7	(8.0)	—	—	1/8	
	小皿a1	ヘラ?	R-001	—	0.8	—	○	○	片	
	小皿a1	—	R-002	—	0.8	—	—	—	片	
	小皿a1	—	R-004	—	0.8	—	—	○	片	
	小皿a1	—	R-005	—	1.0	—	—	—	片	

S-138

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀	ヘラ?	R-001	—	2.6+	(9.0)	○	×	1/6	搬入品か

S-141

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-004	(9.2)	1.5	(4.7)	—	—	1/3	
	小皿a1	—	R-003	(9.4)	1.25	(6.9)	—	—	1/5	
	小皿a1	—	R-002	(10.0)	1.2	(6.4)	—	—	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	R-001	(14.4)	3.75	—	—	×	1/4	
	丸底坏a	—	R-005	—	3.4+	—	—	—	片	

S-148

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c	ヘラ?	R-001	14.4	5.45	(7.5)	—	×	ほぼ1/1	

S-161

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(11.0)	1.3	(8.7)	○	—	1/6	

S-163暗茶色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-024	9.6	1.1	7.2	—	○	2/3	
	小皿a1	—	R-025	(9.8)	0.9	(8.1)	—	—	1/3	
	小皿a1	—	R-026	—	0.95+	—	—	—	片	
	坏a	ヘラ	R-020	12.2	3.5	7.8	—	○	4/5	
	坏a	ヘラ	R-033	(12.4)	3.15	(7.6)	—	—	1/4	
	坏a	ヘラ	R-034	(12.6)	3.7	(7.4)	—	—	1/3	
	坏a	ヘラ	R-037	12.7	3.3	8.5	○	○	1/2	
	坏a	ヘラ	R-012	12.8	3.6	7.5	—	×	2/3	
	坏a	ヘラ	R-016	12.8	3.7	7.8	—	—	1/1	
	坏a	ヘラ	R-002	12.8	3.85	8.1	○	—	1/1	
	坏a	ヘラ	R-018	12.9	3.8	8.45	—	—	2/3	
	坏a	—	R-017	12.9	3.85	7.1	—	—	5/6	
	坏a	ヘラ	R-004	13.1	3.2	8.4	—	—	1/2	
	坏a	ヘラ	R-003	(13.2)	3.9	8.0	○	○	1/2	
	坏a	ヘラ	R-001	(13.4)	3.6	(8.8)	—	—	1/2	
	坏a	ヘラ	R-021	(13.6)	3.3	(7.6)	—	—	1/3	
	坏a	ヘラ	R-023	(14.0)	3.0	(10.2)	—	○	1/4	
	坏a	ヘラ	R-022	14.0	3.25	8.8	—	—	1/2	
	坏×椀		R-019	(16.0)	5.1+	—			1/5	
	椀c	ヘラ	R-013	14.8	6.4	8.2	—	×	7/8	
	椀c	ヘラ	R-014	17.4	7.0	11.0	—	×	3/4	
	椀c	ヘラ	R-028	—	5.0+	9.95	—	—	底部1/1	
	椀c1	ヘラ	R-036	(14.3)	3.6	8.8	○	—	底部1/1	
	皿a	ヘラ	R-027	(12.4)	1.45	(9.0)	—	—	1/4	
	皿a	ヘラ	R-009	13.8	2.2	10.6	—	—	ほぼ1/1	
	皿a	ヘラ	R-010	(14.0)	1.7	(10.8)	—	—	1/2	

S-163茶黄色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002	(9.8)	1.25	(7.6)	○	○	1/4	
	小皿a1	—	R-003	(10.0)	0.65	(8.0)	—	○	1/6	
	小皿a1	ヘラ?	R-001	(10.0)	0.9	(8.6)	—	—	1/8	
	坏a	ヘラ	R-004	(13.2)	3.5	(8.4)	—	—	1/5	

S-164

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	9.6	1.7	7.4	○	○	1/1	

S-179

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.1)	1.0	(7.4)	—	○	1/4	
	小皿	ヘラ?	R-002	8.8	0.7	8.4	—	○	7/8	京都系

S-182

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	(1.65)	—	—	—	片	
	丸底坏	—	R-002	—	(2.85)	—	—	—	片	

S-183

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	(7.9)	1.0	(6.55)	—	—	2/3	
	小皿a1	ヘラ?	R-002	(9.1)	1.3	(7.2)	—	—	1/2	
	小皿a1	—	R-001	(9.4)	0.9	(7.3)	○	—	1/4	
	小皿a1	—	R-004	—	1.1	—	—	—	片	
	坏a	—	R-005	—	1.45	—	—	—	片	

S-186

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	0.95	—	—	—	片	

S-186柱痕

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c	—	R-001	—	1.6+	—	—	—	片	

S-187

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-008	—	2.4+	—			片	畿内系

S-188

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	—	0.8+	—	—	—	片	

S-214

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀		R-001	—	1.8+	—			片	

S-216

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-002	—	1.55+	—			片	畿内系
	坏	—	R-003	—	1.75+	—	—	—	片	畿内系

大宰府条坊跡第168次調査　供膳具計測表（3）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-219

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×皿b	R-001	—	2.35+	—			片	

S-222

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏	R-001	—	3.6+	—			片	

S-229

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c1 ヘラ	R-001	—	2.7+	7.0	—	—	底部1/1	

S-231

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀c —	R-001	—	1.2+	—	—	—	片	

S-233

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀c —	R-001	—	1.3+	—	—	—	片	

S-237

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a —	R-001	15.4	2.9	11.5	—	—	3/5	

S-250c掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b×鉢	R-001	(17.0)	2.95+	—			1/10	

S-250f

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-003	—	2.9+	—			片	畿内系
	坏	R-004	—	3.1+	—			片	畿内系

S-250j掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b	R-001	—	1.8+	—			片	

S-260

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×椀	R-001	—	1.9+	—			片	

S-275茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-002	(9.7)	1.1	(7.4)	○	—	1/6	
	小皿a1 —	R-001	(10.7)	1.2	(8.0)	—	—	1/6	
	小皿a2 —	R-003	(12.0)	0.9	(9.2)	—	—	1/5	
	丸底坏×椀 —	R-005	(17.8)	4.5+	—	—	—	1/4	
	丸底坏×椀 —	R-004	—	4.1+	—	—	—	1/8	

S-277

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀 —	R-001	(16.9)	6.2+	—	—	—	1/3	

S-280茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b —	R-001	—	1.9+	—	—	—	片	

S-281

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b —	R-001	(16.2)	3.0	—	—	—	1/4	

S-285淡茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-004	—	2.5+	—			片	畿内系
	坏	R-005	—	3.0+	—			片	

S-287

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.1+	—			片	畿内系

S-290c

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-002	—	4.1+	—			片	

S-290c掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	高坏	R-002	—	1.4+	(12.5)			1/5	

S-290f掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	盤×皿c —	R-003		1.5+	(14.2)	—	—	1/5	

S-290g

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a	R-003	—	2.6+	—			片	

S-290j

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	盤×大坏c —	R-001	—	2.2+	—	—	—	片	

S-290j掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b —	R-002	—	2.0+	—	—	—	片	

S-290k

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	蓋3	R-002	—	1.7+	—			片	

S-294

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c —	R-003		1.2+		—	—	片	

S-299

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀	R-002	—	2.5+	—			片	

S-302

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	R-003	—	3.65+	—			片	

S-305a

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏 —	R-001	—	3.0+	—	—	—	片	畿内系

S-305c

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏 —	R-001	—	3.2+	—	—	—	片	畿内系

S-305c掘方

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏 —	R-001	—	2.9+	—	—	—	片	畿内系

S-305e

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b	R-001	—	2.3+	—			片	

S-310a

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.2+	—			片	畿内系

S-314

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.3+	—			片	畿内系

S-330茶黒色砂質土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏 —	R-001	(15.0)	3.6+	—	×	—	1/6	

S-330青灰色粘土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ?	R-002	—	1.15+	—	○	—	片	
	小皿a1 ヘラ	R-003	—	0.85+	—	—	—	片	

S-335黒色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸椀×丸坏 ヘラ	R-002	(14.1)	4.15	—	×	—	1/7	

S-359

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b —	R-002	—	2.1+	—	—	—	片	

S-367

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001	(10.2)	0.9	(8.0)	○	—	1/6	

S-374

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 —	R-001	—	1.1	—	—	—	片	

S-400

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏 ヘラ	R-004	—	2.0+	—	○	—		
	丸底坏	R-001	—	2.9+					
	丸底坏	R-002		2.4+					
	丸底坏	R-003		2.9+					

S-403

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×椀	R-001	—	3.1+	—				

S-405

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001	—	1.4	—	○	—		

S-405黄茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001	(10.8)	1.4	(7.6)	—	○		

S-406

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸椀	R-001	(12.4)	3.35+	—				
	丸椀	R-002	(12.6)	3.3+	—				

S-410

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c	R-003	—	2.1+	—				

S-410淡茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-003	—	1.9+	—				
	坏×皿	R-002	—	1.4+	—				

S-413

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d ヘラ	R-001	13.75	3.6	7.0	—	×		

S-415

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c	R-001	—	1.55+	—				

S-416

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.45+	—				搬入
	坏	R-002	—	2.3+	—				
	坏	R-003	—	1.9+	—				

S-417

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1	R-002		1.4+					
	丸底坏	R-001		3.0+					

S-419

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏	R-001	(13.2)	3.6+	—				

S-420a

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 —	R-003	(8.8)	1.35+	—	—	○		
	小皿1	R-004	—	1.4+	—				
	小皿?	R-005	—	1.1+	—				
	丸底坏	R-001	—	2.9+	—				
	丸底坏	R-002	—	3.1+	—				

S-420a柱痕

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×皿	R-001	—	1.6+	—				

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（4）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-420b

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿?	R-001	—	2.1+	—				

S-420d

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏?	R-001	—	2.0+	—				
	皿×坏	R-002	—	1.35+	—				

S-420e

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿?	R-002	—	1.4+	—				
	坏×皿	R-001	—	1.8+	—				

S-421

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.4+	—				
黒色土器A類	椀	R-003	—	2.4+	—				
	椀	R-005		1.5+					
黒色土器B類	椀	R-002	—	4.05+	—				

S-423

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-001	—	1.2+	—				
	坏	R-002	—	2.05+	—				

S-424

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿	R-003	—	1.2+	—				
	丸椀c	R-001	(13.4)	4.25+	—				
	丸椀	R-002	—	3.4+	—				

S-425

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-002	10.8	1.6～1.65	8.1	—	○		
	小皿a2　ヘラ	R-007	—	0.75	—	○	○		
	小皿a2　—	R-004	(11.0)	1.0+	(8.2)	—	—		
	小皿a2　—	R-006	—	1.1	—	—	—		
	小皿a2　—	R-005	(11.2)	1.3	(8.6)	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-003	(11.6)	1.2	(8.0)	—	○		
	坏×椀	R-008	—	2.7+	—				

S-425黄色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-001	(10.8)	1.2	(7.8)	—	○		
	小皿a1　ヘラ	R-003	—	1.4	—	○	—		
	小皿a1　ヘラ	R-002	(11.2)	1.5	(8.6)	○	—		
	小皿a1　ヘラ	R-008	—	1.45+	—				
	小皿a2　ヘラ	R-005	(11.5)	0.7	(8.8)	—	—		
	小皿a2	R-007	(11.5)	0.55+	—				
	小皿a2　ヘラ	R-006	—	0.7+	—	○	—		
	坏c	R-009	—	2.85+	—				
	丸椀	R-004	(14.1)	2.9+	—				

S-425灰黒色粘土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-001	—	1.5	—				
	椀c	R-002	—	2.65+	(8.2)				

S-425黒色粘土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-001	(10.4)	1.6	(8.6)	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-002	10.9	1.6～1.65	8.5	○	○		
	坏×皿	R-004	—	2.4+	—				
	椀c	R-003	(14.6)	6.1	7.9				
	丸椀	R-005	—	2.5+	—				
黒色土器A類	椀	R-009	—	3.8+	—				
黒色土器B類	椀	R-006	(13.4)	3.0+	—				
	椀	R-008	—	1.25+	—				
	椀×坏	R-007	—	2.45+	—				

S-425茶褐色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-004	—	3.8+	—				
	皿	R-002	—	1.8+	—				
	皿	R-003	—	1.5+	—				
黒色土器A類	椀	R-001	—	3.45+	—				

S-425灰色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-002	—	1.1	—	—	○		
	小皿a1　—	R-003	—	1.1	—	—	○		
	小皿a1　ヘラ	R-004	—	1.1	—	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-017	(9.4)	1.25	(6.8)	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-015	(10.8)	1.0	(8.2)	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-014	(10.9)	1.85	(7.9)	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-013	(11.0)	1.7	(8.1)	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-018	(11.6)	0.75	(8.8)	—	—		
	小皿a2　—	R-005	—	0.8	—	—	○		
	小皿a2　ヘラ	R-006	—	0.8	—	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-008	—	0.8	—	—	—		
	小皿a2　—	R-007	—	0.95	—	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-001	—	1.2	—	—	○		
	小皿2	R-019	(11.0)	1.05+	—				
	小皿2	R-020	—	1.0+	—				
	坏×椀	R-023	(13.0)	2.6+	—				
	椀c2	R-025	—	2.4+	7.6				
	椀c2	R-026	—	3.85+	—				
	椀	R-009	—	3.4+	—				
	椀	R-016	—	2.5+	—				
黒色土器A類	椀	R-010	—	2.6+	—				
	椀	R-024	(14.8)	2.6+	—				

S-425黒色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-005	—	1.2	—	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-006	—	1.25	—	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-004	—	1.3	—	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-003	—	1.5	—	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-002	10.8	1.6～1.8	8.3	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-001	11.0	1.7～1.9	7.8	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-013	—	0.8	—	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-015	—	0.8	—	—	○		
	小皿a2　—	R-014	—	0.9	—	—	○		
	小皿a2　ヘラ	R-008	11.0	0.9～1.0	7.8	○	○		
	小皿a2　—	R-010	(11.0)	1.0+	(8.2)	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-009	(11.2)	0.9	(8.4)	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-011	(11.2)	0.9	(7.2)	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-012	(11.2)	1.2	(8.2)	—	○		
	小皿a2　ヘラ	R-016	—	1.1	—	—	—		
	小皿a2　ヘラ	R-007	11.4	1.2	8.4	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-017	—	0.8+	—	—	○		
	小皿a2　—	R-018	—	0.9+	—	—	—		
	小皿a2　—	R-019	—	1.0+	—	—	—		
	小皿a2　—	R-020	—	0.8+	—	—	—		
	小皿a2　—	R-021	—	1.0+	—	—	—		
	小皿a2　—	R-022	—	1.2+	—	—	○		
	坏　—	R-021	—	2.1+	8.1	○	×		
	坏×丸椀　—	R-026	(13.4)	3.6	(11.8)	—	—		
	坏×丸椀　—	R-027	—	2.6+	—	—	—		灯明
	椀c2	R-030	(15.2)	6.6	8.6				
	椀c2	R-031	(15.8)	5.0+	—		○		
	椀c2　ヘラ	R-032	—	3.2+	(8.4)				
	椀c2	R-036	—	1.7+	—				
黒色土器A類	椀c2	R-037	(14.6)	6.1	7.2				

S-425茶黒色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　ヘラ	R-001	10.6	1.35～1.65	7.65	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-005	(9.6)	1.7	(7.7)	○	—		
	小皿a1　ヘラ	R-002	(10.0)	1.6	(7.6)	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-003	(10.8)	1.5	(7.9)	○	○		
	小皿a1　ヘラ	R-004	(11.0)	1.6	(8.2)	○	○		
	小皿a2　ヘラ	R-006	—	0.7	—	○	—		
	小皿a2　—	R-007	—	0.7+	—	—	—		
	坏	R-009	—	4.0+	—				
	椀c	R-008	—	3.75+	8.4				
	丸椀a　ヘラ	R-010	12.6	4.1	—	○	○		
	丸椀	R-011	(16.2)	3.5+	—				

S-427

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-002	—	2.3+	—				
	坏?	R-003	—	1.5+	—				

S-428

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-001	(9.4)	1.8	(6.2)				
	小皿a1	R-003	—	1.05+	—				
	小皿1	R-005	—	1.6+	—				
	坏?	R-004	—	1.7+	—				
	坏?	R-006	—	2.0+	—				
	皿a	R-002	—	1.05+	—				

S-429

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1　—	R-001	—	1.2	—	—	—		

S-430

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a　ヘラ	R-002	—	2.7	—	—	○		
	坏	R-003	(11.4)	2.1+	—				
	坏	R-004	(12.0)	2.3+	—				
	坏	R-020	(12.9)	2.45+	—				
	坏	R-001	(13.0)	3.0+	—				
	坏	R-005	—	2.7	—				
	坏	R-021	—	2.8+	—				
	皿×坏	R-016							
	椀	R-006	—	3.0+	—				
	椀×坏	R-024	—	2.85+	—				
	蓋3	R-022	—	1.2+	—				
黒色土器A類	椀c　ヘラ	R-011	—	1.9+	7.5				

S-430茶褐色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c　ヘラ	R-001	—	2.5+	7.6	—	○		

S-430黒茶色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a　ヘラ	R-002	(12.4)	3.2	7.5	—	—		
	坏a　ヘラ	R-010	—	2.3+	—	—	—		
	坏	R-003	—	1.6+	—				
	坏	R-004	—	2.15+	—				
	坏	R-007	—	2.45+	—				
	椀c1	R-001	(13.8)	5.5	6.1				VIII期type

S-431

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1　—	R-002	(10.2)	1.6	(8.0)	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-003	(9.6)	0.9	(8.2)	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-004	—	1.1	—	—	—		
	小皿a1　ヘラ	R-005	(9.6)	0.9	(8.0)	—	—		
	丸底坏a	R-001	(14.6)	2.6+	—				

S-432

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1　—	R-001	—	1.15	—	—	—		

S-433

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1	R-001	—	1.2+	—				
	小皿1	R-002	—	1.4+	—				
	小皿1	R-003	—	1.2	—				

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（5）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-435

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	9.4	1.3〜1.4	7.3	—	○		
	小皿a1	—	R-008	(8.6)	1.1	(7.6)	—	○		
	小皿a1	—	R-010	(9.6)	1.25	(6.6)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	9.8	1.0〜1.2	7.2	○	○		
	小皿a1	—	R-002	(9.8)	1.2	(7.4)	—	—		
	小皿a1	—	R-011	(9.8)	1.3	(6.8)	—	○		
	小皿a1	—	R-006	(9.8)	1.4	(6.5)	—	○		
	小皿a1	—	R-005	(9.8)	1.6	(7.9)	—	○		
	小皿a1	—	R-007	(10.0)	1.1	7.3	—	○		
	小皿a1	—	R-009	(10.0)	1.2	(7.6)	—	○		
	小皿a1	—	R-012	(10.0)	1.4	(7.2)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	(10.0)	1.5	(7.8)	—	○		
	小皿a1	—	R-013	—	1.3	—	—	○		
	丸底坏a	—	R-014	(15.4)	3.2	—				
	丸底坏	—	R-018	(15.2)	3.3+	—	—	—		
	丸底坏	—	R-019	(15.4)	2.3+	—	—	—		
	丸底坏	—	R-015	(15.4)	3.6+	—				
	丸底坏	ヘラ	R-016	(15.6)	3.2+	—	—	—		
	丸底坏	—	R-017	(15.6)	3.2+	—	—	—		
	丸底坏	ヘラ	R-020	—	3.2	—	—	○		
黒色土器B類	椀		R-021	—	1.9+	—				

S-435暗灰色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-004	—	2.7+	—				
	丸底坏		R-001	—	2.55+	—				
	丸底坏		R-002	—	2.1+	—				
	丸底坏		R-003	—	1.8+	—				

S-435灰茶色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	—	1.0	—	—	—		
	小皿a1	—	R-002	—	1.15	—	—	—		
	丸底坏		R-003	—	2.6+	—				
	丸底坏		R-004	—	2.9+	—				
	丸底坏		R-005	—	2.25+	—				
	丸底坏		R-006	—	3.9+	—				

S-435茶灰色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-005	—	0.7	—				
	小皿a1	ヘラ	R-017	(10.6)	1.45	(9.3)				
	小皿a		R-013	—	1.1	—				
	坏		R-011	—	1.9+	—				
	丸底坏		R-001	—	2.5+	—				
	丸底坏		R-002	—	3.65+	—				
	丸底坏		R-003	—	2.2+	—				
	丸底坏		R-004	—	2.6+	—				
	丸底坏		R-009	—	1.7+	—				
	丸底坏		R-010	—	2.9+	—				
	丸底坏		R-012	—	3.5+	—				
	丸底坏		R-018	—	2.5+	—				
	丸底坏	ヘラ	R-019	—	2.6+	—				
	丸底坏		R-020	—	2.5+	—				
	丸底坏		R-021	—	2.7+	—				
	丸椀a		R-022	(13.4)	3.3	(9.3)				灯明?
	丸椀		R-008	—	2.95+	—				
	丸椀		R-014	—	3.2+	—				

S-435暗黒灰色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏		R-001	—	1.7+	—				
黒色土器A類	椀c		R-002	—	1.9+	—				

S-437

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	2.8+	—				
	坏×皿		R-002	—	1.2+	—				

S-440

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-005	(9.2)	1.3	(7.0)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	(9.4)	1.3	(7.0)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-001	9.8	1.0〜1.6	7.2	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-002	9.8	1.3〜1.4	7.6	—	○		
	小皿a1	—	R-003	(10.6)	1.6	(7.8)	—	—		
	小皿a1	—	R-010	—	0.9	—	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-007	—	1.0	—	—	○		
	小皿a1	—	R-006	—	1.2	—	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	—	1.2	—	○	—		
	小皿a1	—	R-009	—	1.4	—	—	—		
	坏		R-011	—	2.1	—				
	丸底坏		R-014	—	2.0+	—				
	丸底坏		R-015	—	3.1+	—				
	坏×椀		R-012	—	3.0+	—				
	坏×椀		R-013	—	3.3+	—				
黒色土器B類	椀		R-016	—	2.1+	—				

S-440茶色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	9.4	1.0〜1.4	7.0	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-007	(9.6)	1.4	(7.4)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-005	9.6	1.4〜1.55	7.9	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-001	9.8	1.4〜1.5	7.8	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-009	(10.0)	1.4	(7.7)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-002	10.1	1.8〜1.9	7.3	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	10.4	1.2〜1.6	7.9	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-006	10.4	1.4〜1.5	8.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	(10.6)	0.9	(8.1)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-010	—	1.1	—	○	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-011	(15.8)	3.9	—				
	丸底坏	ヘラ	R-012	(15.4)	3.3+	—				
	丸底坏	—	R-013	—	3.55	—				
	丸底坏	ヘラ	R-014	—	3.0+	—				
	丸底坏	—	R-015	—	2.8+	—				
	丸底坏		R-017	—	2.2+	—				

S-441

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	2.0+	—				
黒色土器B類	椀×坏		R-002	—	2.45+	—				

S-443

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	(9.6)	0.9	(7.0)	—	—		

S-445

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-001	(13.4)	3.7	(6.4)	—	○		VIB期type

S-446

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.0)	1.1	(6.9)	○	○		
	小皿a1	—	R-002	(9.4)	1.0	(7.0)	○	○		
	丸底坏		R-004	(13.0)	2.3+					
	丸底坏		R-003	(16.0)	3.0+					
	丸底坏		R-005	—	3.7+					
	丸底坏		R-006	—	2.8+					

S-449

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	—	R-002	—	1.5+	—	—	—		

S-451

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-007	(8.4)	1.1	(6.7)	○	○		
	小皿a1	ヘラ?	R-005	(8.6)	1.0	(7.2)	—	—		
	小皿a1	—	R-006	(8.6)	1.3	(7.2)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	(10.6)	1.5	(8.4)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-009	—	1.65+	—	—	—		
	丸底坏a		R-010	(14.2)	3.25	—				
	丸底坏		R-001	(15.8)	2.4+	—				
	丸底坏		R-002	—	2.2+	—				
	丸底坏		R-003	—	2.2+	—				
	皿		R-004	—	2.2+	—				

S-453

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-002	(8.8)	1.2	(6.8)	○	—		
	小皿a1	イト?	R-001	(10.3)	1.3	(8.4)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-006	—	3.4	—	○	—		
	坏a	ヘラ	R-003	—	3.4	—	—	—		
	坏		R-005	(14.8)	1.95+	—				
	丸底坏		R-007	—	3.1+	—				
	丸底坏		R-008	—	2.9+	—				
	椀c1		R-004	(14.2)	5.25	(8.0)				

S-455

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-028	(8.3)	1.45	(6.0)	—	—		
	小皿a1	—	R-024	(9.1)	0.95	(7.1)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-026	(9.2)	0.95	(6.4)	○	—		
	小皿a1	—	R-002	(9.2)	1.4	(7.2)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.2)	1.5	(6.9)	—	○		
	小皿a1	—	R-045	(9.3)	1.0	(7.0)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-001	9.5	1.2〜1.4	6.2	○	○		
	小皿a1	—	R-034	(9.6)	0.9	(6.8)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-036	(9.6)	1.1	(7.6)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-046	(9.8)	0.95	(7.0)	○	—		
	小皿a1	—	R-037	(9.8)	1.0	(7.4)	—	—		
	小皿a1	—	R-004	(9.8)	1.5	(7.4)	—	○		
	小皿a1	—	R-013	(10.0)	1.5	(7.9)	—	○		
	小皿a1	—	R-005	(10.2)	1.25	(8.0)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-023	10.7	1.1	7.3	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-018	(10.8)	1.0	(8.4)				
	小皿a1	ヘラ	R-038	(10.8)	1.2+	—	○	—		
	小皿a1	ヘラ?	R-039	—	0.75	—	—	—		
	小皿a1	—	R-027	—	0.9	—	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-014	—	1.0	—	○	○		
	小皿a1	—	R-015	—	1.2	—	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-019	—	1.2	—				
	小皿a1	ヘラ	R-052	—	1.2	—	—	—		
	小皿a1	—	R-006	—	1.5	—	—	—		
	小皿a×b	ヘラ	R-025	(8.6)	1.8	(6.0)	○	○		
	小皿	ヘラ?	R-054	—	1.3	—	—	—		
	丸底坏a	—	R-008	15.5	2.7〜3.1	—	—	○		
	丸底坏a	—	R-007	15.6	2.9〜3.6	—	—	—		
	丸底坏	ヘラ	R-049	14.2	2.95	10.7	—	○		
	丸底坏		R-031	(15.5)	2.9+	—				
	丸底坏	ヘラ	R-050	15.5	3.8	9.1	—	○		
	丸底坏		R-029	(15.8)	2.8+	—				
	丸底坏	ヘラ	R-051	(16.0)	3.55	(10.8)	—	—		
	丸底坏		R-009	—	2.7+	—				
	丸底坏		R-035	—	2.65+	—				
	丸底坏		R-040	—	2.8+	—				
	丸底坏		R-041	—	2.3+	—				
	丸底坏		R-042	—	2.2+	—				
	丸底坏	ヘラ	R-047	—	4.8+	—				
	丸底坏		R-048	—	3.6+	—				
	大皿c×高坏		R-022	21.0	5.45	10.4				
	丸椀		R-030	(15.9)	4.3+					
	皿a	—	R-011	—	1.9	—	—	—		
	皿a	ヘラ	R-020	—	1.6	—	—	○		
黒色土器A類	椀		R-032	(16.2)	4.9+	—				
黒色土器B類	椀		R-033	—	4.1+	—				
	椀		R-043	—	2.9+	—				

S-455黒色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ?	R-007	(10.05)	1.3	(7.3)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	—	1.3	—	○	○		
	小皿a1×坏a	ヘラ	R-001	(11.0)	1.8	(8.2)	○	○		
	小皿×皿	—	R-002	—	1.7	—	—	—		
	小皿×皿	—	R-003	—	1.5+	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-006	14.8	4.0	—	—	○		
	丸底坏	—	R-005	—	2.8+	—	—	—		

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（6）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-455黄色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	—	1.25	—	—	—		
	丸底坏		R-002	(14.8)	3.0+	—				灯明

S-461

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×皿		R-002	—	1.6+	—				
	椀c		R-001	—	2.05+	(8.6)				

S-463

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-002	—	2.0+	—				

S-464

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	2.4+	—				

S-465灰色砂質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	(8.8)	1.1	(7.4)				
	小皿a1		R-009	—	1.2	—				
	坏×皿		R-010	—	1.8+	—				
	丸底坏a		R-003	(15.6)	2.75	—				
	丸底坏a		R-002	(15.9)	4.25	—				
	丸底坏a		R-008	(16.0)	3.05	—				
	丸底坏		R-004	—	1.9+	—				
	丸底坏		R-005	—	2.5+	—				
	丸底坏		R-006	—	3.4+	—				

S-465灰黒色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-011	(6.0)	1.0	(6.0)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	(6.9)	1.15	(6.9)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-007	(7.6)	1.2	(7.6)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.8)	1.2	(7.0)	○	—		
	小皿a1	—	R-002	(11.0)	1.0	(8.5)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-003	—	0.9	—	○	—		
	小皿1		R-010	—	1.7+	—				
	丸底坏		R-008	(13.3)	2.3+	—				
	丸底坏		R-005	—	2.5+	—				
	丸底坏		R-006	—	2.35+	—				
	丸底坏		R-009	—	3.6+	—				

S-467

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-002	—	1.2	—	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	—	1.4	—	—	—		

S-470

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-020	(8.8)	1.2	(5.8)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-016	9.1	1.6	6.8	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-023	(9.2)	1.3	(6.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-017	9.2	1.5	7.1	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-019	(9.2)	1.9	(6.8)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-018	9.4	1.75	7.3	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-032	(9.6)	1.33	(7.3)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-033	(9.6)	1.35	(7.6)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-027	(9.8)	1.3	(7.0)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-034	(9.8)	1.85	(7.9)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-015	(10.2)	1.55	(7.9)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-013	10.3	1.25	8.15	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-024	(10.5)	0.85	(8.0)	○	○		
	小皿a1	?	R-031	(10.6)	0.7	(7.6)	○	×		
	小皿a1	ヘラ	R-026	(10.6)	1.2+	(8.8)	—	—		
	小皿a1	—	R-022	(10.8)	1.0	(7.6)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-025	(10.8)	1.1	(7.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-014	(11.0)	1.85	(7.8)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-028	—	1.05+	—	○	—		
	小皿a1	—	R-021	—	1.0	—	—	—		
	小皿a1	—	R-029	—	1.0	—	—	—		
	小皿a2	ヘラ	R-030	(10.6)	0.85	(7.2)				
	小皿a2	—	R-035	(10.6)	1.4	(4.9)	—	—		
	丸底坏a		R-004	(13.8)	3.6+	—				
	丸底坏a		R-001	(14.2)	3.35	—				
	丸底坏a	ヘラ	R-006	(14.2)	3.2+	(8.2)	○	○		
	丸底坏a		R-002	(14.4)	3.15	—				
	丸底坏a		R-003	(15.0)	3.5	—				
	丸底坏a		R-005	(15.2)	3.3+	—				
	丸底坏a		R-007	—	3.4+	—				
	丸底坏a		R-008	—	3.1+	—				
	丸底坏	×	R-009	—	2.1+	—				
	椀c2	—	R-011	—	3.4+	—				
	椀c	×	R-012	—	2.5+	(9.1)				
	皿c	ヘラ	R-010	(12.0)	2.2+	—				

S-470茶色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿2		R-003	—	0.62	—				
	丸底坏		R-001	—	3.5+	—				
	丸底坏		R-002	—	3.4+	—				

S-470灰色砂土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	10.8	1.33	8.2	○	×		

S-470黒色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-007	(10.4)	1.35	(8.0)	○			
	小皿a1	ヘラ	R-005	(10.6)	1.2	(7.6)	○	×		
	坏d	×	R-003	(14.0)	2.3+	—				
	坏d	×	R-004	—	3.2+	—				
	丸底坏a		R-002	15.1	3.6	—		○		
	丸底坏a		R-010	(16.4)	3.6+	—				
	丸底坏c	ヘラ	R-001	—	3.0+	7.35	○			
	丸底坏		R-006	—	3.1+	—				

S-470腐植土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-005	—	0.9	—	—	—		
	丸底坏		R-003	(14.0)	2.4+	—				
	椀c		R-002	—	2.2+	(6.8)				

S-470腐植土2

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-006	(10.0)	1.15	(6.8)	○	○		
	坏		R-001	(11.6)	2.55+	—				
	坏?		R-007							墨書
	丸底坏		R-002	—	2.4+	—				
	椀		R-005	—	2.7+	—				
	皿a		R-004	(15.8)	1.4	(12.3)				
	皿?		R-003	—	1.45+	—				

S-472

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀×皿		R-001	—	3.2+	—				

S-472

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀×坏		R-001	—	3.2+	—				

S-473

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	(8.8)	0.85	(7.0)				
	小皿a1		R-002	(8.8)	1.0	(7.2)				

S-474

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-003	(9.2)	0.75	(8.2)				
	丸底坏a		R-002	(15.0)	2.7+	—				
	丸底坏		R-001	—	3.25+	—				

S-475

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-012	(9.2)	1.2	(6.5)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	(9.8)	1.4	(7.2)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	10.1	1.5～1.6	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-005	(10.2)	1.3	(7.8)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-006	(10.2)	1.8	(7.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	(10.4)	1.3	(8.2)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-002	10.4	1.4	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	(10.6)	1.5	8.2	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-013	—	1.1	—	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-014	—	1.1	—	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-009	—	1.5	—	—	○		
	丸底坏a		R-010	(14.4)	3.8+	—				
	丸底坏		R-011	—	3.8+	—				
	丸底坏		R-015	—	3.9+	—				
	丸底坏		R-016	—	2.6+	—				
黒色土器A類	椀		R-007	(15.0)	3.9+	—				

S-475黒色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.0)	1.4+	(7.9)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-006	(10.8)	0.9	(8.8)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-002	13.0	1.6	8.1	○	○		
	丸底坏a		R-003	12.2	2.5～2.95	—				
	丸底坏a		R-004	15.0	3.6～3.7	—				
黒色土器A類	椀c2		R-005	(15.0)	4.85	6.6				

S-475灰色砂質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	(10.2)	1.0	(7.7)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-002	(10.6)	1.4	(6.6)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	(11.2)	0.8	(10.1)	○	—		
	丸底坏a		R-006	14.8	3.9	—				
	丸底坏a		R-005	(15.6)	3.9	—				
	丸底坏a		R-007	15.6	3.95	—				
	丸底坏		R-004	(15.2)	3.6+	—				
黒色土器B類	椀		R-010	—	2.6+	—				

S-475腐植土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-009	9.4	1.0～1.2	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	(9.6)	1.25	(7.0)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-010	(9.8)	1.15	(7.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-013	(1.08)	0.85	(8.0)	—	—		
	坏		R-005	(15.2)	2.5+	—				
	坏		R-007	—	2.3+	—				
	丸底坏a		R-006	(14.2)	3.1+	—				
	丸底坏a	ヘラ	R-001	(14.7)	3.6～3.9	—		○		
	丸底坏a		R-003	14.9	3.55	—				
	丸底坏a	ヘラ	R-002	(15.2)	3.35	11.35	—	○		
	丸底坏		R-004	(15.0)	3.4+	—				
	丸底坏		R-011	(15.7)	2.7+	—				
	丸底坏		R-012	—	2.7+	—				
	丸底坏		R-014	—	2.25+	—				

S-475茶灰色砂質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-007	(10.1)	1.1	(7.3)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-006	(10.1)	1.45	(7.8)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	10.15	1.4～1.5	7.7	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-004	10.2	1.4	8.1	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-005	(10.8)	1.0	(9.2)	○	○		
	小皿a2	ヘラ	R-008	(10.5)	1.05	(8.4)	—	—		
	小皿a2	ヘラ	R-009	—	0.8	—	○	—		
	丸底坏a		R-002	—	4.0	—				
	丸底坏		R-001	(14.3)	3.5	—				

S-476

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	坏		R-001	—	1.6+	(7.9)				

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（7）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-477

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	R-001	—	3.0	—				畿内系
	丸底坏a	R-002	(15.6)	3.5	—				
	丸底坏	R-003	—	2.4+	—				
	皿a	R-005	—	2.5	—				畿内系
	皿	R-004	—	2.2	—				

S-478

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-004	—	0.85	—	—	—		
	小皿1	R-001	—	0.8+	—	—	—		
	小皿1	R-002	—	1.7+	—	—	—		灯明
	坏	R-003	—	1.9+	—	—	—		

S-480

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001	(10.0)	1.1	(8.1)	—	○		
	小皿1 —	R-002	—	1.4+	—	—	—		
	小皿1×坏 —	R-003	—	2.3+	—	—	—		
	坏	R-004	—	2.0+	—				

S-482

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-005	—	2.15+	—				

S-483

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d ヘラ	R-004	(16.0)	3.4	(8.0)	—	—		
	坏	R-009	(15.2)	1.85+	—				
	皿 ヘラ	R-002	(17.6)	1.8	(14.8)				
	皿 ヘラ	R-006	(18.0)	2.4	(14.8)				
	皿 ヘラ	R-003	(19.7)	2.15	(16.3)				
黒色土器A類	椀	R-007	—	4.2+	—				

S-484

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀×坏	R-014	—	4.5+	—				
	皿c	R-016	—	1.3+	(13.2)				
	皿d	R-012	(16.1)	2.6	(15.2)				
	皿?	R-004	—	1.05	—				

S-485

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-002	(12.0)	1.85	(7.8)				灯明

S-486

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏	R-003	—	2.2+	—				
	皿	R-001	—	1.8	—				

S-487

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	R-007	(12.8)	3.3	(8.0)				
	坏d?	R-004	—	3.0+	—				
	坏	R-003	—	3.0+	—				
	皿c	R-031	—	3.2	—				
	皿	R-027	—	1.55	—				

S-490

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a ヘラ	R-001	(11.2)	2.5	(8.3)	—	—		
	坏a ヘラ	R-002	(12.6)	3.5	(8.5)	○	○		
	坏c	R-004	—	2.5+	(8.4)				
	坏c	R-010	—	2.2+	—				
	坏d ヘラ	R-003	(13.2)	2.9	(7.2)	—	—		
	椀c1	R-008		2.2+	(8.5)				
	椀c	R-014		4.65+	(8.4)				
黒色土器A類	椀c2	R-007	(12.0)	5.1	(6.0)				
	椀	R-017	—	4.1+	—				
黒色土器B類	椀c	R-012	—	1.75+	—				

S-490白色粗砂

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×椀	R-001	—	2.3+	—				

S-490黒灰色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	—	2.4+	—				
	坏×皿	R-002	—	1.85+	—				

S-490暗青灰色土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a ヘラ	R-001	—	3.0+	(7.2)	○	○		
	坏c	R-004	—	2.05+	—				
	椀	R-008	—	2.8+	(8.3)				
	皿	R-002	—	1.6+	—				
	供膳具	R-006	2.35	3.45	6.5				

S-490灰色粘土

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001	(10.9)	2.8+	—				
	坏	R-011	(13.6)	3.25+	—				
	坏	R-002	—	3.4+	—				
	坏	R-005	—	2.55+	—				
	坏	R-006	—	3.0+	—				
	坏	R-012	—	2.3+	—				
	坏	R-014	—	2.3+	—				
	皿×坏	R-004	—	1.95+	—				
黒色土器A類	椀	R-003	—	2.45+	(8.1)				

S-491

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏	R-001		3.4+					

S-493

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 —	R-006	(9.2)	1.1	(6.6)	○	—		
	小皿a1 —	R-001		0.9+		—	○		
	小皿a1 —	R-002		1.2+		—	—		
	小皿a1 —	R-003		1.2+		○	—		
	小皿a1 —	R-004		0.8+		○	—		
	小皿a1 —	R-005		1.0+		—	—		
	小皿a1 —	R-007		1.8+		○	○		
	小皿a1 —	R-011		1.6+		○	—		
	坏	R-008		1.9+		×	×		
	丸底坏	R-009		3.3+		×	×		
	丸底坏	R-010		3.2+		×	×		
	丸底坏	R-012		3.0+		×	×		
	丸底坏	R-013		2.5+		×	×		
黒色土器B類	椀	R-014		4.6+					

S-495

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-002		1.2+		○			
	小皿a1	R-003		1.3+					
	小皿	R-001		1.3+					
	坏a —	R-005		1.2+	(7.3)	○	○		
	坏a	R-014		4.3					
	坏	R-004		3.3+					
	坏 ヘラ	R-008		1.8+	(6.8)	—	○		
	坏	R-009		2.9+					
	坏	R-010		3.6+					
	坏	R-011		4.0+					
	坏	R-015		3.2+					
	坏	R-016		3.0+					
	坏	R-017		2.4+					
	皿a イト	R-012	(12.3)	1.8	(9.0)	—	—		
	皿a ヘラ	R-013	(12.4)	1.4	9.0	○	○		
黒色土器A類	椀	R-018		2.9+					

S-499

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a ヘラ	R-002	(19.4)	2.4	(15.7)	○	—		

S-501

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001		3.1+					VII期type

S-502

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	R-001	(9.1)	1.2	(7.0)				
	坏	R-002		2.6+					

S-504

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001		2.5+					
	坏	R-002		1.9+					

S-505

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1	R-001		1.5+					
	坏	R-004		3.2+					
	椀	R-005		2.5+					
黒色土器A類	椀c	R-003		2.2+	7.7				

S-506

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏×皿	R-009		3.0+					

S-509

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001		2.3+					

S-510

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 —	R-001	(9.2)	1.1	(7.0)	○	—		
	丸底坏	R-002	(13.9)	3.3	(9.6)				

S-511

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	R-001	(14.8)	3.4	(10.0)				
	丸底坏a	R-003	14.9	3.7	9.4				
	丸底坏a	R-002	(15.8)	4.1	(12.7)				
黒色土器B類	椀	R-004		2.1+					

S-513

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001		0.9+		—	—		

S-514

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿c	R-004		2.1+					

S-516

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001		3.2+					

S-517

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1 ヘラ	R-001		0.8+		—	—		
	坏 —	R-002		2.3+		—	—		

S-519

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-001		3.5+		×	×		
	坏	R-002		2.8+		×	×		

S-521

器別	器種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀	R-001		5.0+		×	×		

大宰府条坊跡第168次調査　供膳具計測表 (8)

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-522

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿1		R-007		1.3+					
	小皿×坏		R-008		1.9+					
	小皿×坏		R-009		2.0+					
	坏		R-002		2.8+		×	×		
	坏		R-003		3.6+		×	×		
	坏		R-011		3.3+					
	皿a	ヘラ	R-001	(12.4)	1.4	(8.3)	○	—		
黒色土器A類	坏c	ヘラ	R-004		4.1+	8.0	○	×		
	坏×椀		R-010		2.7+					

S-523

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a		R-001	(12.8)	3.6	(6.6)				

S-526

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿×坏		R-001		1.5+		×	×		
	坏c		R-003		2.6+		○			筑後型坏
	坏		R-002		2.9+		×	×		
	椀c		R-005		1.7+		○	×		
	皿		R-004		1.8+		○	×		
黒色土器A類	椀c		R-006		1.1+					

S-526黒茶色粘土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003		0.9		○	×		
	丸底坏		R-002		3.5+					
	椀c		R-004		2.0+		○	—		

S-531

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		3.3+		×	×		

S-532

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-002		2.8+		×	×		
	皿		R-001		1.5+		×	×		

S-534

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		2.6+		×	×		

S-536

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c		R-001		1.8+		—	×		

S-541

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀		R-001		2.8+					

S-542

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c		R-002		1.8+		×	×		

S-543

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿	ヘラ	R-002		2.2+		—	—		
黒色土器A類	椀		R-001		1.9+					

S-552

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-004		2.6+					
	椀		R-002		4.4+					
黒色土器A類	椀				3.8+					

S-554

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c		R-001		1.7+					

S-557

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c	ヘラ	R-001		2.2+	(8.0)	○	—		
	椀c	—	R-002		2.7+	(8.8)	—	—		

S-558

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	—	R-001		2.5+	—	—			
	坏×椀	—	R-002		2.0+	—	—			

S-561

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		2.6+		×	×		
	坏		R-002		3.6+		×	×		
	坏		R-003		1.8+		×	×		

S-564

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001		1.0		○	—		
	小皿a1	—	R-002		0.9		○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.9)	1.3	(6.8)	○	—		
	丸底坏	—	R-004	(14.4)	2.9+		○	—		

S-571

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-001	(13.2)	3.35	(8.1)	—	—		

S-572

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	ヘラ	R-001	—	2.05+	—	—	—		
	皿c	—	R-006	—	3.6	—	—	—		

S-582

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c		R-001	—	2.35+	—	×	×		

S-591

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏×坏		R-002	—	3.0+	—				

S-592

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏		R-001	—	3.6+	—				
	皿?		R-002	—	1.9+	—				

S-597

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-003	(12.6)	3.1+	—	×	×		
	坏		R-006	—	2.4+	—	×	×		
	坏×皿		R-007	—	2.4+	—	×	×		
	皿		R-009	—	1.9+	—	×	×		
黒色土器A類	椀c		R-005	—	5.4+	(7.0)	×	×		
	供膳具		R-008	—	1.4+	—	×	×		

S-598

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ?	R-003	—	1.05	—	—			
	坏a	ヘラ	R-001	—	1.8+	(7.6)	—	○		
	坏		R-004	—	2.7+	—				
黒色土器A類	椀		R-002	—	1.05	—				

S-599

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	1.1+	—				
	小皿×坏		R-002	—	1.5+	—				

S-601

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-005	9.6	1.6	7.6	○	—		
	小皿a1	—	R-004		1.3+		—	—		
	丸底坏		R-001		2.4+		—	×		
黒色土器B類	椀		R-002		3.4+					
	椀		R-003		2.2+					

S-602

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002	(8.8)	1.1	(7.2)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.0)	1.1	(7.0)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.2)	1.1	(6.9)	○	○		
	小皿a1	—	R-007	(9.2)	1.6	(7.2)	○	—		
	小皿a1	—	R-017	(9.3)	1.6	(6.4)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-018	(9.7)	1.7	7.3	—	—		
	小皿a1	—	R-006	(9.8)	1.1	(6.6)	—	—		
	小皿a1		R-004		1.4+		—	×		
	小皿a1		R-005		1.1+		×	×		
	小皿a1	ヘラ	R-008		1.3+		○	—		
	小皿a1	—	R-009		2.3+		○	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-010	(11.5)	2.4	(8.8)	○	—		
	丸底坏a	—	R-016	(13.9)	3.9+		—	—		
	丸底坏a		R-019	14.7	3.5	9.6		○		
	丸底坏a	—	R-013		2.6+		—	—		
	丸底坏	—	R-015	(14.4)	3.3+	(9.6)	—	—		
	丸底坏	—	R-011		2.4+		—	—		
	丸底坏	—	R-012		2.6+		—	—		
	丸底坏		R-014		2.0+		×	×		

S-603

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		2.8+		×	×		VII×VIBtype
	坏		R-002		2.7+		×	×		VII×VIBtype
黒色土器A類	椀		R-003		4.5+					VIBtype

S-608

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001		1.0+		○	—		
	椀c	—	R-002		2.0+		—	—		

S-609

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002		0.9		—	—		
	坏か		R-003		1.4+		×	×		
黒色土器A類	椀		R-001		3.7+					

S-612

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿		R-004		1.3+					
	坏a	ヘラ	R-014	(14.1)	3.7	(9.8)	○	○		
	坏c	—	R-012		5.0+		—	—		筑後型
	坏d	ヘラ	R-013	(13.7)	2.8	(8.1)	○	—		
	坏d	ヘラ	R-010		3.4+		—	—		
	坏×椀		R-011		3.9+		×	×		
	椀		R-007		4.8+					
	椀		R-008		3.9+					
	椀		R-009		5.3+					

S-617

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏		R-001		3.5+					
黒色土器B類	小皿	—	R-002		0.8+		—	—		
	椀c		R-003		2.0+	(6.3)				

S-623

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-002		1.3+		○	○		
	坏	—	R-003		1.7+		○	○		
	坏か		R-001	(12.6)	3.5+		×	×		
黒色土器A類	椀c1		R-004	(14.0)	5.6	7.6				

S-624

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-002		1.8+					
	坏	—	R-003		2.8+		—	—		

S-626

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	—	3.4+	(8.2)	—	—		
	坏		R-002	—	2.7+	—				
	坏		R-004	—	1.6+	(9.2)				

S-627

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	(9.8)	1.05	(7.0)	—	—		
	小皿2		R-002	—	1.0	—				

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（9）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-633

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c		R-007	—	3.1+	(9.8)				

S-636

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-002	(8.6)	0.95	(6.7)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	(8.8)	1.0	(6.6)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.0)	1.1	(6.8)	—	○		
	丸底坏		R-004	—	2.1+	—				
	丸底坏		R-005	—	2.6+	—				
	丸底坏		R-006	—	2.5+	—				

S-637

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a2		R-001	—	1.0	—				
	椀?		R-002	—	1.5+	—				

S-638

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	ヘラ	R-001	(13.6)	3.2	(7.4)	—	×		
	坏		R-002	(14.6)	3.05+	—				
	坏		R-005	—	2.95+	—				
	坏		R-007	—	4.0+	—				
	坏?		R-006	—	1.8+	—				
	皿?		R-004	—	1.8+	—				

S-639

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏d	ヘラ	R-015	(18.2)	4.7	(10.2)	—	—		
	坏d		R-014	—	2.6+	—				
	坏		R-001	(13.2)	3.2+	—				
	坏		R-002	(13.4)	2.9+	—				
	坏		R-003	(18.6)	2.85+	—				
	坏		R-004	—	2.9+	—				
	坏		R-020	—	3.0+	—	—	—		
	皿a	ヘラ	R-016	(17.0)	2.2	(14.1)	○	○		
	皿a	ヘラ	R-025	(18.0)	2.25	(14.8)	—	×		
	皿a	ヘラ	R-024	(19.2)	2.05	(14.6)	—	×		
	皿	ヘラ	R-019	—	1.8+	—	—	—		
	大皿a	ヘラ	R-017	(20.9)	2.2	(16.8)	○	—		
	大皿a	ヘラ	R-018	—	1.8+	—	—	—		

S-642

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-005	12.2	3.3	8.25	—	○		
	坏a	ヘラ	R-007	12.5	3.85	7.4	—	○		
	坏a	ヘラ	R-004	12.6	3.5	8.2	—	○		
	坏a	ヘラ	R-003	12.8	3.8	7.2	—	○		
	坏a	ヘラ	R-006	13.1	3.65	7.3	—	×		
	皿a	ヘラ	R-002	13.1	2.05	9.4	—	○		

S-643

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.6)	0.9	(6.6)	○	×		
	小皿a1	ヘラ	R-004	(9.6)	0.9	(7.7)	—	×		
	小皿a1	ヘラ	R-002	(10.4)	1.1	(7.5)	○	○		
	小皿a1	—	R-005	(11.0)	1.1	(7.2)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-006	(11.0)	1.15	(8.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-007	—	0.9	—	○	×		
	小皿a1	ヘラ	R-008	—	0.15	—	—	×		
	小皿a2	—	R-009	(10.6)	0.85+	—	—	—		
	小皿a2	ヘラ	R-010	—	1.2	—	○	×		

S-647

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.0)	1.4	(7.5)	—	○		
	坏	ケズリ出	R-003	—	1.4+	—	—			筑後型
	丸底坏		R-002	—	3.1+	—				

S-648

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a		R-002	(12.6)	3.75+	(7.2)				
	坏c		R-001	—	3.45	(7.6)	—			
	坏		R-003	(11.6)	3.3+	—	○	○		
	坏		R-004	(10.8)	2.6+	—				
	坏		R-005	(12.4)	2.9+	—				

S-649

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-003	—	1.25+	—	○	○		
	坏a	ヘラ	R-004	—	1.45+	—	○			
	坏		R-002	(11.0)	3.15+	—				赤色塗彩

S-651

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	—	3.3+	(7.8)	○			

S-653

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-017	12.4	2.7+	7.8	○	×		
	坏a	ヘラ	R-011	12.8	3.1～3.5	7.7	○	○		
	坏a	ヘラ	R-016	12.8	3.7	7.8	○	×		
	坏a	—	R-006	(13.6)	2.7	(9.2)	○	○		
	坏a	ヘラ	R-012	(13.6)	3.4	(7.7)	×	×		
	坏a	ヘラ	R-013	(13.7)	3.1	8.2	○	×		
	坏a	ヘラ	R-015	14.2	3.1	9.0	○	○		
	坏a	ヘラ	R-026	(15.1)	3.5	(8.7)	○	×		
	坏a	ヘラ	R-019	15.1	3.9	8.8	○	×		
	坏a	ヘラ	R-014	(15.2)	3.9	—	○	×		
	坏d	ヘラ	R-009	(12.8)	2.5	7.7	○	×		
	坏d	—	R-027	(14.6)	2.9	—	—	×		
	坏d	ヘラ	R-018	15.0	3.1	8.4	○	×		
	坏d	ヘラ	R-008	(15.0)	3.2	(7.9)	○	×		
	坏d	ヘラ	R-022	(15.4)	4.2	7.2	○	×		
	坏dか	ヘラ	R-007	(16.2)	3.5	(11.6)	○	×		
	坏	—	R-028	(12.6)	2.4	(8.0)	○	—		
	大坏c		R-034	17.6	9.7～10.3	11.4				
	大坏c		R-030	(19.2)	7.7	(10.6)				
	皿a	—	R-002	(13.0)	1.3	(9.1)	○	○		
	皿a	ヘラ	R-005	(13.2)	1.8	(10.3)	○	×		
	皿a	ヘラ	R-025	(13.3)	1.7	(9.9)	○	×		
	皿a	ヘラ	R-010	(13.7)	2.2	(10.2)	○	×		
	皿a	—	R-001	(14.0)	1.7	(10.6)	○	×		
	皿a	ヘラ	R-004	15.3	2.1	11.5	○	×		
	皿a	—	R-003	(17.0)	1.7	(13.0)	○	×		
	椀c	—	R-020	14.8	5.1	8.0	○	—		

S-659

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.0)	1.0	(7.8)	—	○		

S-661

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	(13.2)	2.6+	—				

S-663

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	(13.0)	3.5	8.1	○	—		
	坏c	—	R-007		2.0+		—	—		
	坏		R-006		2.3+		×	×		
	椀a	—	R-010	(13.6)	5.5	(7.6)	—	—		
	椀c1	—	R-003	(14.9)	5.7	(7.7)	—	—		
黒色土器A類	椀c		R-002		2.8+	7.4				
黒色土器	椀		R-005		3.1+					

S-664

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏?		R-002	—	2.1+	—				

S-672

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	—	1.15+	—				

S-674

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	2.0+	—				

S-676

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-003	(9.6)	1.4	—	—	—		

S-677

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1		R-001	—	1.05+	—				
	丸底坏		R-002	—	3.0+	—				

S-678

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	(10.2)	0.95	(6.4)	—	—		
	皿×坏		R-002	—	1.15+	—				
黒色土器A類	椀c		R-003		1.1+	(5.4)				畿内系

S-679

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	(12.4)	3.4	(7.1)	—	—		

S-697

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002		0.9+		—	—		
	丸底坏		R-001		3.9+					

S-701

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		1.2+	(5.0)				
	坏×皿		R-002		1.6+					

S-706

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-002		3.2+		×	×		
	皿	—	R-001		1.0+		—	—		

S-707

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏		R-001		2.6+					

S-708

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏		R-001	(15.0)	3.2	(10.9)				

S-709

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.2)	0.9	(7.1)	○	—		
	丸底坏		R-002		2.7+		×	×		
	丸底坏		R-003		3.5+		×	×		
	丸底坏		R-004		3.3+		×	×		
	丸底坏	ヘラ	R-005	(14.3)	3.6+	(10.3)	○	—		
	丸底坏		R-006		3.5+		×	×		
	丸底坏	ヘラ	R-007	(14.2)	3.0	(10.6)	—	—		

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（10）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-722

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c		R-005		2.7+					

S-726

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		2.2+		×	×		畿内系

S-727掘方

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001		3.8+					

S-800暗茶灰色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	—	R-001	(10.4)	1.1	(8.0)	—	—		
	小皿a	—	R-002	—	1.1+	—	—	—		
	坏a	イト	R-006	(14.2)	3.3	(8.4)	—			
	丸底坏a	ヘラ	R-005	—	3.4+	—	—			

S-805

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	8.8	1.1～1.2	7.0	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-002	8.8	1.1～1.6	6.9	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-016	(8.8)	1.3	7.1	—	○		
	小皿a1	—	R-074	8.8	1.3	7.3	○	○		
	小皿a1	イト	R-036	9.0	1.0～1.1	7.4	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-005	9.0	1.2～1.3	7.3	—	○		
	小皿a1	イト	R-004	9.0	1.3～1.6	7.0	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-007	9.0	1.4～1.6	6.5	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-019	9.1	1.4～1.5	7.0	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-081	9.2	0.9～1.2	7.2	○	○		
	小皿a1	イト	R-017	9.2	1.2～1.4	7.5	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-010	9.2	1.2～1.6	8.0	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-080	9.2	1.3	7.7	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-018	9.2	1.3～1.7	7.3	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-079	(9.2)	1.4	7.2	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-020	9.2	1.4～1.6	7.4	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-039	9.2	1.4～1.7	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-021	9.2	1.5～1.7	7.2	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	9.2	1.5～1.8	7.1	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-009	9.3	1.1～1.6	7.7	—	○		
	小皿a1	—	R-022	9.3	1.2～1.3	8.2	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-024	(9.3)	1.3	(7.6)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-008	9.3	1.4～1.6	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-037	9.3	1.4～1.6	7.6	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-082	9.3	1.5～1.6	7.6	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-044	9.4	0.9～1.9	7.3	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-042	(9.4)	1.15	(7.9)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-023	(9.4)	1.2	(7.3)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-075	9.4	1.2～1.5	6.9	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-027	9.4	1.2～1.8	7.9	○	○		
	小皿a1	—	R-006	9.4	1.3	7.9	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-041	9.4	1.3～2.1	7.6	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-025	9.4	1.4	7.6	○	—		
	小皿a1	—	R-038	(9.4)	1.4	(7.9)	—	—		
	小皿a1	—	R-084	9.4	1.4～1.7	7.5	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-076	9.4	1.5	7.1	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-083	9.4	1.5	7.6	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-085	9.4	1.5～1.6	8.0	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-077	9.4	1.5～1.6	8.1	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-045	(9.4)	1.8	(7.7)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-011	9.5	1.4～1.5	7.9	○	○		
	小皿a1	—	R-040	9.5	1.5	8.3	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-028	(9.6)	1.1	(8.2)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-086	9.7	1.3～1.4	7.9	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-012	9.8	1.1～1.6	8.0	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-050	9.8	1.4～1.5	8.0	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-013	10.0	1.2～1.6	7.9	○	—		
	小皿a1	イト	R-046	(10.0)	1.7	(7.6)	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-078	10.2	1.0～1.5	7.7	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-029	—	1.4	—	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-026	—	1.4+	7.5	○	○		
	坏a	ヘラ	R-061	16.0	2.5～3.5	10.8	○	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-060	12.0	2.3～2.7	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-014	12.5	2.55	—		○		灯明
	丸底坏a	ヘラ?	R-063	14.2	2.9～3.3	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-058	14.2	3.0～3.6	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-054	14.4	3.0～3.2	—	—	○		
	丸底坏a		R-033	(14.6)	3.0					
	丸底坏a	—	R-065	14.6	3.1～3.25	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-067	14.7	3.35～3.5	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ?	R-068	14.8	2.8～3.0	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-073	14.8	3.7	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-069	14.9	3.2	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-034	(15.0)	3.0			○		
	丸底坏a	ヘラ	R-057	15.0	3.0～3.5	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-072	15.0	3.2	—	○	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-059	15.0	3.3～3.9	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-056	15.0	3.5	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-071	(15.0)	3.5	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-066	15.1	3.0～3.3	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-062	15.2	2.9～3.1	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-055	15.2	2.9～3.85	—	—	○		
	丸底坏a		R-030	15.2	3.2					
	丸底坏a		R-047	15.2	3.2	—				
	丸底坏a		R-031	15.2	3.6					
	丸底坏a	ヘラ	R-053	15.3	2.85～3.25	—	—	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-064	15.4	2.6～3.4	—	—	—		
	丸底坏a		R-032	(15.4)	2.75					
	丸底坏a		R-043	(15.4)	3.7	—				
	丸底坏a	ヘラ	R-070	15.5	3.3	—	—	○		
	丸底坏a		R-035	—	3.7					
黒色土器B類	小皿a	ヘラ	R-051	9.6	1.7～1.8	6.8	—	○		

S-805①

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	(9.6)	1.1	(8.1)	○	○		

S-805②

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	—	R-001	(16.2)	3.2	(12.2)	○	○		

S-805④

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a		R-001	9.5	1.3	7.6	○	○		

S-805⑥

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	ヘラ	R-001	15.6	3.4	10.7	—	○		

S-805⑦

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	(9.1)	1.3	7.1	○			

S-805⑧

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	9.4	1.5	7.5	○	○		

S-805⑨

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	—	R-001	(15.8)	3.3	(13.0)	○	—		

S-805⑩

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	—	R-001	15.6	3.35	—	—	—		

S-810e

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.4)	1.65	(7.8)	○	○		

S-815

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	—	R-002	15.2	3.0	10.9	—	○		

S-815①黒青色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-002	(9.8)	1.75	(6.8)	○	○		
	丸底坏a	ヘラ?	R-001	15.3	3.35	10.7	—	○		

S-815②黒青色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-004	(8.4)	1.3	(7.3)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	R-005	(8.4)	1.35	(7.4)	—	—		
	小皿a1	—	R-007	(8.6)	1.1	(6.3)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-006	(8.8)	1.1	(7.65)	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-002	8.9	1.4～1.45	7.0	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-003	9.5	1.15～1.25	7.9	—	—		
	小皿a1	ヘラ	R-001	9.7	1.4～1.5	7.0	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-009	15.3	3.1～3.35	—				
	丸底坏a	ヘラ	R-011	15.4	3.2～3.5	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-010	15.4	3.5～3.65	—	—	—		
	丸底坏		R-008	(14.2)	2.4+	—	—	—		

S-815④黒青色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-003	(14.4)	2.5	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-002	—	4.0+	—	—	—		
	椀c	—	R-001	—	1.7+	5.6	—	—		

S-820

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	—	R-001	9.2	1.6	1.6	—	—		
	丸底坏a	—	R-002	13.8	3.1	10.0	—	—		

S-840

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	—	R-001	—	2.6+	—	—	—		
	丸底坏a	—	R-002	—	3.5+	—	—	—		
	丸底坏a	ヘラ	R-003	—	3.4+	—	—	—		

S-850

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	ヘラ	R-001	15.6	4.1	11.1	—	—		

S-850枠内　明茶灰色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	(9.6)	1.4	(8.2)	○	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-002	(14.7)	3.1	(11.2)	○			

S-850枠内　緑灰色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	(14.6)	2.6	(10.8)	—	—		

S-850　緑灰色粘質土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-001	8.8	1.2	6.8	○	○		
	丸底坏a		R-002	(14.4)	3.15	(11.2)				
	丸底坏a		R-004	15.6	3.0	11.3				

S-850ｳﾗｺﾞﾒ　黒色炭土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	丸底坏a	ヘラ	R-001	15.7	3.5	13.4	○	○		

S-850明緑黄灰色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.0)	1.3	(7.4)	○	○		
	小皿a	ヘラ	R-001	9.0	1.4	7.1	○	○		
	丸底坏a	ヘラ	R-004	(15.4)	3.2			○		灯明
	丸底坏c		R-002	16.3	4.8	7.7				

S-850緑黄灰色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-002	8.6	1.2	7.2	○	○		
	小皿a	ヘラ	R-001	8.9	1.3	7.1	○	○		

S-860暗茶灰色土

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	—	R-001	(9.6)	1.3	(6.7)	—	—		
	丸底坏a	—	R-002	—	3.9+		—	—		
	丸底坏a	—	R-004	—	3.7+		—	—		

S-864

器別	器　種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-001	—	3.2+	—				

大宰府条坊跡第168次調査　供膳具計測表（11）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

S-870青灰色粘土　目玉

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	ヘラ	R-003	10.2	1.35	7.8	○	○		
	丸底坏a		R-001	(15.8)	3.35+	—				
黒色土器A類	椀		R-002	—	4.0+	(6.9)				

S-870暗青灰色粘質土

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器B類	椀		R-003	—	3.0+	—				

S-878

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a		R-004	—	1.25+	—				
	椀c		R-002	—	2.6+	—				
	皿c		R-001	—	1.75+	(13.2)				

S-880灰茶色土

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿	ヘラ	R-002	—	1.7+	(6.8)	—	—		

S-890茶褐色土

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器A類	椀	—	R-003	—	1.9+	—	—			
黒色土器B類	椀		R-005	—	1.55+	—				

S-894

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀a	—	R-004	(15.4)	6.5	(8.8)	—	—		
	皿a	ヘラ	R-003	(13.0)	1.65	(10.2)	—	×		

S-900茶褐色土

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	椀c	ヘラ?	R-001	—	2.55+	(7.3)	—	○		
黒色土器A類	椀c		R-002	—	2.75+	—				

S-905

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	ヘラ	R-001	(12.0)	3.85	7.0	—	○		

S-910緑灰色シルト

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	10.4	1.3	7.0	○	○		
	丸底坏	ヘラ	R-002	15.4	3.7	10.7	—	○		
黒色土器A類	椀		R-003	—	4.0+	—				

S-910掘方

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a	ヘラ	R-001	(9.5)	1.5	(7.7)	—	○		
	丸底坏	—	R-002	—	3.25+		—	—		

S-910暗茶灰色土

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a2	ヘラ	R-002	(10.4)	9.0	(7.0)	—	○		
	小皿a	ヘラ	R-003	9.9	1.3	7.5	—	○		

S-915

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿a	ヘラ	R-001	(14.2)	1.9	(10.4)	—	—		

S-920

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	—	R-002	(12.0)	3.4	(6.8)	○	—		
	坏c	—	R-004	—	2.75+	(7.2)	—	—		
	坏c×椀c	ヘラ?	R-003	—	2.6+	(8.6)	—	—		
黒色土器A類	椀c	—	R-001	—	2.3+	(7.8)	—	—		

S-961

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
黒色土器B類	椀c		R-001	—	2.0+	—				

暗灰色粘土上層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	M-025	(8.6)	0.8	(6.6)	—	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-019	8.6	0.9	6.6	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-031	8.6	1.0	7.2	○	○	1/2	
	小皿a1	—	M-018	8.6	1.2	6.8	○	—	2/3	
	小皿a1	ヘラ	M-027	(8.6)	1.4	(6.8)	○	○	1/3	
	小皿a1	—	M-006	8.6	1.6	6.6	—	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-015	8.8	1.0	6.6	—	—	1/3	
	小皿a1	—	M-022	(8.8)	1.2	(7.2)	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-032	8.8	1.3	7.0	○	○	1/2	
	小皿a1	イト?	M-033	(8.8)	1.3	(7.0)	—	○	1/3	
	小皿a1	—	M-034	(8.8)	1.3	(7.1)	—	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-003	9.0	0.8	6.7	○	○	2/3	
	小皿a1	イト?	M-002	9.0	0.8	6.9	○	○	2/3	
	小皿a1	ヘラ	M-012	9.0	0.8	7.4	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-023	(9.0)	0.9	(7.3)	○	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-009	9.0	1.0	7.0	○	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-021	9.0	1.0	7.0	○	○	1/3	
	小皿a1	—	M-001	9.0	1.0	7.2	○	○	2/3	
	小皿a1	ヘラ	R-001	9.0	1.2〜1.6	7.9	○	○		
	小皿a1	ヘラ	R-007	9.0	1.3	7.5	○	○		
	小皿a1	ヘラ	M-014	9.0	1.6	7.2	○	○	1/3	
	小皿a1	—	M-017	9.2	0.8	7.4	○	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-020	9.2	0.8	7.6	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-007	9.2	0.8	7.9	○	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-029	(9.2)	0.9	(7.2)	—	○	1/3	
	小皿a1	イト?	M-010	9.2	1.1	6.6	○	—	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-011	9.2	1.1	7.1	○	○	2/3	
	小皿a1	ヘラ	M-013	9.2	1.1	7.6	○	○	1/2	
	小皿a1	ヘラ	M-028	(9.2)	1.4	8.0	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-024	(9.4)	1.1	(7.2)	○	○	1/3	
	小皿a1	—	M-008	9.4	1.3	7.8	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-030	(9.4)	1.4	(7.8)	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-005	9.4	1.4	7.1	○	○	1/3	
	小皿a1	ヘラ	R-008	(9.5)	0.8	(8.0)	○	—		
	小皿a1	ヘラ	M-004	9.8	1.2	7.4	○	×	1/3	
	小皿a1	ヘラ	M-026	(9.8)	1.3	(7.0)	○	○	1/3	
	小皿a1	—	M-016	12.0	1.0	9.6	—	—	1/3	

暗灰色粘土上層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿	イト?	M-035	7.2	0.8	5.8	—	○	1/3	京都系
	小皿	イト?	M-036	8.0	0.9	6.4	○	○	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-003	8.2	1.1	7.4	○	○	1/1	京都系
	小皿	ヘラ	R-009	8.4	1.1	7.7	○	○		京都系
	小皿	イト	M-042	8.6	1.1	5.6	○	—	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-002	8.8	1.1	7.7	○	○	1/1	京都系
	小皿	ヘラ	M-037	9.0	1.0	6.0	—	○	1/3	京都系
	小皿	—	M-041	9.0	1.0	7.6	—	—	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-004	(9.0)	1.0	(8.2)	○	○	1/3	京都系
	小皿	—	M-040	10.0	1.0	7.6	—	○	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-038	10.0	1.2	8.8	○	○	1/3	京都系
	小皿	—	M-001	(10.0)	1.3	(8.6)	○	○	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-043	10.2	1.0	9.4	—	—	1/3	京都系
	小皿	ヘラ	M-039	10.2	1.3	7.8	○	—	1/3	京都系
	坏a	ヘラ	M-005	(14.0)	2.8	(9.8)	○	○	1/3	
	坏a	ヘラ	M-003	(15.0)	2.5		○	○	1/3	
	坏a	ヘラ	M-004	(15.2)	2.5	(12.0)	○	○	1/3	
	坏a	ヘラ	M-006	(15.4)	2.3	11.4	○	○	1/3	
	坏a	ヘラ	M-001	15.8	3.1	11.0	—	○	1/3	
	坏a	—	M-002	16.0	2.3	12.0	○	—	1/3	
	坏	ヘラ	R-002	15.0	2.4〜3.0	11.2	○	○		
	丸底坏a	ヘラ	M-003	14.4	2.3		○	○	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	M-002	14.8	2.5		○	○	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	M-004	15.0	1.9		—	—	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	M-005	15.0	2.4		—	○	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-007	15.0	2.4		—	○	1/2	
	丸底坏a	ヘラ	M-014	15.0	3.0		○	○	1/2	
	丸底坏a	—	M-011	(15.2)	2.7+		—	—	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-001	15.2	3.1		—	○	1/1	
	丸底坏a	—	M-016	15.6	2.4		○	—	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-009	(15.8)	3.0		○	○	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-008	16.0	2.0		○	○	1/3	
	丸底坏a	—	M-006	16.0	2.3		—	—	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-012	(16.0)	3.0		—	○	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-013	(16.2)	2.7		○	○	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	R-003	16.6	3.2〜4.0	11.2	—	○		
	丸底坏a	—	M-010	(16.8)	2.9+		—	—	1/3	
	丸底坏a	ヘラ	M-015	17.8	3.1		○	○	1/2	
	椀a1	—	R-011	(12.6)	3.6	8.4	—	—		灯明
	椀c	ヘラ	R-006	(14.4)	5.5	6.9	—	—		
	椀c	—	R-005	(14.8)	5.5	8.4	—	—		
	椀c	—	R-004	15.0	5.3	6.9	—	—		

暗灰色粘土層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏		R-009	—	3.05+	—				畿内系
	坏a		R-007	—	2.7	—	—	—		灯明
	坏a		R-008	—		1.15+	—	—		畿内系
	坏c		R-005	—	2.1+	(7.4)	—	×		筑後型
	坏?		R-010	—	2.1+	—				
	蓋3		R-019		1.8+					
	蓋3		R-020		2.5+					

茶色土層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002	(9.2)	1.5	(7.0)				
	小皿a1	ヘラ	R-003	(9.8)	1.6	(8.3)				
	小皿a1	ヘラ	R-001	(10.2)	1.3	(8.4)	—	—		
	丸底坏a		R-004	(15.2)	3.2					
	丸底坏a		R-008	(15.4)	3.6	—				

黒茶色土層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-002	(9.6)	1.3	(7.0)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-001	(9.8)	1.4	(7.4)	○	○		
	坏c	ヘラ	R-010	(18.4)	6.9	8.6				
	皿a	ヘラ	R-005	(13.4)	1.8	(10.4)	—	○		
	皿	—	R-006	—	1.3+	—	—	—		搬入か?

灰色土層

器別	器種		遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	小皿a1	—	R-040	(9.1)	1.4	(6.3)	○	○		
	小皿a1	—	R-039	(9.8)	1.1	(7.0)	—	—		
	小皿a1	—	R-042	(10.0)	1.0	(6.8)	—	○		
	小皿a1	ヘラ	R-041	10.4	1.5	7.6	—	○		
	小皿a	—	R-047		0.9+		—	—		
	小皿a	—	R-048		0.9+		—	—		
	坏a	ヘラ	R-038	(10.4)	1.8	(7.3)	—	—		
	坏a	—	R-034	(10.6)	2.8	(8.0)	—	—		畿内系
	坏a	—	R-031	(13.6)	3.6	(9.2)	—	—		
	坏a	ヘラ	R-058		4.0					
	坏		R-021	—	1.6+	—				畿内系
	坏	—	R-035	—	2.3+	—	—	—		畿内系
	坏	—	R-036	—	5.0+	—	—	—		畿内系
	坏	—	R-037	—	4.4+	—	—	—		畿内系
	坏		R-045		2.8+					畿内系
	坏		R-069	—	2.3+	—				畿内系
	丸底坏	—	R-030	(20.0)	2.9+	—	—	—		
	丸底坏		R-043		3.6+					
	皿a	—	R-049		2.3+		—	—		
	皿b	—	R-029	(12.8)	4.9	(12.0)	—	—		
	皿b		R-057	(14.1)	4.2					
	皿b	—	R-027	(19.0)	2.4	(12.6)	○	—		
	小椀c	—	R-001		1.1+	(4.6)	—	—		
	椀c2	ヘラ	R-028	—	2.7+	(9.0)	—	—		
	椀		R-004		5.3+					
	椀		R-020	—	2.55+	—				
	椀		R-050		3.1+					
	高坏	—	R-032	—	6.4+	(11.0)	—	—		

大宰府条坊跡第168次調査　　供膳具計測表（12）

A:内底ナデ　B：板状圧痕　　なお計測値の（　）は復元値

茶灰色土層

器別	器　種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏a	R-010	(14.2)	2.75	(7.8)				
	坏a	R-009	(15.2)	3.4	(9.8)				
	坏a	R-014	—	3.4+	(8.0)				
	坏a	R-028	(12.2)	4.1	(7.3)				
	坏c	R-006	(16.2)	5.7	9.15				
	坏	R-016	(18.0)	7.8+	—				
	皿a　ヘラ	R-008	(15.4)	1.8	(10.7)	—	—		
	脚付皿	R-033	—	2.85+	—				
	鉢	R-015	(20.4)	8.6+	—				
	鉢	R-020	(23.2)	14.0	—				
	鉢?	R-029	—	4.0+	—				
	高坏	R-018	—	6.3+	—				

茶褐色粘土層

器別	器　種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏c	R-005	—	1.0+	—				
	坏	R-007	—	2.5+	—				畿内系
	椀	R-001	—	3.5+	—				

茶灰色粘土層

器別	器　種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	皿b	R-003	—	2.0+	—				

表土

器別	器　種	遺物番号	口径	器高	底径	A	B	残存率	備考
土師器	坏	R-005	—	2.25+	—				
	皿a　ヘラ	R-003	(18.2)	2.25	(15.6)	—	—		
	蓋c3　ヘラ	R-002	19.7	2.65	—	—	—		

写　真　図　版

・ここでは、調査区空中写真、一部の遺構、分析試料、墨書木札を掲載した。
・ほとんどの写真は付属のCD-ROMに掲載しているので参照いただきたい。

大宰府条坊跡第168次調査　第1遺構面西半全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第1遺構面中央付近全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第1遺構面東半全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面西端全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面西側全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面中央部全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面東半全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面東端全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第3遺構面全景（上が北）

大宰府条坊跡第168次調査　第4遺構面全景（西から撮影）

大宰府条坊跡第168次調査　第4遺構面全景（東から撮影）

51～52ライン調査区北壁土層観察（南から撮影）

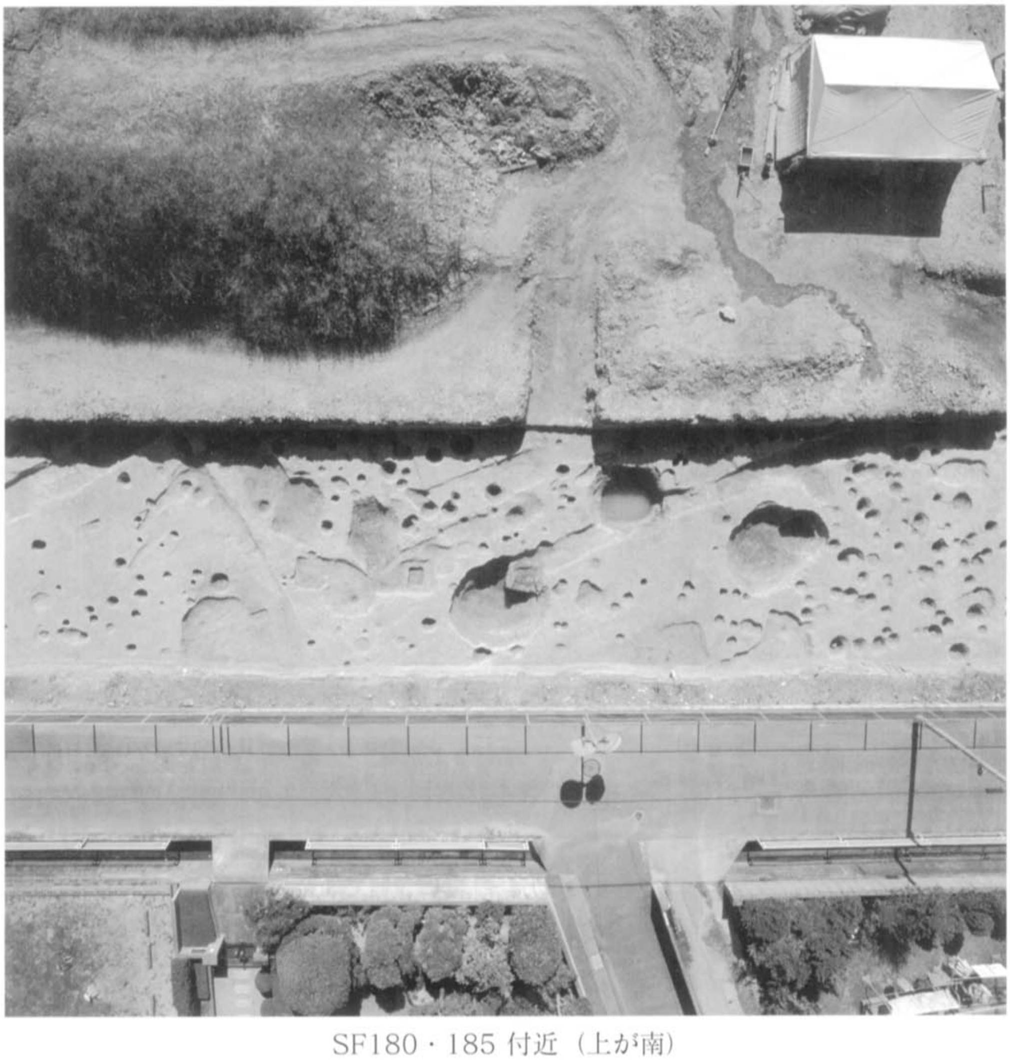
調査区中央付近南壁土層観察（東側。北から撮影）

調査区中央付近南壁土層観察（西側。北から撮影）

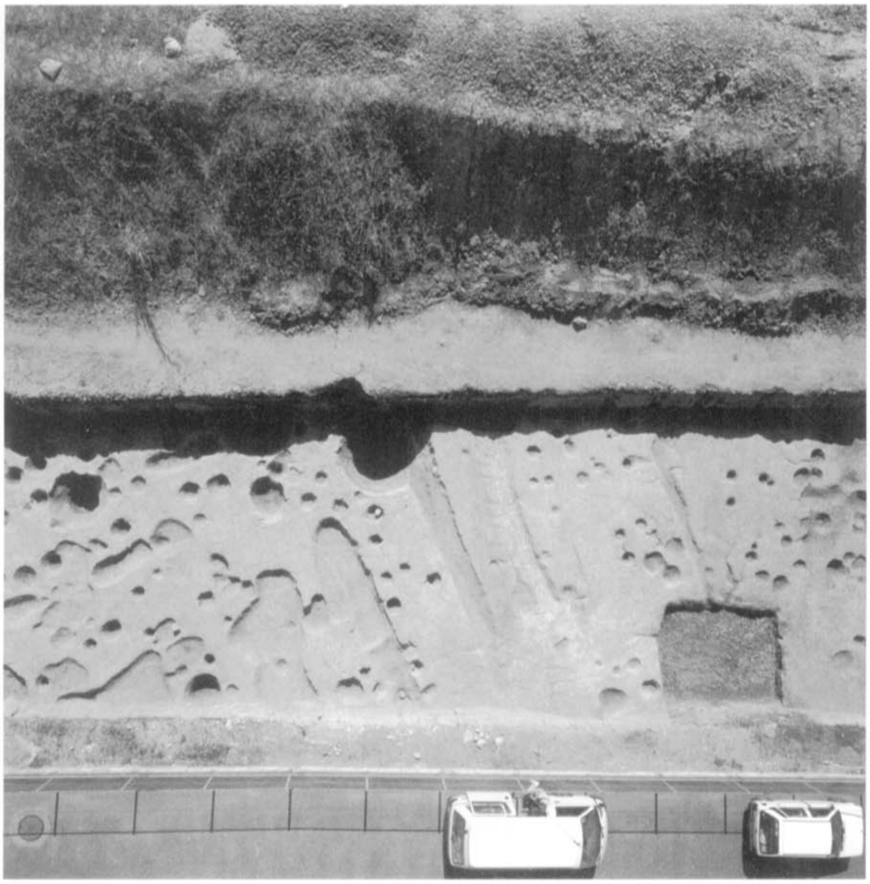
SB080・SA120 状況（人物入り。南東から撮影）

SB100 状況（人物入り。南東から撮影）

SD001（SF300 東側溝）完掘状況（南から撮影）



SF180・185 付近（上が南）



SF190付近（上が南）

SF200付近（上が北）

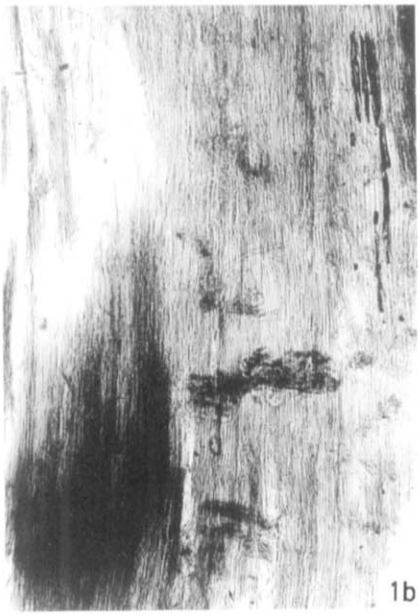
SK475樹木出土状況（北から撮影）

SK475土層観察（南から撮影）

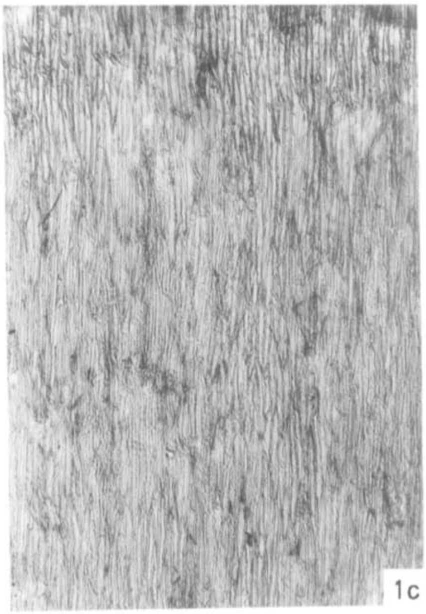
Pla.12

a -1 .樹種同定

1a



1b



1c

1.針葉樹(S-470 曲物?)
a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

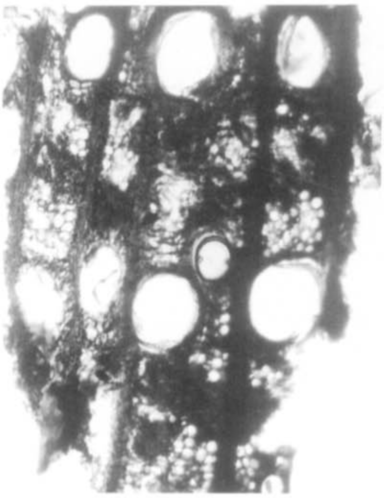
a -3 .樹種同定
資料A　SE050出土　漆皿

木口面　30倍

柾目面　100倍

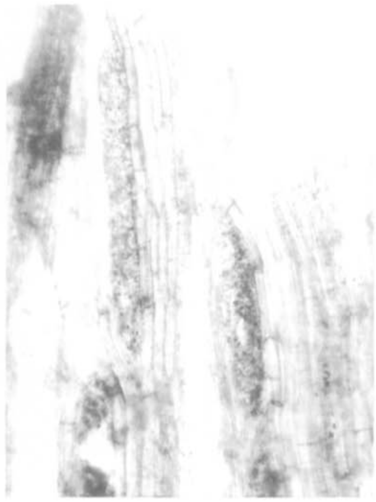
板目面　50倍

資料B　SE460出土　漆皿



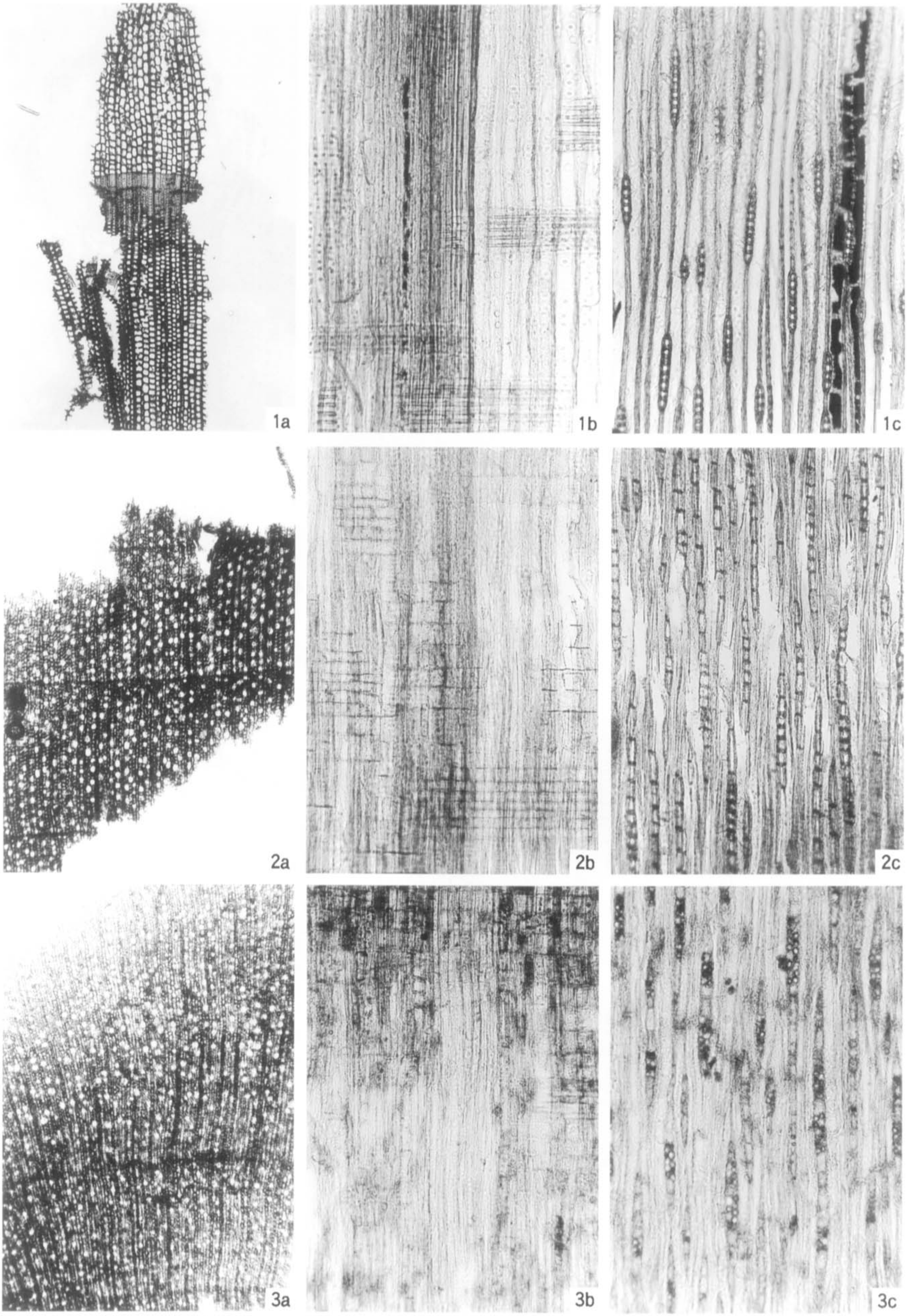
木口面　30倍

柾目面　100倍



板目面　50倍

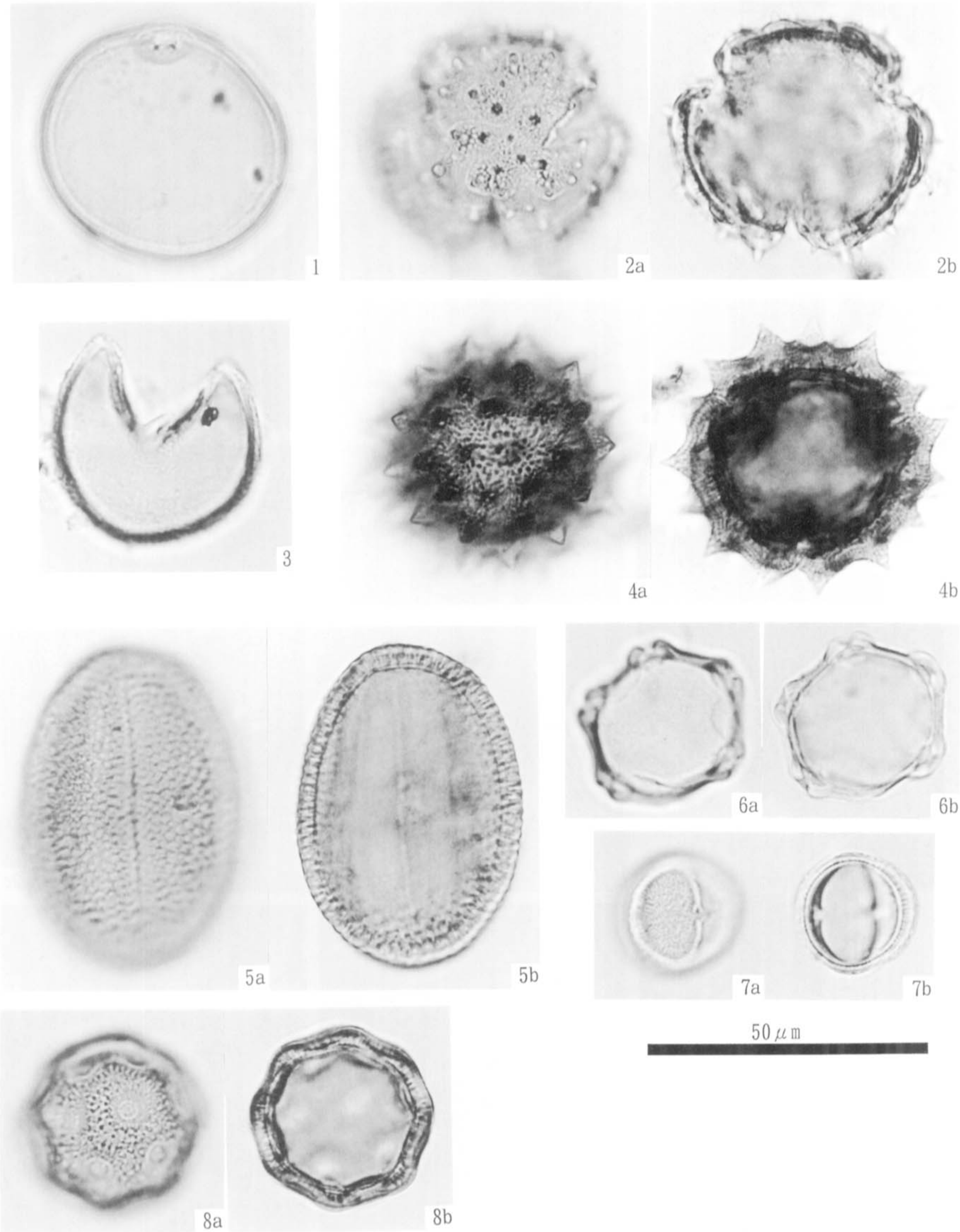
a -2.樹種同定



1. スギ（BG38 S-490 立板東）
2. サカキ（BG38 S-490 横下③残-1）
3. ユズリハ属（BG38 S-490 横上土）
a：木口，b：柾目，c：板目

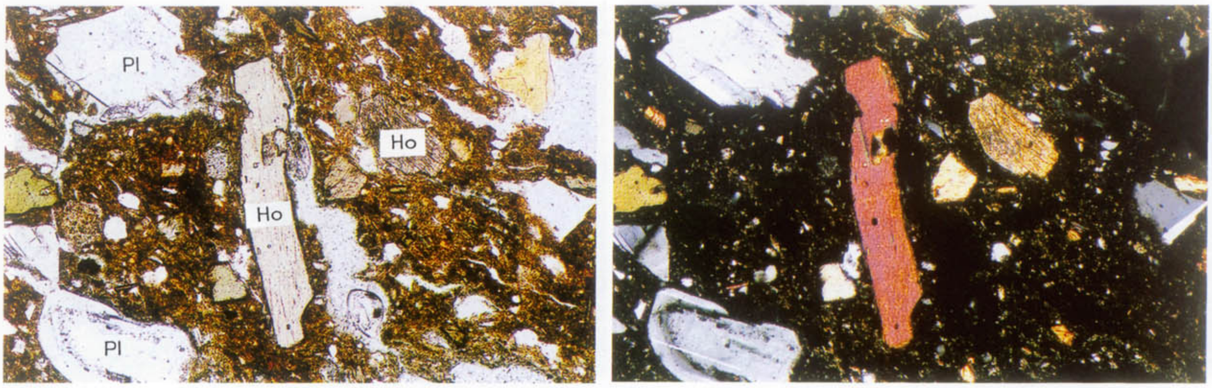
200 μ m：a
200 μ m：b, c

c -1 .花粉分析

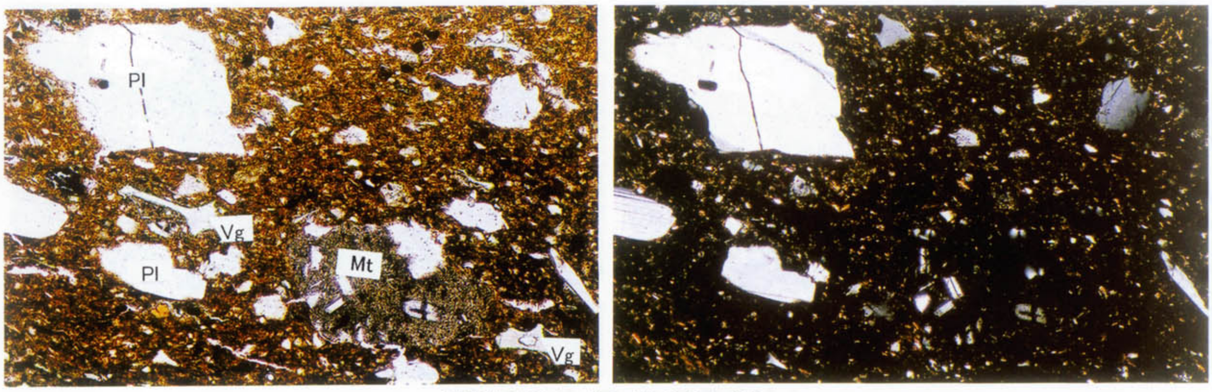


1.イネ科（S - 470 茶色フショク土2）
2.オミナエシ属（S - 470 茶色フショク土2）
3.スギ属（S - 470 茶色フショク土2）
4.キク亜科（S - 470 茶色フショク土2）
5.ソバ属（S - 470 茶色フショク土2）
6.ハンノキ属（S - 470 茶色フショク土2）
7.ヨモギ属（S - 470 茶色フショク土2）
8.ナデシコ科（S - 470 茶色フショク土2）

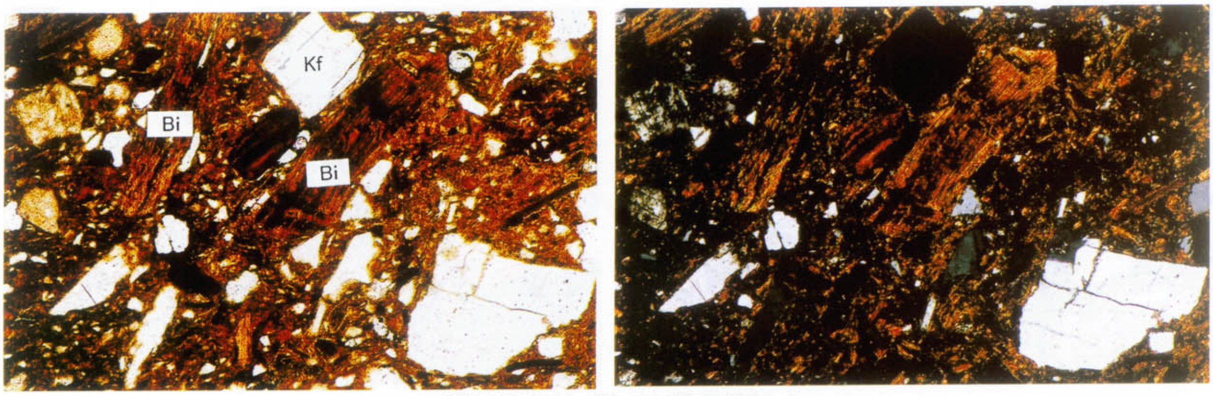
e .土器胎土分析　胎土薄片（1）



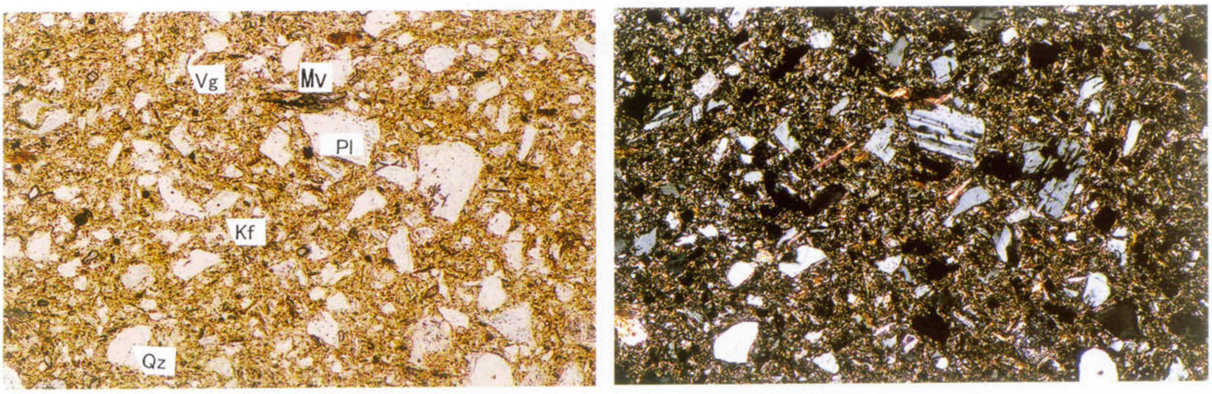
1. 試料番号 1　甕　胎土Ⅰa 類



2. 試料番号 8　甕　胎土Ⅰb 類



3. 試料番号 9　甕　胎土Ⅱa 類

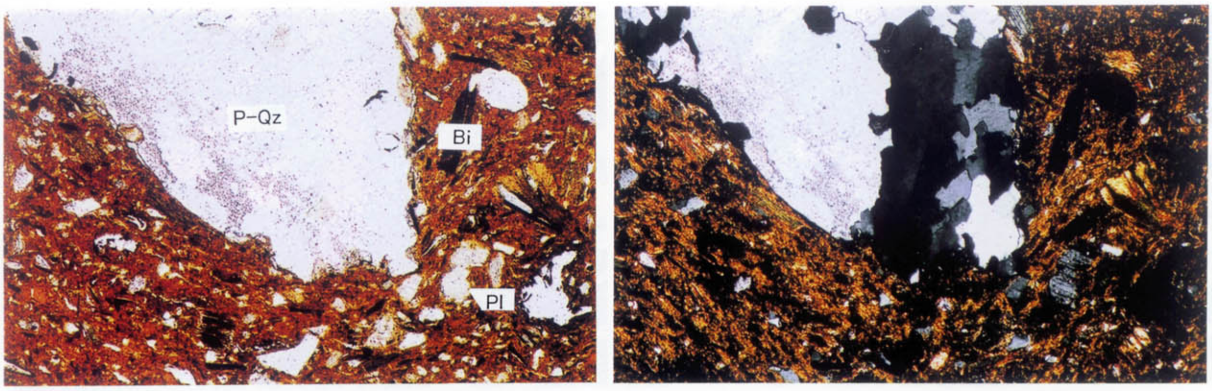


4. 試料番号 11　丸坏 a　胎土Ⅱb 類

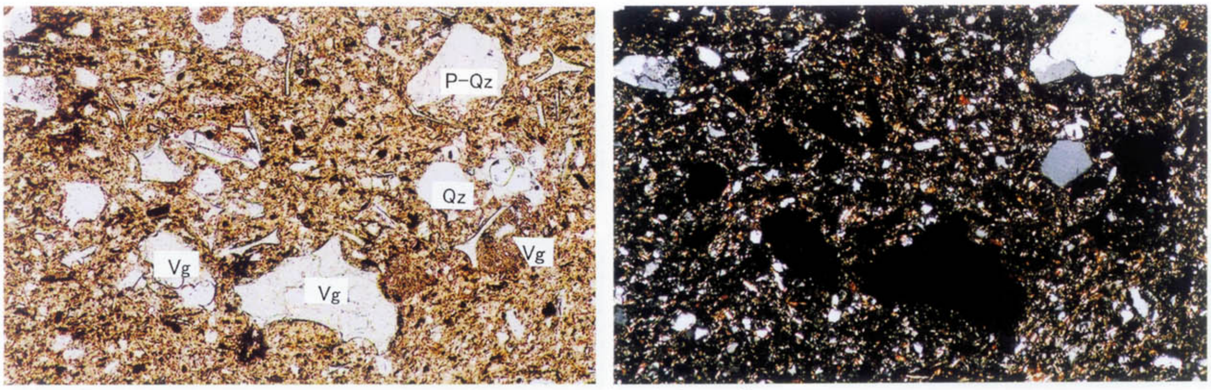
Qz: 石英. Kf: カリ長石. Pl: 斜長石. Ho: 角閃石. Bi: 黒雲母. Mv: 白雲母.
Wt: 溶結凝灰岩. Vg: 火山ガラス.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

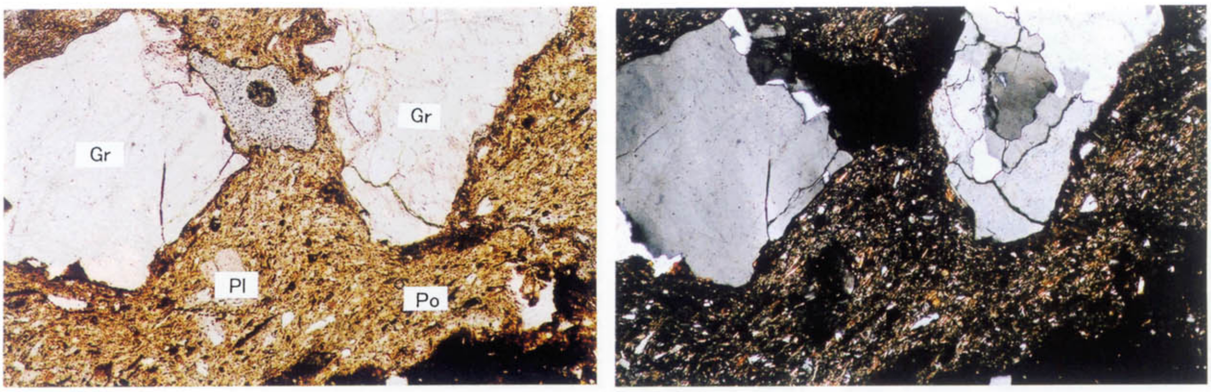
e .土器胎土分析　胎土薄片（2）



5. 試料番号 13　甕　胎土Ⅱa 類



6. 試料番号 18　甕　胎土Ⅱf 類



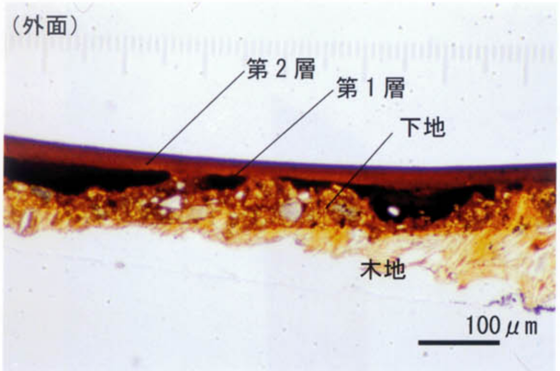
7. 試料番号 20　甕　胎土Ⅱh 類

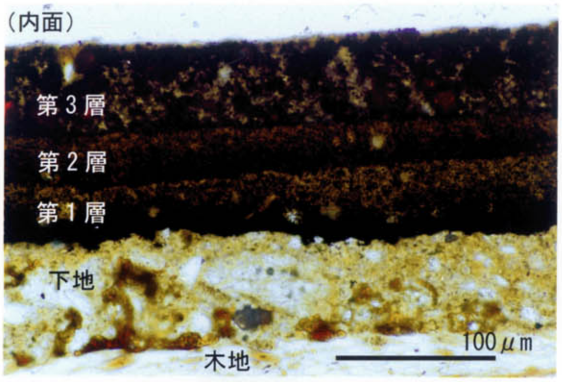
Qz: 石英. Pl: 斜長石. Bi: 黒雲母. P-Qz: 多結晶石英. Gr: 花崗岩.
Vg: 火山ガラス. Po: 植物珪酸体.
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

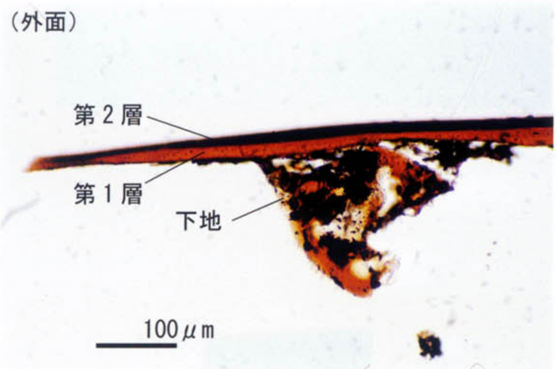
f .漆器塗膜分析

資料A　SE050灰黄色粘土出土　漆皿





資料B　SE460出土　漆皿



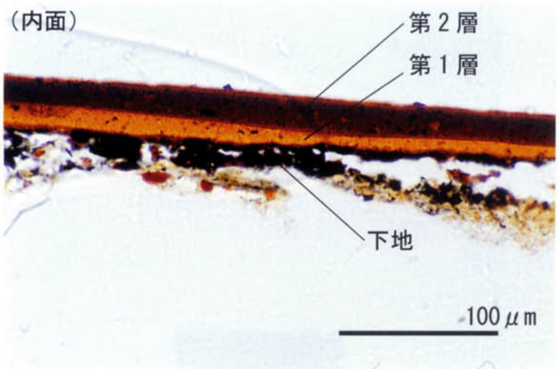
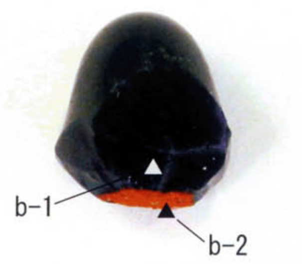


写真1　SE050、SE460 出土漆皿　漆塗膜顕微鏡写真

g .材質分析

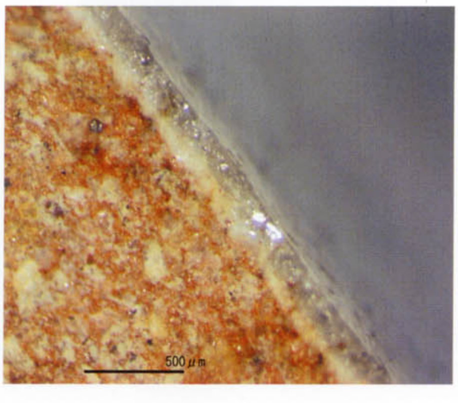
a .SX039（SB010の一部）出土 紫色物質



b .SE050灰色砂出土　ガラス質遺物

c .茶灰色粘土層出土　施釉陶器

写真2 上：蛍光X 線分析資料と分析点
（▲で示している）
写真3 右：茶灰色粘土層出土施釉陶器の釉の状態
（実体顕微鏡）



SK475 茶灰色砂質土出土 墨書木札（表裏）

SK475 フショク土出土 将棋駒名を記した墨書木札（表裏）

報告書抄録

ふりがな	だざいふじょうぼうあと
書名	大宰府条坊跡　22
副書名	第168次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	69集
編著者	井上信正（編集）　中島恒次郎　高橋学　下川可容子　パリノサーヴェイ（株）　元興寺文化財研究所
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺１丁目１番１号
発行年月日	2004（平成16）年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	所在地	コード		座標（国土座標第II系）		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
だざいふじょうぼうあと 大宰府条坊跡　第168次	左郭12条1・2坊	太宰府市 朱雀3丁目	402214	210044-156	55850.00	-44716.00	19950616	19960104	1,603	道路拡幅

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
大宰府条坊跡　第168次	大宰府条坊	縄文～弥生　飛鳥 奈良　平安	柵列9　掘立柱建物21 溝64　井戸17 土坑54　道路7	須恵器　土師器　国内外の陶磁器　木製品 金属製品　7c末の施釉陶器　新羅土器 暗文土師器　漆器　将棋駒名墨書木札	推定朱雀大路東側溝　左郭一坊路 坊間境界遺構　7c末の整地 8cの整地　平安時代の整地

太宰府市の文化財　第69集

大宰府条坊跡22
第168次調査

平成16年（2004）年3月

編集　太宰府市教育委員会
発行　〒818-0198
　　　福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1
印刷　(資)四ヶ所印刷
　　　〒838-0058
　　　福岡県甘木市大字馬田336

印刷仕様；
　　　画像スクリーン線数　250線
　　　アルミPS版使用

付図1　大宰府条坊跡第168次調査　第1遺構面全体図（1/200）

付図2　大宰府条坊跡第168次調査　第1面遺構配置図（1/200）

付図3　大宰府条坊跡第168次調査　第2遺構面全体図（1/200）

付図4　大宰府条坊跡第168次調査　第2面遺構配置図（1/200）